熊本県文化財調査報告　第１１１集

天道ケ尾遺跡（II）

九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設に伴う埋蔵文化財調査

1990

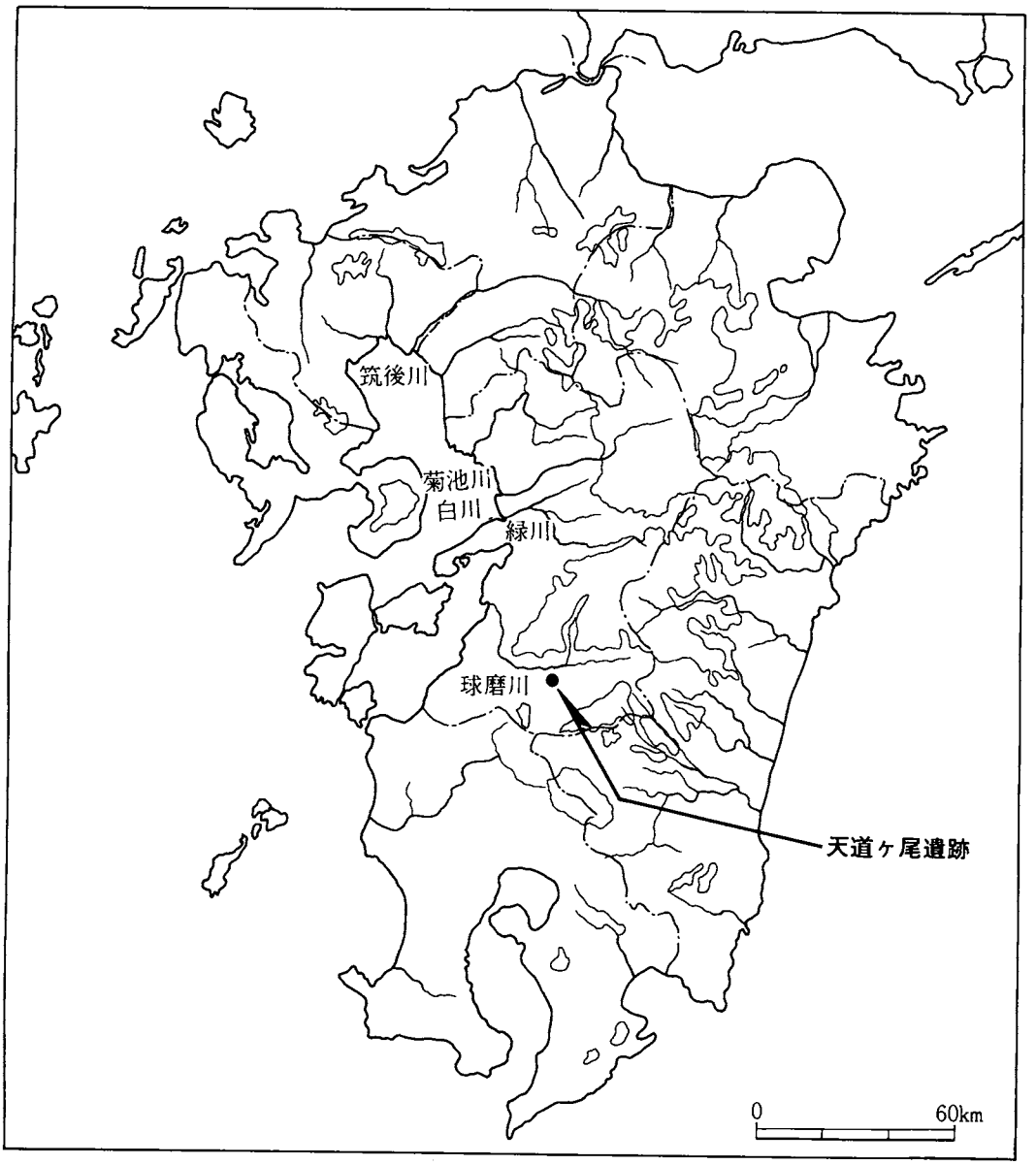
熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第１１１集

天道ケ尾遺跡（II）

てんどうがお

九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設に伴う埋蔵文化財調査



１９９０

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局の依頼をうけて九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を進めております。

ここに報告する人吉市七地町天道ケ尾遺跡の発掘調査は、昭和60年度から昭和61年度に実施したものです。この調査は、先土器時代から平安・鎌倉時代および江戸時代の遺構・遺物を検出し、人吉・球磨地方における遺跡の性格を知るうえで、貴重な資料を得ることができました。平安時代以降につきましては天道ケ尾遺跡（Ⅰ）で報告書を作成し、今回は古墳時代以前をまとめました。この報告書が広く活用され、文化財保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたりましては、専門調査委員の先生方の多大な御指導、御助言を賜り、また、日本道路公団人吉工事事務所をはじめ、人吉市教育委員会の御協力を受けました。ここに心から厚く御礼申し上げます。

平成２年３月31日

熊本県教育長　松　村　敏　人

例　言

1．本書は、九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書であり、この報告書は、昭和60年度～昭和61年度に実施した天道ケ尾遺跡の第２分冊である。

2．日本道路公団福岡建設局から委託をうけて、熊本県教育庁文化課が発掘調査を行ったもので、当初、原城跡としていたが、字名から天道ケ尾遺跡（人吉市七地町大字天道ケ尾）と改めた。

3．発掘現場での遺構の実測・写真撮影、遺物の取り上げは、各調査員で行った（調査の組織については第１分冊に記載）。遺物の実測は、主として西住欣一郎・本山千絵があたり、一部、山下志保・村上智恵子が行った。遺構・遺物実測図のトレース、遺構・遺物分布図の作成・トレースは、西住・本山・緒方真弓・瀬丸延子・加来恭子・岩根慶子・上甲有希子・丹生英理が行い、吉内素子の協力を得た。発掘現場で撮影した写真の焼き付けは白石　厳が、遺物の写真撮影・焼き付けは西住が行った。

本書の執筆は、下記の者が行った。

本山　千絵（第II章第４節２(1)・第III章第４節２(1)）

西住欣一郎・本山　千絵（第III章第４節２(2)）

西住欣一郎（上記以外の部分）

5．本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、西住が担当した。

凡　例

1．本書に使用した方位とグリッドは、国土地理方眼を用いた。国土地理方眼の基準点は、日本道路公団人吉工事事務所より提供を受けた。

2．挿図の遺物の縮尺は、土器は基本的に1/3であり、石器は大きさによって1/1、2/3、1/2、1/3、1/4を使い分けた。

3．図版に掲載した遺物の縮尺は、土器約1/3、石器約1/2、鉄鏃約1/3である。

本 文 目 次

要 旨

第Ⅰ章 調査の概要

第１節 遺跡の位置について …… 1

第２節 調査の方法 …… 1

第３節 層序について …… 1

第Ⅱ章 調査の成果

第１節 古墳時代の調査

１．遺構について …… 2

２．遺物について …… 11

第２節 弥生時代の調査

１．遺物について …… 15

第３節 縄文時代後期・晩期の調査

１．遺構について …… 17

２．遺物について …… 24

第４節 縄文時代早期の調査

１．遺構について …… 72

２．遺物について ……154

第５節 先土器時代の調査

１．遺構・遺物分布について……257

２．石器について ……261

第Ⅲ章 まとめと考察

第１節 古墳時代の調査について ……342

第２節 弥生時代の調査について ……344

第３節 縄文時代後期・晩期の調査について ……344

第４節 縄文時代早期の調査について ……345

第５節 先土器時代の調査について ……355

付 論 ……359

挿図目次

第1図　基本土層図……1
第2図　遺構分布図……2
第3図　1号地下式横穴墓実測図……3
第4図　1号地下式横穴墓復原模式図……4
第5図　1号地下式横穴墓出土鉄鏃実測図 6
第6図　2号地下式横穴墓実測図……8
第7図　1号不明遺構実測図……9
第8図　1号不明遺構出土鉄器実測図……10
第9図　出土土師器分布図……12
第10図　土師器実測図……13
第11図　土師器実測図……14
第12図　出土土器分布図……15
第13図　土器実測図……16
第14図　磨製石鏃実測図……16
第15図　土坑実測図……18
第16図　縄文時代後・晩期遺構分布図……19
第17図　1号土坑群実測図……22
第18図　2号土坑群実測図……23
第19図　土器実測図……25
第20図　石器実測図……26
第21図　III層・IVa層出土土器分布図……27
第22図　土器実測図……29
第23図　土器実測図……31
第24図　土器実測図……32
第25図　土器実測図……33
第26図　土器実測図……34
第27図　土器実測図……36
第28図　土器実測図……37
第29図　土器実測図……38
第30図　土器実測図……39
第31図　土器実測図……40
第32図　土器実測図……41
第33図　土製品実測図……42
第34図　石器実測図……43
第35図　石器実測図……44
第36図　石器実測図……46
第37図　III層・IVa層出土石器分布図……47
第38図　石器実測図……49
第39図　石器実測図……50
第40図　石器実測図……52
第41図　石器実測図……53
第42図　石器実測図……54
第43図　III層・IVa層出土石器分布図……55
第44図　石器実測図……57
第45図　石器実測図……60
第46図　石器実測図……61
第47図　石器実測図……62
第48図　石器実測図……63
第49図　石器実測図……64
第50図　石器実測図……65
第51図　石器実測図……66
第52図　石器実測図……68
第53図　石器実測図……69
第54図　石器実測図……70
第55図　石器実測図……71
第56図　縄文時代早期遺構分布図……73
第57図　土坑実測図……75
第58図　土坑実測図……77
第59図　土坑実測図……79
第60図　土坑実測図……81
第61図　土坑実測図……82
第62図　土坑実測図……83

第63図　土坑実測図…… 85
第64図　土坑実測図…… 87
第65図　土坑実測図…… 88
第66図　土坑実測図…… 89
第67図　土坑実測図…… 91
第68図　土坑実測図…… 93
第69図　土坑実測図…… 94
第70図　土坑実測図…… 95
第71図　土坑実測図…… 96
第72図　土坑実測図…… 97
第73図　土坑実測図…… 99
第74図　土坑実測図…… 100
第75図　土坑実測図…… 101
第76図　小ピットをもつ1号土坑実測図‥ 102
第77図　小ピットをもつ2号土坑実測図‥ 103
第78図　1号集石断面模式図…… 104
第79図　集石実測図…… 106
第80図　集石実測図…… 107
第81図　4号・5号集石実測図…… 108
第82図　集石実測図…… 109
第83図　11号集石実測図…… 110
第84図　22号集石実測図…… 111
第85図　7号集石実測図…… 112
第86図　10号集石実測図…… 113
第87図　12号集石実測図…… 114
第88図　13号集石実測図…… 115
第89図　16号集石実測図…… 116
第90図　集石実測図…… 118
第91図　21号集石実測図…… 119
第92図　17号集石実測図…… 120
第93図　17号集石実測図…… 120
第94図　14号集石実測図…… 121
第95図　14号集石実測図…… 122
第96図　凹部断面模式図……123
第97図　第1凹部平面図……124
第98図　第2凹部平面図……125
第99図　第3凹部平面図……126
第100図　土坑出土土器実測図 ……127
第101図　1号集石出土土器実測図 ……128
第102図　集石出土土器実測図 ……130
第103図　11号集石出土土器実測図 ……132
第104図　11号集石出土土器実測図 ……133
第105図　石器実測図 ……134
第106図　石器実測図 ……135
第107図　石器実測図 ……136
第108図　石器実測図 ……137
第109図　第1凹部出土土器実測図 ……139
第110図　第2凹部出土土器実測図 ……141
第111図　第2凹部出土土器実測図 ……142
第112図　第2凹部出土土器実測図 ……143
第113図　土製品実測図 ……144
第114図　第3凹部出土土器実測図 ……146
第115図　第1凹部出土石器実測図 ……147
第116図　第2凹部出土石器実測図 ……148
第117図　石器実測図 ……148
第118図　石器実測図 ……149
第119図　石器実測図 ……150
第120図　石器実測図 ……151
第121図　石器実測図 ……152
第122図　V層・VI層出土土器分布図 ……155
第123図　土器実測図 ……157
第124図　土器実測図 ……158
第125図　土器実測図 ……159
第126図　V層・VI層出土土器分布図 ……161
第127図　V層・VI層出土土器分布図 ……163
第128図　土器実測図 ……165

第129図　土器実測図 ……166
第130図　土器実測図 ……167
第131図　土器実測図 ……168
第132図　土器実測図 ……169
第133図　土器実測図 ……171
第134図　土器実測図 ……172
第135図　土器実測図 ……173
第136図　土器実測図 ……175
第137図　土器実測図 ……176
第138図　土器実測図 ……177
第139図　土器実測図 ……178
第140図　土器実測図 ……179
第141図　土器実測図 ……180
第142図　土器実測図 ……181
第143図　土器実測図 ……182
第144図　土器実測図 ……183
第145図　土器実測図 ……185
第146図　土器実測図 ……187
第147図　土器実測図 ……188
第148図　Ⅴ層・Ⅵ層出土土器分布図 ……189
第149図　土器実測図 ……191
第150図　土器実測図 ……193
第151図　Ⅴ層・Ⅵ層出土土器分布図 ……195
第152図　土器実測図 ……197
第153図　土器実測図 ……198
第154図　土器実測図 ……199
第155図　土器実測図 ……201
第156図　土器実測図 ……202
第157図　土器実測図 ……203
第158図　土器実測図 ……204
第159図　土器実測図 ……205
第160図　土器実測図 ……207
第161図　土器実測図 ……208
第162図　土器実測図 ……209
第163図　土器実測図 ……210
第164図　土器実測図 ……211
第165図　土器実測図 ……213
第166図　土器実測図 ……214
第167図　Ⅴ層・Ⅵ層出土土器分布図 ……215
第168図　土器実測図 ……217
第169図　土器実測図 ……218
第170図　土器実測図 ……219
第171図　石器実測図 ……221
第172図　石器実測図 ……222
第173図　Ⅴ層・Ⅵ層出土石器分布図 ……223
第174図　石器実測図 ……225
第175図　石器実測図 ……226
第176図　石器実測図 ……227
第177図　石器実測図 ……228
第178図　石器実測図 ……229
第179図　石器実測図 ……231
第180図　石器実測図 ……233
第181図　石器実測図 ……234
第182図　石器実測図 ……235
第183図　石器実測図 ……236
第184図　Ⅴ層・Ⅵ層出土石器分布図 ……237
第185図　石器実測図 ……239
第186図　石器実測図 ……240
第187図　石器実測図 ……241
第188図　石器実測図 ……242
第189図　石器実測図 ……243
第190図　石器実測図 ……244
第191図　石器実測図 ……245
第192図　石器実測図 ……246
第193図　石器実測図 ……247
第194図　石器実測図 ……248

第195図　石器実測図 ……249
第196図　石器実測図 ……250
第197図　石器実測図 ……251
第198図　石器実測図 ……252
第199図　石器実測図 ……253
第200図　Ⅷ層出土遺物分布図 ……255
第201図　第１・第２・第３凹部断面図 …258
第202図　第１・第２・第３凹部
　　出土遺物分布図 ……259
第203図　１号礫群実測図 ……261
第204図　２号礫群実測図 ……262
第205図　石器分布図 ……263
第206図　石器実測図（第１凹部） ……266
第207図　石器実測図（第１凹部） ……267
第208図　石器実測図（第１凹部） ……268
第209図　石器実測図（接合資料） ……269
第210図　石器実測図（接合資料） ……270
第211図　石器実測図（第２凹部） ……271
第212図　石器実測図（第３凹部） ……272
第213図　石器実測図（第３凹部） ……273
第214図　石器実測図（第３凹部） ……274
第215図　石器実測図（接合資料） ……275
第216図　石器実測図 ……276
　　（第１凹部と第２凹部の中間
第217図　石器実測図 ……277
　　（第１凹部と第２凹部の中間
第218図　石器実測図（第４ブロック） …278
第219図　石器実測図（第４ブロック） …279
第220図　石器実測図 ……280
第221図　石器実測図 ……281
第222図　石器実測図 ……282
第223図　石器実測図 ……283
第224図　石器実測図 ……284
第225図　南九州の墓制分布図 ……343
第226図　Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅶ類土器分布図 …352

巻末付図

付図１　１号集石実測図

表目次

遺物観察表……285
第１表　石鏃欠損状況…… 45
第２表　石斧構成表…… 58
第３表　石斧欠損状況…… 58
第４表　石斧類型別欠損状況…… 59
第５表　凹部石器組成表……153
第６表　石鏃欠損状況……222
第７表　凹部・ブロック別石器組成表……265
第８表　縄文時代後・晩期の石器組成表…345
第９表　集石一覧表……347
第10表　Ⅳ類土器対比表……350
第11表　遺構出土土器一覧表……353
第12表　縄文時代早期の石器組成表……354

図版目次

図版１　１号地下式横穴墓、２号地下式横穴墓

図版２　Ｏ－14・15グリッドⅣａ層遺物出土状況、小ピットをもつ１号土坑、小ピットをもつ２号土坑、１号集石・土壙、６号集石（Ⅰ類－Ａ）、20号集石（Ⅰ類－Ａ）

図版３　11号集石（Ⅰ類－Ｂ）、15号集石（Ⅰ類－Ｂ）、12号集石・上部（II類－Ｃ）、12号集石掘り込み、16号集石・上部（II類－Ｃ）、21号集石・上部（II類－Ｄ）、２号集石・上部（II類－Ｄ）、14号集石（II類－Ｅ）

図版４　14号集石掘り込み内配石状況、17号集石・上部（II類－Ｅ）、第１・第２凹部Ⅷ層遺物出土状況、第１・第３凹部Ⅷ層遺物出土状況、１号礫群

図版５　Ｑ－11グリッドⅧ層遺物出土状況、Ｒ－12グリッドⅧ層遺物出土状況、１号地下式横穴墓出土鉄鏃

図版６　Ⅰ－１類土器、II－１類土器、III－１類土器

図版７　Ⅳ－１－ａ類土器、Ⅳ－１－ｂ類土器、Ⅳ－１－ｈ類土器

図版８　Ⅳ－１－ｃ類土器、Ⅳ－１－ｄ類土器、Ⅳ－１－ｇ類土器

図版９　Ⅳ－１－ｅ類土器、Ⅳ－１－ｆ類土器、Ⅳ－１－ｊ類土器

図版10　Ⅳ－１－ｉ類土器、Ⅳ－１－ｋ類土器、Ⅳ－１－ｌ類土器、Ⅳ－１－ｍ類土器、Ⅳ－１－ｎ類土器

図版10　Ⅳ－１－ｏ類土器、Ⅳ－１－ｐ類土器、Ⅳ－２類土器、Ⅴ－１－ａ類土器

図版11　Ⅴ－１－ａ類土器、Ⅴ－１－ｃ類土器、Ⅴ－１－ｄ類土器

図版12　Ⅴ－１－ｂ類土器、Ⅴ－１－ｅ類土器、

図版13　Ⅴ－１－ｆ類土器、VI－１類土器、VII－１類土器

図版14　第１凹部Ⅷ層出土石器、第３凹部Ⅷ層出土石器

図版15　第２凹部Ⅷ層出土石器、第４ブロックⅧ層出土石器

要　旨

1．古墳時代の調査

5世紀後半～6世紀前半頃と考えられる地下式横穴墓2基と、ほぼ同時期と思われる不明遺構1基を検出した。地下式横穴墓の検出は、県内では初めてであり、従来の分布域を北西方向に拡大させ、その発見は意義深い。

2．縄文時代後期・晩期の調査

III層下部からIVａ層にかけて出土した土器は二つに分類することができる。Ⅰ類土器は後期後半の磨消縄文系の土器で、II類土器は晩期後半の黒色磨研系の土器である。II類土器はIII区・IV区の中の三箇所に分布のまとまりがあり、各箇所ごとに接合関係が見られる。調査区外も含めると、環状の遺物分布になる可能性がある。

3．縄文時代早期の調査

アカホヤ（Ａｈ）より下層のＶ層・VI層から、押型文土器・塞ノ神式土器・手向山式土器などが出土した。これら以外に、平栫式土器と手向山式土器の中間的な要素をもつ土器があり、この土器を天道ケ尾式として考えてみた。

検出した遺構には、土坑・小ピットをもつ土坑・集石・凹部がある。

64基の土坑は覆土により(a)～(c)に分類した。(a)の土坑は調査区北側端部の緩傾斜地に集まっており、(b)・(c)の土坑は(a)の分布域より南側に多く分布している。

小ピットをもつ土坑2基は、緩傾斜地の端部に分布することより陥し穴的なものであろう。

集石は大きく三地域に分かれて分布している。集石の中でも、1号集石は他のものより規模が大きく特異な存在である。径約10mの範囲に礫が分布し、その中心部は最も高く積み上げられている。礫除去後、中心部より土壙1基を検出した。他の類例より、1号集石は墓と考えられる。2号～23号集石には掘り込みの有無が見られ、礫の分布状態に五類型がある。

凹部は自然の窪みで、三箇所ある(第1凹部～第3凹部)。各凹部より傾斜に沿った状態で遺物が出土し、第1凹部では集石2基を検出した。出土遺物の中には流れ込みと考えられるものもあるが、凹部内に集石があることより、凹部を生活に利用したと思われる。

4．先土器時代の調査

石器はシラス（ＡＴ）より上層のVIII層から出土した。第1凹部～第3凹部を検出し、各凹部に遺物が集中している。この他に第4ブロックと第1・第2凹部の中間地点に遺物が分布している。三箇所の凹部の出土遺物には流れ込みと考えられるものが含まれる。しかし、第2凹部内の礫群や凹部底面近くの大型礫の存在より、凹部を利用した生活を行ったと考えられる。

各凹部・ブロックより出土した石器には組成の違いが認められる。

第Ⅰ章　調査の概要

ここで述べることについては、既に『天道ケ尾遺跡（Ⅰ）』に報告してあるので、その概要を記すことにする。

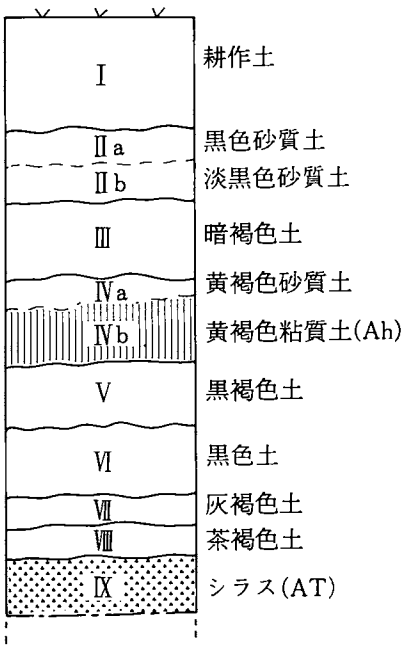
第1節　遺跡の位置について

遺跡の所在地は熊本県人吉市大字天道ケ尾である。

遺跡は球磨川中流域の左岸台地上に位置する。この箇所は球磨川が川辺川と合流する地点より下流にあり、その台地から北東方向には、球磨川が大きく湾曲して流路を北側に変更する箇所を眺めることができる。

第2節　調査の方法

試掘の成果によって調査区を設定し、II層～VII層は調査区の全面を10×10mのグリッドを用いて調査した。VIII層の調査では、5×5mの小グリッドを大グリッドに最低1箇所設けた。小グリッドで、遺物・遺構を検出した時に小グリッドを拡張して調査を行った。



第1図　基本土層図

第3節　層序について（第1図）

第1図に遺跡の基本土層を示した。Ⅰ層－耕作土。厚さ約60～90cm。IIa層－黒色砂質土で、部分的に存在する層である。厚さ約5～10cm。糸切り底の土師器が出土する。IIb層－淡黒色砂質土。厚さ約8～20cm。ヘラ切り底と糸切り底の土師器の包含層である。III層－暗褐色土。厚さ約20～40cm。上層はヘラ切り底の土師器、下層は縄文時代後期・晩期の遺物包含層である。IVa層－黄褐色砂質土で、IVb層の二次堆積層。厚さ約10～15cm。縄文時代後期・晩期の遺物包含層である。IVb層－黄褐色粘質土でAhを含む。厚さ約10～40cm。V層－黒褐色土。厚さ約10～30cm。縄文時代早期の遺物包含層。VI層－黒色土。厚さ約10～30cm。縄文時代早期の遺物包含層。VII層－灰褐色土。厚さ約10～18cm。VIII層－茶褐色土。厚さ約5～20cm。先土器時代の遺物包含層。IX層－シラスでATを含む。厚さ不明。

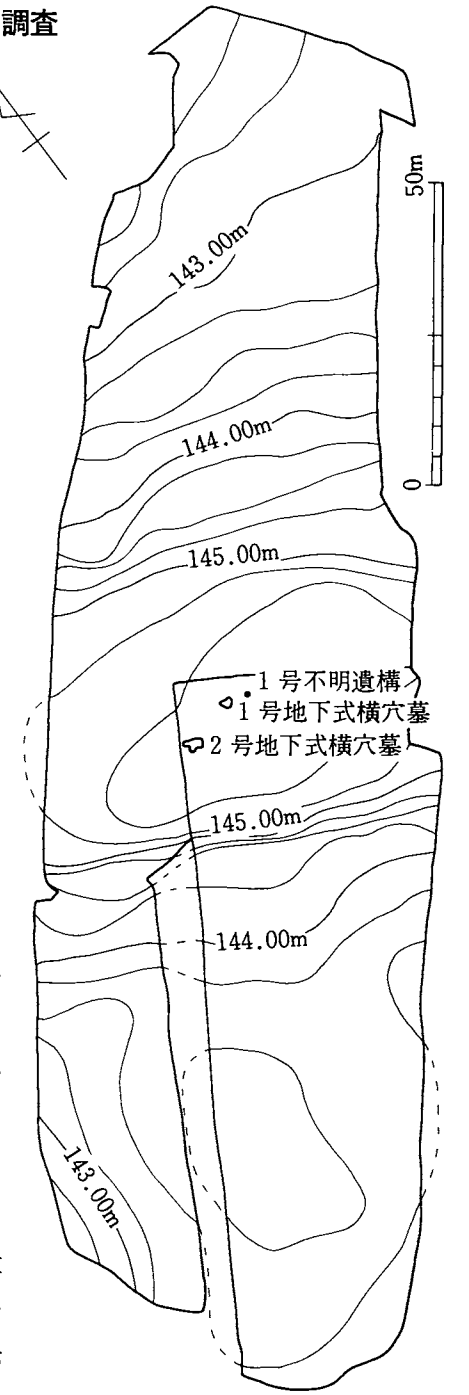
第II章　調 査 の 成 果

第１節　古墳時代の調査

１．遺構について

(1)遺構が立地する地形と遺構分布（第２図）

第２図は古墳時代の基盤面に近いと考えられるIII層上面での地形図に、遺構が分布している地点を重ねたものである。検出した遺構は、１号地下式横穴墓・２号地下式横穴墓・１号不明遺構である。調査区の中で最も高い標高約145.50ｍの等高線で表現された不整な楕円形を呈するほぼ平らな面に、これらの遺構が東西方向に帯状に分布している。三基の遺構の中で、中央に位置するのが１号地下式横穴墓、その西側の約５ｍの地点に２号地下式横穴墓が位置する。これら二基の地下式横穴墓の主軸は異なり、直交に近い状態である。１号地下式横穴墓の東側約２ｍの箇所に１号不明遺構が分布している。二基の地下式横穴墓を検出した面はIX層上面(シラス)であり、地下式横穴墓が分布している周辺もシラスが露出している状況である。これは耕作のために、標高の高い部分を既に平らに削平しているためである。遺構が分布している箇所の本来の地形は、現状よりもIII層～VIII層の分だけ標高が高くなることが考えられる。遺構分布地域より北側と南側の地形がそれぞれ端部に向かって低くなっていることを考慮すると、遺構が立地している地形は丘状の地形を呈していたと思われる。



第２図　遺構分布図

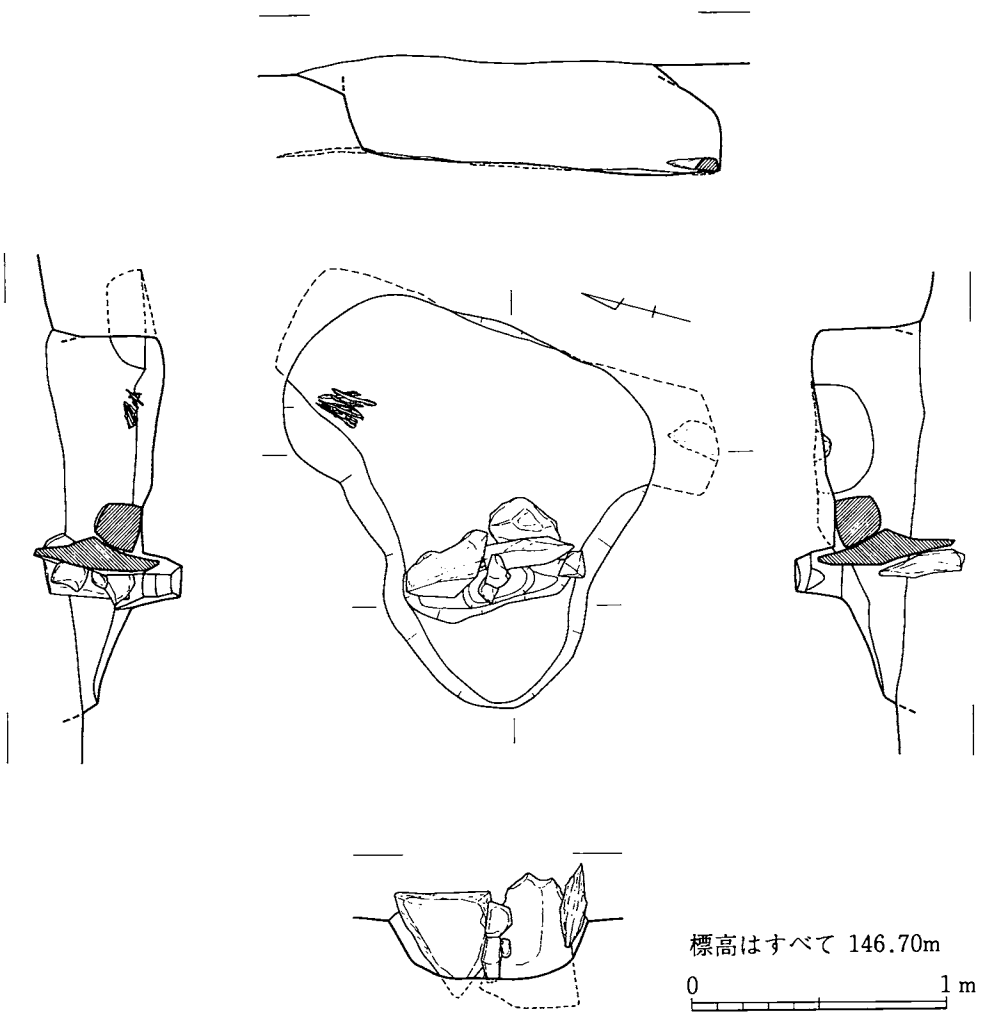
(2)遺構の状況

１号地下式横穴墓（第３図・第４図）

検出したのは地下式横穴墓の床面近くの一部分である。検出面がIX層の上面であるため、天井部分や竪坑は検出できなかった。検出時の玄室・羨道・竪坑には、暗黄褐色砂質土が入り込んだ状態で、空洞ではなく、閉塞石の上方が部分的に露出していた。玄室・羨道に入り込んだ土を観察すると、V

～Ⅷ層の土に類似しており、地下式横穴墓の壁土や天井部分の土が落ち込んだものと考えられる。おそらく、上述した削平を受けた時に陥没したものと思われる。

玄室床面の平面形は横長で不整形なプランを呈し、片袖である。玄室の主軸はほぼ東西方向である。奥壁と左側壁（羨道から玄室の奥壁に向かって左側の壁）、右側壁（羨道から玄室の奥壁に向かって右側の壁）とが作る床面の平面形は長方形に近い（奥壁の長さ約155cm、左側壁の幅約45cm、右側壁の幅約40cm）。右側壁の中央部が僅かに膨らみ、その部分の床面に角礫が置かれる（約20×10cm）。平面形では玄室と羨道の境は不明瞭であるが、閉塞石によって両者の区別がつく。羨道部分の左右側壁は内側に入り込みながら丸くなっており、玄門部と玄室との境が角ばらない。羨道は玄室側が広く、羨門部にいくにつれて狭くなる（玄室側の幅約100cm、羨門部側の幅70cm、玄室の長さ約30cm）。玄室と羨道との主軸は同じでなく、玄室と羨道はねじ



第3図　1号地下式横穴墓実測図

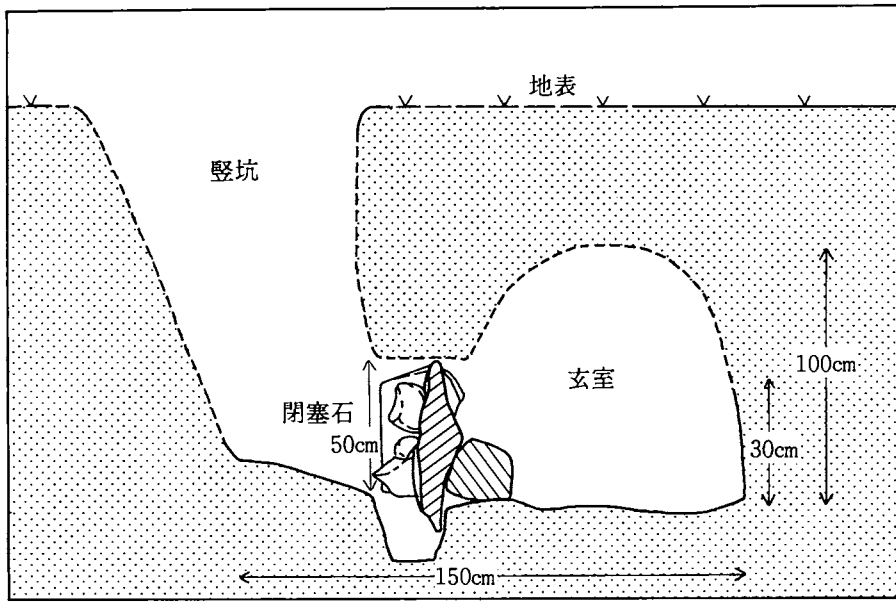
れた状態になっており、両者の平面形はねじれた「T」の字状を呈する。

縦断面形を見ると次のようになる。玄室床面はほぼ水平であり、奥壁がほぼ垂直に立ち上がっている。竪坑の床面は羨門部に向かって低くなっており、竪坑床面の西側端部は斜め上方に立ち上がっている。玄室の左右側壁は蒲鉾の横断面形に類似する。玄室の横断面形を見ると、玄室床面は左側壁から右側壁に向かって緩やかに低くなる(高低差約10cm)。右側壁はほぼ垂直に立ち上がり、その部分より先は強く内傾しながら天井部にのびている。左側壁は外方に開き丸くなりながら立ち上がっている。

閉塞は羨門部で行われており、その状況は次のようである。平面形が三角形の板石（最大長約40cm、最大幅約40cm）と台形の板石（最大長約55cm、最大幅約40cm）とが床面に穿った溝（幅約15～20cm、深さ約15cm)の中に入れて据えられている。台形を呈する板石を支える状態で玄室内側に角礫が置かれる(30×20×20cm)。二個の板石の間隙に三個の礫、台形の板石と側壁との間隙に一個の礫が玄室外側に嵌め込まれている。

玄室内の床面において、左側壁から約20cm 離れ、羨道から左側壁にのびる壁に沿った状態で、鉄鏃13本が鏃身先端部を左側壁側に向けて、束ねた状態で出土した。

第 4 図は 1 号地下式横穴墓の実測図をもとに復元した縦断面形の模式図である。これは羨門部の天井が閉塞石と同じ高さであると仮定しての復元である。壁の傾斜から判断して、天井部はドーム状になると考えられる。羨門部の高さは約50cm、天井部の高さは約100cm に推定復元してみた。



第 4 図　1 号地下式横穴墓復元模式図

出土遺物（第5図）

遺物は玄室内より出土した鉄鏃13本である。1・2は圭頭斧箭式の鉄鏃であり、篦の部分に矢柄の一部と桜皮が残っている。2は鏃身の先端が欠損している。断面形を見ると、1・2とも鏃身は両丸・平造りで、頸部は長方形を呈する。1の鏃身と頸部との境が外側に僅かに突出する。3～13は長頸鏃であり、その中で6・11以外の篦の部分には矢柄の一部と桜皮が残存している。鏃身が確認できるものは、柳葉式で片丸造りである。矢柄の一部と桜皮で篦被が確認できないものについては、X線非破壊検査装置で検査を行った（熊本県工業技術センター・生産技術部による）。その結果、篦被は棘篦被でなく、関篦被であることが判明した。頸部の断面形はすべて長方形を呈する。

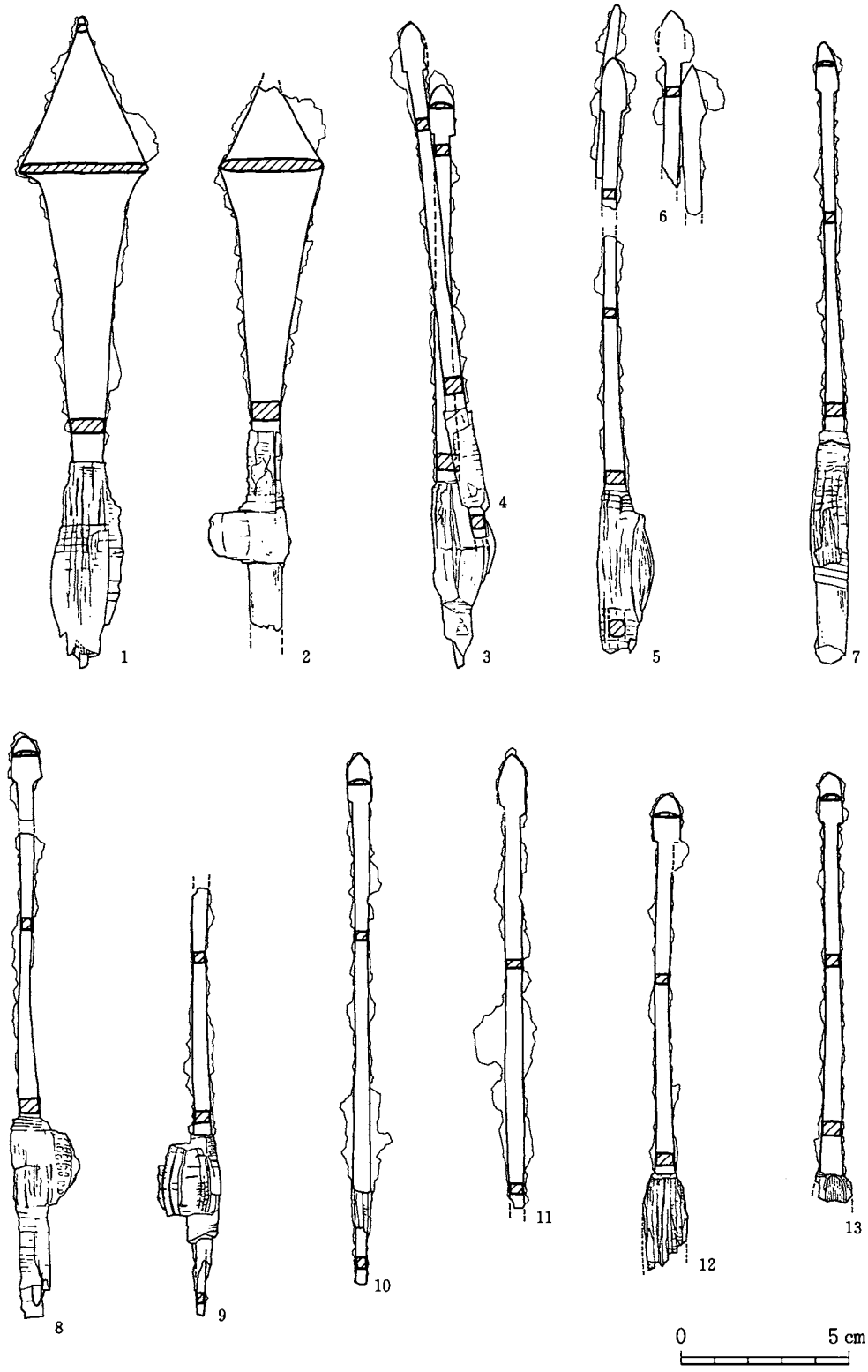
鉄鏃の計測値は下記の通りである。（　）は残存している部分の計測値。単位はcm。

挿図番号	鏃身部長	鏃身部幅	鏃身部厚さ	頸部長	頸部幅	頸部厚さ
1	5.2	3.3	0.3	14.5	1～3	0.5
2	(2.5)	3.1	0.4	(8.5)	0.9～3	0.6
3	1.5	0.8	0.2	15.8	0.5～0.7	0.3～0.5
4	1.5	0.7	－	(14.1)	0.4～0.6	0.4～0.6
5	1.6	0.8	－	(15.6)	0.3～0.6	0.3～0.4
6	1.5	0.7	－	(4.5)	0.5	0.3
7	1.6	0.7	0.2	(10.1)	0.3～0.6	0.3～0.4
8	1.4	0.9	0.2	(14.1)	0.3～0.6	0.4～0.5
9	－	－	－	(12.1)	0.2～0.5	0.3～0.4
10	1.5	0.7	0.2	14.3	0.4～0.5	0.3～0.4
11	1.7	0.8	－	(11.7)	0.4～0.5	0.3～0.4
12	1.5	0.8	0.2	(10.1)	0.4～0.6	0.3～0.4
13	1.5	0.7	0.2	(10.5)	0.4～0.6	0.4～0.5

2号地下式横穴墓（第6図）

2号地下式横穴墓で検出できたのは、1号地下式横穴墓と同様に床面近くの一部分である。検出面の状況や玄室・羨道の状態も1号地下式横穴墓と同じである。

玄室床面の平面形は片袖の横長で不整形なプランを呈する。玄室の主軸はN－38°－Eである。左側壁の床面は幅が最も狭く、右側壁の床面は最も幅広い（左側壁の幅約50cm、右側壁の幅約120cm）。左右側壁に繋がる奥壁は斜めになっている（奥壁の長さ約210cm）。玄室と羨道の境は段になっており、羨道の方が玄室より高くなっている。羨道と竪坑床面との境が不明瞭で、区別がつきにくい。短い羨道に竪坑床面がそのまま続いているものと考えられる。羨道と竪坑床面の平面形は正三角形状になる（一辺の長さ約100cm）。



第5図　1号地下式横穴墓出土鉄鏃実測図

縦断面形は次のようになる。玄室床面は中央部がほぼ水平であり、奥壁付近が中央部より高くなる(高低差約10cm)。玄室と羨道の境は段になっており、玄室床面が斜めに立ち上がる(高低差約10cm)。羨道・竪坑床面は玄室に向かって低くなりながら傾斜する(高低差約18cm)。玄室の左側壁は天井部との間に境目があり、蒲鉾の横断面形に類似する。玄室の横断面形を見ると、玄室床面はほぼ平らであるが、中央部が僅かに窪んでいる。右側壁はほぼ垂直に立ち上がっている。左側壁は約20cmほど垂直に立ち上がり、そこから強く内傾しながら天井部に向かってのびている。

閉塞石が羨道・竪坑床面で検出された。閉塞石は大小17個を数え、円礫や角礫である(最大長約5～20cm)。閉塞石の出土状況を考えると、1号地下式横穴墓と同様に羨門部閉塞であろうと思われる。

残存している壁の内傾状態から考えると、天井部は1号地下式横穴墓と同様にドーム状になると思われる。

遺物は出土していない。

1号不明遺構(第7図)

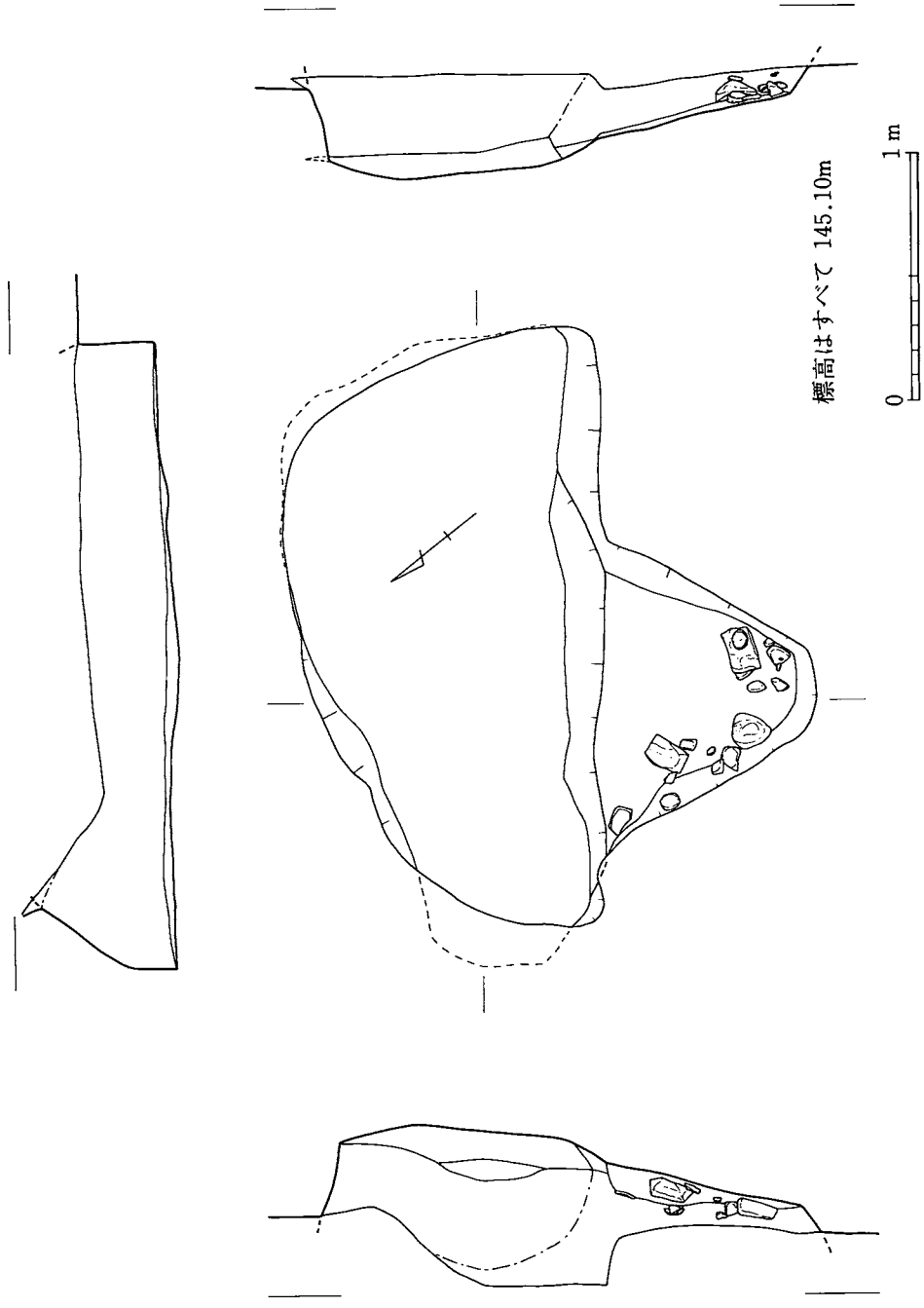
1号不明遺構は土坑1基と土坑の周辺より出土した鉄器よりなる。1号不明遺構は2基の地下式横穴墓の検出面より上位のIII層中で検出した。この箇所ではI層(耕作土)の直下にIII層が存在している。

土坑の平面形は楕円形を呈する(長軸約60cm、短軸約50cm)。断面形を見ると、深い皿状になっている(深さ約17cm)。土坑の覆土は分層できず、III層をベースにした赤褐色砂質土が全面に及んでいる。覆土には赤褐色の粒子(径約1mm)が多量に含まれる。土坑より出土した遺物はない。土坑に近接した二箇所に鉄器がまとまって出土した(土坑との直線距離約15～50cm)。東側のまとまりには剣と鉄鏃があり、西側部分では鉄鏃が出土した。鉄器の出土状況を観察すると、耕作による撹乱を受けている。さらに、(1)で述べた削平によっても撹乱を受けていることが考えられる。

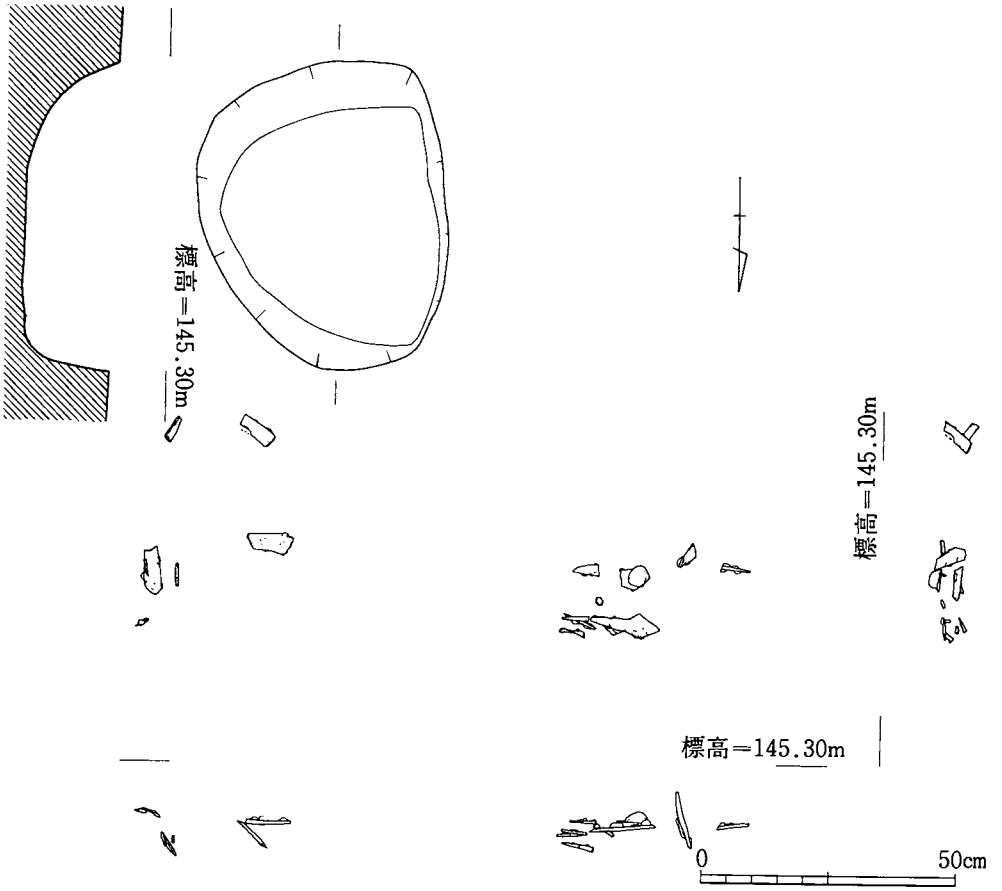
出土遺物(第8図)

東側部分より出土したものは1・6・10・13、西側部分より出土したものは3～4・11・14である。その他のものは耕作による撹乱層より出土した。

1は剣であり、剣身の一部を欠いている。身の中央には稜がなく、断面形はレンズ状を呈する。身・鋒には部分的に木製装具の一部と思われるものが付着している。2は1の剣の茎と思われる。断面形は偏平な長方形を呈する。3～4は圭頭斧箭式の鉄鏃で、鏃身部は両刃で平造りである。頸部の断面形は長方形を呈する。3・4は5と比べると大型な鉄鏃である。6～14は鉄鏃の頸部である。その中で、6は長頸鏃の頸部で、関篦被であることが判る。7は5本、8は2本の頸部が錆化して引っ付いている。12では矢柄の一部、13・14には矢柄と桜皮の一部が残



第6図　2号地下式横穴墓実測図

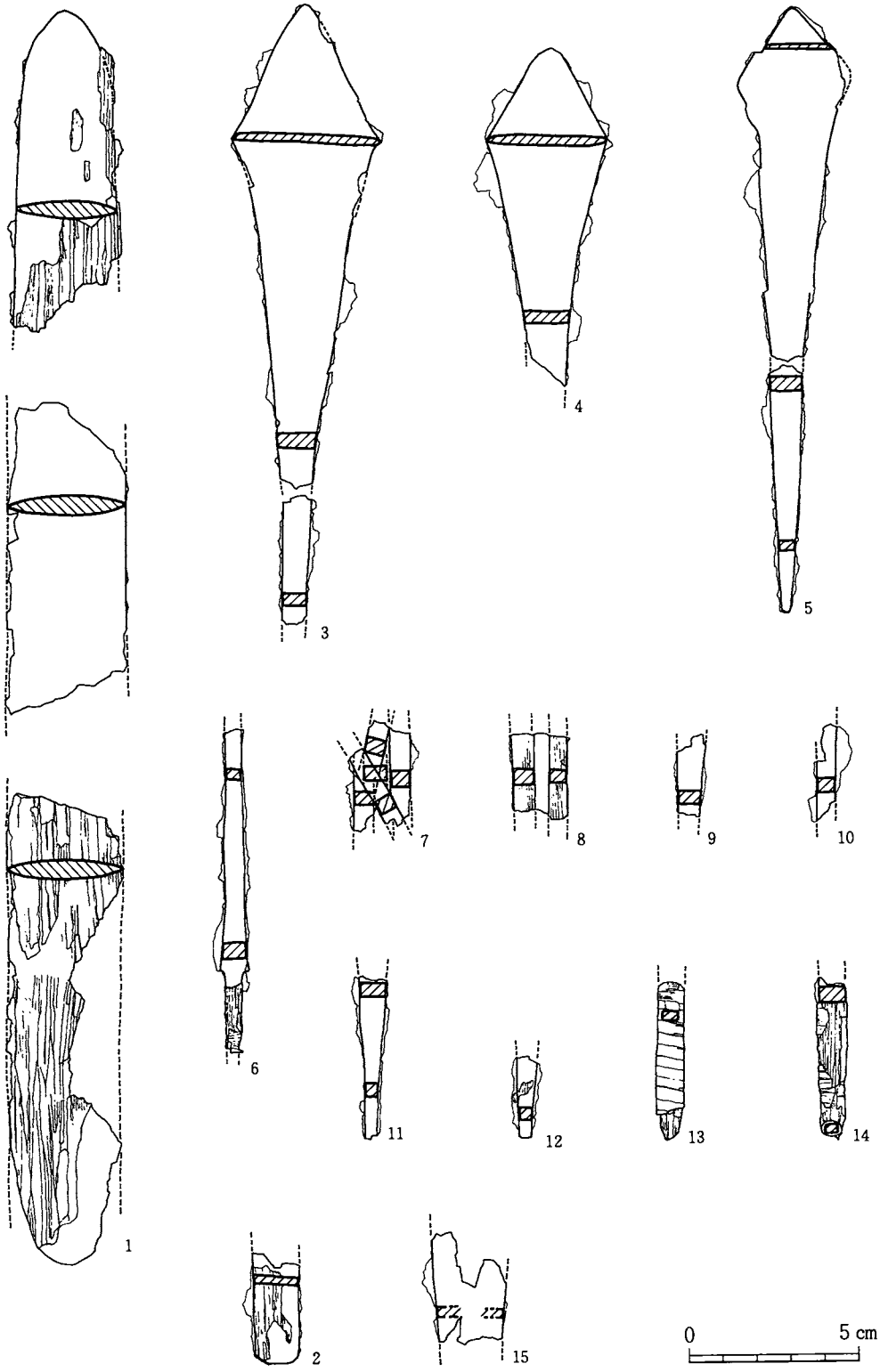


第7図　1号不明遺構実測図

存している。15は欠損が著しい鉄製品である。これは圭頭斧箭式の鉄鏃頸部の可能性が高い。

出土遺物の計測値は下記の通りである。（　）は残存している部分の計測値。単位はcm。

挿図番号	剣身部長	剣身部幅	剣身部厚さ	剣身部長	剣身部幅	剣身部厚さ
1	(9.5)	3.0	0.5	(8.7)	3.5	0.6
	剣身部長	剣身部幅	剣身部厚さ			
	(13.6)	3.5	0.6			
	茎部長	茎部幅	茎部厚さ			
2	(3.2)	1.4	0.3			
	鏃身部長	鏃身部幅	鏃身部厚さ	頸部長	頸部幅	頸部厚さ
3	3.7	4.4	0.3	(14.1)	0.7～4.3	0.4～0.5
4	2.6	3.6	0.3	(7.1)	1.2～3.4	0.4
5	1.6	(3.2)	0.2	(15.6)	0.3～0.6	0.3～0.4
6	—	—	—	(9.5)	0.5～0.8	0.3～0.5



第8図　1号不明遺構出土鉄器実測図

7	—	—	—	(1.7～2.7)	0.5～0.6	0.4～0.5
8	—	—	—	(2.3～2.4)	0.5～0.7	0.4～0.5
9	—	—	—	(2.3)	0.6～0.8	0.4
10	—	—	—	(2.6)	0.5	0.4
11	—	—	—	(4.7)	0.4～0.8	0.4～0.5
12	—	—	—	(2.4)	0.4～0.6	0.4
13	—	—	—	(4.7)	0.5	0.3
14	—	—	—	(4.5)	0.4～0.8	0.3～0.5

2．遺物について

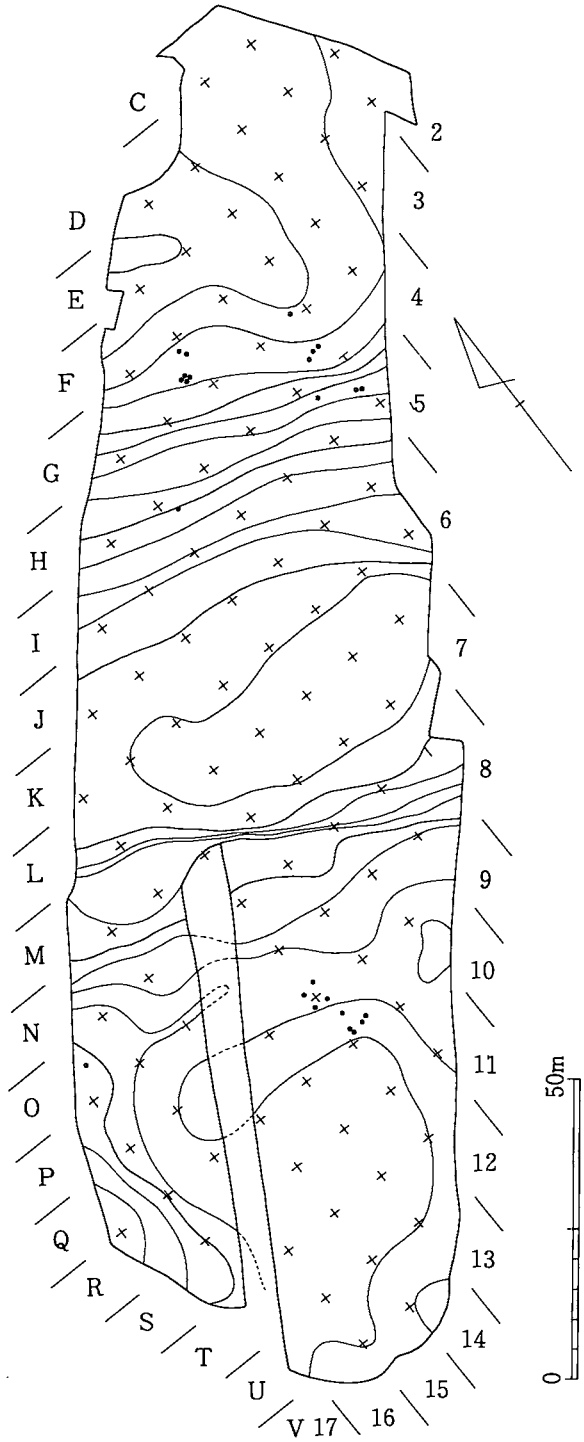
(1)出土遺物の分布について（第9図）

出土した土師器は地下式横穴墓とは離れた箇所より出土している。その箇所は大きく三つに分かれている。それらはⅠ区のF・G・H－5グリッド、G－8グリッド、Ⅱ区のP－12・13、O－12・13グリッドである。これら以外はⅠ－9、O－16グリッドより1点ずつ出土している。

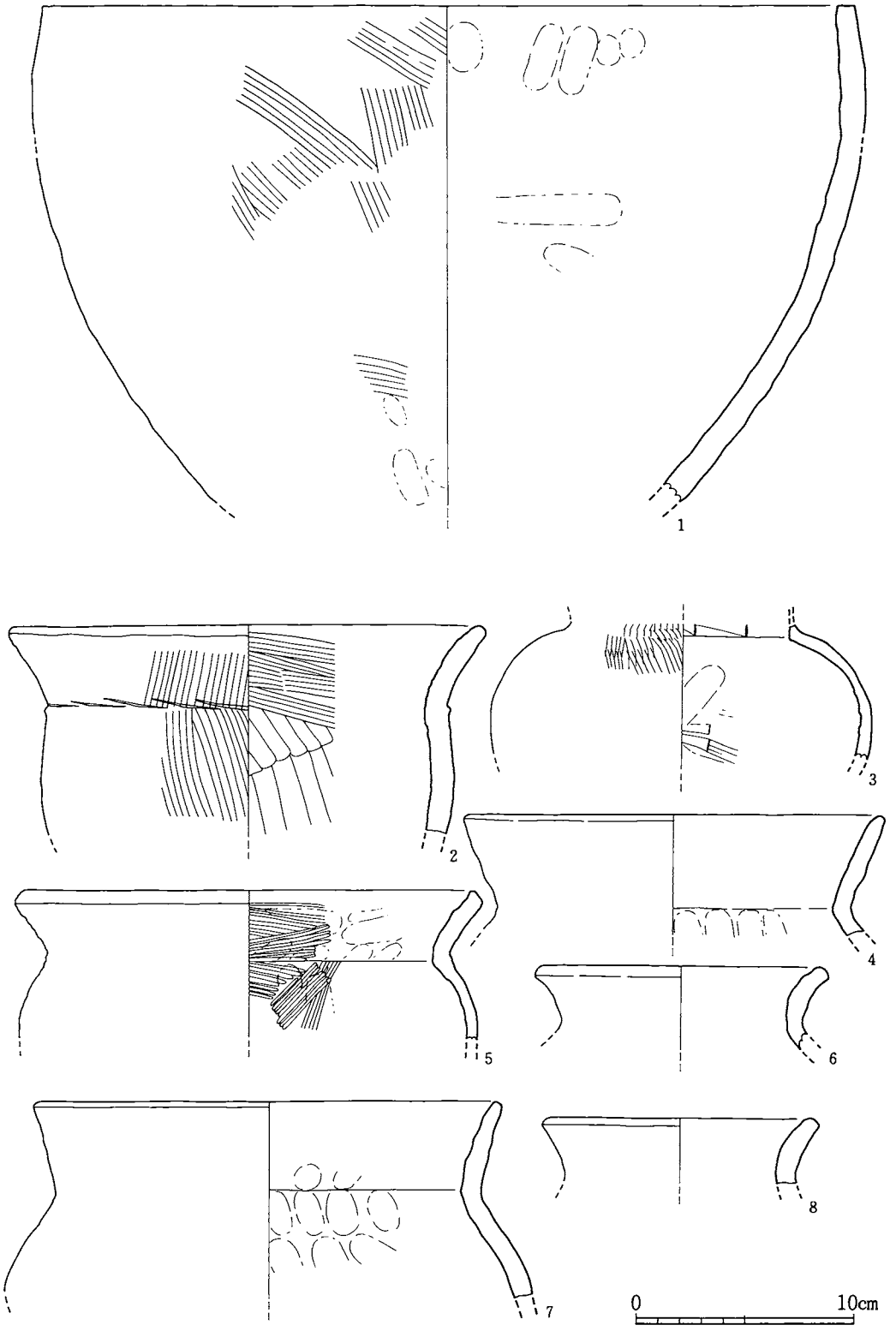
(2)土師器について（第10図・第11図）

第10図1・2・5は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。1の口縁部は胴部から内湾気味に立ち上がり、端部は平坦で角ばる。2・5は口縁部と胴部の境で「く」の字形に屈曲し、口縁部が外反する。口縁部と胴部の屈曲部内器面は5が稜をもち、2が丸くなる。2の屈曲部外器面にはハケ目調整の跡が僅かに盛り上がっている。3・4・6～8は壷形土器である。3の胴部は丸くなっており、口縁部の立ち上がりが部分的に残っている。3は他の土器と比べて胎土が良質である。4・6～8は口縁部から胴部にかけての部位である。何れも口縁部と胴部の境で「く」の字形に屈曲し、口縁部は外反する。4・7ではその屈曲部の内器面に稜をもつ。

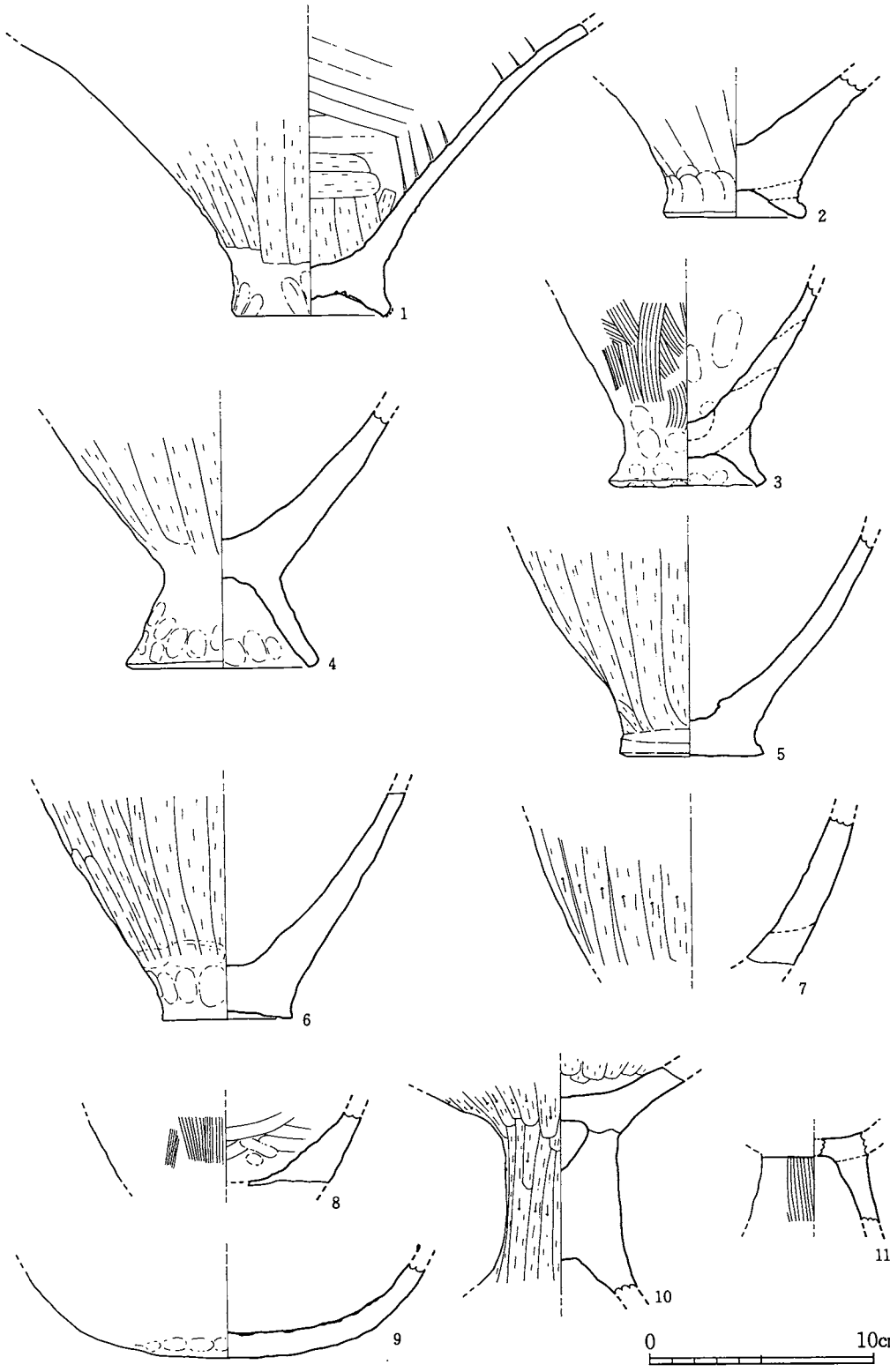
第11図1は鉢形土器で、5は鉢形土器であろう。1の底部には低い脚台がつき、胴部がほぼ直線的にのび、口縁部は僅かに外反する。図示した僅かに先が口縁端部になる。5は平底であり、胴部が僅かに外に丸くなりながら立ち上がる。2～4・6・7は甕形土器である。6は上げ底気味の低い脚台で、2・3には低い脚台がつく。4の脚台は2・3に比べると高い。胴部は外に開きながら立ち上がっている。7は外に丸くなっている胴部片である。8・9は壷形土器の底部片であろう。8は外底部を欠損している。9は安定した丸底である。10・11は高坏形土器の脚部・坏部の一部で、脚裾部を欠いている。10の脚部はほぼ真っ直ぐにのびており、坏部との接合部が部分的に中空になっている。11は外に開きながらのびる脚部をもつ。



第9図　出土土師器分布図



第10図　土師器実測図



第11図　土師器実測図

第２節　弥生時代の調査

１．遺物について

⑴出土遺物の分布（第12図）

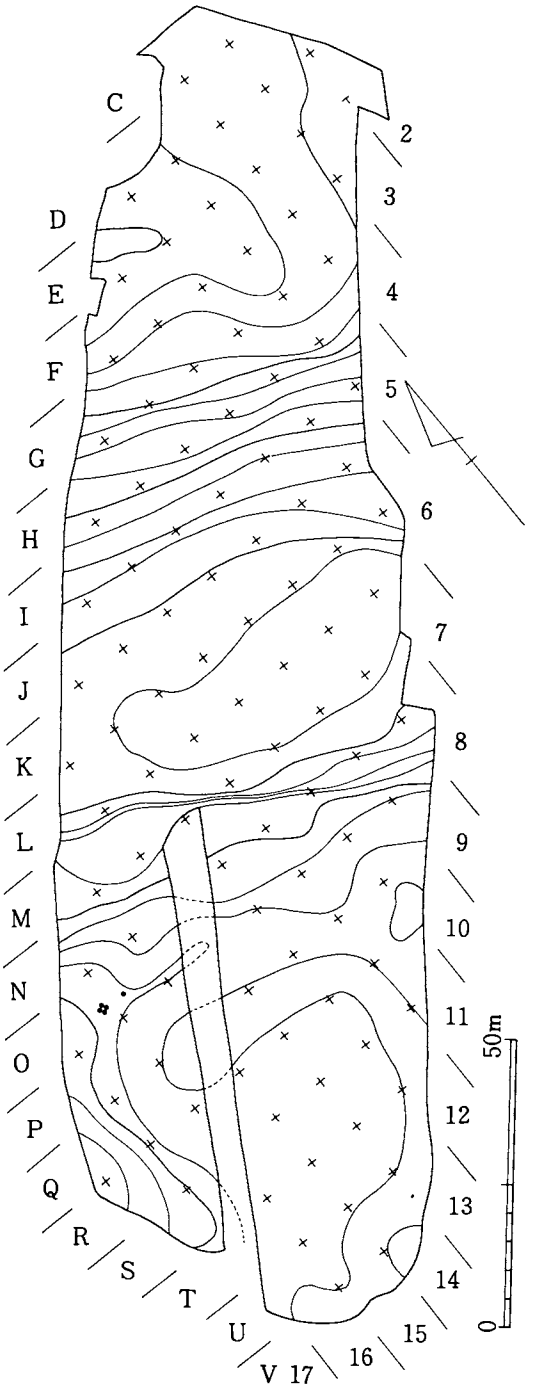
弥生時代の遺構は検出していないが、遺物だけが少数出土した。土器はＯ－16グリッドに集まり、石器は近接したＯ－15グリッドより出土した。

⑵土器について（第13図）

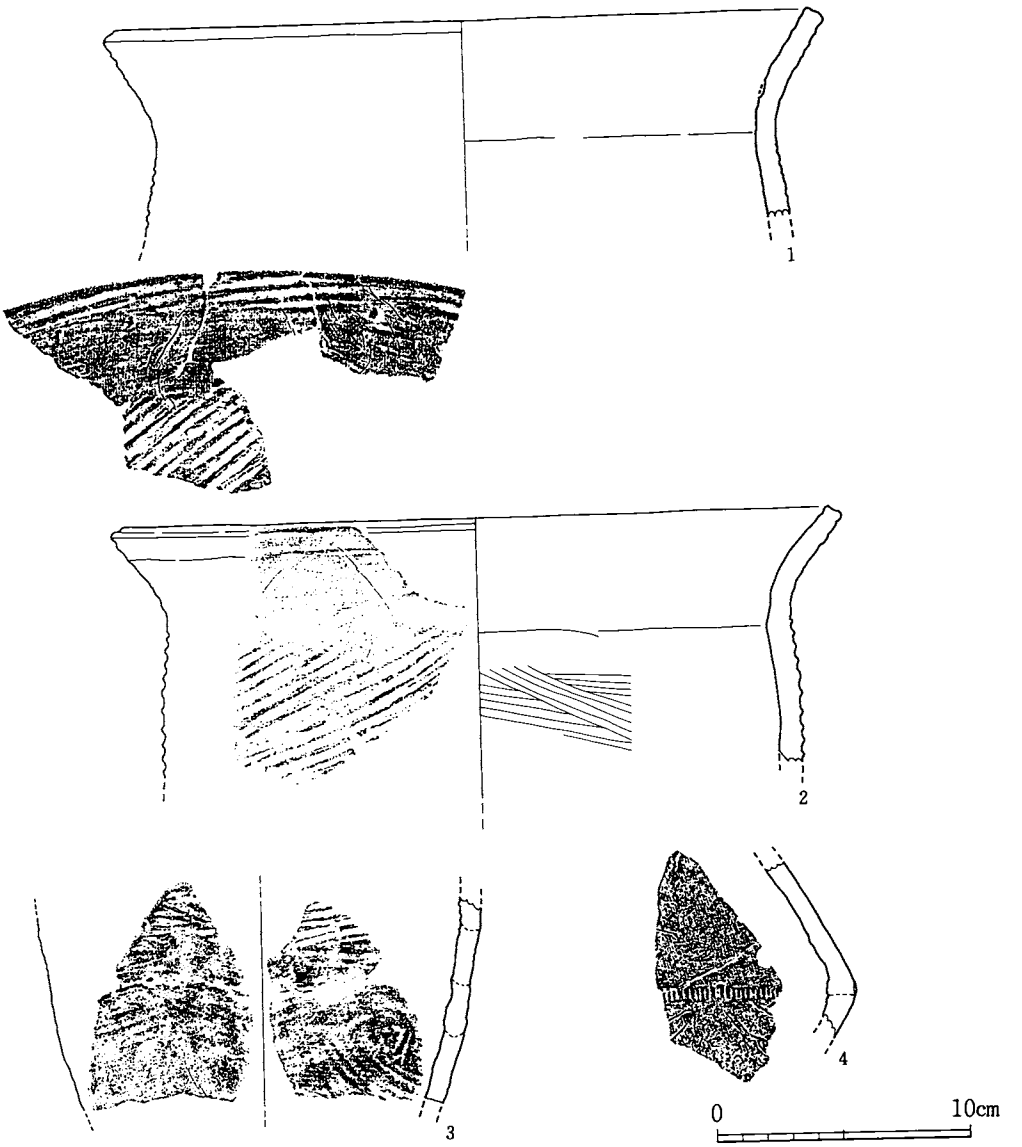
１・２は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は胴部から「く」の字形に屈曲して立ち上がり、端部は角ばる。屈曲部の内器面には僅かな稜がある。胴部の外器面にはタタキが施される。１の口縁部外器面はタタキの後、ナデ消しを行っている。３は胴部片であり、内外器面にタタキ痕が残っている。４は重弧文長頸壺の胴部片で、「く」の字形に屈曲している。その屈曲部外器面には細い沈線による刻み目を施す。

⑶石器について（第14図）

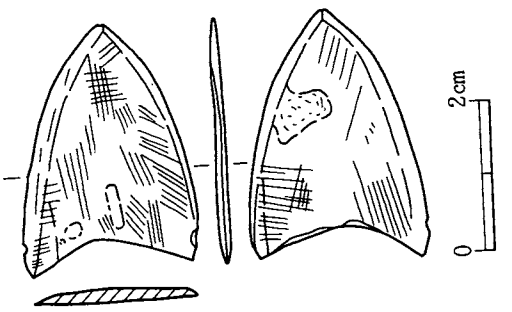
出土した石器は磨製石鏃である。石鏃は凹基無茎鏃で、抉り込みは浅い「U」字形を呈する。表裏面とも丁寧な磨研が施されている。



第12図　出土土器分布図



第13図　土器実測図



第14図　磨製石鏃実測図

第3節　縄文時代後期・晩期の調査

1．遺構について

⑴検出面の地形（第16図）

縄文時代後期・晩期の遺構は、IVb層上面で検出した。IVb層上面での調査区の地形は、次のようになる。調査区のほぼ中央部に、標高が最も高くなる箇所が帯状になりながら東西方向にのびる（標高約145.25m）。その部分より北側は標高約143mの地点まで、南側は標高約143.75mの箇所まで緩やかに低くなる。その緩傾斜地より調査区の南北両端部までは、僅かに傾斜しながらも、平らな地形に近い状態を呈する。

⑵遺構の分布（第16図）

遺構は大きく二箇所に分かれて分布している。1号～4号土坑は、調査区北東端部のほぼ平坦になる地点に集まる（標高約142.50～143m）。1号・2号土坑群は、調査区南西端部の平坦に近い地形の箇所に分布する（標高約143～143.50m）。

⑶遺構の状況

1号土坑（第15図）

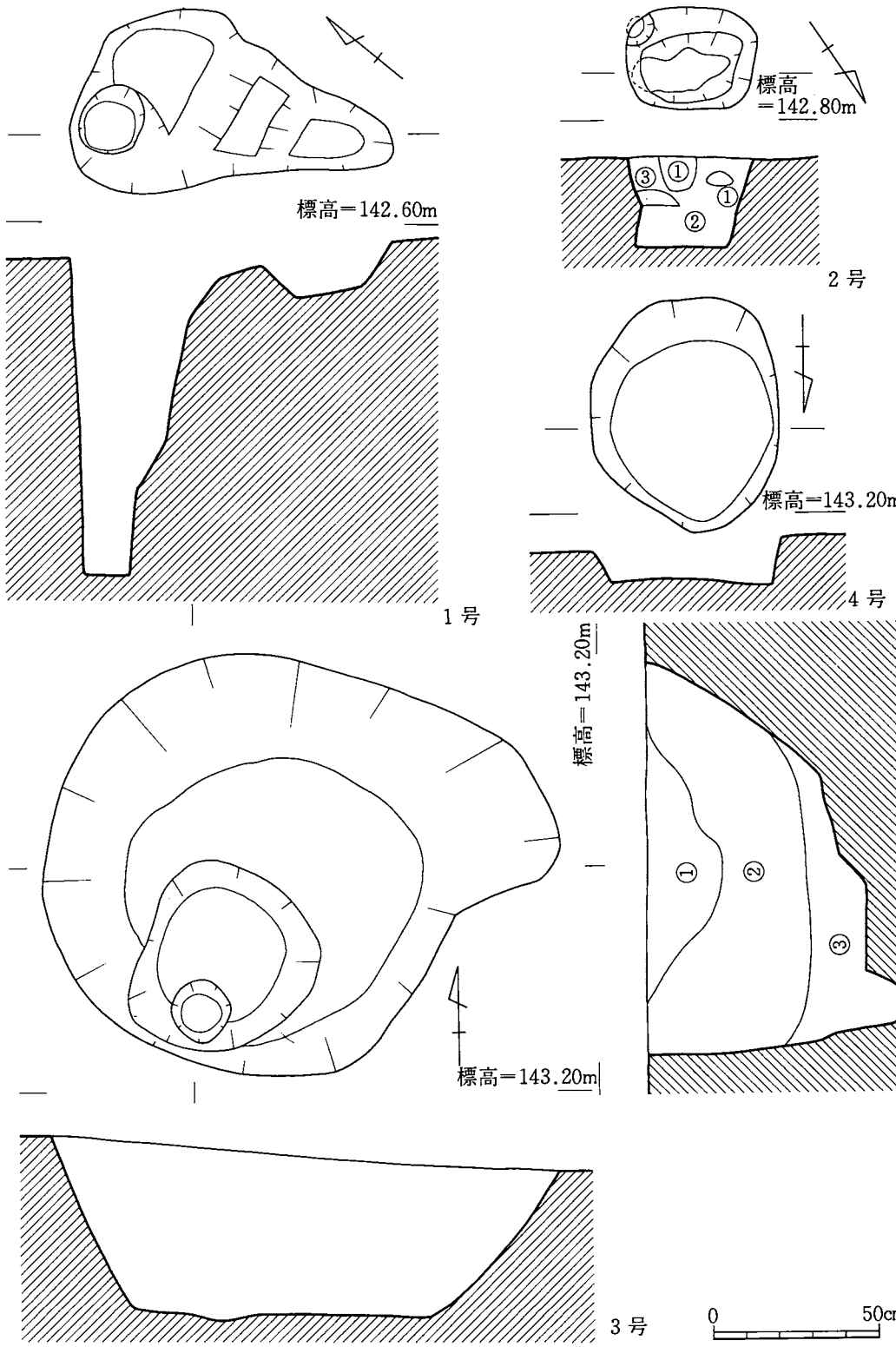
土坑の平面形は、不整な楕円形を呈する（長軸約95cm、短軸約50cm）。断面形を見ると、南北二箇所に掘り込みがある。北側の掘り込みは深い筒状で（深さ約95cm）、南側の掘り込みは浅い皿状である（深さ約12cm）。覆土はIVa・IVb層を基調とする暗黄褐色砂質土で、分層できない。覆土上層より、礫1個が出土し、覆土中にカーボン（多量）・焼土（中量）が含まれる。土坑の壁は、全体的に硬化している。

2号土坑（第15図）

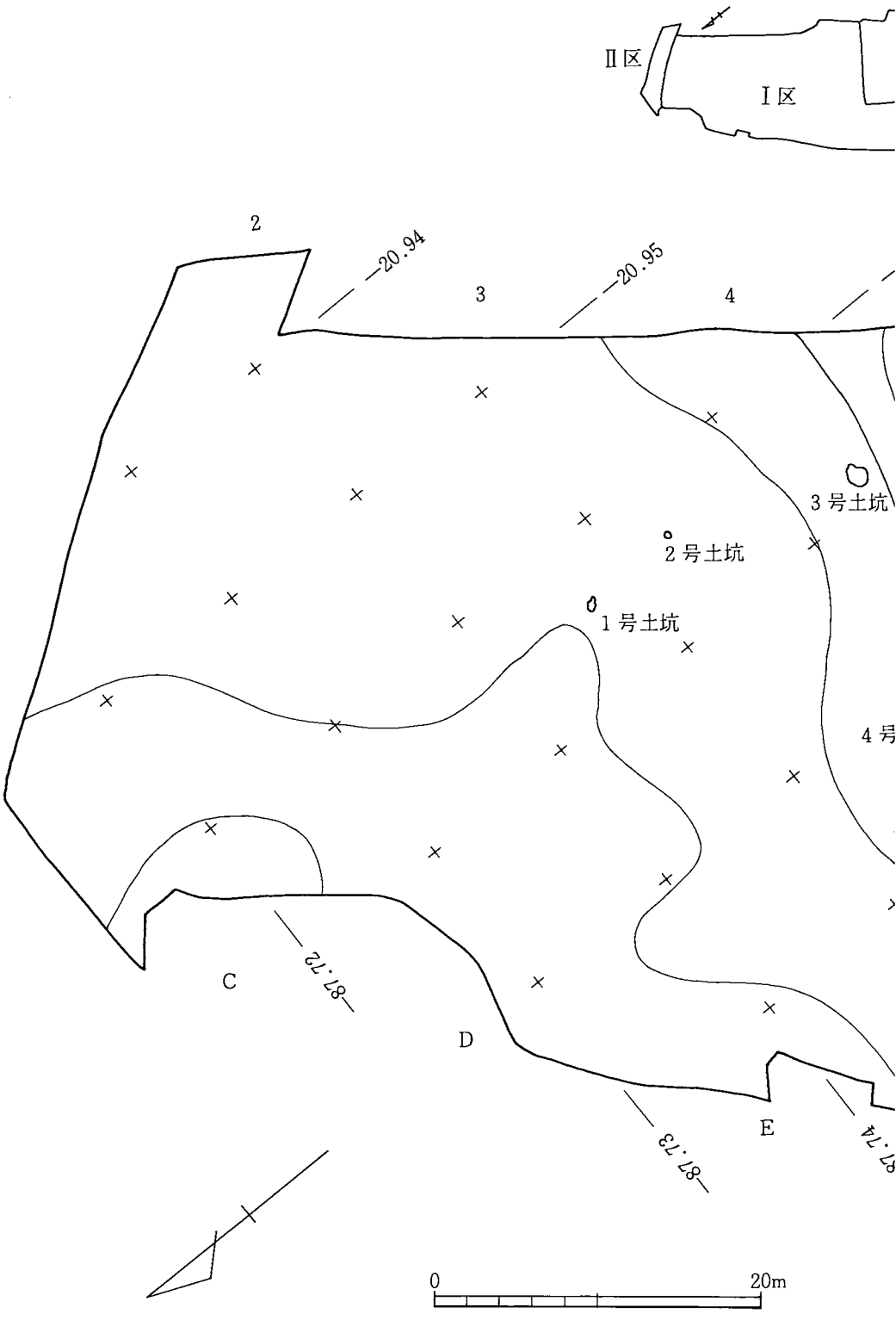
2号土坑は、隅丸長方形の平面形を呈する（約40×約32cm）。断面形は、浅い筒状である（深さ約27cm）。覆土は①層～③層に分層できる。①層は赤褐色砂質土で、焼土・カーボンを多量に含む。②層は1号土坑の覆土と類似する暗褐色砂質土である。③層は淡黒褐色土で、カーボンを多量に含む。①・③層が②層中にブロック状にはいる。

3号土坑（第15図）

土坑の平面形は、東側が張り出した不整な円形を呈する（張り出し部の長さ約155cm、円形部の径約130cm）。東西断面形は深い皿状で、南北断面形は深い皿状の三段掘りになる。南北断面形を見ると、南側にいくにつれて、床面が深くなる（最深部の深さ約75cm）。覆土は三つに分けることができる。①層は黒褐色土、②層は暗褐色土、③層は淡茶褐色土である。①層・②層は


標高＝142.60m
1 号
標高
＝142.80m
③
①
①
②
2 号
標高＝143.20m
4 号
標高＝143.20m
①
②
③
標高＝143.20m
3 号
0
50cm

第15図　土坑実測図


Ⅱ区
Ⅰ区
2
3
4
20.94
20.95
3号土坑
2号土坑
1号土坑
4号
C
87.72
D
87.73
E
87.74
0
20m

Ⅲ区
Ⅳ区
-20.96
5
-20.97
6
-20.98
7
-20.99
土坑
143.00m
144.00m
145.00m
F
-87.75
G
-87.76
H
-87.77
I
-87.78
J

8
9
10
11
-21.00
-21.01
-21.02
145.00m
144.00m
1号土坑群
K
L
M
N
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83

第16図　縄文時代後晩期遺構分布図

Ⅳａ層・Ⅳｂ層を基調とするものであり、③層は土坑の壁土に類似する。土坑の床面より、縄文時代晩期と思われる土器の小破片が出土した。

4号土坑（第15図）

4号土坑は楕円形の平面形を呈する（長軸約70cm、短軸約55cm）。断面形は浅い皿状である（深さ約10cm）。覆土は分層できず、Ⅲ層、Ⅳａ・ｂ層を基調にした暗褐色土である。覆土上層より、カーボン（中量）と土器の小破片（1点）が出土した。

1号土坑群（第17図）

1号土坑群は、略円形の土坑と不整形な土坑の各々1基よりなる。2基の土坑は、隣接して存在する。略円形の土坑は、径約50cmで、断面形は二段掘りの深い筒状を呈する（最深部約70cm）。不整形な土坑は、最大長約210cm、最大幅約70cmである。断面形を見ると、浅い皿状の掘り込みの中に、八つの深い筒状の掘り込みをもつ（皿状になる部分の深さ約10cm、筒状になる部分の深さ約30～60cm）。二つの土坑覆土は、Ⅲ層、Ⅳａ・ｂ層を基調とする暗褐色土である。覆土中には、焼土・カーボン・小土器片を含む。焼土・カーボンの量は、場所によって違いがある。また、不整形な土坑の肩部や覆土上層で、焼土のブロックが検出できた。2基の土坑に挟まれた箇所から、石皿片が出土した。

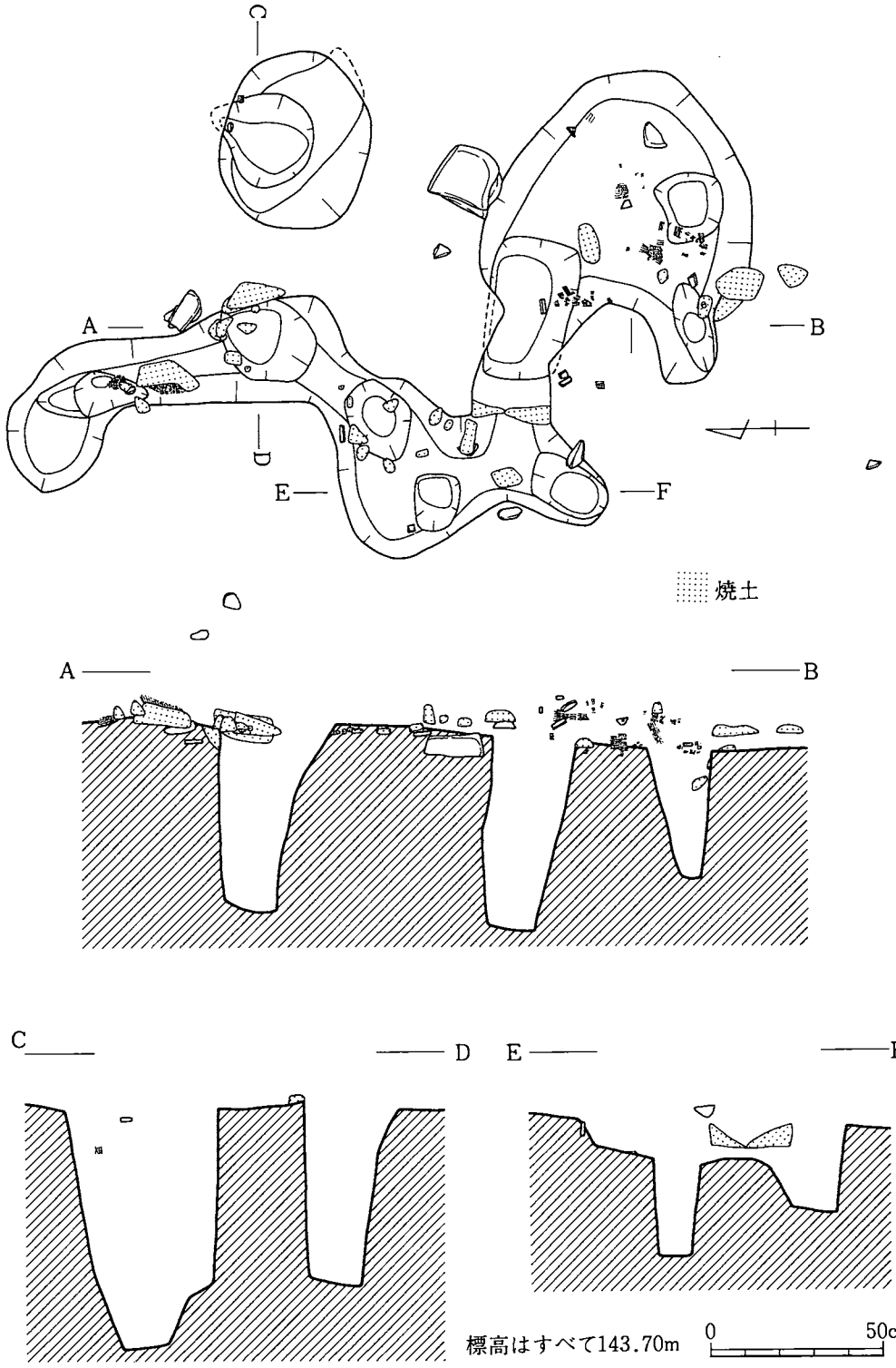
2号土坑群（第18図）

2号土坑群は、円形土坑2基、楕円形土坑1基、不整形な土坑2基の計5基よりなる。5基の土坑の配置状態は、ほぼ環状になる。円形の土坑には大小2基があり、断面形は大型のものが皿状、小型のものが筒状になる（径約80cm・深さ約18cm、径約30cm・深さ約25cm）。楕円形土坑の断面形は浅い皿状になる（長軸約45cm・短軸約30cm、深さ約8 cm）。2基の不整形な土坑の中で、北側に位置するものの断面形は皿状を呈する（最大長約110cm・最大幅約25cm、深さ約15cm）。その南西側にある不整形な土坑の断面形は、二段掘りの筒状になる（最大長約70cm・最大幅約55cm、深さ約85cm）。五つの土坑覆土は、1号土坑群と同じ暗褐色土である。不整形な土坑の覆土上層には、小土器片、焼土のブロックやカーボンを含む。また、北側に位置する不整形な土坑の覆土上層や5基の土坑に挟まれた部分から、土器片がまとまった状態で出土した。これらの土器間で、3例の接合関係がある。出土した土器片の内、不整形な土坑より出土したものと最南部の楕円形土坑の北側部分より出土した土器片には、ススが付着していた。また、土坑群の周辺でも土器片・礫が出土した。

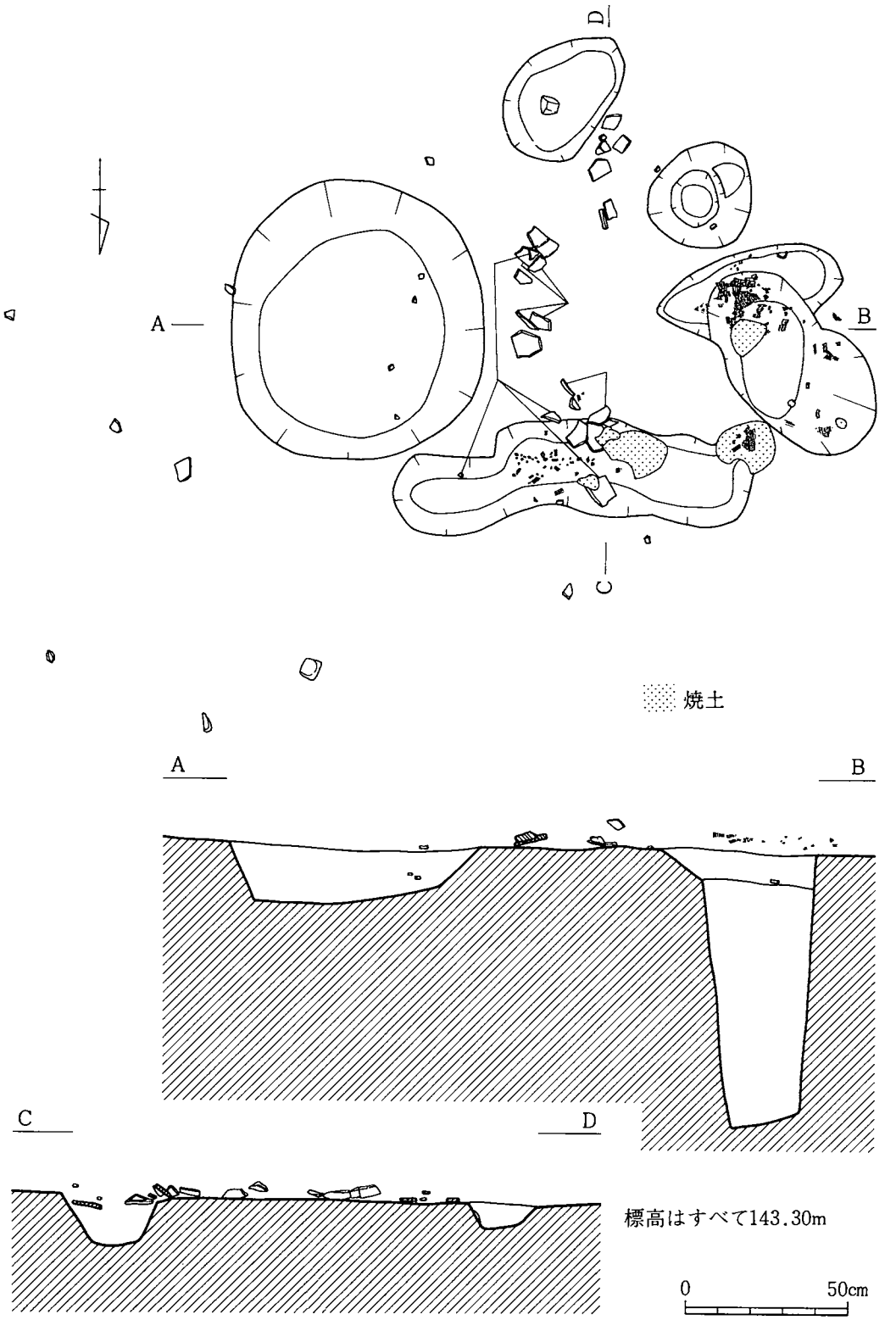
(4)遺構より出土した遺物

土器（第19図）

第19図の土器は2号土坑群に伴って出土したものである。1・2・3は、器形・胎土や出土状況・接合関係（第21図）より同一個体と考えられる深鉢の口縁部である。体部がほぼ直線的



第17図　1号土坑群実測図



第18図　2号土坑群実測図

にのび、口唇部付近でやや外側に開く。口縁端部は外方に引き出され、先端が尖り気味になる。磨研は外器面が丁寧に行われており、内器面は外器面ほど丁寧ではない。外器面は黒褐色を呈し、部分的にススが付着している。4は内外器面とも丁寧な磨研を施す口縁部であり、体部は直線的にのびている。5・9は深鉢の胴部がもっとも膨らんだ部分であり、外器面の磨研が丁寧である。屈曲部より下位の外器面にススが付着している。6は胴部片で、内外器面とも簡単な磨研を施す。7は深鉢の口縁部で、外反気味に端部まで直線的にのびる。他の口縁部と比べると、7には雑な磨研を施す。8は深鉢胴部の屈曲部と底部とに挟まれた部分で、外方向に丸くなる。

石器（第20図）

第20図に示した石皿は1号土坑群に伴って出土した。石皿は約半分を欠いており、残存部は不整形を呈する。石皿は片面だけを使用しており、磨痕が二箇所にある。使用面は部分的に薄く剝がれている。断面形を見ると、磨痕がある箇所が僅かに窪む。

2．遺物について

(1)出土遺物の分布（第21図）

III層下部からIVａ層にかけて、土器（881点）、石器（355点）、剝片及び破片（3246点）、自然石（342点）が出土した。その分布状況を見ると、次のようになる。遺物はＩ区・III区・IV区に分布している。Ｉ区では全面に遺物が分布しているが、その状況は散在状態を呈しており、III区・IV区に遺物が集まる傾向がある。III区ではＲ－11・12グリッド、Ｓ－12グリッドに、遺物が密集している。その密集部分より北側にも遺物が分布しており、密集部分と合わせて、遺物の分布が帯状になっている。IV区ではＯ・Ｐ－14～16グリッドに遺物が帯状に分布している。これ以外にＲ・Ｓ－17グリッドにも遺物分布箇所がある。調査区外の部分も含めて、III区・IV区全体の分布状況を見ると、環状の遺物分布になる可能性がある。

遺物の接合関係は、Ｒ－11・12グリッドで3例、Ｐ－13グリッドで3例、Ｐ－14グリッドで2例、Ｏ－15グリッドで3例、Ｑ－11グリッドで1例が見られる。これらの接合例はII類土器が集中している部分である。その他に遺物の接合関係が見られるのは、Ｑ－17グリッドの1例、Ｈ－6グリッドの1例である。

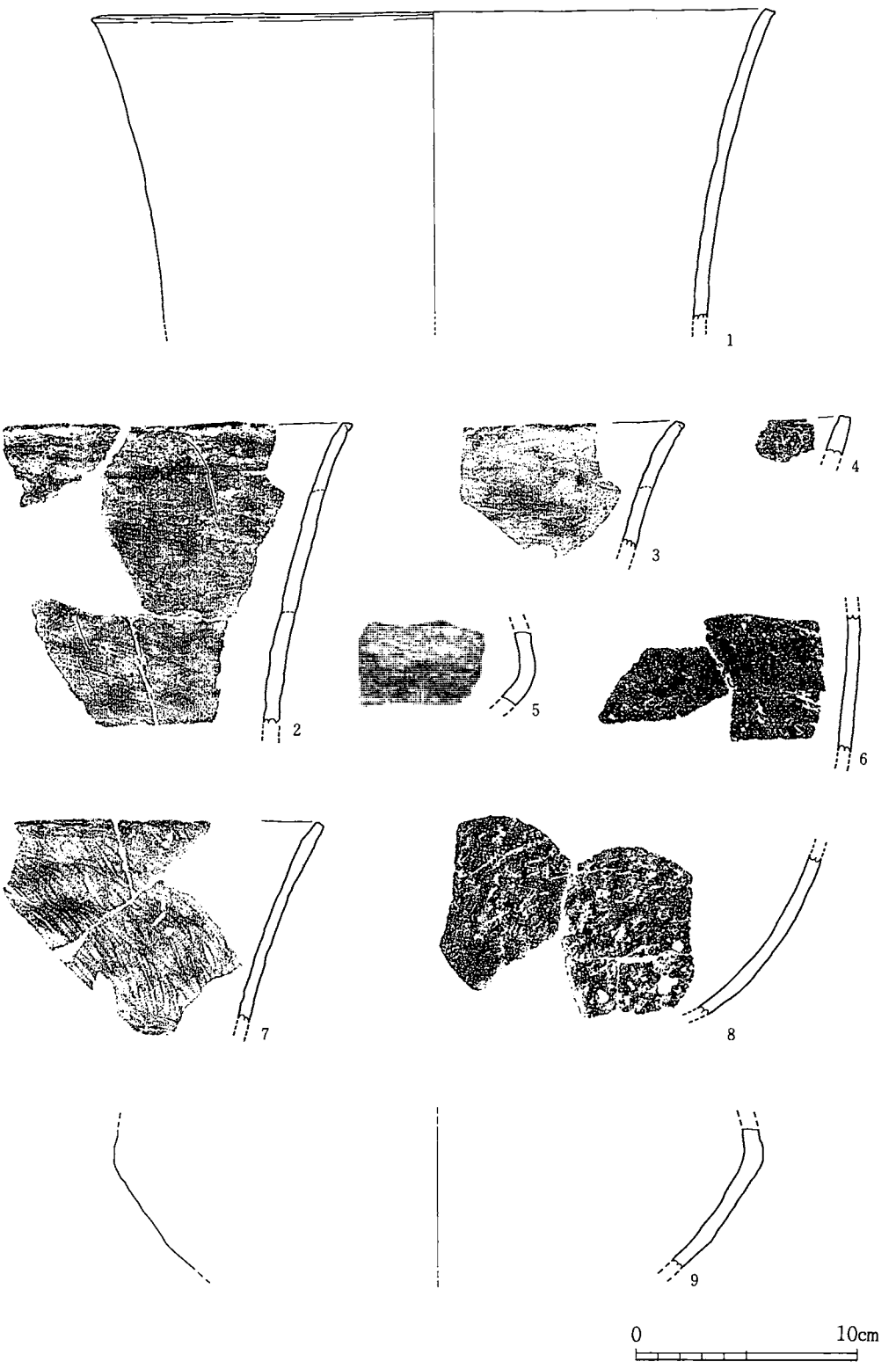
(2)土器について

III層下部～IVａ層で出土した土器は次のＩ類・II類に分類できる。

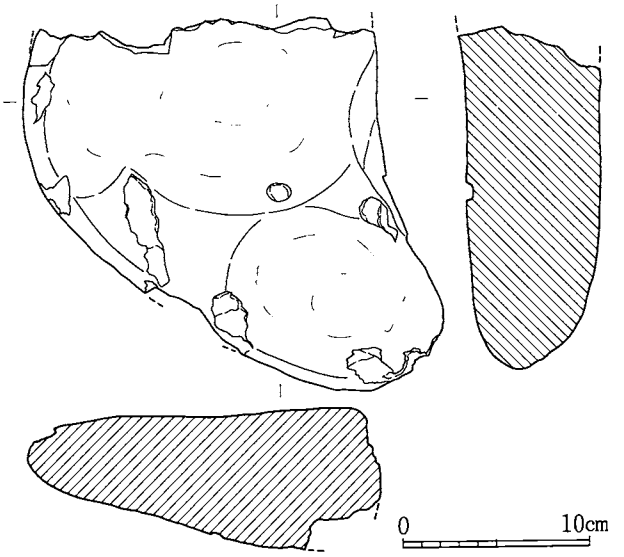
Ｉ類

Ｉ類は磨消縄文系の土器である。Ｉ類土器は磨消縄文の有無で大きくＡ・Ｂの二つに分けることができる。

分布状況　Ｉ類土器の殆どがＩ区に散在状態を呈して分布している。



第19図　土器実測図



第20図　石器実測図

I－A類（第22図）

I－A類は磨消縄文を地文としてもつ。1～10・16は端部が「く」の字形に屈曲する深鉢・浅鉢の口縁部である。その「く」の字形に屈曲した部分の外器面が磨消縄文と沈線の文様帯になっている。1～8の沈線は三本である。その中で、1・2・4・6・7の沈線は、口縁端部より2本めまでが波頂部に向かって斜めに施文され、残り一本の沈線がほぼ真っ直ぐになっている。波頂部を中心にして、その二種類の沈線によって三角形を形作っている。1ではその三角形内に刺突文が見られる。3・8の三本沈線は全部が波頂部に向かっている。3では波頂部の口唇部に僅かな凹部があり、その直下に刺突文が施される。9～11・16に施文された沈線は二本である。9・11は小片であるため波状口縁か平口縁かが確かなものでないが、10・16は波状口縁であり、二本の沈線が波頂部に向かって上昇している。11では磨消縄文・沈線文に混じって刺突文が施文される。

18は三本の沈線が施された胴部の屈曲部で、上下の沈線間に「X」字状の刺突文がある。

I－B類（第22図）

I－B類は磨消縄文をもたないものである。12～15は端部が「く」の字形に屈曲する深鉢・浅鉢の口縁部である。I－A類と同様に屈曲部の外器面が沈線の文様帯になる。12～15の沈線は全て二本である。12では二本の沈線が波頂部に向かって上昇している。15では上位の沈線が波頂部に向かい、下位の沈線がほぼ水平になる。その両者の沈線によって三角形が作られ、その部分に刺突文が施される。内器面を見ると、波頂部には上端側からの刺突文がある。14の沈線文の上下は、他の土器と比べると幅広く、口唇部には刻目が施される。

脚台（第22図）

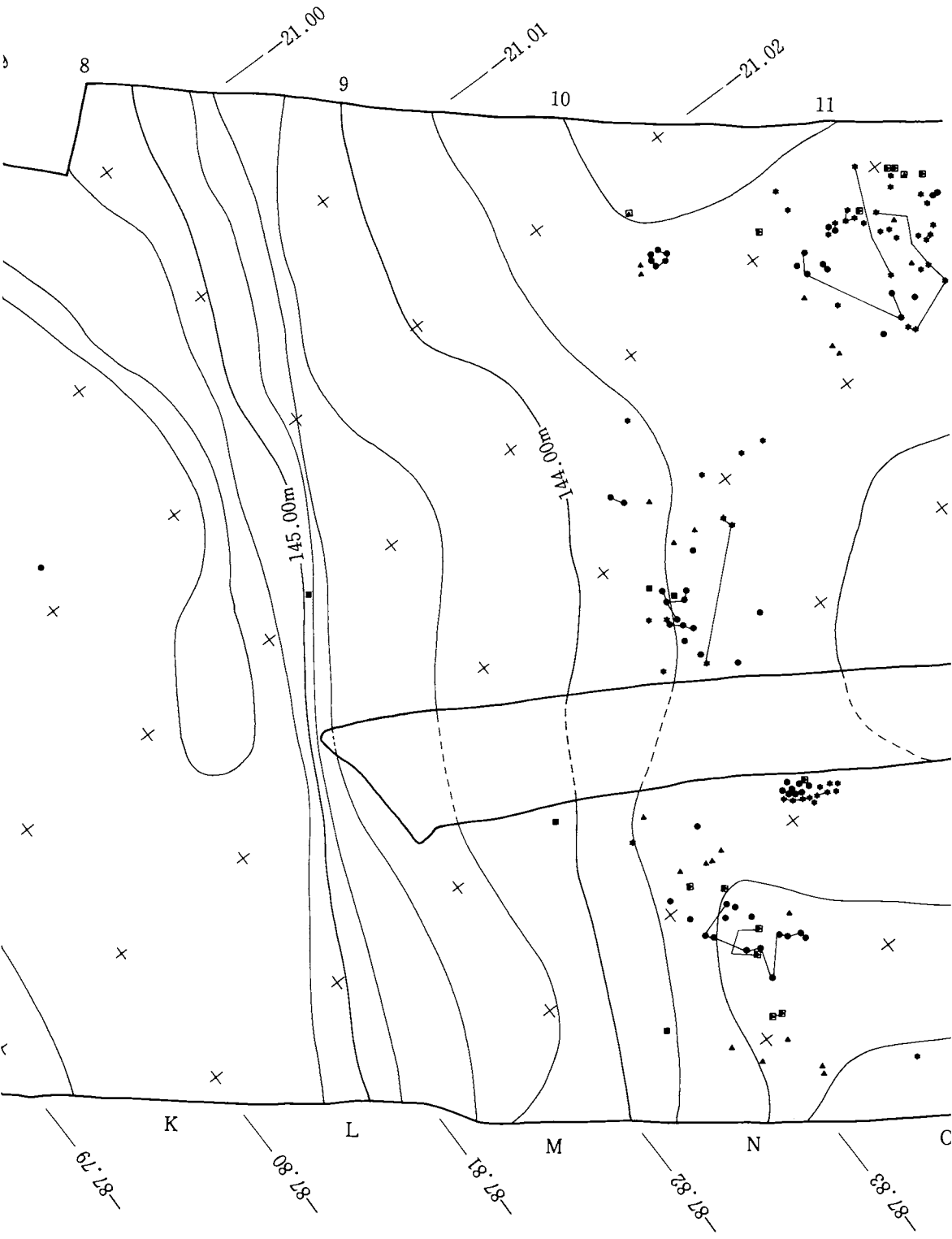
17は脚部の下半分が中空になっている。その部分より上位の脚体部には楕円形を呈する穴がある。脚部の下端寄りに弱い帯状の凸帯があり、凸帯の上方は縦方向の磨研、下方は横方向の磨研を行っている。

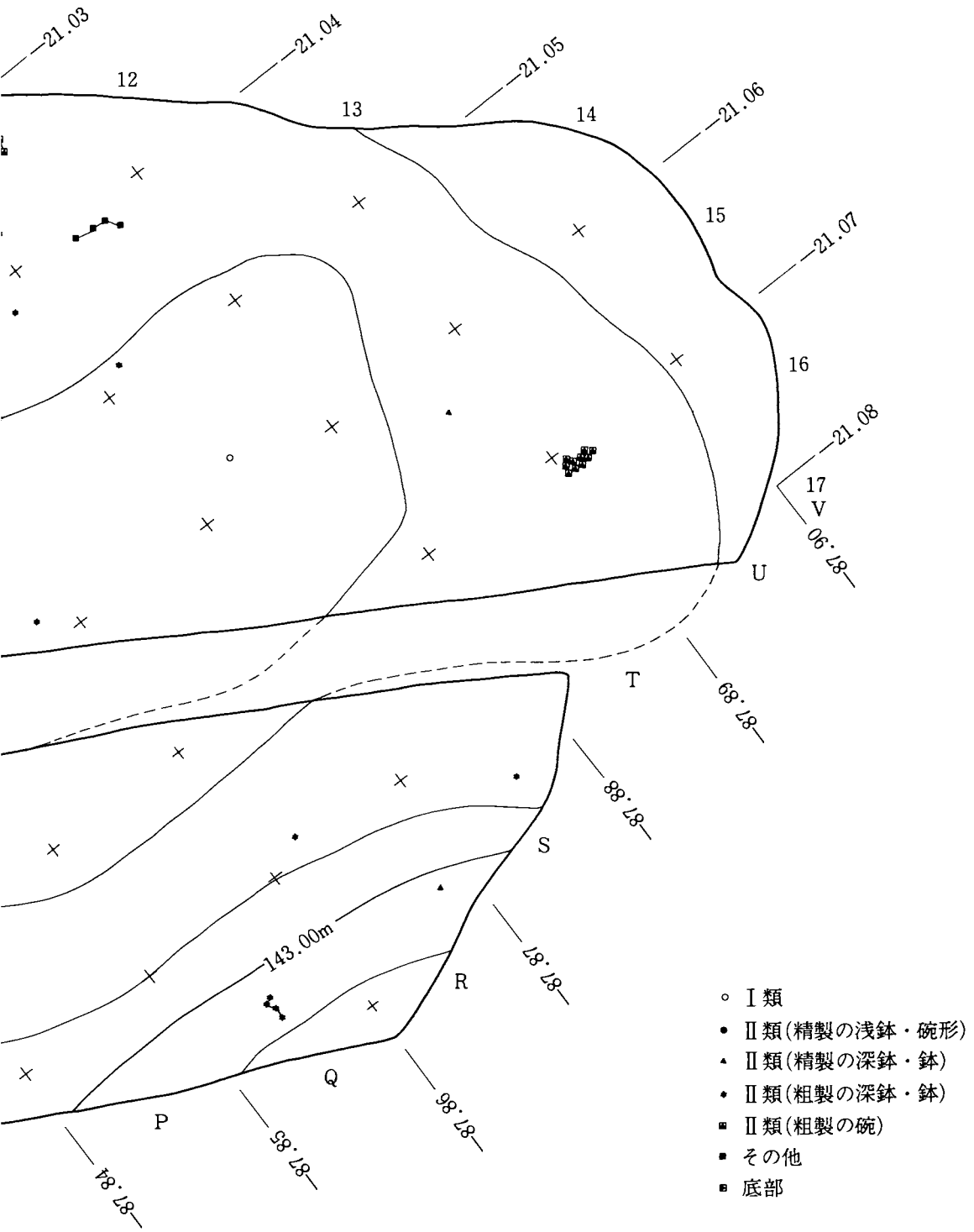
II類

II類の土器は、黒色磨研系の土器とそれに伴う土器である。II類土器は器形によってA～D

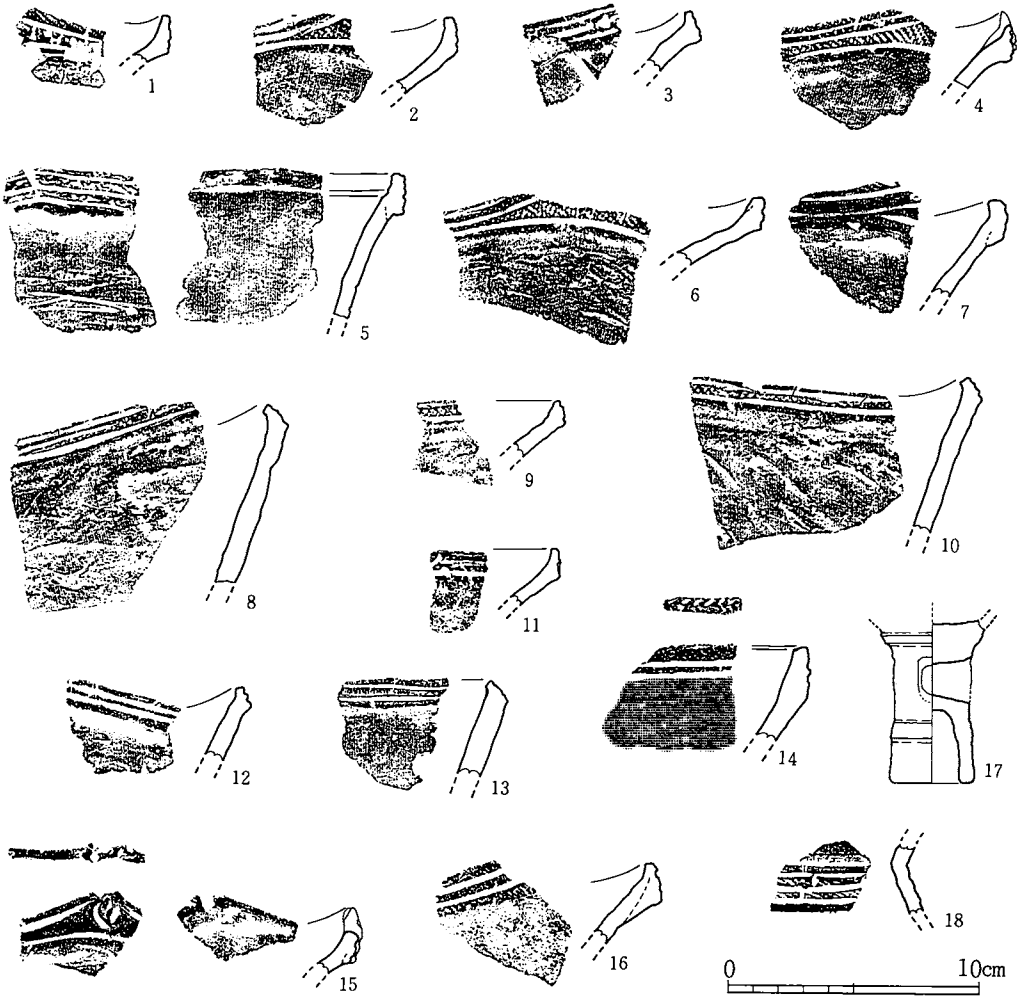
Ⅱ区
Ⅰ区
2
20.94
20.95
3
4
C
87.72
D
87.73
E
87.74
0
20m

Ⅲ区
Ⅳ区
20.96
20.97
20.98
5
6
7
143.00m
144.00m
145.00m
F
G
H
I
J
87.75
87.76
87.77
87.78


8
9
10
11
21.00
21.01
21.02
145.00m
144.00m
K
L
M
N
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83



第21図　Ⅲ層・Ⅳa層出土土器分布図



第22図　土器実測図

に分類できる。

分布状況　II類土器はＩ区に少数が分布しており、その殆どはIII区・IV区に分布している。特に、遺物の接合関係が見られるＲ－11・12グリッド、Ｐ－13グリッド、Ｐ－14グリッド、Ｏ－15グリッドに、遺物分布の大きなまとまりが三箇所見られる。

II－Ａ類（第23図～第25図）

II－Ａ類は浅鉢形土器である。第22図１～４、第24図６・８・９は胴部と頸部の境で最大径を測り、その部分が「く」の字形に屈曲するか、または丸くなる。頸部は内傾しながら口縁部までのび、口縁部はさらに「く」の字形に屈曲して立ち上がり、端部が肥厚する。口縁部の内外器面には、沈線文を施したり、段をもったりする。第24図９には補修孔がある。第23図５・６・８は直線的に外に開く体部から口縁部が「く」の字形に屈曲して立ち上がる。第24図１・

4、第25図4・5は体部がほぼ直線的に外に開きながらのび、そのまま口縁部につながる。9の口縁部の内外器面には沈線が施される。第23図10・11・15～20は胴部と頸部の境が「く」の字形に屈曲し、頸部が長く弓状になりながら外に開き、口縁部が頸部との境で「く」の字形に屈曲して立ち上がる。口縁部の立ち上がりは20が短く、それより長いのが10・11である。胴部と頸部の境が明確で稜をもつのが15～17・19、丸くなるのが18・20である。第23図12～14は胴部と頸部の境が「く」の字形に屈曲し、頸部が内傾しながらのび端部が肥厚して口縁部になる。胴部と頸部の境には沈線が見られる。14の口縁部には鰭状の突起がつく。

II－A類土器の器面調整を見ると、器面調整の荒いものが少数ある。第23図2・10・11・17、第24図5は内外器面とも粗雑な器面調整であり、第23図5、第24図8の器面調整は外器面が丁寧な磨研で、内器面が粗雑である。第25図4の内器面は丁寧な磨研で、外器面は粗雑な器面調整である。上記以外の土器は内外器面とも丁寧な磨研が行われている。

II－B類（第24図～第26図）

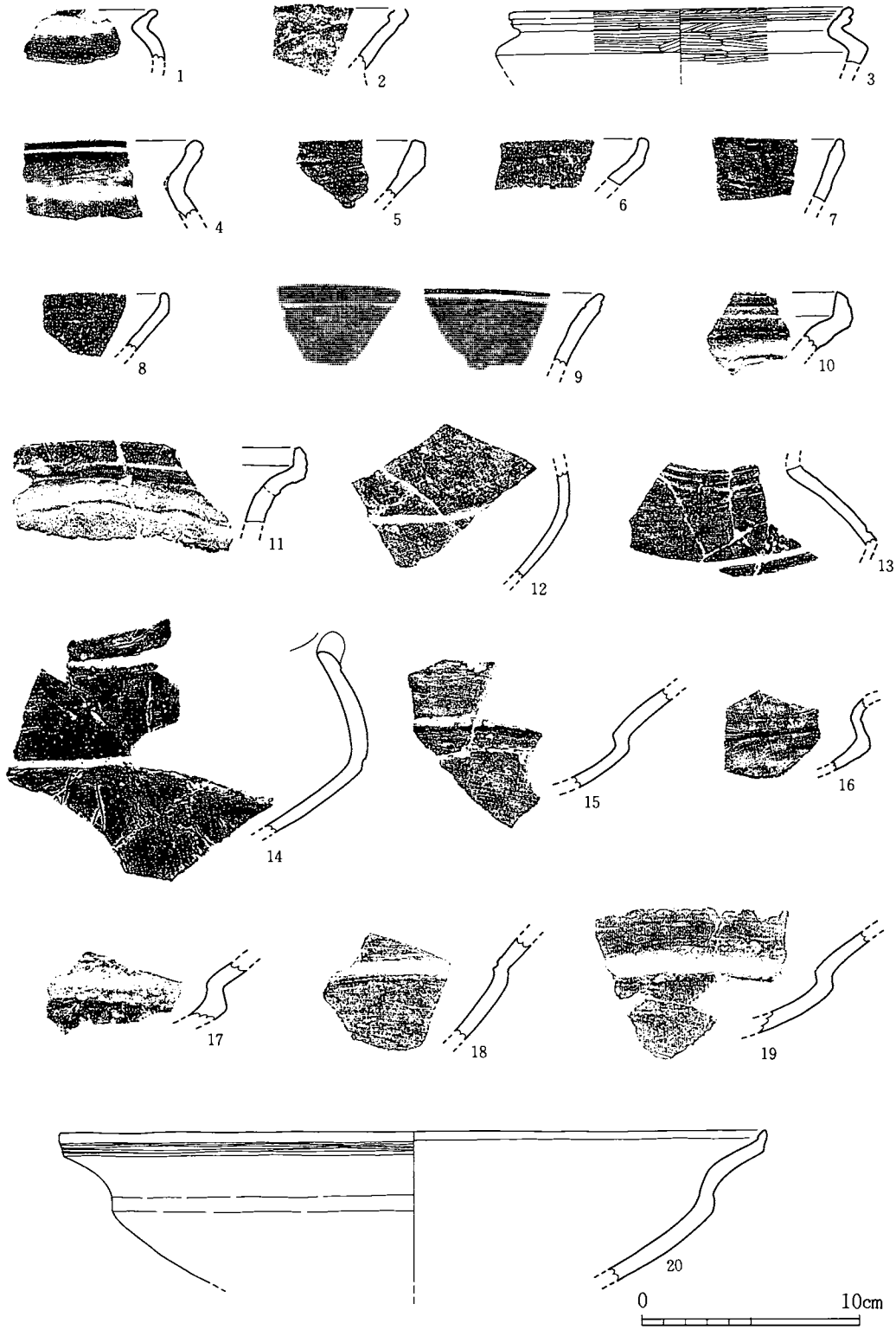
II－B類は碗形土器である。第24図1～4・7、第25図1～3・6・7、第26図1～4は体部が丸みを帯びながら口縁部までのびる。口縁端部を見ると、第24図1・3・7、第25図3、第26図1・2が丸くなり、それら以外が角ばる。第24図1～3の外器面には沈線が施される。1・2の沈線は口唇部直下に一条あり、3の沈線は口唇部直下に一条、底部近くの胴部に二条ある。2・3の沈線内には赤色顔料が残っており、全体に彩色した可能性がある。2・3は弱い波状口縁になると思われる。第25図1～3・6・7は器壁が厚く大型の碗であり、その中で7は器高が低い。第26図1は小型の碗である。第26図5は丸みを帯びながらのびる体部に内傾する口縁部が続く。

II－B類土器の器面調整は、浅鉢に比べると粗製なものが多い。第25図1～3・6・7、第26図3の内器面が丁寧な磨研を施し、外器面には条痕が残る。これら以外の土器は内外器面とも丁寧な磨研を施す。

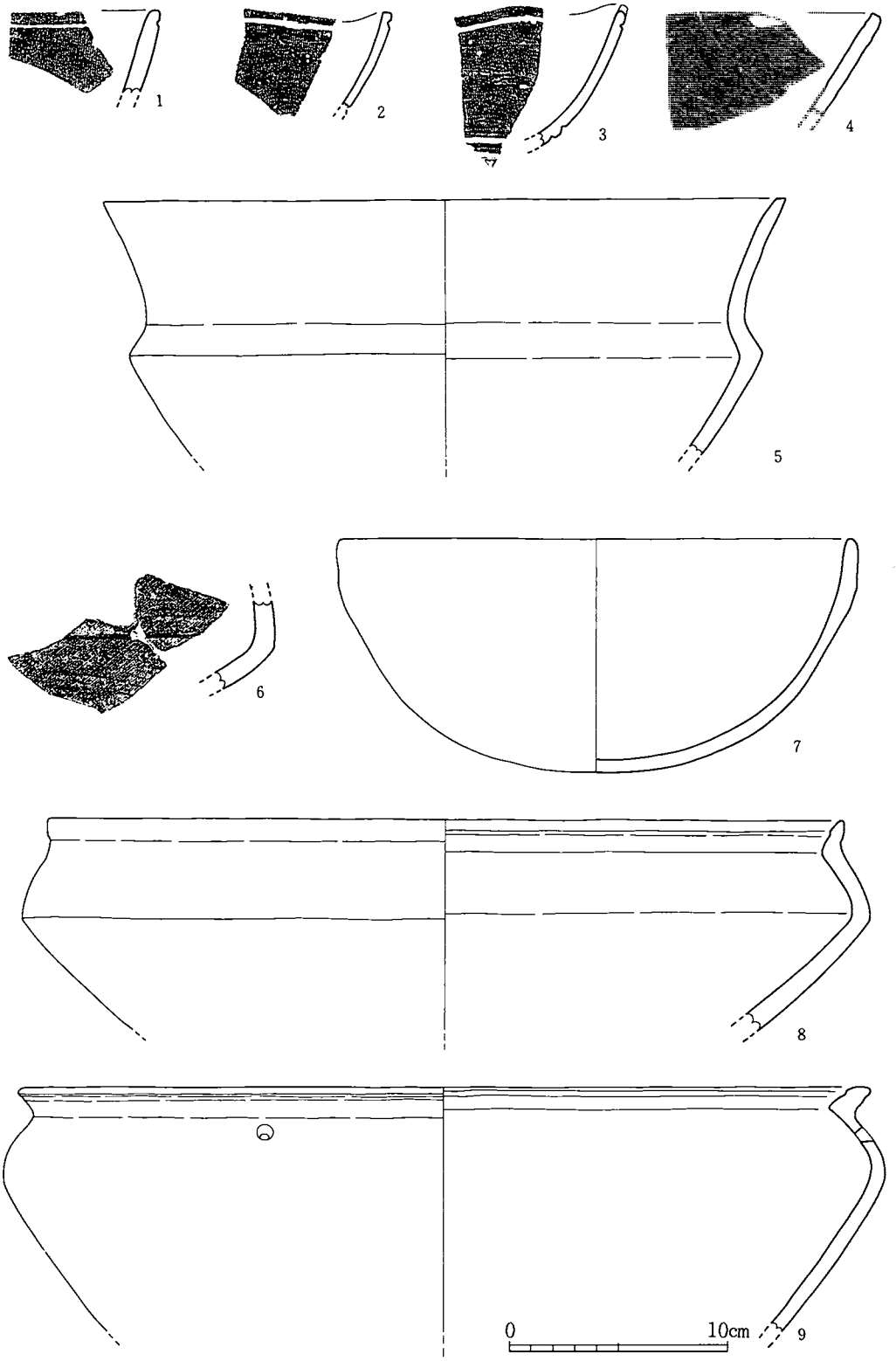
II－C類（第24図・第26図）

II－C類は鉢形土器である。第24図5、第26図29は胴部と頸部の境が「く」の字形に屈曲し、頸部が外反しながら口縁部までのびる。29が5より長い頸部をもち外反が弱い。第26図23・24・27は第24図5の口縁部に類似し、第26図28は29に似た器形である。第26図8～22・25・26は口縁部の小破片であり、器形の判断が困難なものもあるが、胎土等が類似することより鉢形土器の中で扱うことにした。8～10は外反する口縁部が端部近くでさらに外方に屈曲する。11～22は外反する口縁部である。25・26は外反する口縁部の外器面端部が僅かに突出している。

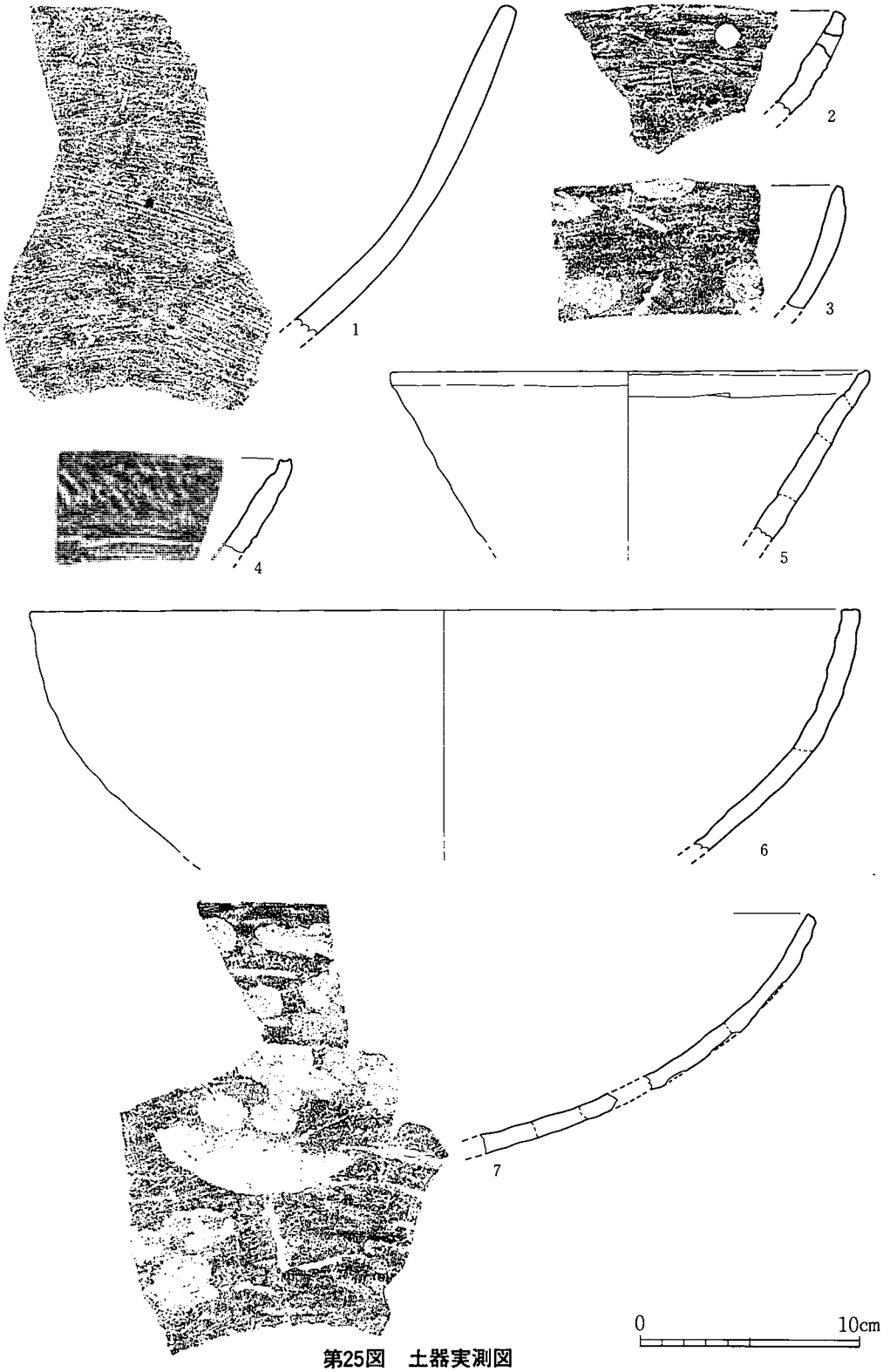
II－C類の器面調整を見ると、粗製なものが僅かにある。第26図9は外器面が磨研、内器面がナデ調整である。第26図10・18・23・29は内器面に磨研を施し、外器面の調整は荒く条痕を残すものもある。29の内器面の磨研は口縁部付近の部分的なものである。これら以外の土器は



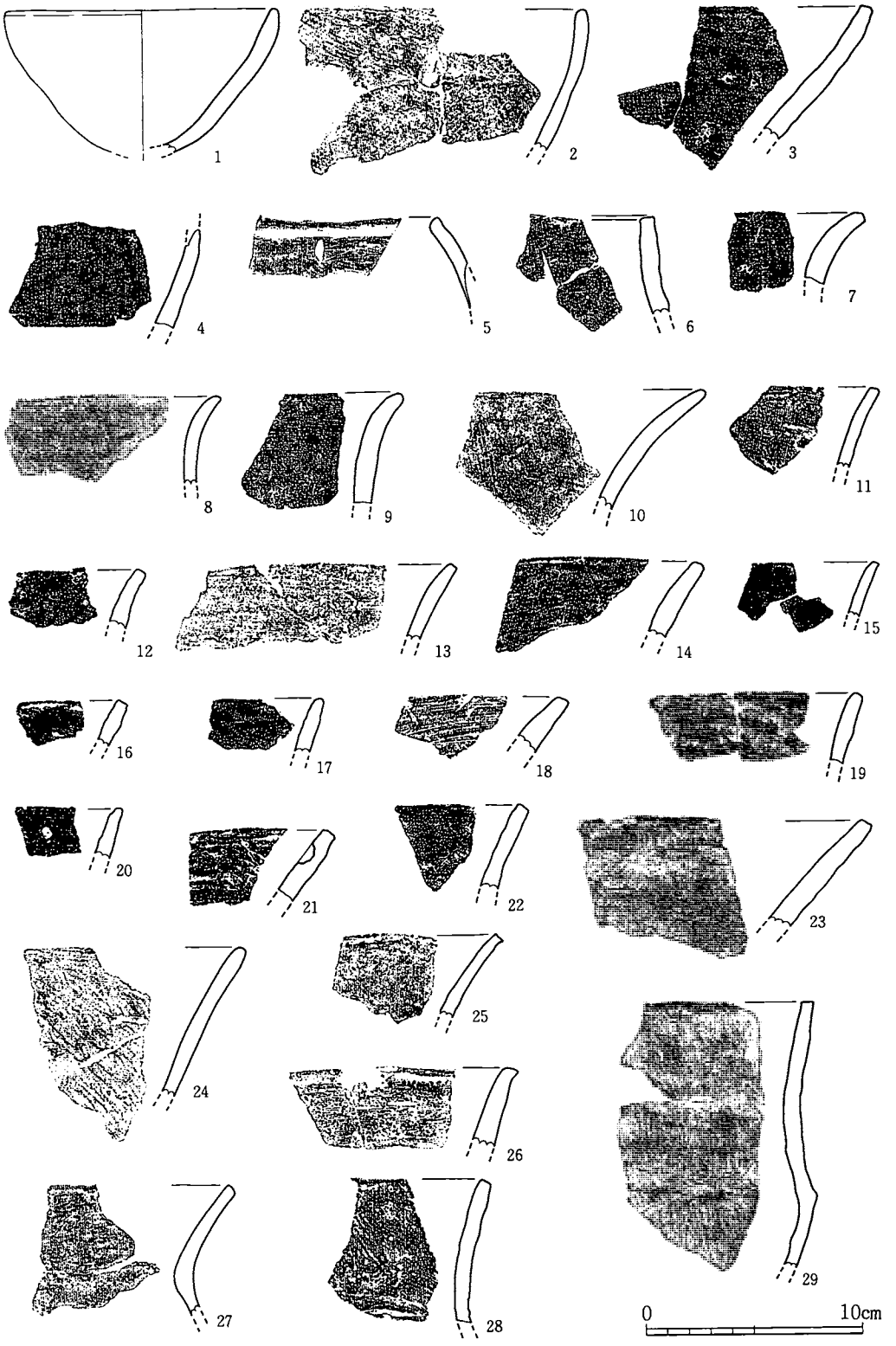
第23図　土器実測図



第24図　土器実測図



第25図　土器実測図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

第26図　土器実測図

内外器面とも丁寧な磨研を施す。

Ⅱ－Ｄ類（第27図～第29図）

Ⅱ－Ｄ類は深鉢土器である。第27図１～４の口縁部はリボン状または鰭状の突起をもつ。第27図５は直立する口縁部に丸くなる胴部が続く。口唇部に半円状の突起がつき、体部に補修孔がある。第27図６～23は外反する口縁部である。14の体部には二箇所の刺突が見られる。第28図19は直線的に外に開く口縁部・胴部で、外器面には器面調整時にできたと考えられる僅かな段がある。第28図１～10・12～15・18は外反する口縁部である。３には補修孔が見られる。11・16・17は口縁端部近くでさらに外方に屈曲する。第29図１～10は口縁端部の外器面が肥厚したり突起状になるものである。他の土器に比べると、条痕が強く残る。８が内傾しながら立ち上がり、それ以外は外反する。第29図16は口縁部寄りの胴部が「く」の字形に屈曲し、口縁部が内傾しながら立ち上がる。内器面の口縁部近くに部分的なケズリが見られ、弱い段をもつ。第29図11・12は内傾しながら立ち上がる口縁部である。第29図13～15の口縁部は丸くなりながら外反する。

Ⅱ－Ｄ類の器面調整は外器面に条痕を強く残す点に共通性がある。内器面も条痕を残すものが多いが、磨研・ナデ調整のものも少数ある。

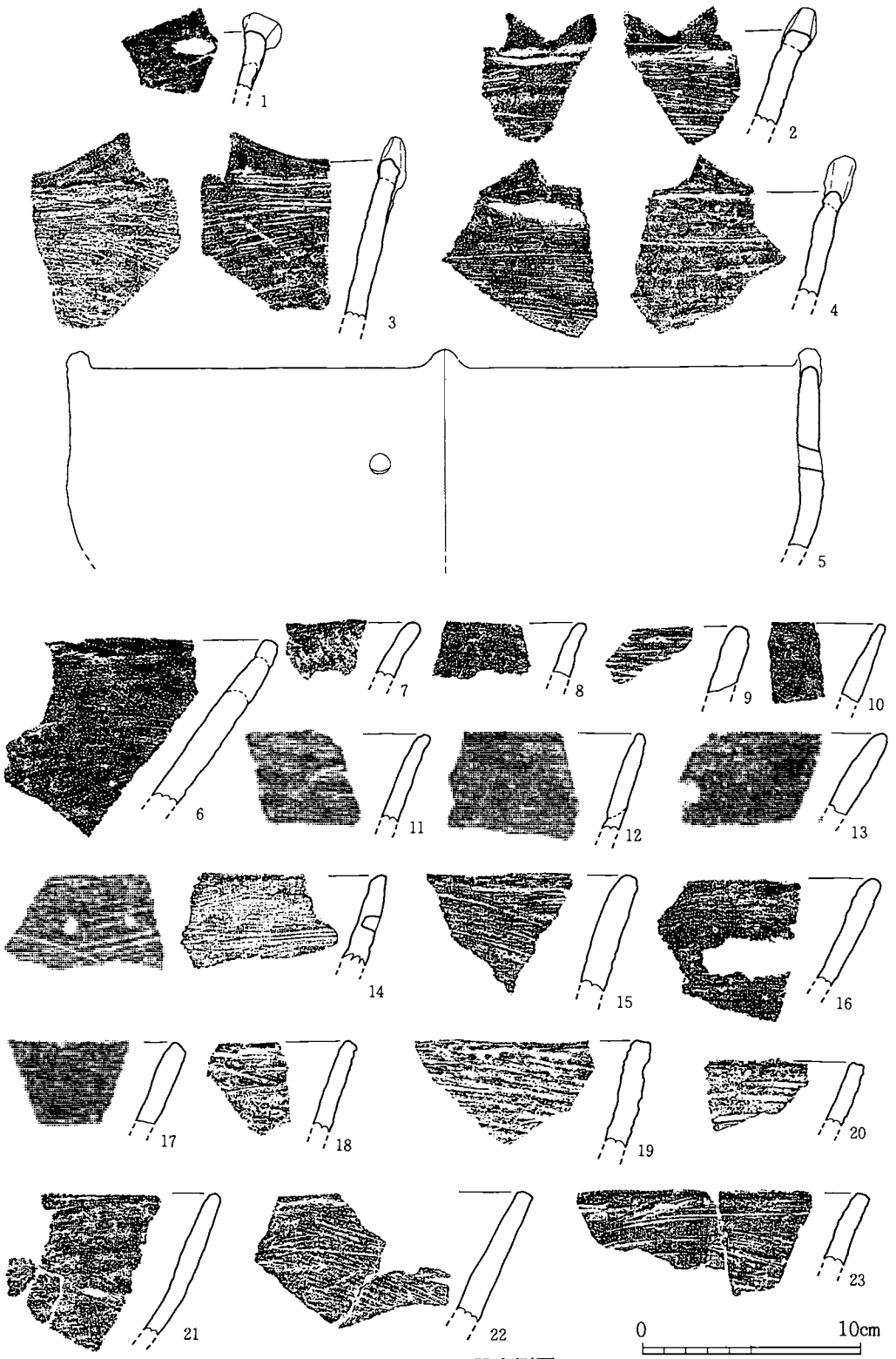
その他の土器（第30図・第31図）

第30図１～３は同一個体と思われ、胴部の外器面には断面形が三角形をした貼りつけ凸帯が三条ある。４～８は外器面に沈線文を施し、口唇部に刻目を入れる。５が波状、６・７が内傾する、８が屈曲する口縁部である。９の口縁部外器面は肥厚し、その部分に貝殻腹縁による押し引き文を施文する。10・11の胴部には横位の沈線文が施され、その間に10は縦位の短沈線、11は刺突文がある。12・13は外器面や内器面に条痕をもつ口縁部で、口唇部に凹線文をもつ。14の頸部は外器面に条痕を地文としてもち、横位の小凸帯を貼りつける。凸帯の上面には刺突文が施される。全体の器形は壺形になると思われる。15・16は外器面に沈線状の条痕がある口縁部で、16にはさらに曲線の沈線文を施す。17・18の頸部・胴部の外器面には幅広い凸帯をもち、その上面に刻目を施す。19の頸部は横位の沈線と刺突文をもつ。24は外器面に斜位の沈線文を施す。20～23は同一個体と思われる壺形土器で、20は胴部から頸部にかけての部分、21は胴部、22・23は底部近くの胴部である。20の口縁部との境の屈曲部下には指オサエが見られる。20～23の外器面には磨研が施され、赤色の彩色が認められる。第31図１はキャリパー状に屈曲する口縁部であり、上端部が肥厚している。外器面には条痕が残る。

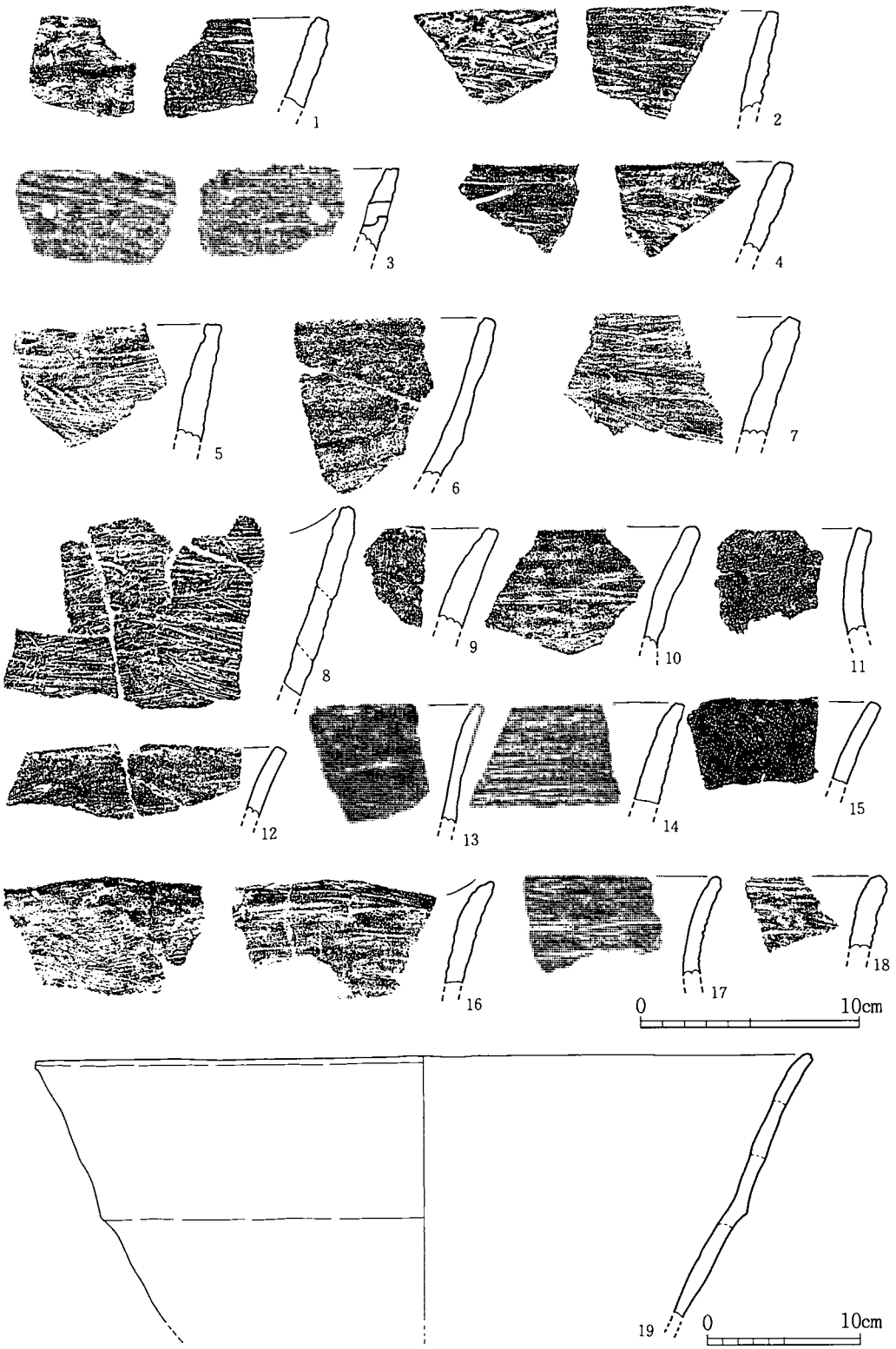
胴部（第31図）

２～５は胴部片であり、５の内外器面がナデ調整を行う以外は外器面に条痕を残す。特に４は条痕が著しい。２・３は「く」の字形に屈曲する。

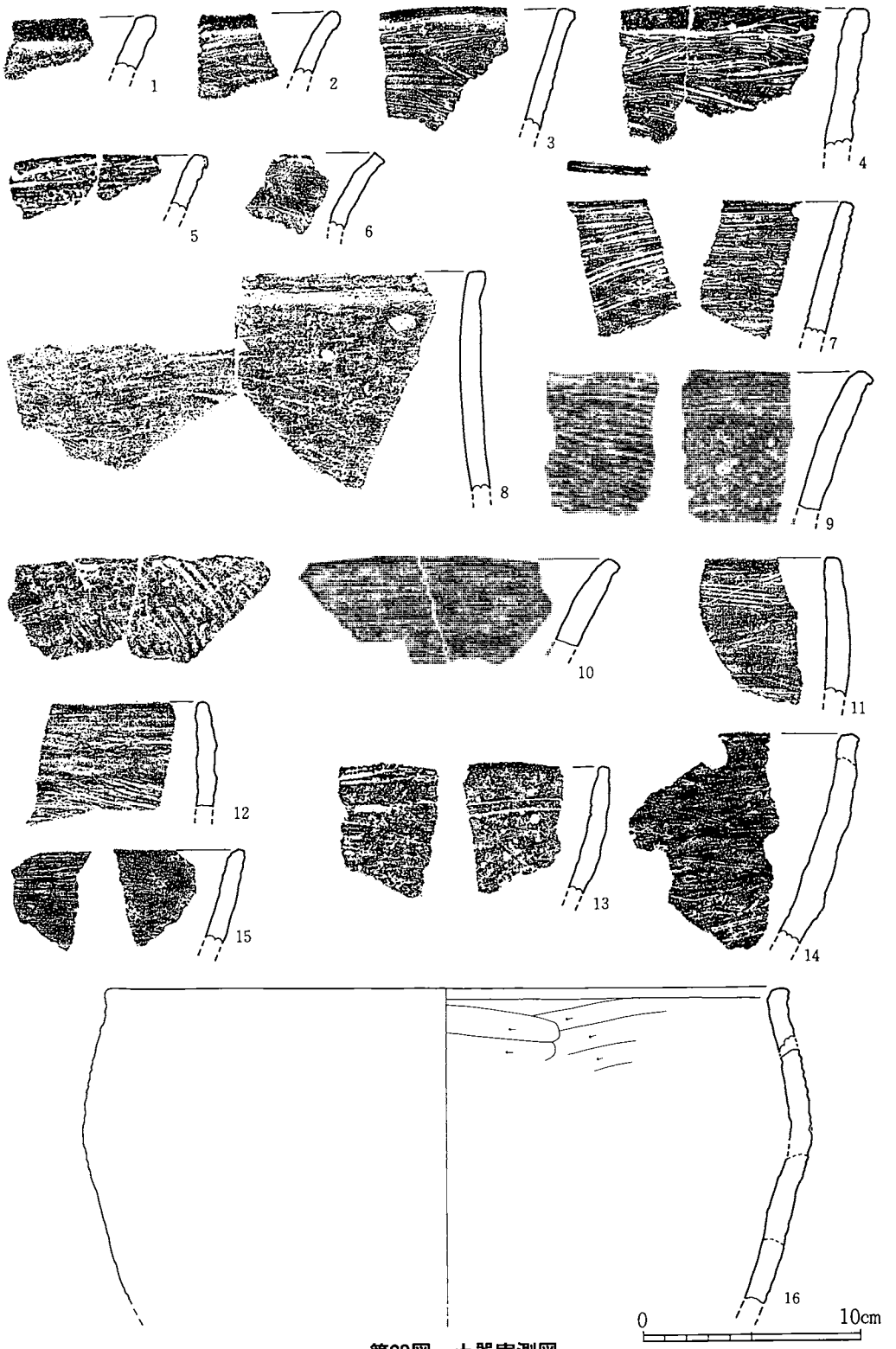
底部（第32図）



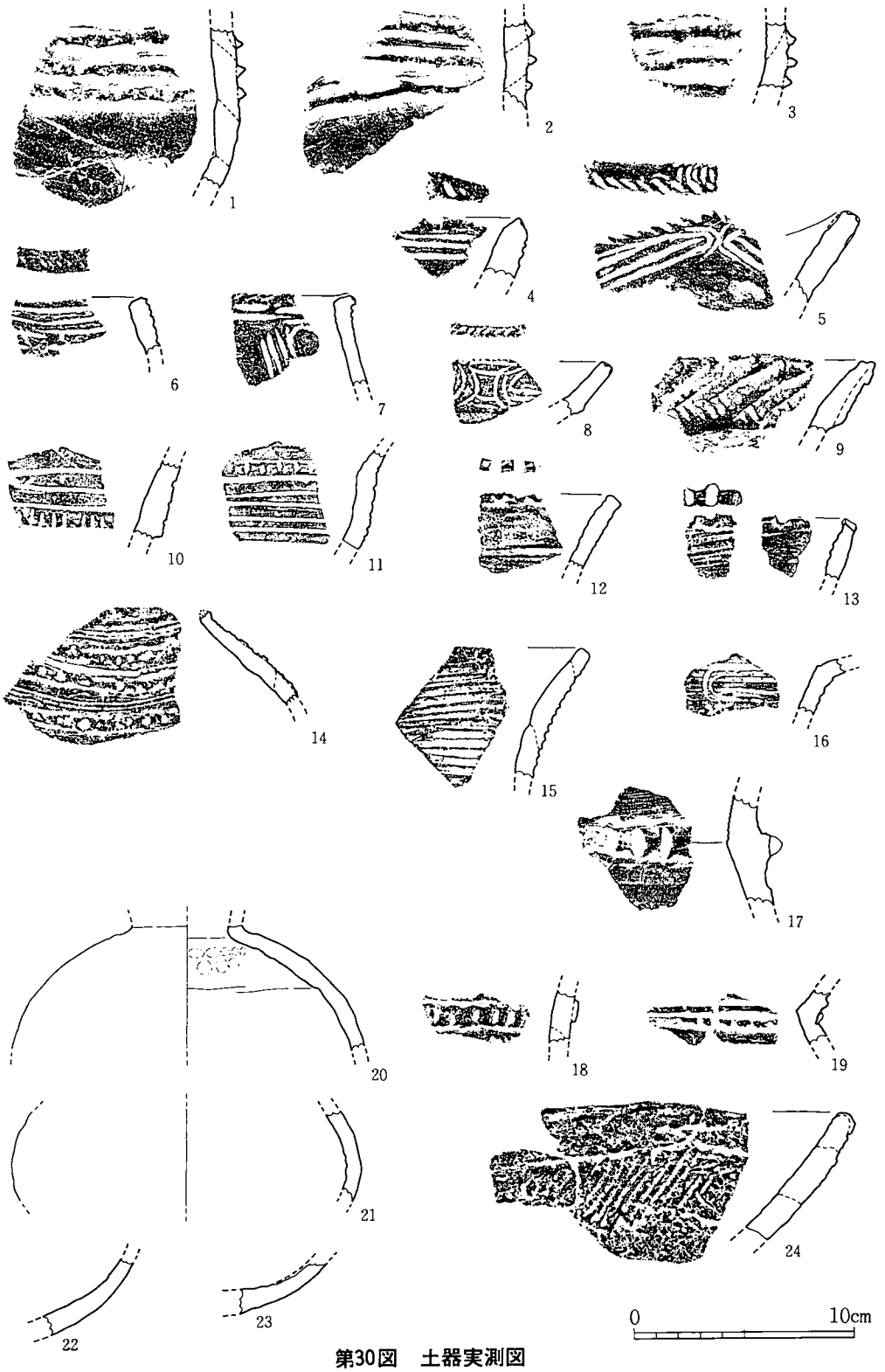
第27図　土器実測図



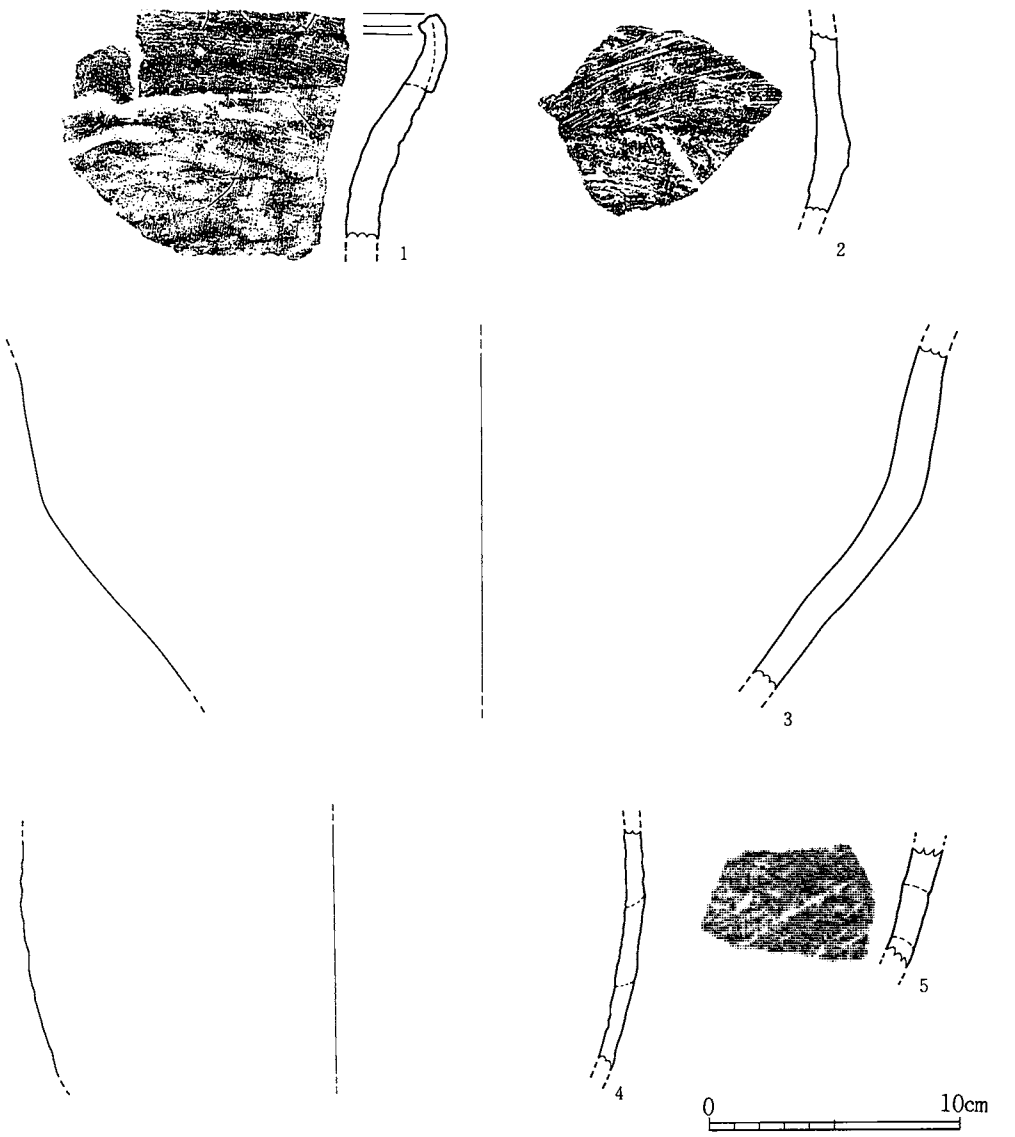
第28図　土器実測図



第29図　土器実測図



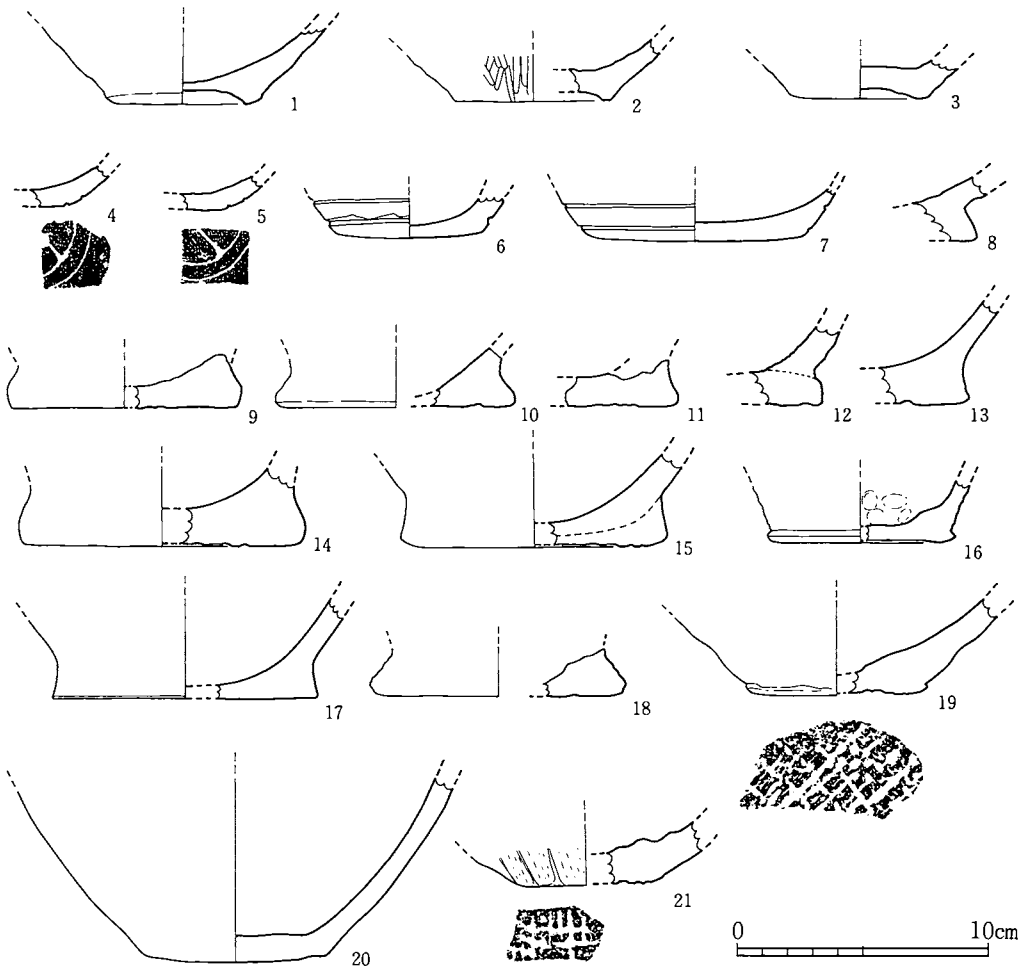
第30図　土器実測図



第31図　土器実測図

1～3は弱い上げ底になり、内器面・外器面に磨研が施される。Ⅰ類土器の底部と考えられる。4～5の内器面・外器面には磨研調整があり、外器面に横位の沈線が二条ある。II－A類土器の底部と考えられる。8～18は平底の底部で、胴部との境が「く」の字形になり端部が突出する。その突出部は角をもったり、丸くなったりしている。16の内器面には指オサエがある。II類土器の深鉢・鉢形土器の底部と思われる。19～21は端部が突出しない平底の底部で、19・21の外底部には網代痕がある。

(3)土製品について（第33図）



第32図　土器実測図

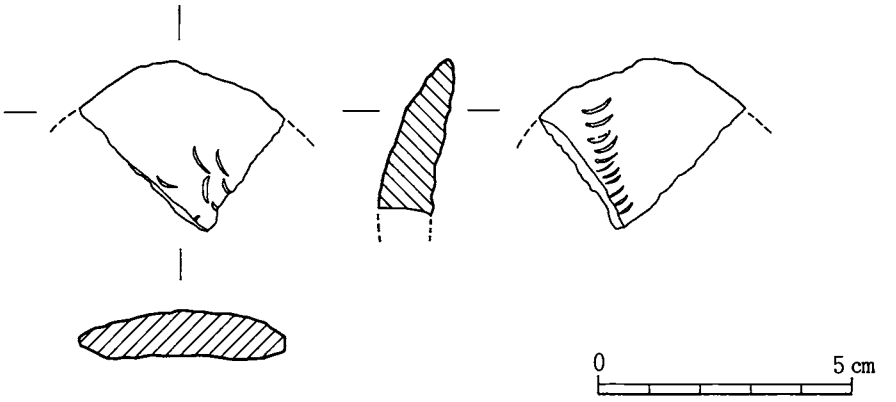
一部分しか残存していなく、全体の平面形は円形か楕円形を呈すると思われる。横断面形を見ると、先端部が細くなる偏平な楕円形を呈し、僅かに表面側が膨らみ、裏面側が窪む。表裏面には爪形文状の文様を沈線で表現する。裏面の文様は縦方向に並んでいる。

⑷石器について

III層下部～IVａ層より出土した石器は下記の通りである。石鏃（58点）・石匙（10点）・スクレイパー（６点）・打製石斧（64点）・磨製石斧（１点）・磨石類（49点）・敲石（27点）・石皿（８点）・礫器（78点）・円盤状石器（５点）・石錘（１点）・石錐（３点）・ペッティングストーン（１点）・異形石器（２点）・二次加工剝片（11点）・使用痕のある剝片（19点）・石核（12点）・剝片及び破片（3246点）・自然石（342点）が出土した。

石鏃

分布状況（第37図）　石鏃はIV区のＯ－15・Ｐ－14グリッドに集中する傾向がある。Ｉ区・II



第33図　土製品実測図

区に分布している石鏃は散在状態を呈している。

出土した石鏃はＩ類－平基無茎鏃、II類－凹基無茎鏃に分類でき、II類は平面形でＡ～Ｃに細分した。

Ｉ類（第34図）

Ｉ類の石鏃は５点出土した。１～４がＩ類の石鏃である。平面形は１・４が五角形に近く、２の右側縁部が丸くなり、３が二等辺三角形になる。４は細身の大型品である。

II－Ａ類（第34図）

II－Ａ類は平面形が正三角形を呈するものであり、５点出土した。５・７とも基部の抉り込みは浅い。

II－Ｂ類－１（第34図・第35図）

II－Ｂ類－１は平面形が幅広い二等辺三角形を呈するもので、35点が出土している（第34図６・８～14、第35図１～６）。基部の抉り込みを見ると、第34図６・11・14、第35図２は浅く、第34図８・第35図３は深い。これら以外のものが両者の中間的な抉り込みをもつ。

II－Ｂ類－２（第35図）

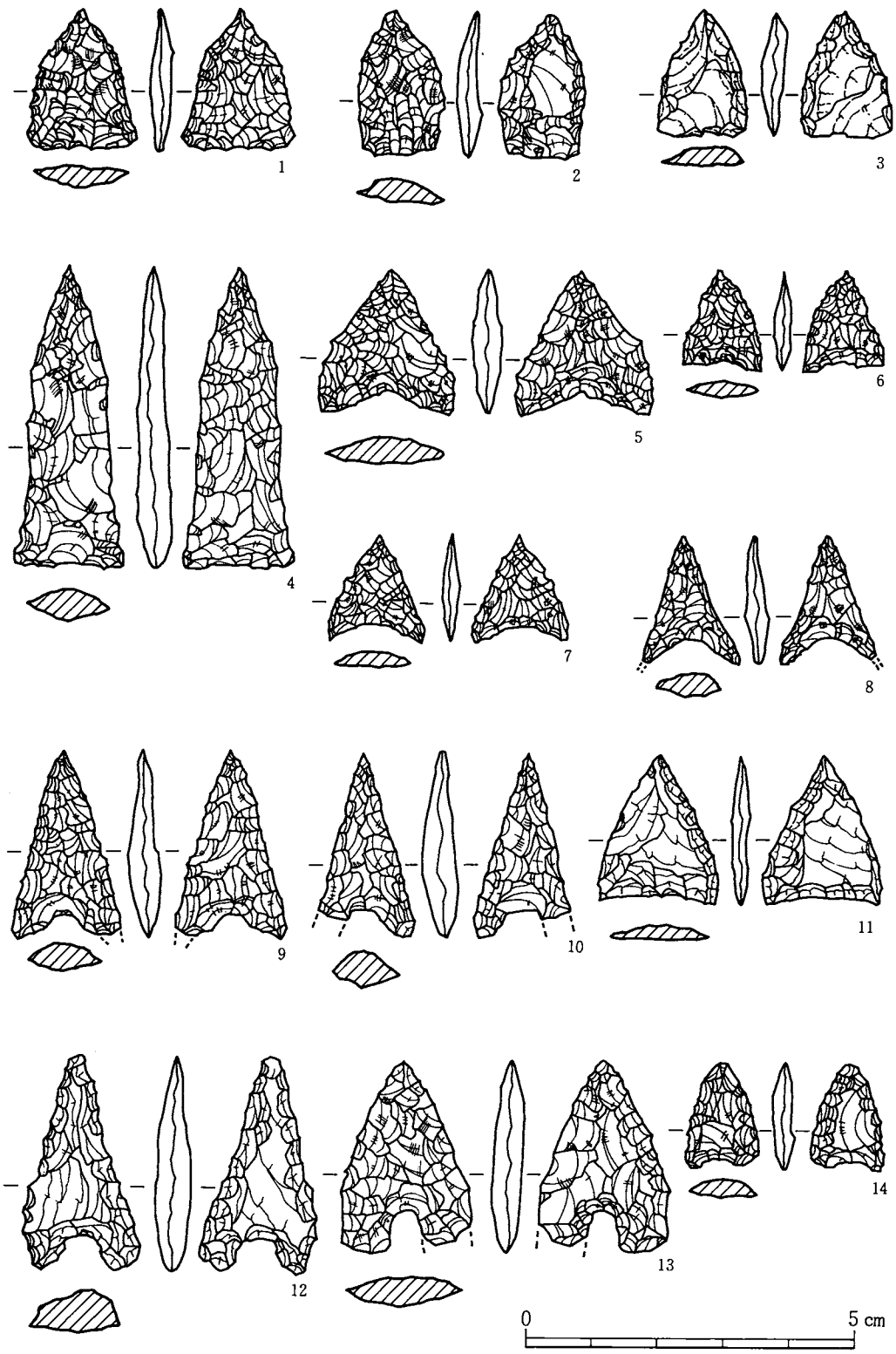
II－Ｂ類－２は平面形が細身の二等辺三角形を呈するものである（７～９）。７点が出土した。基部の抉り込みは７・８が深く、９が浅い。

II－Ｃ類（第35図）

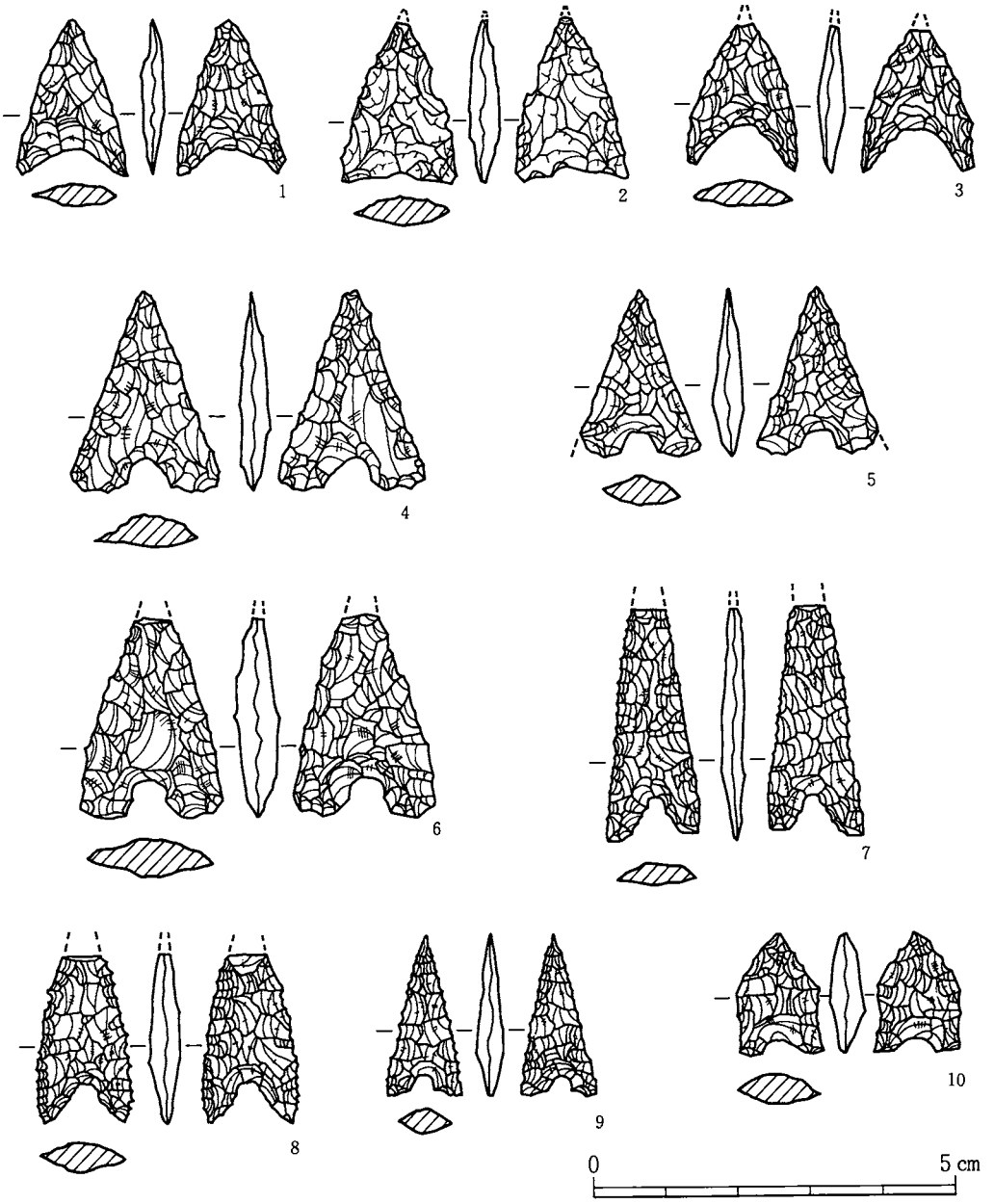
II－Ｃ類は平面形が五角形を呈するものである。10の１点が出土した。基部の抉り込みは浅い。

以上述べた他に、分類不可能な石鏃が５点出土している。

石鏃の欠損状況をａ～ｇに分けて見ると、第１表のようになる。ａは完形のもの(16点)、ｂは先端部を欠損するもの（６点)、ｃは先端部から体部にかけての箇所を欠損するもの（３点)、



第34図　石器実測図

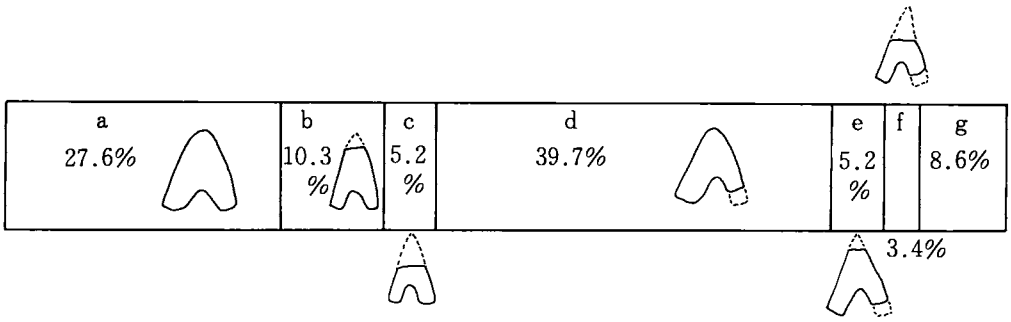


第35図　石器実測図

dは基部を欠損するもの（23点）、eは基部と先端部を欠損するもの（3点）、fは基部と先端部から体部にかけての箇所を欠損するもの（2点）、gはその他に欠損箇所があるもの（5点）。欠損しているものでは、d（基部欠損）のものが最も多く半数以上を占める。

石匙

分布状況（第37図）　石匙はI区・III区・IV区に分布しており、点在状態を呈している。



第１表　石鏃欠損状況

出土した石匙は、つまみ部と体部の位置関係でⅠ類～Ⅲ類に分類した。

Ⅰ類（第36図）

Ⅰ類はつまみ部と体部の主軸が平行するもので、４点が出土している。１・２・４・５がⅠ類の石匙である。１・２・４は縦長剥片を素材としている。１・４・５は縁辺部より小さな剥離を加え、刃部を形成している。２は側縁部を加工して刃部としている。体部の平面形を見ると、１は楕円形を呈する小型品、２は縦長で長身になると思われ、４・５は二等辺三角形を呈する。

Ⅱ類（第36図）

Ⅱ類はつまみ部と体部の主軸が直交するものであり、５点が出土した。３・６～８がⅡ類に属し、横長剥片を素材にしている。その素材の下端部に丁寧な細かい調整剥離を行っている。体部の平面形は、３が三角形、６～８が凸レンズ状を呈する。６～８は体部左右端部の片方が欠損している。７の体部片面には部分的に自然面が残る。

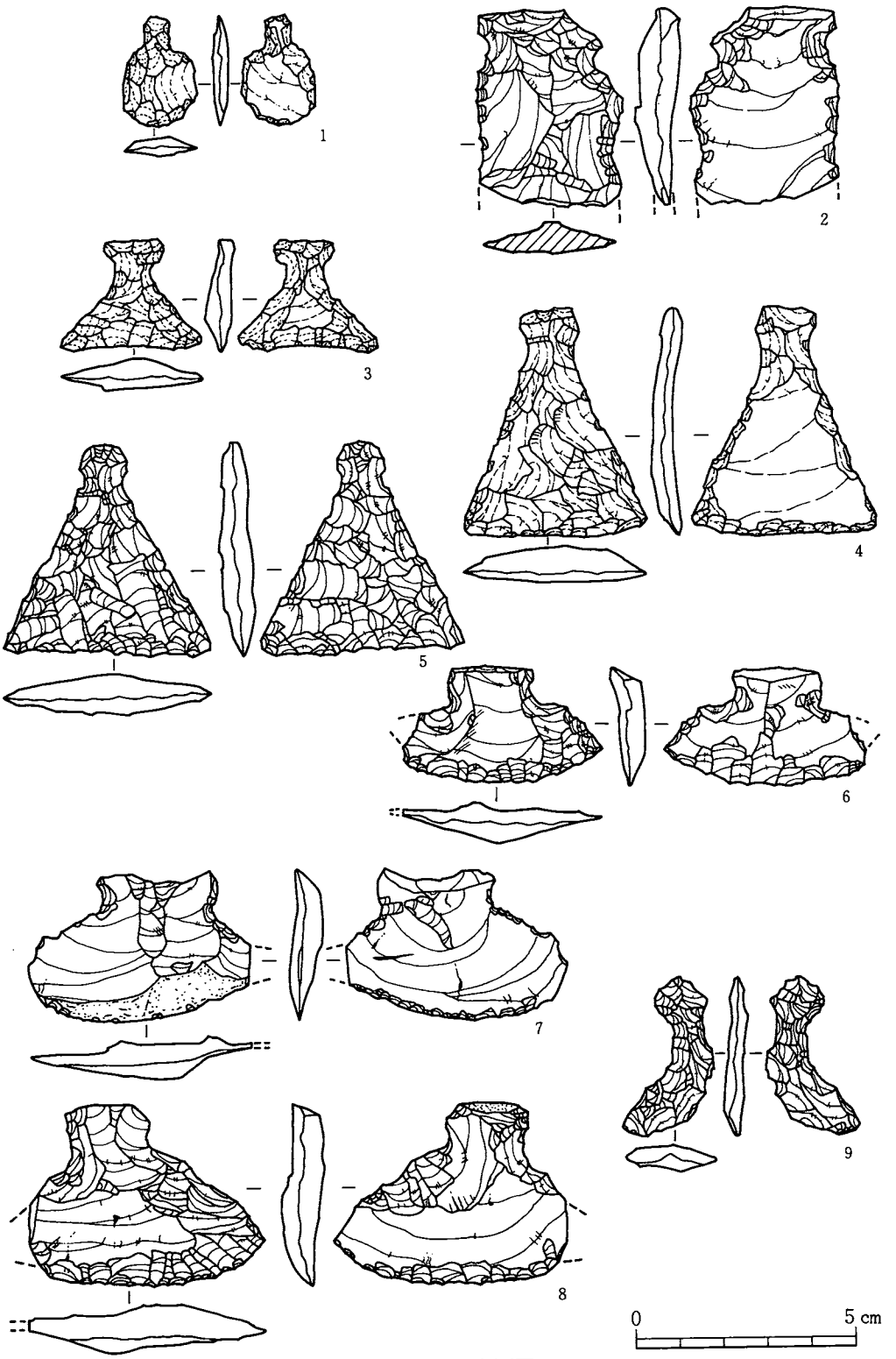
Ⅲ類（第36図）

Ⅲ類はつまみ部と体部の主軸が斜交するものである。Ⅲ類に属するのは９の１点が出土した。９の体部は細身・長身であり、丸くなる。

スクレイパー（第38図）

分布状況（第37図）　スクレイパーは他の石器があまり分布しないⅠ区に散在状態を呈して分布している。

１～３・５・６は縦長剥片を素材にしたものである。１～３は体部を欠損しており、残存部を見ると、１・３が側縁部、２が下端部に細かな調整剥離を行い刃部を作り出している。５は細長く、下端部が尖る。左右側縁部に小さな剥離を加え刃部を形成している。打瘤が観察できる。６は不整な四角形を呈し、下端部及び側縁部を調整して刃部を作り出している。４は横長剥片を素材にし、平面形が略楕円形を呈する。下端部に細かい剥離を加え刃部としている。

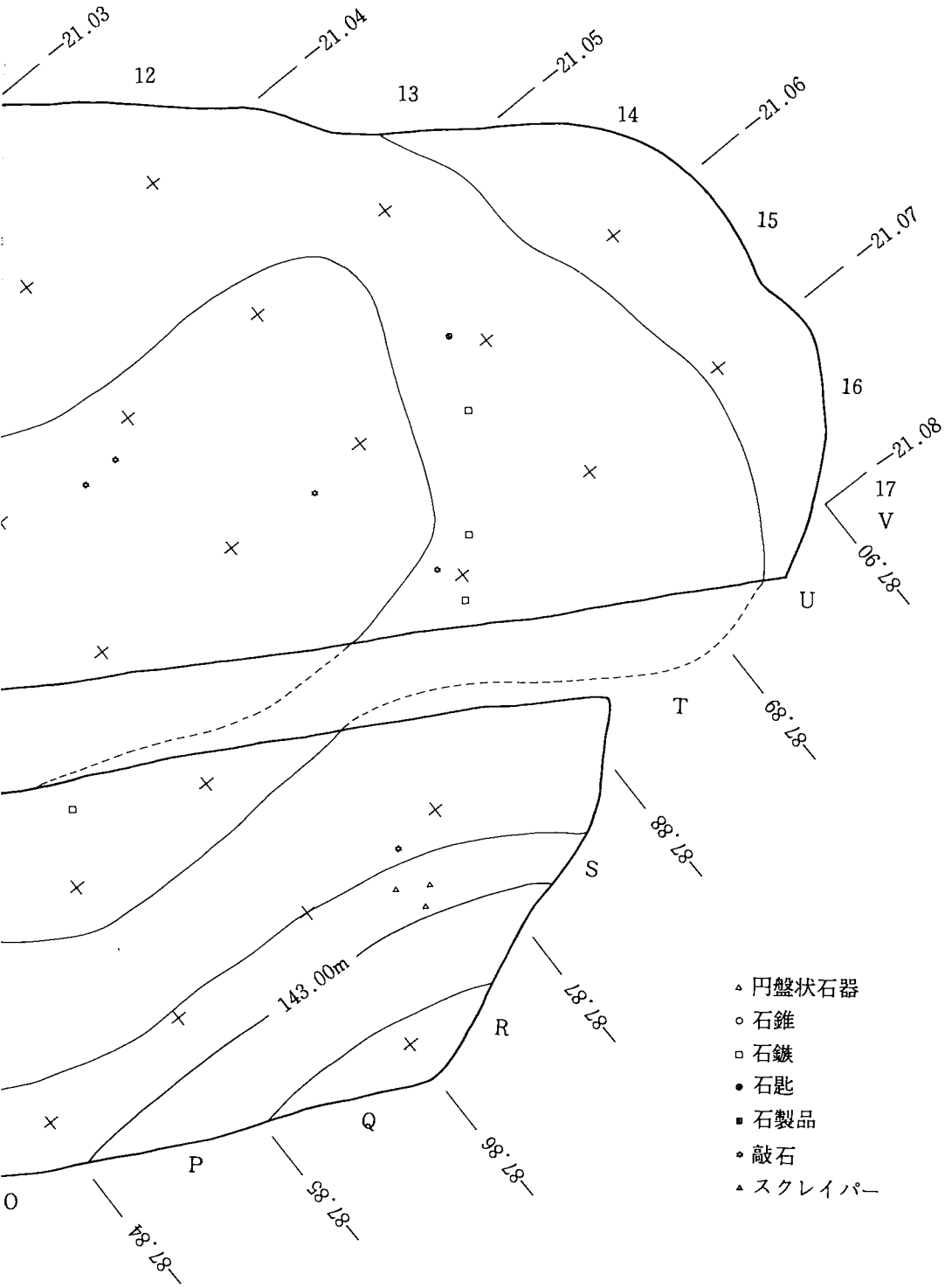


第36図　石器実測図

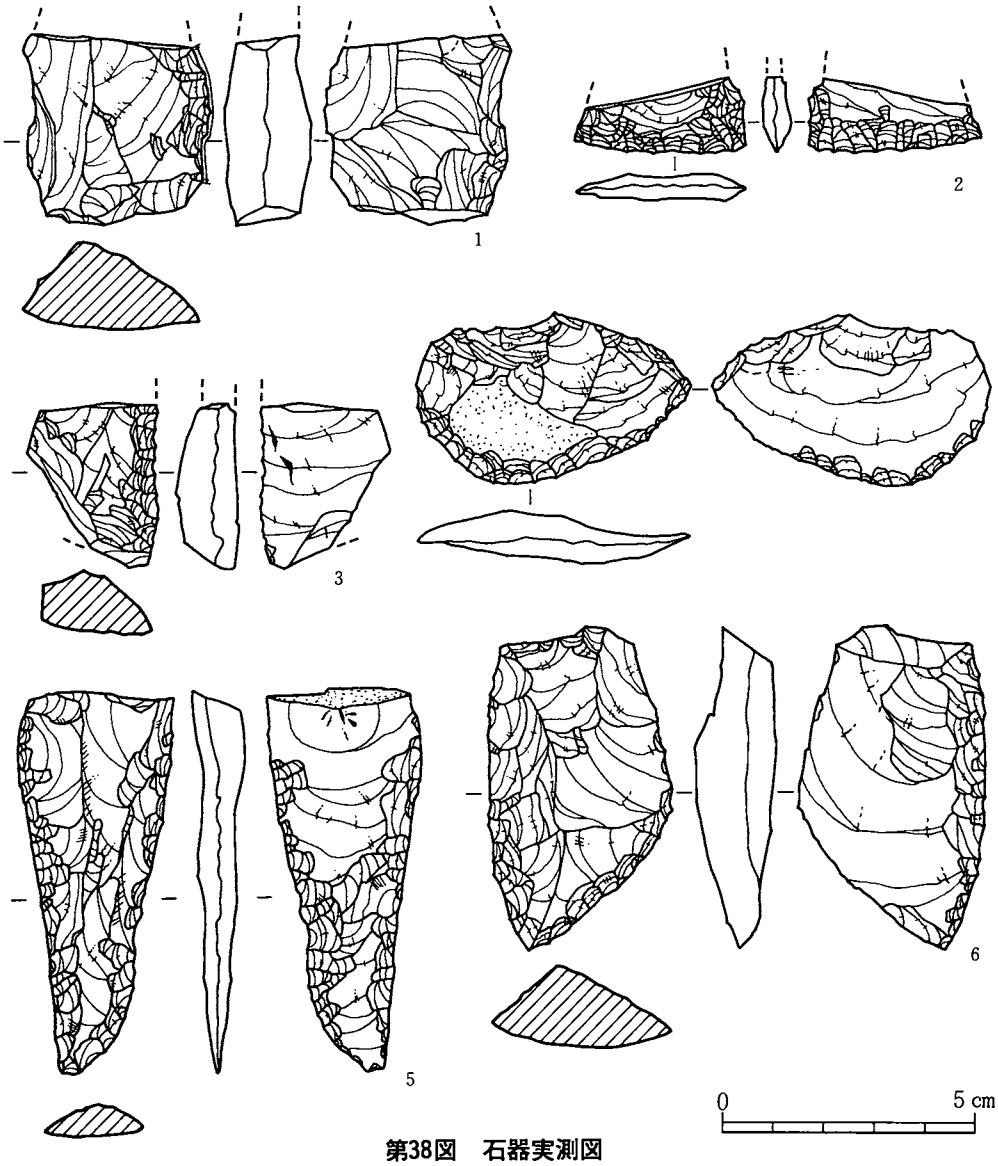
Ⅱ区
Ⅰ区
2
3
4
−20.94
−20.95
C
87.72
D
87.73
E
0
20m

Ⅲ区
Ⅳ区
-20.96
-20.97
-20.98
5
6
7
143.00m
144.00m
145.00m
F
G
H
I
J
87.75
87.76
87.77
87.78

8
9
10
11
-21.00
-21.01
-21.02
145.00m
144.00m
K
L
M
N
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83



第37図Ⅲ層・Ⅳa 層出土石器分布図



第38図　石器実測図

石錐（第39図）

分布状況（第37図）　石錐はIII区のＰ－12、IV区のＯ－14グリッドに分布している。

１～３が平面形が三角形を呈する石錐である。１・３は細身で、２は幅広い。２の上端は左右に突出し、３の先端部はするどく尖る。錐部の断面形はすべて三角形を呈する。

ペッティングストーン（第39図）

分布状況（第37図）　ペッティングストーンはIV区のＲ－12グリッドで出土した。

４の平面形は楕円形を呈する。表裏面や縁部が擦られている。

異形石器（第39図）

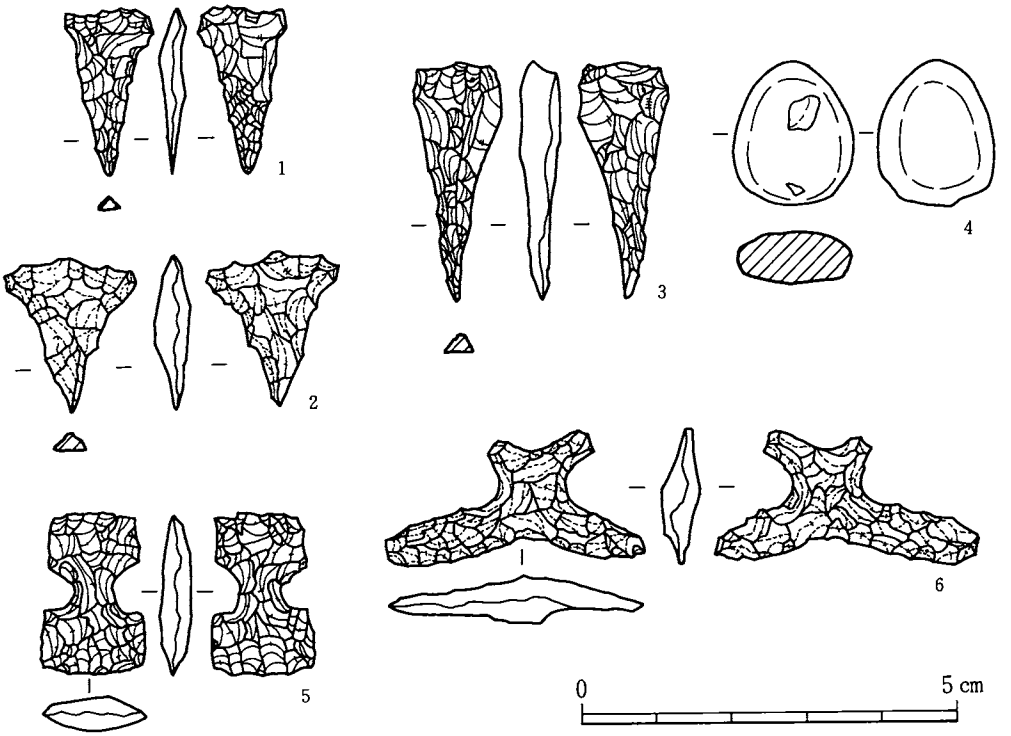
分布状況（第37図）　異形石器は5がIV区のO－15グリッド、6がI区のG－6グリッドより出土した。

5は長方形の長辺中央部を左右より抉られており、「T」の字を上下両方より合わせた形状をしている。6の平面形は「X」字状を呈しており、四方向に脚が突出する。上方の二脚は短く、下方の二脚は長い。上下それぞれの脚は長さのバランスがとれていない。

二次加工剥片（第40図）

分布状況（第43図）　二次加工剥片はIII区・IV区に多く分布し、I区には少数が分布している。分布状況は散在状態を呈している。

1～5が二次加工剥片である。1・2は縦長剥片の側縁部に加工が見られる。断面形が三角



第39図　石器実測図

形を呈する。3は不整形な平面形を呈し、下端部に加工をしている。片面に自然面が部分的に残る。4は体部が欠損しており、残存部の左右側縁部に加工を加えている。5は不整形な平面形を呈し、下端部に加工が見られる。

使用痕のある剥片（第40図）

分布状況（第43図）　使用痕のある剥片は、二次加工剥片の分布と似たような分布状況であ

り、III区・IV区に散在状態を呈して分布している。

６～11が使用痕のある剥片である。６～９・11は縦長剥片の側縁部に使用痕が認められる。６・８・９・11には自然面が残っている。10は横長剥片を素材にしたもので、下端部及び側縁部に使用痕がある。出土した使用痕のある剥片は側縁部に使用痕をもつものが殆どである。

石核（第43図）

分布状況（第43図）　石核はIII区のＳ－15、IV区のＯ－15グリッドで出土した。

１は表裏面より剥離を行い、横長剥片を剥ぎ取っている。表裏面とも自然面が残っている。２は縁辺部よりの剥離で、横長剥片を取っている。出土した石核の中で、縁辺部より剥離を行っているのが大半を占める。

打製石斧

分布状況（第43図）　打製石斧の分布範囲はＩ区・III区・IV区であり、全体的に散在状態を呈した分布状況を示す。

出土した打製石斧は次のＩ類～Ｖ類に分類した。

Ｉ類（第42図）

Ｉ類は平面形が短冊形になるもの。１～５がＩ類の石斧である。１～５の側縁部の基端部寄りの部分には、つぶれが観察できる。刃部を見ると、２が直刃（平面形）・両刃（断面形）、４・５が偏刃・両刃である。２・４・５では刃部のつぶれがある。１・４の基部片面には自然面が残っている。

II類（第42図）

II類は平面形が撥形になるものである。６・７がII類に属する。６の側縁部では広い範囲につぶれがある。刃部は両者とも円刃（平面形）・両刃（断面形）であり、つぶれがある。自然面は６が片面に部分的に、７が両面に残っている。

III類（第44図）

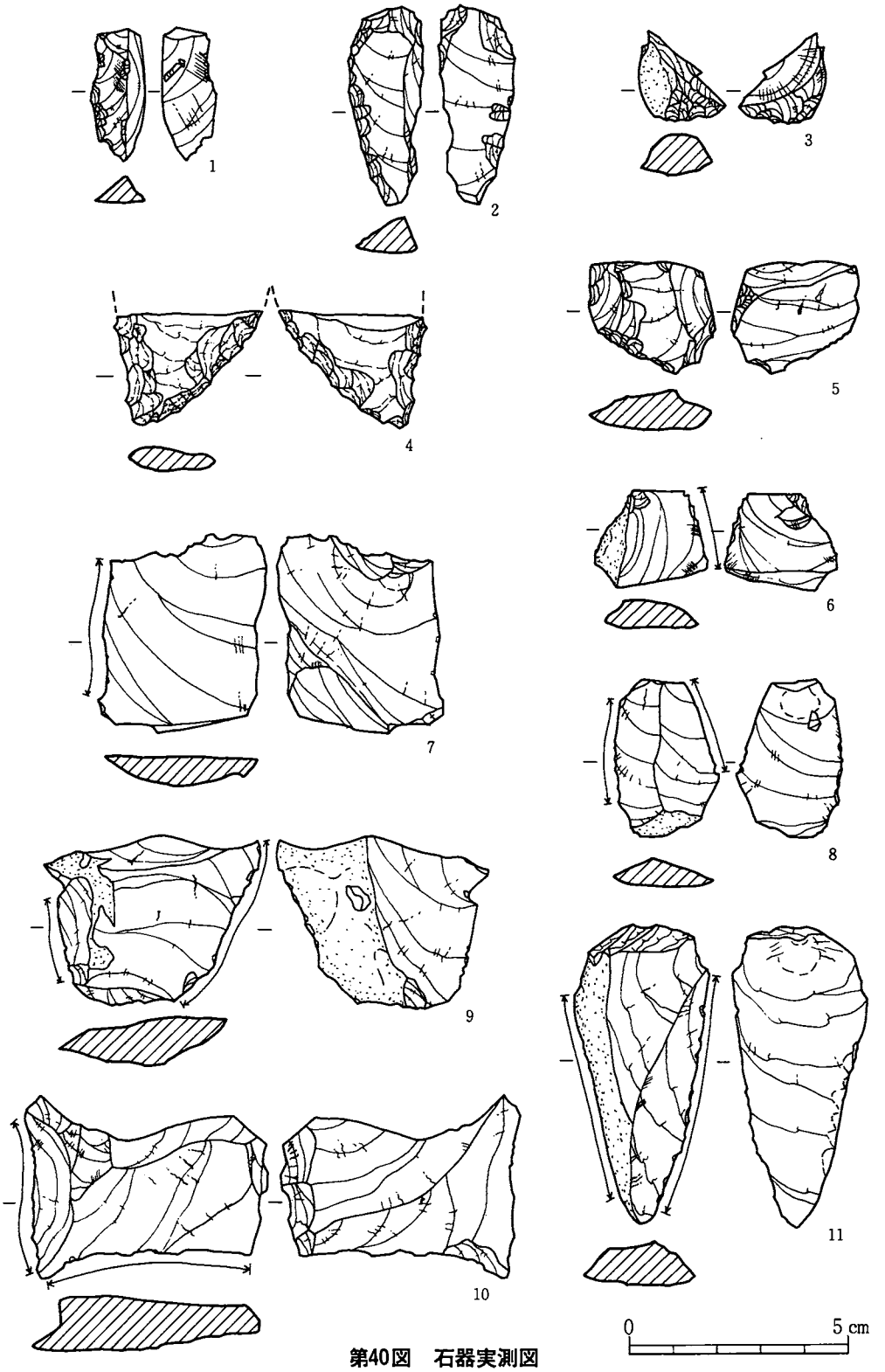
III類の平面形は、基部の中央部が最も広く、両端にいくにつれて幅狭くなり端部が丸くなる。１・２はIII類の石斧で、側縁部の基端部寄りの箇所につぶれが認められる。両方とも基部片面に自然面がかなり残っている。刃部の断面形を見ると、１が両刃、２が片刃である。

IV類（第44図）

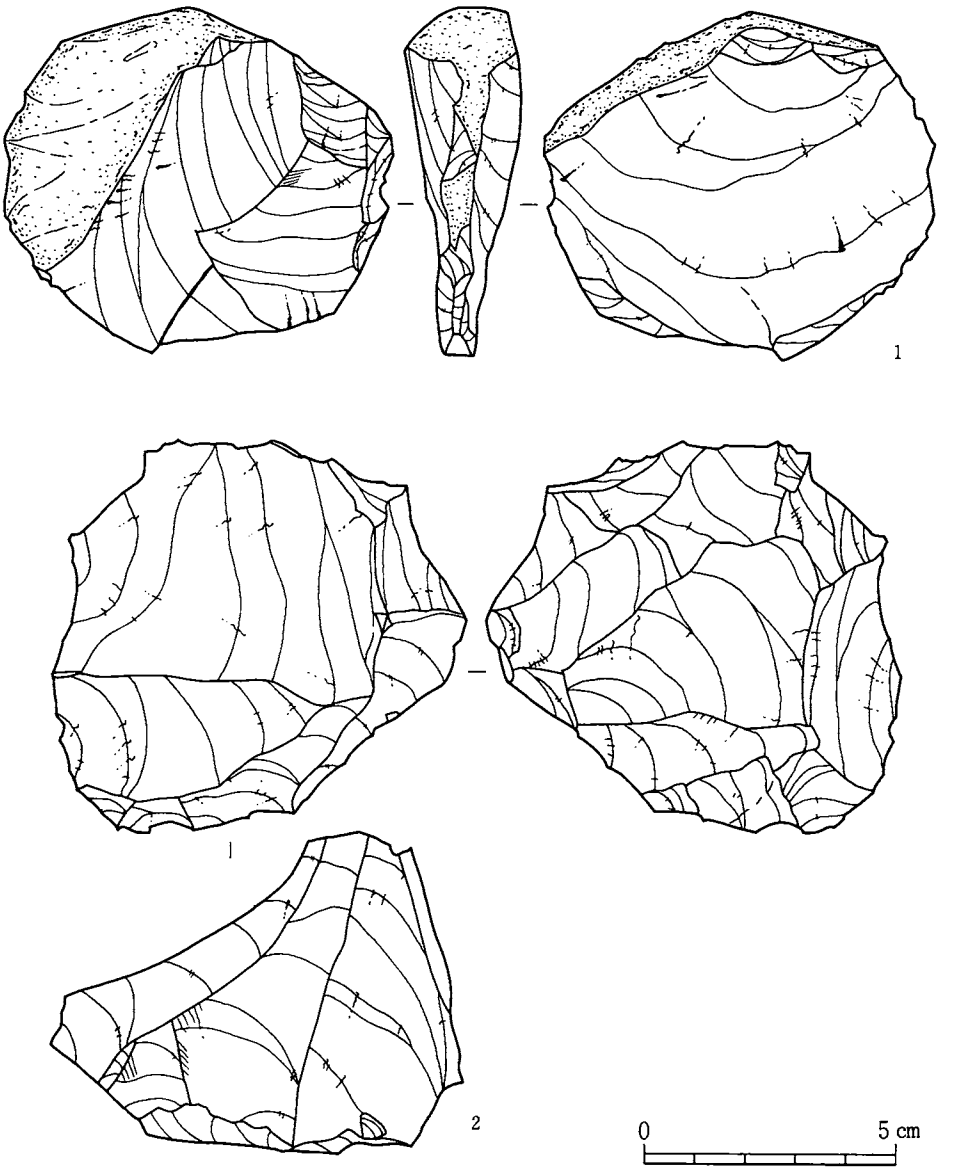
IV類は基部の基端部寄りの部分が細くなる平面形を呈するもの。３～５がIV類で、基端部近くの側縁部にはつぶれが観察できる。刃部は３が直刃に近いもの（平面形）・片刃（断面形）、５が円刃・両刃である。３は基部と基端部寄りの細くなる部分とが斜交する。３・４には自然面が片面に残る。

Ｖ類（第44図）

Ｖ類の平面形は、基端部寄りの基部が両側面よりくびれている。６がＶ類に属し、くびれた



第40図　石器実測図

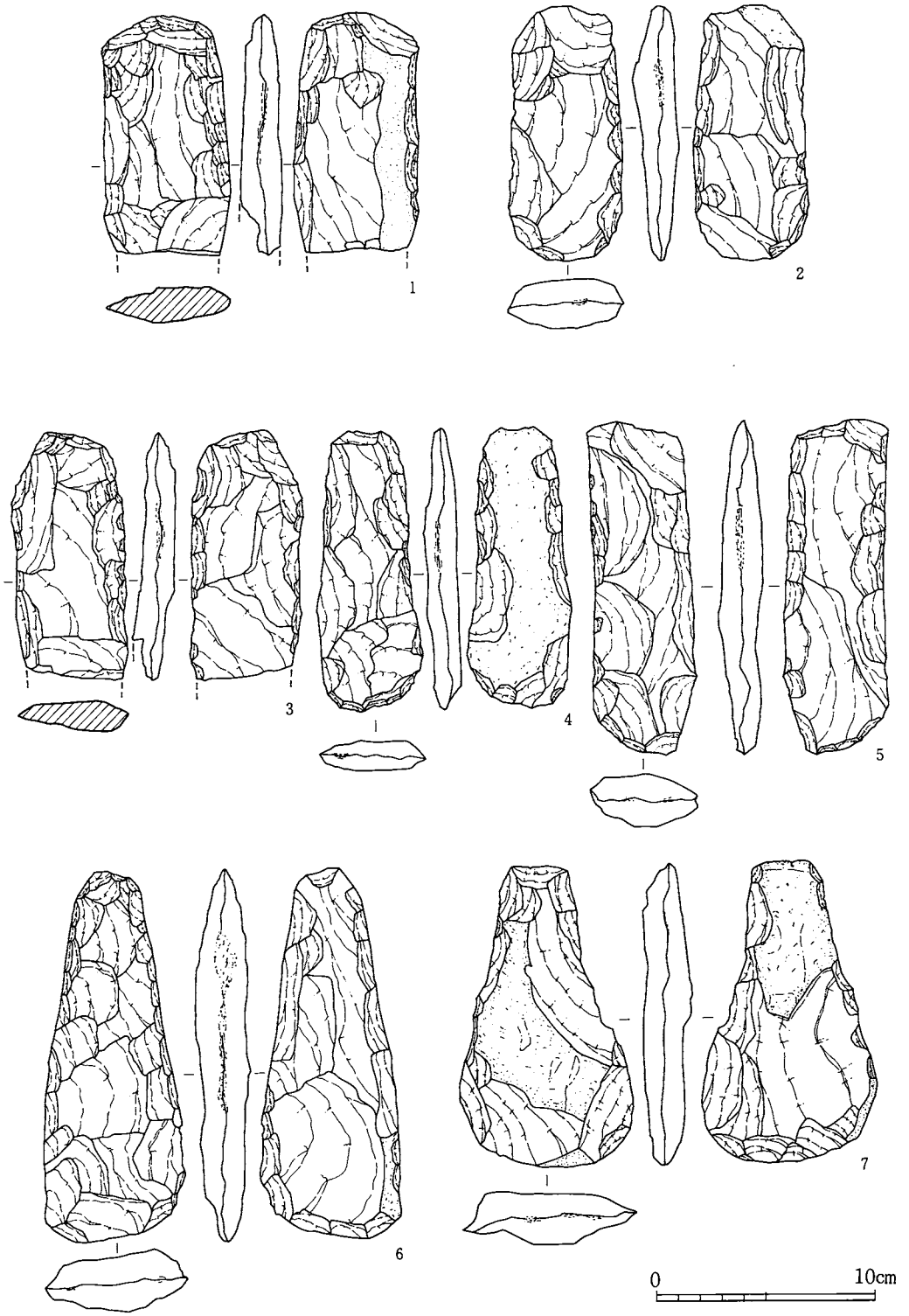


第41図　石器実測図

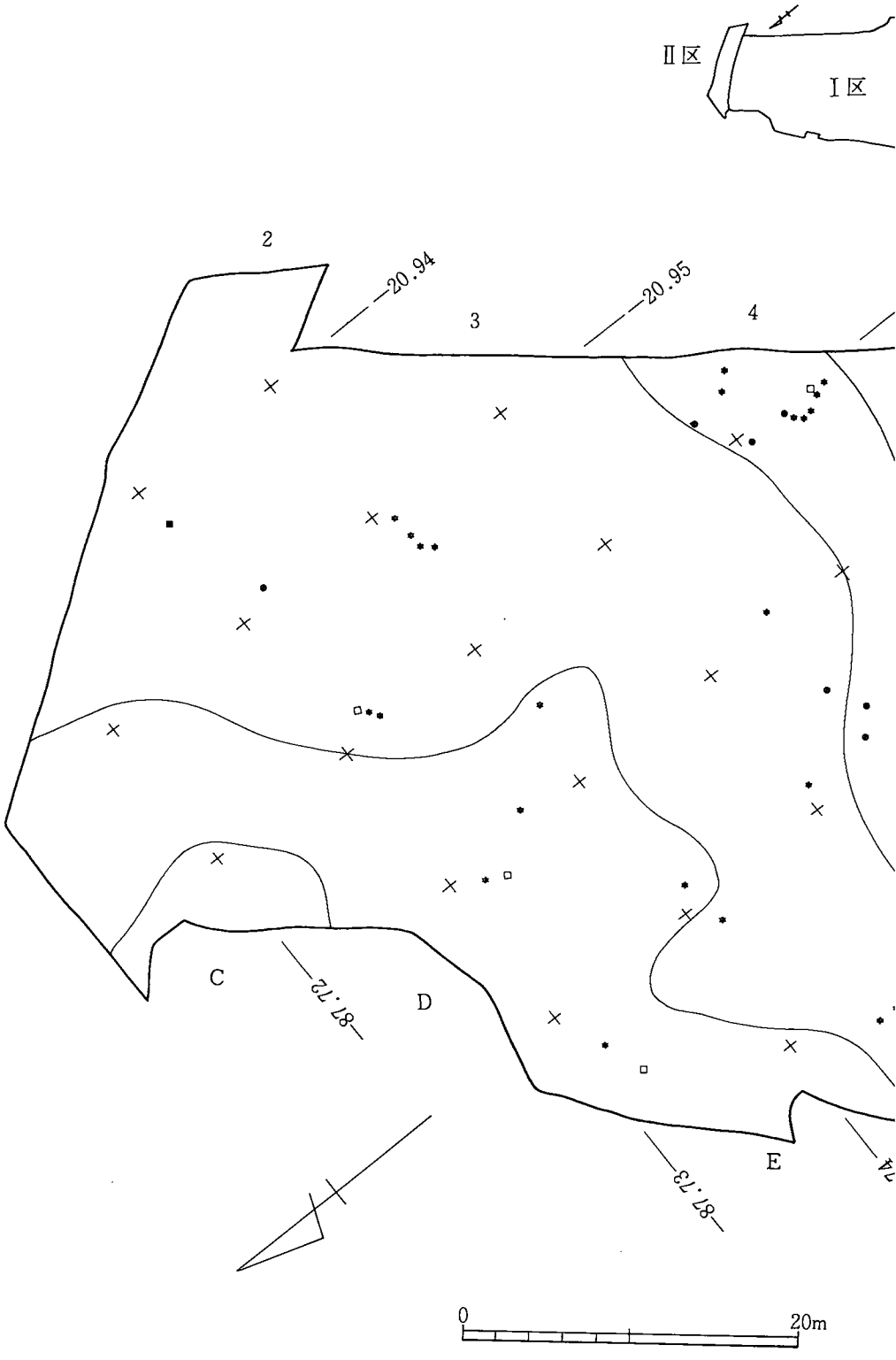
部分につぶれがある。刃部は円刃（平面形）・両刃（断面形）で、つぶれが観察できる。くびれ部より上方に自然面が部分的に残る。

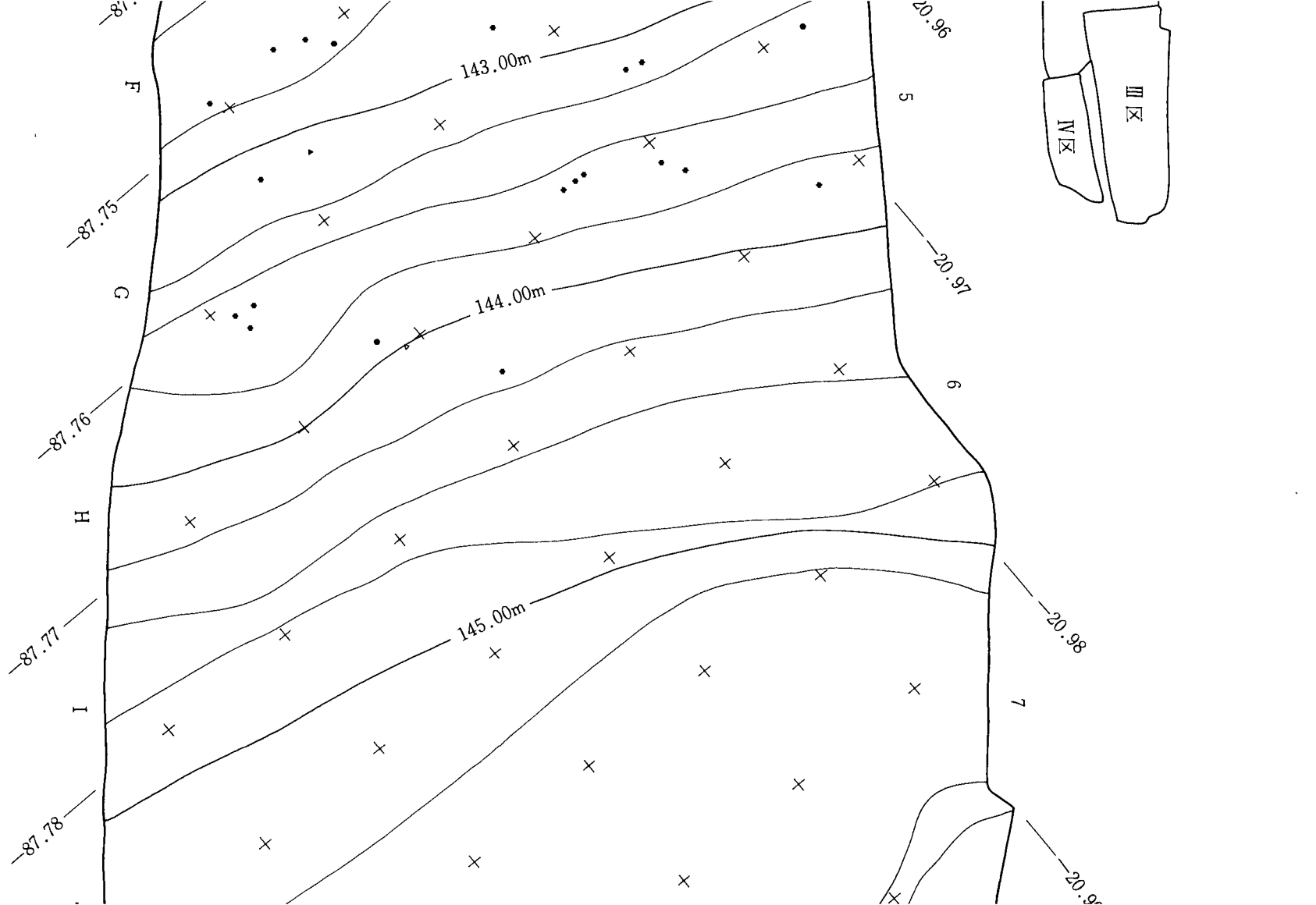
出土した64点の石斧の構成を見ると次のようになる（第２表）。Ⅰ類が22点、Ⅱ類が８点、Ⅲ類が７点、Ⅳ類が７点、Ⅴ類が１点であり、欠損して分類できないものが19点ある。Ⅰ類が最も多く、Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類がほぼ同じ割合を占める。

石斧の欠損状況をA～Hに分けて見てみる（第３表）。Aは完形のもの（10点）、Bは刃部が

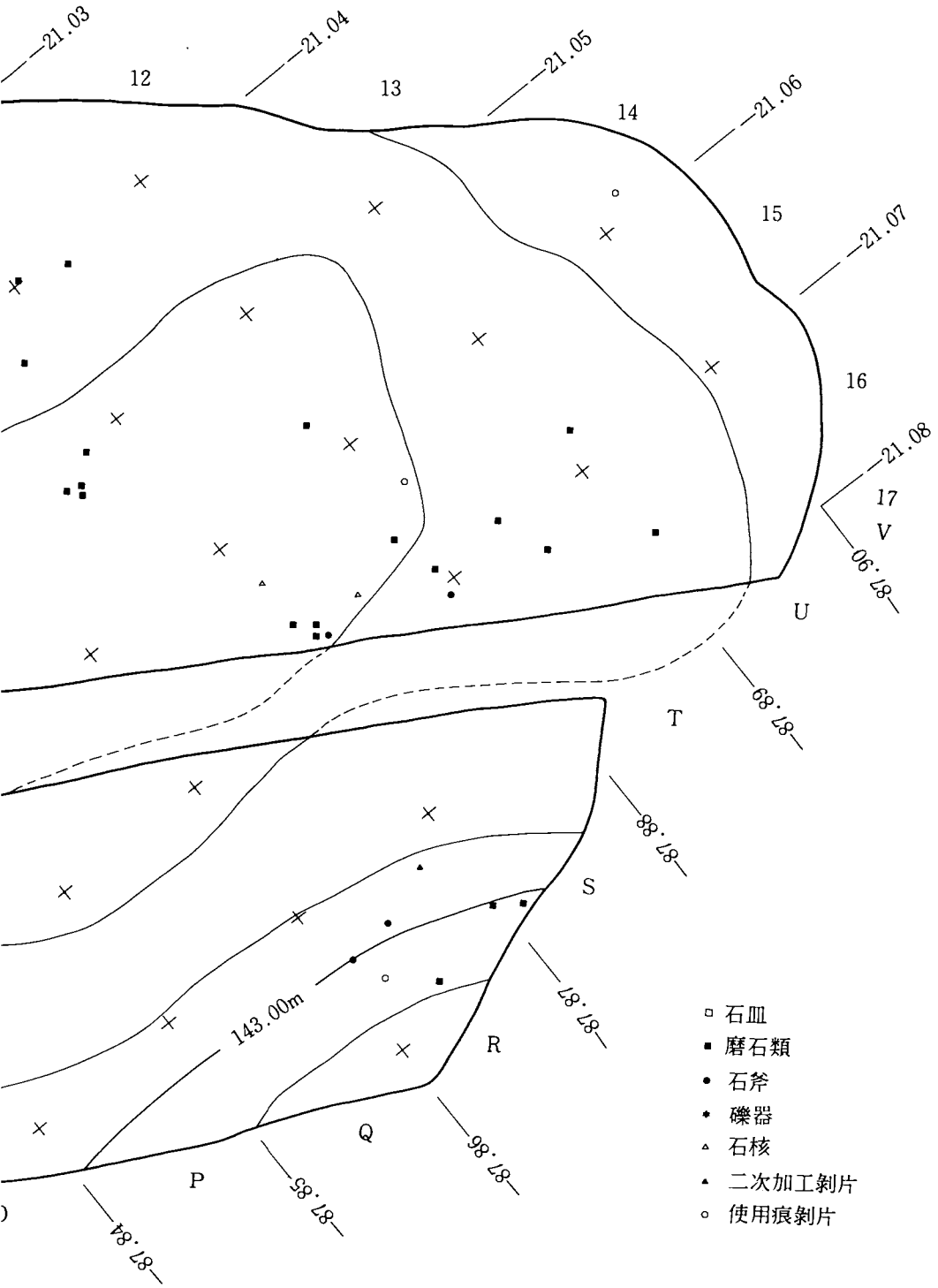


第42図　石器実測図

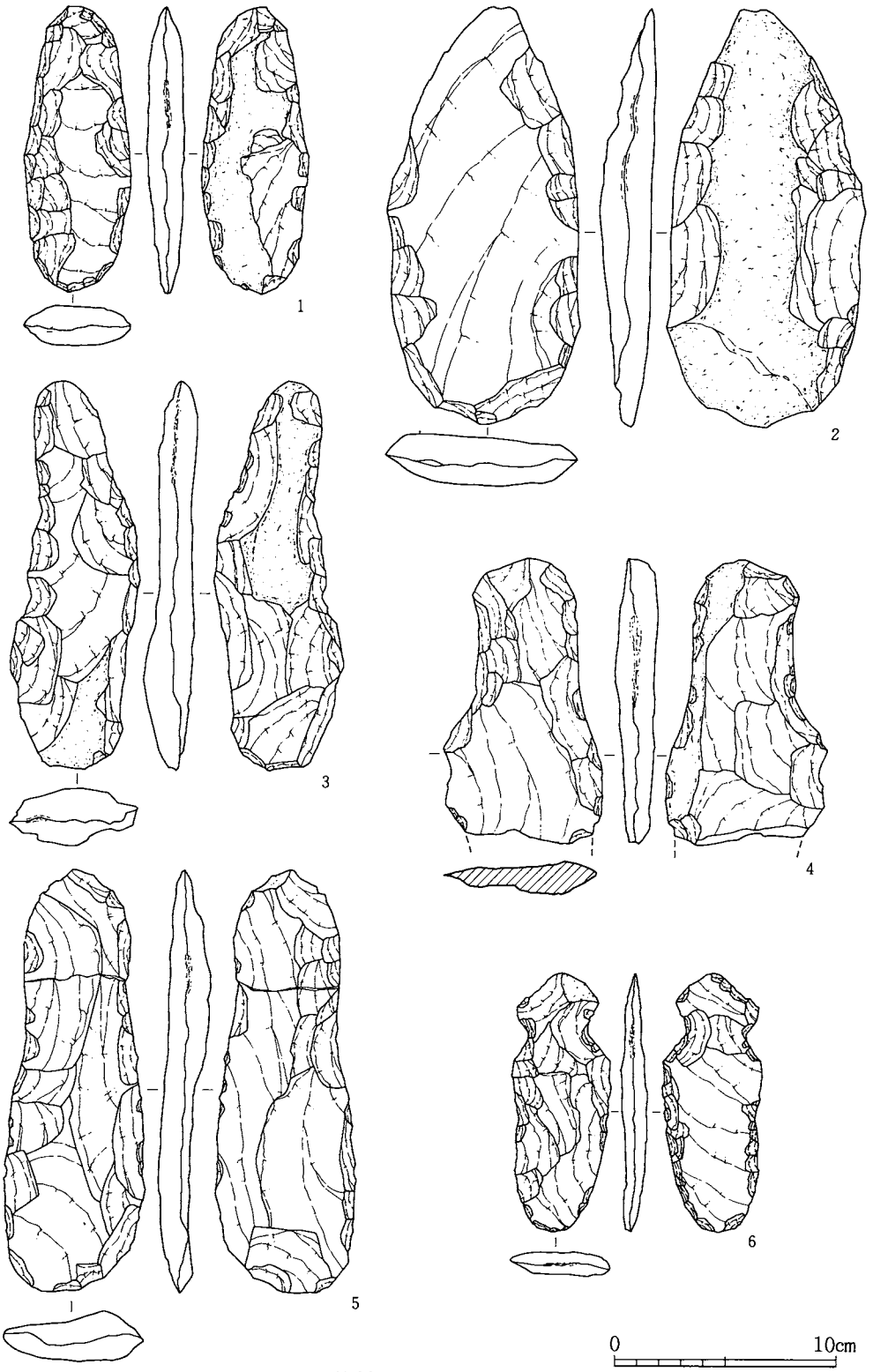

Ⅱ区
Ⅰ区
2
20.94
3
20.95
4
C
87.72
D
87.73
E
0
20m


143.00m
144.00m
145.00m
F
G
H
I
5
6
7
-87.75
-87.76
-87.77
-87.78
-20.96
-20.97
-20.98
Ⅲ区
Ⅳ区

8
9
10
11
21.00
21.01
21.02
145.00m
144.00m
K
L
M
N
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83



第43図Ⅲ層・Ⅳa 層出土石器分布図



第44図　石器実測図

欠損しているもの（17点）、Cは刃部から基部にかけての部分を欠損しているもの（12点）、Dは基端部付近が残存するもの（11点）、Eは刃部だけが残存するもの（3点）、Fは刃部から基部にかけての部分が残存するもの（1点）、Gは基端部付近が欠損するもの（5点）、Hは基部の中央部が残存するもの（5点）である。欠損状況は、Bのものが最も多く、A・C・Dがほぼ同じような割合でそれに続く。E～Hの占める割合は少ない。

ここで、I類～IV類ごとに欠損状況を見ると第4表のようになる。I類のF・Gを除けば、I類とII類の欠損状況はほぼ同じ傾向を示す。しかし、IV類とIII類はI類・II類とは異なる欠損状況になる。IV類ではBが最も多く、CがI類・II類より少なくなる。III類はGが最も多くCはIV類と同じ割合を占める。IV類のB、III類のGの占める割合が高いことは、IV類・III類の形状に関連すると考えられる。

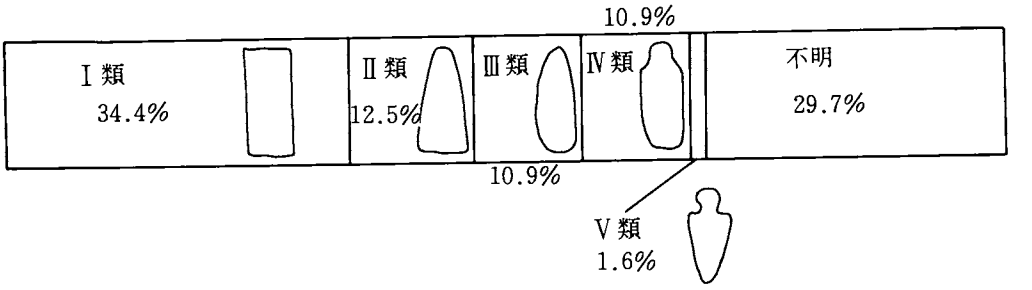
磨製石斧（第45図）

分布状況（第43図）　磨製石斧はIII区で出土した。

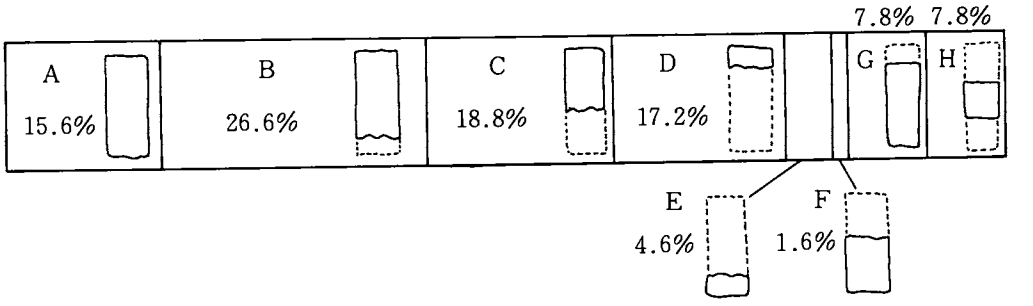
7の磨製石斧1点が出土した。7は両側面が研磨され、体部主面との間に僅かな稜を形成する。断面形は楕円形に近い。基端付近が欠損しており、側縁部にはつぶれが観察できる。刃部は円刃（平面形）・両刃（断面形）である。体部・刃部には表面が剝がれた箇所がある。

円盤状石器（第45図）

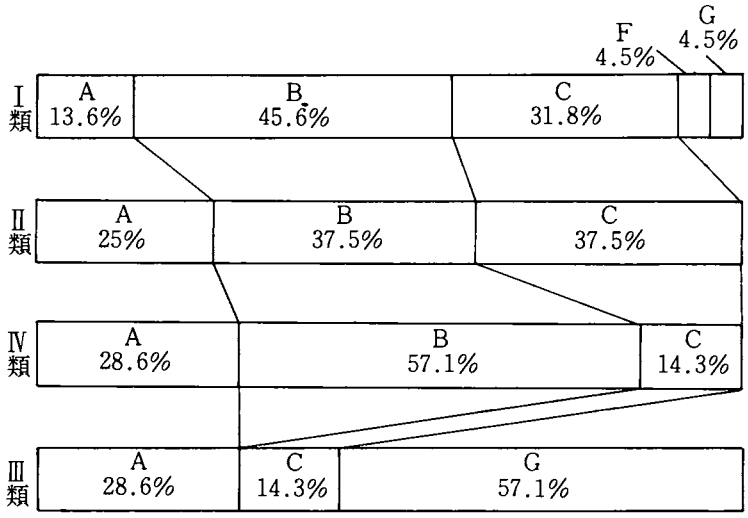
分布状況（第43図）　円盤状石器は大きく二箇所に分かれて分布している。後述する小型品



第2表　石斧構成表



第3表　石斧欠損状況



第4表　石斧類型別欠損状況

がIII区のR－12グリッド、大型品がIV区のR－17グリッドで出土した。

1～5の円盤状石器は、大きさで二つに分けることができる。1・2は径が約6 cmの小型品で、3～5は径が約9 cmの大型品である。いずれも表裏面の縁辺部より剝離を加えて調整している。5が片面に自然面が残り、それ以外は表裏面に自然面がある。2～5の縁辺部の尖った部分ではつぶれが観察できる。2は縁辺部の三箇所が欠損している。

石錘（第45図）

分布状況（第43図）　石錘はI区のF－7グリッドで出土した。

6は楕円形を呈する礫の両端を表裏面より打ち欠いた礫石錘である。

磨石類

分布状況（第43図）　磨石類はIII区とIV区に集まる傾向にある。他はI区より1点出土した。III区とIV区では2～6個の単位でまとまって出土している。R－12グリッドでは6個、R－14グリッドでは4個、S－15グリッドでは3個、O－14グリッドでは2個、O－15グリッドでは2個がまとまって出土した。

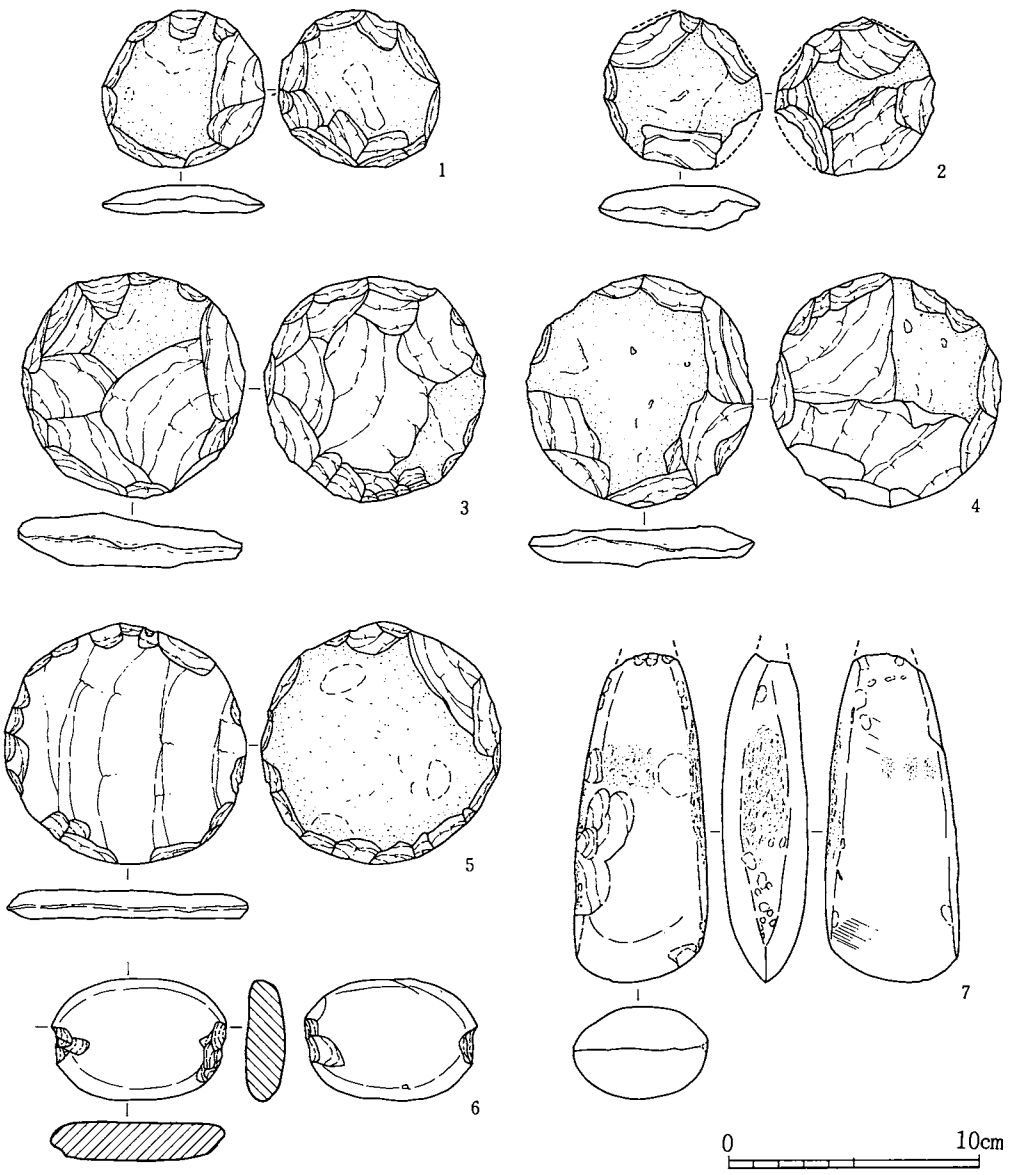
磨石類は磨痕をもつものをI類、磨痕と敲打痕をもつものをII類に分類した。類が判別できる磨石類は38点あり、その中でI類は20点、II類は18点出土している。

I類（第46図）

1・2がI類の磨石類であり、平面形は楕円形を呈している。1は表裏面、2は表裏面・側面に磨痕をもつ。

II類（第46図～第48図）

第46図3～6、第47図1・2、第48図3は表裏面に磨痕、縁辺部に敲打痕をもつ。第46図3・

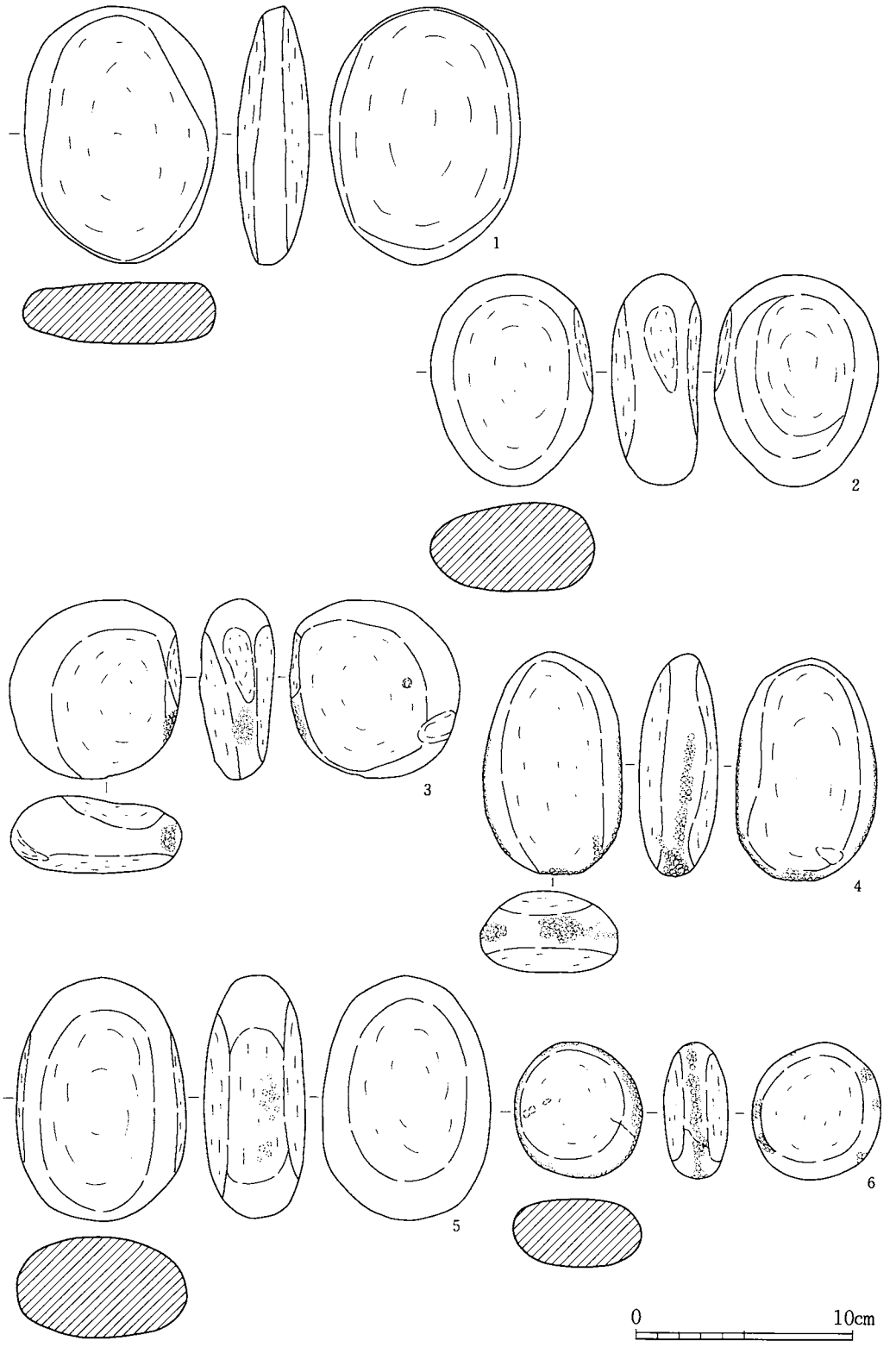


第45図　石器実測図

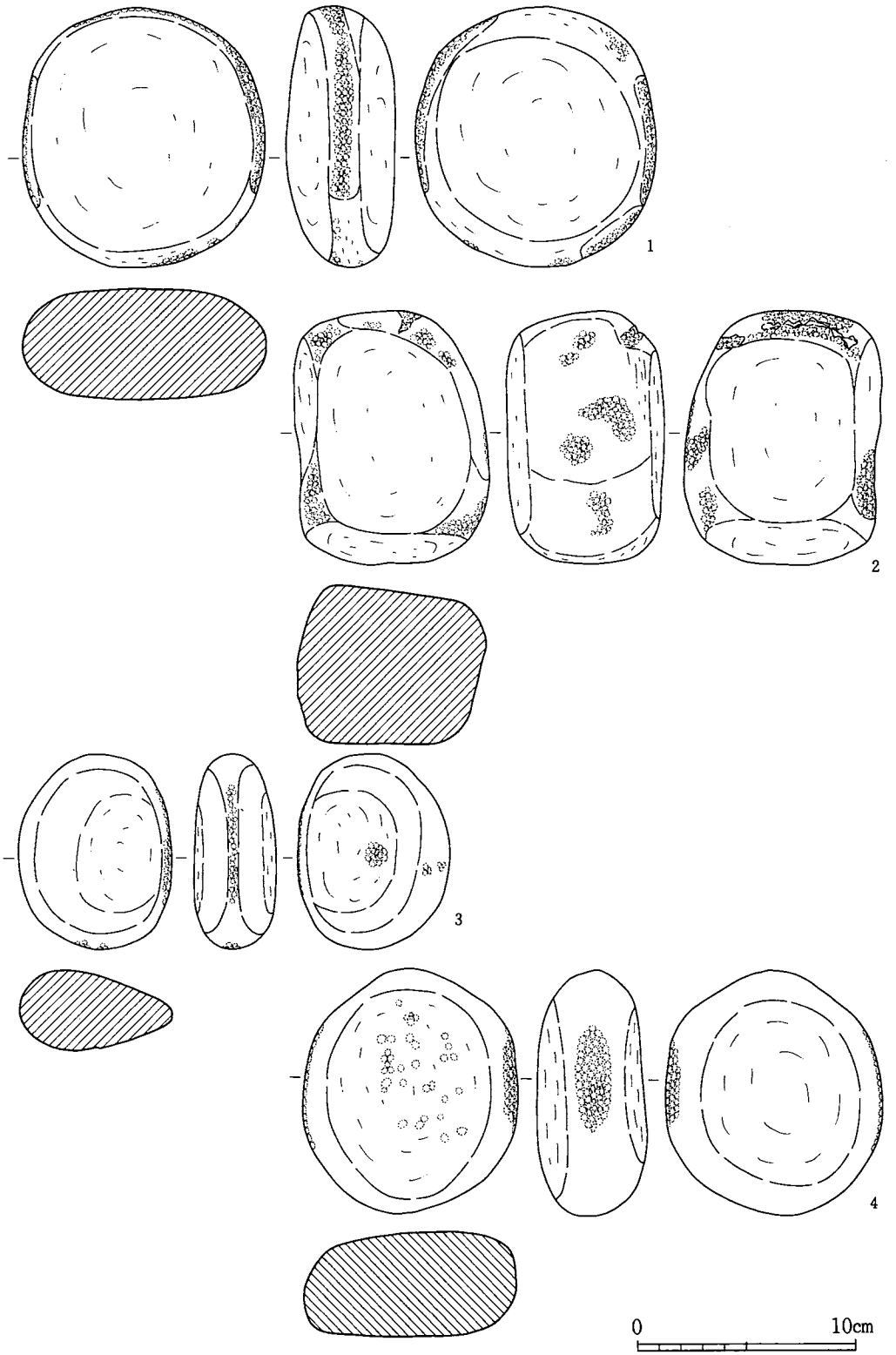
5、第48図3は側面にも磨痕がある。平面形は第47図2が隅丸長方形を呈し、他は円形ないしは楕円形である。第47図3・4、第48図1・2は表裏面に磨痕、縁辺部と体部中央に敲打痕をもつ。1・2は縁辺部にも磨痕がある。平面形はすべて楕円形を呈する。3は右側面が左側面より薄くなっており、その部分に敲打痕が集中している。2の断面形を見ると、側面と体部上下面との間に稜がある。

敲石（第49図～第51図）

分布状況（第37図）　敲石はIII区に殆どが散在状態を呈して分布している。



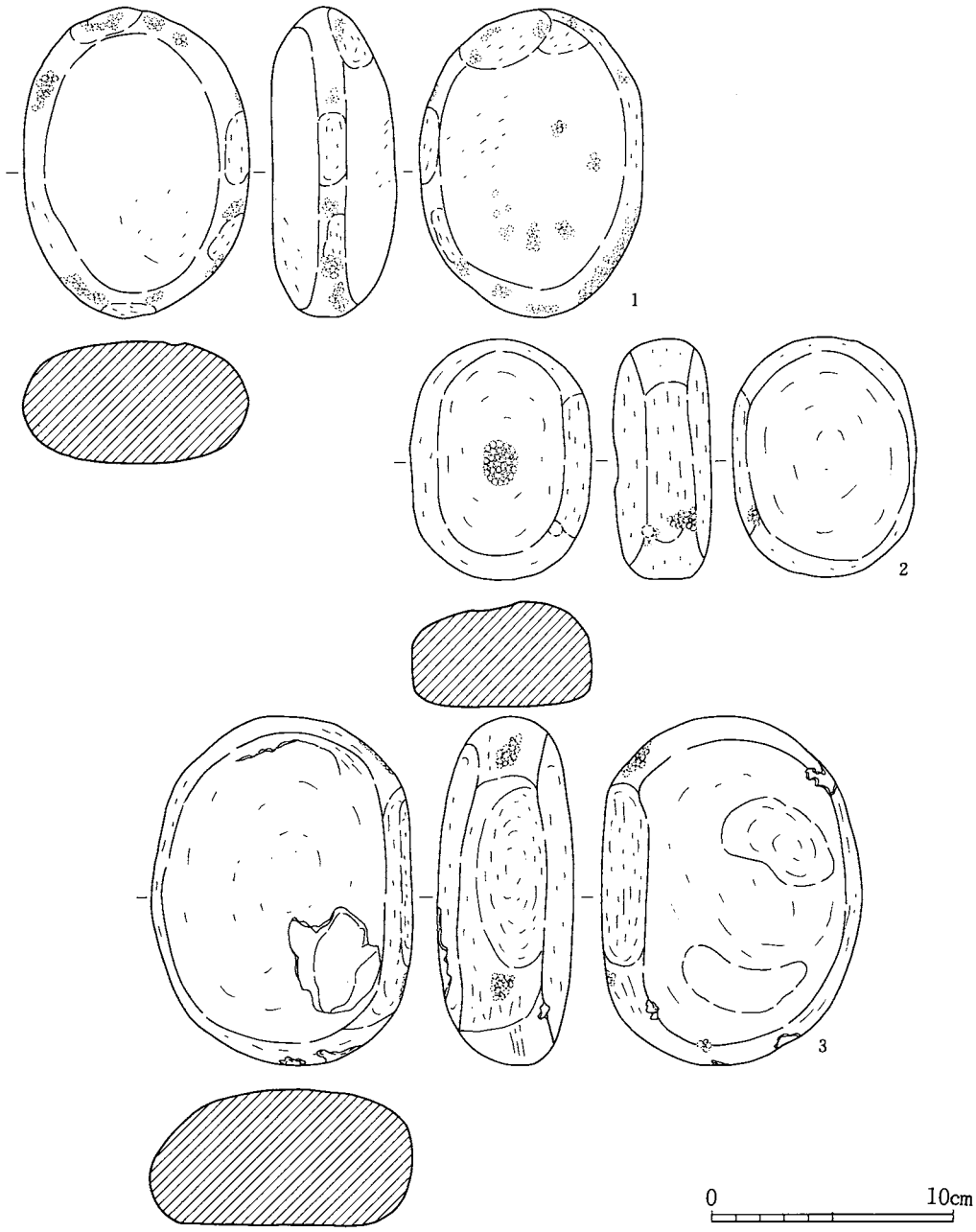
第46図　石器実測図



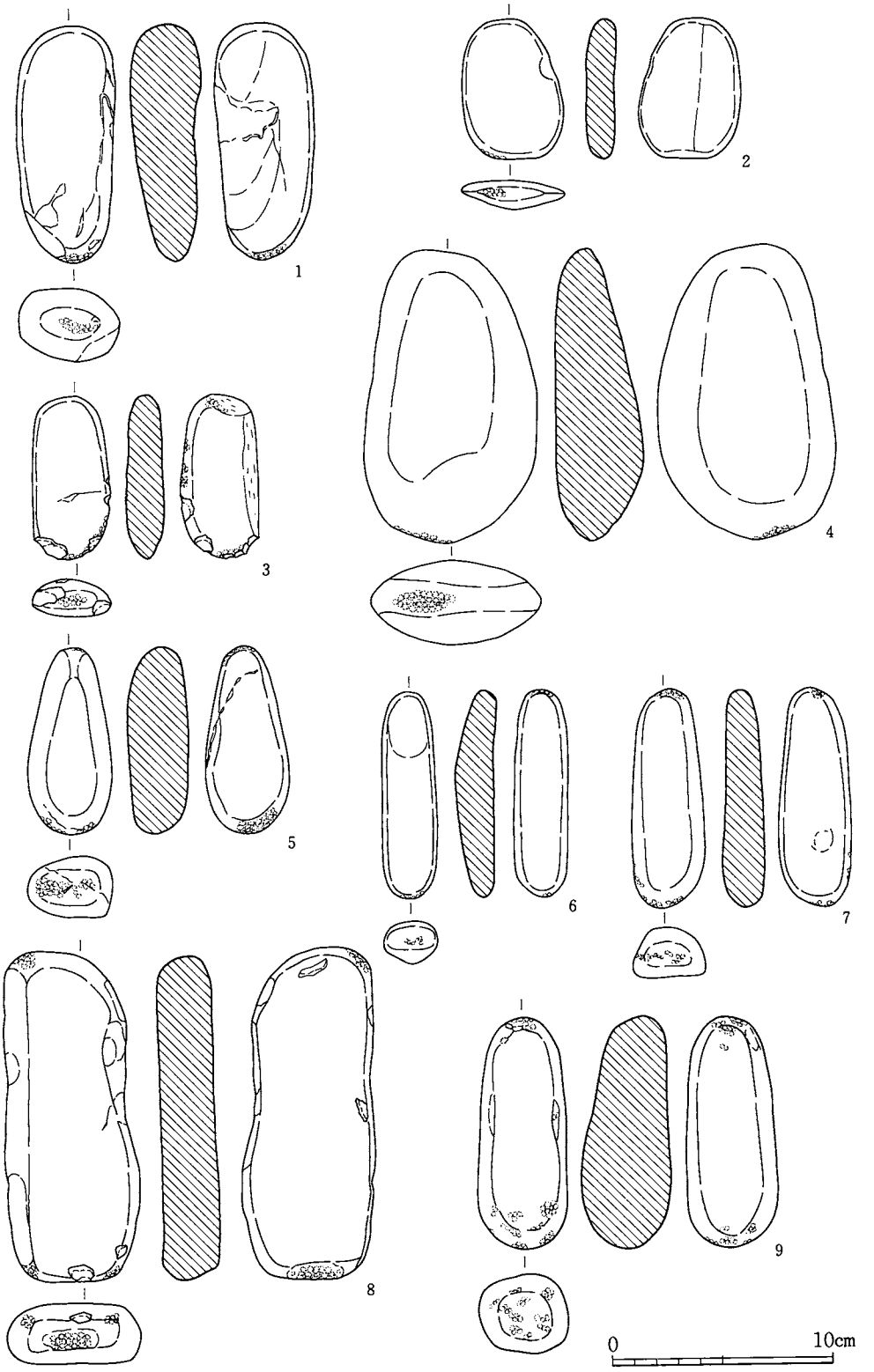
第47図　石器実測図

敲石は細長い平面形を呈するものが殆どである。断面形を見ると、丸くなるもの、偏平になるものの二つが大半を占め、不整形になるものが少数ある。

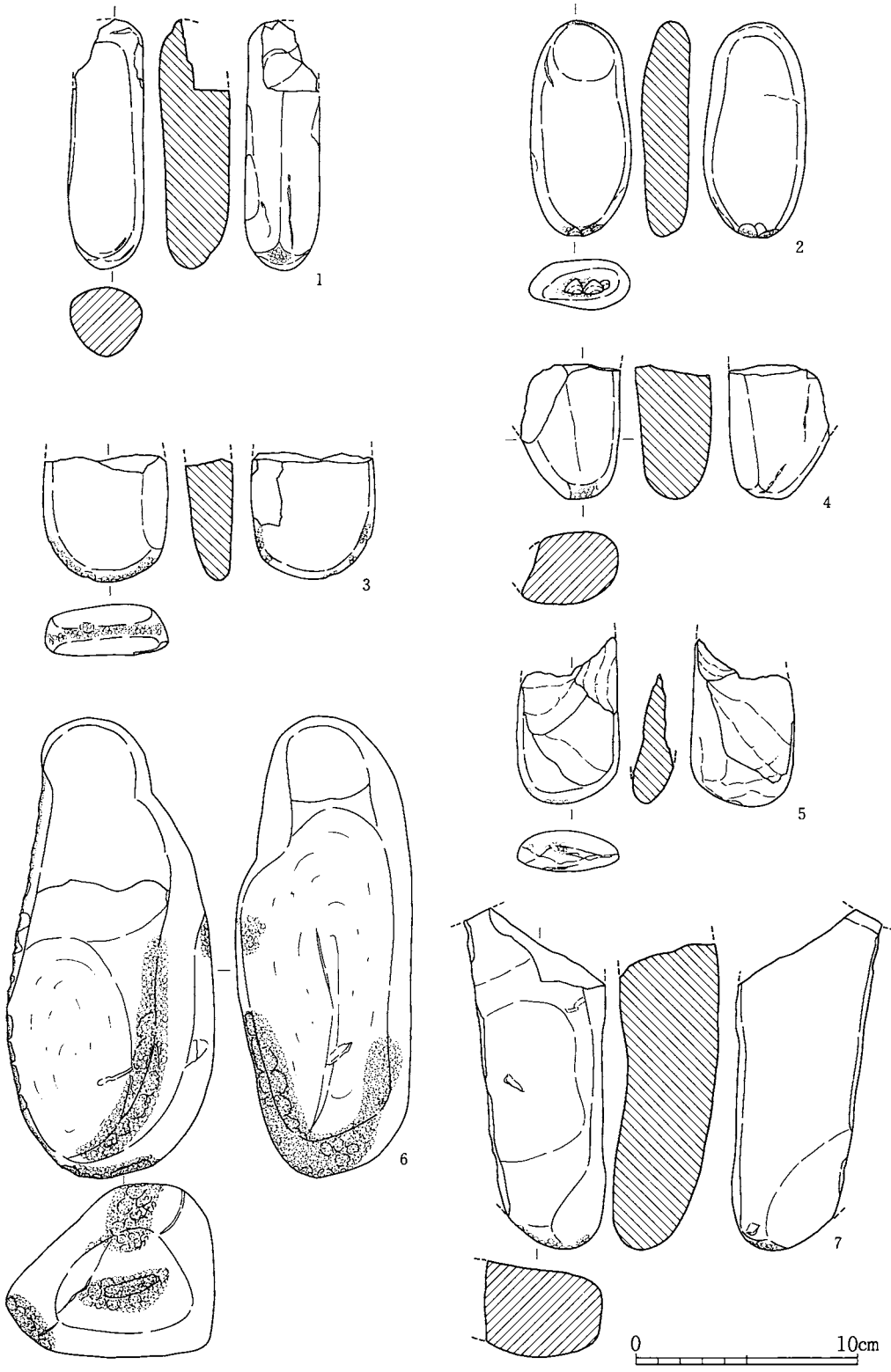
第49図1・5～7・9、第50図1・4、第51図5・6・8は、断面形が丸くなり、円形もしくは楕円形またはそれらに近い形状になる。完形のものは乳棒状を呈している。これらは上下端部の片方か両方に敲打痕をもつ。第49図2～4・8、第50図3・5、第51図1・2・4は、



第48図　石器実測図



第49図　石器実測図

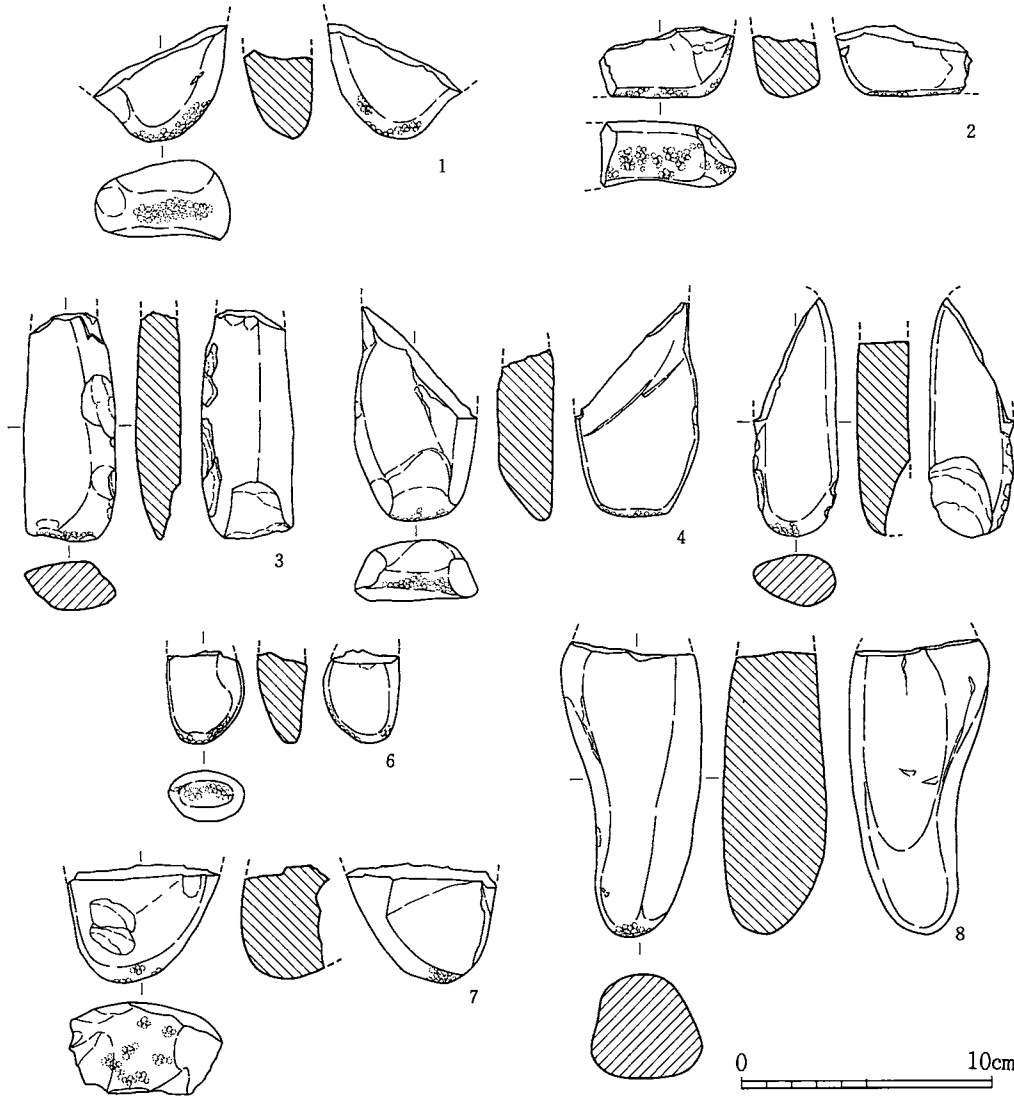


第50図　石器実測図

断面形が隅丸長方形もしくは偏平な楕円形になる。これらの端部には片方か両端に敲打痕がある。第50図6・7、第51図3・7の断面形は不整形になる。6は出土したものの中で最も大きく、平面形は上端部が細くなり、下端部にいくほど幅広くなり下端部が丸くなる。断面形は不整な三角形状になる。その三角形になる部分の平坦部に磨痕、稜の部分に敲打痕がある。6以外は下端部に敲打痕がある。6には磨痕があるが、形状が細長いので敲石に含めた。また、小破片のものは残存部に磨痕が認められないことより敲石として扱った。

石皿（第52図）

分布状況（第43図）　石皿はIV区のO－14･15グリッドに集中して分布している。その他はI



第51図　石器実測図

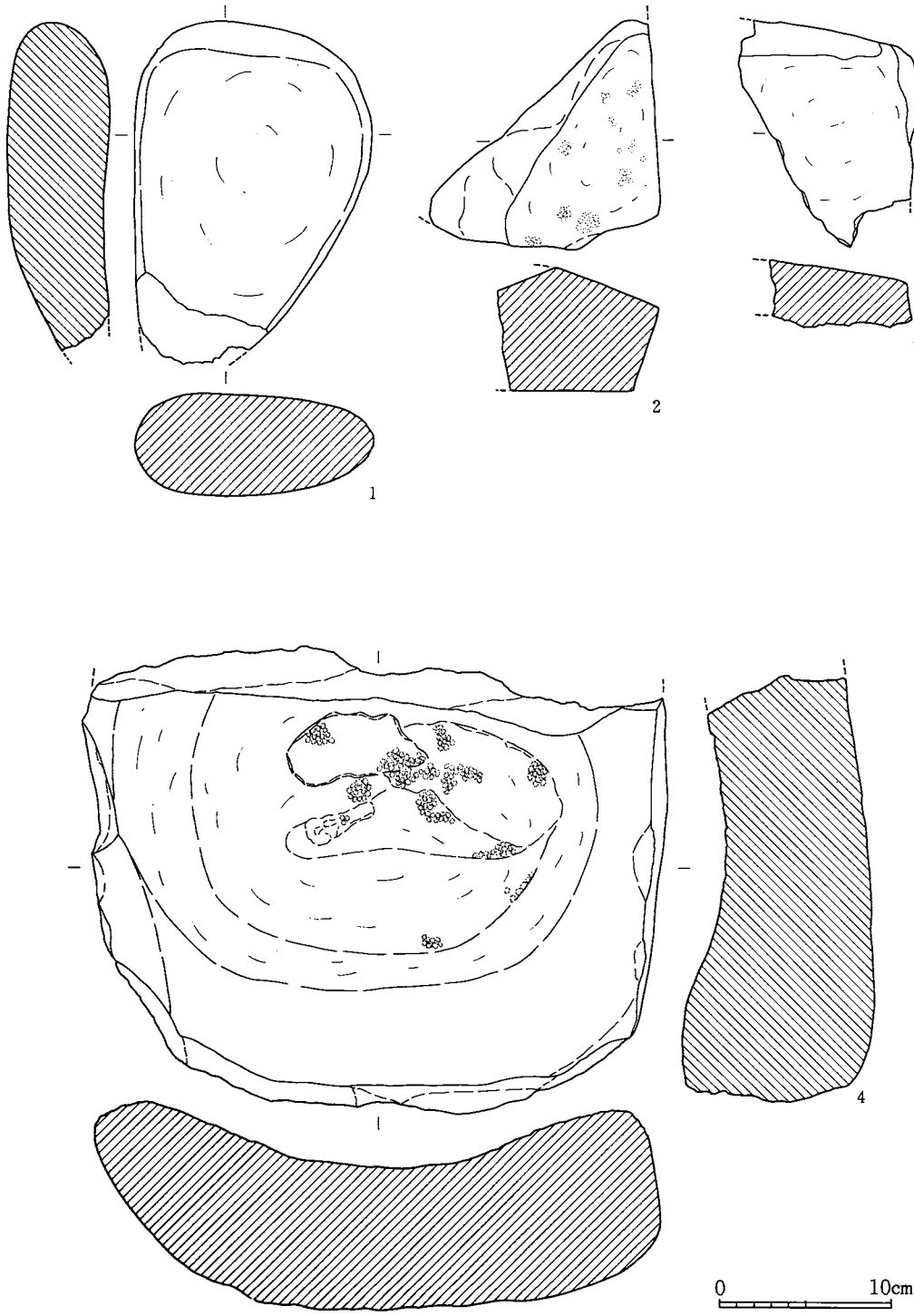
区に散在状態を呈して分布している。

1は略楕円形の平面形を呈する。表裏面に磨痕があり、表面が僅かに窪む。下端部が一部分欠損している。2・3は欠損しており、部分的に残っている。2は表面に磨痕と敲打痕をもつ。3の表面には磨痕がある。4は欠損しており、隅丸の方形か長方形の平面形を呈すると思われる。断面形を見ると、上面の中央部が「U」字形に窪んでいる。その窪んだ部分に磨痕と敲打痕がある。敲打痕は窪みの中心に集まっており、その箇所の表面が剝がれている。

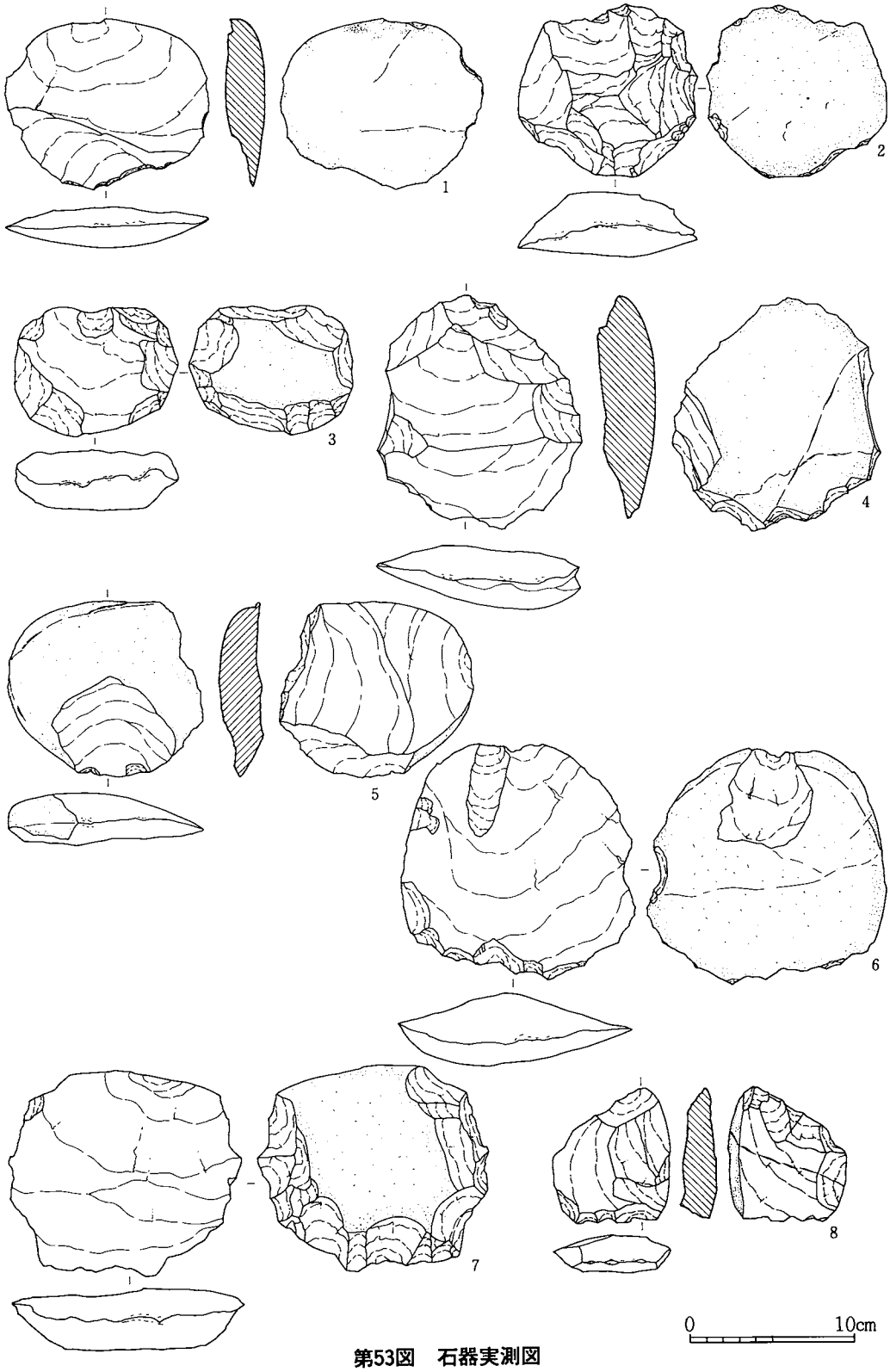
礫器（第53図～第55図）

分布状況（第43図）　礫器はその他の石器とは異なる分布状況をしている。他の石器が殆ど分布しているIII区・IV区とII区に分布しておらず、I区にだけ分布している。その状況は全体的に分布しているが、中には3～5個の単位でまとまっている箇所もある。H－5グリッドでは5個、F－4グリッドでは4個、H－9グリッドでは3個、H－7グリッドでは3個が集まって出土した。

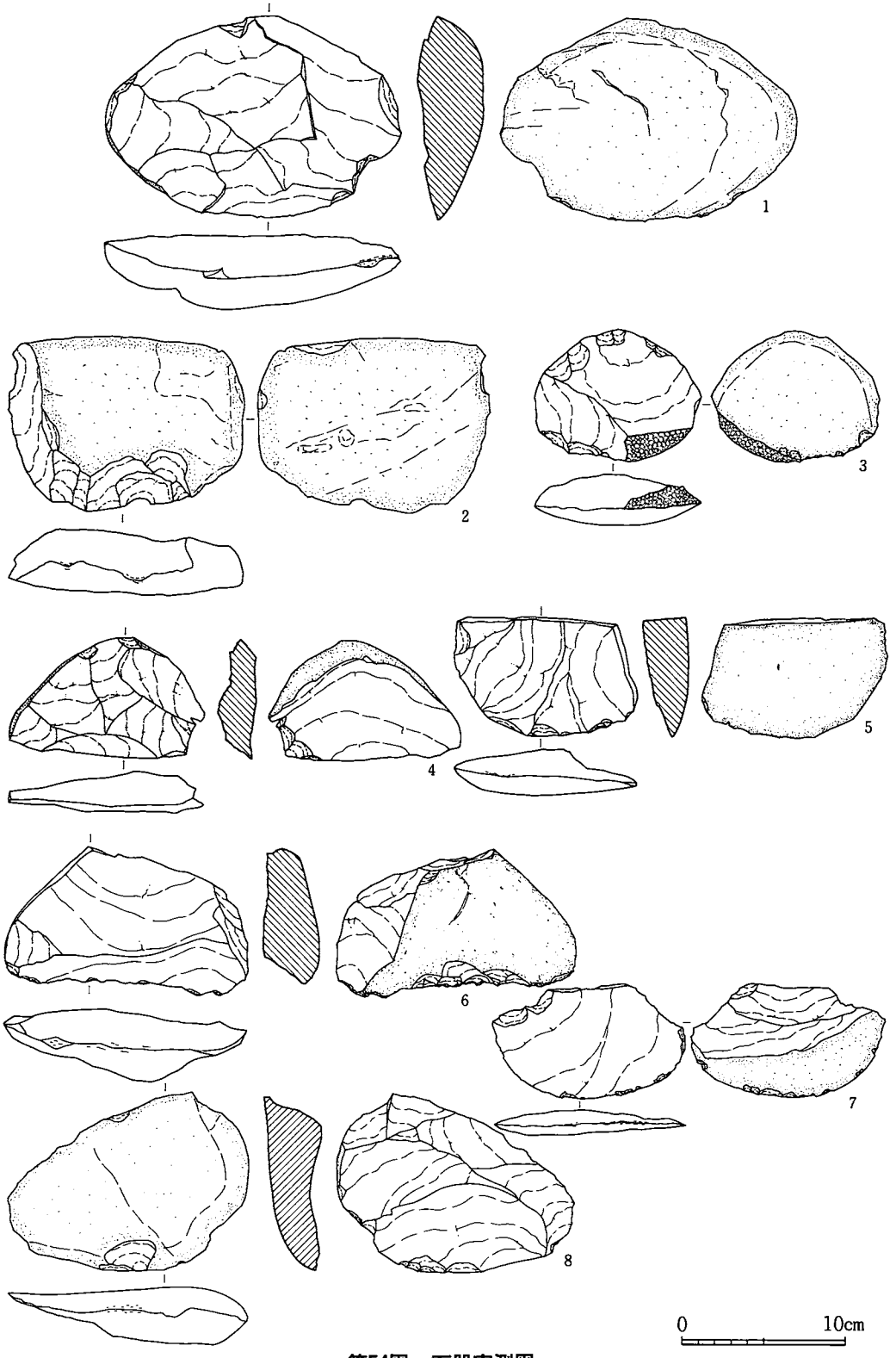
第53図1～7、第54図1～3・5・6・8、第55図1・2は、片面に剝離面があり、縁辺部より調整剝離を加える。片面に剝離面をもつこのタイプの礫器が最も多く出土している。調整剝離には、剝離面に行うもの、自然面に行うもの、剝離面・自然面の両方に行うものの3種類ある。平面形は円形と楕円形が大半を占め、長方形や不定形のものが少数である。第53図8、第54図4・7は表裏面に剝離面をもつ。縁辺部からの調整加工は表裏の両面より行っている。平面形は不定形である。第55図3～5は礫そのものを素材とするものである。3・5は礫下端部の片方より調整剝離をしている。4は礫下端部の両面より調整剝離を加える。上端部の片面も剝離されている。



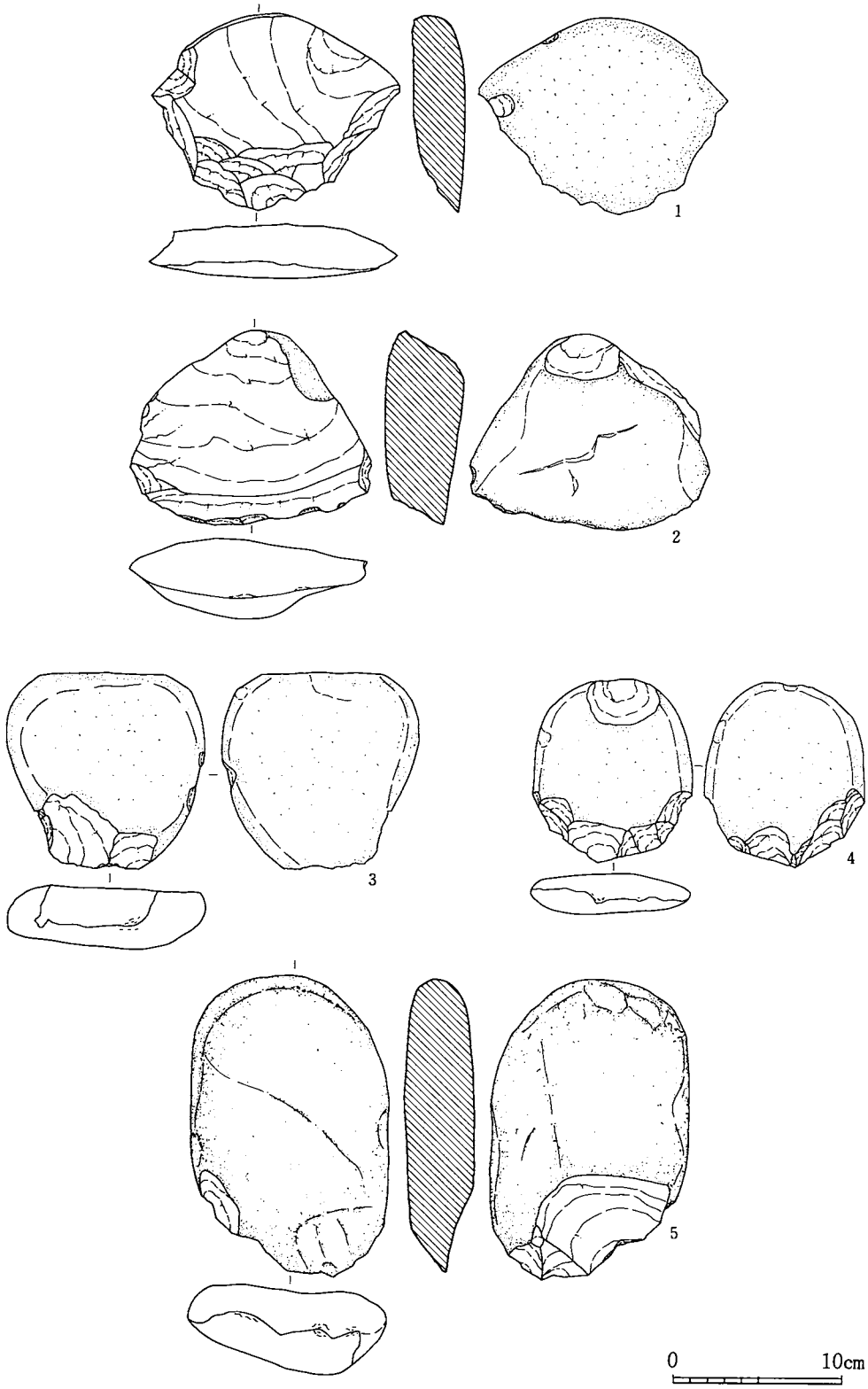
第52図　石器実測図



第53図　石器実測図



第54図　石器実測図



第55図　石器実測図

第4節　縄文時代早期の調査

1．遺構について

(1)検出面の地形（第56図）

縄文時代早期の遺構検出は、V層上面からVI層上面にかけて行った。地形測量はV層上面で行い、その地形は次のようになる。標高の最も高い箇所が調査区のほぼ中央部にあり、東西方向に帯状にのびる(標高約145.25m)。その部分より、北側は標高約142.75mの地点、南側は標高約143.50mの地点までは、緩傾斜地である。その緩傾斜地から調査区の南・北端部までは傾斜がさらに緩やかな地形になる。

(2)遺構分布（第56図）

検出した遺構は、土坑（64基）・小ピットをもつ土坑（2基）・集石（23基）・凹部（3箇所）である。土坑全体の分布は、標高の最高部より北側の緩傾斜地には多く、南側の緩傾斜地には少ない。土坑は後述するように、(a)・(b)・(c)に分類した。(a)の土坑は調査区の北側端部周辺の緩傾斜地に集まる傾向にある。(b)・(c)の土坑は、(a)の分布域には少なく、その地域より南側に多く分布している。小ピットをもつ土坑は(a)の土坑が分布する範囲にあり、調査区の北・西端部にある。集石は大きく三地域に分かれて分布している。一つは(a)の土坑が分布する範囲の最北部に集石が集まる。もう一つは、標高の最高部とそこより北側の緩傾斜地に集石が分布している。三箇所めの分布域は標高の最高部より南側の緩傾斜地である。三箇所めの分布域に、最も規模が大きい1号集石がある。この1号集石の周辺は遺構分布が粗な地域である。三つの凹部は標高の最高部より北側の緩傾斜地に、等高線に沿うような状態で分布している。西側のものが第1凹部、東側のものが第3凹部である。両者の中間が第2凹部である。

(3)遺構の状況

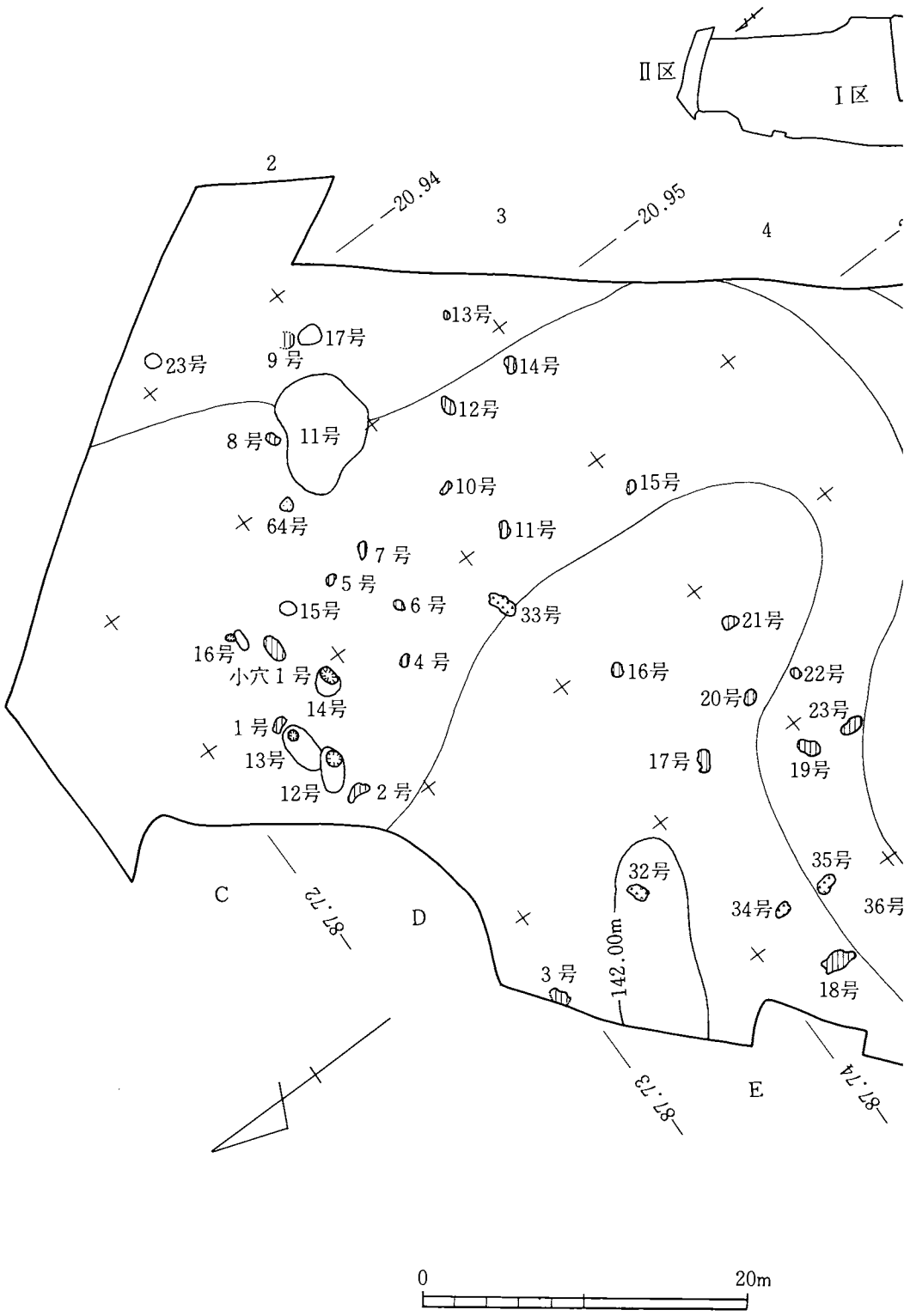
土坑

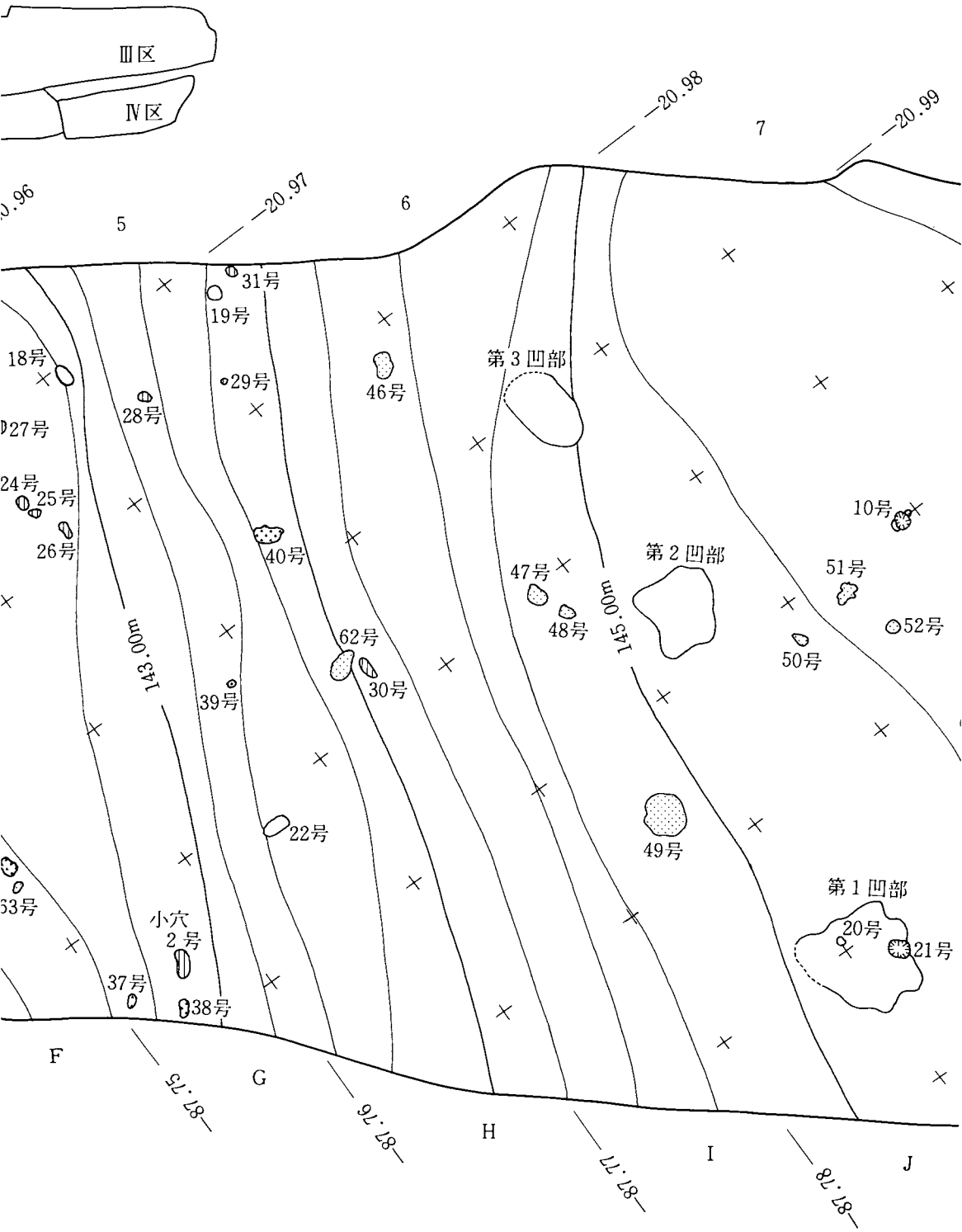
検出した土坑は、覆土により次の三つに分けることができる。(a)IV層の黄褐色土(アカホヤ)が基本的な覆土になる土坑(1号～31号土坑)。(b)V層の暗褐色土が基本的な覆土になる土坑(32号～45号土坑)。(c)VI層の黒色土が基本的な覆土になる土坑（46号～64号土坑)。(a)～(c)の土坑ごとに見てみる。

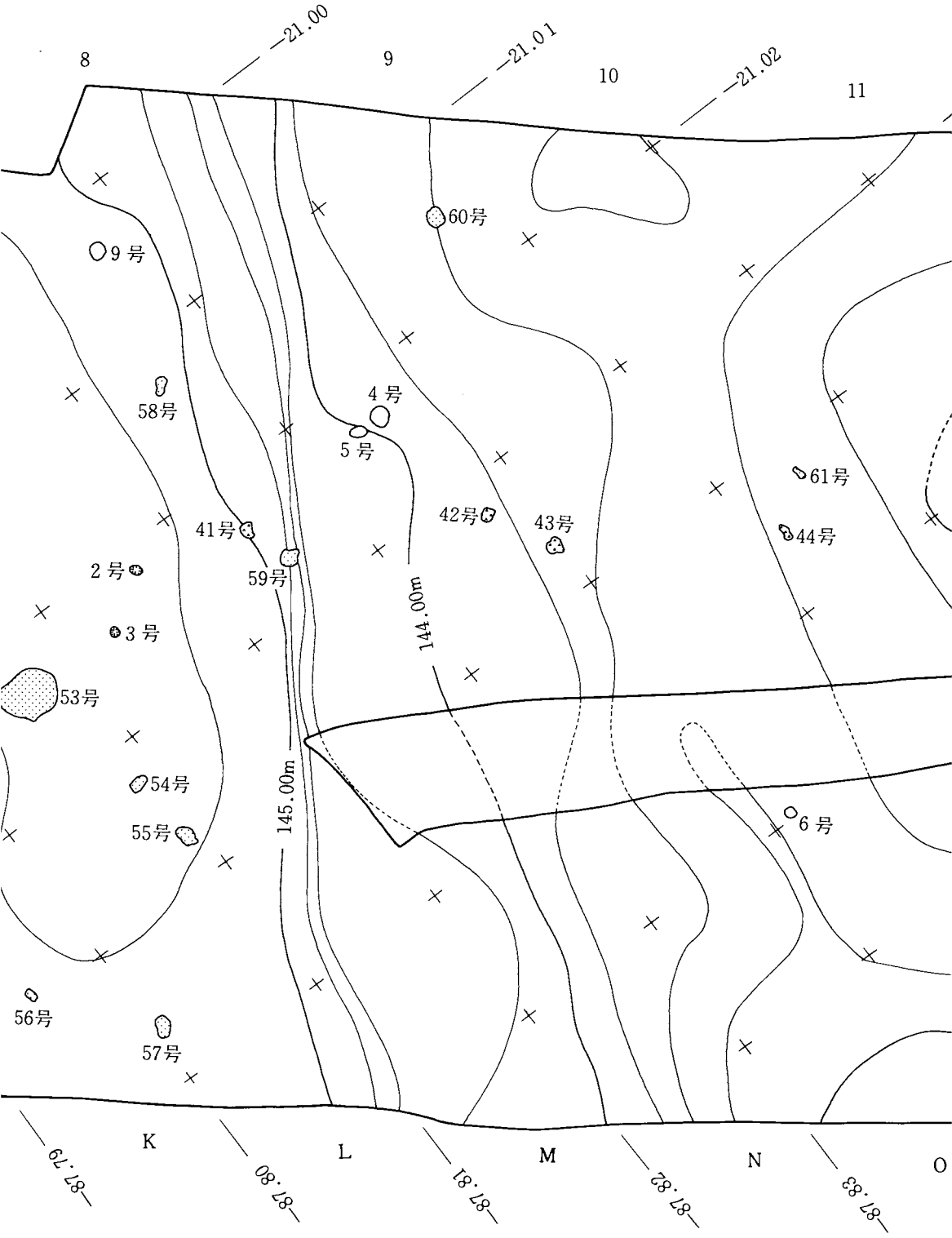
(a)の土坑

1号土坑（第57図）

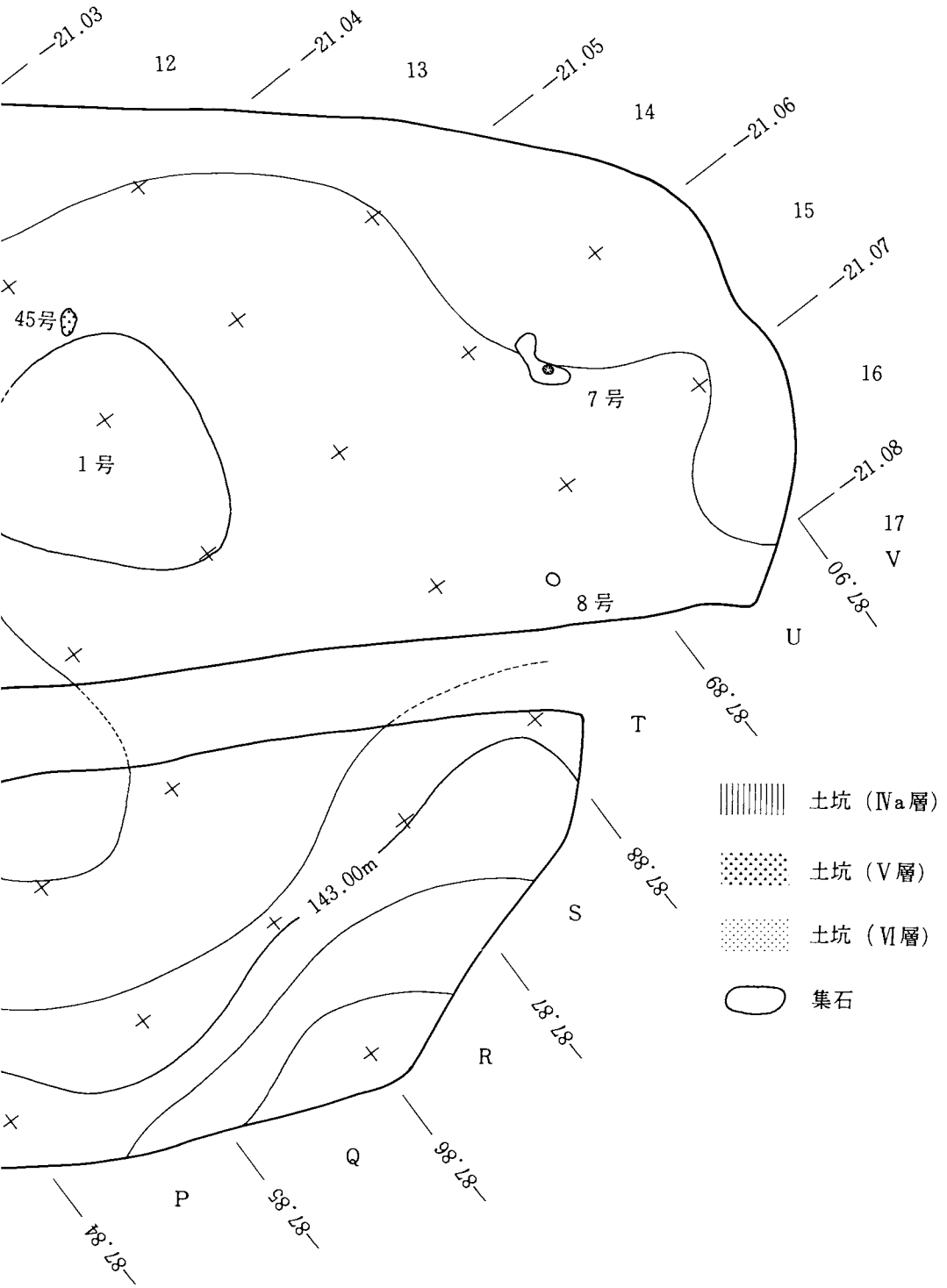
土坑の平面形は隅丸長方形を呈する（約113×約70cm)。断面形は深い皿状になる（深さ約28


Ⅱ区
Ⅰ区
2
3
4
−20.94
−20.95
13号
17号
9号
23号
14号
12号
8号
11号
10号
15号
64号
11号
7号
5号
15号
6号
33号
21号
16号
4号
16号
22号
小穴1号
20号
23号
14号
1号
19号
13号
17号
12号
2号
C
−87.72
D
32号
35号
34号
36号
142.00m
3号
18号
−87.73
E
−87.74
0
20m

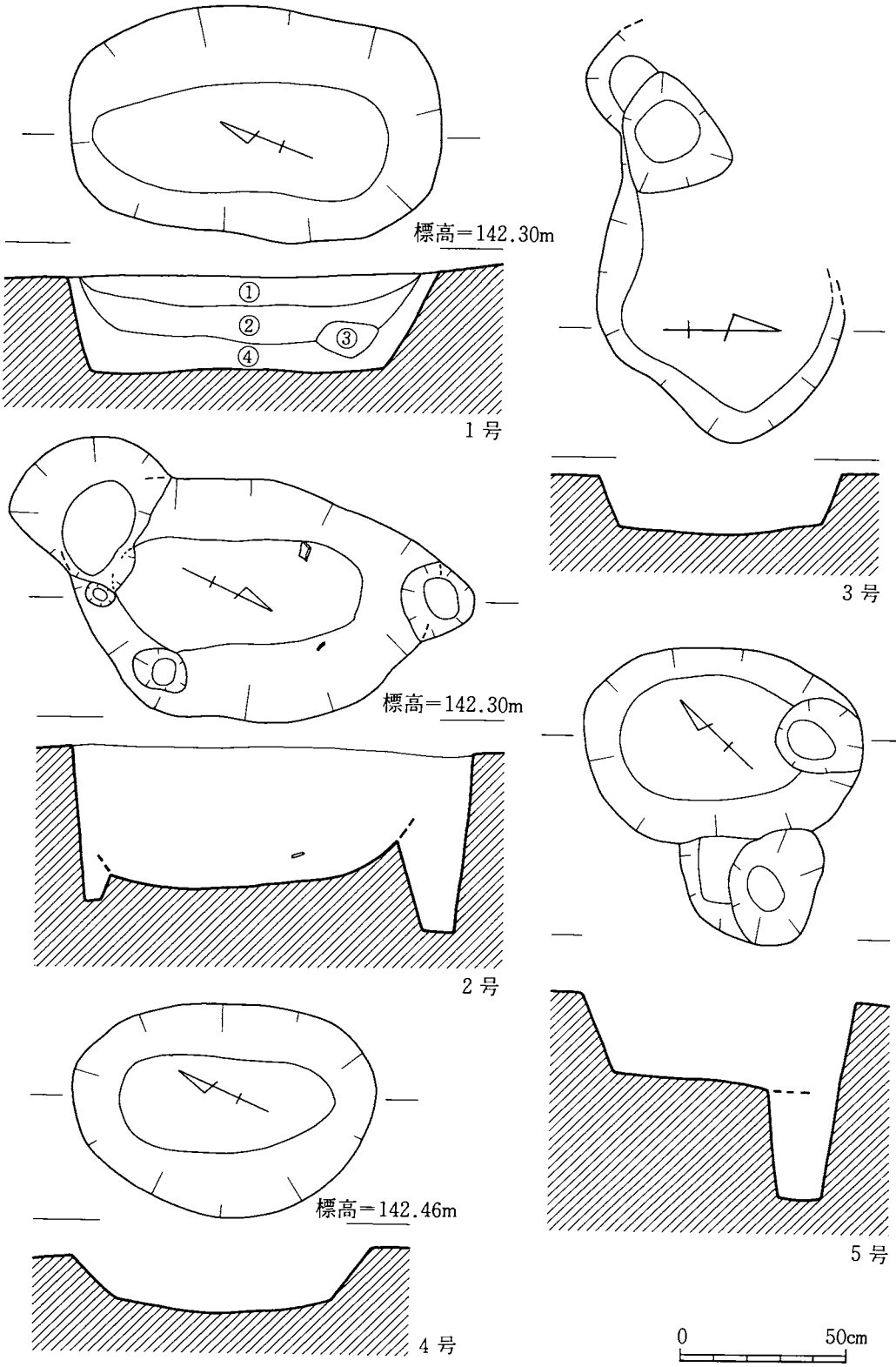

Ⅲ区
Ⅳ区
-20.98
-20.99
-20.97
7
6
5
31号
19号
18号
29号
46号
第3凹部
28号
27号
24号
25号
26号
40号
10号
第2凹部
47号
51号
48号
145.00m
52号
50号
62号
30号
143.00m
39号
22号
49号
第1凹部
20号
21号
小穴
2号
37号
38号
F
G
H
I
J
-87.75
-87.76
-87.77
-87.78



8
9
10
11
21.00
21.01
21.02
60号
9号
58号
4号
5号
61号
42号
43号
44号
41号
59号
2号
3号
144.00m
53号
54号
55号
145.00m
6号
56号
57号
K
L
M
N
O
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83



第56図　縄文時代早期遺構分布図



第57図　土坑実測図

cm)。覆土は①層～④層に分層できる。①層は黄褐色粘質土で、IVb層とほぼ同じである。②層は淡黄褐色砂質土で、IVb層を基調にしたものである。③層は淡黄褐色粘質土で、①層がブロック状に入ったものである。④層は淡暗褐色砂質土である。

2号土坑（第57図）

平安時代のピットが土坑の南北両端部と土坑内の2箇所を切っている。土坑の平面形は楕円形になると思われる（長軸約110cm、短軸約75cm)。断面形は深い皿状になる（深さ約40cm)。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土であり、分層できない。土坑の床面直上より、土器片・剝片の各々1点が出土した。

3号土坑（第57図）

土坑の北側部分が不明であるが、平面形は不整な楕円形を呈すると思われる（長軸約120cm、短軸の推定約70cm)。断面形は皿状を呈する（深さ約15cm)。土坑の西側端部を平安時代のピットが切っている。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及ぶ。

4号土坑（第57図）

土坑の平面形は楕円形を呈する（長軸約93cm、短軸約65cm)。断面形は皿状になる（深さ約18cm)。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土であり、分層できない。

5号土坑（第57図）

土坑の平面形は楕円形を呈する（長軸約85cm、短軸約60cm)。断面形は深い皿状になる（深さ約25cm)。土坑内の3箇所を平安時代のピットが切っている。覆土はIVb層に類似する黄褐色砂質土であり、分層できない。

6号土坑（第58図）

土坑の平面形は楕円形である（長軸約75cm、短軸約60cm)。断面形は深い皿状を呈する（深さ約20cm)。土坑の西側の2箇所を平安時代のピットが切っている。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土であり、分層できない。

7号土坑（第58図）

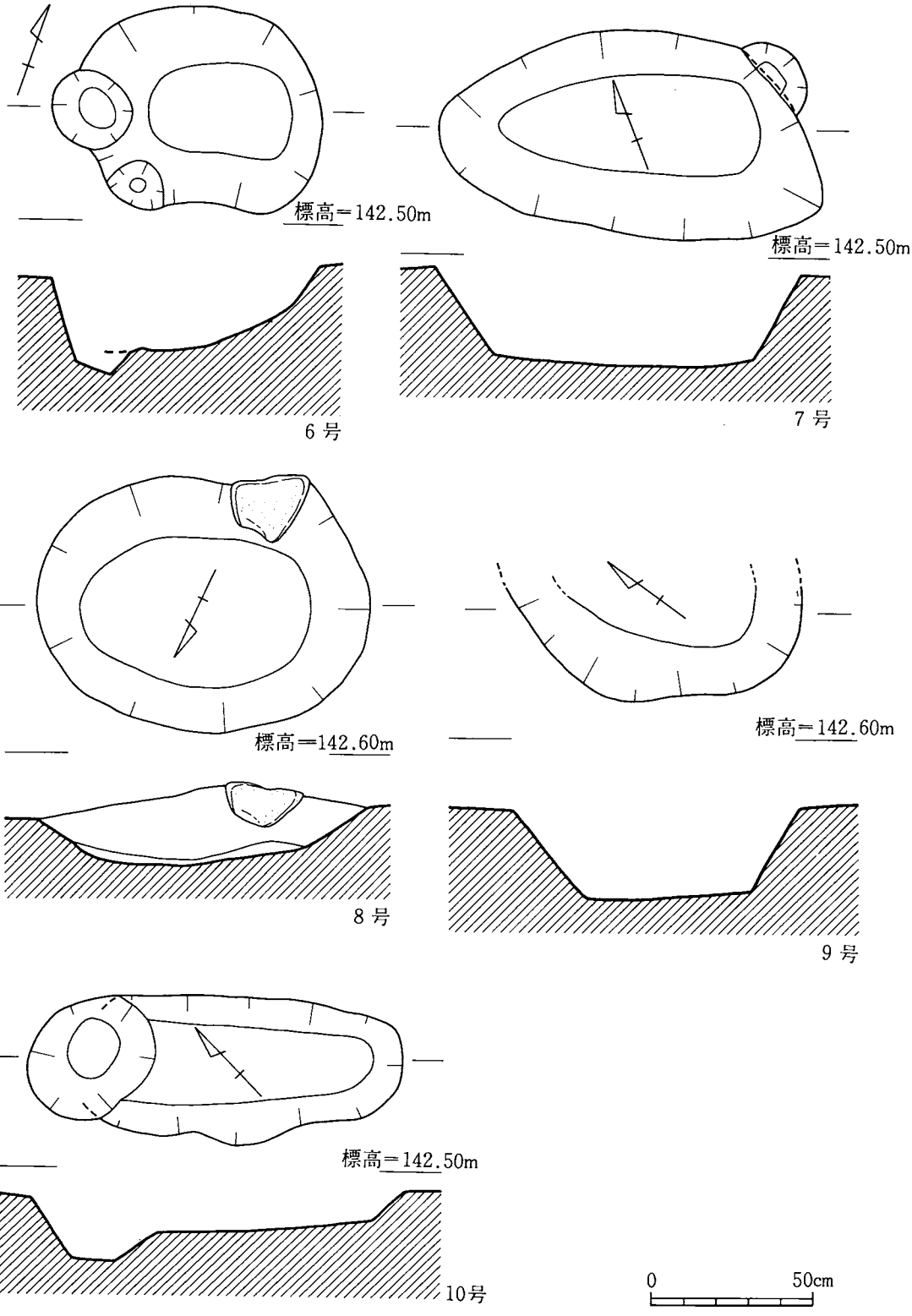
土坑の平面形は楕円形を呈する（長軸約115cm、短軸約65cm)。断面形は深い皿状を呈する（深さ約30cm)。平安時代のピットが土坑の東側を切っている。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土であり、分層できない。覆土中より小土器片が出土した。

8号土坑（第58図）

土坑の平面形は楕円形である（長軸約105cm、短軸約80cm)。断面形は皿状を呈する（深さ約15cm)。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に入る。土坑の南側の壁に密着した状態で、石皿が出土した。

9号土坑（第58図）

土坑の東側部分が不明であるが、平面形は楕円形を呈すると思われる（長軸約90cm、短軸不


標高＝142.50m
標高＝142.50m
6号
7号
標高＝142.60m
標高＝142.60m
8号
9号
標高＝142.50m
10号
0
50cm

第58図　土坑実測図

明)。断面形は深い皿状になる(深さ約25cm)。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土であり、分層できない。

10号土坑（第58図）

土坑の平面形は細長い楕円形である(長軸の推定約110cm、短軸約45cm)。断面形は浅い皿状を呈する(深さ約10cm)。土坑の北西端部を平安時代のピットが切っている。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及ぶ。

11号土坑（第59図）

土坑の平面形は楕円形を呈する（長軸約115cm、短軸約75cm)。断面形は浅い筒状になる（深さ約50cm)。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土で、分層できない。

12号土坑（第59図）

土坑の平面形は楕円形である（長軸約140cm、短軸約90cm)。断面形は皿状を呈する（深さ約25cm)。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及ぶ。床面直上より土器片が出土した。

13号土坑（第59図）

土坑の平面形は楕円形を呈する（長軸約70cm、短軸約40cm)。断面形は浅い筒状になる（深さ約10cm)。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土で、分層できない。

14号土坑（第60図）

土坑の平面形は楕円形である（長軸約140cm、短軸約70cm)。断面形は皿状を呈する（深さ約10cm)。土坑にある3基のピットの中で、東寄りのほぼ中央部にあるピットは土坑に伴うもので、それ以外の2基のピットは平安時代のものである。土坑に伴うピットの平面形は円形を呈する(径約20cm)。断面形は筒状になる(深さ約15cm)。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及ぶ。

15号土坑（第59図）

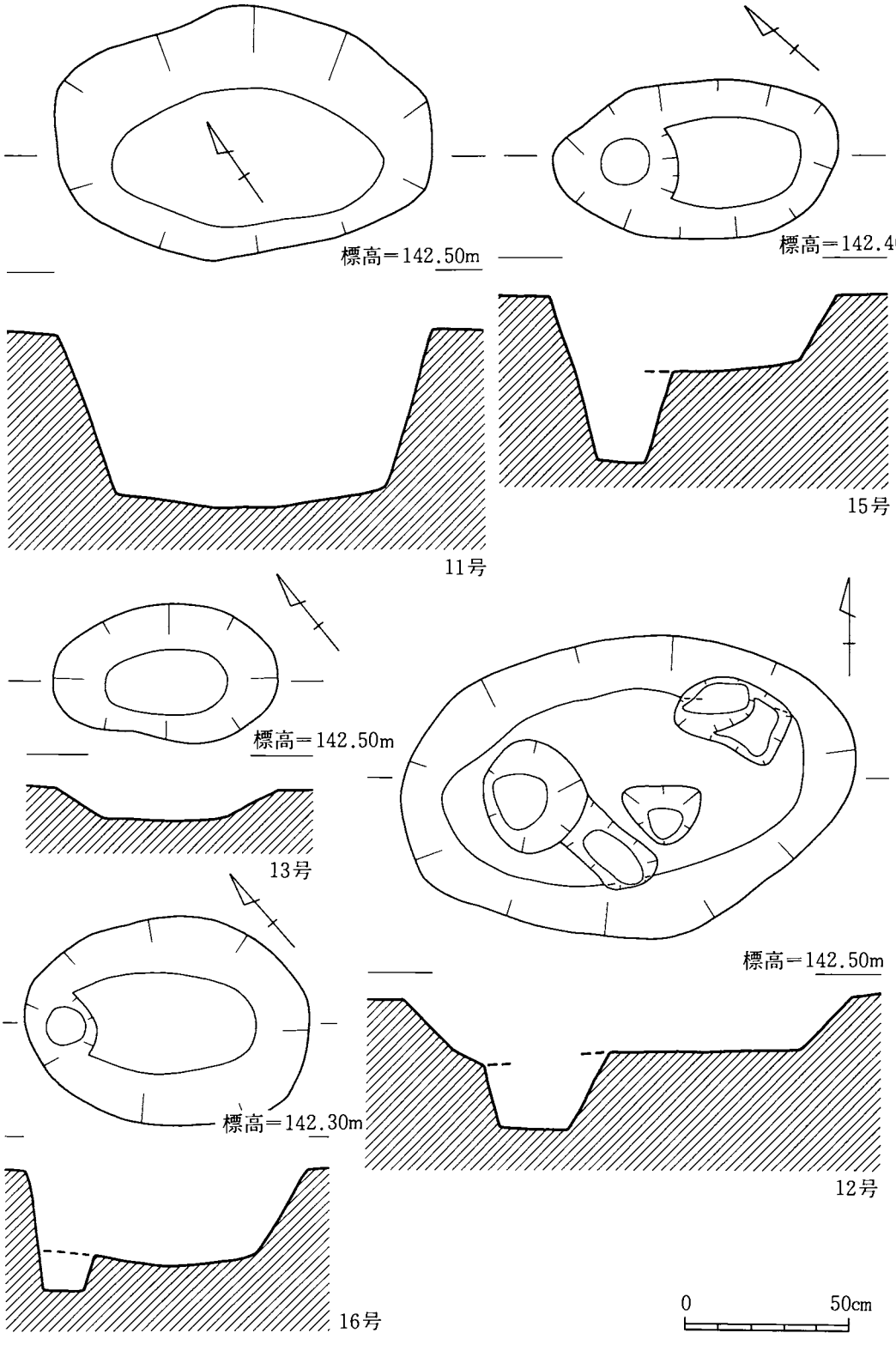
土坑の平面形は楕円形を呈する（長軸約85cm、短軸約50cm)。断面形は深い皿状になる（深さ約22cm)。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土で、分層できない。

16号土坑（第59図）

土坑の平面形は楕円形である（長軸約90cm、短軸約65cm)。断面形は深い皿状を呈する（深さ約30cm)。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及ぶ。

17号土坑（第60図）

平安時代の3基のピットにより、土坑のプランが不整形になっている。本来の土坑の平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる（約160×約85cm)。断面形は皿状になる（深さ約20cm)。


標高＝142.50m
標高＝142.40m
11号
15号
標高＝142.50m
13号
標高＝142.50m
標高＝142.30m
12号
16号
0
50cm

第59図　土坑実測図

覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土で、分層できない。覆土より黒曜石製の石鏃、床面直上より楕円の押型文を施した土器片が出土した。

18号土坑（第61図）

土坑の平面形は不整形である（最大長約170cm、最大幅約115cm）。土坑の北東部分がほぼ方形にさらに深く掘られており、断面形が浅い筒状を呈する（深さ約30cm）。それ以外の部分の断面形は皿状を呈する（深さ約20cm）。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土は三つに分層できる。①層はアカホヤのパミスがブロック状に入ったもので、②層はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土、③層はIVb層に類似した暗褐色粘質土である。北東部隅の壁に密着した状態で、石皿が出土した。覆土③層より石匙が出土した。

19号土坑（第60図）

土坑の平面形は楕円形を呈する（長軸約155cm、短軸約100cm）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約22cm）。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及ぶ。

20号土坑（第61図）

平安時代のピットが土坑の肩部を切っている。土坑の平面形はほぼ円形を呈する（径約80cm）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約25cm）。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及び、分層できない。

21号土坑（第61図）

土坑の平面形は楕円形を呈する（長軸約100cm、短軸約75cm）。断面形は、南側が浅く北側が深い皿状を呈する（深さ約5～25cm）。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及ぶ。

22号土坑（第62図）

土坑の平面形は、不整な円形である（径約70～75cm）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約25cm）。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及び、分層できない。

23号土坑（第62図）

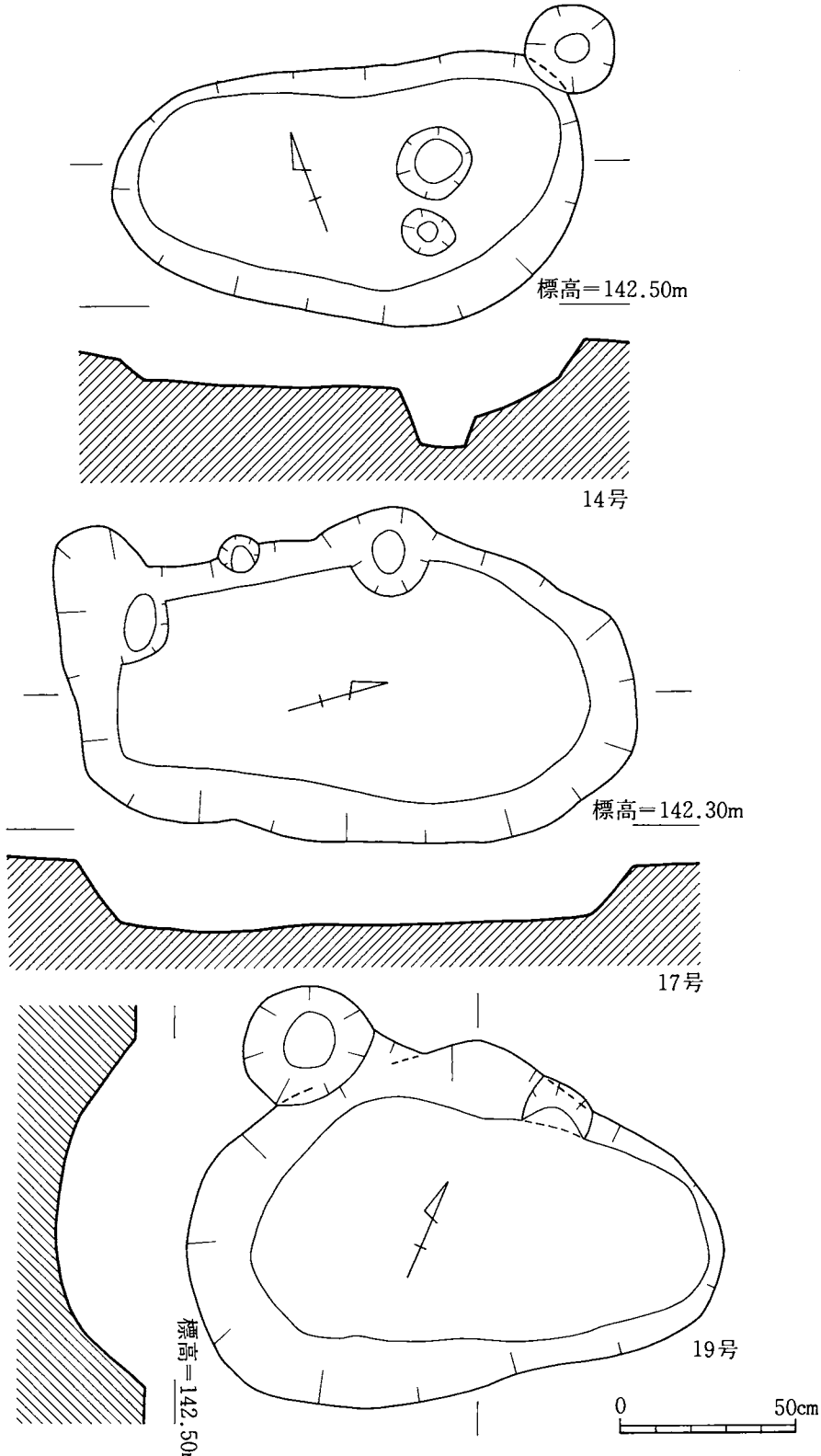
土坑の平面形は不整な楕円形を呈する（長軸約160cm、短軸約65～70cm）。断面形は浅い皿状を呈する（深さ約15cm）。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及ぶ。

24号土坑（第62図）

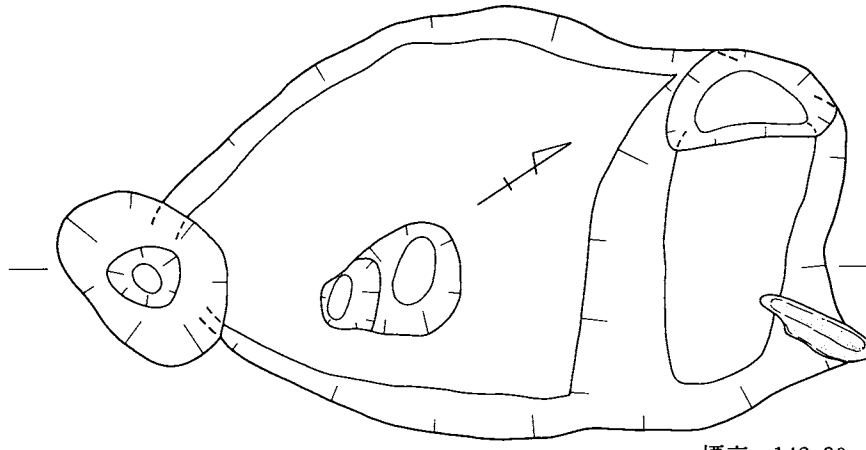
土坑の平面形は楕円形である（長軸約95cm、短軸約65cm）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約25cm）。土坑内のほぼ中央部に平安時代のピットがある。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及び、分層できない。

25号土坑（第62図）

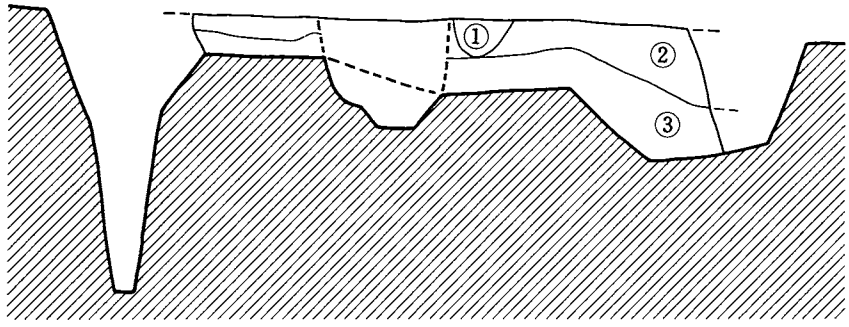
土坑の平面形は不整な楕円形を呈する（長軸約100cm、短軸約50～60cm）。断面形は、西側が



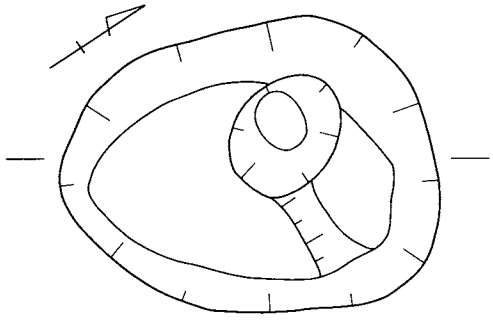
第60図　土坑実測図



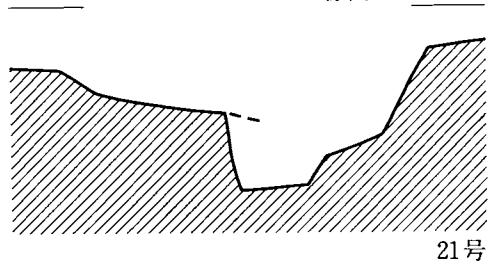
標高＝142.30m



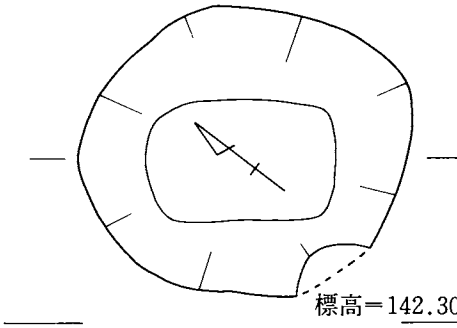
18号



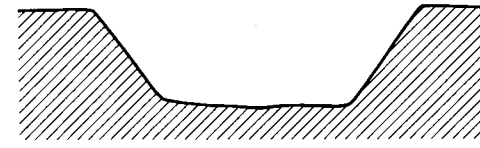
標高＝142.40m



21号



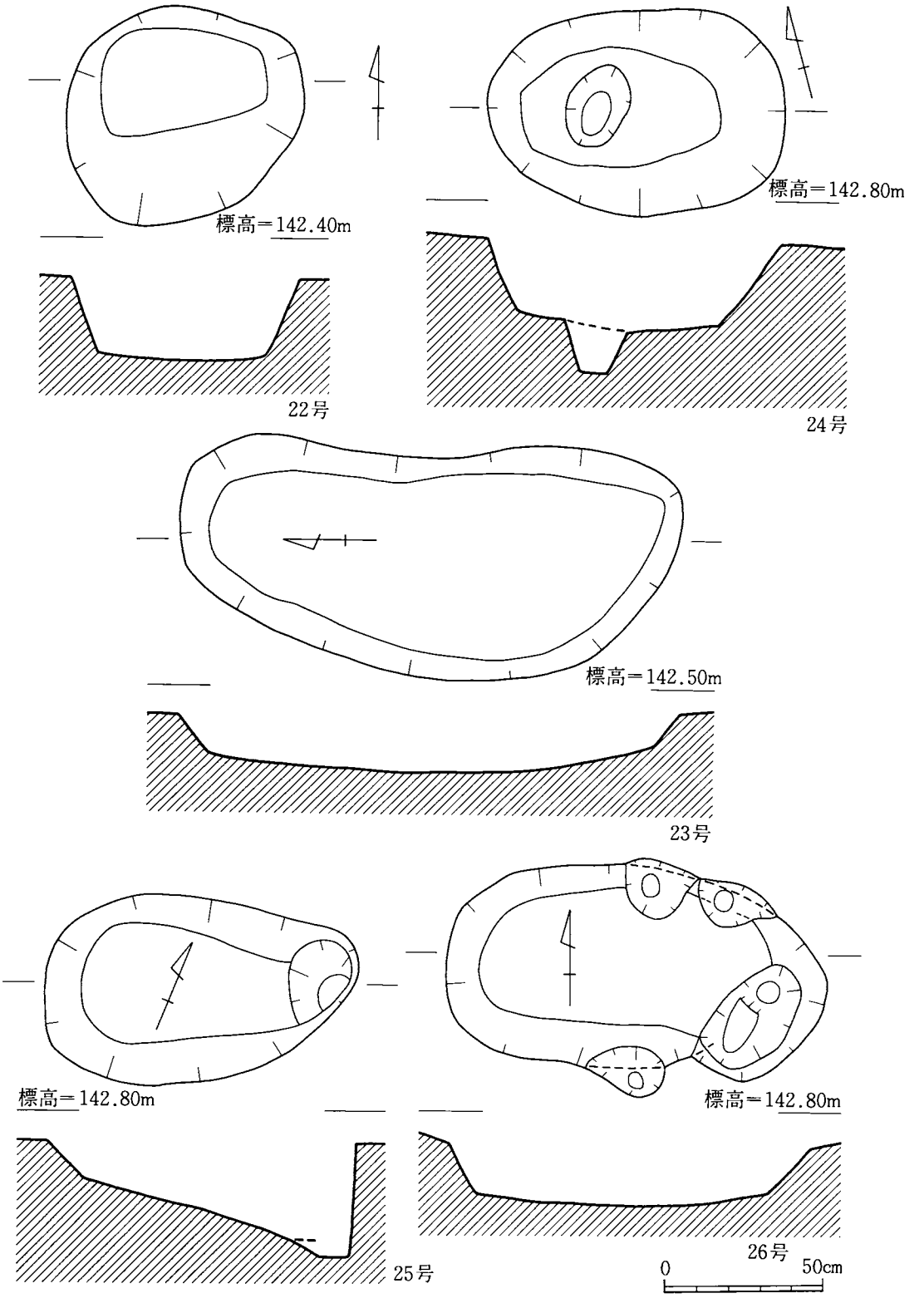
標高＝142.30m



20号

0　50cm

第61図　土坑実測図


標高＝142.40m
標高＝142.80m
22号
24号
標高＝142.50m
23号
標高＝142.80m
標高＝142.80m
25号
26号
0
50cm

第62図　土坑実測図

浅く東側が深い皿状を呈する(深さ約15～30cm)。土坑内の東端部に、平安時代のピットがある。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及ぶ。

26号土坑（第62図）

土坑の平面形は楕円形である(長軸約120cm、短軸約60cm)。断面形は深い皿状を呈する(深さ約20cm)。土坑内に4基の平安時代のピットがある。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及び、分層できない。

27号土坑（第63図）

土坑の平面形はほぼ円形を呈する(径約80～85cm)。断面形は筒状になる(深さ約40cm)。土坑の北端部に、平安時代のピットがある。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及ぶ。

28号土坑（第63図）

土坑の平面形は不整な円形である(径約70～75cm)。断面形を見ると、二段掘りになっている。皿状の掘り込みをさらに筒状に掘り込んだ形である(深さ約50cm)。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及び、分層できない。

29号土坑（第63図）

土坑の平面形はほぼ円形を呈する(径約50～55cm)。断面形は筒状になる(深さ約30cm)。土坑の南端部に、平安時代のピットがある。覆土は二層に分層できる。①層はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土で、②層はIVb層に類似した暗褐色弱粘質土である。

30号土坑（第63図）

土坑の平面形は楕円形である(長軸約140cm、短軸約75cm)。断面形は皿状を呈する(深さ約15cm)。土坑内に平安時代のピットがある。覆土はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及び、分層できない。

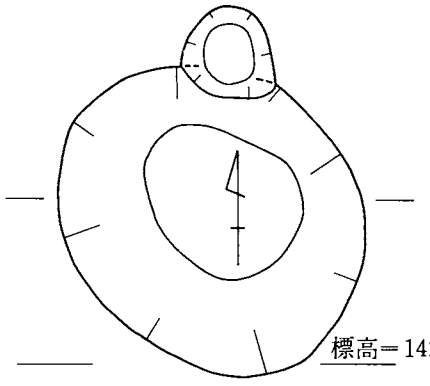
31号土坑（第63図）

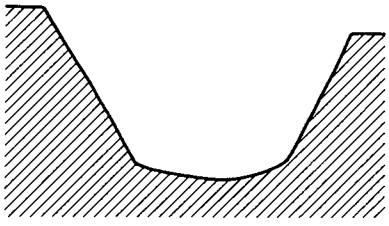
土坑の平面形は楕円形である(長軸約80cm、短軸約65cm)。断面形は皿状になる(深さ約15cm)。覆土は分層できず、IVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土が全面に及ぶ。

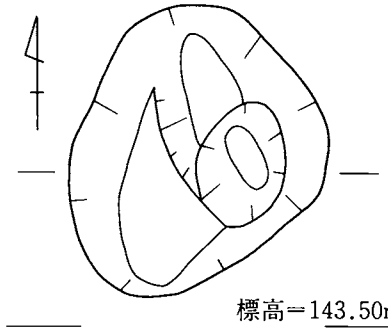
(b)の土坑

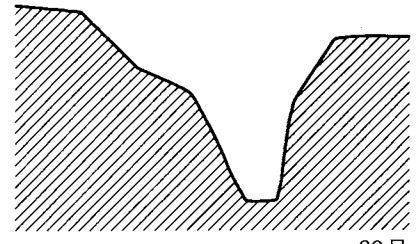
32号土坑（第64図）

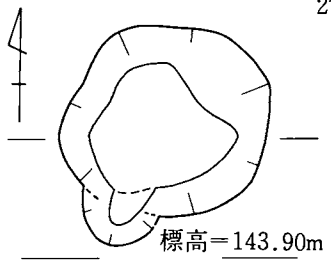
土坑の東端部が平安時代のピットで切られている。平面形は楕円形を呈すると思われる(推定長軸約110cm、短軸約80cm)。断面形は深い皿状になる(深さ約30cm)。覆土は四つに分層できる。①層はIVb層とほぼ同一の黄褐色粘質土、②層は暗黄褐色粘質土、③層は黒褐色弱粘質土、④層は暗褐色弱粘質土である。②・③・④層はV層に類似した層である。①層より小土器片、③層より磨石片が出土した。

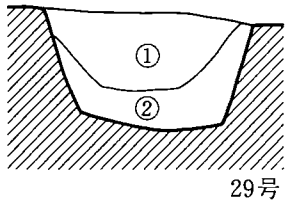

標高＝142.60m

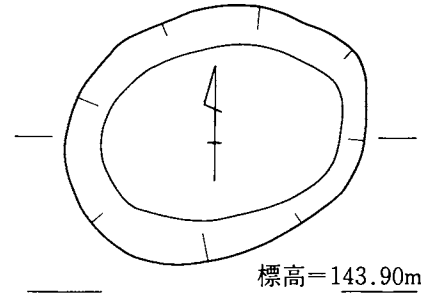

27号

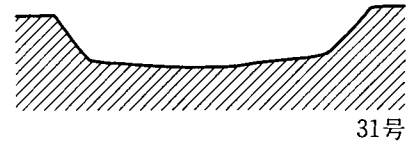

標高＝143.50m

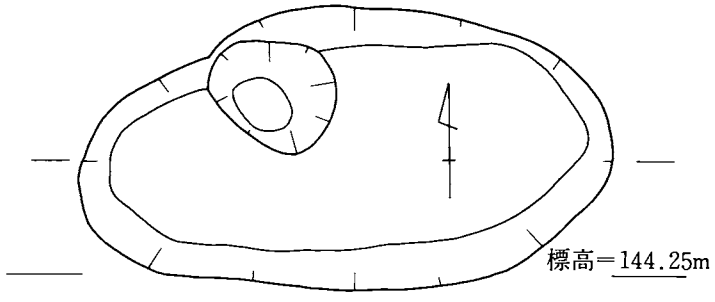

28号

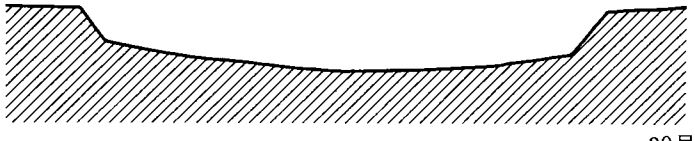

標高＝143.90m


①
②
29号


標高＝143.90m


31号


標高＝144.25m


30号

0
50cm

第63図　土坑実測図

33号土坑（第64図）

平面形は不整な楕円形を呈する（長軸約180cm、短軸約70～85cm）。断面形は皿状になる（深さ約17cm）。土坑内の東寄りに平安時代のピットがある。覆土は二層に分層できる。①層はIVｂ層とほぼ同一の黄褐色粘質土、②層はV層に類似した淡暗黄褐色粘質土である。

34号土坑（第64図）

平面形は隅丸方形を呈する（約110×約90cm）。断面形は深い皿状になる（深さ約20cm）。覆土は四つに分層できる。①層はIVｂ層とほぼ同一の黄褐色粘質土、②層はIVｂ層に類似した淡黄褐色砂質土、③層は茶褐色砂質土、④層は黒褐色砂質土である。③・④はV層に類似した層である。③層中の床面直上より小土器片が出土した。

35号土坑（第65図）

平面形は楕円形を呈する（長軸約160cm、短軸約85～110cm）。断面形は皿状になる（深さ約15～20cm）。土坑内の北壁付近に平安時代のピットがある。覆土はV層に類似した淡黒褐色土が全面に及び、分層できない。

36号土坑（第65図）

平面形は不整な楕円形を呈する（長軸約120cm、短軸約90cm）。土坑の壁に沿ってほぼ円形のピット6基がさらに穿たれる（径約15～30cm）。ピットの断面形は筒状を呈する（深さ約12～20cm）。ピットを除いた断面形は皿状になる（深さ約20cm）。これらのピットは土坑に伴うものと考えられる。覆土はV層に類似した淡暗褐色土が全面に及び、分層できない。

37号土坑（第64図）

平面形は楕円形を呈する（長軸約80cm、短軸約50cm）。断面形は深い皿状になる（深さ約20～30cm）。覆土は二つに分層できる。①層はIVｂ層に類似した黄褐色砂質土、②層はV層とほぼ同一な暗褐色弱粘質土である。

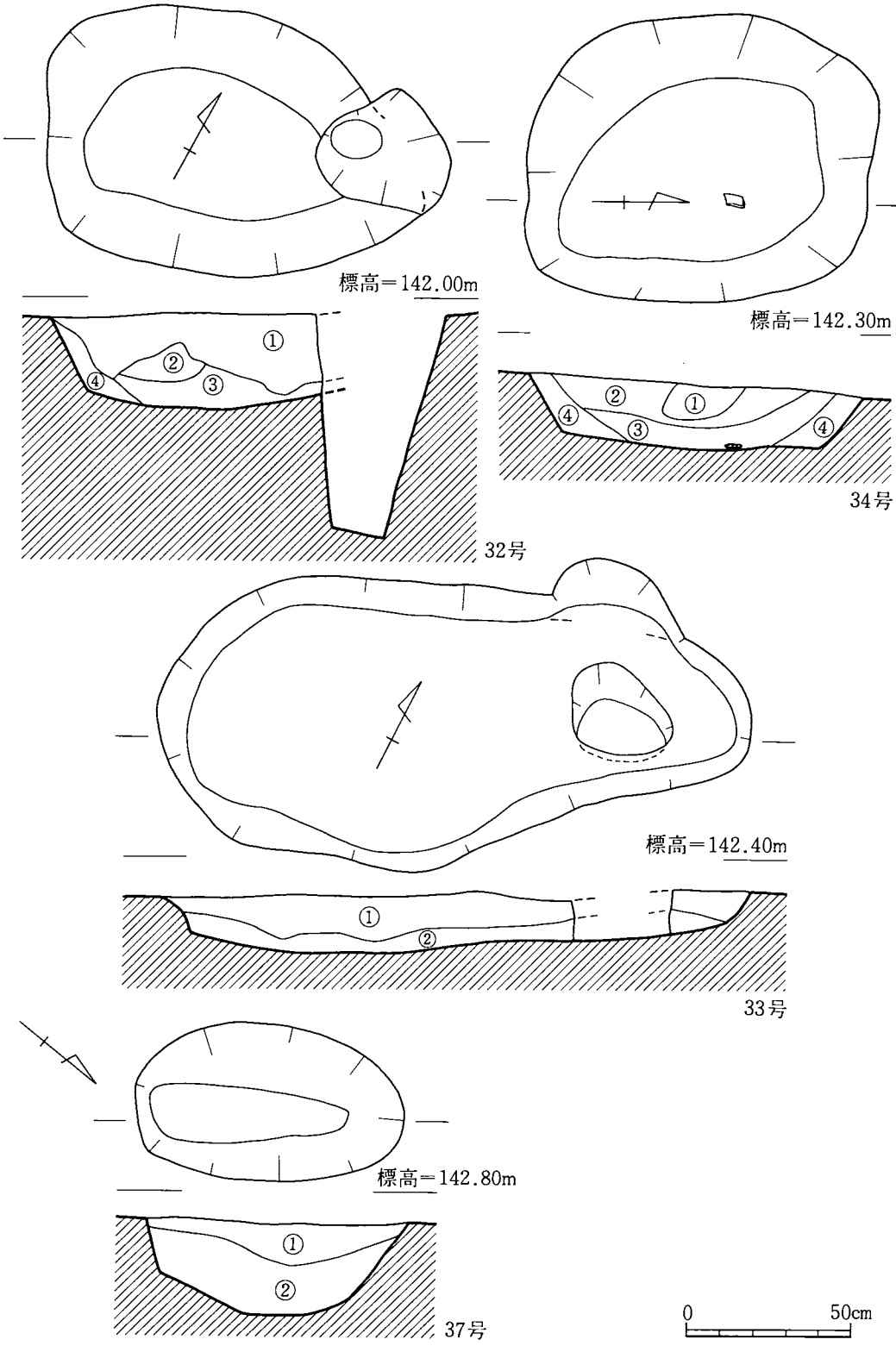
38号土坑（第65図）

平面形は不整な長方形を呈する（約120×約60cm）。断面形は深い皿状になる（深さ約15～20cm）。土坑床面の東壁寄りの所に円形のピットがある（径約20～25cm、深さ約5 cm）。このピットは土坑に伴うもので、北壁部分にあるピットは平安時代のものである。覆土は二つに分層できる。①層はIVｂ層とほぼ同一の黄褐色砂質土で、ブロック状に入る。②層はV層とほぼ同一の暗褐色砂質土である。

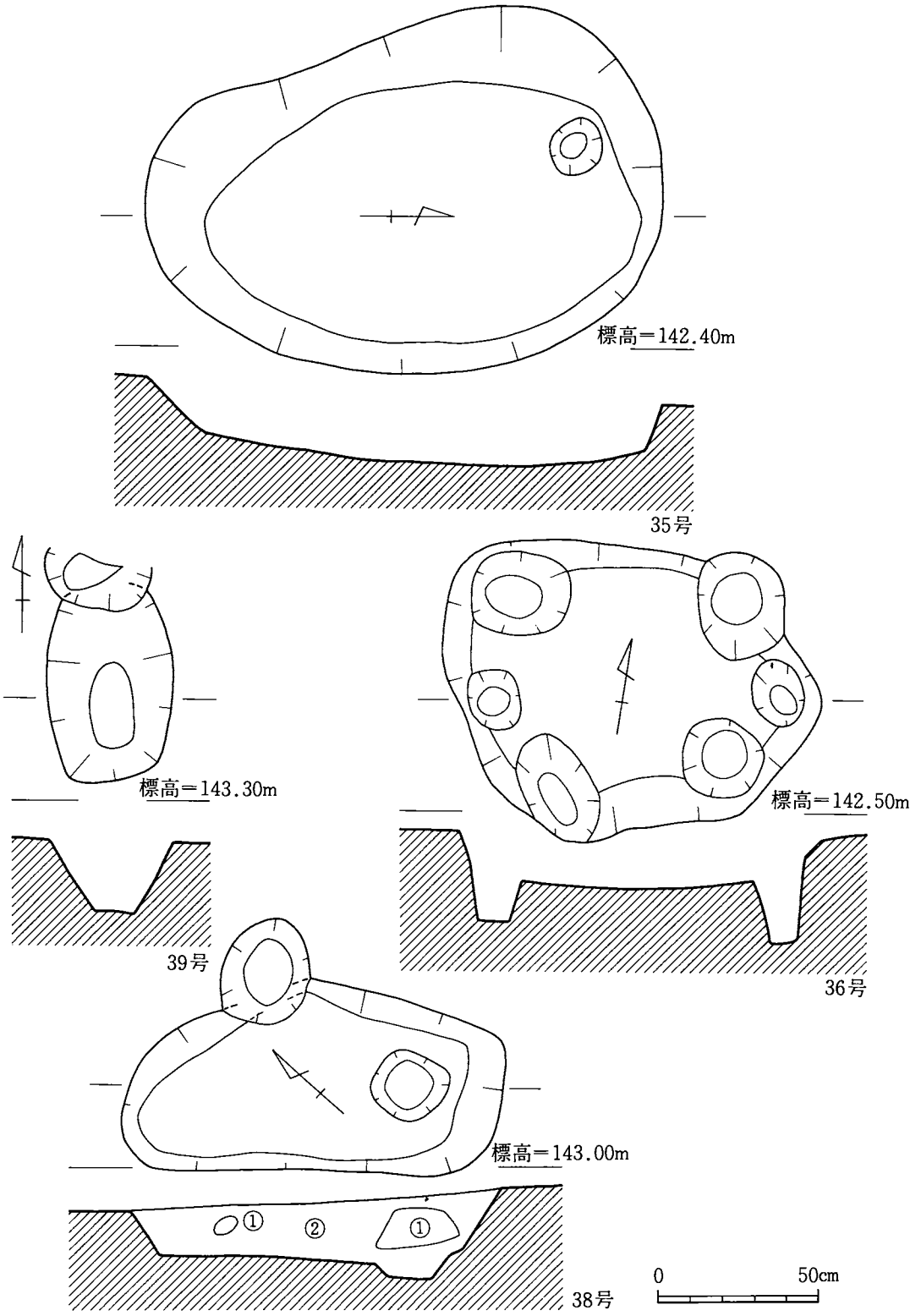
39号土坑（第65図）

土坑の北側部分が平安時代のピットによって切られている。平面形は楕円形を呈すると思われる（推定長軸約60cm、短軸約40cm）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約25cm）。覆土はV層とほぼ同一の暗褐色砂質土が全面に及び、分層できない。

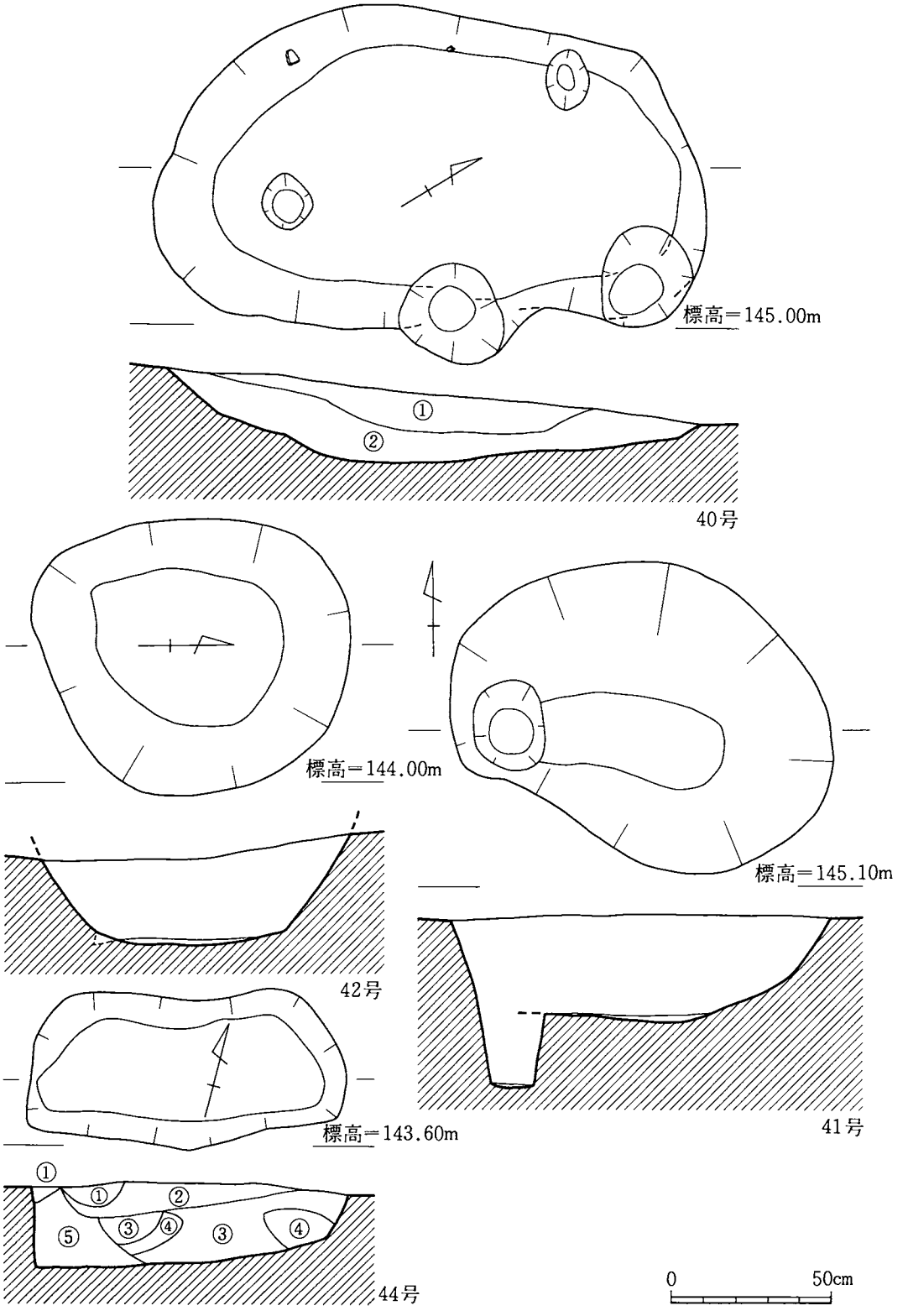
40号土坑（第66図）


標高＝142.00m
標高＝142.30m
①
②
③
④
32号
34号
標高＝142.40m
33号
標高＝142.80m
37号
0
50cm

第64図　土坑実測図


標高＝142.40m
35号
標高＝143.30m
標高＝142.50m
39号
36号
標高＝143.00m
①
②
①
38号
0
50cm

第65図　土坑実測図


標高＝145.00m
①
②
40号
標高＝144.00m
標高＝145.10m
42号
41号
標高＝143.60m
①
①
②
③
④
⑤
③
④
44号
0
50cm

第66図　土坑実測図

平面形は不整な楕円形を呈する（長軸約170cm、短軸約100cm）。断面形は皿状になる（深さ約10～20cm）。土坑内に平安時代ピット４基がある。覆土は二つに分層できる。①層はIVｂ層とほぼ同一の黄褐色粘質土、②層はＶ層とほぼ同一の暗褐色弱粘質土である。土坑西側部分の壁と床面に密着した状態で、小土器片が出土した。

41号土坑（第66図）

平面形は不整な楕円形を呈する（長軸約120cm、短軸約70～90cm）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約35cm）。土坑の西壁寄りに平安時代のピットがある。覆土はＶ層に類似する淡暗褐色砂質土が全面に及び、分層できない。

42号土坑（第66図）

平面形は不整な円形を呈する（径約85～95cm）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約30cm）。覆土は分層できなく、Ｖ層に類似する灰暗褐色砂質土が全面に及ぶ。覆土上層より小土器片が出土した。

43号土坑（第67図）

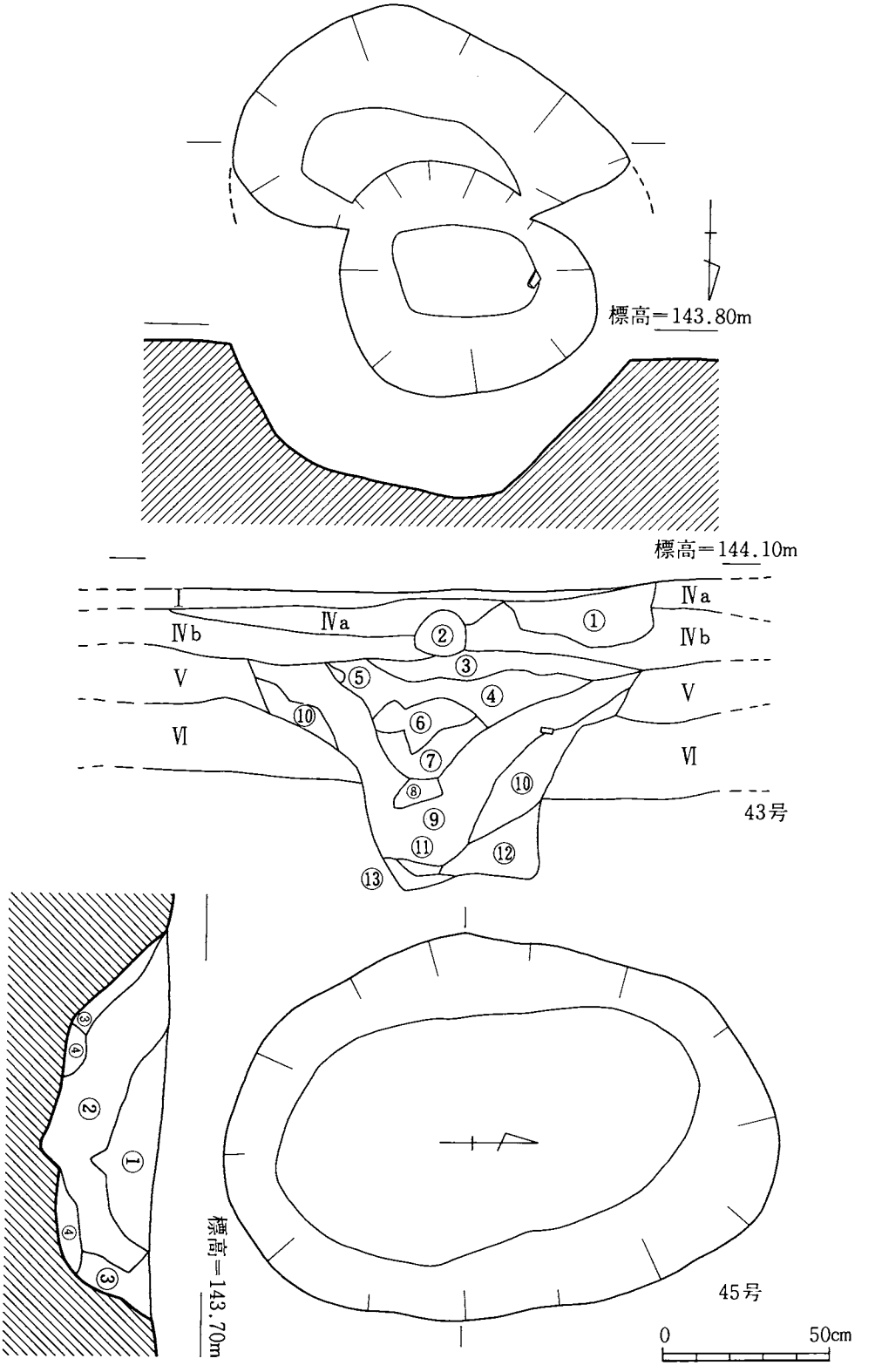
この土坑のほぼ半分が土層観察用のベルトにかかっていたために、検出面でなく本来の土坑肩部を把握することができた。土坑の平面形はもともと円形を呈すると考えられる（推定径約120cm）。土層観察用のベルト部分にかかった箇所を観察すると、土坑はＶ層上部より掘り込まれており、断面形が筒状を呈する（深さ約65cm）。土坑の覆土は③層～⑬層に分けることができる。①層・②層は覆土以外の土層で、基本土層にあてはまらないものである。①層は茶褐色砂質土で、撹乱層である。②層は暗褐色砂質土で、ブロック状に入る。③層は淡暗黄褐色砂質土。④層は暗黄褐色粘質土。⑤層は黒褐色粘質土。⑥層は淡黒褐色粘質土。⑦層は暗黄褐色弱粘質土。⑧層は暗褐色粘質土。⑨層は暗褐色土。⑩層は淡黄褐色弱粘質土。⑪層は黒褐色土。⑫層は淡黒色土で、⑪層よりやや暗い土色である。⑬層は淡灰褐色弱粘質土。⑨層はＶ層とほぼ同一であり、③層～⑧層・⑩層はＶ層に類似した層やＶ層をベースにした層である。⑪層・⑫層はVI層に類似している。⑨層と⑩層との境部分より、小土器片が出土した。

44号土坑（第66図）

平面形は不整な長方形を呈する（約100×約45cm）。断面形は深い皿状になる（深さ約15～25cm）。覆土は五つに分層できる。①層はIVｂ層に類似する黄褐色砂質土である。②層は淡暗褐色弱粘質土、③層は暗褐色粘質土、④層は淡黄褐色弱粘質土で、ブロック状に入る。⑤層は黒褐色粘質土である。②層～⑤層はＶ層に類似したり、Ｖ層をベースにしたものである。土坑覆土の各々には、量の多少はあるが焼土・カーボンが含まれる。

45号土坑（第67図）

平面形は楕円形を呈する（長軸約170cm、短軸約110cm）。断面形は深い皿状になる（深さ約30～35cm）。覆土は四つに分層できる。①層は茶褐色砂質土、②層は暗黄褐色砂質土、③層は灰


標高＝143.80m
標高＝144.10m
Ⅳa
Ⅳb
Ⅴ
Ⅵ
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
43号
標高＝143.70m
45号
0
50cm

第67図　土坑実測図

褐色土、④層は③層に近い灰黄褐色土である。①層・②層はV層に類似した層であり、③層・④層は壁土であるVI層・VII層がベースになっている。

(c)の土坑

46号土坑（第68図）

平面形は不整な楕円形を呈する(長軸約180cm、短軸約120～130cm)。断面形は皿状になる(深さ約15～20cm)。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土はVI層とほぼ同一である黒褐色砂質土が全面に及び、分層できない。

47号土坑（第70図）

平面形は楕円形を呈する（長軸約150cm、短軸約120cm)。断面形は深い皿状になる（深さ約30～35cm)。平安時代のピットが土坑内にある。覆土は分層できず、VI層とほぼ同一である黒褐色砂質土が全面に及ぶ。

48号土坑（第68図）

平面形は隅丸長方形を呈する（約115×約80cm)。断面形は浅い皿状になる（深さ約15cm)。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土はVI層とほぼ同一である黒褐色土が全面に及び、分層できない。

49号土坑（第69図）

49号土坑は大型な土坑である。平面形は不整な楕円形を呈する（長軸約320cm、短軸約280cm)。断面形は皿状になる(深さ約20～40cm)。平安時代のピットが土坑内にある。覆土は分層できず、VI層に類似する淡黒褐色砂質土が全面に及ぶ。

50号土坑（第68図）

平面形は楕円形である(長軸約115cm、短軸約50～60cm)。断面形は深い皿状になる(深さ約30cm)。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土はVI層に類似した淡黒色弱粘質土が全面に及び、分層できない。

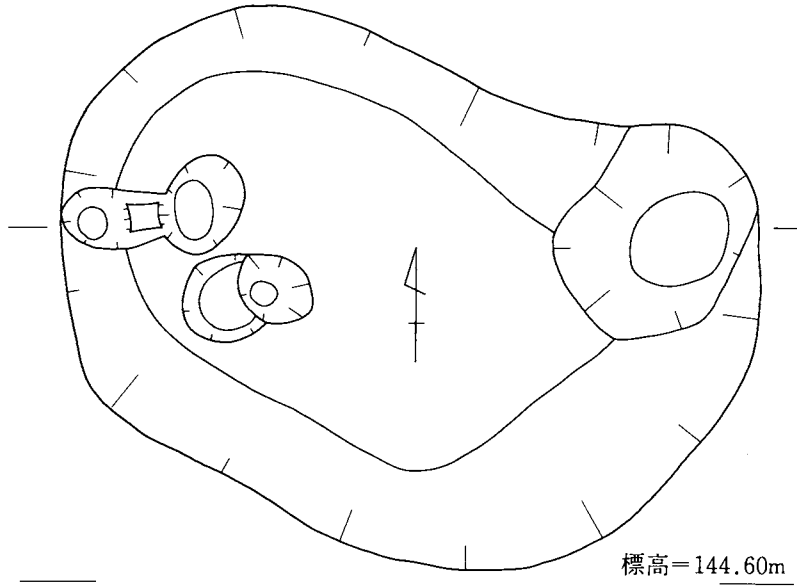
51号土坑（第72図）

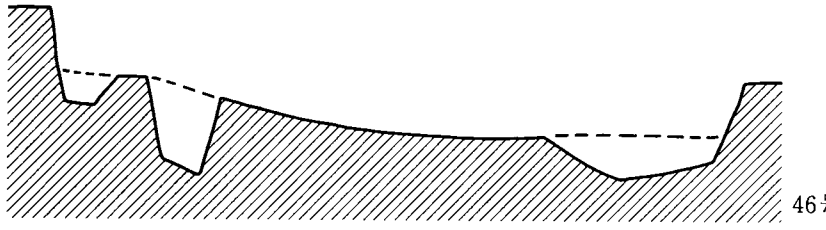
土坑の平面形は不整形なプランを呈する(最大長約200cm、最大幅約115cm)。断面形は皿状の二段掘りになる(最深部約50cm)。平安時代のピットが土坑内にある。覆土は分層できず、VI層に類似する淡黒褐色砂質土が全面に及ぶ。

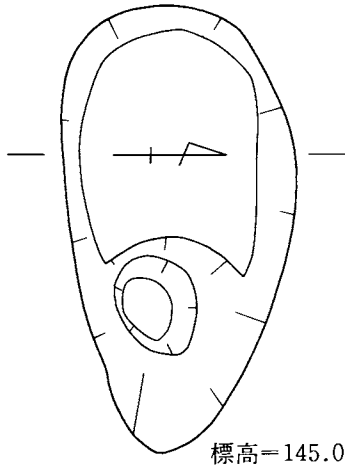
52号土坑（第70図）

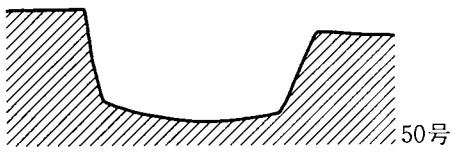
平面形はほぼ円形である(径約90cm)。断面形は筒状を呈する(深さ約40cm)。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土は三つに分層できる。①層は黒褐色弱粘質土、②層は淡黒褐色弱粘質土、③層は茶褐色砂質土である。①層・②層はVI層に類似した層である。

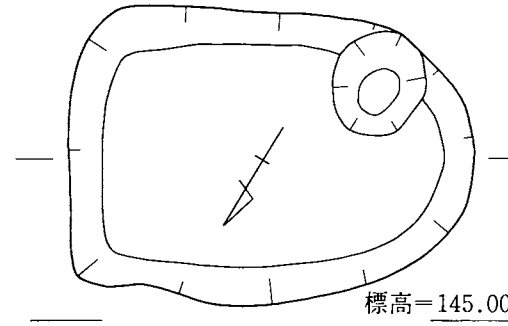
53号土坑（第71図）



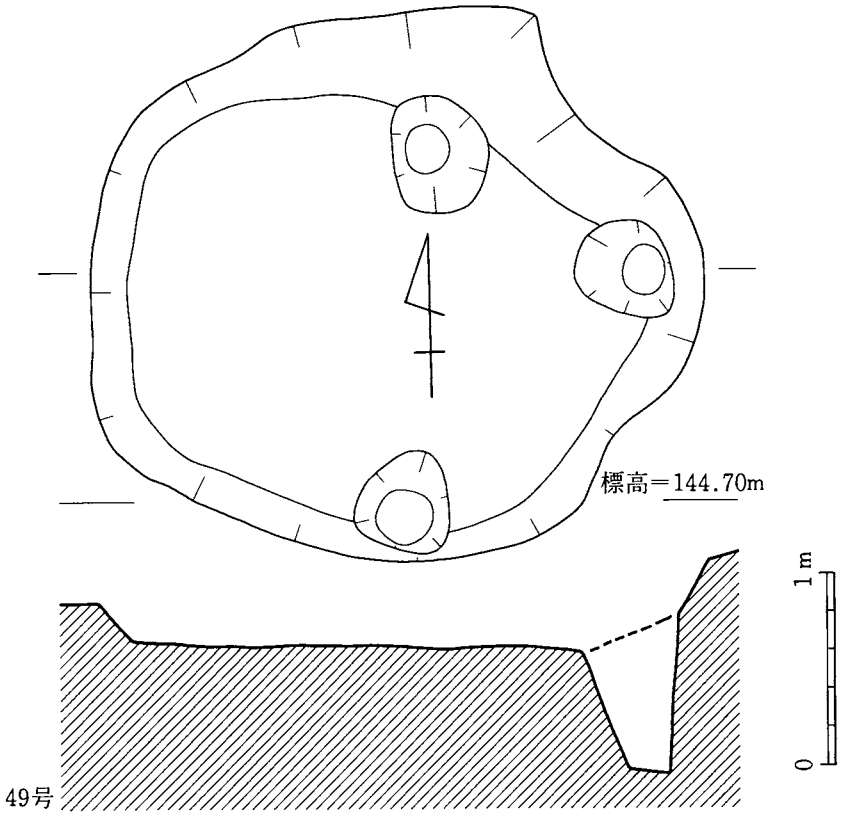








第68図　土坑実測図



第69図　土坑実測図

土坑の西壁から中央部にかけての部分が2号地下式横穴墓によって切られている。53号土坑は大型である。土坑の平面形は不整なプランを呈する（最大長約460cm、最大幅約380cm）。断面形は皿状になる（深さ約30cm）。覆土は分層できず、VI層とほぼ同一の黒褐色砂質土が全面に及ぶ。覆土上層より小土器片が出土した。

54号土坑（第70図）

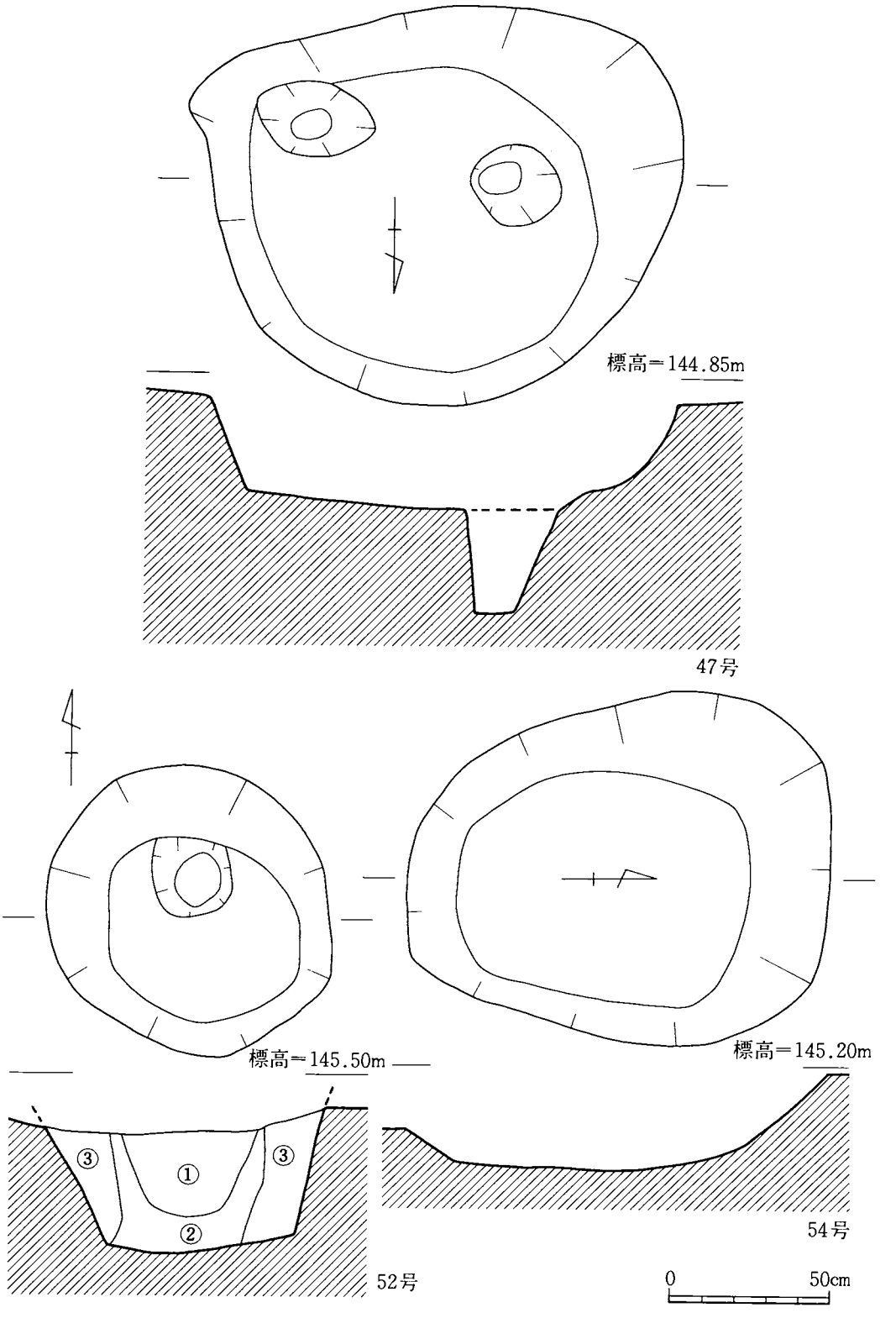
平面形は隅丸長方形であり、短辺は北側部分のほうが南側部分より長い（約130×約80～110cm）。断面形は皿状を呈する（深さ約10～25cm）。覆土はVI層に類似した黒色弱粘質土が全面に及び、分層できない。

55号土坑（第72図）

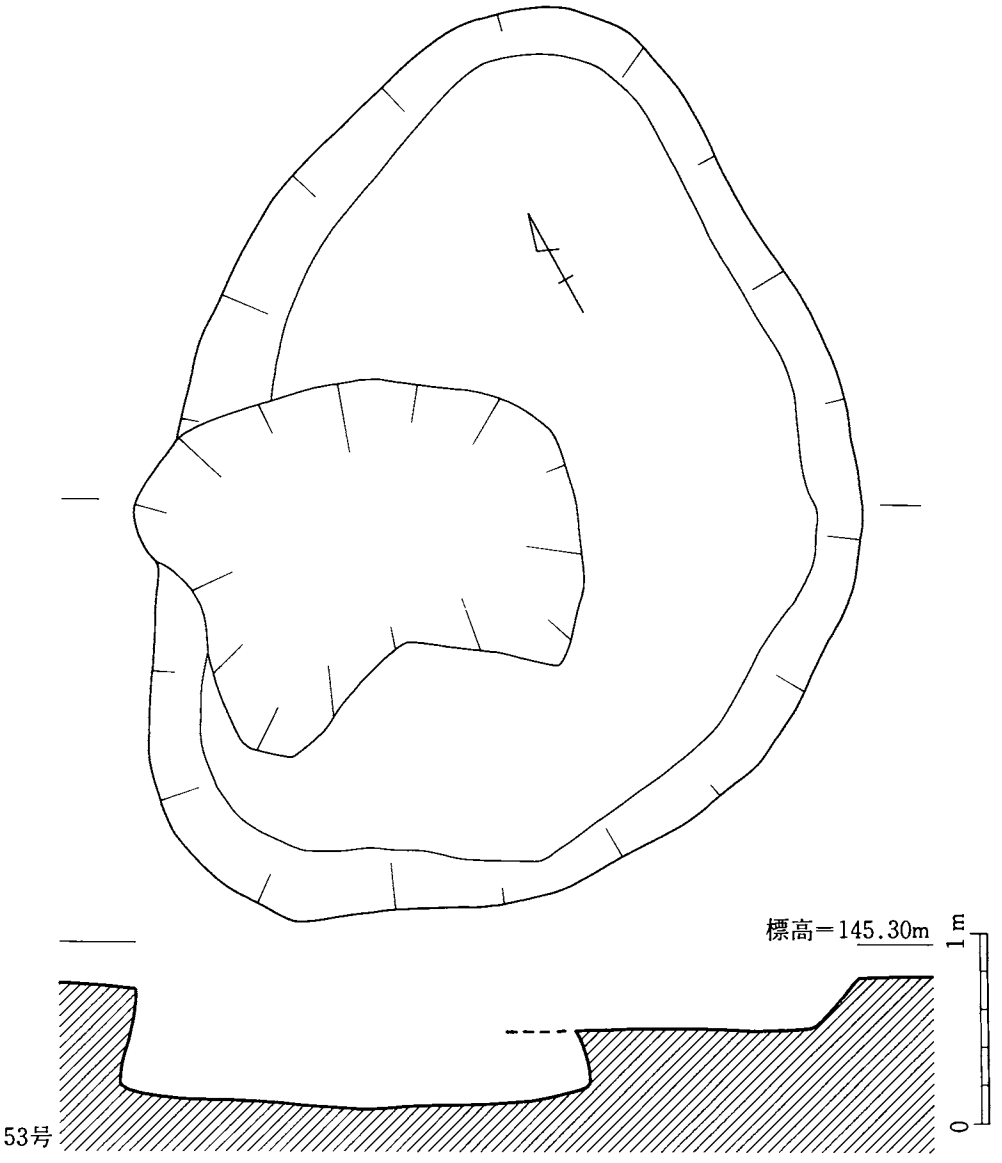
平面形は不整な楕円形である（長軸約135cm、短軸約90～110cm）。断面形は皿状の二段掘りになる（最深部約20cm）。土坑内の西壁にあるピットは平安時代のものである。覆土はVI層に類似した黒色弱粘質土が全面に及び、分層できない。

56号土坑（第73図）

平面形は楕円形を呈する（長軸約90cm、短軸約50cm）。土坑内の南壁に接してほぼ円形のピ



第70図　土坑実測図

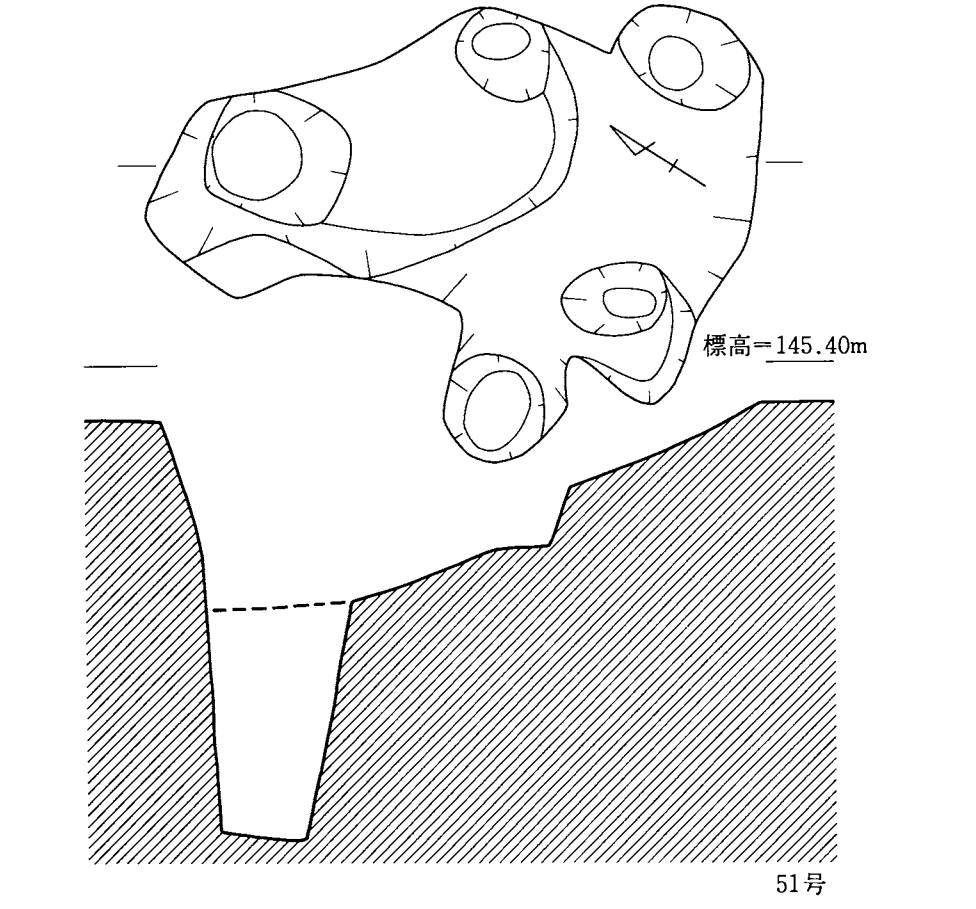


第71図　土坑実測図

ットがさらに掘り込まれる（径約15～20cm）。断面形はピットの部分が筒状になり、ピット以外の箇所が深い皿状になる（最深部約30cm）。土坑のほぼ中央肩部が火を受けて赤色化しており、その部分が硬化している。覆土はVI層をベースとした黒褐色土であり、多量の焼土・カーボンを含む。

57号土坑（第73図）

平面形は隅丸長方形である（約145×約100cm）。断面形は皿状を呈する（深さ約15cm）。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土はVI層に類似した淡黒色砂質土が全面に及び、



第72図　土坑実測図

分層できない。

58号土坑（第73図）

平面形は不整形を呈する（最大長約105cm、最大幅約60cm）。断面形を見ると、二段掘りになっている。土坑のほぼ中央より東側部分が皿状の掘り込みで（深さ約15cm）、西側部分が筒状を呈するピットになっている（深さ約75cm）。覆土はVI層をベースとした黒褐色土であり、少量のカーボンを含む。覆土上層より小土器片・石器片が出土した。

59号土坑（第73図）

平面形は不整形を呈する（最大長約140cm、最大幅約105cm）。土坑内には5基のピットがあり、断面形で見ると皿状の掘り込み（深さ約20cm）に、さらに筒状を呈するピットを掘り込んだ状態になっている（深さ約5～15cm）。土坑の覆土はVI層に類似した黒褐色砂質土である。覆土上層より、土器片・敲石・石匙が出土した。

60号土坑（第74図）

平面形は楕円形である（長軸約140cm、短軸約110cm）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約30cm）。覆土はVI層とほぼ同一の黒色土である。覆土上層より、土器片・石鏃・石皿片が出土した。

61号土坑（第74図）

平面形は不整形を呈する（最大長約70cm、最大幅約25cm）。断面形を見ると、深い皿状の掘り込み（深さ約25cm）にさらに筒状のピット（深さ約15cm）を掘り込んでいる。覆土はVI層に類似した黒褐色弱粘質土で、焼土・カーボンを多量に含む。

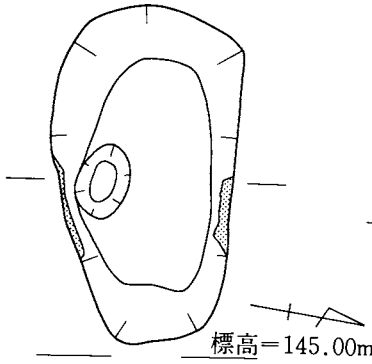
62号土坑（第74図）

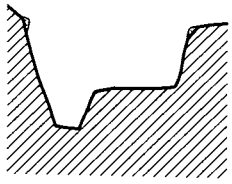
平面形は不整な楕円形である（長軸約230cm、短軸約110～130cm）。土坑の南側半分がさらにほぼ方形の平面形に掘り込まれている（約95×約85cm）。断面形を見ると、北側部分が皿状の掘り込みで（深さ約10cm）、南側部分がさらに深い皿状に掘り込まれている（深さ約40cm）。土坑内にあるピットは平安時代のものである。覆土は四つに分層できる。①層の部分は平安時代のピットで、淡黄褐色砂質土である。②層は淡黒色砂質土で、部分的な撹乱層である。③層はVI層に類似した黒褐色砂質土、④層は壁土であるVII層をベースにした灰褐色砂質土である。南側のさらに深く掘り込んだ部分の壁に張りつく状態で、土器片が出土した。また、覆土③層からも土器片が出土した。

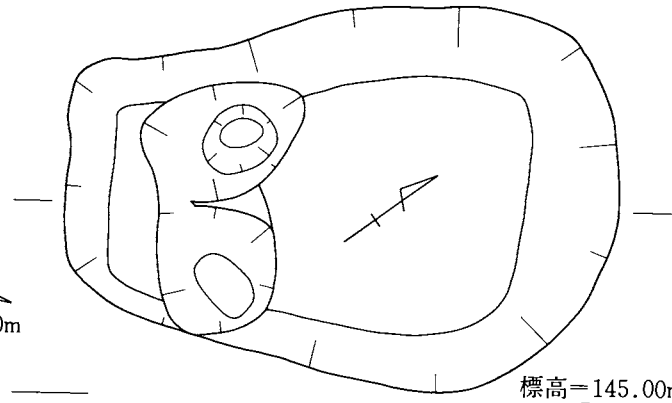
63号土坑（第75図）

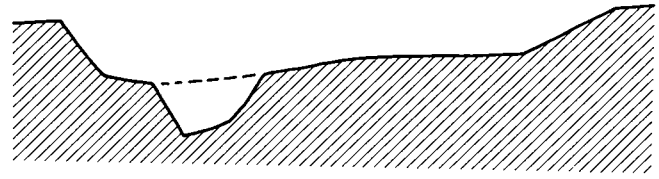
平面形は楕円形である（長軸約70cm、短軸約50cm）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約35cm）。覆土は三つに分層できる。①層は黄褐色砂質土で、ブロック状に入る。②層は暗黄褐色土、③層はVI層に類似する黒褐色土である。

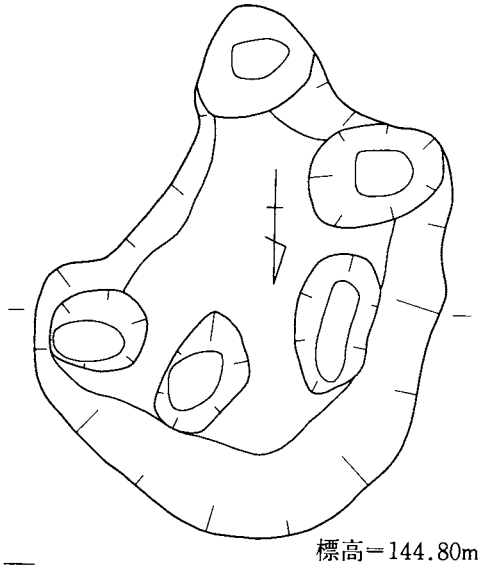
64号土坑（第75図）

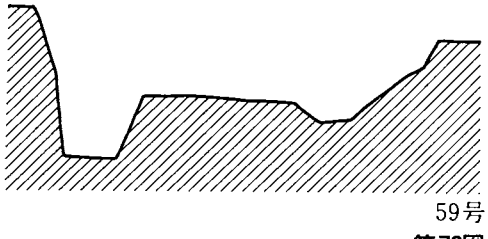


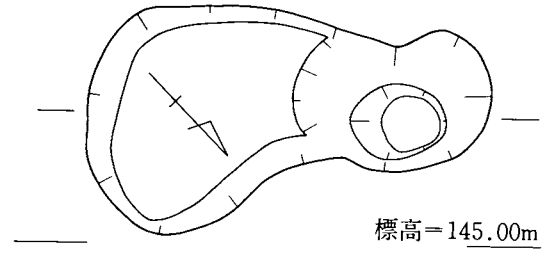


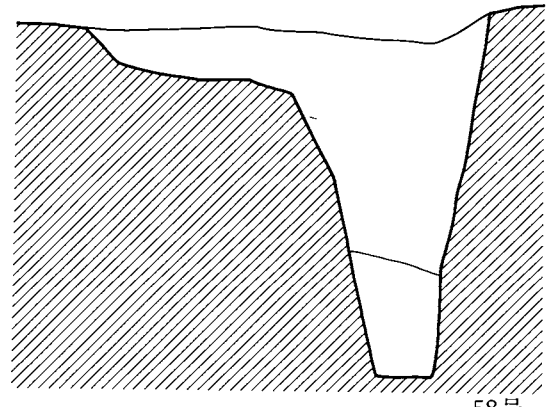


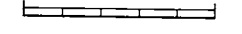




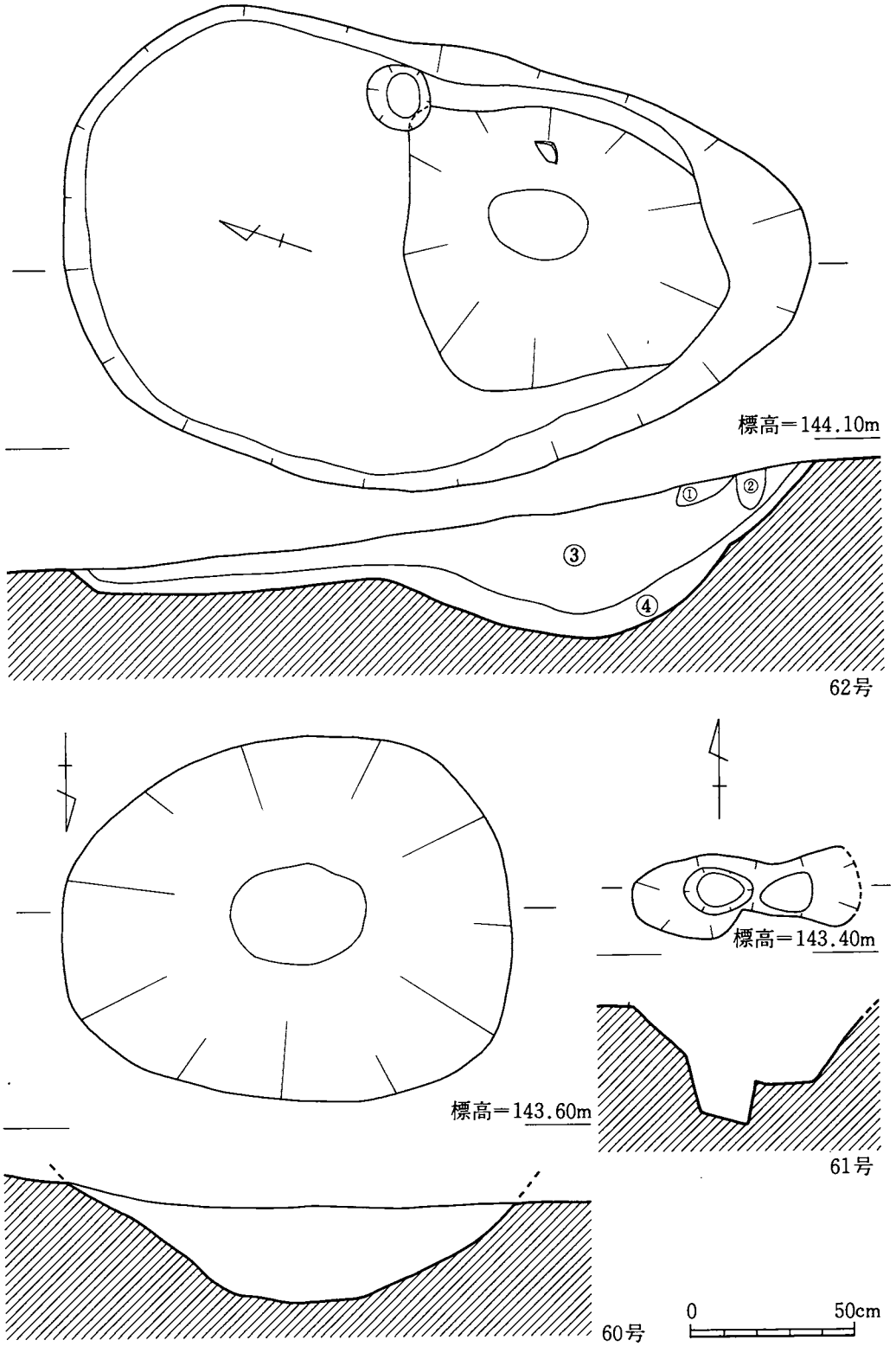




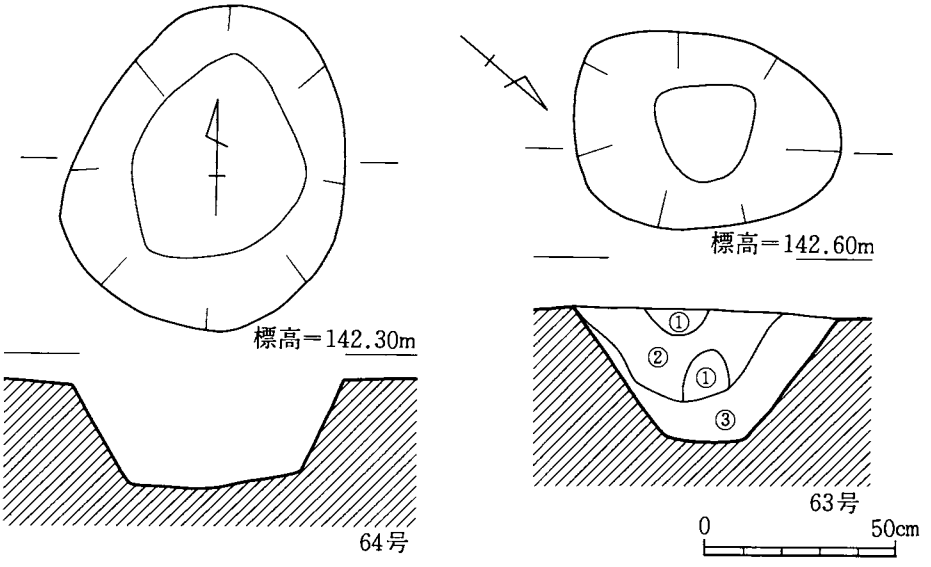




第73図　土坑実測図



第74図　土坑実測図



第75図　土坑実測図

平面形は不整な楕円形を呈する（長軸約85cm、短軸約70cm）。断面形は深い皿状になる（深さ約30cm）。覆土はVI層とほぼ同一の黒色砂質土である。覆土上層より土器片が出土した。

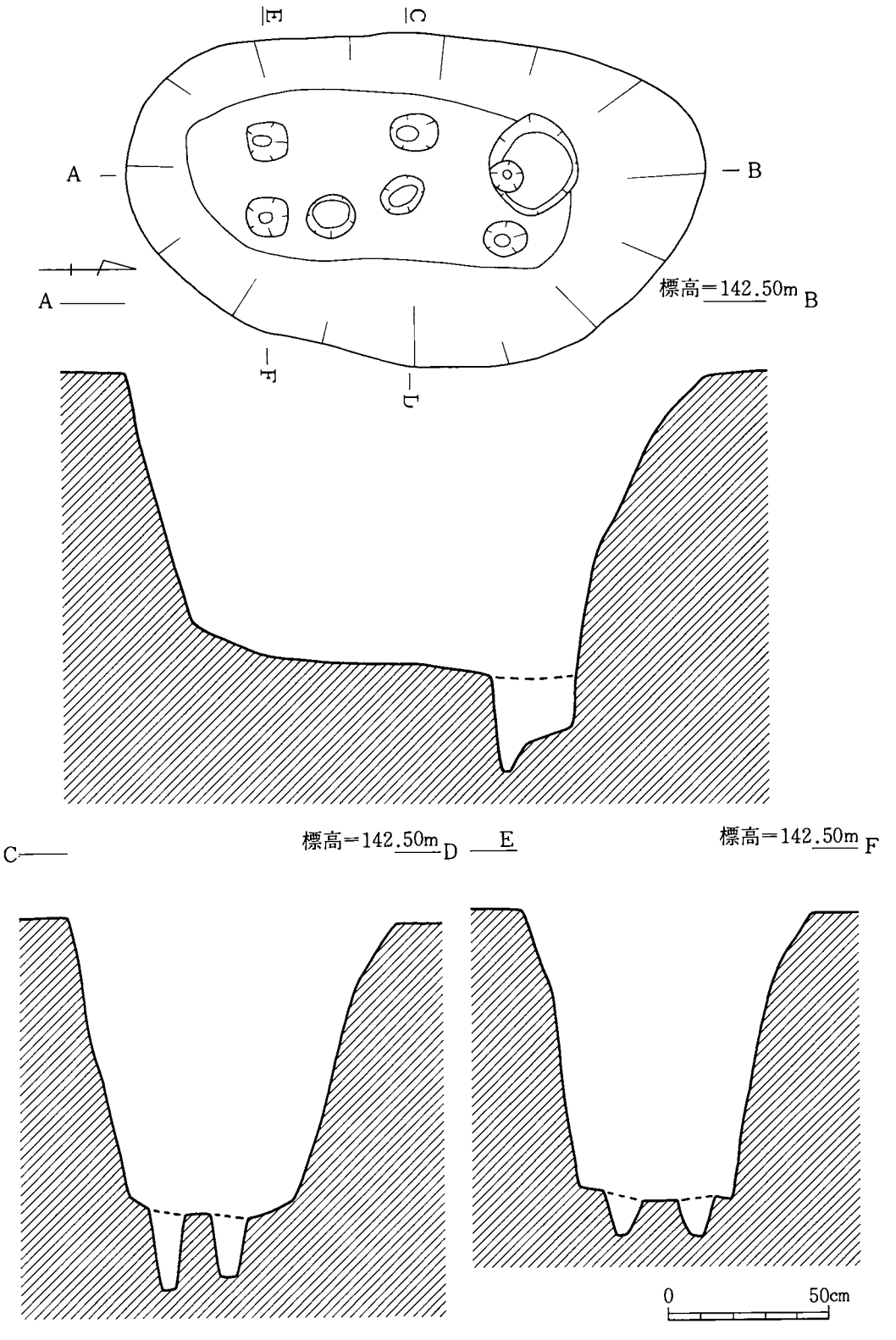
小ピットをもつ土坑

1号土坑（第76図）

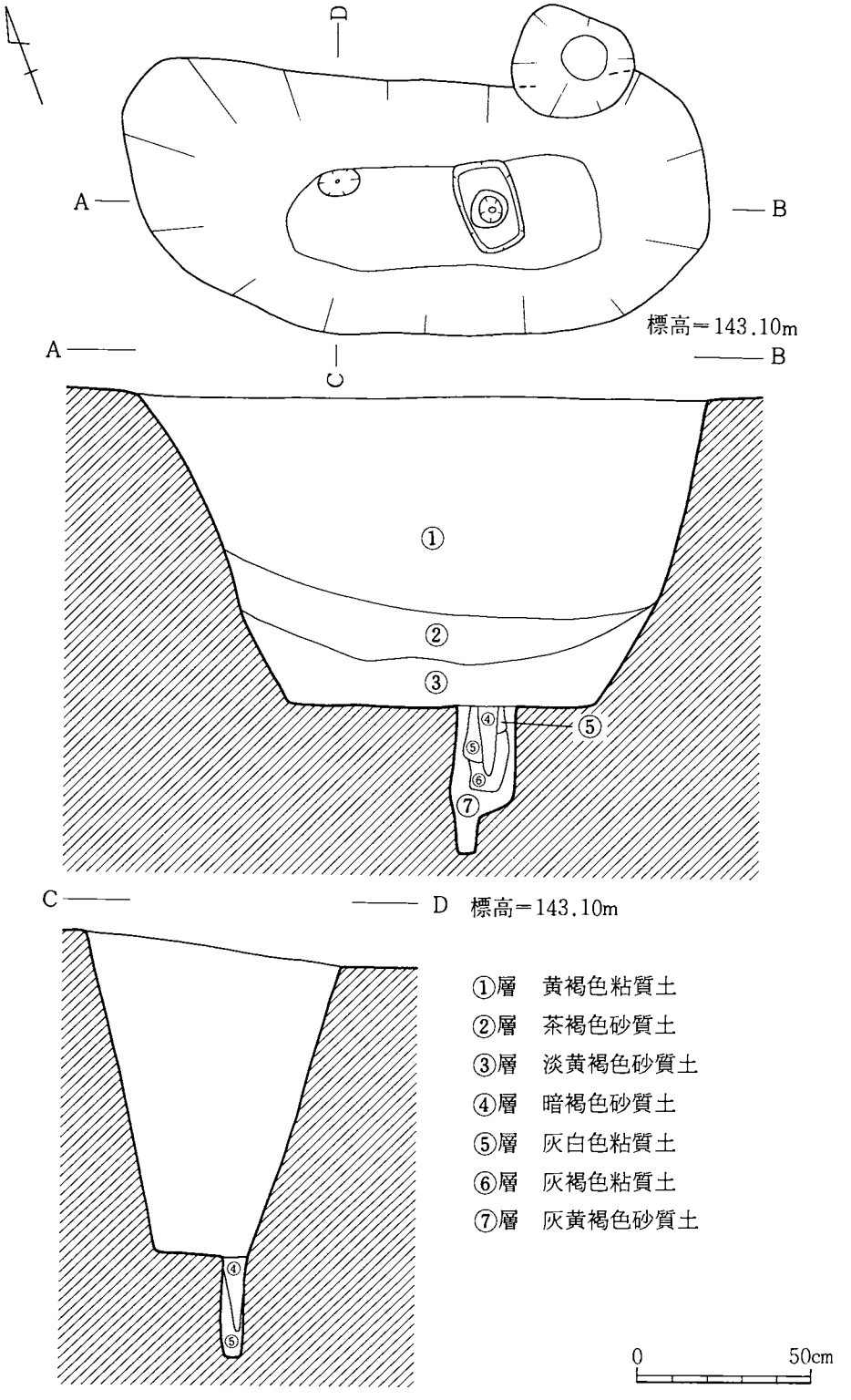
平面形は楕円形である（長軸約180cm、短軸約100cm）。土坑の床面には小ピットが7基ある。それらの中で、北端部に位置するピットは最も大きく、円形の平面形で断面形が二段掘りになる（径約30cm、最深部約30cm）。それ以外のピット6基は、ほぼ円形の平面形で断面形が筒状を呈する（径約10～13cm、深さ約13～25cm）。ピット部分を除いた土坑の断面形は、逆台形になる（深さ約90cm）。ピット部分の覆土は暗褐色粘質土、ピット以外の土坑覆土は黄褐色粘質土である。

2号土坑（第77図）

土坑の北側肩部に平安時代のピットがある。土坑の平面形は楕円形を呈する（長軸約170cm、短軸約70cm）。2基の小ピットが床面にある。東側のピットは、長方形の平面形で断面形が二段掘りになる（約25×約15cm、最深部約45cm）。西側のピットは楕円形の平面形を呈し断面形が細い筒状になる（長軸約12cm、短軸約8 cm、深さ約30cm）。ピット以外の土坑覆土は①層～③層に分層でき、ピットの覆土は④層～⑦層に分けることができる。①層はIVb層とほぼ同一である。④層は東西の2ピットにあり、下方が尖っている所が共通する。④層はしまりがなく、フカフカしている。⑤層・⑥層は粘性が強く、④層を取り囲む状態である。



第76図　小ピットをもつ1号土坑実測図



第77図　小ピットをもつ2号土坑実測図

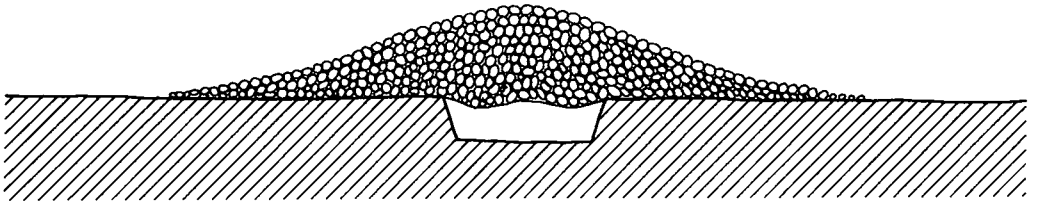
集石

1号集石（付図1・第78図）

1号集石は他の集石に比べると、構成している礫の数が多く、規模が大きい。礫の大きさは小型のもの（径約3～10cm）が多く、大型のもの（径約10cm以上）が少ない。礫の正確な総数は不明であるが、15,000個程度であろう(総重量約1092.3kg)。付図1において、礫がない空白部分は実際に礫が存在しないのではない。その部分には層序横転によって原位置を移動している礫が分布している。その部分を考慮して礫全体の分布を見ると、ほぼ円形（径約10m）を呈する範囲に礫が分布している。周辺部の礫は散在状態を呈しており、中心部に向かうほど礫の密集度は高くなる。断面図より礫分布の厚さを見ると、中心部が厚く(約50cm)、周辺部が薄い(約10～20cm)。礫間にある土はV層・VI層をベースとしたもので、それより黒味が強い。このことは出土礫の殆どが赤化（肉眼観察による）しているのと関連すると考えられる。礫を除去した後、礫分布のほぼ中央部にあたる箇所に土壙1基を検出した。土壙の南端部は層序横転によって切られている。土壙本来の平面形は楕円形を呈すると思われる(長軸約150cm＋α、短軸約120cm)。土壙の断面形は皿状を呈する（深さ約15cm)。土壙を検出したのが礫を除去した後であるため、本来の掘り込みより浅いと考えられる。土壙の覆土は黒色土で、覆土中より30個の礫が散在状態で検出された。土壙床面直上の北・南・東・西側の四箇所と土壙外の一箇所より土壌サンプリングを行った。その資料の分析・報告については、付論に掲載している。

集石下部より検出した土壙と礫の分布状態より判断すると、土壙を中心にして礫を積み上げたと考えられる。その積み上げ方は、土壙の真上が最も高くなるようにし、周辺部にいくにつれて低く積むようにしたと思われる(第78図)。付図1に示した礫の分布状態は、上記のように礫を積んでいたものが周辺に拡散した状態のものと考えられる。

検出した23基の集石の中で、1号集石は他の集石に比べて、規模が大きく異なる性格をもつと考えられる。それで、1号集石以外の2号～23号集石を形態によって次のように分類した。



第78図　1号集石断面模式図

Ⅰ類　掘り込みをもたないもの。
- A　礫がまとまって分布するもの。
- B　礫の分布が散在状態であるもの。

Ⅱ類　掘り込みをもつもの。
- C　掘り込み外にも礫が分布するもの。
- D　礫の殆どが掘り込み内に分布するもの。
- E　掘り込みの下部に石を配置するもの。

Ⅱ類に分類した掘り込みは、礫が出土した時には確認できず、掘り込みより上位にある礫を除去後に検出したものである。

Ⅰ類－Aの集石

6号集石（第79図）

礫がほぼ円形の範囲に密集する（径約60cm）。礫は小型のものが多い（5 cm前後）。礫はV層下部からVI層上面にかけて分布している（礫分布の厚さ約10cm）。礫の総数は37個（総重量約8.9kg）を数える。礫の赤化現象（肉眼観察による）は不明である。

8号集石（第79図）

礫の分布状況はほぼ円形を呈し、礫の密集度は弱い（径約70cm）。礫は小型（5 cm前後）のものが多いが、大きめの礫も混じる（15cm前後）。礫はV層下部からVI層上面にかけて分布している（礫分布の厚さ約20cm）。礫の総数は33個（総重量約10.3kg）を数える。礫の赤化現象（肉眼観察による）は不明である。

18号集石（第80図）

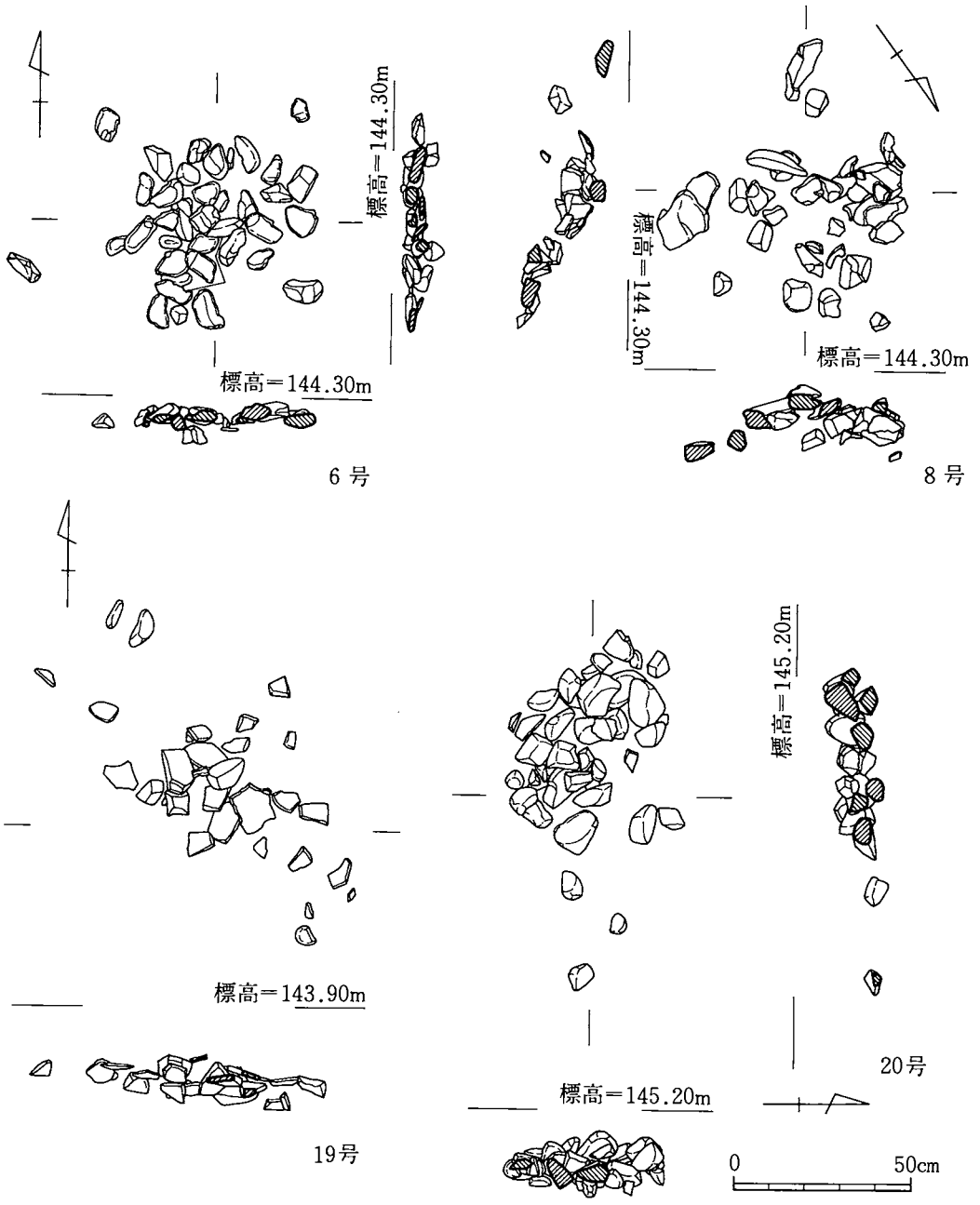
礫が大きく2箇所に分かれて分布している。東側に集まる礫が多く（約100×50cmの範囲）、西側に集まる礫が少ない（径約30cmの範囲）。礫は中型（10cm前後）のものが多く、小型の礫が少ない（5 cm前後）。礫はV層下部からVI層上面にかけて分布している（礫分布の厚さ約10cm）。礫の総数は30個（総重量約12.5kg）を数える。赤化（肉眼観察による）している礫は少ない（約6.6%）。

19号集石（第79図）

礫が円形の範囲に集まり（径約60cm）、その周辺は散在状態である。礫は中型（10cm前後）のものと小型（5 cm前後）のものがほぼ半分の割合である。礫はV層下部からVI層上面にかけて分布している（礫分布の厚さ約10cm）。礫の総数は33個（総重量約7.7kg）を数える。殆どの礫が赤化（肉眼観察による）している（約80%）。集石内で小土器片（2）と磨石（1）が出土した。

20号集石（第79図）

20号集石は第1凹部内で検出した。礫は楕円形の範囲に集まる（長軸約60cm、短軸約40cm）。礫は小型（5 cm前後）のものが少なく、中型のもの（10cm前後）が多い。礫はV層中に分布



第79図　集石実測図

している（礫分布の厚さ約15cm）。礫の総数は37個（総重量約16.7kg）であり、その中で赤化（肉眼観察による）している礫は約30％を占める。集石内より小土器片（1）を検出した。

23号集石（第80図）

礫は楕円形の範囲に集中して分布している（長軸約120cm、短軸約80cm）。礫は中型（10cm前後）のものと小型（5 cm前後）のものがほぼ半分の割合である。礫はVI層中に分布している

（礫分布の厚さ約30cm）。礫の総数は43個（総重量約4.9kg）を数え、殆どの礫が赤化（肉眼観察による）している（約75%）。集石内で小土器片（2）が出土した。

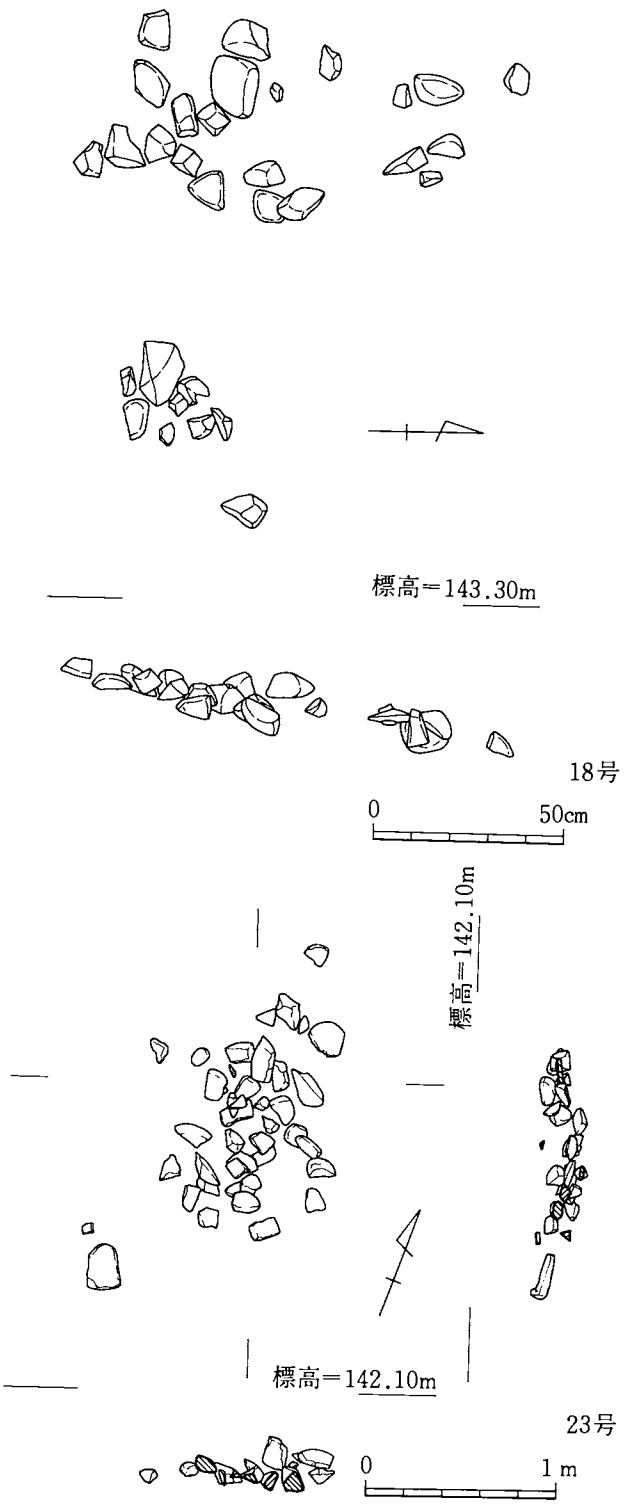
Ⅰ類－Bの集石

4・5号集石（第81図）

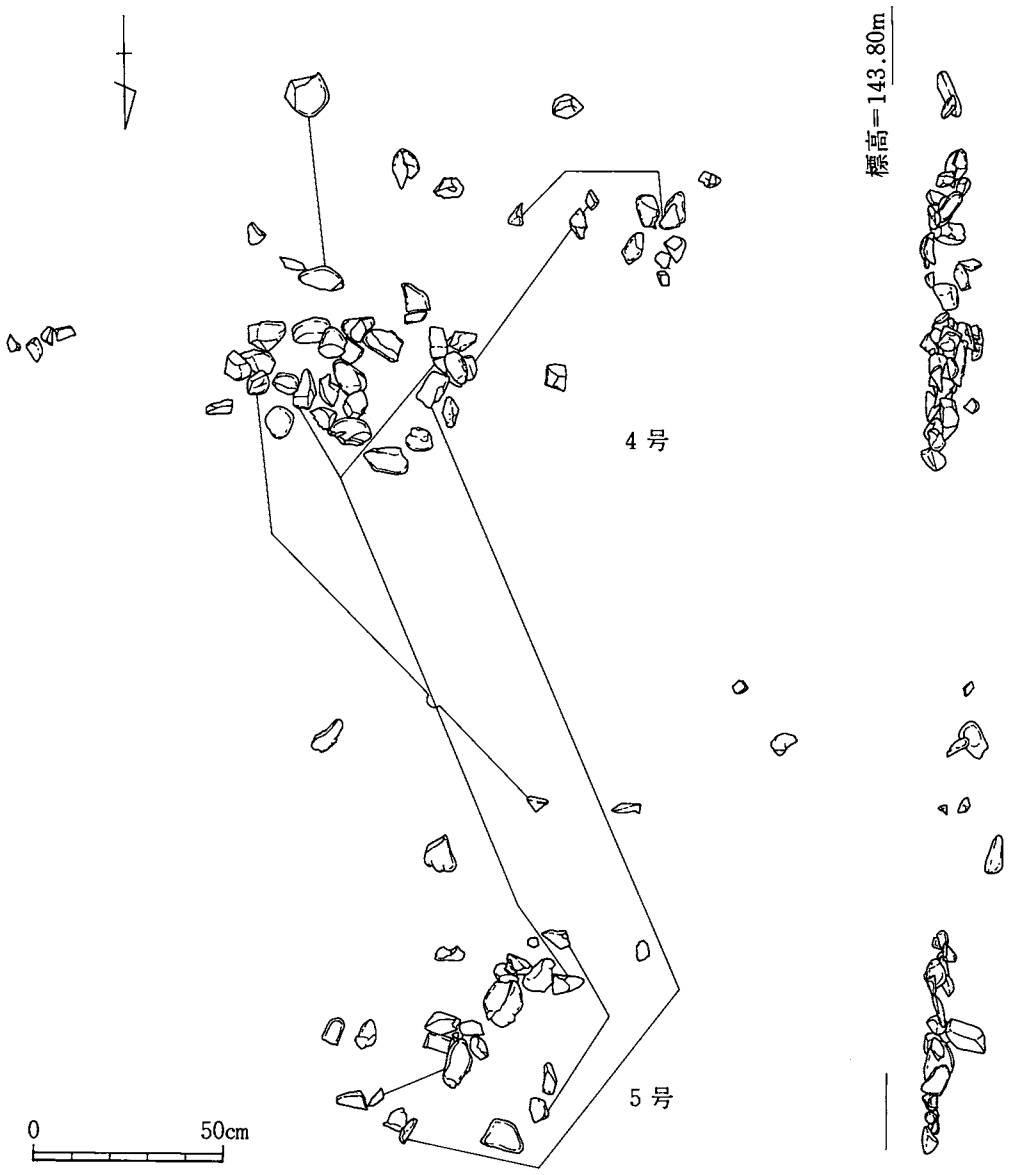
この集石は調査時には2基の集石と考えていた。しかし、整理時に4・5号集石の礫に接合関係（6例）があることが分かったので、遺構番号を4・5号集石としながらも1基の集石として扱う。礫は大きく2箇所に分かれて分布し、散在状態を呈している（礫分布の範囲約300×約200cm）。礫は中型（10cm前後）のものが多く、小型（5 cm前後）のものが少ない。礫はV層下部からVI層上面にかけて分布している（礫分布の厚さ約15cm）。礫の総数は85個（総重量約30kg）を数える。礫の赤化現象（肉眼観察による）は不明である。集石内で小土器片（1）・黒曜石の剝片（1）が出土した。

9号集石（第82図）

礫は約150×約100cmの範囲に散在状態を呈して分布している。礫は中型（10cm前後）のものが多く、小型（5 cm前後）のものが少ない。礫はV層下部からVI層上面にかけて分布している（礫分布の厚さ約10cm）。礫の総数は47個（総重量約24.1kg）を数える。礫の赤化現象（肉眼観察



第80図　集石実測図



第81図　4 号・5 号集石実測図

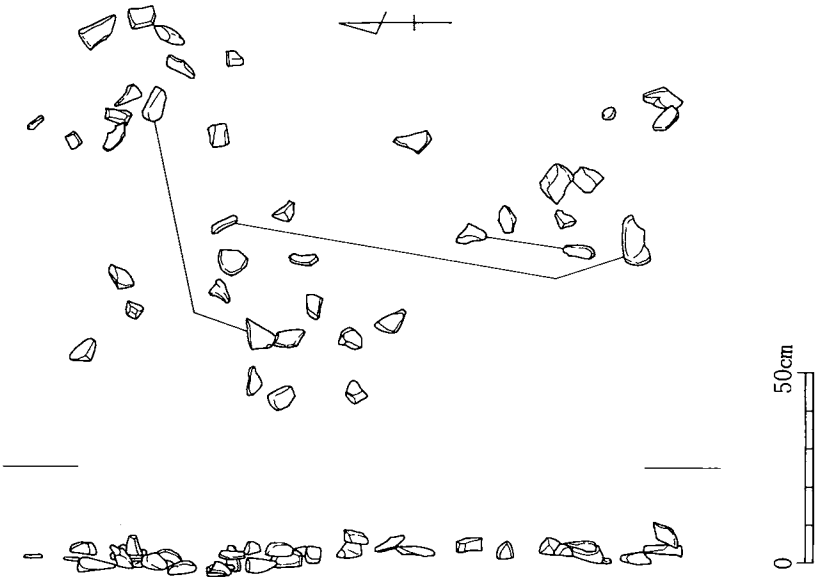
による）は不明である。礫間の接合が 2 例認められる。集石内で小土器片（4）が出土した。

11号集石（第83図）

11号集石の礫は散在状態を呈して広範囲に分布している（約10×約 7 m）。礫は小型のもの（5 cm 前後）がその殆どを占め、中型のもの（10cm 前後）が少数混じる。礫はV層下部からVI層上面にかけて分布している（礫分布の厚さ約15～20cm）。礫の総数は314個（総重量約161.8kg）を数え、その中で赤化（肉眼観察による）している礫は約30%である。2 例の接合関係が礫間で認められる。集石内より、小土器片（22）・石匙（1）・スクレイパー（3）・石皿（2）・磨

第82図　集石実測図

第83図　11号集石実測図



第84図　22号集石実測図

石類（2）を検出した。

15号集石（第82図）

礫がほぼ円形を呈する範囲に散在している（径約130cm）。礫は中型のもの（10cm前後）が多く、小型のもの（5 cm前後）が少ない。礫はVI層上面中で検出した（礫分布の厚さ約10～25cm）。礫の総数は39個（総重量約14.6kg）を数える。その中で赤化（肉眼観察による）している礫は約28％を占める。集石内より小土器片（2）が出土した。

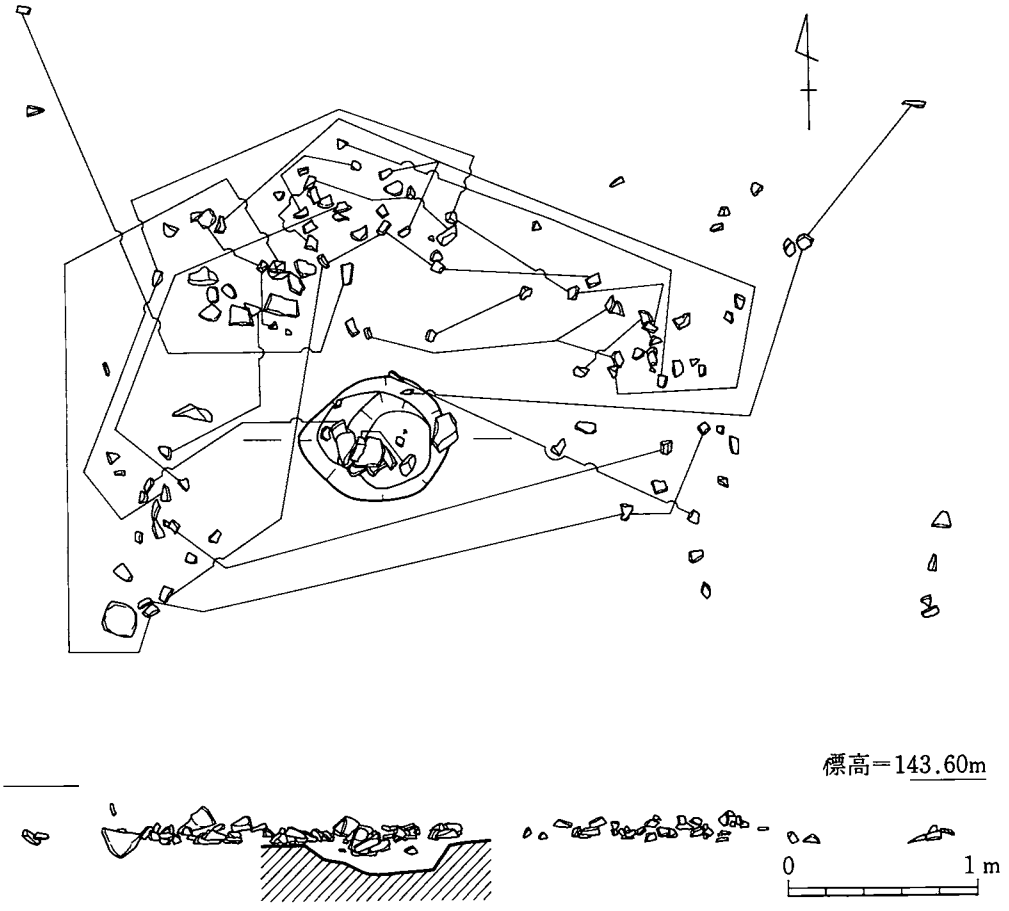
22号集石（第84図）

礫が散在状態を呈して分布している（礫分布の範囲約180×約110cm）。礫は小型のもの（5 cm前後）が多く、中型のもの（10cm前後）が少数混じる。礫はVI層上面に分布している（礫分布の厚さ約5～15cm）。礫の総数は39個（総重量約7.9kg）を数え、その中で赤化（肉眼観察による）している礫は少ない（約3％）。3例の接合関係が礫間で確認できた。

II類－Cの集石

7号集石（第85図）

礫がほぼ円形の範囲に散在状態を呈して分布している（径約250cm）。そのほぼ中央部に平面形が円形で、断面形が二段の皿状になる掘り込みがある（径約60cm、深さ約10cm）。掘り込みの覆土は分層できず、VI層に類似した黒色土で、微量のカーボンを含む。掘り込みの床面は硬化している。掘り込み内に位置する礫は少なく、礫は全体的に掘り込みより浮いた状態を呈している。礫の殆どは小型のもの（5 cm前後）で、中型のもの（10cm前後）が少数混じる。掘



第85図　7号集石実測図

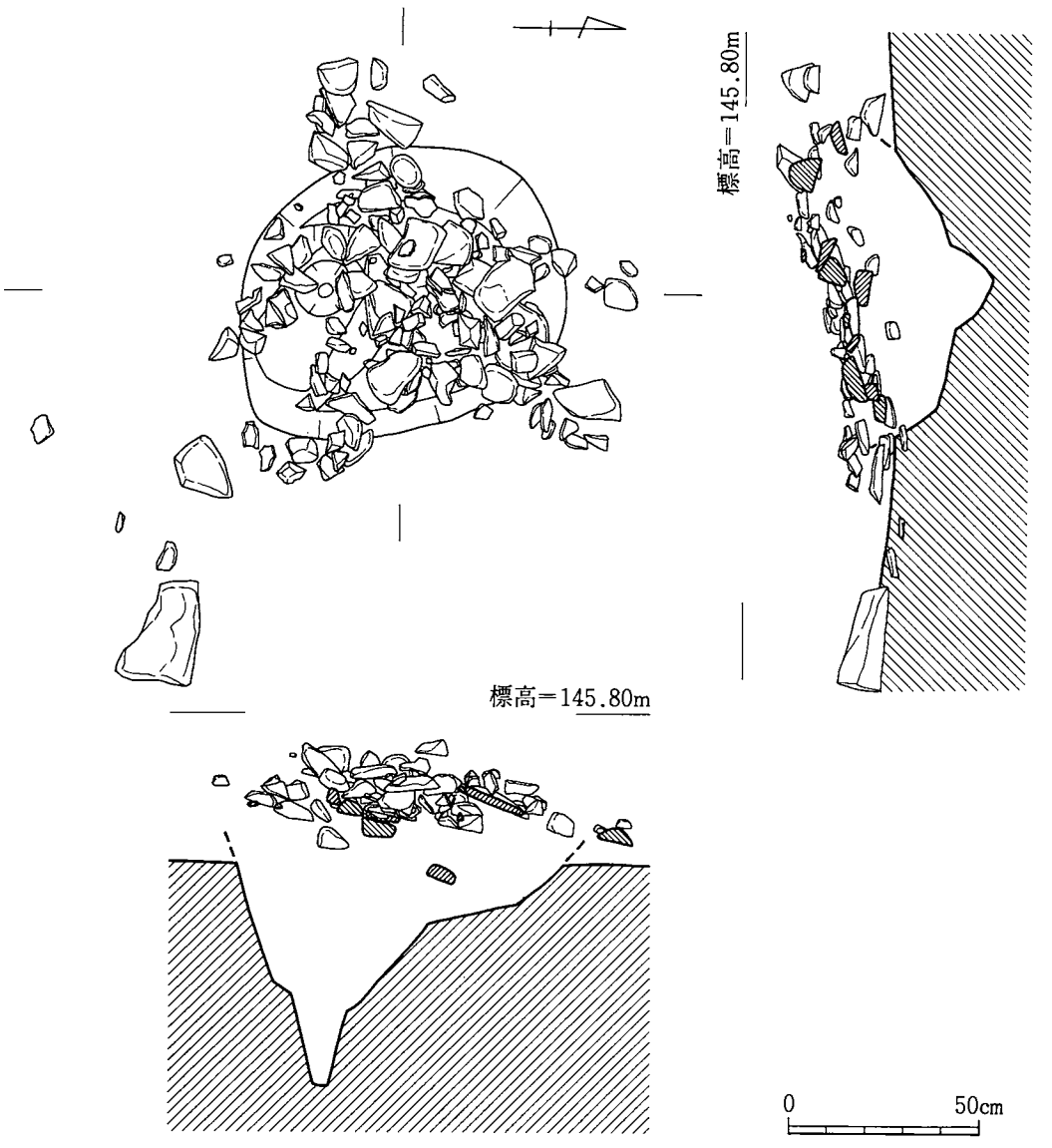
り込み外の礫はVI層上面に分布している（礫分布の厚さ約10～20cm）。礫の総数は116個（総重量約28.8kg）を数える。礫の赤化現象（肉眼観察による）は不明である。15例の接合関係が礫間で確認できた。集石内より、小土器片（5）・磨石類（4）が出土した。

10号集石（第86図）

10号集石には、平面形が円形、断面形が二段掘りになる掘り込みがある（径約80cm、深さ約60cm）。掘り込みの覆土は分層できず、VI層に類似した灰黒褐色砂質土で、微量のカーボンを含む。その検出した掘り込みの上位に礫が密集している。礫の総数は151個（総重量約43.6kg）を数える。礫は大型のもの（20cm前後）、中型のもの（10cm前後）で全体の殆どを占め、小型のもの（5 cm前後）が少数である。礫はVI層上面に分布している（礫分布の厚さ約10～25cm）。礫の赤化現象（肉眼観察による）は不明である。集石内より小土器片（1）が出土した。

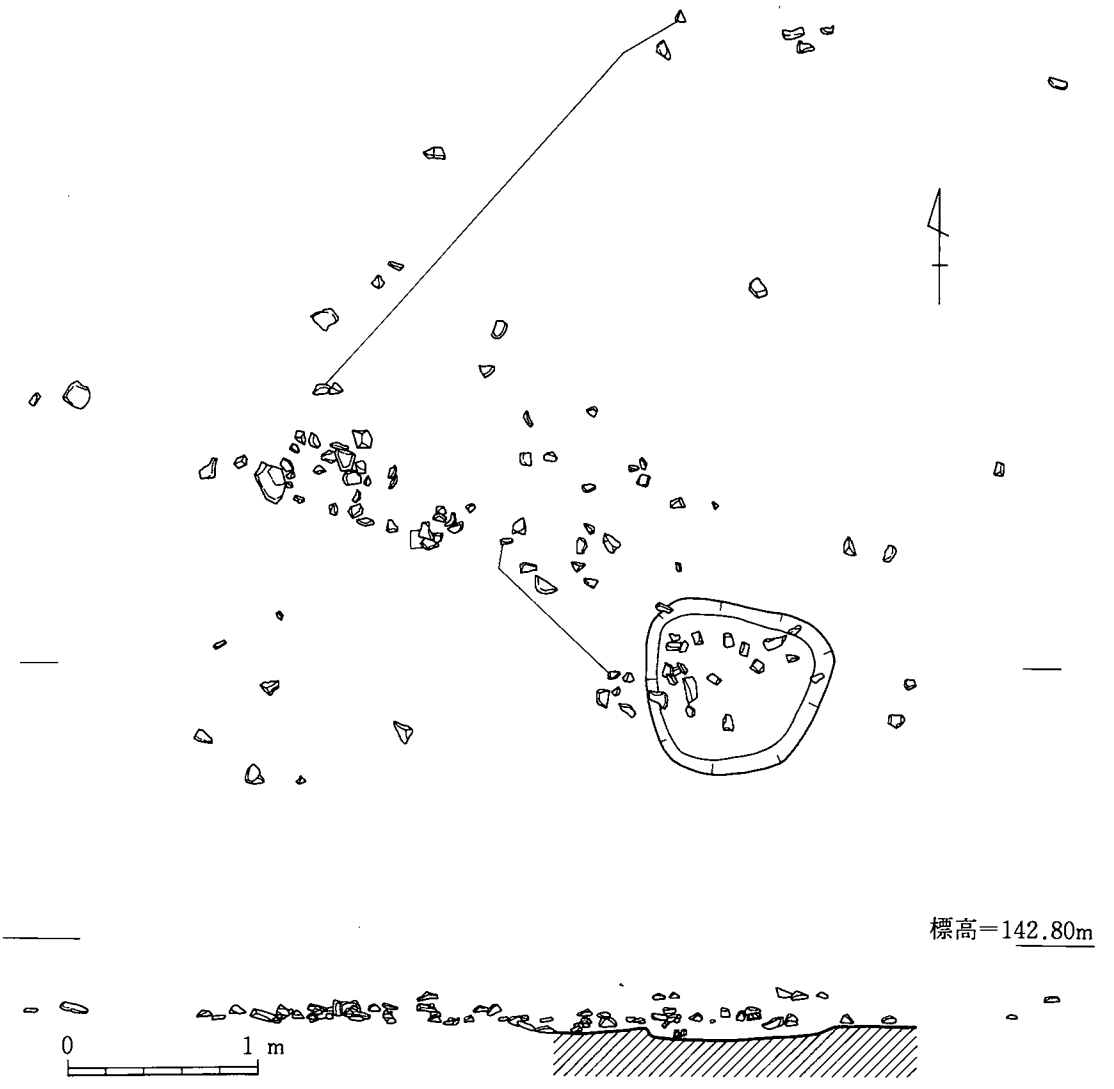
12号集石（第87図）

礫が約600×約500cmの範囲に散在状態を呈して分布している。その分布範囲の南東隅に、平



第86図　10号集石実測図

面形がほぼ円形、断面形が皿状の掘り込みがある(径約100cm、深さ約10cm)。掘り込みの覆土は分層できず、Ⅴ層に類似した暗黄褐色砂質土である。礫は小型のもの(5 cm前後)と中型のもの(10cm前後)とがほぼ半数を占める。礫はⅤ層中に分布している(礫分布の厚さ約10～20cm)。礫の総数は102個(総重量約23.8kg)を数える。礫の赤化現象(肉眼観察による)は不明である。2例の接合関係が礫間で確認できた。集石内より、小土器片(3)・磨石類(1)が出土した。



第87図　12号集石実測図

13号集石（第88図）

約300×約300cm の範囲に礫が散在状態を呈して分布している。その分布範囲の北東部に、平面形がほぼ円形、断面形が皿状の掘り込みがある（径約50cm、深さ約 5 cm）。この掘り込みは平安時代のピットに切られている。掘り込み覆土はV層に類似した淡黒褐色弱粘質土で、分層できない。礫は中型のもの（10cm 前後）と大型（20cm 前後）とが殆どであり、小型のもの（5 cm 前後）が少数混じる。礫はV層中に分布しており、掘り込み内に集まる傾向にある。（礫分布の厚さ約10～20cm）。礫の総数は143個（総重量約22.1kg）を数える。礫の赤化現象（肉眼観察による）は不明である。2例の接合関係が礫間で確認できた。集石内より、小土器片（2）が出土した。

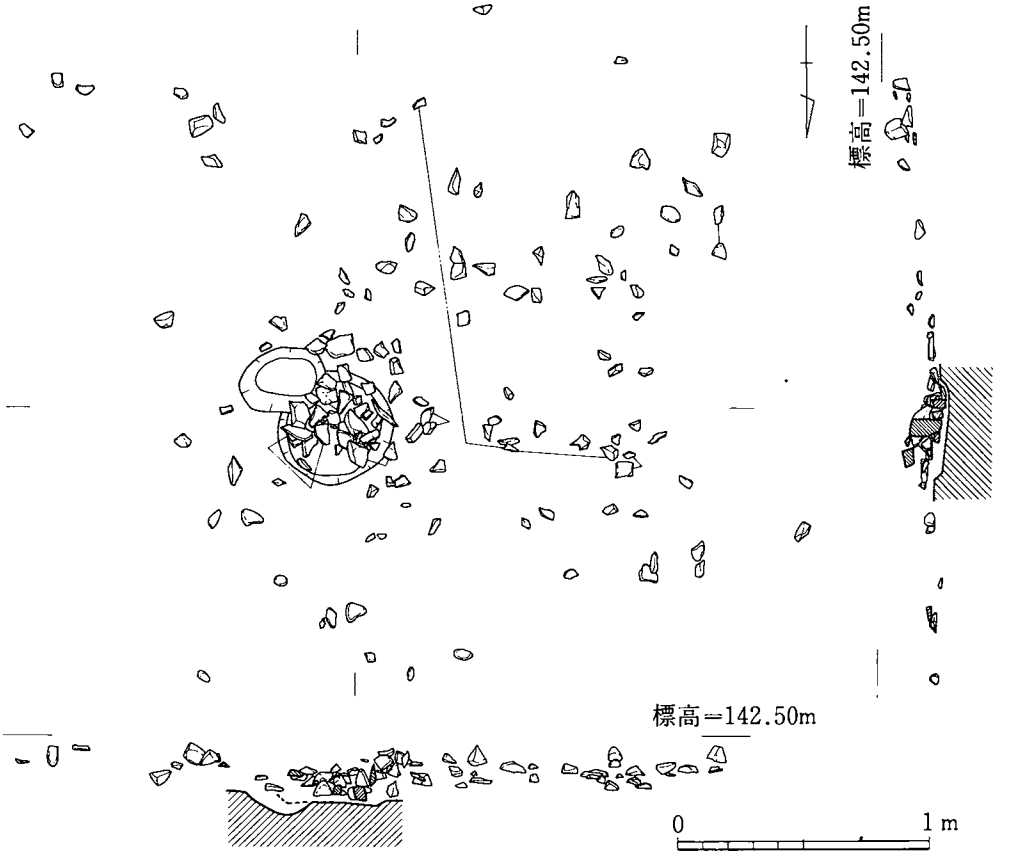
16号集石（第89図）

礫が分布している北側に、平面形が楕円形を呈する掘り込みがある（長軸約70cm、短軸約50cm）。断面形を見ると、深い皿状の掘り込みに筒状のピットをさらに穿っている（最深部約55cm）。掘り込みの覆土は分層できず、Ⅴ層に類似した暗褐色土である。礫は約200×約100cmの範囲に、散在状態を呈して分布している。礫の殆どは大型のもの（20cm前後）と中型のもの（10cm前後）で、小型のもの（５cm前後）が少数ある。礫はⅤ層中に分布している（礫分布の厚さ約10～20cm）。礫の総数は44個（総重量約17.1kg）を数え、赤化（肉眼観察による）している礫は約27％である。

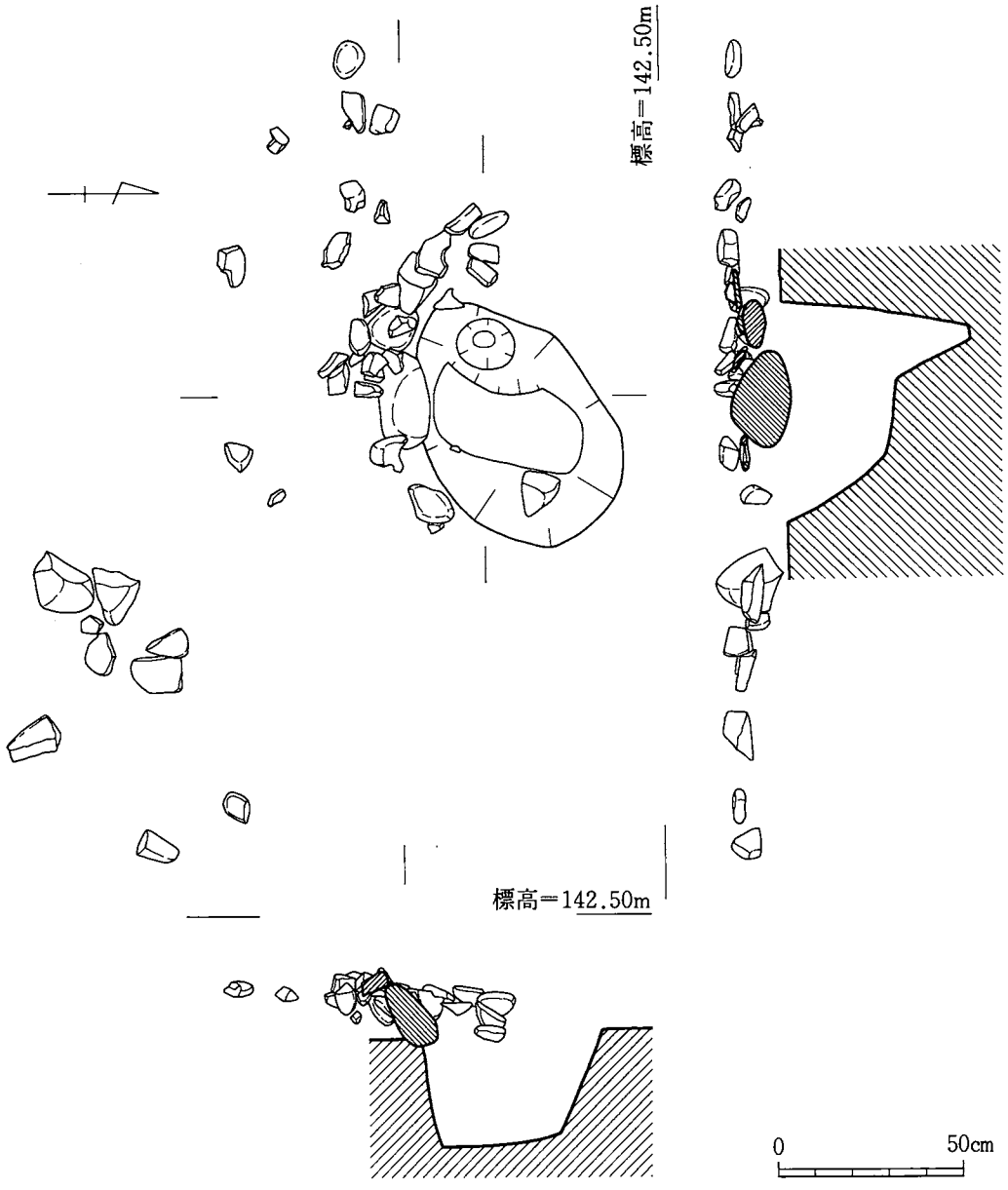
Ⅱ類－Ｄの集石

２号集石（第90図）

掘り込みの平面形はほぼ楕円形を呈する（長軸約95cm、短軸約55cm）。断面形は皿状になる（深さ約５～10cm）。掘り込みの覆土はⅤ層に類似した暗褐色土である。殆どの礫が掘り込みの中に入った状態で検出された。礫の総数は75個（総重量約96.6kg）を数え、大型の礫（20cm前後）と中型の礫（10cm前後）とが殆どを占め、小型の礫（５cm前後）が少数ある。これらの



第88図　13号集石実測図



第89図　16号集石実測図

礫の中で、赤化現象（肉眼観察による）は認められなかった。4例の接合関係が礫間で確認できた。

3号集石（第90図）

第90図は掘り込みの上位にあった礫を取り除いた後の状態である。掘り込みの平面形はほぼ円形を呈する（径約90cm）。断面形は深い皿状になる（深さ約30cm）。掘り込みの覆土はV層に類似した黒褐色土である。礫の殆どは掘り込みの中に入った状態で検出された。礫の総数は68

個（総重量約65.1kg）を数え、赤化現象（肉眼観察による）は認められなかった。集石の礫は、南側端部にある台石状のものを除くと、大型の礫（20cm前後）と中型の礫（10cm前後）とが殆どを占め、小型の礫（5 cm前後）が少数ある。

21号集石（第91図）

21号集石は第1凹部内にある。掘り込みの平面形は北東部が張り出した不整な円形を呈する（径約130cm）。断面形は深い皿状になる（深さ約20cm）。掘り込みの覆土はVI層に類似した黒色土である。礫の殆どは掘り込みの中に入った状態で検出され、大型の礫（20cm前後）が掘り込みのほぼ中央部に集まる。それ以外の礫は、中型の礫（10cm前後）と小型の礫（5 cm前後）とがほぼ半分の割合を占める。礫の総数は211個（総重量約53.7kg）を数え、赤化（肉眼観察による）している礫は約90％である。掘り込み内より、少量のカーボンと小土器片（1）を検出した。

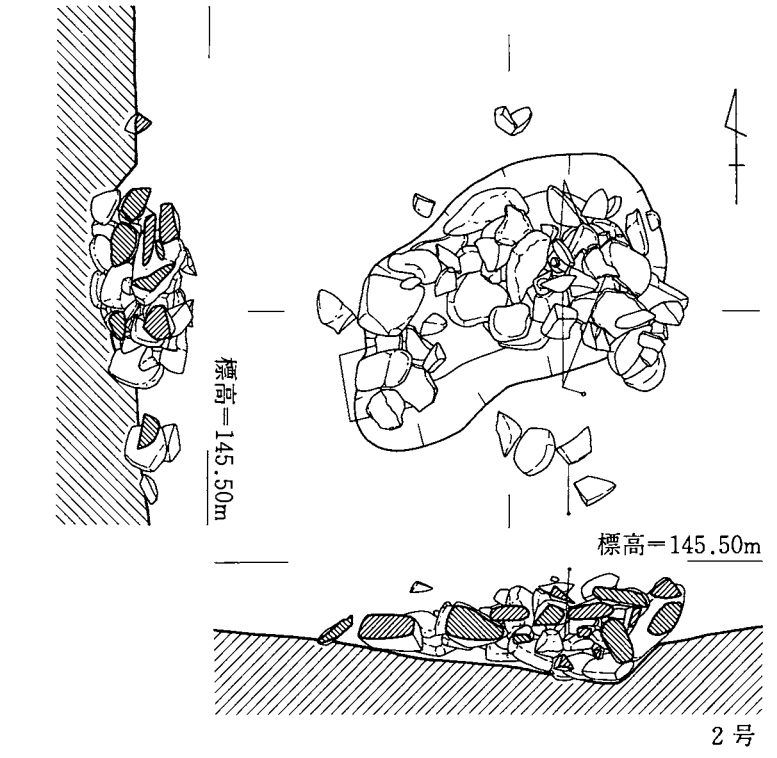
II類－Eの集石

14号集石（第94図・第95図）

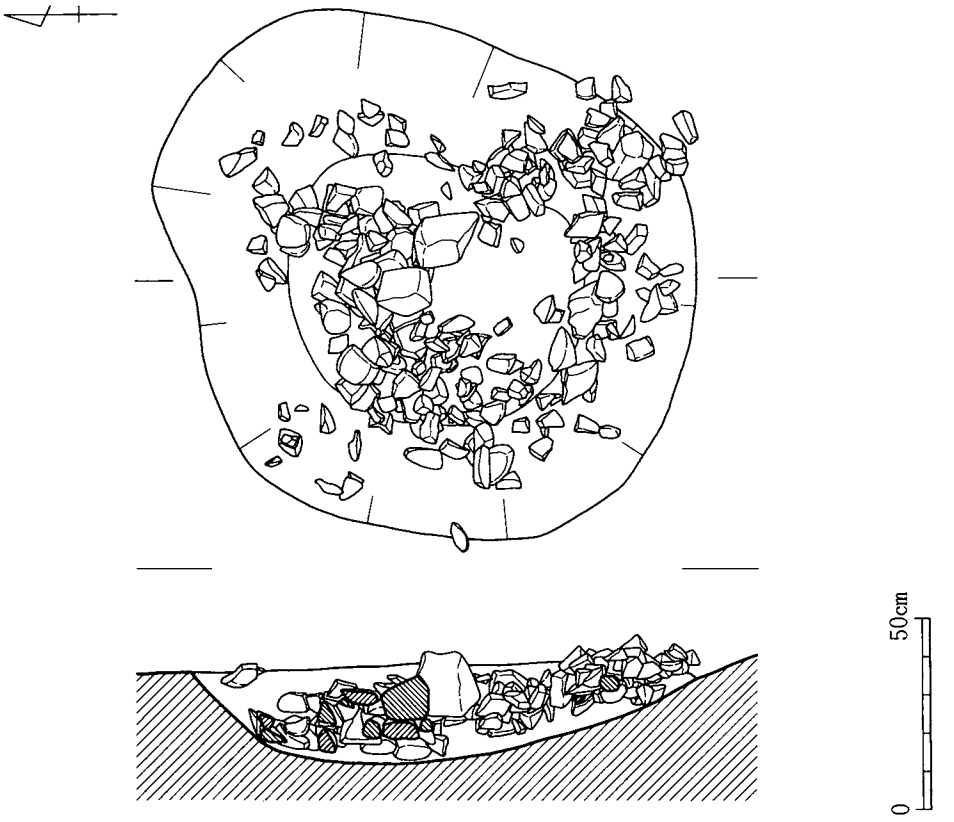
第95図は第94図に示した掘り込み上位にある礫を取り除いた後の状況である。掘り込みの平面形はほぼ円形を呈する（径約100cm）。断面形は深い皿状になる（深さ約25cm）。掘り込みの覆土はVI層に類似した淡黒色土である。礫は掘り込み内と掘り込み外の西側に分布している。掘り込み外の礫は、V層下部～VI層上面の約150×約100cmの範囲に散在状態を呈している。掘り込み内の礫は西側に集まり、東側壁付近には礫が分布していない。掘り込み床面の傾斜に沿った状態で、偏平な大型礫（20cm前後）が配置されている。掘り込みの東側には配置された偏平礫がないが、本来は掘り込み全体に礫が配置されていたと考えられる。偏平礫の上位には、多数の中型礫（10cm前後）と少数の小型礫（5 cm前後）とがあり、配置された状況は呈していない。礫の総数は151個（総重量約31.2kg）を数え、赤化（肉眼観察による）している礫は約35％である。ただ、第95図に示した掘り込み下部の偏平礫の殆どは赤化している。掘り込み内より、台石（1）・磨石類（2）・土器片（1）・微量のカーボンが出土した。掘り込み外の礫分布範囲内より、土器片（2）・スクレイパー（1）・磨石類（2）が出土した。

17号集石（第92図・第93図）

17号集石には掘り込みが確認できなかった。しかし、下部にある礫の状況を考えると、本来は掘り込みがあったと想定できるため、II類－Eの集石に含めて扱うことにする。第92図を見ると、約250×150cmの範囲に礫が分布している。その北端部に礫が集まり、周辺部の礫は散在状態を呈している。礫は大型礫（20cm前後）と中型礫（10cm前後）とが殆どであり、小型礫（5 cm前後）は少ない。第93図に示したように、北端部の密集した礫の下部より、偏平な大型礫（20cm前後）が出土した。その偏平礫は底面がほぼ水平になるように配置してある。礫の総数は142個（総重量約50.2kg）を数え、赤化（肉眼観察による）している礫は約70％である。ただし、



第90図　集石実測図



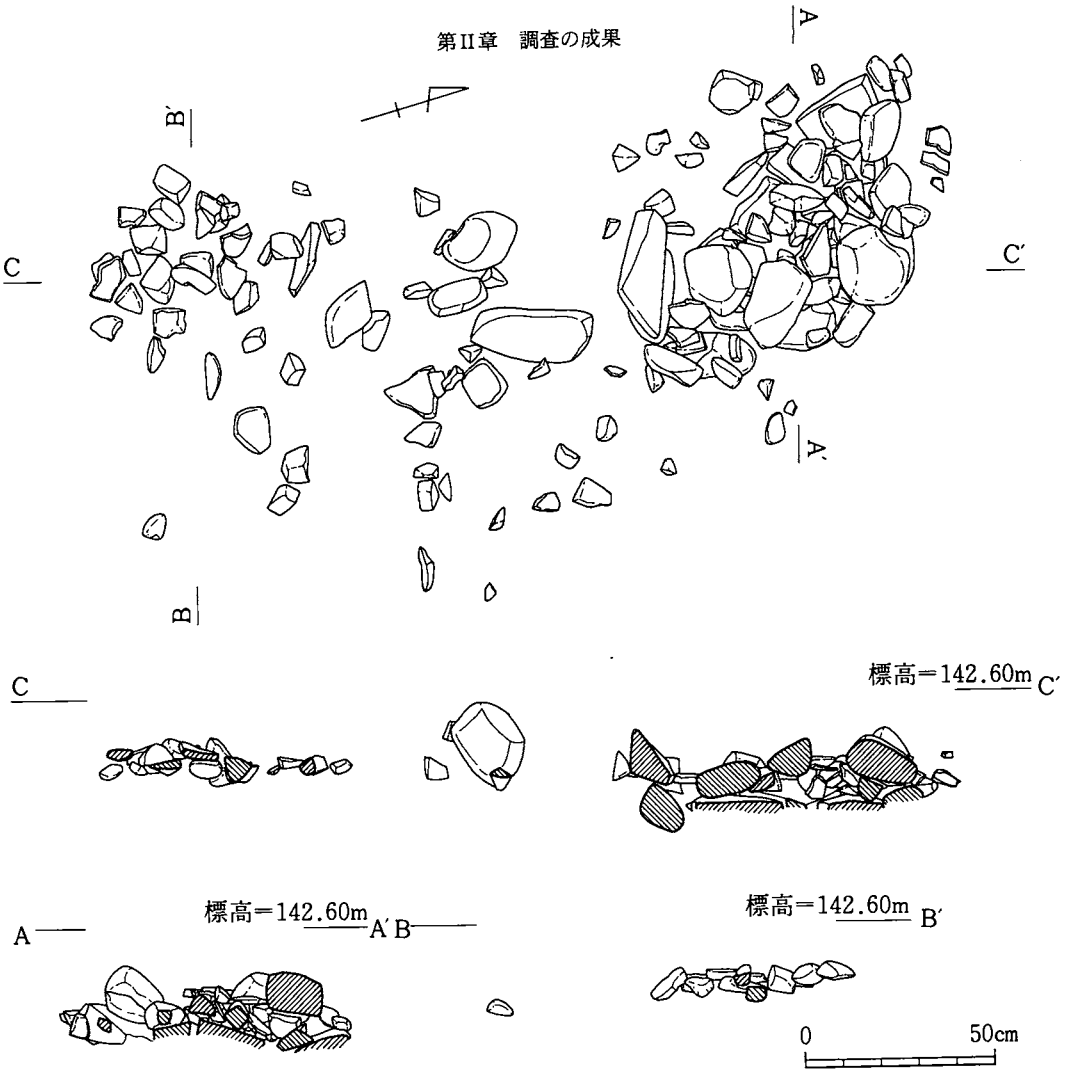
第91図　21号集石実測図

配置された偏平礫はすべて赤化している。礫はV層下部からVI層上面にかけて検出された。集石内より土器片（2）が出土した。

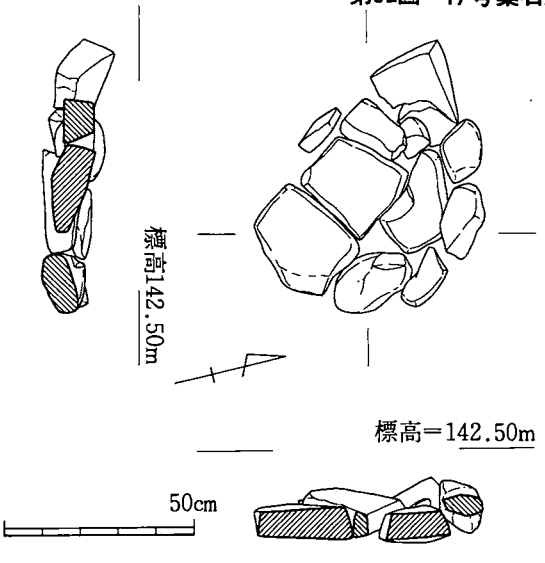
凹部

ここでいう凹部とは、人為的に窪みを造ったのでなく、自然にできた窪みのことを言う。第96図の断面模式図を使って説明をする。最下部の第IX層はシラスである。シラスは風雨等の自然現象によりその形状が変わりやすい。IX層（シラス）での地形は他の層での地形と比較すると、変化に富んでおり凹凸が著しい。調査区内で最も標高が高い箇所が帯状にある。その部分にIX層の最も顕著な窪みが三箇所形成されている。その窪みに先土器時代の遺物包含層であるVIII層が堆積し、VII層がその上部に堆積する。さらにVII層の上面に縄文時代早期の遺物包含層であるVI層・V層が形成される。縄文時代早期の基盤面と考えられるVII層の地形は、シラスの面での窪みより浅く、傾斜が緩やかになる。

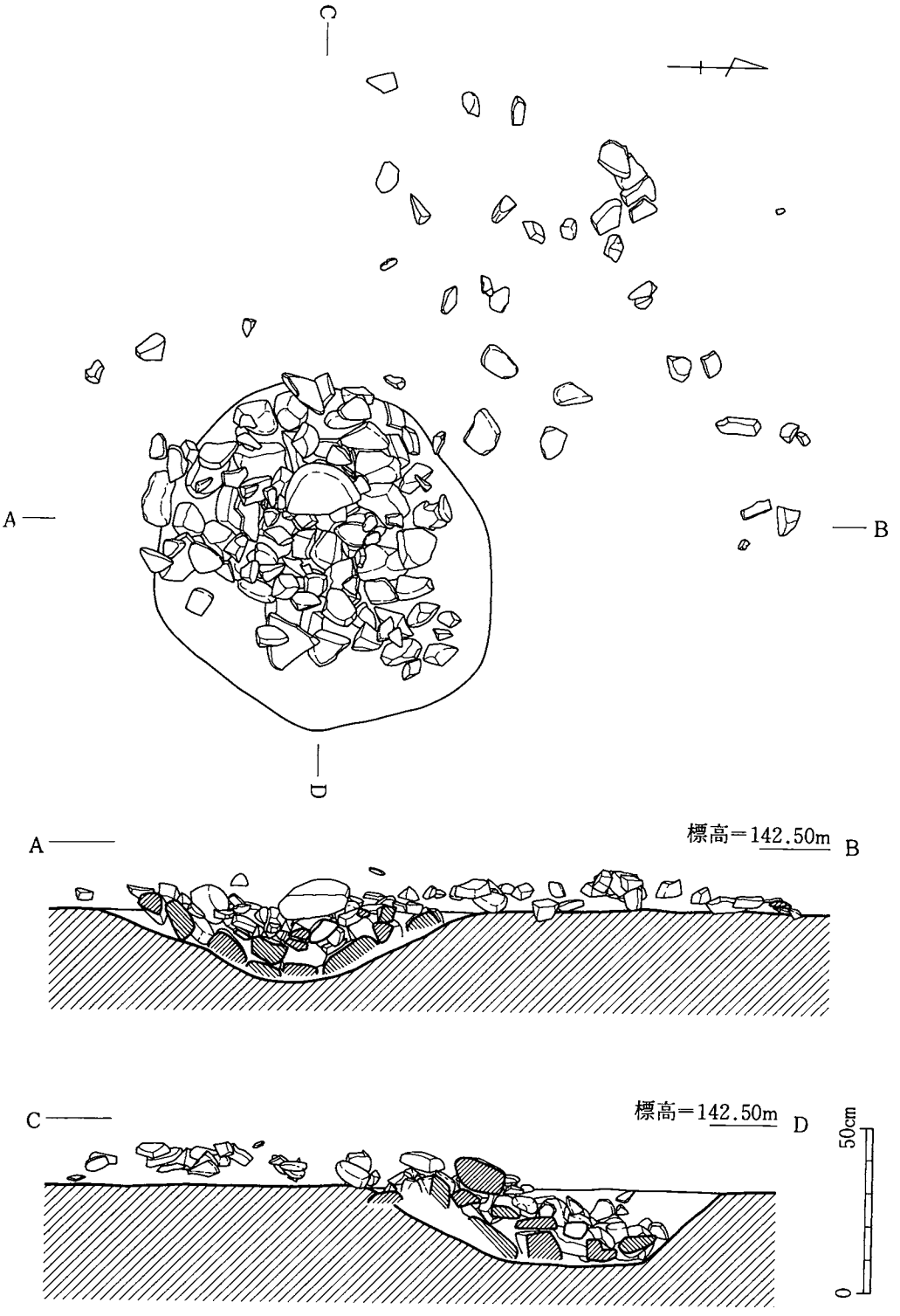
第97図～第99図に示した図面は、縄文時代早期の基盤面と考えられるVII層における窪みの状況である。普通おこなっている平面・断面の実測図では、窪みの状況がうまく表現できなかっ



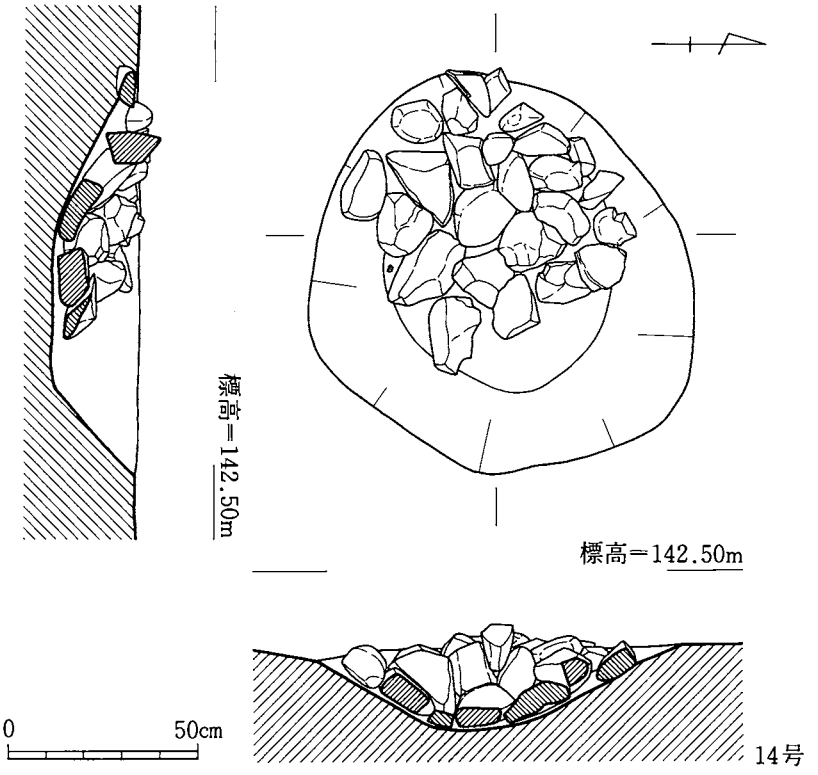
第92図　17号集石実測図



第93図　17号集石実測図



第94図　14号集石実測図



第95図　14号集石実測図

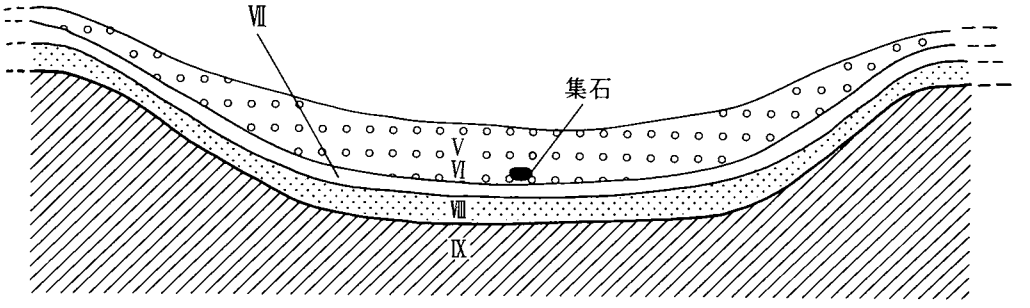
たため、5 cm 間隔の等高線で表現した。その図面に遺物の出土地点を重ねた。

第１凹部（第97図）

窪み全体の平面形は不整な楕円形を呈する(長軸約10m、短軸約７m)。等高線の最高部と最低部との差は約15cm を測る。出土した遺物は306点（土器115、石器・剝片191）を数え、窪みの最深部に集まる傾向にあり、その周辺部では出土遺物が少ない。遺物は凹部の傾斜に沿った出土状態を呈している。土器の接合関係を見ると、三例が窪み内で接合しており、五例が窪みの外部と接合している。窪み外で接合したものの出土区は、K－12・○－12・N－13グリッドである。これらのグリッドはすべて第１凹部より南西方向にある緩傾斜地である。接合した土器間の直線距離は約10～45mを測る。凹部の最深部のほぼ中央に21号集石があり、そこより約２m北東方向にいった箇所に20号集石がある。21号集石は掘り込みをもつII－D類の集石で、20号集石は掘り込みをもたないI－A類の集石である。異なる形態の集石が同じ凹部内に存在している。

第２凹部（第98図）

第２凹部は丸く入り込んだ谷状の地形を呈しており、北東方向に開いている。その丸く入り



第96図　凹部断面模式図

込んだ部分の平面形は楕円形を呈する(長軸約14m、短軸約9m)。三箇所の凹部の中で最も大きい。等高線の最高部と最低部との差は約40cmを測る。遺物は楕円形を呈する窪み内で集中して出土した。その出土状況は第1凹部と同じように傾斜に沿った状態である。窪みの周りでの遺物出土状況は散在状態を呈する。凹部内での出土遺物の総数は612点を数える（土器464、石器・剝片148)。土器の接合関係を見ると、四例が凹部内で接合しており、二例が凹部外と接合している。その二例はG－9・I－5グリッドより出土したものである（土器間の直線距離約35～40m)。G－9・I－5グリッドは第2凹部よりそれぞれ北側・北東側にあたる。このことは、第1凹部の凹部外接合例がすべて南西方向であるのと対照的である。

第3凹部（第99図)

第3凹部は谷状に入り込んだ部分（約6m×約5m）と平面形が楕円形の窪み（長軸約6m、短軸約5m）からなる。谷状になる部分より、楕円形になる部分の方が深くなっている。等高線の最高部と最低部との差は約35cmを測る。遺物は谷状になる部分と楕円形になる部分とに大きく分かれて分布している。遺物の出土状態は他の凹部と同様に傾斜に沿ったものである。二箇所より出土した遺物の総数は67点（土器56、石器・剝片11）であり、他の凹部と比較すると少ない。出土土器の1例が凹部内で接合しており、凹部外と接合したものが1例ある。凹部外で接合したのはI－5グリッドより出土したものである（土器間の直線距離約30m)。

⑷遺構より出土した遺物

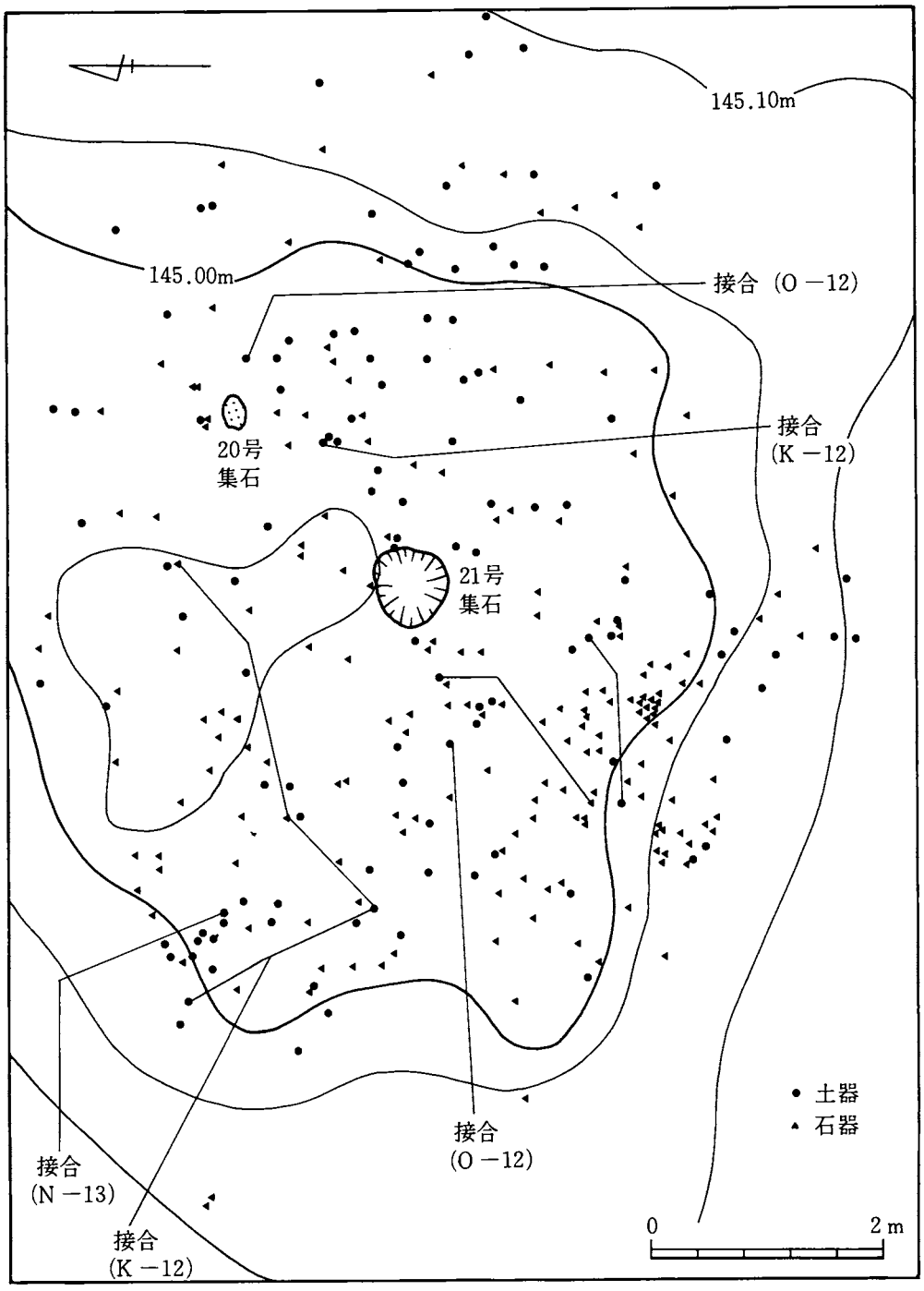
土坑より出土した土器

2号土坑出土の土器（第100図)

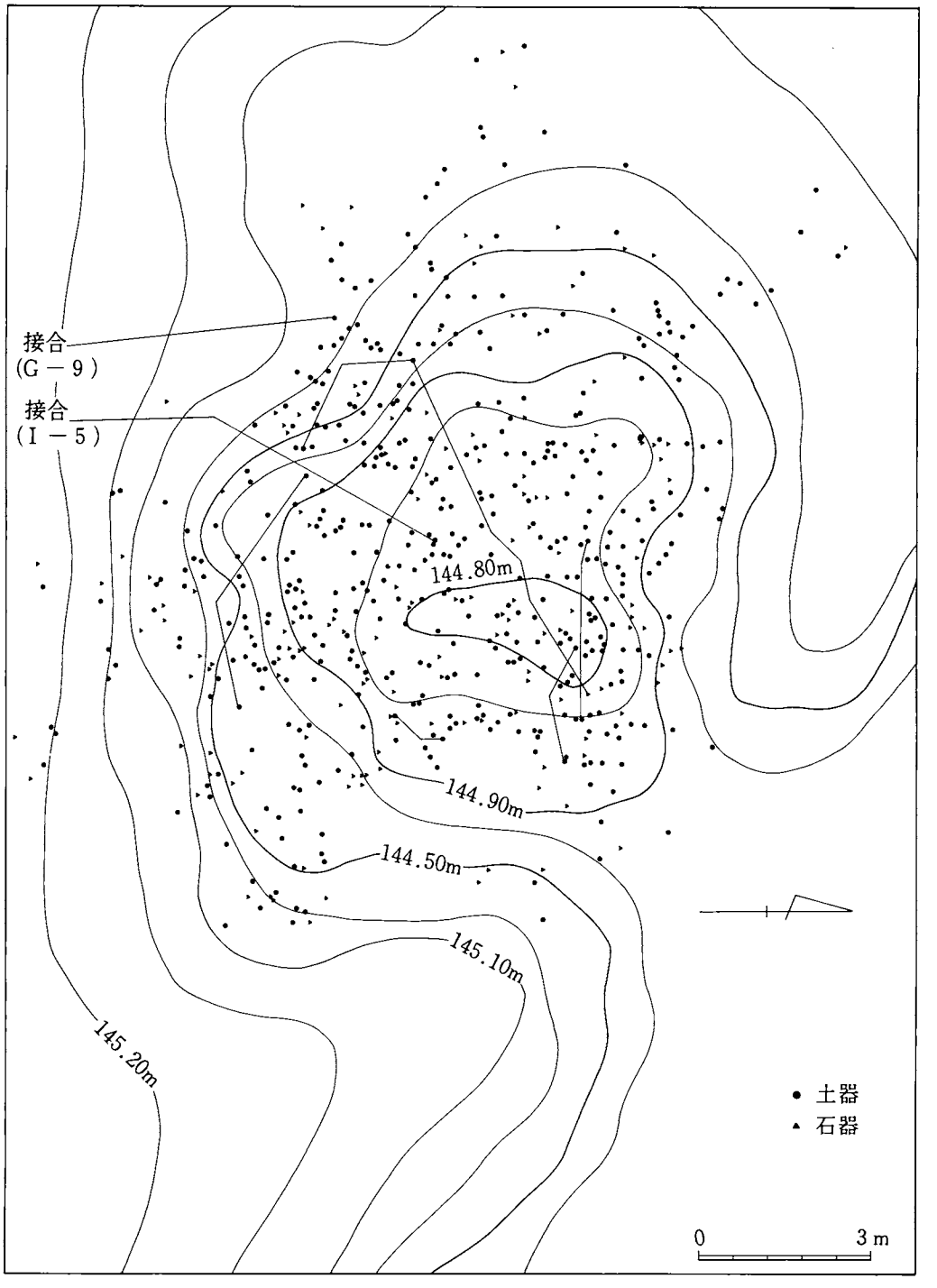
1は床面直上より出土した胴部片であり、外器面には山形押型文がある。

12号土坑出土の土器（第100図)

2・3は床面直上より出土した胴部片である。2の外器面には縦走する楕円押型文、3の外器面には撚糸文がある。



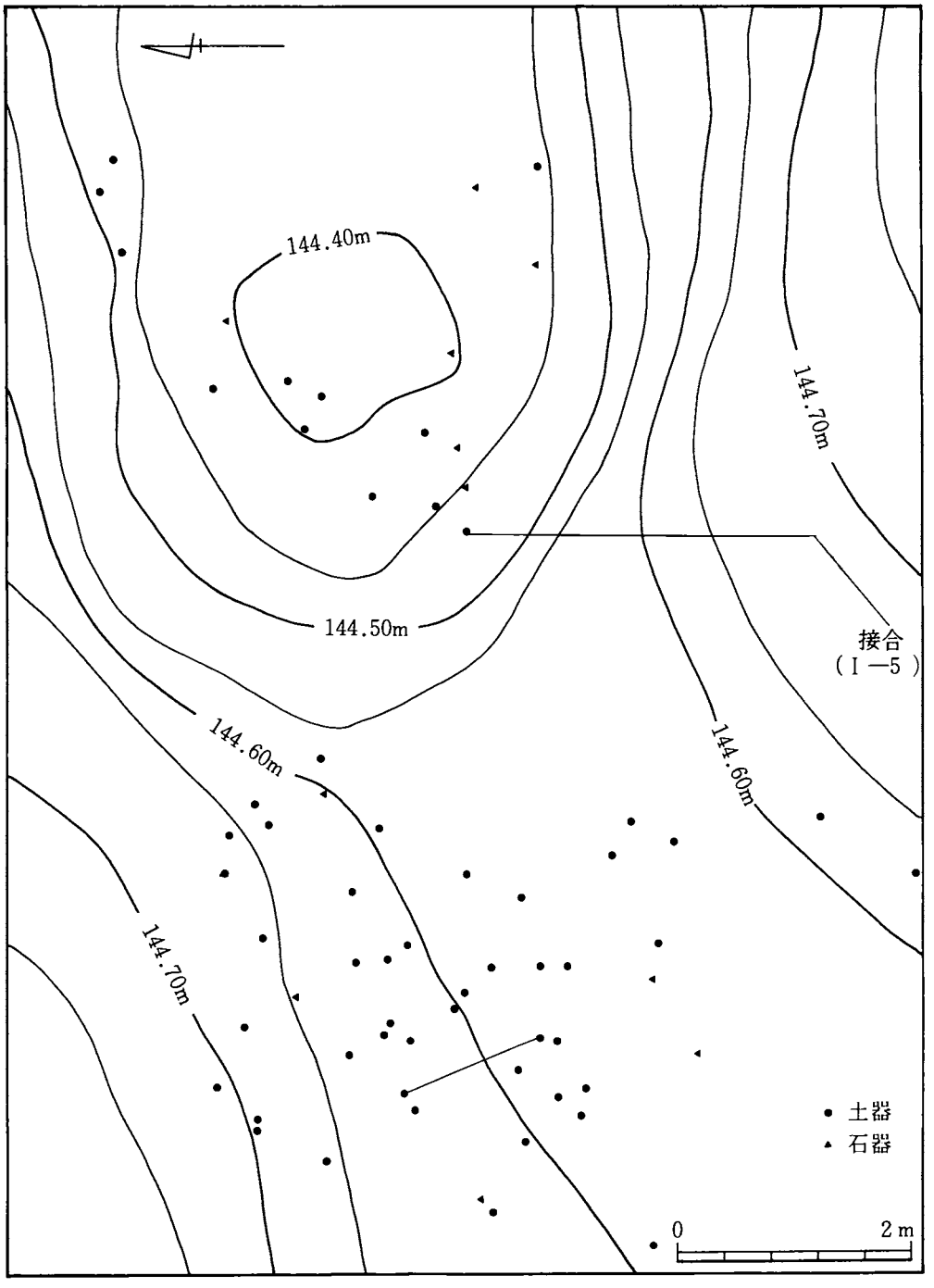
第97図　第1凹部平面図



第98図　第2凹部平面図

17号土坑出土の土器（第100図）

6は床面直上より出土した押型文土器の口縁部片である。外器面に縦走する小さな楕円押型文が施文され、器壁が薄い。



第99図　第3凹部平面図

40号土坑出土の土器（第100図）

4は床面直上より、5は壁に密着した状態で出土した。4の外器面には細い撚糸文、5の外器面には縄文がある。

62号土坑出土の土器（第100図）

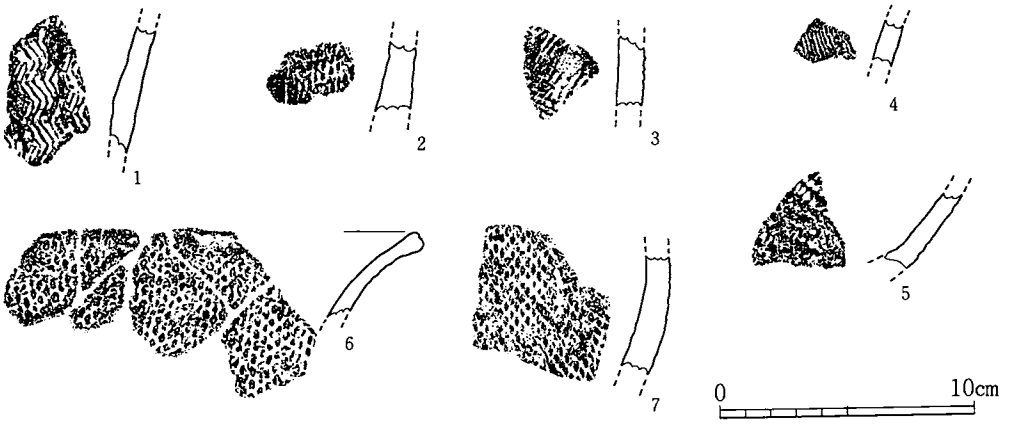
7は床面直上より出土した胴部片である。外器面に縦走する小さな楕円押型文がある。

2・6・7は押型文土器（楕円文）、3・4・5は手向山式土器であろう。1は山形押型文をもつ押型文土器・手向山式土器のどちらかであろう。胴部片であるため断定できない。

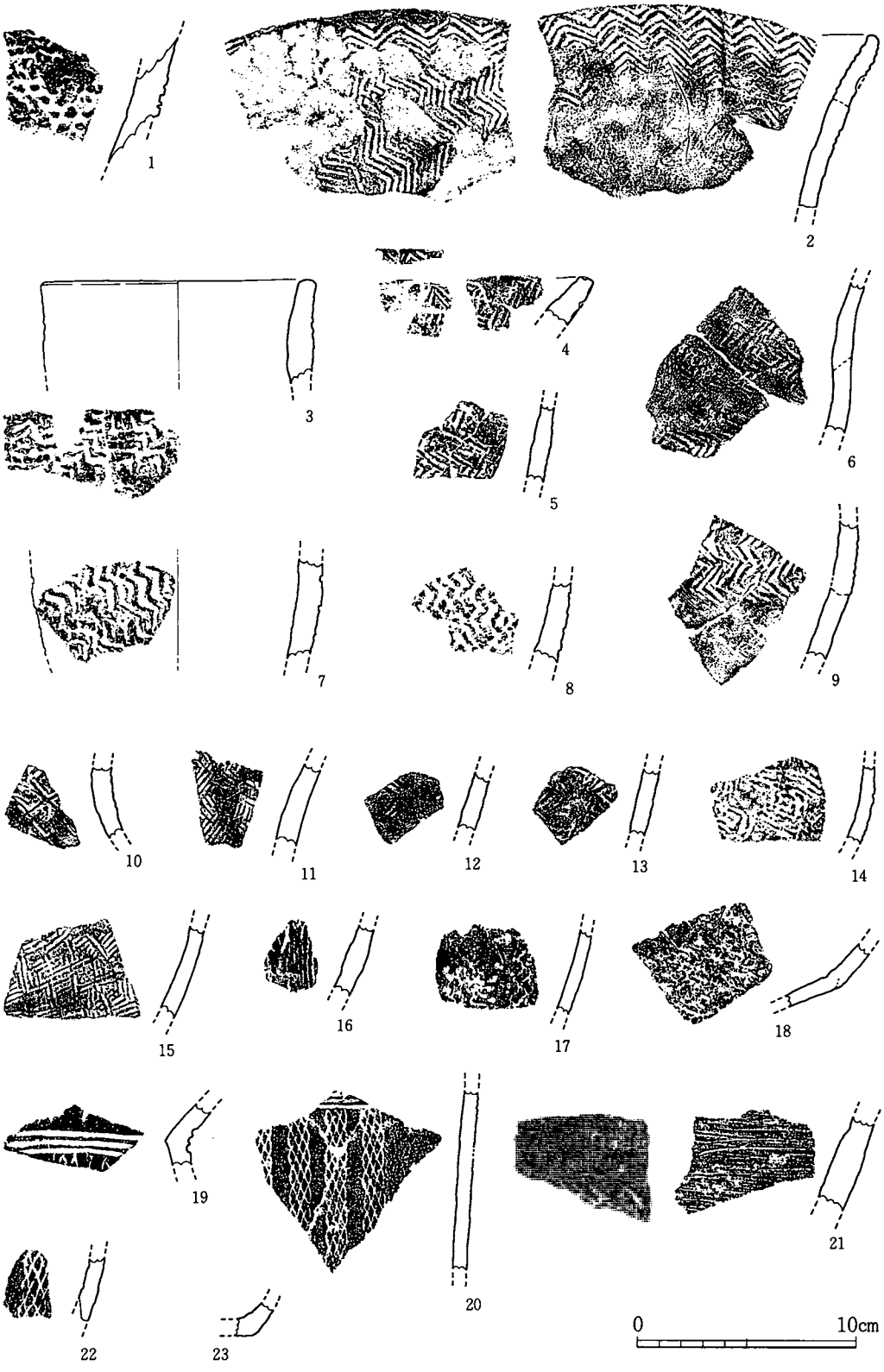
集石より出土した土器

1号集石出土の土器（第101図）

1は外器面に楕円押型文をもつ胴部片であり、器壁が厚い。2は山形押型文をもつ口縁部片である。口縁部全体が外反しており、端部ほど外反が強い。外器面は表面が部分的に剝がれている。残存部を見ると、山形押型文が上端から約3 cmの幅で横位に施文され、それより下位は斜位に施文される。内器面の山形押型文は上位から約4 cmの幅で横位に施文される。3・7は壺形土器の口縁部片・胴部片である。3の口縁部はほぼ直立し端部が丸くおさまる。両者は間延びし少し乱れた山形押型文を外器面にもつ。8の胴部片は色調・胎土・施文の点で7と類似している。4・5・6・9は山形押型文をもつ土器片である。4は口縁部片で、内外器面・口唇部に施文される。5・6・9は外器面に施文された胴部片で、6・9には弱い屈曲が見られる。10〜15は外器面に菱形押型文をもつ胴部片であり、各々の文様は異なる。10に示した傾きは小片であるため確定的なものでない。図に示したものが正しければ、10は壺形土器になるであろう。16は外器面に撚糸文が施文された胴部片である。17・18の胴部片は器面が荒れているために文様が良く観察できない。19・20・22の外器面には縦位の網目撚糸文がある。19は口縁部と胴部の屈曲部分で、両者の境に横位の沈線文が三条施される。20・22は胴部片で、20の上



第100図　土坑出土土器実測図



第101図　1号集石出土土器実測図

部には沈線文を施文する。21は内器面に条痕を残す胴部片である。23は底部片で、小片のため詳細は不明である。1は押型文土器、19・20・22は塞ノ神式土器、2～16は手向山式土器に比定できる。

4・5号集石出土の土器（第102図）

1が4・5号集石より出土した。外器面に山形押型文をもつ胴部片である。

7号集石出土の土器（第102図）

2～6が7号集石より出土した。2～4は胴部片である。2・3の外器面には沈線状のものが観察できるが、器面が荒れているためそれ以上は観察できない。4は外器面に条痕文をもつ。5は上げ底気味の底部片である。破片の外器面上端部に押型文が部分的に残っている。その押型文は山形か菱形のどちらかである。6は口縁部と胴部の屈曲部よりやや上位に位置する破片である。外器面に三条の微隆起凸帯があり、凸帯上面に刻み目を施す。

9号集石出土の土器（第102図）

7が9号集石より出土した胴部片である。外器面の上位に浅い沈線があり、それより下位に弱い条痕がある。

10号集石出土の土器（第102図）

8が10号集石より出土した。外器面には縦位の網目撚糸文があり、その上端に横位の沈線が1条残っている。

12号集石出土の土器（第102図）

9～11が12号集石より出土した。9は内器面に撚糸文をもつ口縁部付近の破片であろう。10は底部寄りの胴部片である。外器面の上端に変形撚糸文が、その下方に縄文が施文されている。11は外器面に変形撚糸文をもつ胴部片である。

13号集石出土の土器（第102図）

12・13が13号集石より出土した。12は外器面に細かい撚糸文を施文した胴部片である。13は「く」の字形に屈曲する胴部片で、外器面に縄文をもつ。

14号集石出土の土器（第102図）

14～16が14号集石より出土した。14は胴部片で、撚糸文と縄文が外器面に施文される。文様が重なる部分を観察すると、撚糸文の後に縄文が施文されている。15は胴部の屈曲部で、外器面には変形撚糸文がある。16は外器面に撚糸文をもつ胴部の小片である。

15号集石出土の土器（第102図）

17・18が15号集石より出土した。17は外器面に撚糸文をもつ胴部片である。18は弱い上げ底の底部片である。外器面に文様らしきものがあるが、詳しくは分からない。

17号集石出土の土器（第102図）

19・20が17号集石より出土した。19は外器面に楕円押型文をもつ胴部片である。20は外器面

に縄文を施し、微隆起凸帯をもつ胴部片である。

19号集石出土の土器（第102図）

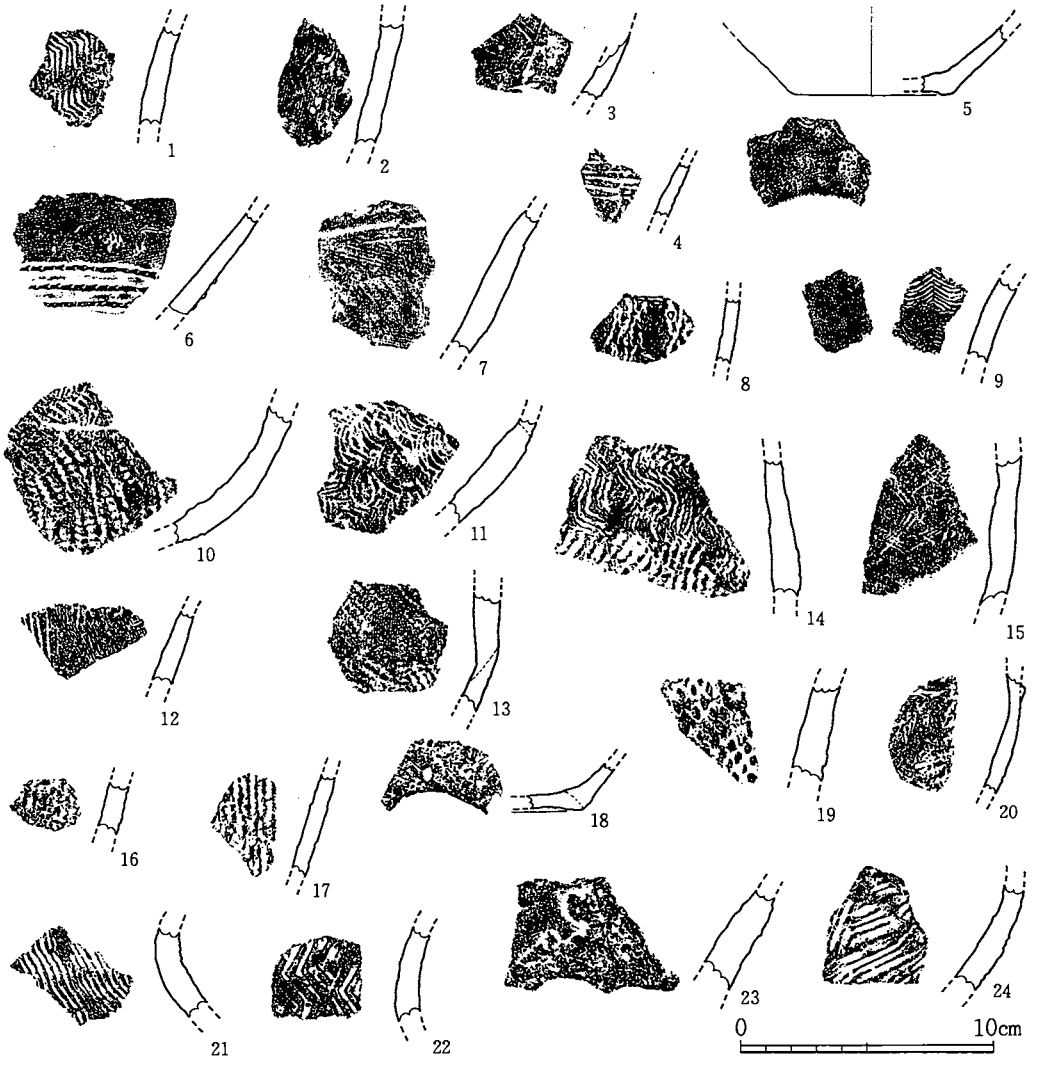
21・22が19号集石より出土した。21は壷形土器のくびれ部で、外器面に間延びした山形押型文が施される。22は山形押型文を外器面にもつ胴部片である。

20号集石出土の土器（第102図）

23が20号集石より出土した胴部片である。23は外器面のほぼ半分が剝がれており、残存部は無文である。

21号集石出土の土器（第102図）

24が21号集石より出土した。24は外器面に間延びした山形押型文をもつ胴部片である。



第102図　集石出土土器実測図

第102図に示した土器の中で、6・8は塞ノ神式土器、5・9・10～15・18・20・21が手向山式土器、19が押型文土器に比定できる。上記以外の土器は形式不明である。特に、山形押型文を施す土器は、小片である場合、押型文土器と手向山式土器との区別がつかない。形式不明の土器のなかでも、16・17は胎土の類似性より、手向山式土器の可能性がある。

11号集石出土の土器（第103図・第104図）

第103図1～4は、内外器面に楕円押型文をもつ口縁部片である。外器面は縦走する押型文が全面に及び、内器面では外器面と同じ原体で上端部に横走する押型文を帯条に施文する。2・3の口唇部には同原体で施文された押型文がある。5・6は口縁部近くの屈曲部分で、外器面に縦位の楕円押型文をもつ。7～13は楕円押型文を外器面にもつ胴部片である。7を除いたものに、押型文が施文されない箇所がある。14はほぼ直立する胴部と端部で強く外反する口縁部をもつ。外器面には全面に縄文（ＲＬ）を施し、内器面の上端部では帯条に外器面と同じ原体で縄文（ＲＬ）を施す。口唇部にも同原体で施文された縄文（ＲＬ）がある。15・16は外器面に山形押型文をもつ胴部片である。15では破片のほぼ中央部が施文されない。17は内外器面に変形撚糸文をもつ口縁部片である。内器面は端部が帯条に施文される。18は「く」の字形に屈曲する胴部片で、外器面に沈線文がある。19は外器面に微隆起凸帯と沈線文をもつ胴部片である。凸帯には刺突文がある。20は平底の底部片である。

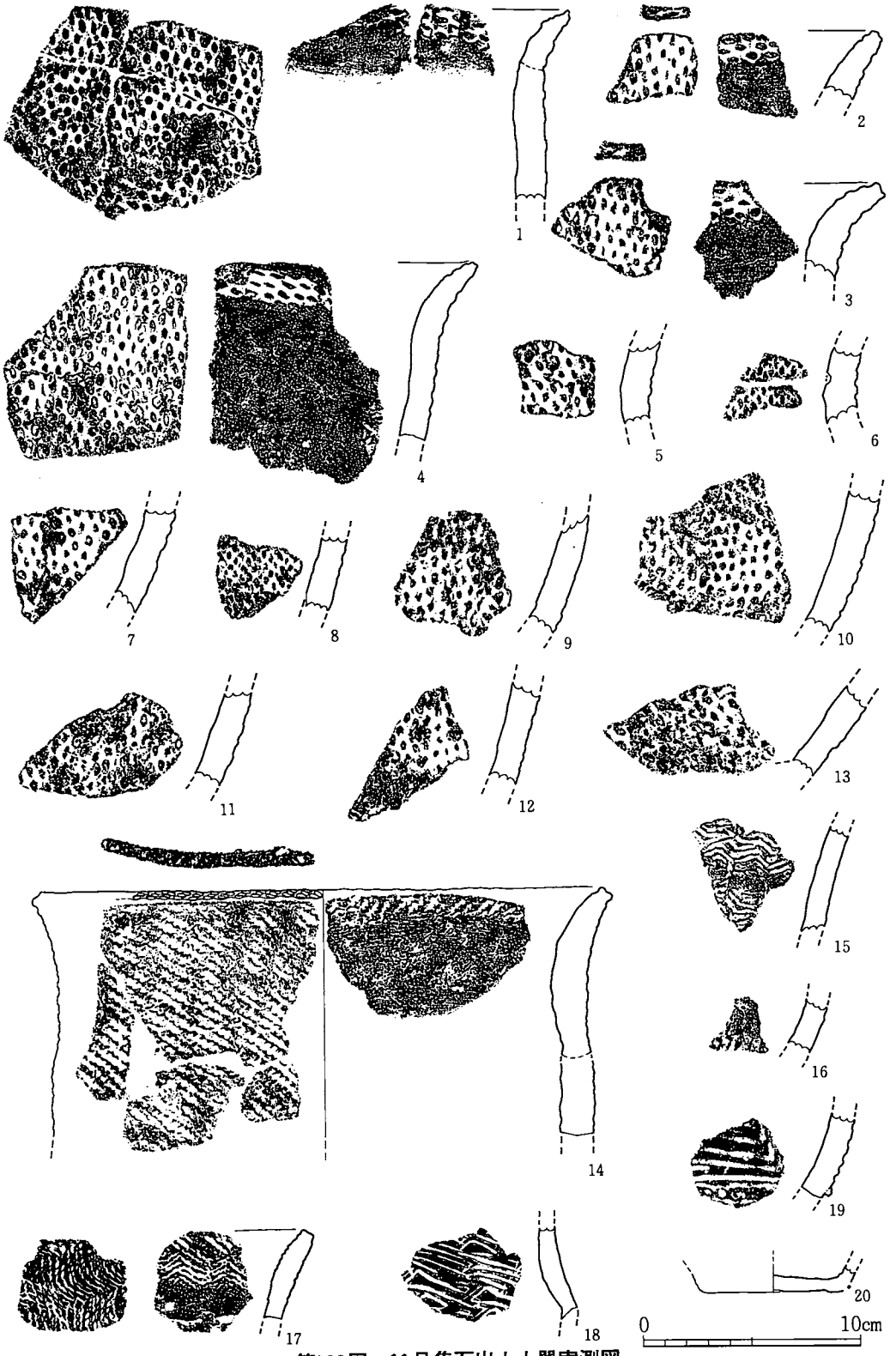
第104図1は、端部が強く外反する口縁部片である。外器面は縦走する楕円押型文が下端部付近まであり、それより下位に横走する山形押型文が部分的に残る。内器面には外器面の楕円押型文と同じ原体で、上端部に沿って帯条に横走する押型文がある。口唇部にも同原体の押型文が施される。2・3・4は楕円・山形の押型文を外器面にもつ胴部片である。各々、施文されない部分がある。

第103図1～13、第104図1～4は押型文土器、第103図17～20は手向山式土器に比定できる。第103図14は器形・胎土が押型文土器と類似しており、押型文土器と同時期と考えられる。形式名は不明である。第103図15・16は胴部片であるため比定が困難である。押型文土器か手向山式土器のどちらかであろう。

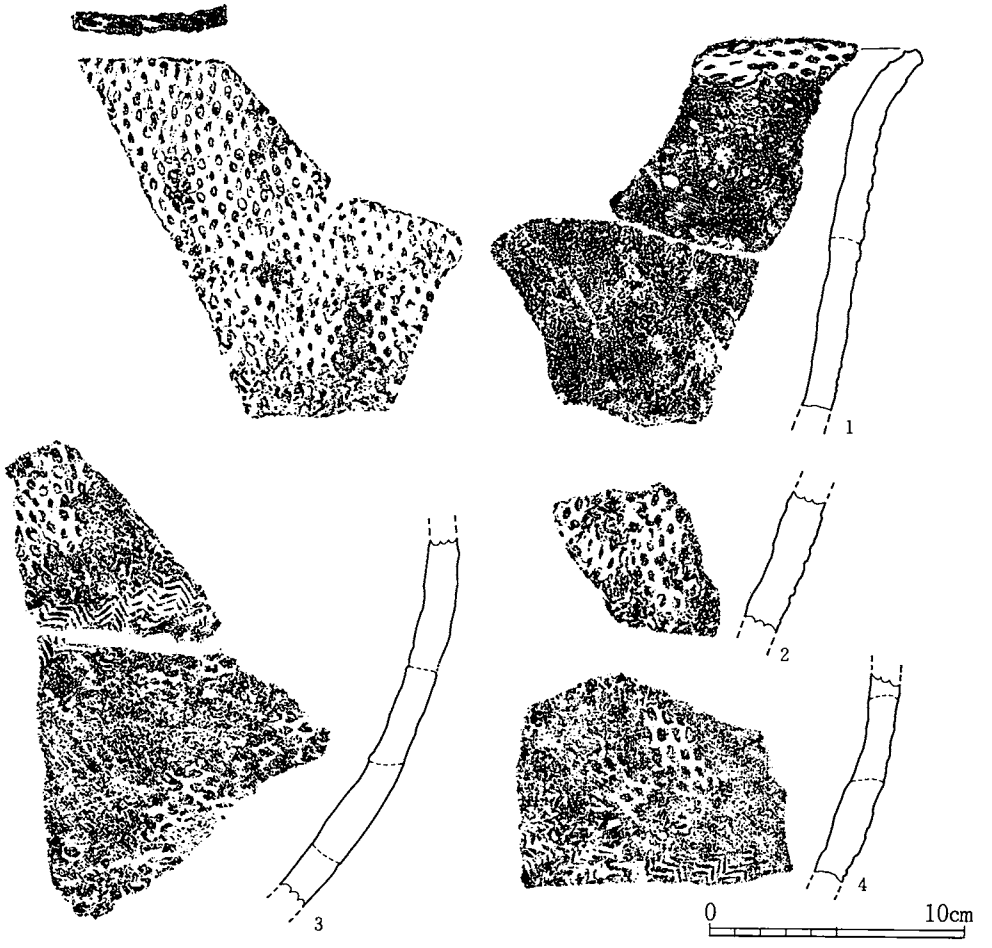
集石より出土した石器

石鏃（第105図）

1～3は1号集石より出土した。1・2は凹基無茎鏃である。1の平面形は二等辺三角形を呈している。2は基部の一部分が欠損している。3は平基無茎鏃であり、基部の左端部が欠損している。1・2に比べると、3は大型品である。1～3の加工は縁辺部より小さな剝離を行っている。



第103図　11号集石出土土器実測図



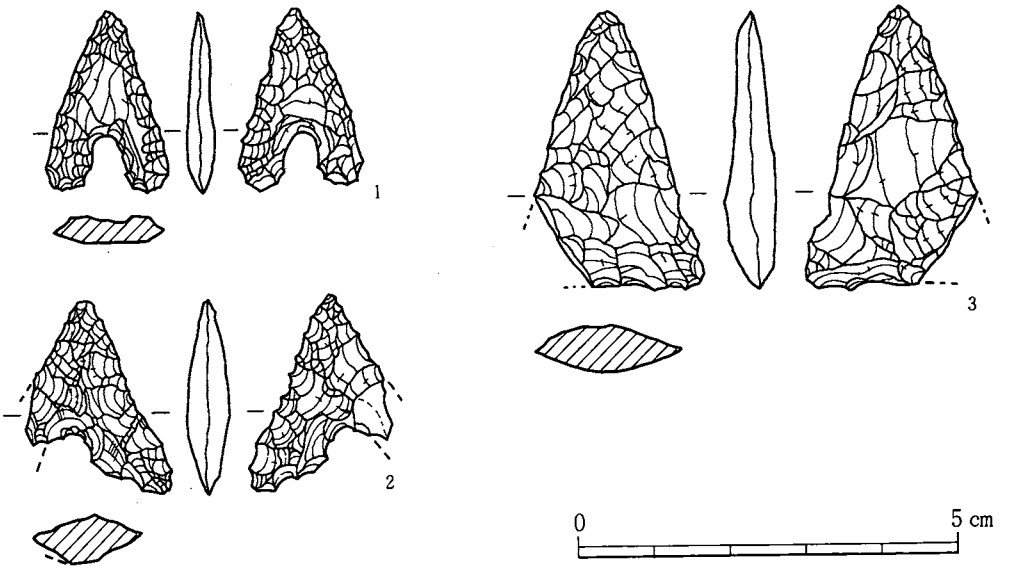
第104図　11号集石出土土器実測図

石匙・スクレイパー（第106図）

１～４は11号集石、５は14号集石より出土した。１は縁辺部からの剥離を繰り返して行い、下端部・右側縁部に細かな剥離を加えて刃部としている。２は横長剥片を素材とし、大きめの剥離を縁辺部より行い、最後に下端部の刃部にあたる箇所に小さな剥離を加えている。３は横長剥片の下端部に細かな剥離を行い刃部としている。４は横長剥片を素材とし、下端部に細かい剥離を加え刃部を形成している。素材のほぼ中央部に縁辺部より加工をしてつまみ部を作っている。体部の裏面には自然面が残っている。５は縁辺部より加工を行い、側縁部にさらに剥離を加え刃部としている。

磨石類・敲石（第107図）

１・３・４・６は７号集石、２・７は11号集石、５は12号集石より出土した。１は体部の上半分が欠損し、体部表面が剥落している。体部の裏面と下端部に磨痕が残る。２は体部の殆どが欠失している。体部の表裏面に磨痕がある。３は体部の表面に磨痕、上下端部・側縁部に敲



第105図　石器実測図

打痕を残す。4は体部の表裏面に磨痕があり、縁辺部に敲打痕をもつ。5は体部の大部分が欠損している。残存している体部の表面に磨痕がある。6は体部の表裏面に磨痕があり、裏面の磨痕は下方に寄っている。敲打痕が上下端部・側縁部・体部表面にある。上下端部の敲打痕が著しい。また、体部表面には部分的にススが付着している。7は体部の上端部が欠損している。残存部の下端部・側縁部には敲打痕がある。

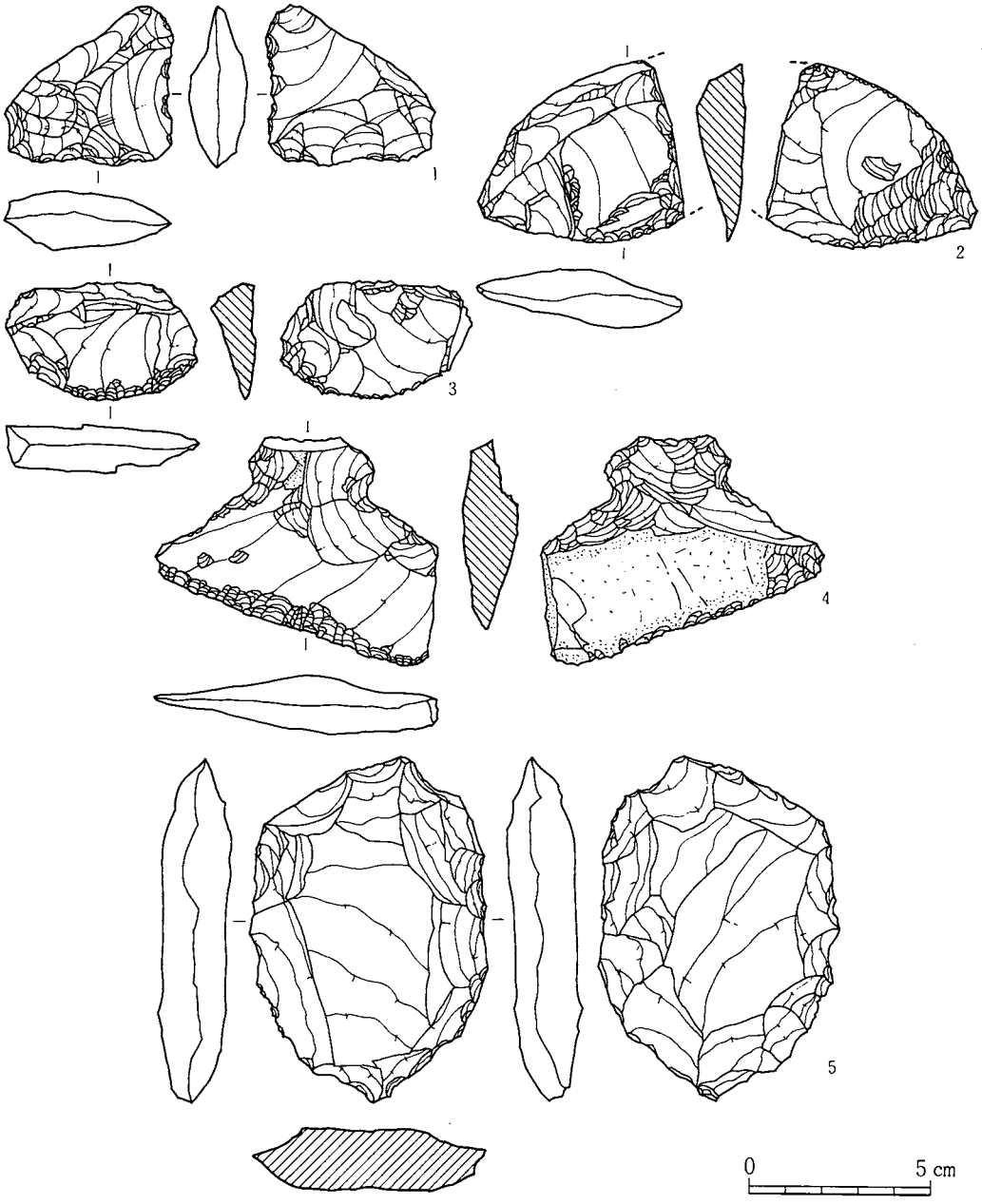
石皿（第108図）

1・2は11号集石より出土したものである。1は一部分が欠損しており、片面だけを使用している。使用面には磨痕・敲打痕があり、部分的に表面が剝落している。磨痕・敲打痕とも顕著なものでない。2は表裏面に磨痕・敲打痕をもつ。裏面と比較すると、表面の方が著しく窪んでいる。表面は二箇所に分かれて使用部分があり、それぞれの使用面に磨痕・敲打痕をもつ。上方にある使用面の方がもう一方と比べて磨痕・敲打痕とも顕著であり、表面が部分的に剝落している。

凹部より出土した土器

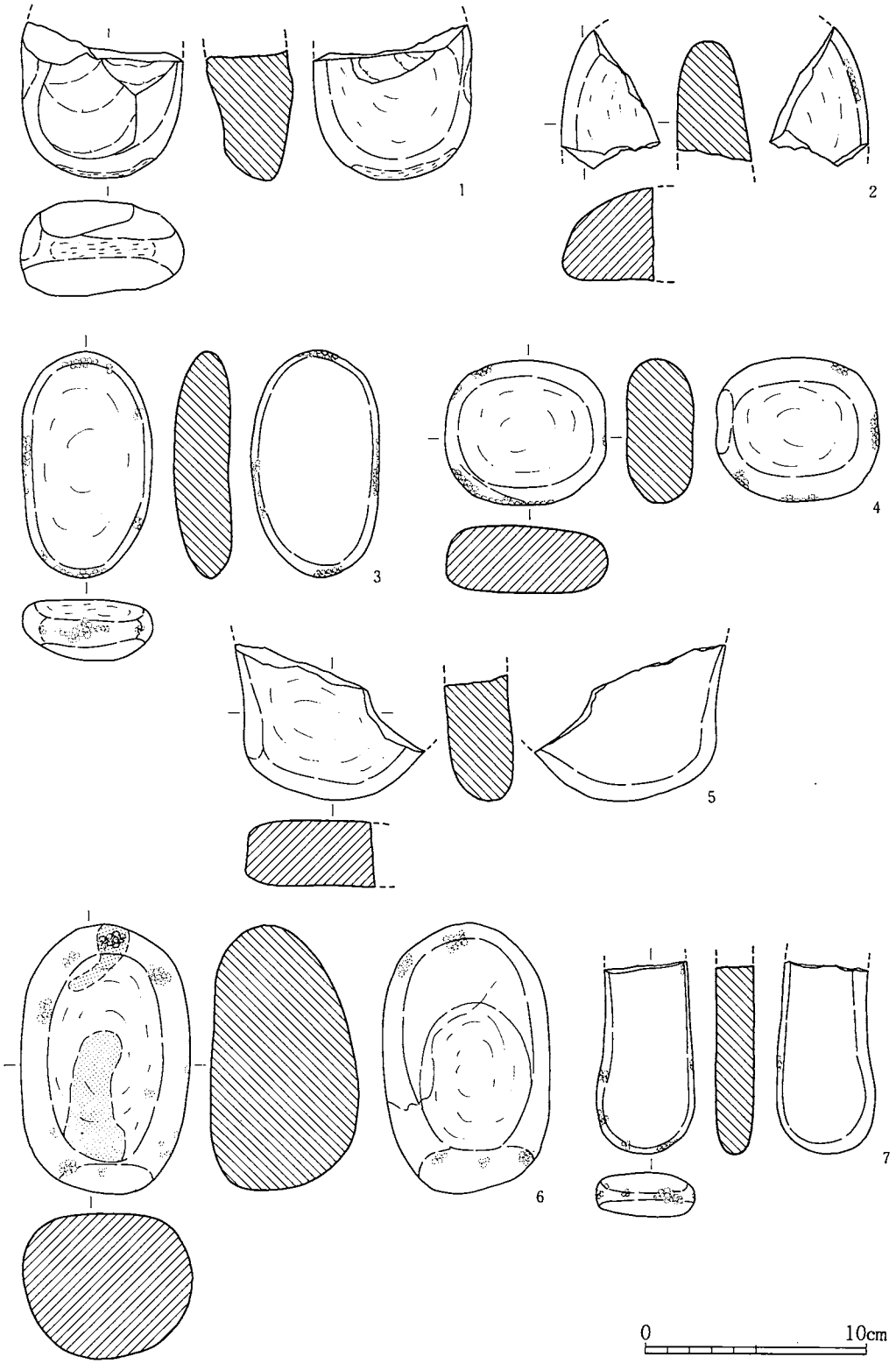
第1凹部出土の土器（第109図）

1～7は山形押型文を施文した土器である。1～4は外反する口縁部で、外器面には縦走する押型文、内器面には上端部に横走する押型文を外器面と同じ原体で帯状に施す。5は胴部の屈曲部で、外器面に縦走する押型文がある。6は外器面に横走する押型文をもつ胴部片である。7は胴部片で、外器面に縦走する間延びした押型文をもつ。8・9は菱形押型文を施文した土

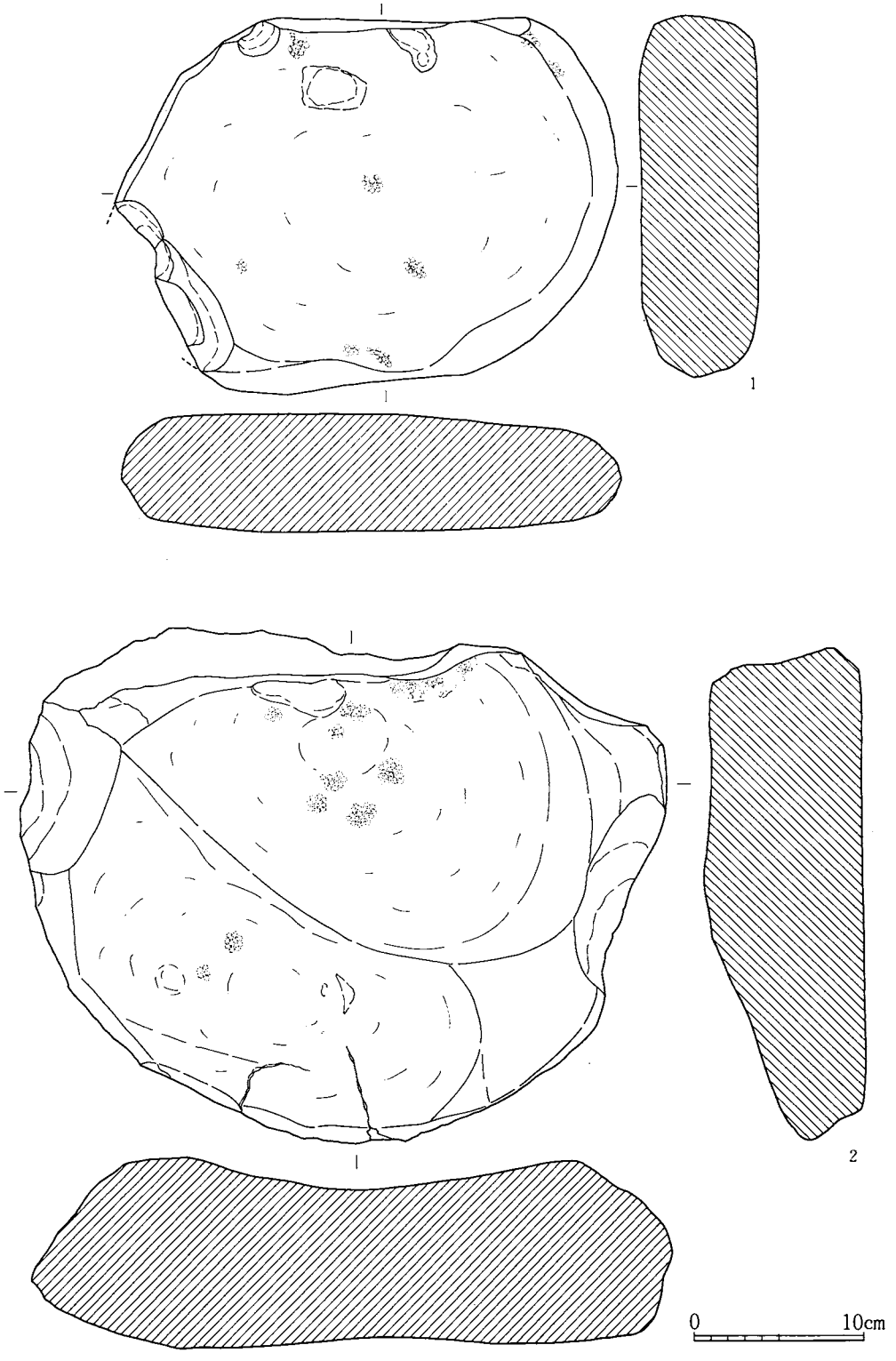


第106図　石器実測図

器である。8は外反する口縁部で、外器面に縦走する押型文を施し、同じ原体で内器面と口唇部に施文する。内器面は横走する押型文を帯状に施文する。9は胴部の屈曲部で、外器面の施文は縦走している。11・12は外器面に縄文を施文した口縁部（ＲＬ）・胴部片（ＬＲ）である。11は端部で強く外反する。13は外器面に縦走する間延びした山形押型文をもつ胴部片である。押型文の上位には沈線で表現された横線文があり、さらにその上方に先端が丸い棒状施文具に



第107図　石器実測図



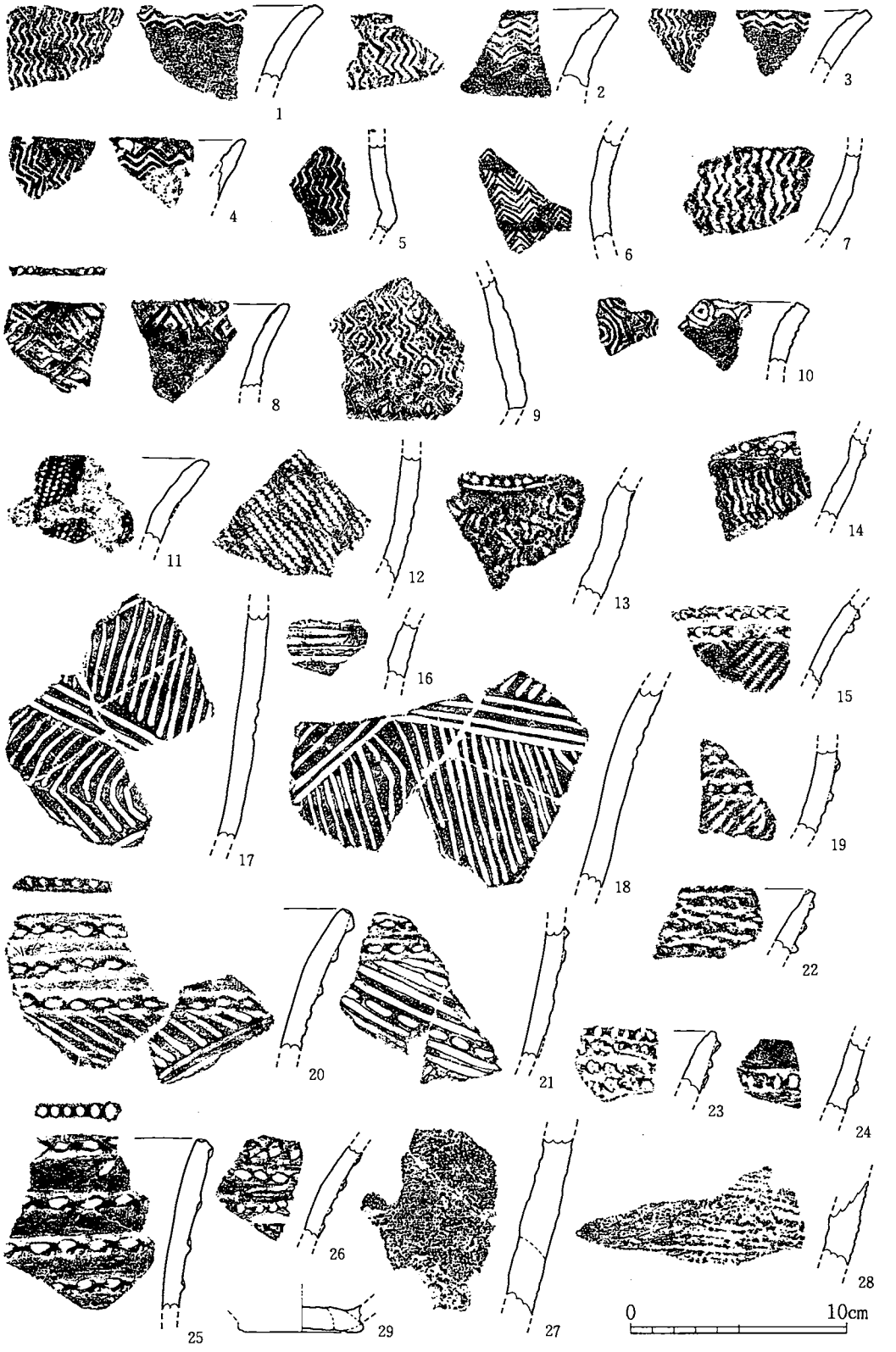
第108図　石器実測図

よる連続刺突文がある。14は胴部片で、外器面に縦走する間延びした山形押型文がある。その上位には凸帯が施され、凸帯の上面には先端が丸い棒状施文具による刺突文がある。15は14と同様な凸帯を二条もつ胴部片で、凸帯の下部には縄文（ＲＬ）がある。16は外器面に横方向の条痕文をもつ胴部片である。17・18は胴部片で、外器面には先端が丸い棒状施文具による凹線で表現された幾何学文がある。19は上面に丸い刺突文を施した二条の凸帯を外器面にもつ胴部片で、地文としての縄文（ＲＬ）がある。20は外反する口縁部で、外器面に凸帯と凹線文をもつ。三条の凸帯上面には平面形が楕円形の刺突文が施される。凹線文は先端が丸い棒状施文具によるもので、斜行する直線文が二方向から引かれている。口唇部には丸い刺突文がある。21は20と同様な凸帯を二条もつ胴部片である。凸帯の下方には凹線で表現された斜行する直線文と破線文がある。20・21の凸帯間には凹線文が施文されない。22～26は外器面に凸帯をもち、その上面に刺突文がある口縁部・胴部片である。その刺突文には円形・楕円形がある。25は口唇部にも刺突文が施される。23は小片であるが、壷の口縁部になる可能性が高い。27は無文の胴部片で、他の出土土器片と比べると、器壁が厚い。28は外器面に条痕文をもつ胴部片であり、円筒形になると思われる。

第２凹部出土の土器（第110図～第112図）

挿図ごとに述べる。第110図１～８は格子目押型文をもつ土器片である。１・２・５は先端が細くなりながら外反する口縁部片である。内器面と口唇部に外器面と同じ原体で施文し、内器面のものは帯状になる。３・４・６～８は胴部片で、３・７は屈曲部より下位の部分であろう。９～18は外器面に撚糸文を施す土器片である。９・10は網目撚糸文をもつ口縁部片で、先端が外反する。口唇部にも同原体で施文している。11・12は外反する口縁部片で、11は大きめ、12は細めの撚糸文が施文される。13は胴部の屈曲部で、大きめの撚糸文がある。14～16は細かい撚糸文、17は大きめの撚糸文を施した胴部片である。18は屈曲する頸部片で、細かい撚糸文が縦位に帯状に施文される。19～27は外器面に凹線文をもつ胴部片である。19・22は凹線で表現された直線の間に、破線が混じる。21は幅の狭い凹線文をもつ胴部の屈曲部より上位の部分である。22・23・25～27の文様は幾何学文になる。28～34は外器面に凸帯をもち、その上面に刺突文を施す。28～30・32・34の刺突文は円形ないしは楕円形を呈し、31・33の刺突文は他と比べて大きめの楕円形である。28・29・30・33は外反する口縁部片である。30には口唇部にも刺突文がある。33は凸帯の幅が広く、刺突文の間隔が密であり、凸帯部分が瘤状になる箇所がある。31・32・34は胴部片で、31は屈曲部である。28・29・34の凸帯間には条痕が残る。

第111図の１は口縁部から胴部にかけての部分で、口縁端部が「く」の字形に外反する。外器面には幅広い撚糸文が縦位に施され、内器面には端部に沿って帯状に外器面と同じ原体で横位に施文される。口唇部にも同原体で施文されている。２・４は外器面に縦走する楕円押型文を



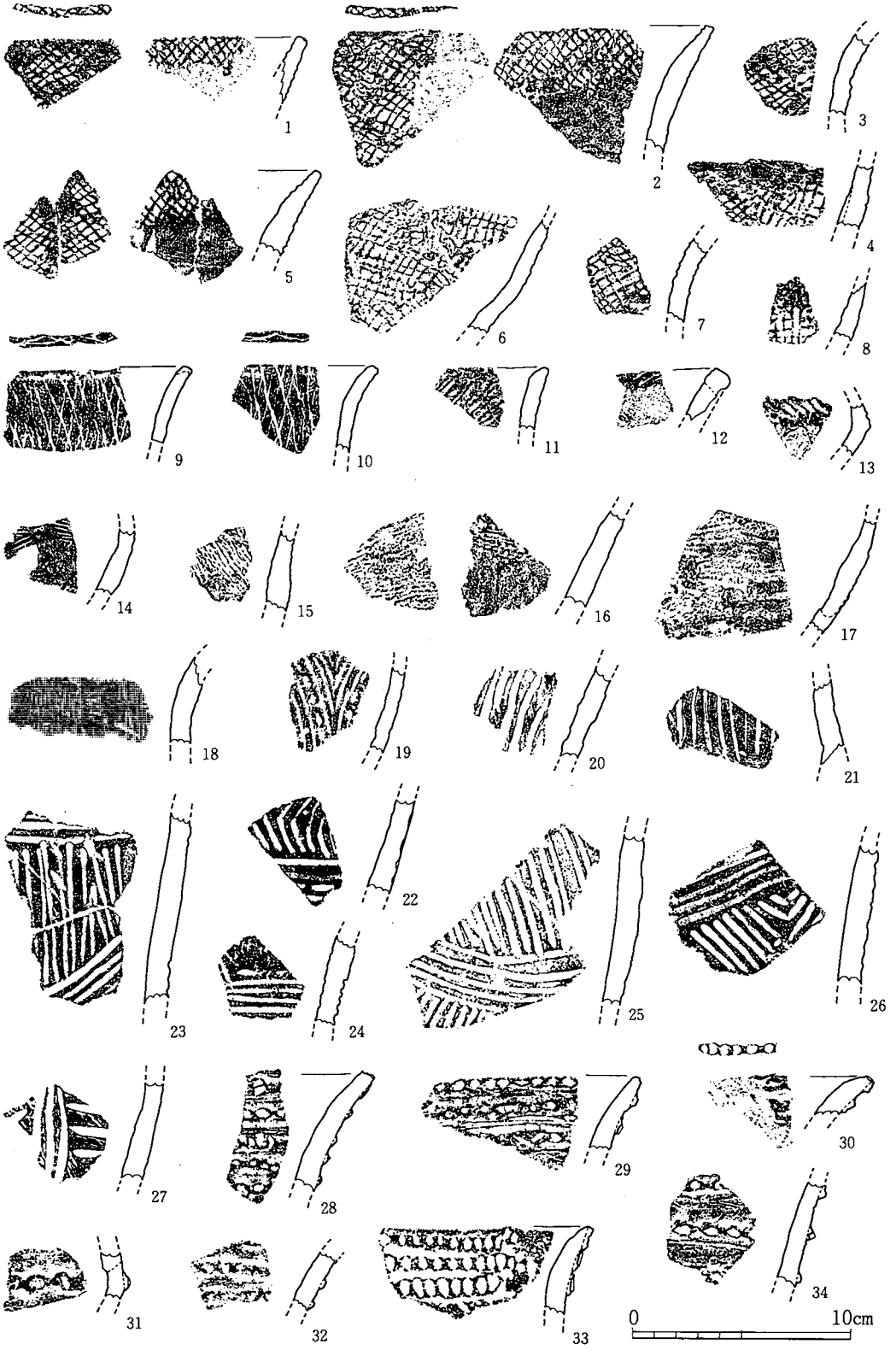
第109図　第1凹部出土土器実測図

施した胴部片である。3は端部が外反する口縁部片である。外器面に縦走する楕円押型文があり、内器面には端部に沿って帯状に外器面と同原体で横走する押型文を施す。口唇部にも同原体で施文を行う。5～13は山形押型文をもつ。5～10は口縁部片で、外器面には縦走する押型文、内器面には帯状に外器面と同じ原体で横走する押型文がある。5には同原体で口唇部にも施文する。9の押型文は間延びしている。5・7・8・9は端部で外方に屈曲し、6は全体が外反している。11は胴部の屈曲部で、屈曲部より上位に縦走する押型文がある。12・13は外器面に縦走する押型文をもつ。14～18の外器面には縦走する菱形押型文がある。14は端部が外方に開く口縁部片で、口唇部にも外器面と同じ原体で施文される。17は胴部の屈曲部で、「く」の字形を呈している。16・18は胴部片である。19～21には同心円押型文がある。19・20は外反する口縁部片で、外器面には縦走する押型文、内器面には端部に沿って帯状に横走する押型文をもつ。21は少し間延びした押型文をもつ胴部片である。

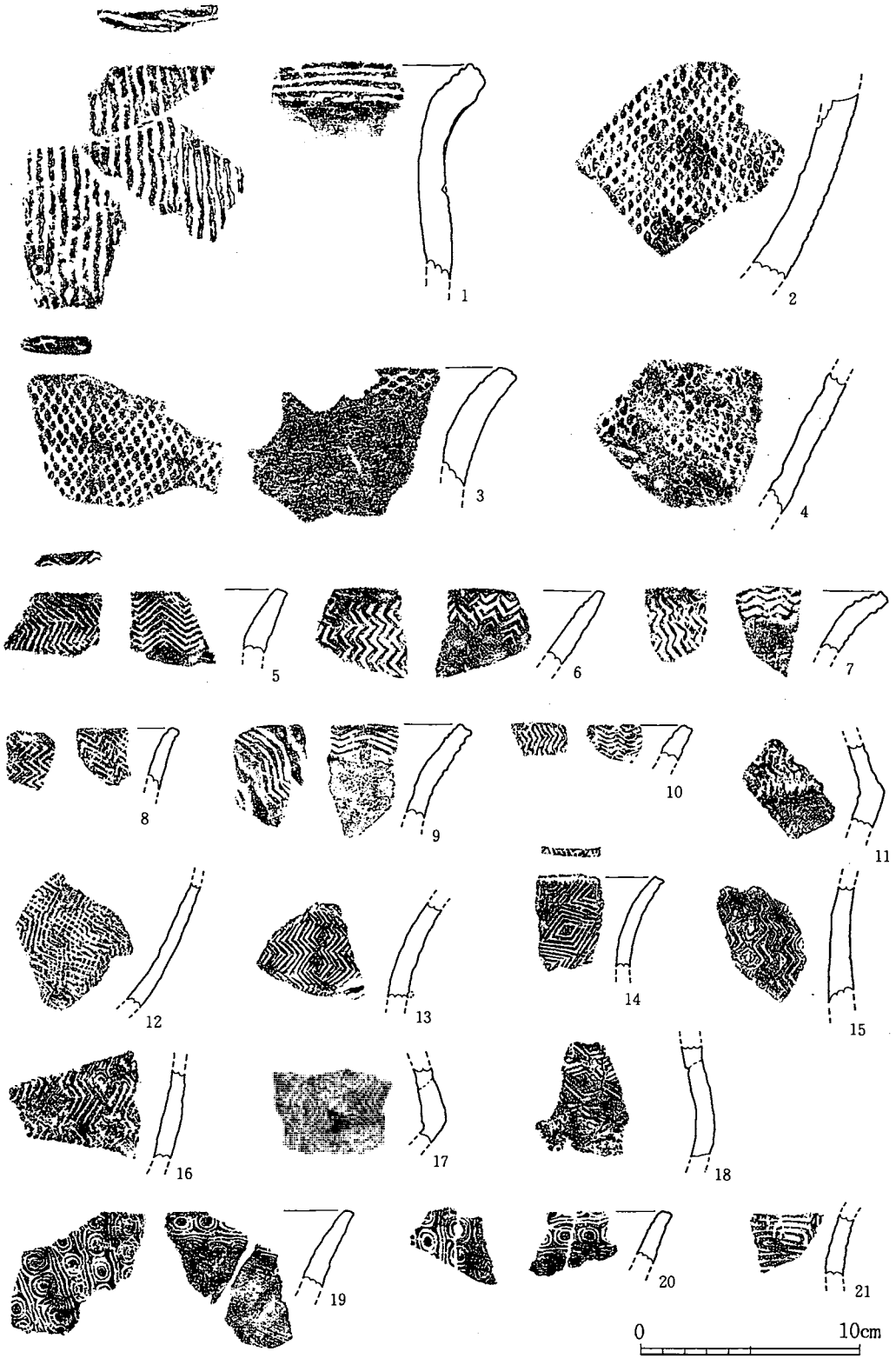
第112図1～7の外器面は縄文（ＬＲ）を地文とし、その上に凸帯をもつ。凸帯の上面には円形・楕円形の刺突文を施す。1は端部が外方に開き、波状を呈する口縁部片である。波状の頂部には縦位の瘤状凸帯を貼りつけ、その左右に紐状の凸帯がある。内器面には端部に沿って帯状に外器面と同様な縄文を施す。2～4・6・7は胴部片で、6・7は屈曲部であろう。5は外反する口縁部近くの土器片であろう。8～11は外器面に網目撚糸文と凹線文を組み合わせてもつ土器片である。8は頸部の屈曲部、9・10は胴部片、11は底部近くの胴部片である。12～14は外器面に貝殻による押し引き文があり、全体の器形を推定すると円筒形を呈すると思われる。15～17は外反する口縁部片で、外器面の端部から口唇部にかけて羽状刻目が施される。18は外反する口縁部片で、外器面と口唇部に条痕をもつ。19の口縁部は外器面に凹線と丸い刺突文をもち、口唇部にも刺突文がある。20は外反する口縁部で、外器面が剝落しており詳細が不明である。21は頸部の屈曲部で、口縁部側の器壁が薄い。22は外器面の幅広い凸帯の上に荒い刺突文を施した胴部片である。23の胴部片は小片であり、外器面に沈線らしきものがある。24の胴部片には外器面に沈線文がある。25～29は底部片であり、25・26は弱い上げ底になる。27の外器面には撚糸文と思われるものがある。

第2凹部出土の土製品（第113図）

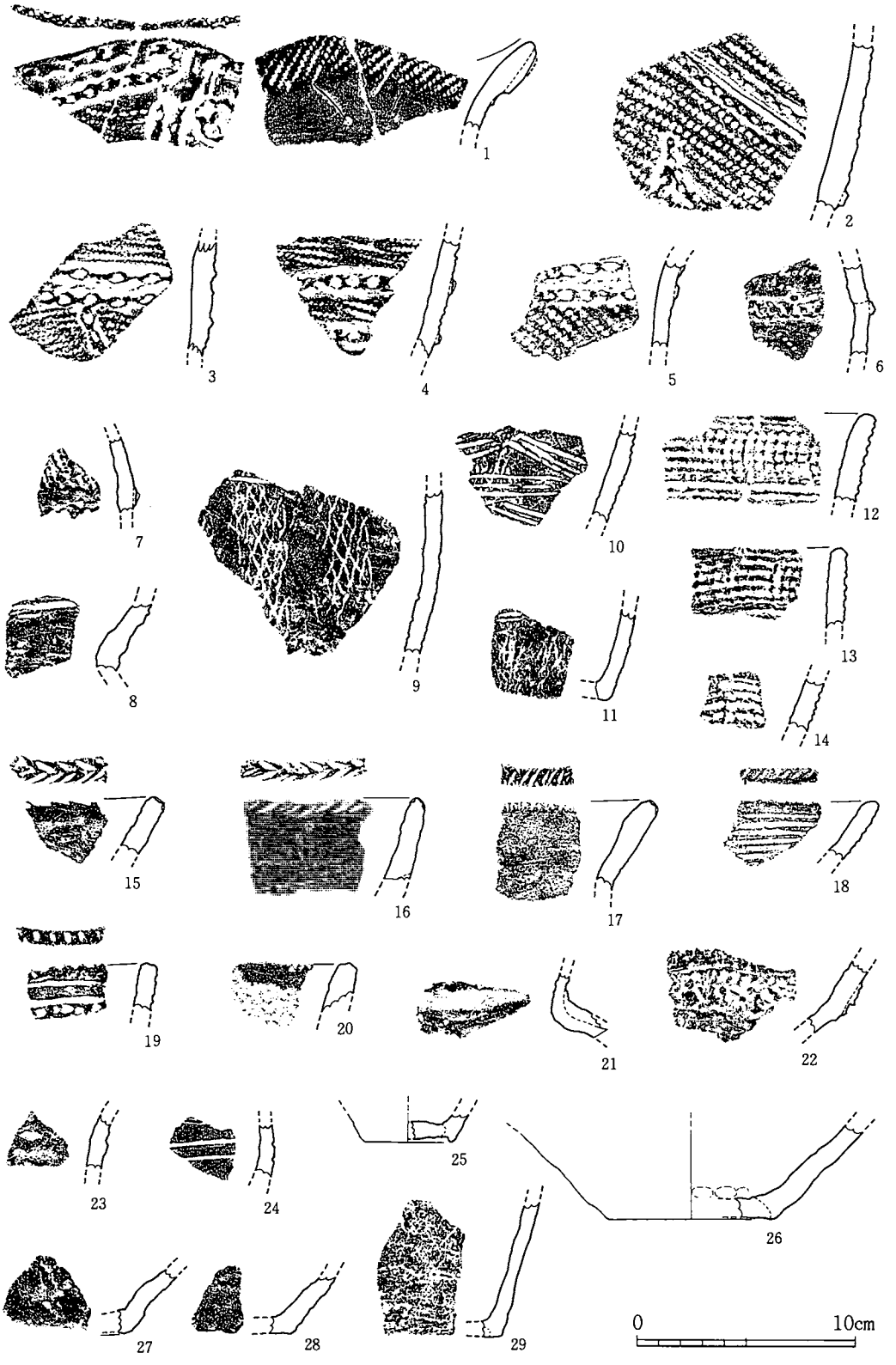
1は円形の平面形をした土製品で、断面形は不整な楕円形を呈する。表面は斜め方向のナデ調整痕が残っている。表面右上方にある略楕円形を呈する部分は、発掘時の欠損箇所である。裏面は互いに交わる数条の沈線が観察でき、下端部を部分的に欠損している。縁辺部には粘土の割れ目がある。2は先端が丸くなる棒状土製品で、断面形がほぼ円形を呈する。表裏面・左右側面には面取り状の調整加工を施し、爪痕と思われる部分が五箇所ある。下端部が欠損している。



第110図　第2凹部出土土器実測図



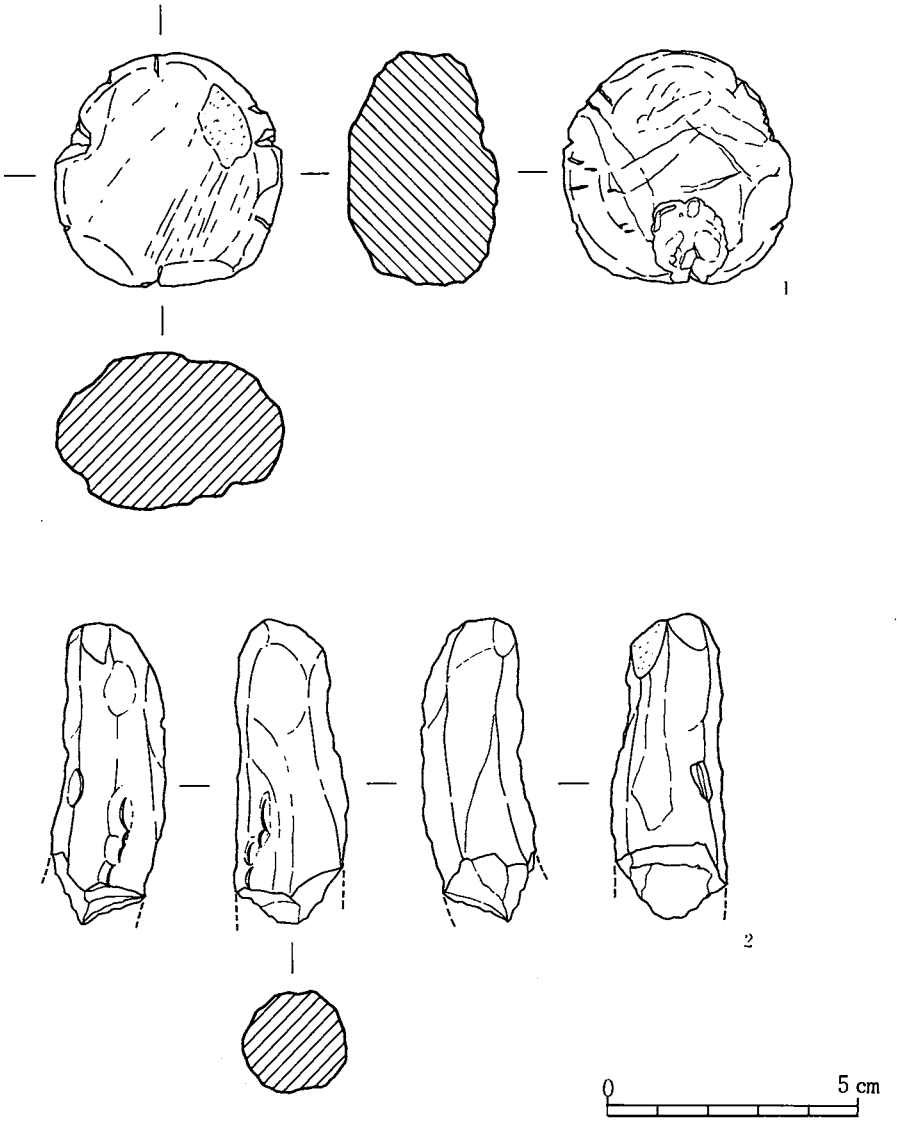
第111図　第2凹部出土土器実測図



第112図　第2凹部出土土器実測図

第3凹部出土の土器（第114図）

1は外器面に縦走する楕円押型文をもつ胴部片である。2は外反する口縁部片で、外器面には縦走する山形押型文、内器面には端部に沿って帯状に外器面と同じ原体で押型文を施す。3・4は胴部の屈曲部で、外器面に横走する山形押型文がある。8は外器面に間延びした縦走する山形押型文をもつ口縁部近くの胴部片である。5～7・9～11は菱形押型文をもつ。5は端部が強く外方にひらく口縁部で、外器面と口唇部に同原体の押型文がある。6は外反する口縁部片で、外器面には縦走する押型文があり、内器面には外器面と同じ原体で横走する押型文を帯



第113図　土製品実測図

状に施す。7・9～11は胴部片で、9は屈曲部である。12～14は外器面に変形撚糸文をもつ。12・14は胴部片で、14は屈曲部である。13は外反する口縁部片である。15は外器面にみみずばれ状の凸帯をもつ口縁部片である。口縁端部が三角形を呈する。16・17は底部片で、16は上げ底になる。18は外反する口縁部片で、外器面に断面形が三角形になる凸帯を菱形に貼りつける。

凹部より出土した土器については、後述する包含層出土土器といっしょに考察する。

凹部より出土した石器

石鏃（第115・第116図）

第115図1～7は第1凹部より出土した凹基無茎鏃である。1は基部の抉り込みが浅く、ほぼ三角形の平面形を呈する。2～7は基部の抉り込みが深く、平面形が二等辺三角形である。2は先端部と基部の一部分、3・4は基部の一部分が欠損している。4～7は大型の石鏃である。第116図1～3は第2凹部より出土した凹基無茎鏃である。1・2は平面形が二等辺三角形を呈し、基部の抉り込みが深く、基部の一部分が欠損している。2の先端部は丸くなっている。3は平面形が二等辺三角形で、基部の抉り込みが浅い大型品である。

異形石器（第116図）

4は第2凹部出土で、一部分が欠損している。四方向に突出部があり「X」字形になると思われる。残存している三つの突出部の中では下方のものが最も大きく、突出部が長い。

スクレイパー（第118図・第119図）

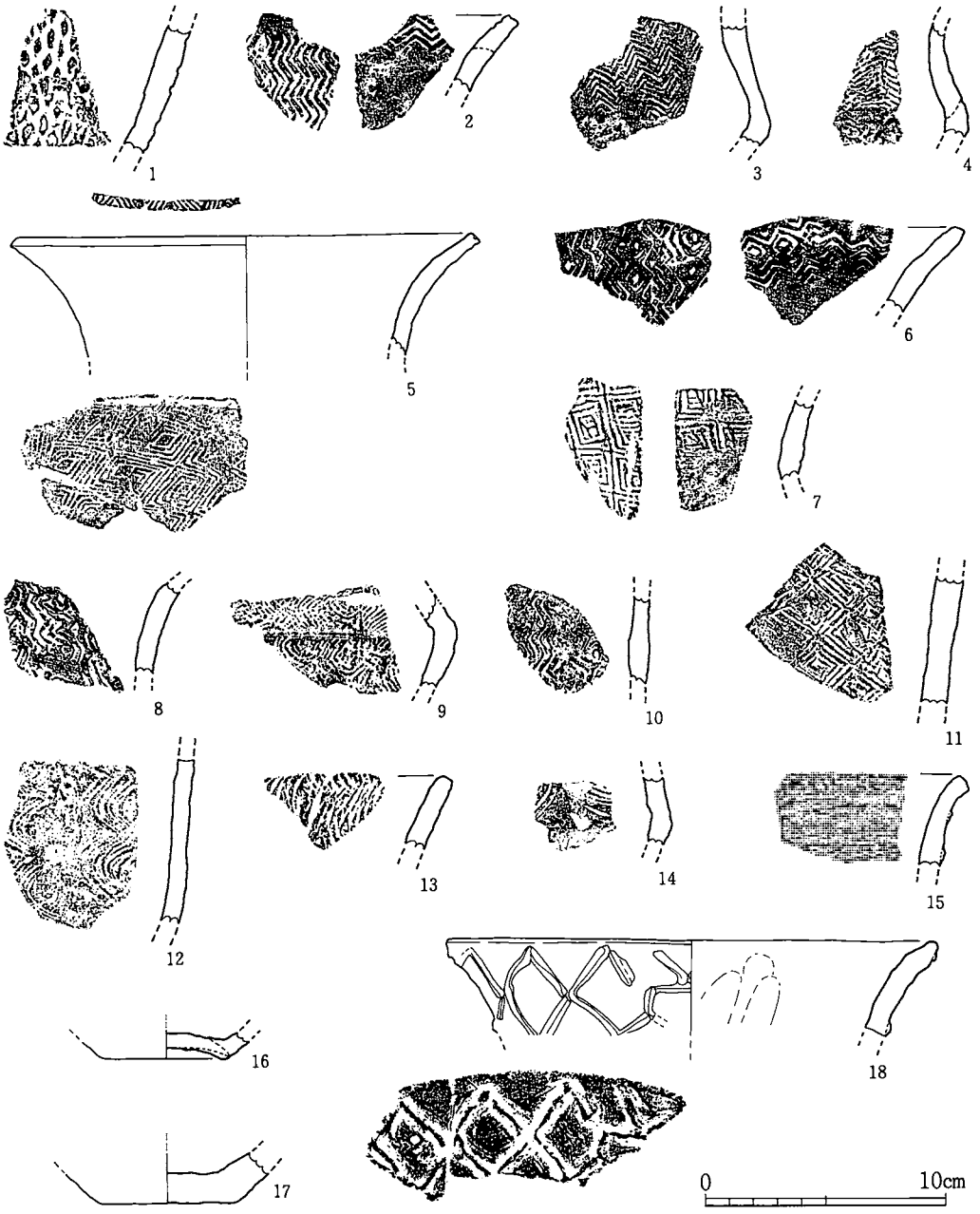
第118図1・7・8は第2凹部より出土した。1は横長剝片を素材とし側縁部より細かな剝離を加え刃部としている。7は横長剝片に縁辺部より調整剝離を行い、下端部に細かい剝離を加え刃部を形成している。8は平面形が丸い横長剝片に縁辺部より剝離を行い刃部としている。第119図4は第3凹部より出土した。4は横長剝片に主に上端部と左側縁部より調整加工をし、下端部に細かい剝離を行い刃部を形成している。裏面の一部分に自然面が残る。

二次加工剝片（第118図・第119図）

第119図1は第1凹部より出土した。1は横長剝片に主に右側縁部より二次加工を行っている。第118図2・4は第2凹部より出土した。2は縦長剝片に右側縁部より、4は横長剝片に下端部と左側縁部より二次加工をしている。

使用痕のある剝片（第118図・第119図）

第118図5は第1凹部、第118図3・第119図2・3は第2凹部、第118図6・第119図5は第3凹部より出土した。第119図2は側縁部に使用痕があり、それ以外は下端部に使用痕がある。第119図2・3には部分的に自然面が残る。



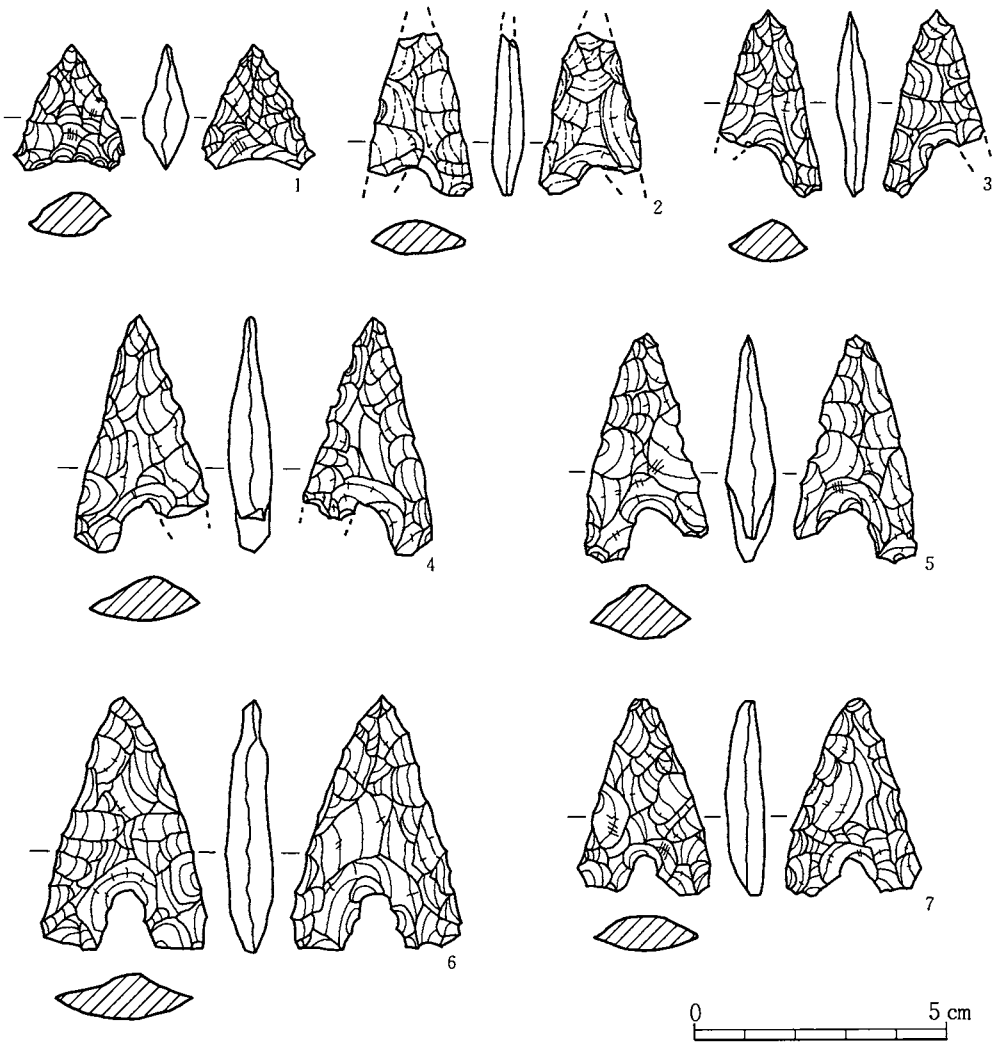
第114図　第3凹部出土土器実測図

石核（第117図）

これは第2凹部より出土した。裏面に自然面をのこした礫を素材とし、縁辺部より剝離を行っている。横長剝片を剝離した石核である。

磨石類（第120図・第121図）

第120図4は第1凹部、第120図1・2・5、第121図1・3は第2凹部、第120図3は第3凹部より出土した。第120図1・2は体部の片面に磨痕をもつ。1の側縁部の上端に磨痕、下端に



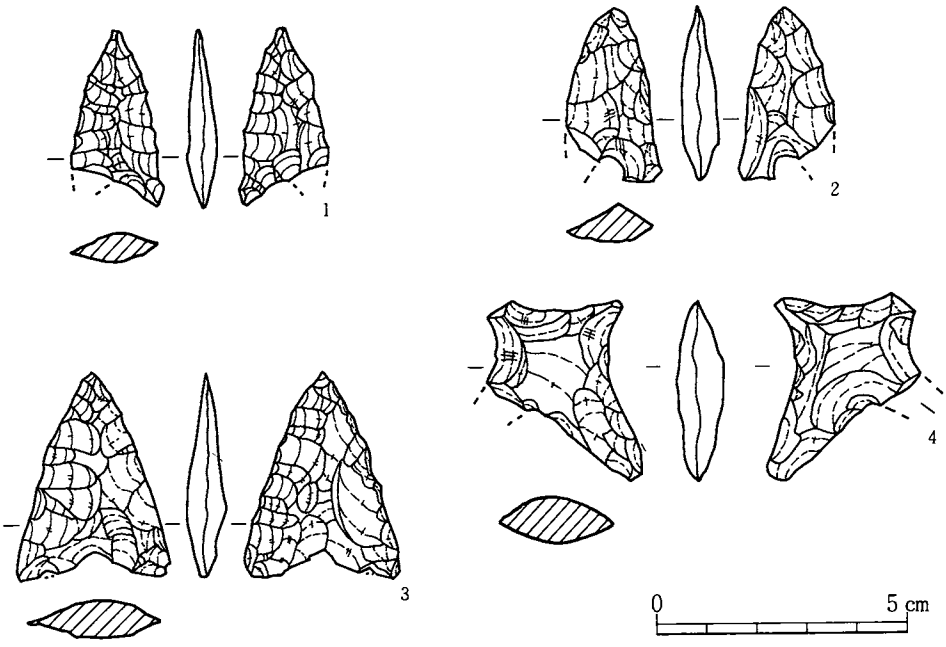
第115図　第1凹部出土石器実測図

敲打痕がある。2は右側縁部に敲打痕をもつ。第120図3～5、第121図1・3は体部の表裏面に磨痕をもつ。第120図3・4、第121図1の縁辺部には敲打痕がある。第121図1の敲打痕は顕著である。第120図4の縁辺部は一部分が欠損している。第120図5の縁辺部には磨痕と敲打痕がある。第121図3は縁辺部と体部表面の中央部に敲打痕をもつ。体部の敲打痕がある部分は僅かに窪む。

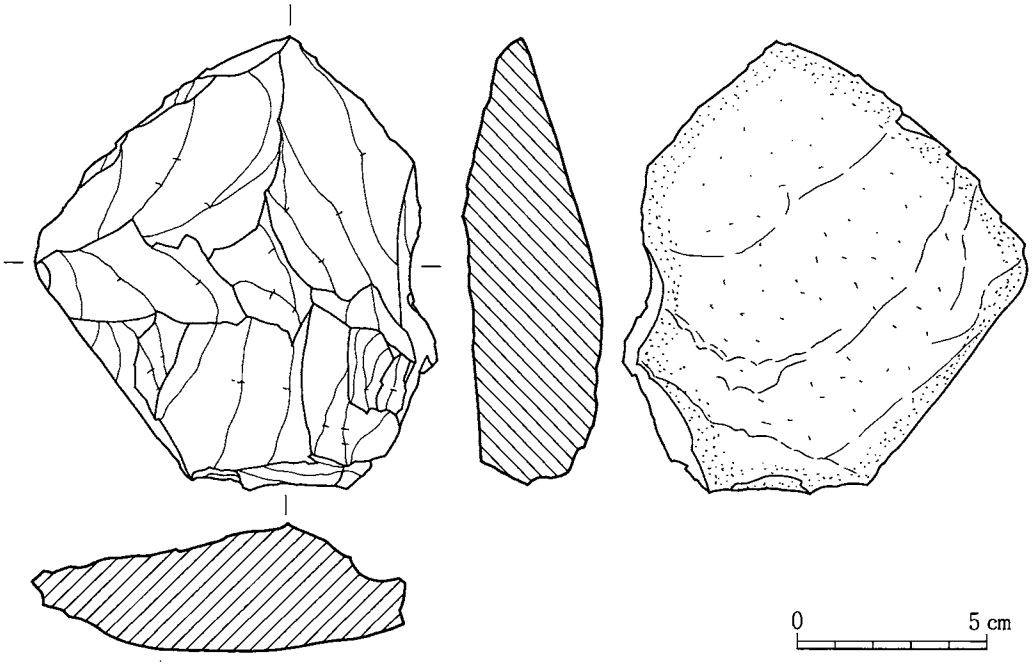
敲石（第121図）

第121図2・4は第2凹部より出土した。2・4とも体部の大部分が欠損しているが、残存部の下端部に敲打痕が観察できる。

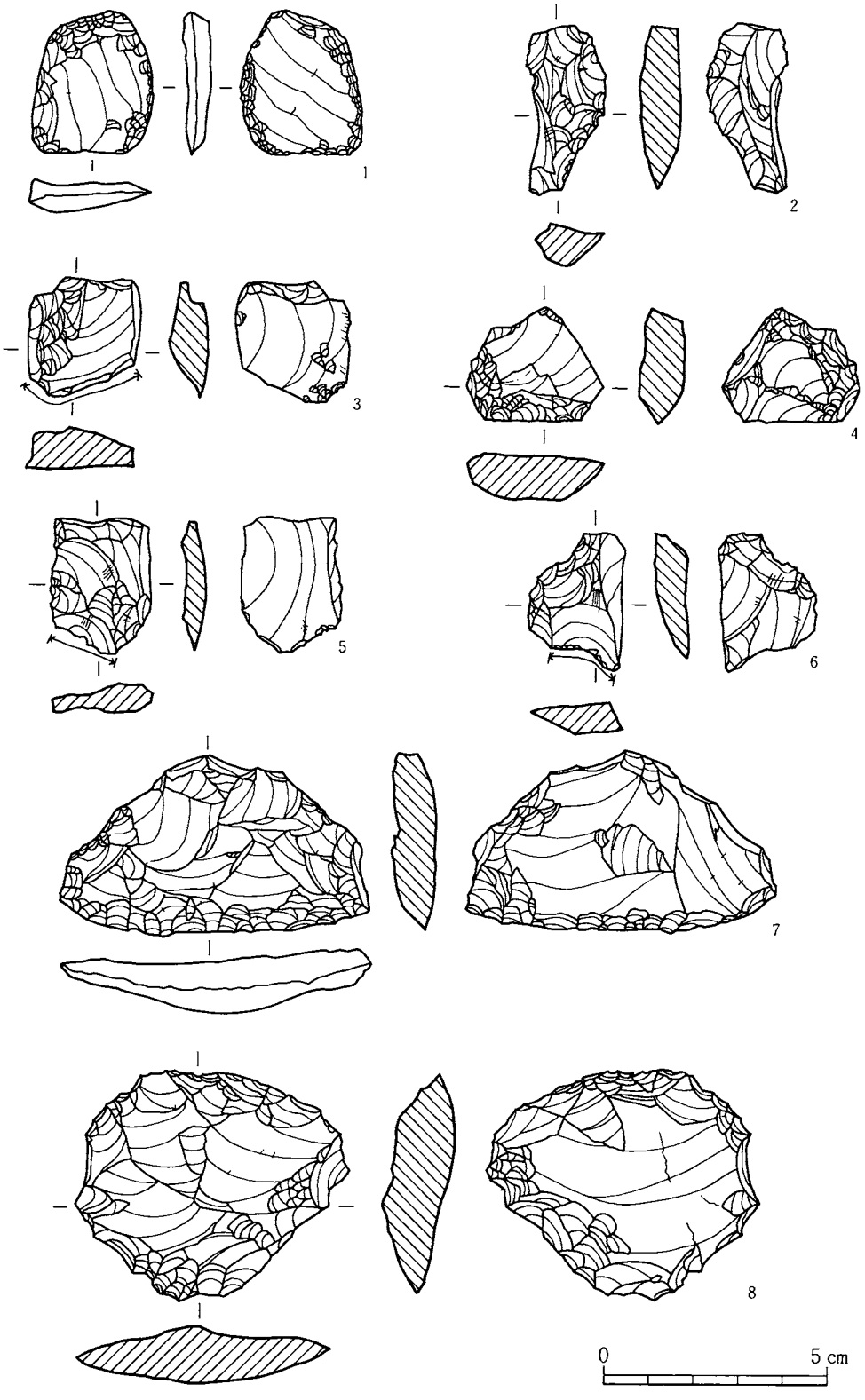
ここで、凹部ごとに出土した石器をまとめてみる。第1凹部からは、石鏃（7）、スクレイパー（1）、磨石類（1）、二次加工剥片（1）、使用痕のある剥片（4）、剥片・破片（9）、自然石



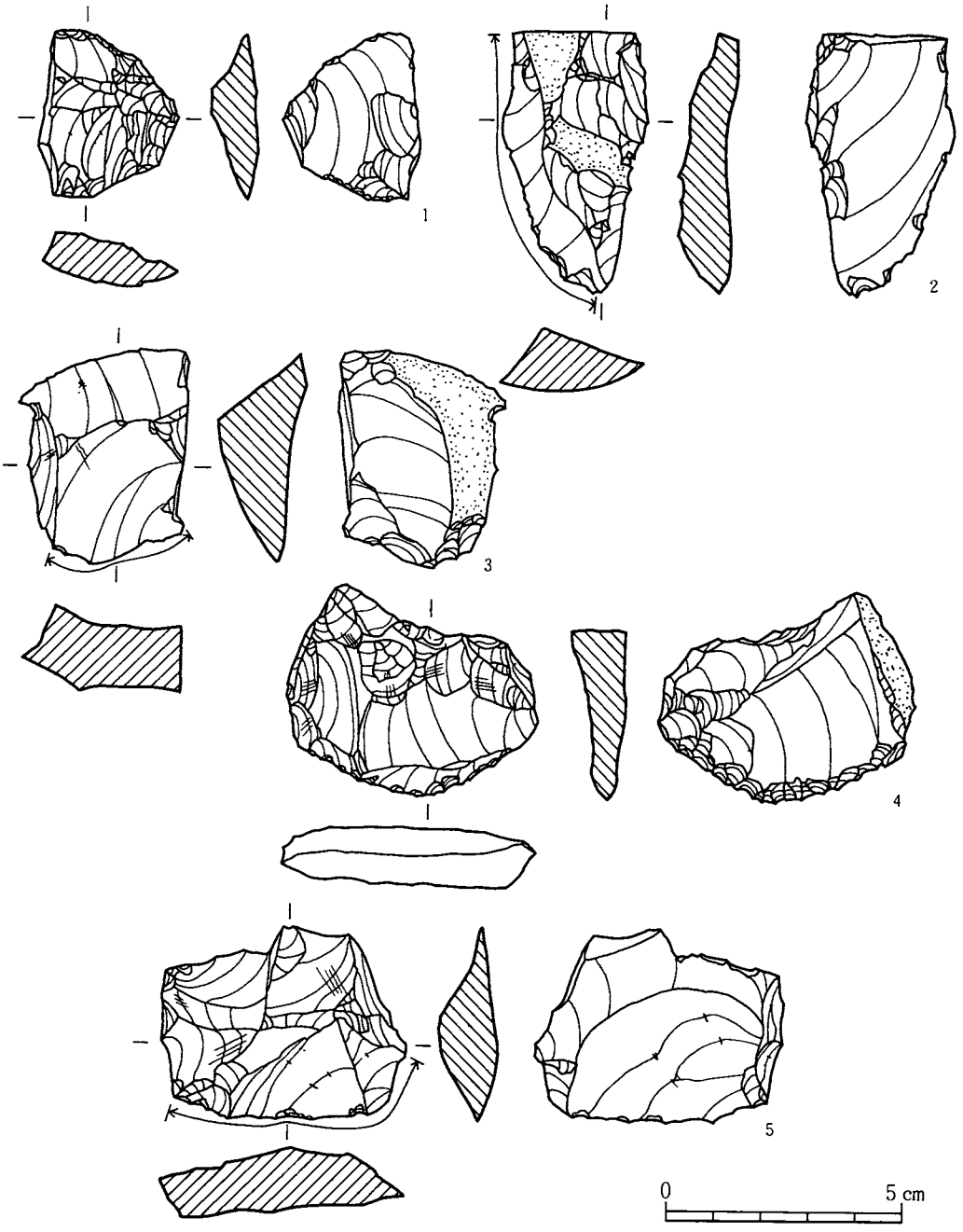
第116図　第２凹部出土石器実測図



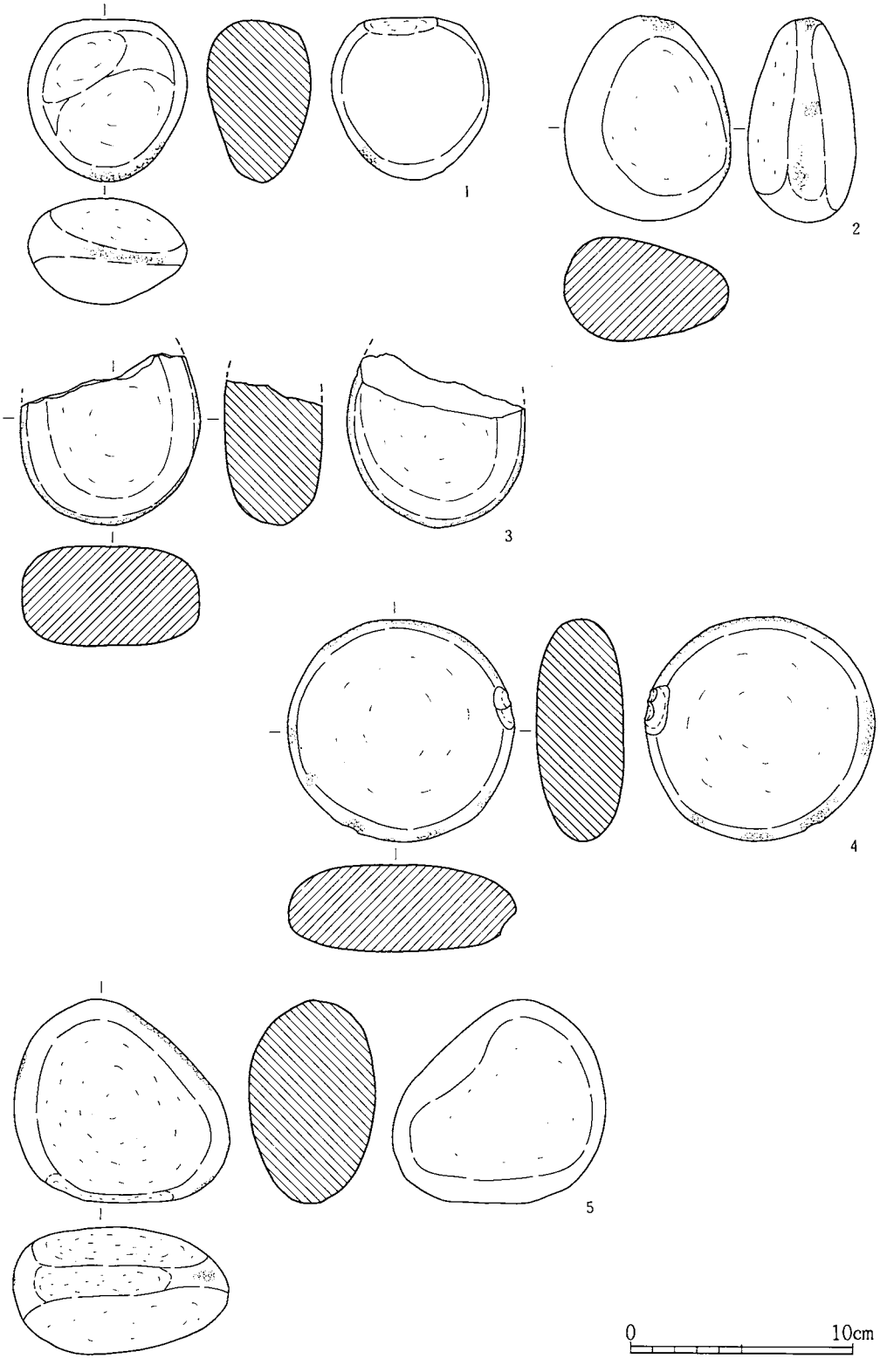
第117図　石器実測図



第118図　石器実測図

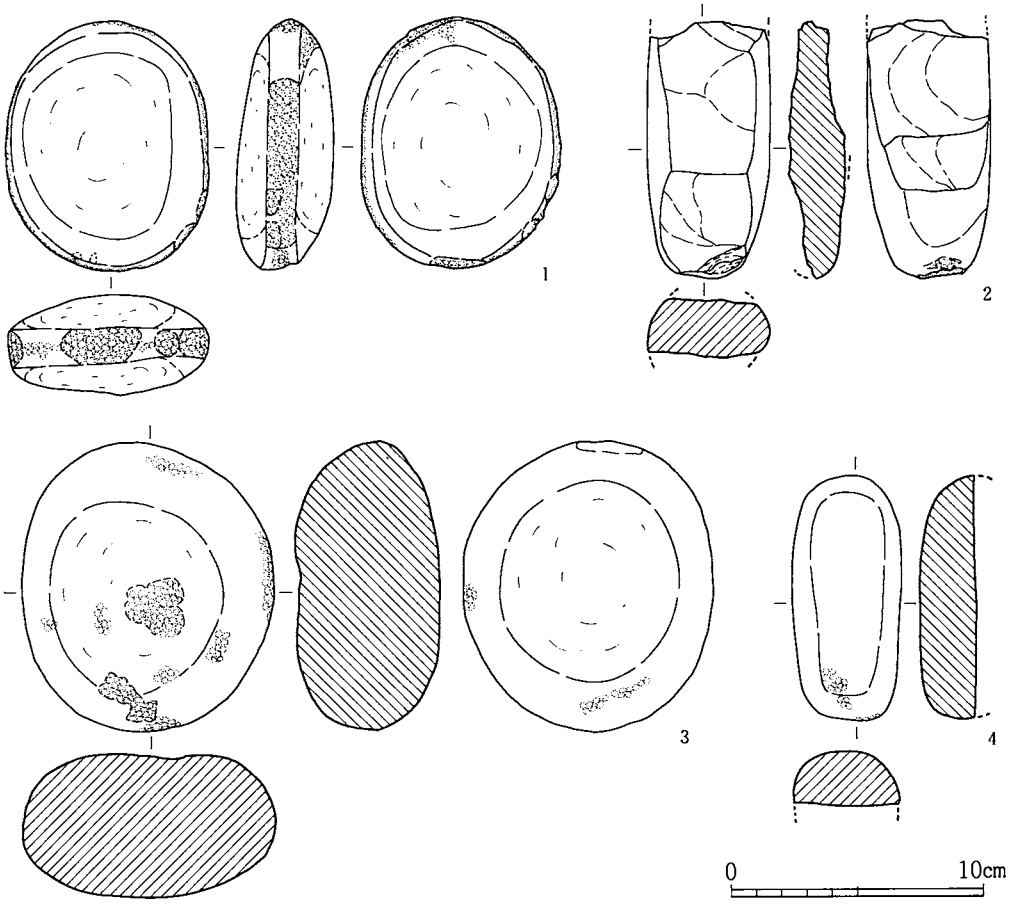


第119図　石器実測図



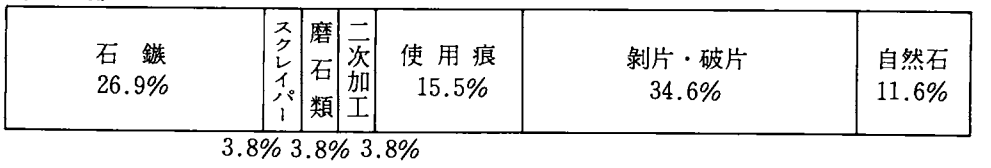
第120図　石器実測図

（3）の計26点が出土した。第2凹部より出土したものは、石鏃（3）、スクレイパー（3）、磨石類（13）、敲石（2）、二次加工剥片（4）、使用痕のある剥片（8）、石核（2）、異形石器（1）、剥片・破片（71）、自然石（5）で、総数112点を数える。第3凹部からは、スクレイパー（1）、磨石類（2）、二次加工剥片（1）、使用痕のある剥片（2）、剥片・破片（4）の計10点が出土した。凹部ごとの石器組成を示したのが第5表である。これを見ると、各凹部の石器組成が異なる。第1凹部では、石鏃の占める割合が高いのが特徴である。第2凹部は第1・3凹部と比較すると、極端に出土石器が多い。その中でも、磨石類と剥片・破片の占める割合が高く、他の凹部では出土していない異形石器・石核・敲石が出土している。第3凹部は他の凹部と比較するには出土石器数が少ない。出土数が少ないことが第3凹部の特色である。

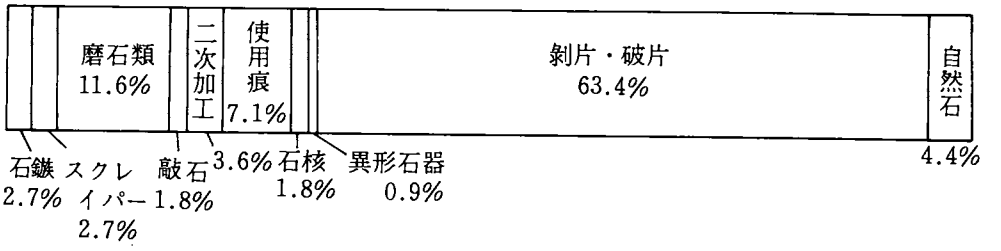


第121図　石器実測図

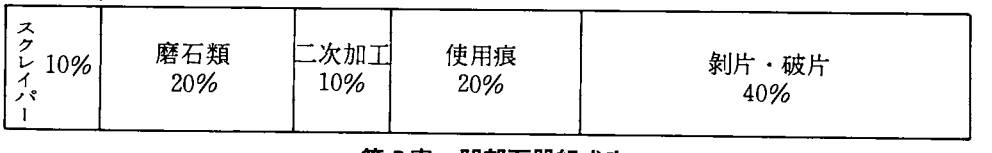
第1凹部



第2凹部



第3凹部



第5表　凹部石器組成表

2．遺物について

(1)土器

縄文時代早期に属すると思われる土器は、遺構出土のもの、遺構覆土出土のもの、包含層出土のものあわせて1791点出土している。これらの多くはV・VI層より出土している。これらの土器を報告するに当たっては、文様や施文法、器形等を主にして仮にいくつかのグループに分類してみた。

まず器形によりⅠ～Ⅶ類に分類している。Ⅰ・II類は胎土がやや砂質で器壁が厚く、外反する口縁部から直立気味の胴部につながるもの、IV類は施文法に共通点を持ち、器壁が薄いものを含み、口縁部は外反し、「く」の字形に屈曲する胴部を持つ器形が存在するもの、V類は外反する口縁部から直立気味の胴部に続く器形を呈し、外器面に凸帯を巡らすもの、VI・Ⅶ類はラッパ状に開く口縁部からバケツ状の胴部に続く器形のもの、である。またIII類は特殊なものとして別に分類した。加えてそれらを形態により1（深鉢形）と2（壺形）に分け、必要に応じて、文様により細分化し、アルファベットで示している。

グループ毎の細かな説明をこれから加えるが、グループ相互の関連や問題点については後でまとめて述べることとする。

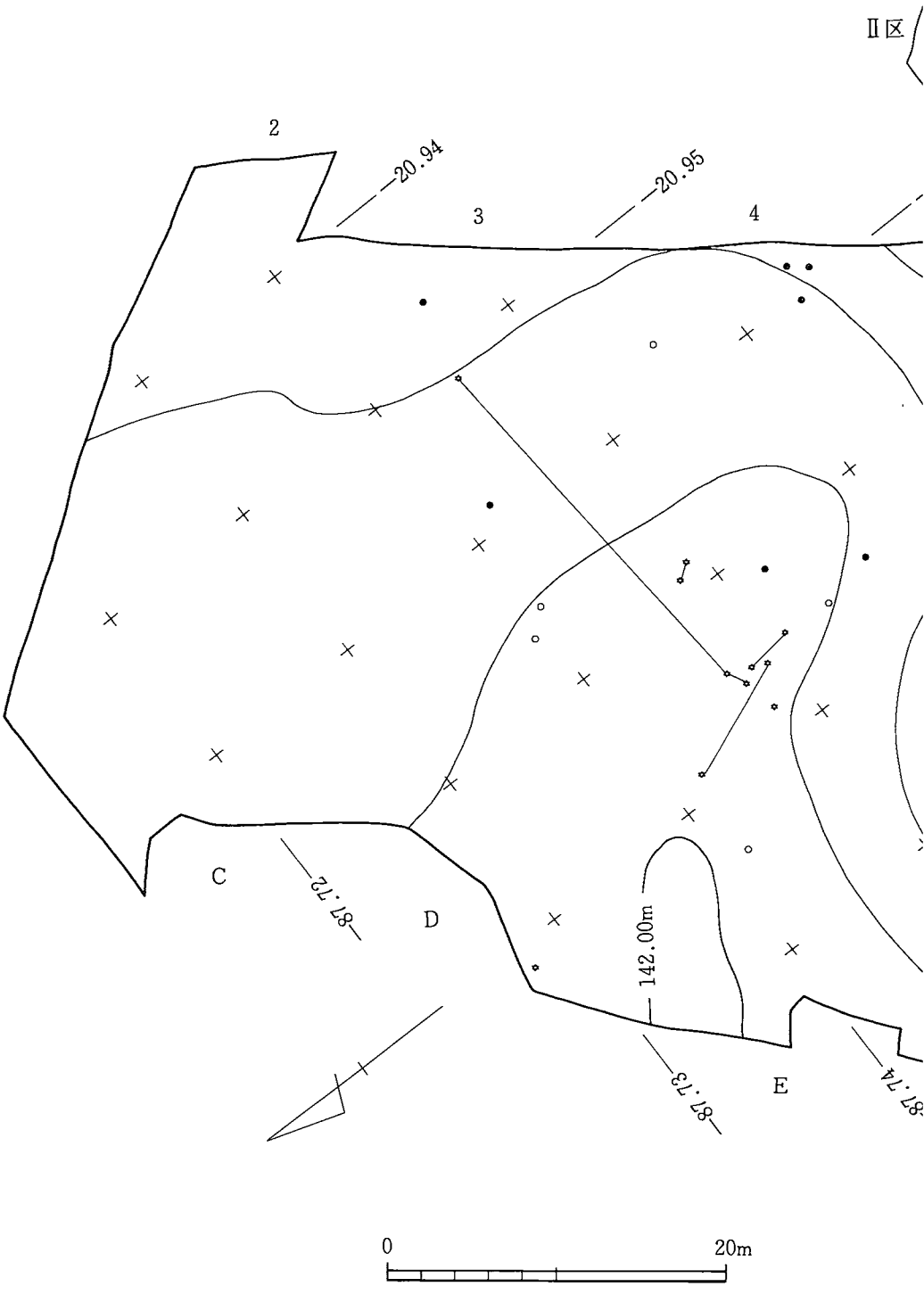
Ⅰ－1類（第123図・第124図）

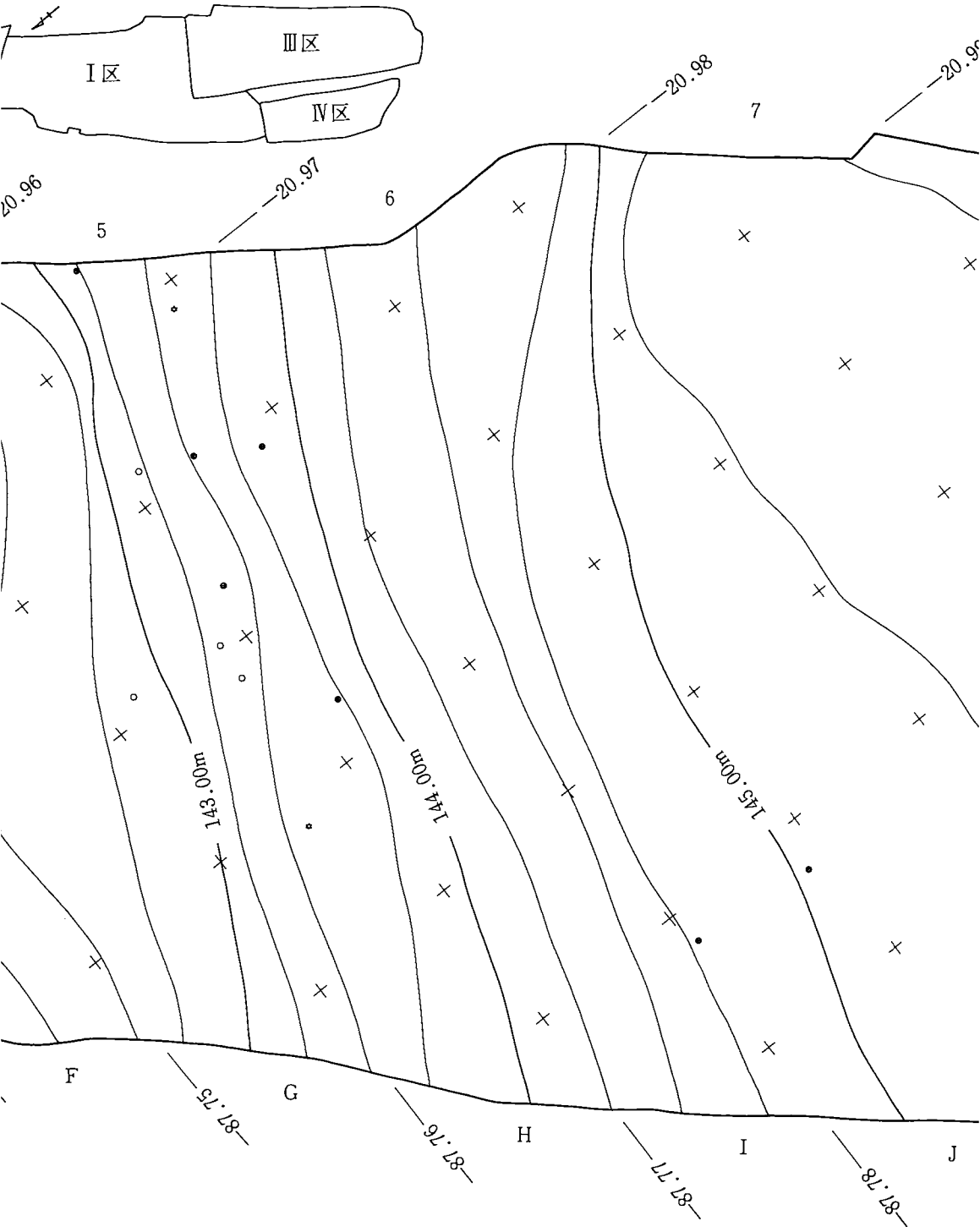
楕円の押型文を施文しているもので、総数は100点、うち遺構から33点出土している。第123図・第124図1・2は口縁部片である。口唇部は丸いか尖り気味で、口縁端部は薄くて外反するもの（第123図2・6・8・9～11・15・第124図1・2）、口縁端部のみ急に外反するもの（第123図4・7・11・15)、口唇部は平坦であるもの（第123図3～5・7・9・12～14)、口縁部はほぼ直行するもの(第123図3)、等口縁部の形態にはいろいろな組合せがある。また、第123図12・14を除けば、器壁の厚さは1cm以上でやや厚ぼったく、胎土がやや砂質(第123図6～10・13～15、第124図1・2）で淡茶褐色の色調を呈するものが多い。

第123図1～8、第124図2は外器面、内器面、口唇部に楕円押型文を施文するものである。施文の方向は外器面は縦位、内器面は口縁端部に横位に一条のみである。ただし第124図2の外器面は、楕円押型文が縦位に帯状に施文してあり、他のものとは趣が異なっている。

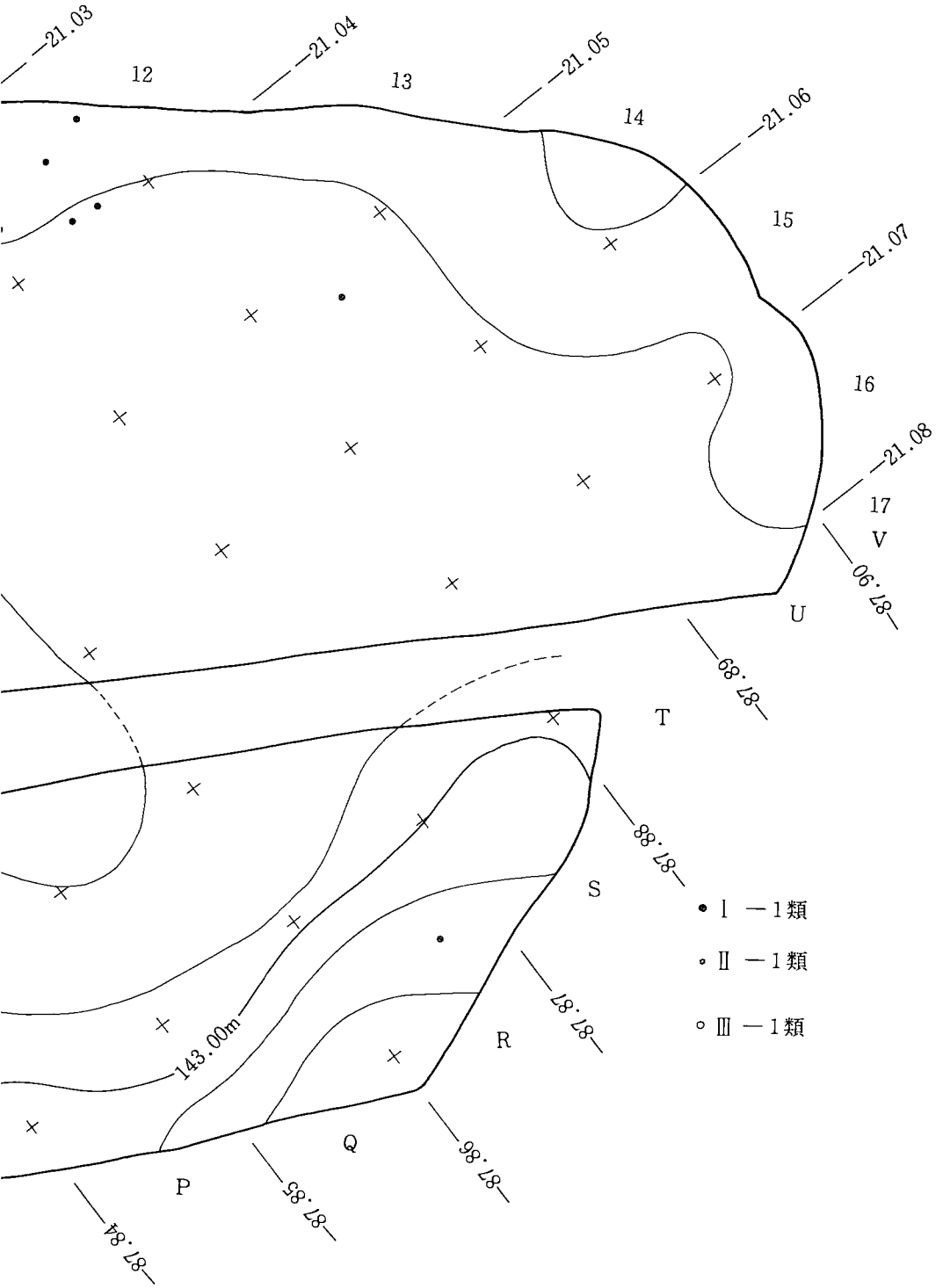
第123図9～15は、内器面の口縁端部に横位に一条、外器面は全体に縦位に、押型文を施している。第124図1は外器面にのみ縦方向に施文がある。第123図12は器壁が薄く、施文原体の楕円の粒も極端に小さい。第123図15には両器面からの穿孔があり、10は外器面からの穿孔が未完のままである。

第123図3～21は胴部片である。15・16・18は若干器壁が薄いが、他のものは厚さ1cm以上である。16・18・19はわずかに外反しており、20・21は底部近くであろうが、胴部以下の器形を

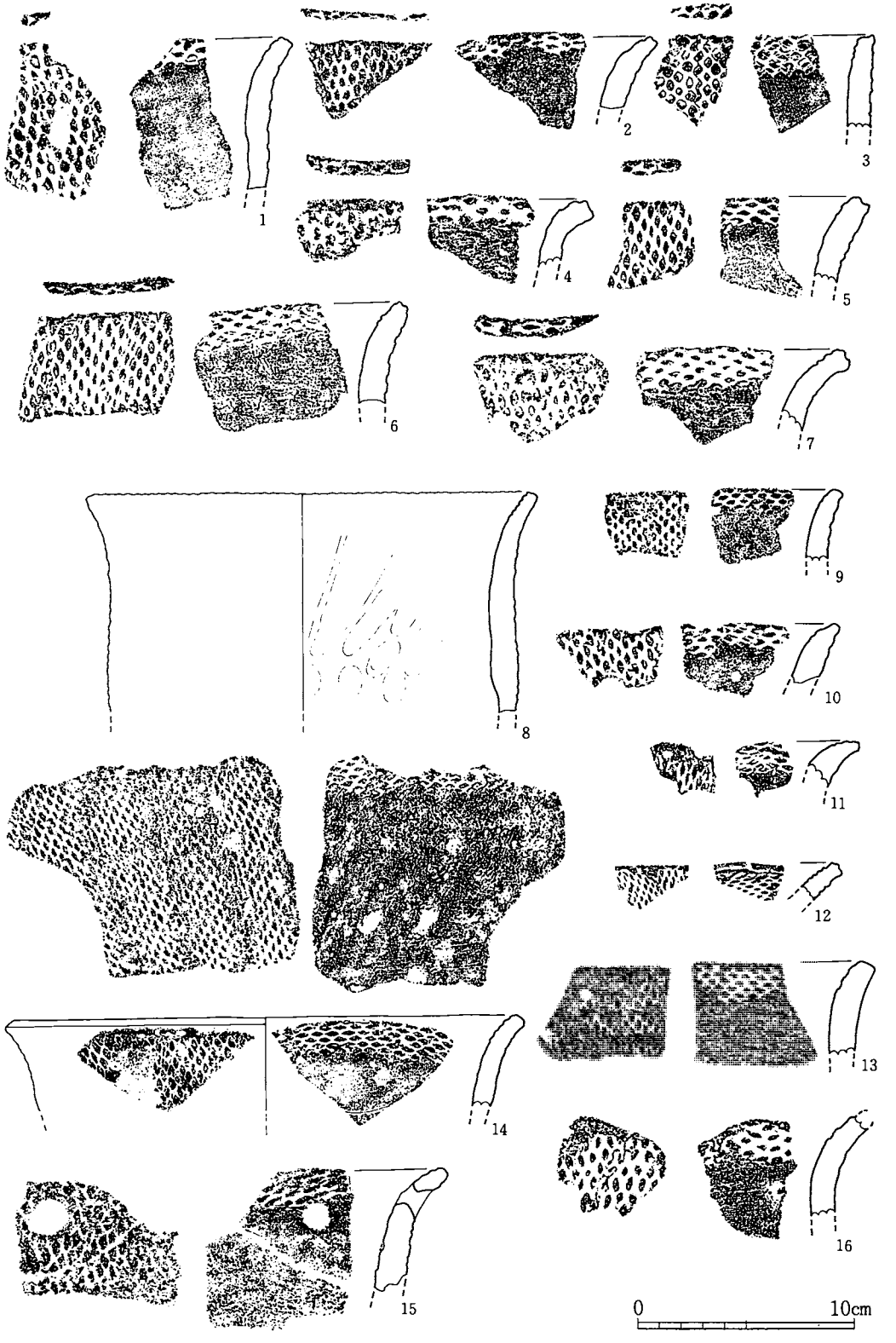

Ⅱ区
2
20.94
3
20.95
4
C
87.72
D
142.00m
87.73
E
87.74
0
20m


Ⅲ区
Ⅰ区
Ⅳ区
20.96
20.97
20.98
5
6
7
143.00m
144.00m
145.00m
F
G
H
I
J
87.75
87.76
87.77
87.78

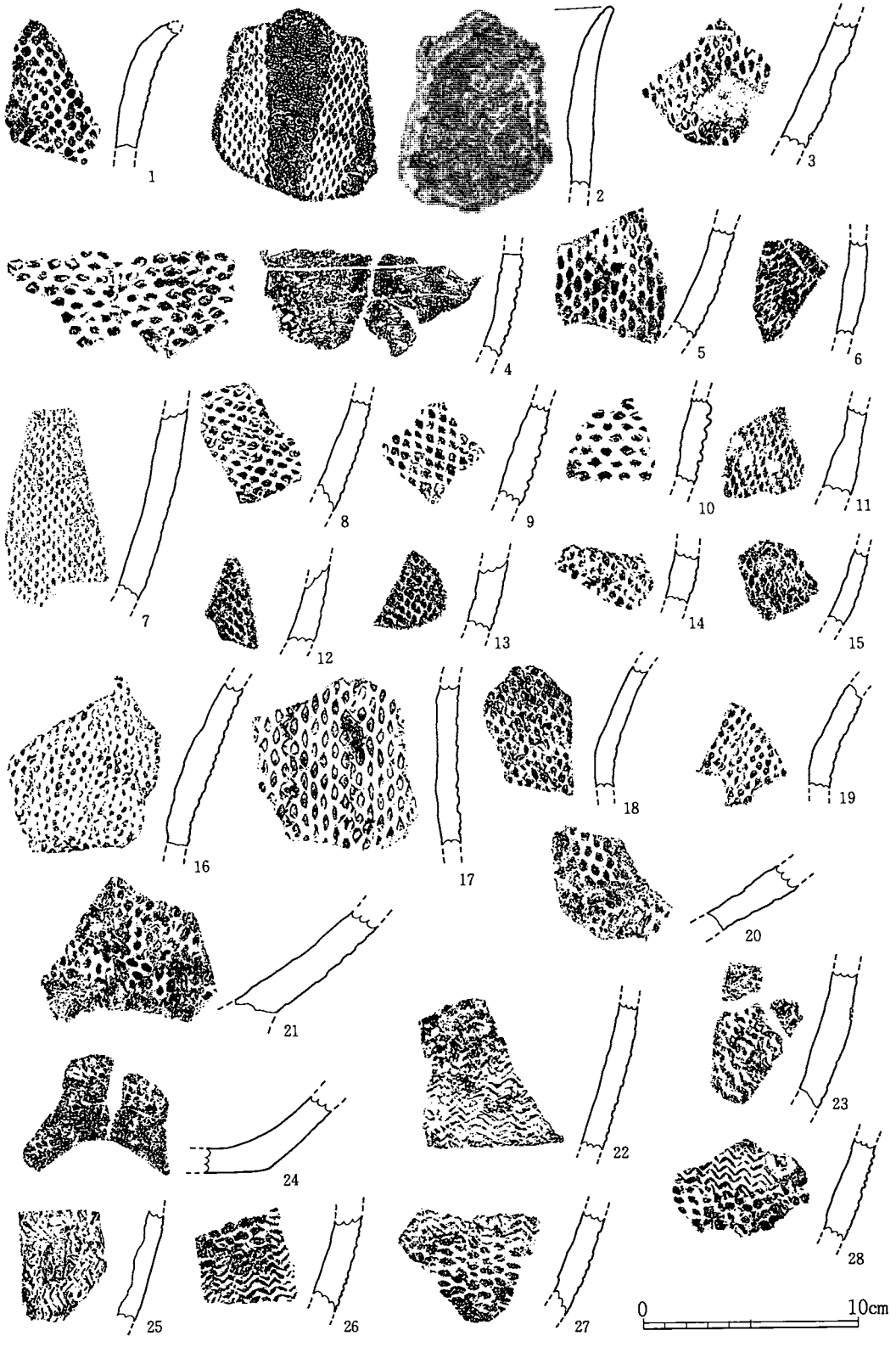
8
9
10
11
-21.00
-21.01
-21.02
144.00m
145.00m
K
L
M
N
87·79
87·80
87·81
87·82
87·83



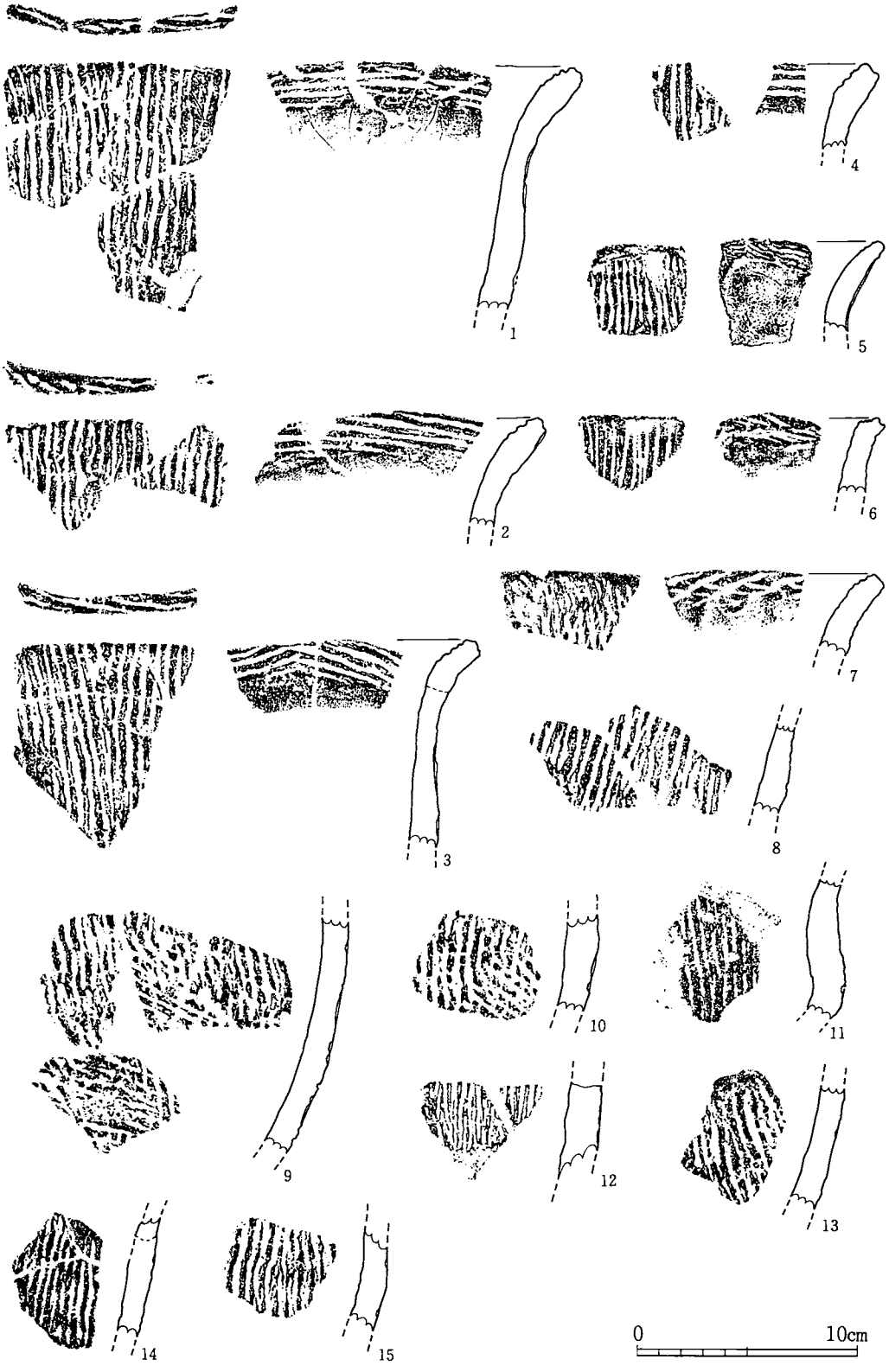
第122図　Ⅴ層・Ⅵ層出土土器分布図



第123図　土器実測図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm

第124図　土器実測図



第125図　土器実測図

推定できるものはない。外器面にのみ楕円押型文を施文しており、施文の方向は4・8・10を除いては縦位である。11・13・15～18の胎土はやや砂質である。

第124図24は平底の底部である。底部近くまで施文されている。胎土はやや砂質である。

第124図22・23・25～28は楕円押型文と山形押型文を併用して施文するものである。やや赤みがかった淡茶褐色を呈し、胎土はやや砂質で、器壁は厚く、楕円押型文施文のものにより類似する。11号集石に類例（第103図・第104図）が6点あり、この集石出土のものと26～28は同一個体であると思われる。山形が小さくしっかりとしている割には、楕円はだらしがない。施文方向は横位である。22・23・25の山形はやや間延びしており、楕円の粒はつぶれている。施文方向は横位、縦位共にある。

III区中央東端に若干集中する他は、I区中央傾斜部とIII・IV区北側傾斜部から点々と出土している。

II－1類（第125図）

撚糸文を持つもののなかでも、原体の撚糸が太く、また、平行に深く施文されている（撚糸a）グループである。器壁の厚さ1.0～1.5cmと厚い。総出土点数21点、うち遺構より出土したものが1点ある。

1・3は口縁部から胴部にかけて、2は口縁部の破片である。胴部は直立気味でわずかに丸みを持ち、口縁部との境で僅かにくびれて、この部分で器壁は薄くなる。口縁は端部近くで急に外反し再び厚くなる。内器面の口縁端部には横位に、外器面には縦位に平行な撚糸文を施す。口唇部は丸みがあり、内器面外器面と同一の撚糸文を斜位に施文している。

4～7は外反する口縁部片である。すべて内器面の口縁端部と外器面に文様を持ち、4～6は口唇部にも撚糸文が施されている。6の内器面は口縁端部に段ができ、段の部分が施文部になっている。7は口唇部が平坦で文様がない。外器面は縦位にだぶるように二度施文されたようで、内器面は斜位に交差して施文され、網目状の文様になっている。

8～15は胴部である。11は緩やかに屈曲している。外器面に施文され、方向は縦位が基本であるが、その後斜位に重ねて施文しているもの（9・10）もある。

I区の北寄り、中央部の低く平坦になっている部分からの出土が多い。

III－1類（第128図）

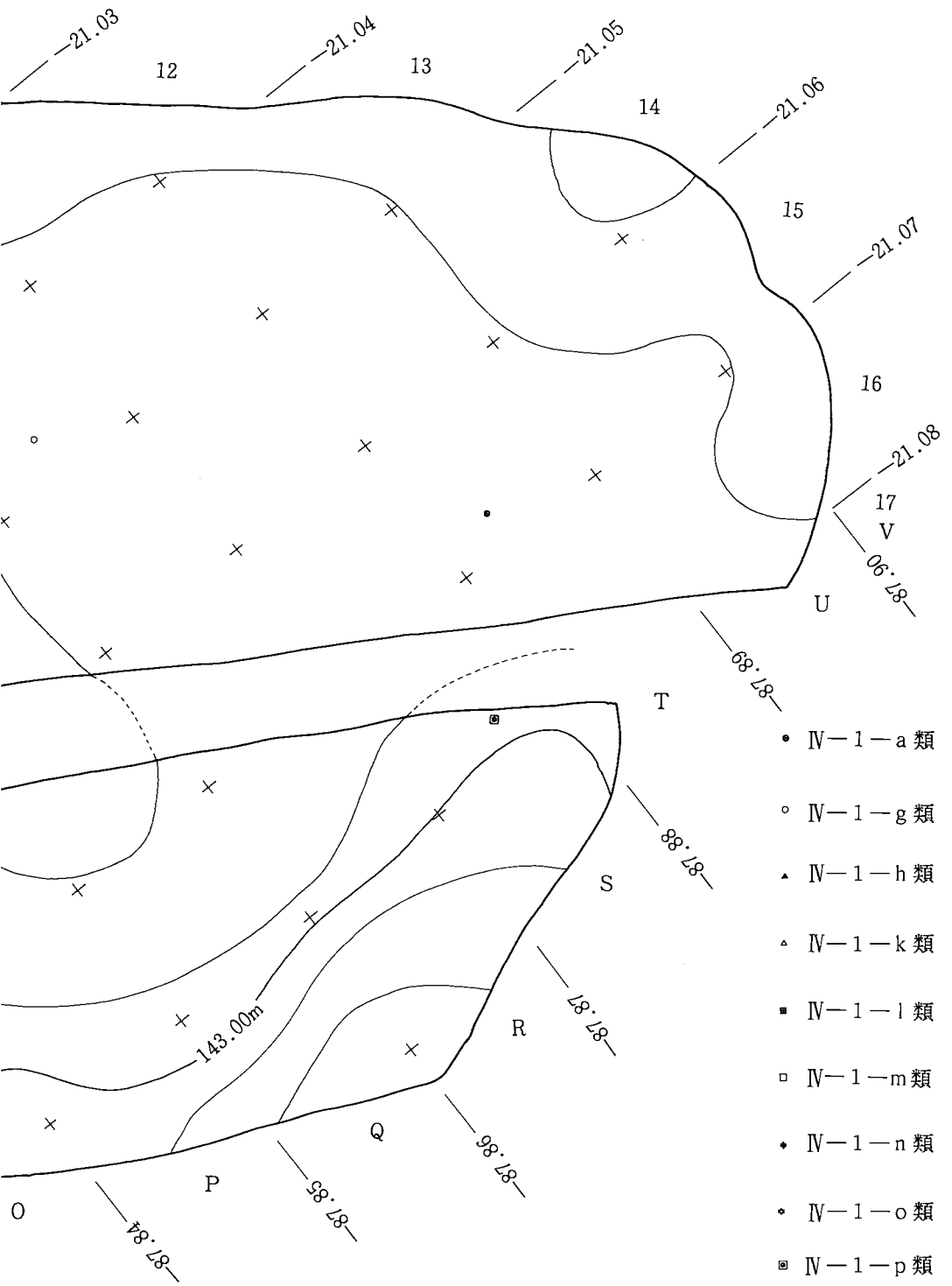
1～8はすべて同一個体であると思われ、9もごく類似している特色のある土器である。他に図化できなかったものが3点ある。1・2は口縁部、3～9は胴部の破片である。

口縁部は外反し、口縁端部はつまんだ様に急に細くなり反る。胴部は器壁の厚さ1.0～1.2cmと厚手で、直立気味で特に変化はなく、器形を窺い知ることができない。底部は不明。外器面には、細い撚糸を用いただらしない網目文（撚糸b）が施文される。施文方向には規則性がなく、また、全面に施文されているわけでもない。口縁部端の内器面には不規則な撚糸文が見ら

Ⅱ区
Ⅰ区
2
20.94
3
20.95
4
C
87.72
142.00m
D
87.73
E
87.74
0
20m

Ⅲ区
Ⅳ区
-20.96
-20.97
-20.98
5
6
7
143.00m
144.00m
145.00m
F
G
H
I
J
87.75
87.76
87.77
87.78

8
9
10
11
21.00
21.01
21.02
144.00m
145.00m
K
L
M
N
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83

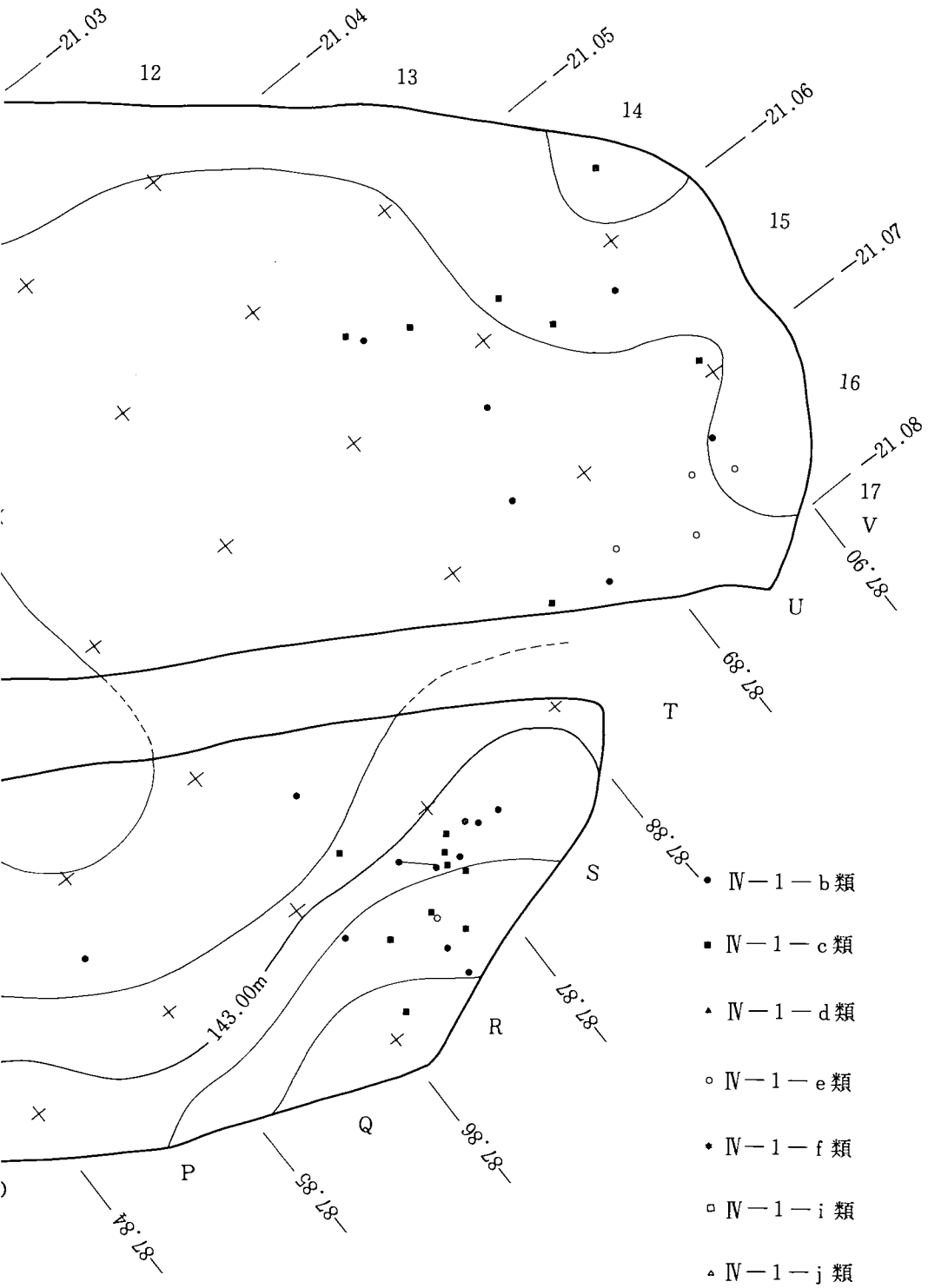


第126図　Ⅴ層・Ⅵ層出土土器分布図

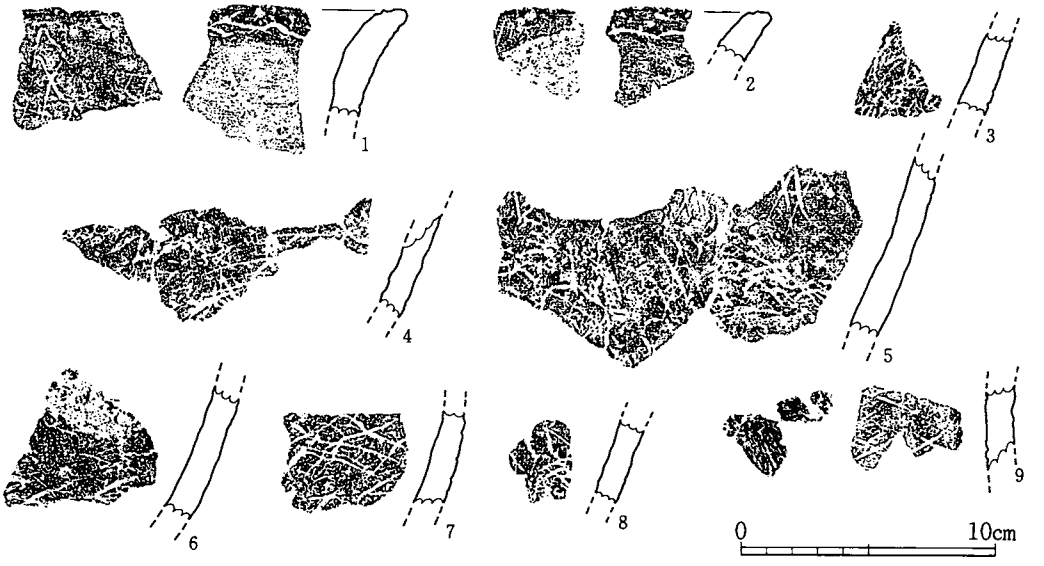
Ⅱ区
2
20.94
3
20.95
4
C
87.72
D
142.00m
87.73
E
87.74
0
20m

Ⅲ区
Ⅰ区
Ⅳ区
-20.98
7
-20
-20.96
5
-20.97
6
143.00m
144.00m
145.00m
F
87.75
G
87.76
H
87.77
I
87.78
J

8
9
10
11
-21.00
-21.01
-21.02
144.00m
145.00m
K
L
M
N
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83



第127図　Ⅴ層・Ⅵ層出土土器分布図



第128図　土器実測図

れる。9は内器面にも網目撚糸文が施されている。

胎土にも特徴があり、かなり大粒の白色粒が含まれ、他にも金雲母と褐色粒が認められる。焼成は良い。

Ⅰ区の中央西側傾斜地から北側平坦部にかけて、G－5グリッドを中心に出土しているが、同一個体としてはかなり広い範囲に分散している。

Ⅳ－1－a類（第129図～第131図）

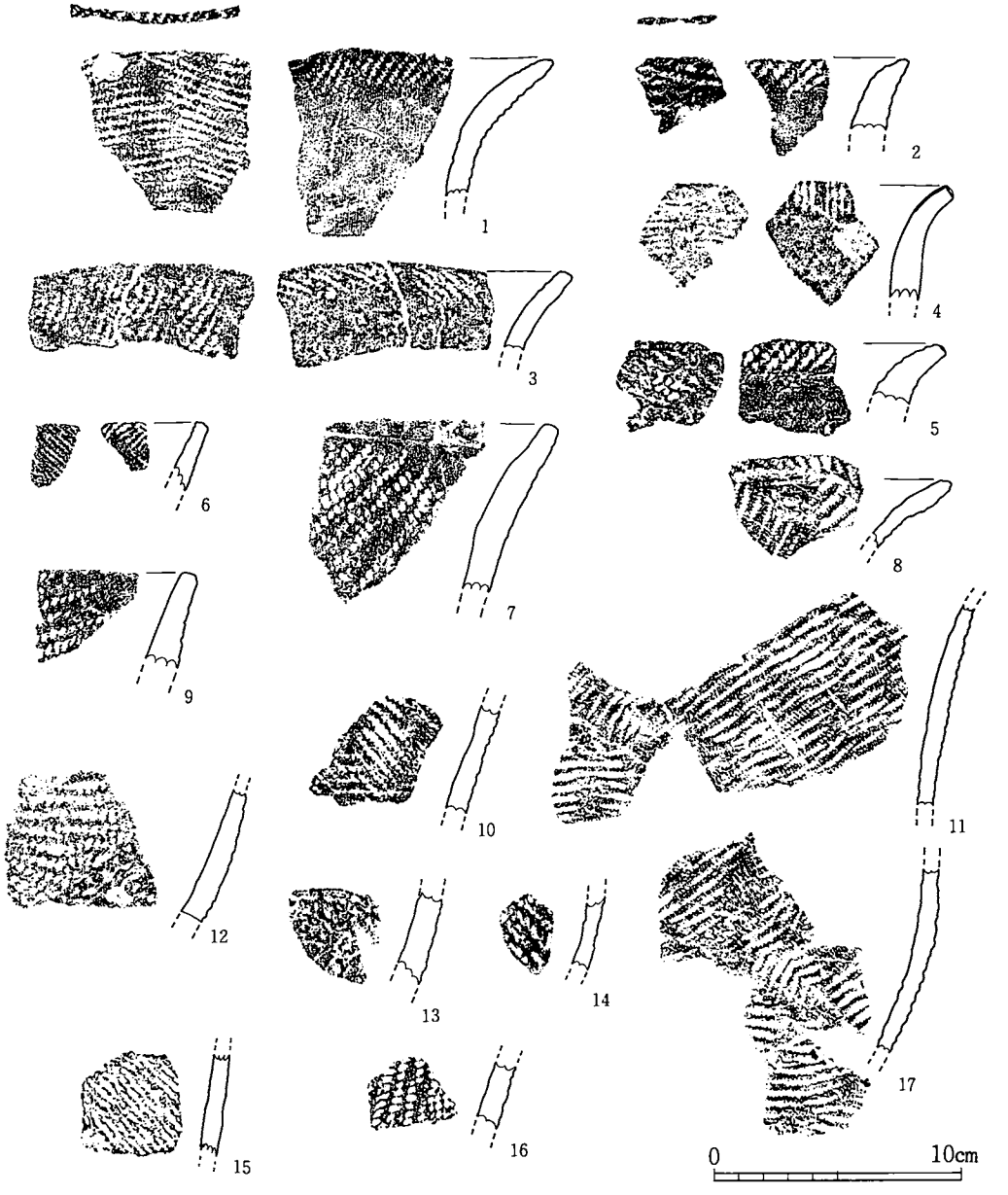
縄文施文のもので、全体で240点、うち遺構より16点出土している。胎土がやや砂質のもの（第130図2～6・13、第131図3・7）がある。

第129図1・2は同一個体であろう。復元口径は14cm。口縁部は外反し、やや丸みを持った胴部につながり、胴部は底部に近づくにつれて急に小さくなる。口縁端部はやや薄くなり、口唇部は平坦で無文である。外器面は全面に、内器面は口縁端部に縄文（RL）を施している。

第129図3の口縁部は器壁が薄く、外反しており、器壁が厚く直行する胴部に続いている。口唇部は平坦で、口唇部、内器面の口縁端部、外器面に粒の小さな縄文（LR）を施す。外器面側から二段に穿孔されているが、内器面まで貫通していない。

第130図1～9は外反する口縁部片である。器壁が薄手のもの（3・6・8）と厚手のもの（1・2・4・5・7・9）がある。8を除いて口縁は端部に近づくにつれて薄くなり、口唇部は狭く平坦である。1・2・5は口唇部、内器面口縁端部、外器面に縄文（LR）が施される。3・6は内器面の口縁端部と外器面に縄文（RL）を施している。4の内器面口縁端部には原体条痕が認められる。7・9は外器面のみの施文（LR）である。

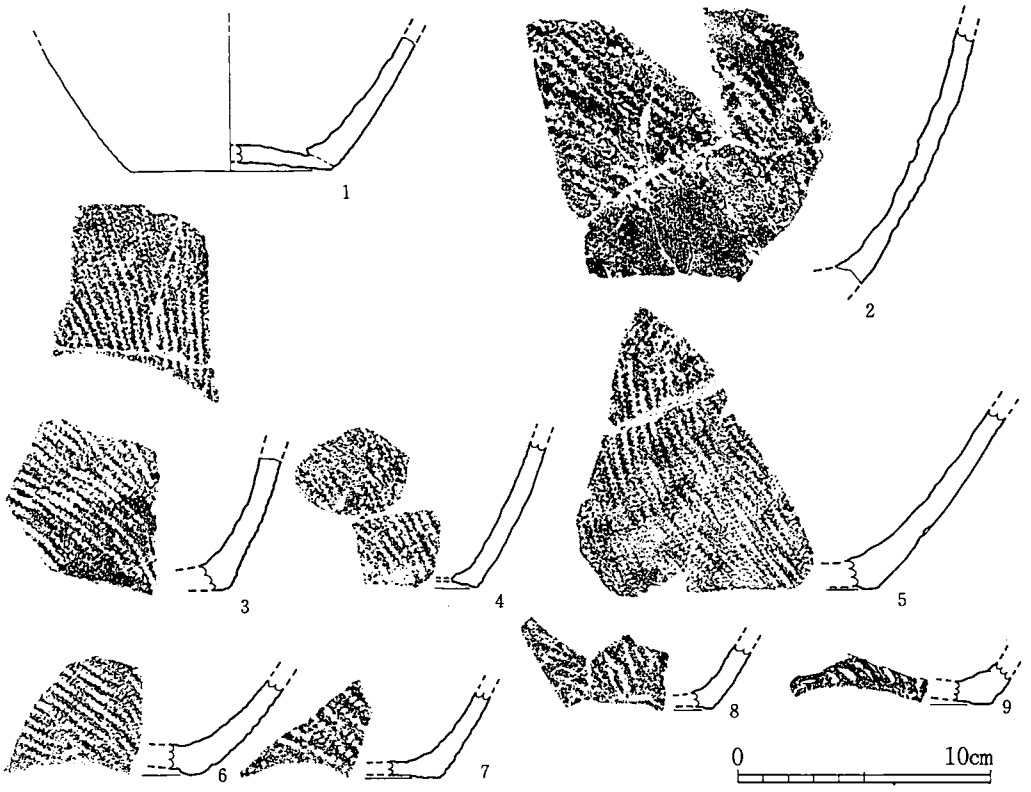
第129図　土器実測図



第130図　土器実測図

第130図10～17は直立気味の胴部である。外器面に縄文が施文され、原体にはＬＲもＲＬもある。

第130図８・11・17は同一個体で口縁部から底部までの器形がわかる。器壁は薄く、口縁部は端部が厚くなり、外反する。胴部は直立気味で、底部に近づくと急に丸く小さくなる。外器面には粒の小さなかたい縄文（ＲＬ）を施しており、胴部下方からは、施文の方向に規則性が乏しくなる。口唇部の幅は一定ではなく、ここにも同一の原体を用いた縄文が施されている。



第131図　土器実測図

第131図は底部近くの胴部片と底部片である。底径が復元できるものは１のみである。２～９も１と類似する器形を呈すると思われる。底部は上げ底で余り大きくなく、底部に続く胴部は大きく外へ開き、胴部はやや丸みを持つ。外器面に縄文（ＬＲ）を施文する。

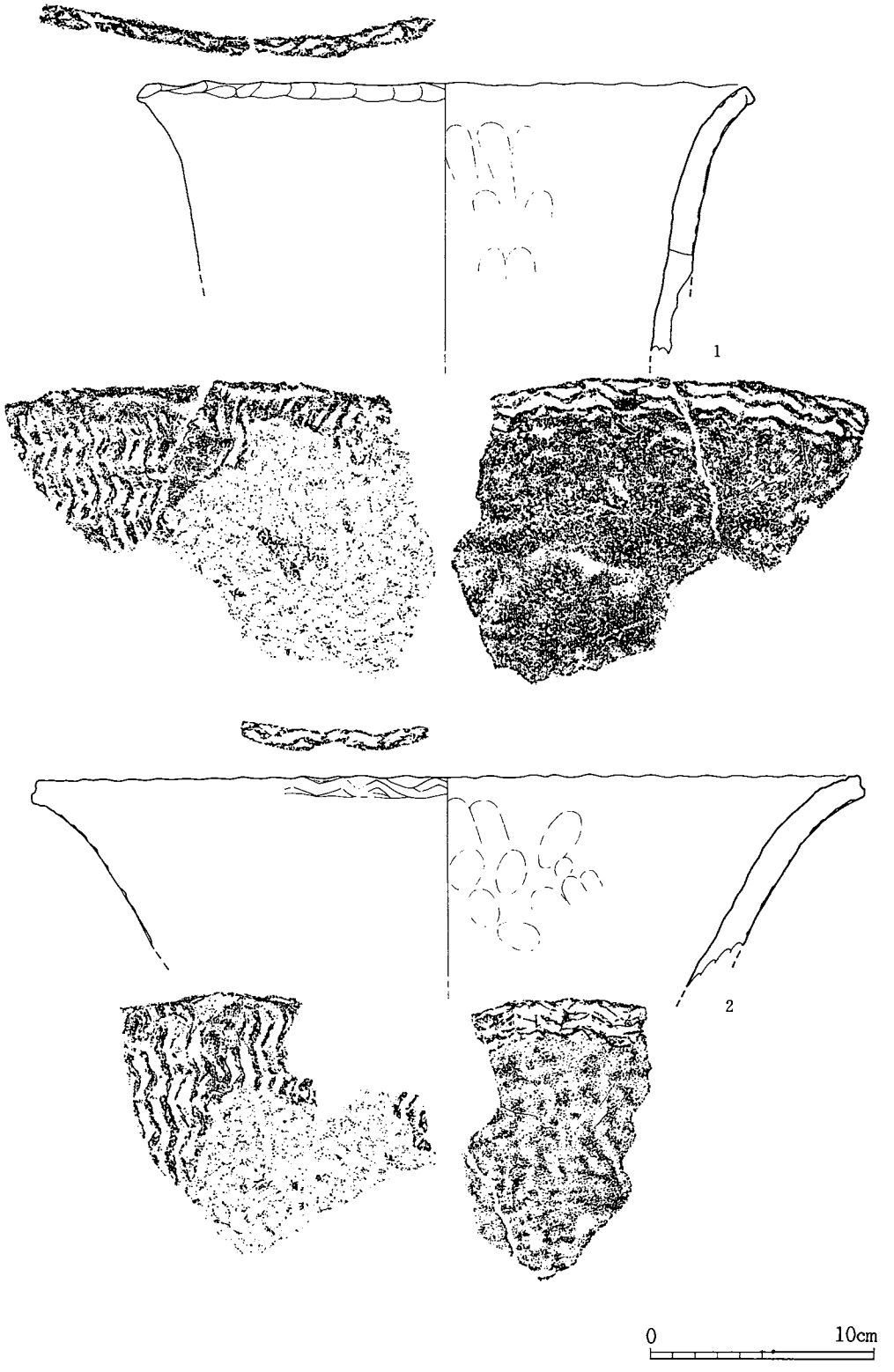
Ｉ区中央東側斜面からの出土が多く、Ｉ区北側斜面、III区北側斜面の傾斜の緩やかになる部分からも出土している。

IV－１－ｂ類（第132図～第136図）

山形押型文を主文としているものである。総数227点出土している。うち遺構からは47点の出土である。試みに器壁が厚く（１cm程度以上）、施文原体の幅が広く大きいもの（第132図～第135図）、と器壁が薄く（１cm未満）、施文原体の山形の幅が狭いもの（第136図）、に細分してみた。この類そのものが、Ｉ区の北半からは出土していない以外にそれほど分布に特徴がないが、細分したグループも出土状況には特に違いはみられない。

第132図・第133図・第134図１は口径が復元でき、口縁部から胴部までの器形が想定できるものである。

第132図１は復元口径27.8cm、直立気味の胴部から緩やかに外反する口縁部に続く。器壁は、口縁端部がやや薄手になる。口唇部は平坦である。外器面は縦位に、内器面は口縁端部にのみ



第132図　土器実測図

横位に、間延びした大型の山形文を施す。口唇部にも同一の施文原体の一部を用いて押型文が施文されている。

第132図２は復元口径37.5cm。胴部から口縁部にかけて大きく朝顔型に開いている。口唇部は平坦である。外器面は縦位に、内器面は口縁端部にのみ横位に、間延びした大型の山形文を施す。口唇部にも山形文を施文している。１・２共胎土はやや砂質である。

第133図１は復元口径32.3cm。口縁部は外反し、口縁端部は器壁がやや薄くなる。外器面は縦位に、内器面は口縁端部のみ横位に山形文を施す。平坦な口唇部にも山形の押型文を施している。

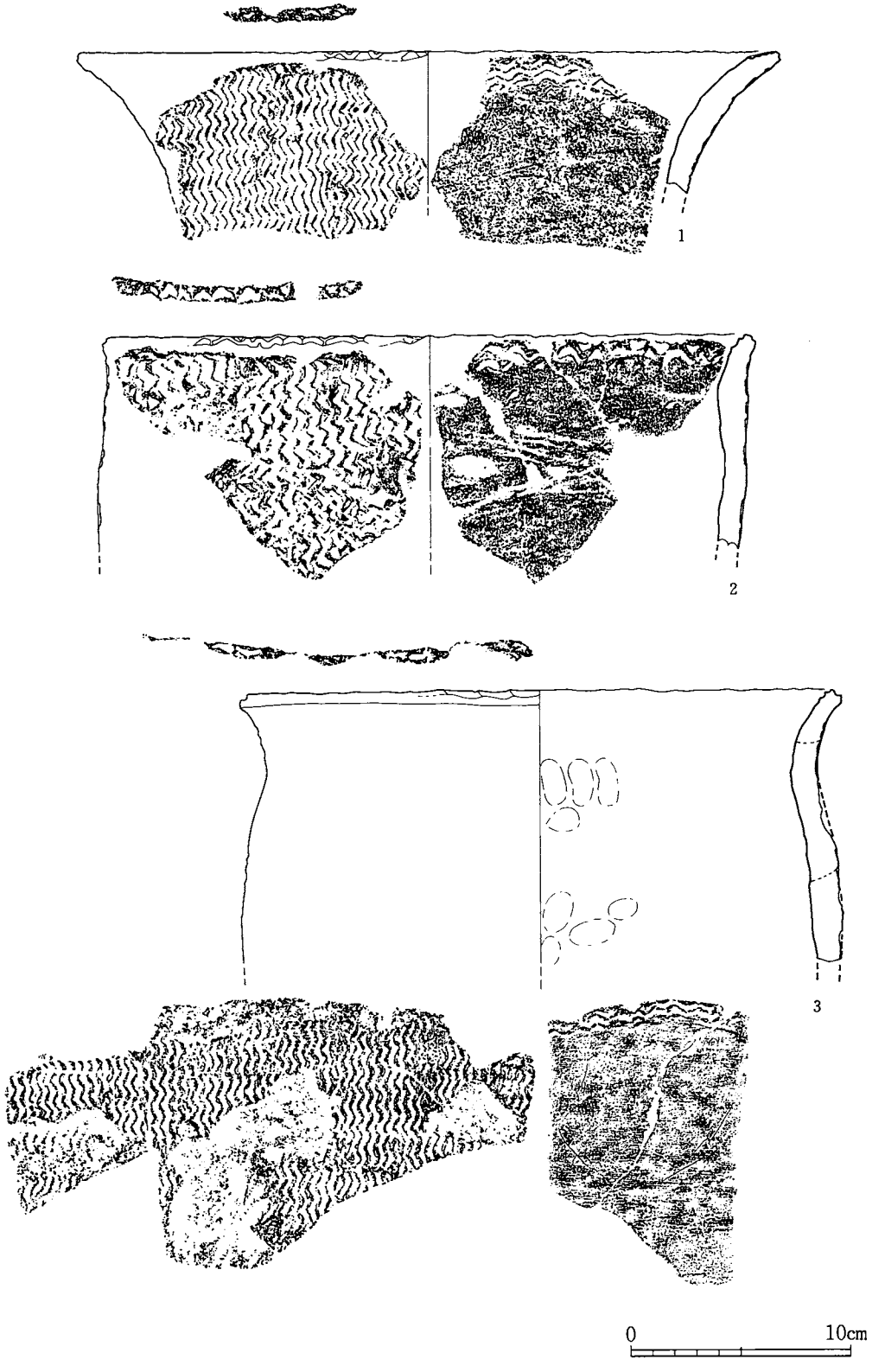
第133図２・３は、やや膨らむ胴部から口縁部にかけてわずかにくびれ、口縁端部は器壁が急に薄くなり外反する。復元口径は２は29.9cm、３は27.4cmである。２・３共に外器面は縦位に山形押型文を施す。２の山形は太く短く、３のものは細目である。内器面の口縁端部と平坦な口唇部にも、同一の施文原体を用いて押型文を施文している。１～３共胎土はやや砂質である。

第134図１は復元口径37.0cm、外へ開く口縁部である。口縁端部は急に薄くなり、口唇部は平坦である。外器面は横位に、内器面は口縁端部のみ縦位に、細くて間延びした山形文を施す。口唇部には、押型文の原体を利用したと思われる押捺文が見られる。

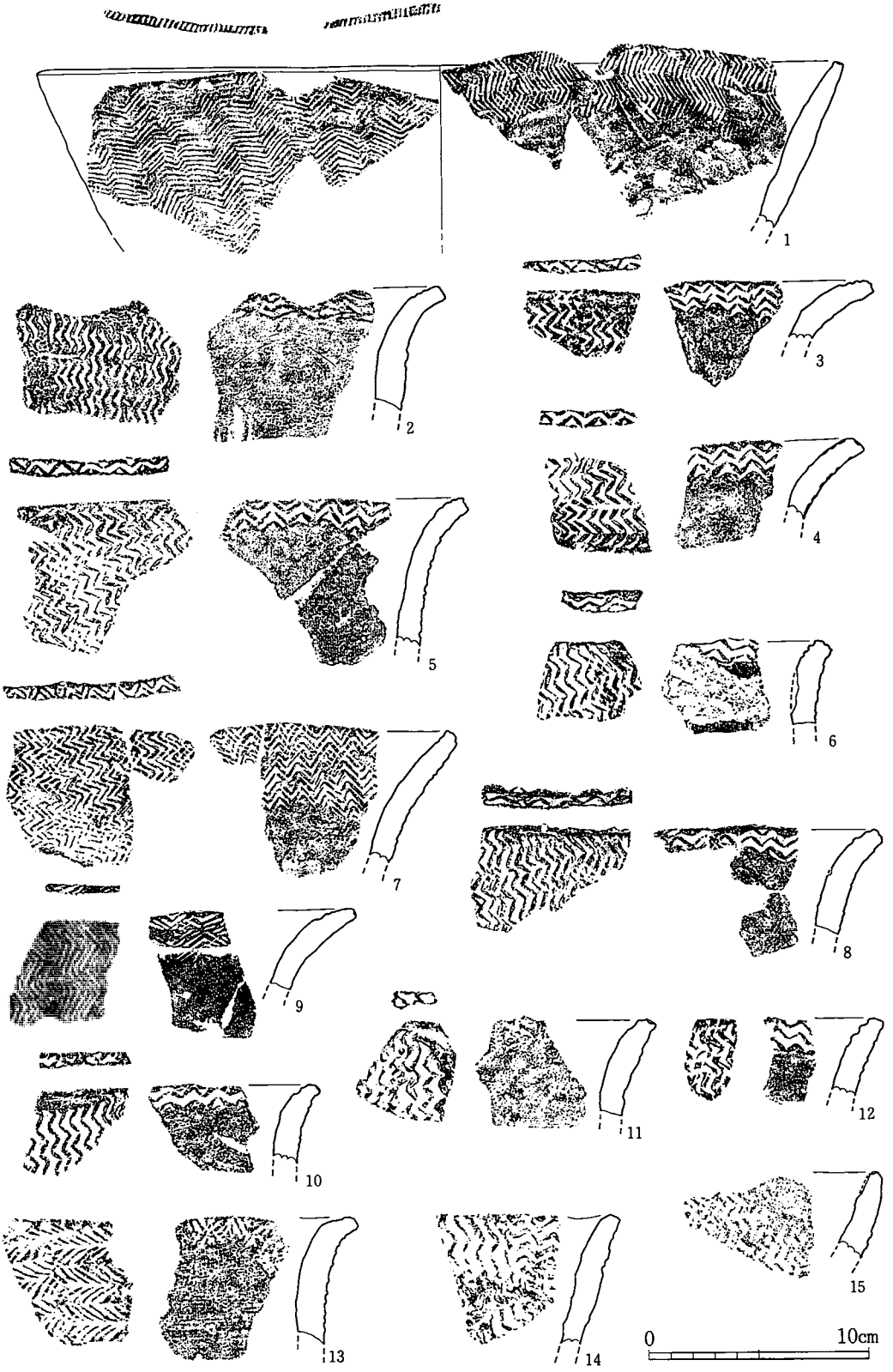
第134図２～15は口縁部片である。口縁部の形態は大きく外反するもの（３・４・９）、緩やかに外反するもの（２・５・７・８・12)、直行し端部のみ急に外反するもの（10・12・13）のほか、外傾するもの（14)、内湾するもの（15）もある。外器面、内器面の口縁端部、平坦な口唇部に山形押型文を施文するものが多く、２・12は平坦な口唇部を持つが施文がなく、14・15は外器面のみの施文である。山の形は９がやや細く間延びしており、11・14が大型で乱れている他は、整っており、施文の仕方も深い。２・13・15の胎土はやや砂質である。

第135図は胴部片と底部片である。外器面に縦方向に山形の押型文が見られる。17は最下部のみ横方向に施文している。８・12の山形は間延びして太く、うち12は第132図２とごく類似している。９は細くて大型の山形文を施文している。９～11は緩やかに「く」の字形に屈曲している胴部片であり、胴部で屈曲する器形がこのグループに存在することがわかる。10は屈曲部より下は文様をナデ消してある。14は器壁がやや薄く、内器面は削り調整されている。18は上げ底の底部である。２・３・13・16・18の胎土はやや砂質である。

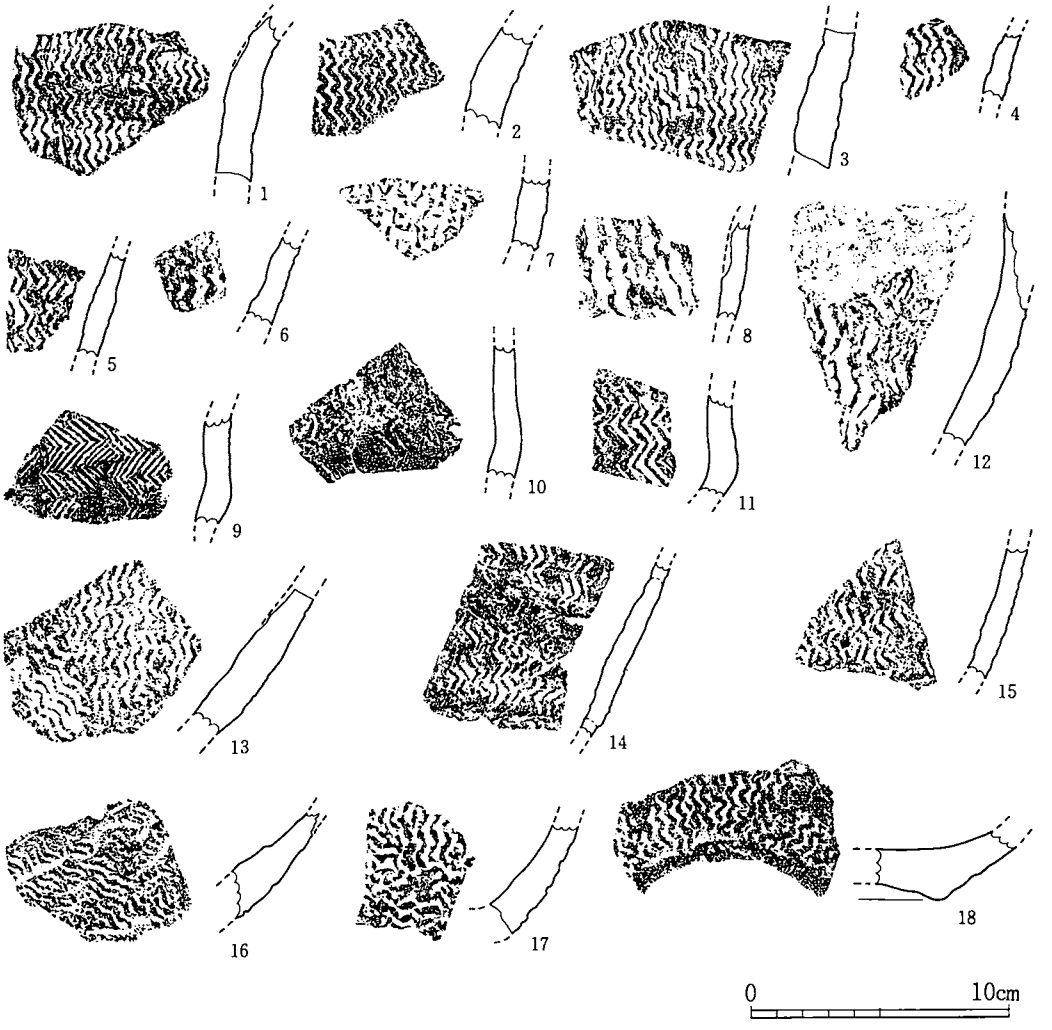
第136図１～12は口縁部片である。口縁は外反するものが多いが、８は外傾しており、11は弓なりに大きく反っている。１～７・９・10は口縁端部はやや薄くなり口唇部は平坦である。８の口唇部は平坦でやや厚く、11・12は口唇部は丸い。１～６は外器面、内器面、口唇部に文様がある。１・２・４・５は外器面は横位、内器面は縦位に、ごく細く間延びした山形押形文が施文され、口唇部は施文原体の一部を回転させずに押捺して、斜線の連続文様を描いている。６はこの四点と類似しているが、押形文の施文方向が、外器面が縦位、内器面が横位である。



第133図　土器実測図



第134図　土器実測図



第135図　土器実測図

3は山形は小さく、内器面は口縁端部のみ施文され、口唇部は施文原体を回転させている。7・11は内器面の口縁端部と外器面に施文がある。11の山形は大きく、7の山形は乱れている。8は外器面に大きくはっきりした山形文の一部が見られ、内器面は斜位にヘラ先による調整痕の様なものがある。9・10はごく類似しており、外器面には斜位に山形文を施し、口唇部にも施文がある。12は外器面の口縁部は縦、胴部は横と、施文の方向が異なっている。

第136図13～28は胴部片で、うち14～25・27は「く」の字形に屈曲している。24を除き屈曲は強く稜が認められる。外器面のみに施文され、施文方向には横位（20～24）も縦位（14～19・27）もある。山の形は細く間延びしたものが多い。17～19・21・22・25は胴部屈曲部より下は施文されず、15・16・20も屈曲部よりやや下は文様をナデ消そうとした様子が観察される。27は屈曲部の上と下では施文原体が異なっている。

第136図29は底部と底部近くの胴部片で、胴部最下部は文様を横ナデして消している。底部の形態はよくわからない。

IV－1－c類（第137図～第139図）

出土した個体数は234点、うち遺構よりのもの21点である。

破片より推定すると、口縁部は外反し、胴部は「く」の字形に屈曲し、張りのない胴部に続くようである。器壁の厚さは0.6cm～1.0cm程度、口縁端部はやや薄くなり、口唇部は平坦である。

主文は菱形押型文である。断定はできないが施文原体は十種類を越える。外器面には菱形押型文を縦位に施文している。文様は胴部屈曲部を経て底部近くまで続くもの（第137図11）もあるが、ほとんどは屈曲部上部までで終わっている。内器面は外器面と同じ原体を用いて、口縁部のみ一条あるいは二条程度横位に施文しているものが多い。第137図19は内器面には施文がない。口唇部は第138図1～5は無文であるが、多くは押型文がみられる。おそらく主文と同一原体の一部を用いて施文されたものであろう。

出土状況には特別の傾向はみられない。

IV－1－d類（第140図）

同心円押型文が施文されているものである。総数53点、第140図以外に遺構より5点出土している。

第140図3～8は同一個体と思われる。破片から推定すると、口縁部は緩やかに外反し、胴部は「く」の字形に屈曲している。胴部の屈曲部は稜が認められるが、屈曲の度合は強くない。外器面は口縁部から屈曲部まで、縦方向に同心円の押型文を施している。屈曲部より下は破片がなく器形はよくわからないが、横ナデされており、文様はない。内器面は、口縁端部に1条、原体の同じ同心円文を巡らしている。口唇部は平坦で、文様はない。

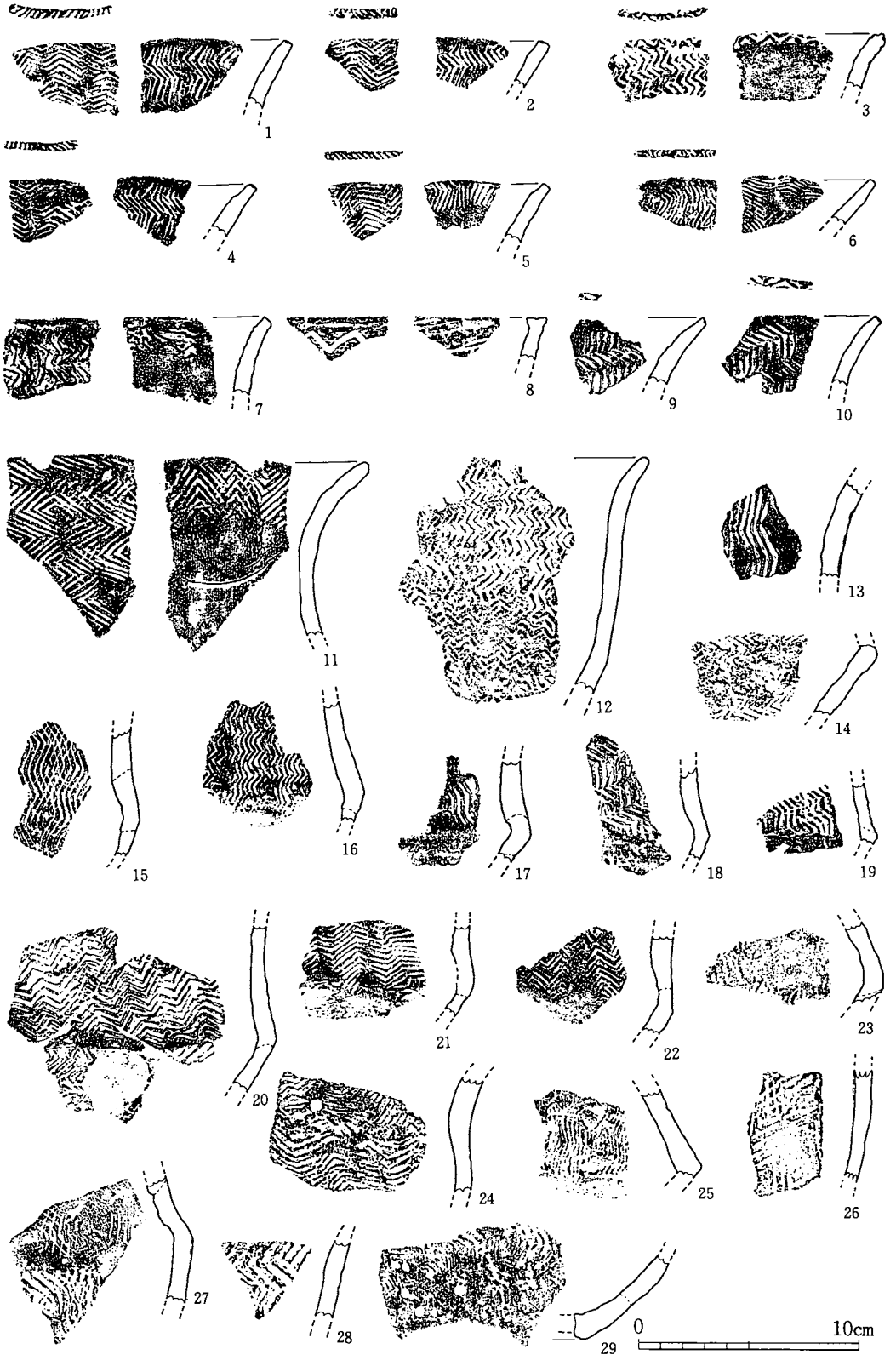
他の破片の文様も含め、全部で7種類の施文原体が考えられる。これが直接土器の個体数と対応するかどうかはわからない。

1・2は口縁部片である。共に、内器面の口縁端部と外器面に押型文が施文されるほか、平坦な口唇部にも押型文がある。口唇部の押型文の原体はよくわからないが、外・内器面のものと同一のものの一部であろう。

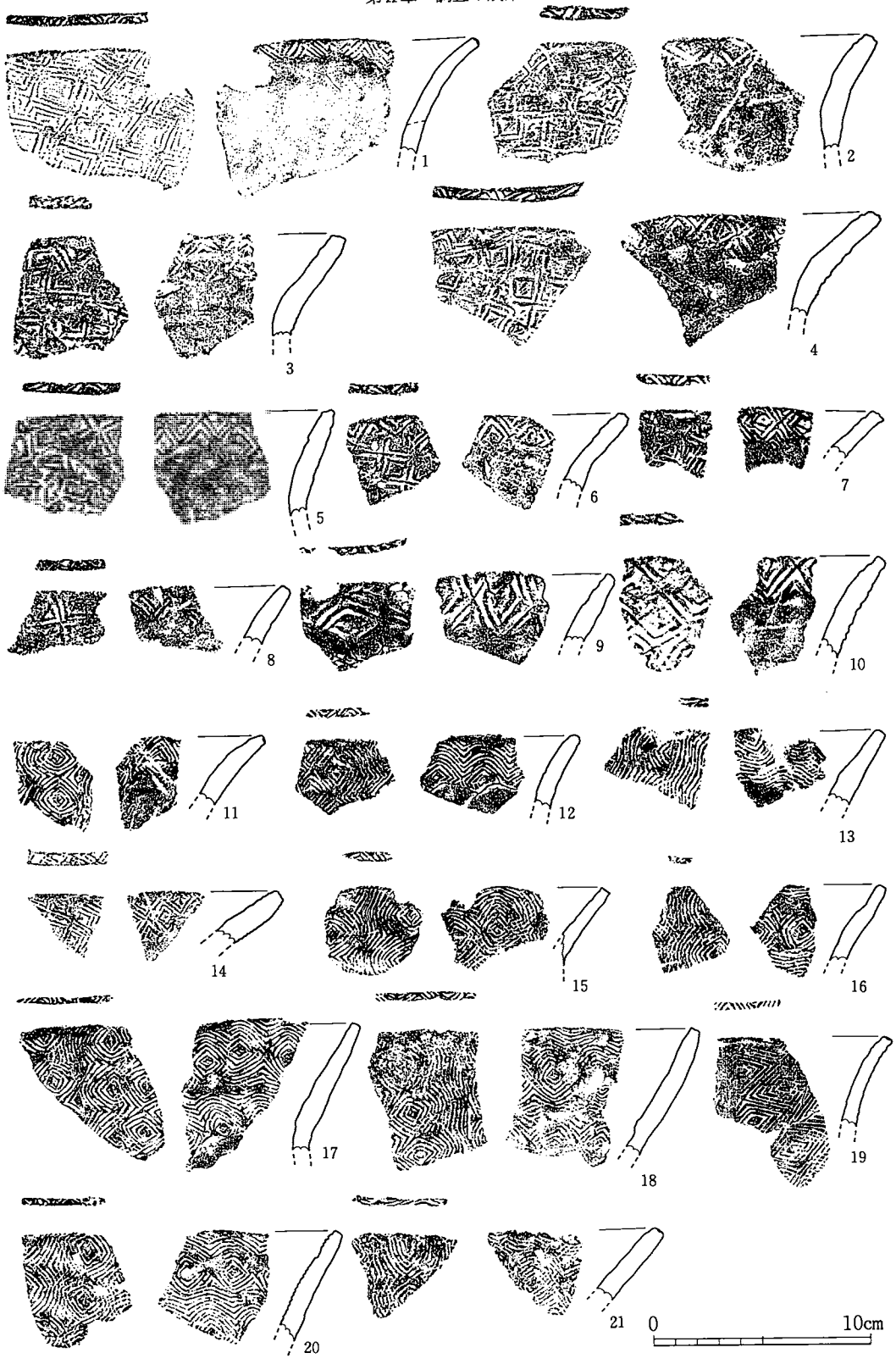
9～17は胴部片で、うち9～12は屈曲部であるが、屈曲は弱い。9・10・12は屈曲部より下は施文されていないようである。11は屈曲部より上部しか残っておらず、下方は不明である。

出土状況は、I区の北半、III区・IV区の南半では出土せず、III区・IV区の北半傾斜部とI区東端中央部で出土している。

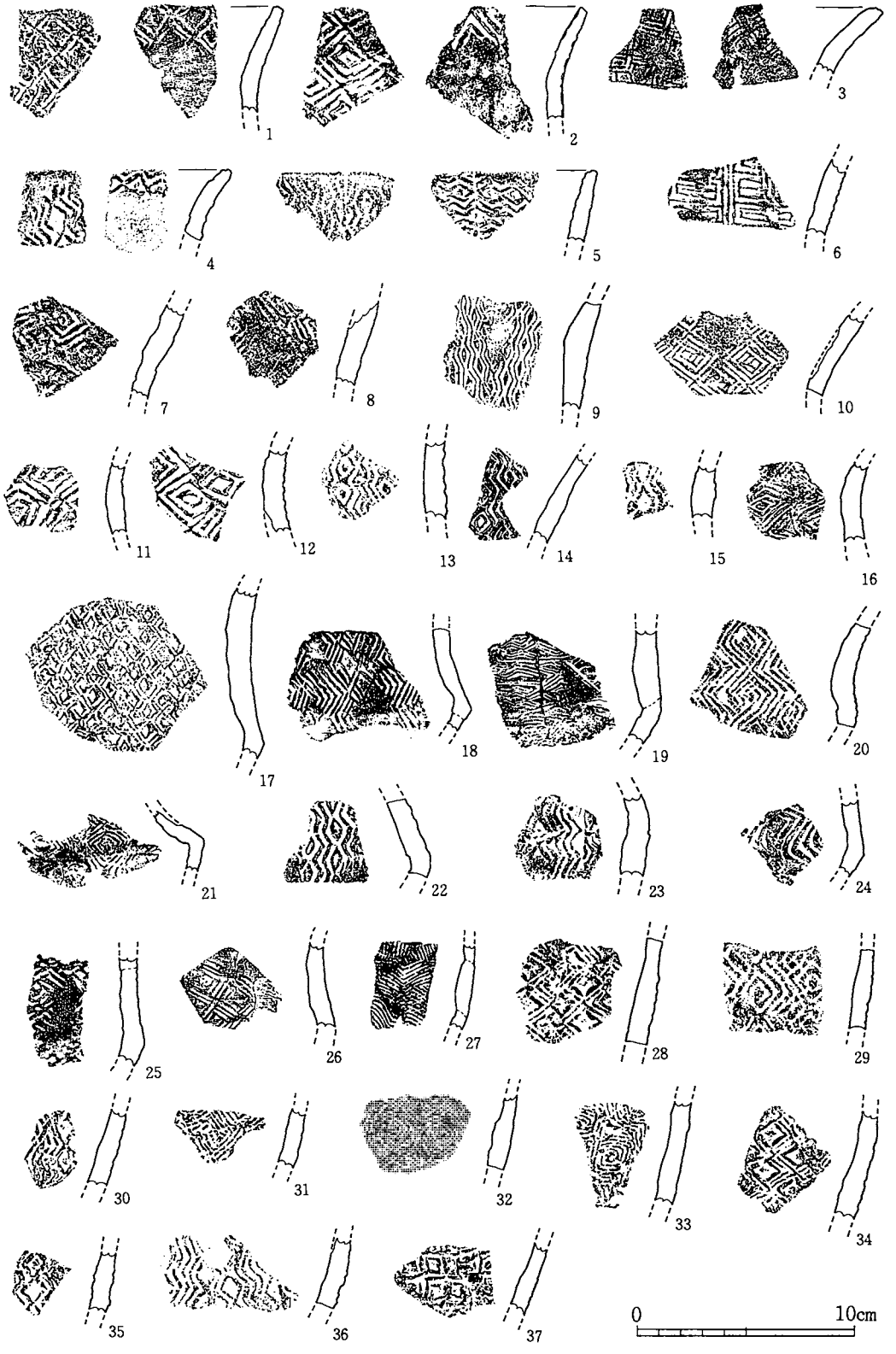
IV－1－e類（第141図・第142図）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

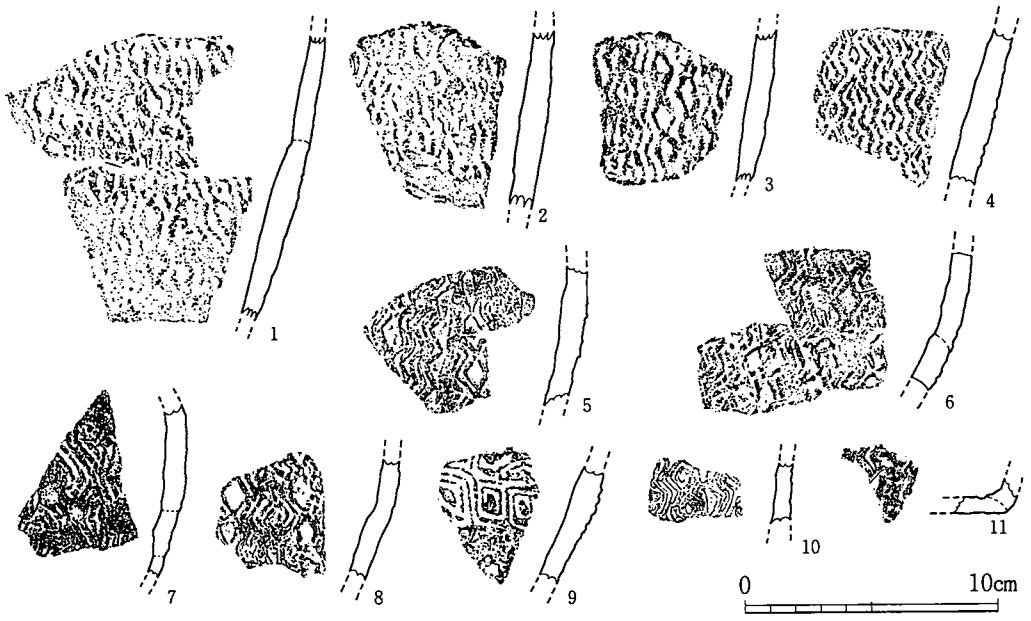
第136図　土器実測図



第137図　土器実測図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
10cm

第138図　土器実測図



第139図　土器実測図

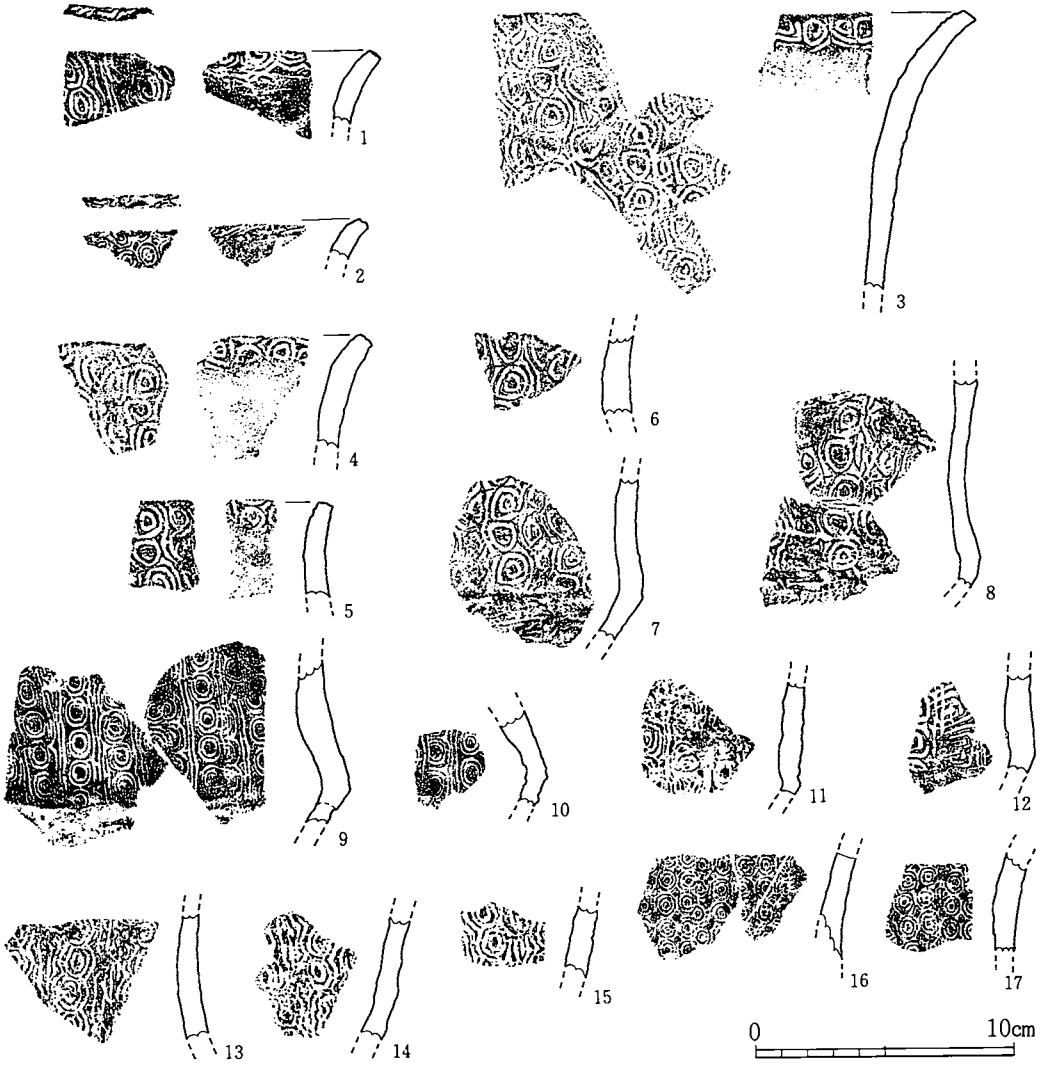
数本の撚糸を組み合わせた原体を用い、半円弧状の連続文様（撚糸ｃ）を描いている土器の一群である。原体により撚糸の太さや組み合わせ方は若干異なり、描かれた文様も異なっている。原体は５～６種類程度ある。出土した総個体数は59点、うち遺構より10点出土している。

第141図１～12は口縁部片である。口縁部は緩やかに外反し、２・３は波状口縁になる可能性もある。口唇部は明確な平坦部を持つもの（１～４・６・９・12）と、丸みを持つもの（５・７・８・10・11）がある。１・４は口唇部に文様がある。４は口唇部がごく一部しか残っていないので不明瞭であるが、１は主文と同一の原体による施文であろう。

１～５は外器面・内器面に文様がある。１～４は外器面は全面縦方向に、内器面は口縁端部のみ横方向に一条、原体を転がしている。５の内器面は口縁端部は平行な撚糸文、その下に連続半円弧状の撚糸文という、二段の文様構成となっている。

８～12は外器面のみ縦方向に施文されているが、ほぼ全面に及ぶものの他、11のように帯状に原体を転がし、帯状に無文部を残すものもある。

第141図13～29、第142図１～13は胴部片である。外器面には半円弧状の文様がある。第142図３・５～７・９・11は胴部が「く」の字形に緩やかに屈曲している。９は14号集石出土のもの（第102図14）と類似しており、胴部屈曲部より下は撚糸による施文が認められるが、半円弧状の文様ではない。11は胴部屈曲部より下には平行な撚糸文を施し、５～７は屈曲部上部からの文様がそのまま連続している。12号集石出土のもの（第102図10）には、撚糸ｃと縄文（ＬＲ）の組み合わせも見られる。７は撚糸文の上に一部ヘラによる沈線様のものが見られるが、文様であるか調整痕であるかは、この破片だけでは判断できない。



第140図　土器実測図

底部、あるいは底部近くの胴部については不明である。

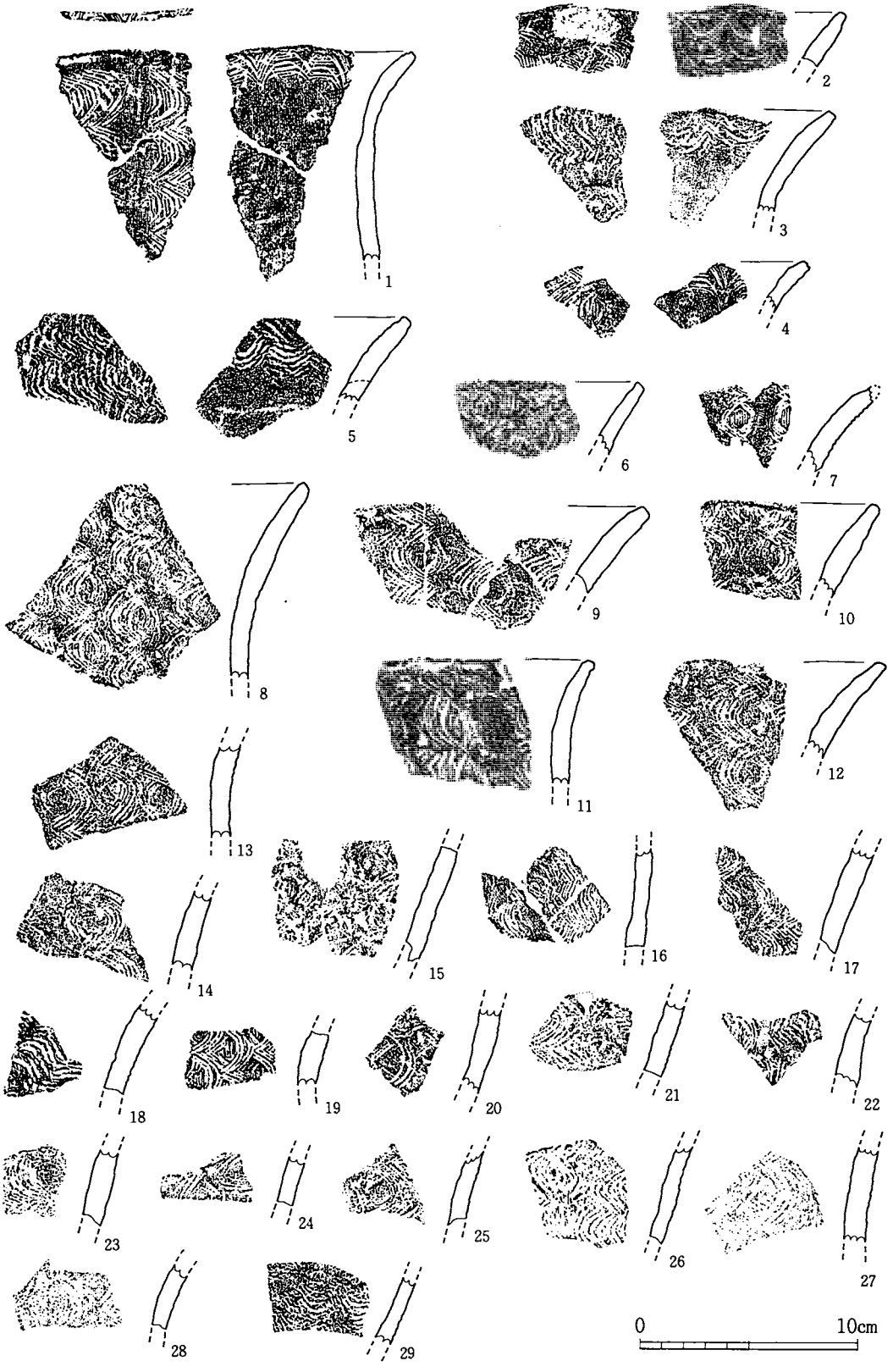
Ⅰ区の北東部で大半が出土している。

Ⅳ－1－f類（第143図）

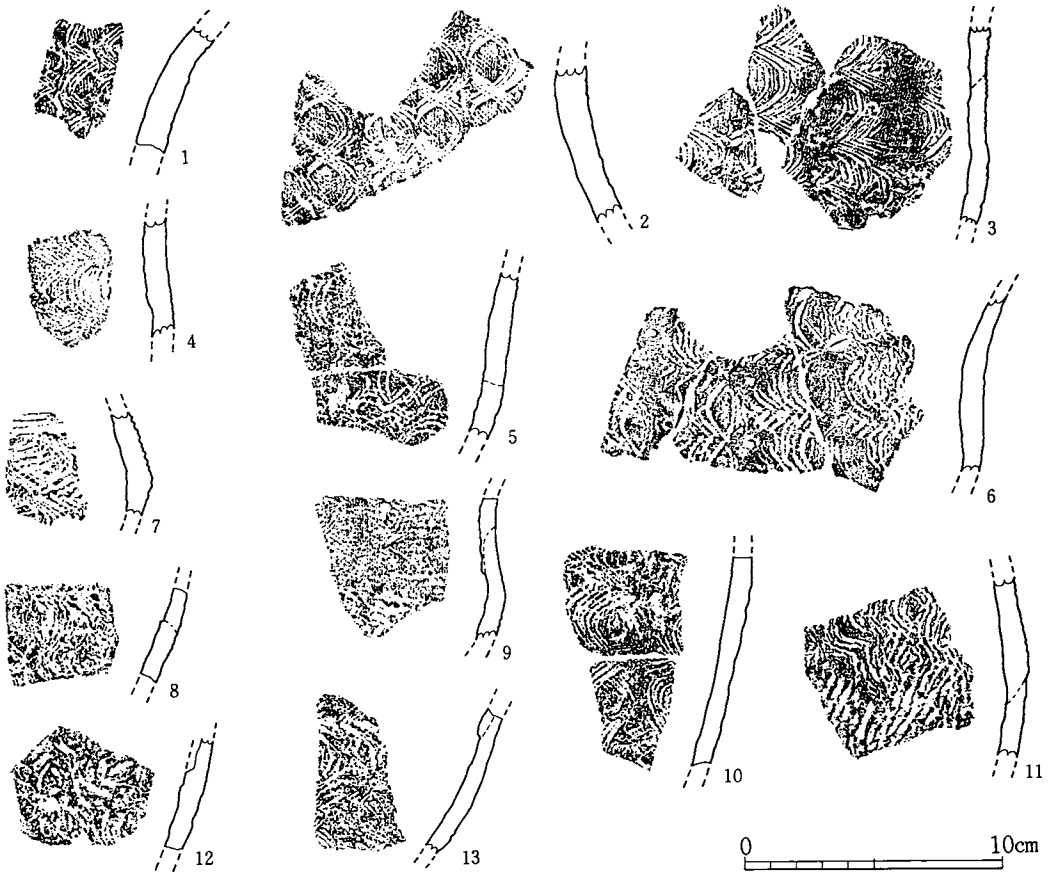
撚糸による網目の文様をもつグループであり、Ⅲ－1類の網目文と比較すれば、網の目はやや つまり、形は整っている。出土した個体は総数24点、遺構からは5点である。

3・5・8は同一個体であると思われる。器形は口縁部が緩やかに外反し、胴部へ続いている。胴部下半は不明である。口唇部はほぼ平坦であり、残存部がわずかであるため施文の有無は不明である。外器面にはやや乱れた網目撚糸文を施している。

1・2・4・6は口縁部片である。外器面には網目の撚糸文を施している。4は口縁部は直行気味で端部がわずかに外反し、口唇部は平坦である。1・2・6は口縁部は緩やかに外反し、


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

第141図　土器実測図



第142図　土器実測図

口唇部には丸みがある。内器面にもすべて網目撚糸文が見られ、2・6は外器面と同一原体を口縁端部に一条巡らせている。1は破片の内器面全体に網目撚糸文を施してあり、その後指で部分的に押さえてあるため文様が一部消えており、外器面の施文原体との比較ができない。1・4は口唇部に撚糸文が認められる。施文原体はよくわからない。

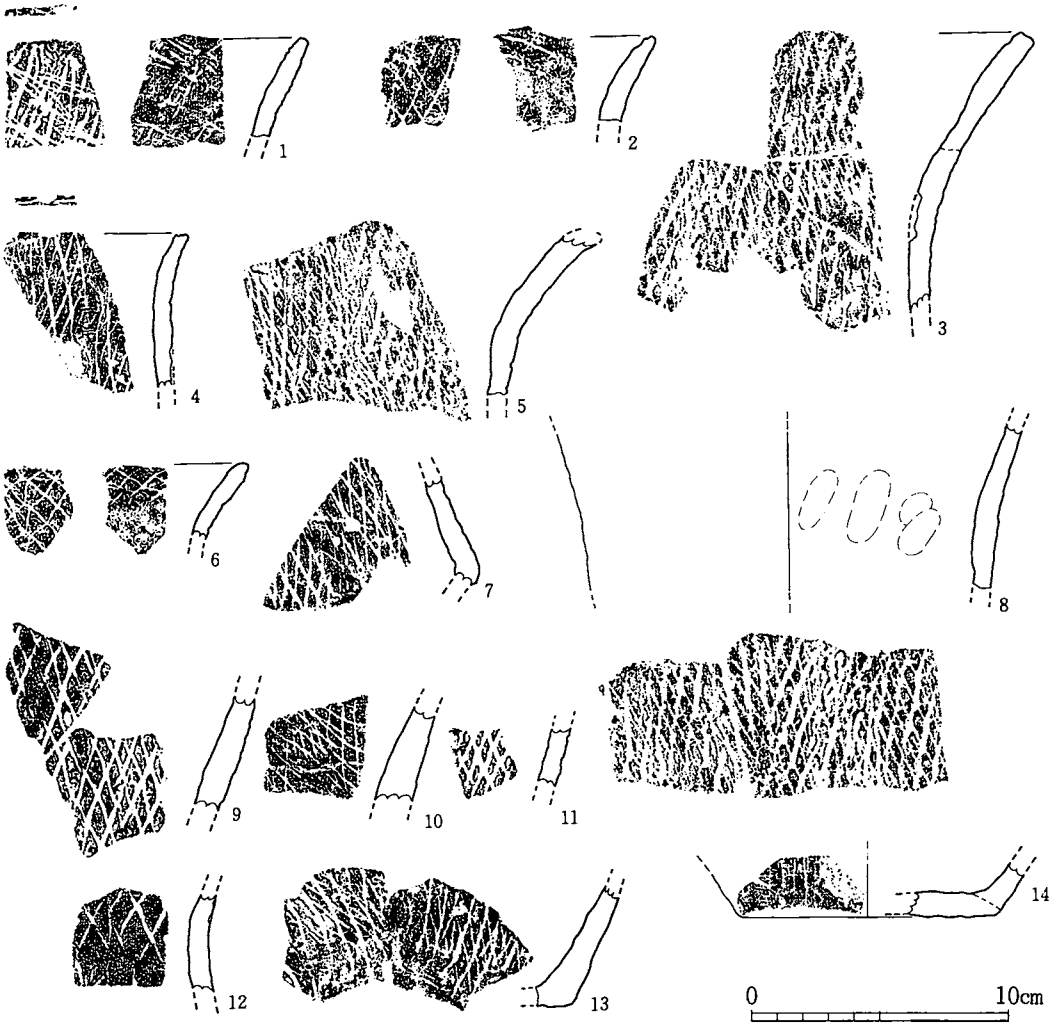
7～12は胴部片である。7は「く」の字形に屈曲する部分であり、8～12は部位はわからない。12は網目が他のものよりやや粗い。

14・15は底部であり、若干上げ底を呈すようである。外器面は底部まで全面施文されている。

Ⅰ区北東部からの出土が多い。

Ⅳ－1－g類（第144図）

4～5本の串のようなものを櫛状に束ねたような施文具を用い、条痕文を施してあるものがこのグループである。条痕一本毎の断面はV字形に近く、幅は一定していない。弾力のある施文具を何度も器面から離しながら、軽くリズミカルに施文した様子が伺える。出土した総個体数は21点、うち遺構からのものが4点ある。

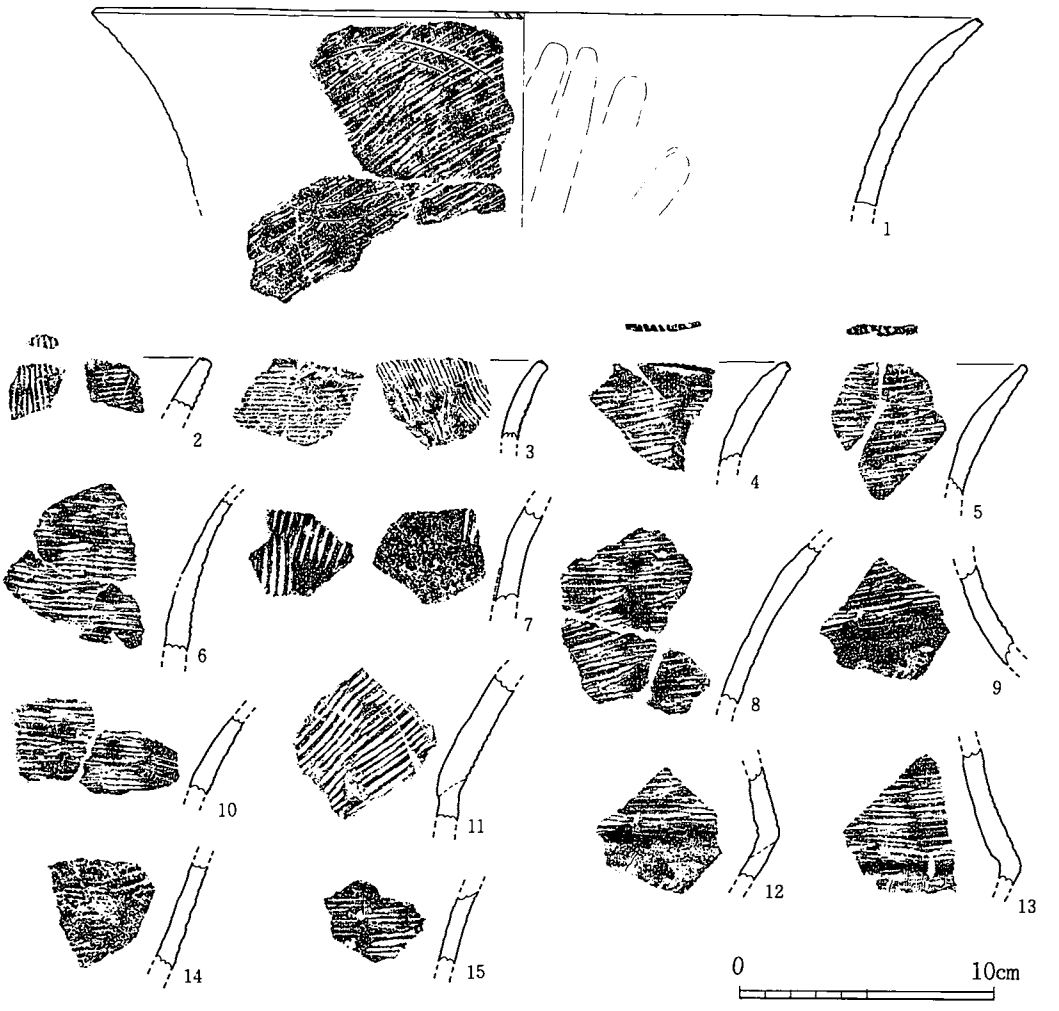


第143図　土器実測図

1・4・8・9・12は同一個体であろう。口縁部は外反し、口縁端部は薄く、口唇部は平坦である。外器面は横と斜め方向に単位条痕文を施し、口唇部には串を横にして押し付けたような細かい押捺文を施している。胴部は「く」の字形に屈曲し、屈曲部より下には施文は見られない。

2・3・5は口縁部片で、6は口縁部近くの破片である。口縁部は外反し、口唇部は平坦で押捺文が施されている。外器面は2は縦に、他は横かわずかに斜め方向に条痕文が施されている。2・3は内器面にも同様の文様が見られ、施文方向は2は横、3は斜めである。

7～15は胴部片である。外器面は横位または斜位に施文されている。13は「く」の字形に強く屈曲しており、胴部屈曲部より下は無文である。7は内器面にも若干文様があり、条痕の断面形はコの字形に近い。このグループのバリエーションの範囲内であるのかどうか、はっきり



第144図　土器実測図

しない。

底部の形態については不明である。

III区北東部、斜面から平坦面に移る部分から、かなりまとまって出土している。

IV－1－h類（第145図）

地文として山形押型文を施文し、その後凸帯を貼付ける土器のグループである。文様構成等はバラエティーがあり、総数は14点の出土である。遺構より2点出土している。全体の器形を推定できる資料はない。

1・2はやや外傾する口縁部片である。地文を施した後、口縁端部よりやや下から貼付凸帯を何本か巡らせている。凸帯には刺突が施される。1は平坦な口縁部にも施文があるように見えるが、詳しくはわからない。2の口縁端部は尖っている。

3・4は胴部片であり、同一個体である可能性が高い。やや間延びした山形押型文を施文した後、横位に短沈線を施した凸帯を貼付けている。

6・7は間延びした押型文を施文し、凸帯を貼付けている。凸帯は先端が二又か、二本の棒を束にした施文具で刺突されている。刺突の方向は6は斜め上から、7は横からと異なっているが、同一個体かもしれない。

8は地文が消えかかっており、刺突のある瘤状突起が貼付けられている。部位はわからない。

9は器面が荒れている。部分的に押型文が認められ、その上に沈線が強く引かれている。欠損しているが、凸帯が貼付けられていた痕跡がある。凸帯の形状等はわからない。

10～12は同一個体である。胴部片のみであり、全体の器形は不明である。細くて整った山形押型文を施し、その上に断面が三角形の凸帯を貼付けている。凸帯は二本程度が単位となっているようで、破片の部分により、斜走しているものも縦走しているものもある。第2凹部より出土している1点（第111図13）も同一個体である可能性がある。

点々と出土しており、あまり出土状況に特色はない。

Ⅳ－1－i類（第146図1～4）

格子押型文を施すものである。出土した個体数は13点、うち遺構からのもの8点である。遺構では特に第2凹部から多く出土する。

1はやや外反する口縁部片である。口唇部は平坦で、格子押型文が施文されている。内器面の口縁端部に一条と外器面にも格子押形文が施される。2～4は胴部片で、3は「く」の字形に屈曲している。屈曲部は文様が浅くつぶれかかっており、屈曲部の上下共に文様がみられる。

第2凹部と、Ⅰ区南東の鞍部から傾斜部にかけて、点々と出土している。

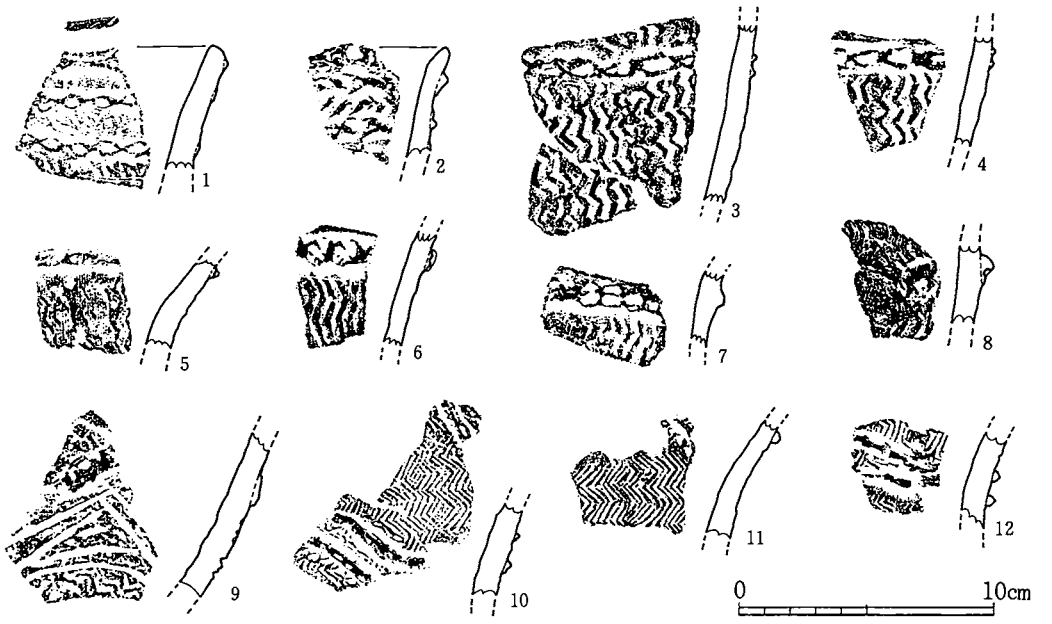
Ⅳ－1－j類（第146図5～14）

平行撚糸文を施すグループである。Ⅱ－1類の撚糸文と比べれば原体の撚糸は細く、また浅く施文されている。撚糸をそのまま原体として用いているもの（5～8・11・13）と、撚糸を他に巻き付け押型文のように施文しているもの（9・10・12・14）に分けられる。総個体数は34点、うち遺構出土のもの10点である。

5・7は口縁部、6は口縁部近くの破片である。口縁部の形態は、5・6は外反し、7は直行気味で端部がわずかに外反している。5は口唇部は部分的に平坦であるが、6・7はわからない。3点とも外器面に縦位に帯状に撚糸文を施文し、帯状に無文部が残る。5・6は内器面にも口縁端部におそらく一条、撚糸文が施文される。

8～13は胴部片である。10は押捺文を施す凸帯状のものを持つと思われる。11は幅広の無文の粘土帯が横方向に貼付けられているが、粘土の接合部である可能性もある。12は「く」の字形に強く屈曲している。

底部片はない。



第145図　土器実測図

特に集中して出土している様子はない。

Ⅳ－1－k類（第146図15・16）

全体で2個体しか出土していない。2点は同一個体ではないが、出土地点はかなり近い。

15は外反する口縁部片である。口唇部は平坦で、口唇直下に断面三角形の貼付凸帯が一条巡る。口唇部と外器面の凸帯下に、串状の施文具を用いた連点が施文されている。外器面の連点は左斜め上方から刺突され、雨垂れ状の形をし、四段にやや乱れて並んでいる。

16は胴部片であろう。連点は横二列に整然と並んでおり、15に比すと連点の間隔は短い。形状は三日月形で、15とは施文具が異なっているようである。

Ⅳ－1－l類（第146図17～19）

みみずばれ状の微隆起凸帯文を持つグループである。全体で5点、うち遺構から2点出土している。出土地点は近い。

17は外反する口縁部である。口唇部は平坦であり、残存する外器面全体と内器面口縁端部に斜位に微隆起凸帯が走っている。18・19は胴部片である。19は「く」の字形に屈曲しており、屈曲部より上に微隆起凸帯が斜位に数本見られる。17・18に比べると、凸帯は低く間隔は広い。

Ⅳ－1－m類（第146図20～22）

外器面に貼付けた粘土紐により大きな菱形の文様を描くものである。ここに図化したもの3点の他、第3凹部で出土した1点（第114図18）も同一個体で、すべて同一個体の破片であると思われる。

口縁部の形態は第114図18により緩やかに外反することがわかる。第146図20～22は胴部片であり、21は「く」の字形の胴部の屈曲部である。屈曲部より上は菱形に細目の粘土紐を貼付け、屈曲部より下は菱形か山形の押型文を施文している。器形、胴部屈曲部で文様帯が変わり、副文として押型文を施文する手法等、Ⅳ類のグループとして考えて良いと思われる。

Ⅳ－１－ｎ類（第146図23）

棒状施文具の先端で連点文が描かれている。

口縁部の破片１点しか出土していない。口縁部は外反し、外器面に二列に先端の丸い施文具で刺突した径５㎜程度の円文を並べている。口唇部にも施文がみられるが、施文具や施文方法はよくわからない。

Ⅳ－１－ｏ類（第146図24）

わずかに外反する口縁部の破片であり、他に類例はない。外器面は数本のヘラを単位として、波状文を描いている。内器面は横位に撚糸文が施される。口唇部は平坦で、口唇部にも撚糸文が施されている。

Ⅳ－１－ｐ類（第147図１～９）

個体数が少ないため、沈線文を持つ土器群として１グループに分類したが、施文方法、施文具、文様形態等により更に細分可能である。総数15点、うち遺構より４点出土している。

１は外傾する口縁部片である。波状を呈す可能性も考えられる。内器面、外器面共に、ヘラ先で縦方向に直線を描く。沈線の間隔やヘラ幅は一定でない。他に類例はない。

２は大きく外反する口縁部片である。器壁は薄く、口唇部は平坦である。外器面は斜方向に七本程を単位とする沈線が施される。内器面は、先端が不揃いの櫛状施文具で、下弦の半弧を描いている。櫛の歯は六本程度である。類似のものが１点出土している。

３は胴部片であり、ヘラによる沈線がかなり密に施される。小片のため詳細は不明である。

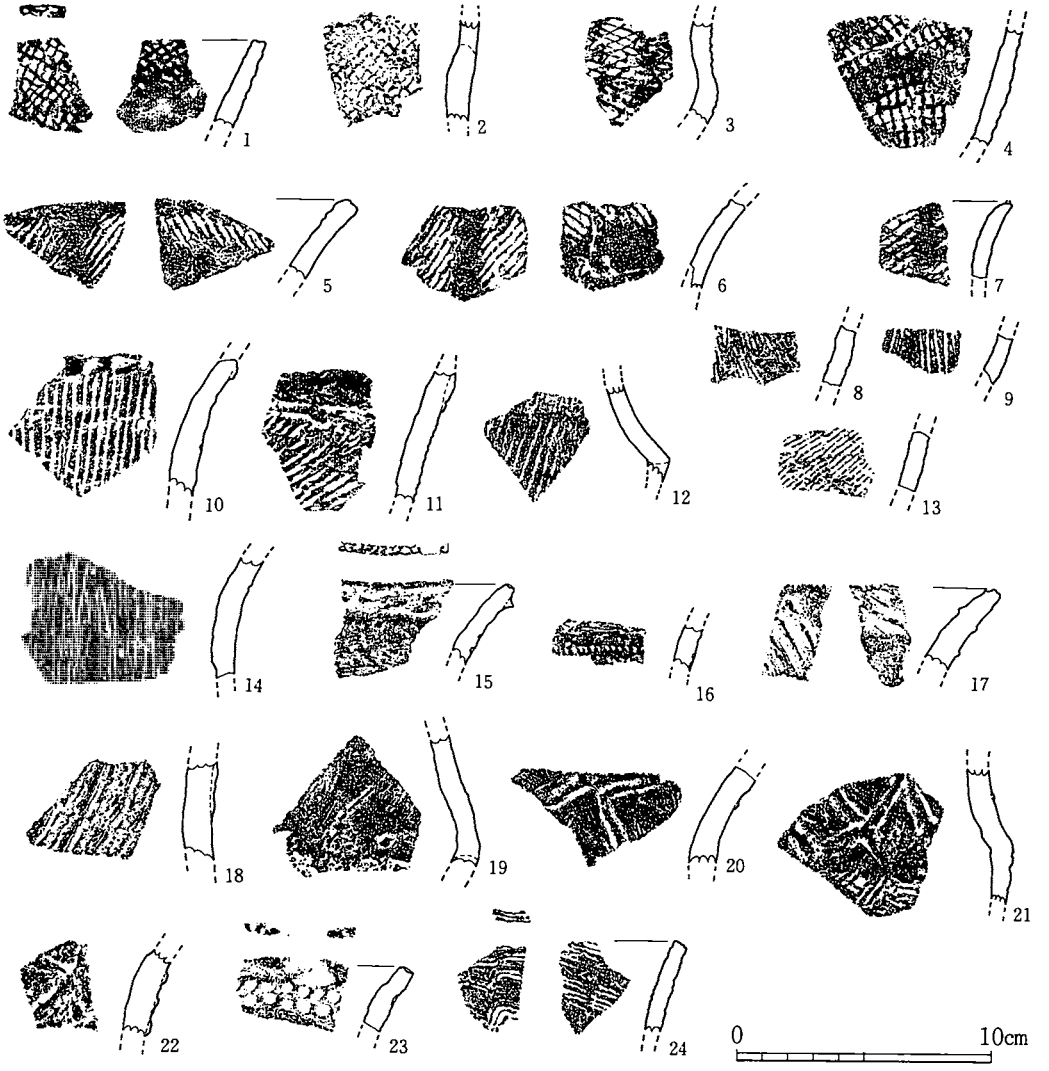
４は胴部片である。ヘラによる荒くて力強い沈線が縦方向に施される。

５は器壁がごく薄い。弓なりに反っている部分である。外器面に２本単位のごく細い沈線文を間隔をとりながら斜位に施文している。

６・７・８は「く」の字形に強く屈曲する胴部片である。６は屈曲部より上に横位に波状に曲線を描いている。屈曲部は直線によって上下に分けられている。屈曲部より下はヘラ削りされている。同一個体が他に１点ある。７は屈曲部を境に上部と下部の施文法が異なる。上部は歯が１４本の櫛状施文具によりやや斜位の直線と上弦の半弧を施文している。下部は横位の山形押型文である。８は数本単位の櫛状施文具を用い、屈曲部により上は間隔をあけて、屈曲部より下は連続して、縦位の沈線を引いている。

９は底部近くと思われ、粗い沈線が数本横位に引かれている。

個体数が少ないため、出土の特徴はよくわからない。



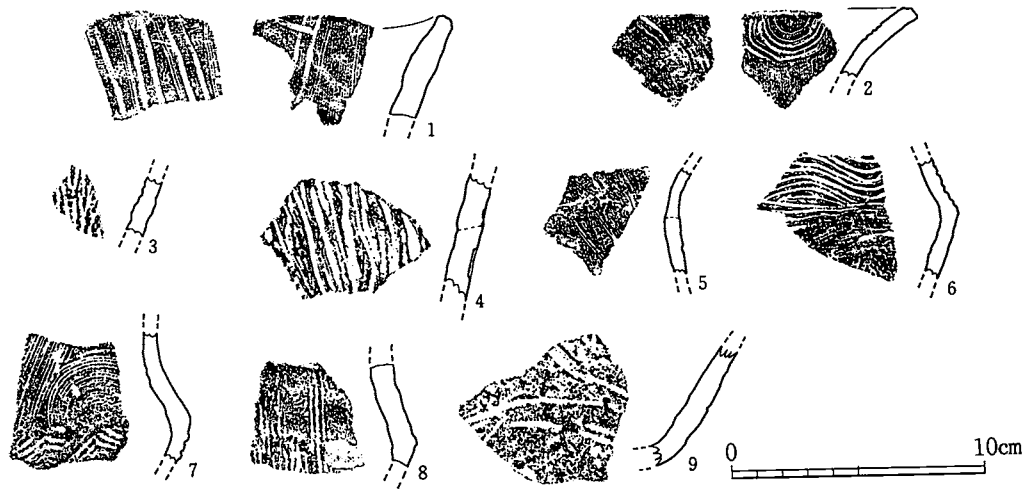
第146図　土器実測図

IV－2類（第149図・第150図）

口縁部がしまり肩が張る壺の器形を呈すもの、あるいは口縁部の傾きや形態から壺形となる可能性の高いものである。ここに挙げた33点の他、図化できなかったものが3点ある。

ここに図化したものはすべてが口縁部から頸部にかけての破片であり、胴部以下の器形を想定することができなかった。壺形の土器の胴部片や底部片は、他の施文方法の類似する鉢形土器のグループに混じり込んでしまったと思われるのである。

口縁部から頸部にかけての形態だけでも、一概に壺形と呼んでもそのバリエーションは多い。まず大きさを見ると、口径の復元できるものは、口径20cm程度のもの（第149図1・17、第150図6）、口径12～13cm程度のもの（第149図5）、口径7～8cm程度のもの（第149図2・18）の



第147図　土器実測図

大・中・小程度に細分できよう。口縁部の形態も、外反するもの、外傾するもの、直立するもの、内傾するもの、内弯するもの等様々である。

第149図1は山形押型文を施文する。外反する口縁部から「く」の字形に屈曲する頸部に続き、胴部はやや張るのではないかと思われる。口唇部は尖っており、山形押型文を外器面は縦位に、内器面は口縁端部のみ横位に一条施している。

2は口径の小さなタイプで、口縁部は緩やかに外傾する。外器面には押型文を施しており、施文原体は菱形と思われる。

3はわずかに外反する口縁部で、外器面と内器面に網目の撚糸文を施す。口唇部にも撚糸文を施しており、原体の撚糸は細い。頸部は若干くびれる程度であろう。

4はわずかに口縁部が外反し、外器面と口唇部に沈線文を施す。

5の口縁部はわずかに肥厚して、頸部は直行し、ゆるく「く」の字形に折れ曲がり外反する。口縁部外器面はヘラ条工具により浅く条痕風に横方向に沈線を施しているが、頸部より下は、縦方向に撚糸文と思われる別の文様がみられる。

6は内傾する口縁部片である。外器面にはヘラ先で曲線文を、口唇端部には別に短沈線を施す。

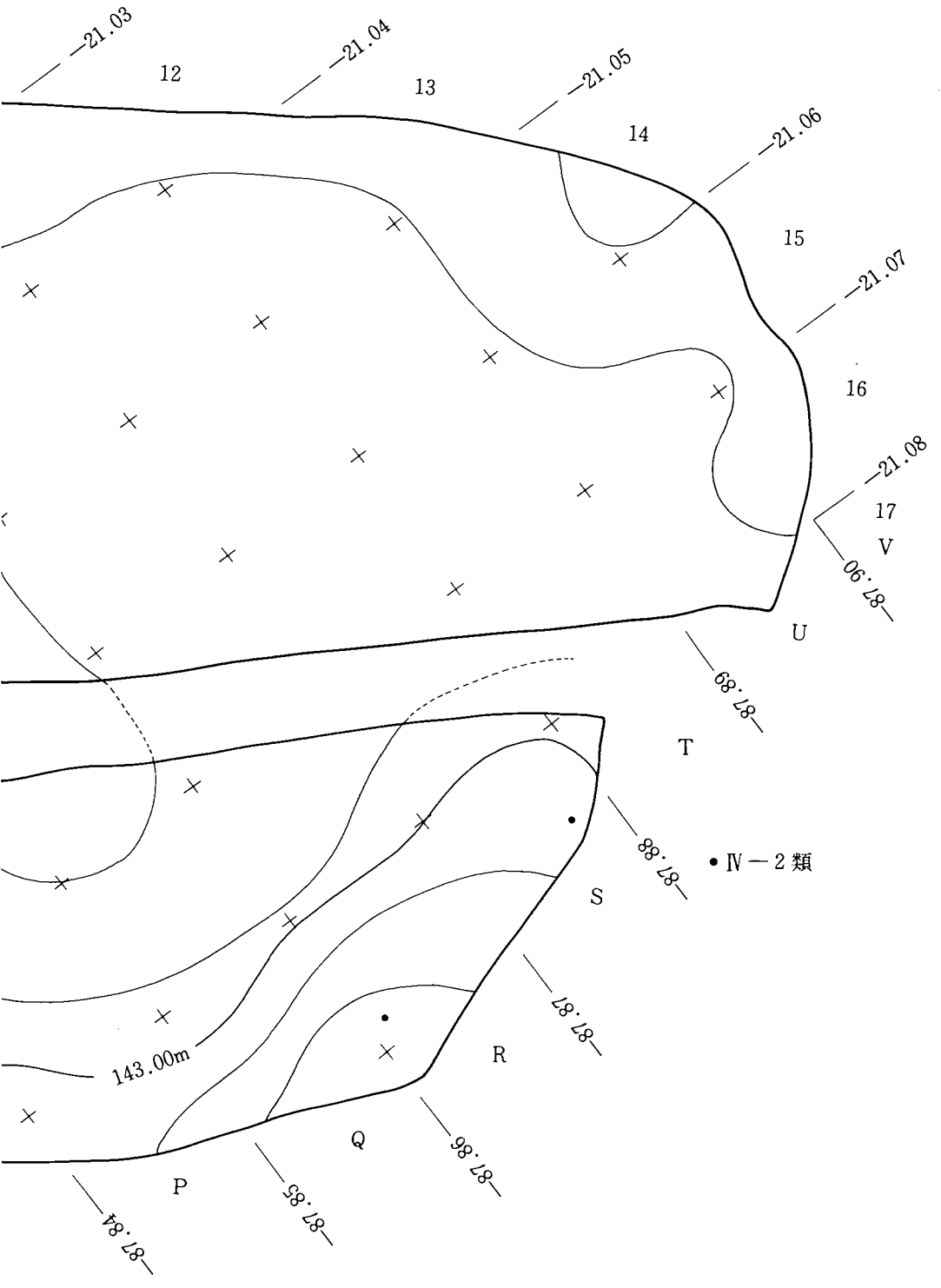
7の口縁部は若干肥厚してわずかに外反し、頸部はわずかにくびれ、緩やかに肩部に続くと思われる。口唇端部には荒く短沈線文が施され、外器面には条痕風の沈線が施文されている。破片の最下部、頸部から肩部に至る部分には、刺突文のようなものが認められるが、それ以下が欠損しているためよくわからない。

8・9は直立気味の頸部である。口径は異なるようであるが、器形は類似しており、撫で肩で肩部の張りは弱く、口縁部は直立かやや外反すると思われる。8は綾杉状の凹線文を、9は

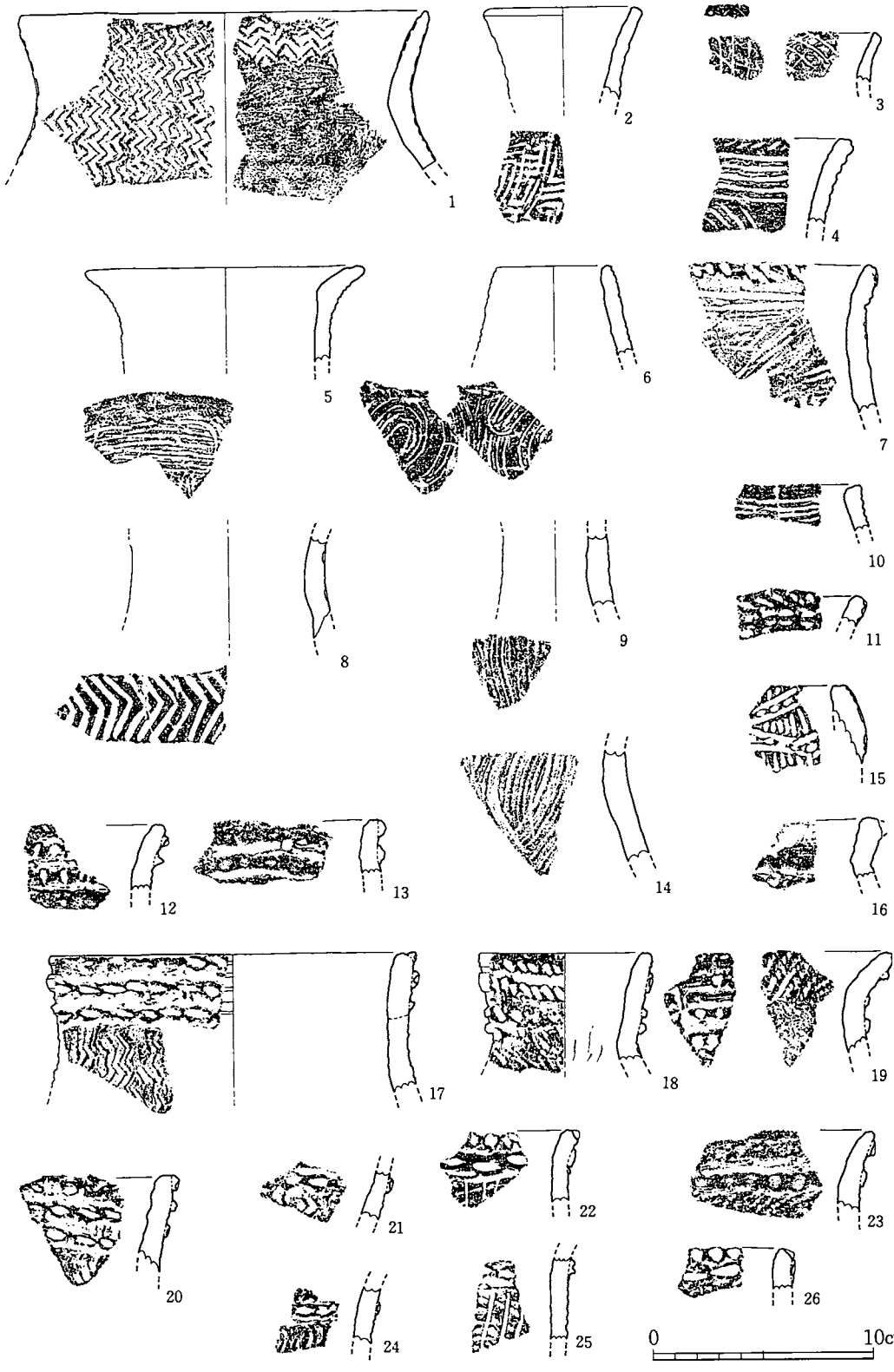
Ⅱ区
Ⅰ区
2
20.94
3
20.95
4
C
87.72
D
142.00m
87.73
E
87.74
0
20m

Ⅲ区
Ⅳ区
-20.96
5
-20.97
6
-20.98
7
143.00m
144.00m
145.00m
F
87.75
G
87.76
H
87.77
I
87.78
J

0.99
8
21.00
9
21.01
10
21.02
11
145.00m
144.00m
K
L
M
N
O
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83
87.84



第148図　Ⅴ層・Ⅵ層出土土器分布図



第149図　土器実測図

櫛状施文具による浅い曲線文を、外器面に施している。また、14は9と同一個体であると思われる。

10は内傾する口縁部で、口唇部は平坦で若干ふくれている。外器面には、横位に浅く沈線を施す。

11は外反する口縁部で、口唇端部と外器面に短沈線文を施す。

12の口縁部はわずかに外反する。口縁端部よりやや下に、断面が三角形の凸帯を二条貼付ける。凸帯には刻み目が施されている。撚糸文か縄文の地文があるようであるが、よくわからない。

13も口縁部片である。直行する口縁で、口径は余り大きくならないと思われる。口縁端部とその下に凸帯を貼付けており、凸帯には斜位に押捺文が見られる。

15はやや内湾する口縁部で、口唇部は平坦である。外器面には、沈線文と刺突文を組み合わせた幾何学文が描かれている。

16は短い外反する口縁部を持ち、頸部は「く」の字形に屈曲する。口唇端部が欠損しており、口唇部の形態はよくわからない。

17・20・21は同一個体と思われる。口縁部は直立気味であり、頸部は緩やかに屈曲すると思われる。外器面には地文として山形押型文を縦位に施文した後、口唇端部と口縁部に合わせて三条の凸帯を巡らす。凸帯には斜め横からの刺突を施す。24もこれらにごく類似しているが、押型文の形態や凸帯への刺突の方法がやや異なり、同一個体であるかどうか決めかねる。

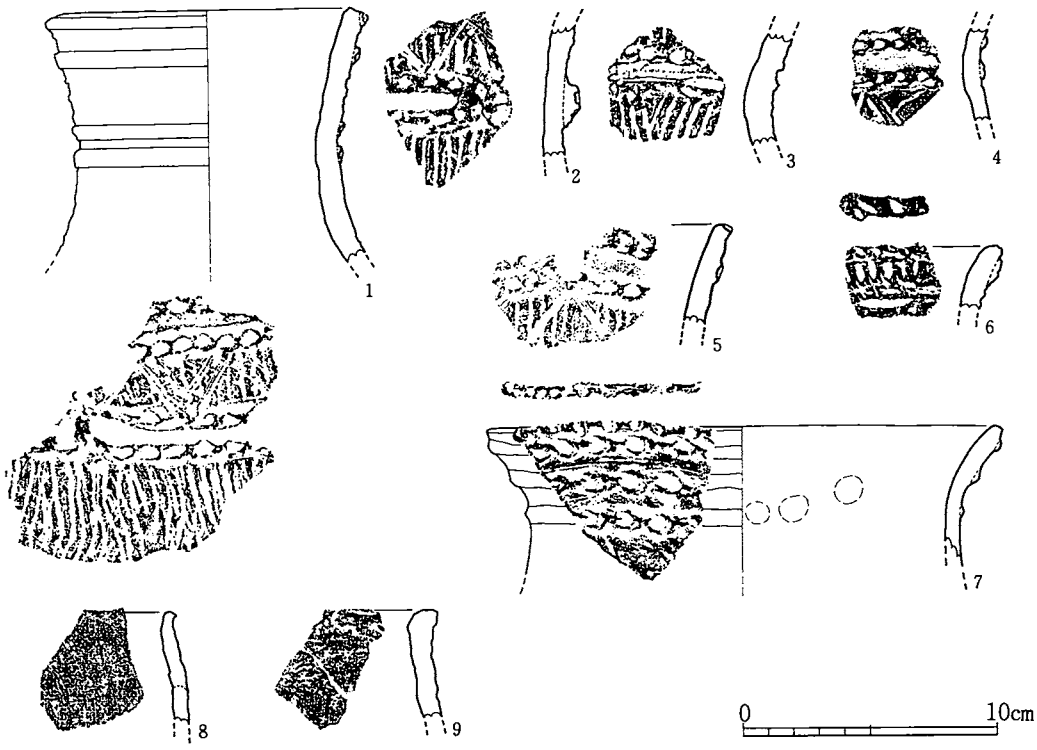
18はやや外反する口縁部を持ち、頸部は「く」の字形に屈曲すると思われる。外器面は地文として縄文（ＲＬ）を施す。その後口縁端部に一条、その下の口縁部に三条の凸帯を横位に貼付け、凸帯上には斜位に刺突文を施している。

19は、外反する短い口縁部から緩やかにくびれる頸部に至る破片である。口唇端部には文様が見られるが、施文具は断定できない。外器面には口縁部から頸部にかけて貼付凸帯を三条に巡らせており、凸帯は下方より刺突されている。内器面は、口縁部のみ縄文（ＬＲ）が施文されている。

22・25は同一個体ではないかと思われる。口縁部は直行し、端部のみわずかに外反する。口唇端には刺突を施す。外器面には地文があると思われ器面は波を打っているが、原体が何であるか特定できない。口縁端より少し下に低くてやや幅広の凸帯を貼付け、凸帯上には横位に短沈線文を巡らせている。凸帯より下は、縦方向に沈線文を施している。

23はわずかに外反する口縁部である。外器面に地文として縄文（ＬＲ）を施した後、口唇直下から二条の凸帯を巡らす。凸帯上には押捺文が見られる。

第150図１～３・５は同一個体である。口縁部はわずかに外反し、頸部は緩やかに屈曲している。口唇部は平坦で、半截竹管文による三日月型の刺突文がある。口唇端部にも刺突文が施さ



第150図　土器実測図

れているようであるが、この部分が欠損しているためよくわからない。口縁端部より下には、刺突のある凸帯を貼付ける。また、口縁部中ほどには幅広の凸帯を一条巡らせたと思われ、凸帯上の数カ所には瘤状の突起が付いている。この瘤状突起は、口縁端部と口縁直下の凸帯との間にもつけられていた可能性があり、5には剝落したと思われる痕が残っている。突起には竹管のようなものによる刺突を持つものと持たないものがある。突起と突起の間は、幅広凸帯を上下二分するようにヘラで凹線が太く引かれ、分割されて二本になった凸帯は、上下別々に斜め横から刺突されている。口縁上部の凸帯と幅広凸帯間、幅広凸帯以下には、縦方向に撚糸文が施文され、凸帯間は、撚糸文の上にヘラで鋸歯状の文様を描いている。図化できなかったが、同一個体がもう1点ある。

4は頸部であると思われる。くびれた部分に、横位に二条、刺突文のある凸帯を巡らし、凸帯以下には浅い沈線を施している。

6は口縁部である。わずかに外反し、口唇部と口唇端部には斜めに押捺文が見られる。口縁端部よりわずかに下に、横位に低い幅広の凸帯を貼付けており、凸帯上にも縦位の押捺文が施される。凸帯より下は、浅い凹線が巡っている。

7は外反する口縁部であり、口唇部と口唇端部に刺突文が見られる。外器面の口縁端部より

やや下から頸部までの間に、三条の貼付凸帯を巡らし、半截竹管状の施文具で、斜め横から凸帯を刺突している。凸帯より下は地文のある可能性もある。

8・9は無文の土器片である。2点とも内傾する口縁部で、口縁端部のみ外に反る

ほぼⅣ－1類全体の分布と重なって出土している。

Ⅴ－1－a類（第152図～第154図）

外器面に凸帯を持つグループであり、凸帯上には刺突文あるいは類似の文様が施文される。全体で141点、うち遺構から15点出土している。

第152図・第153図1～28・31・32は口縁部片である。口縁部の形態は、外反するものとほぼ直行するものとがあり、また、第152図1～6、第153図2は、波状か山形を呈すると思われる。多くは口縁端部よりやや下から凸帯を何本も横位に巡らす。第152図7・21のように凸帯の間隔を空けるものもあるが、次から次へ凸帯を貼付けるものが大多数である。凸帯には刺突文が施され、口唇部にも同様の施文具による押捺文を持つもの（第152図・第153図1～5）が多い。

第152図1・2はごく類似している。山形の口縁部は端部に近づくにつれて厚くなり、山の頂端部から縦方向に、上部が丸く太く下部は尾状に尖る隆帯を貼付ける。その後口縁端部よりやや下から、七本の凸帯が横位に貼付けられている。凸帯と隆帯上には刺突文が、また、口唇部には二列に斜方向の短沈線文が施文される。第152図3は器壁の厚みが口縁端部は逆にやや薄くなるが、凸帯の貼付け方や施文法は1・2と同じである。

第152図6は、口唇部と隆帯が竹管状施文具による刺突文が施され、隆帯下部は剝落してその形状はわからない。

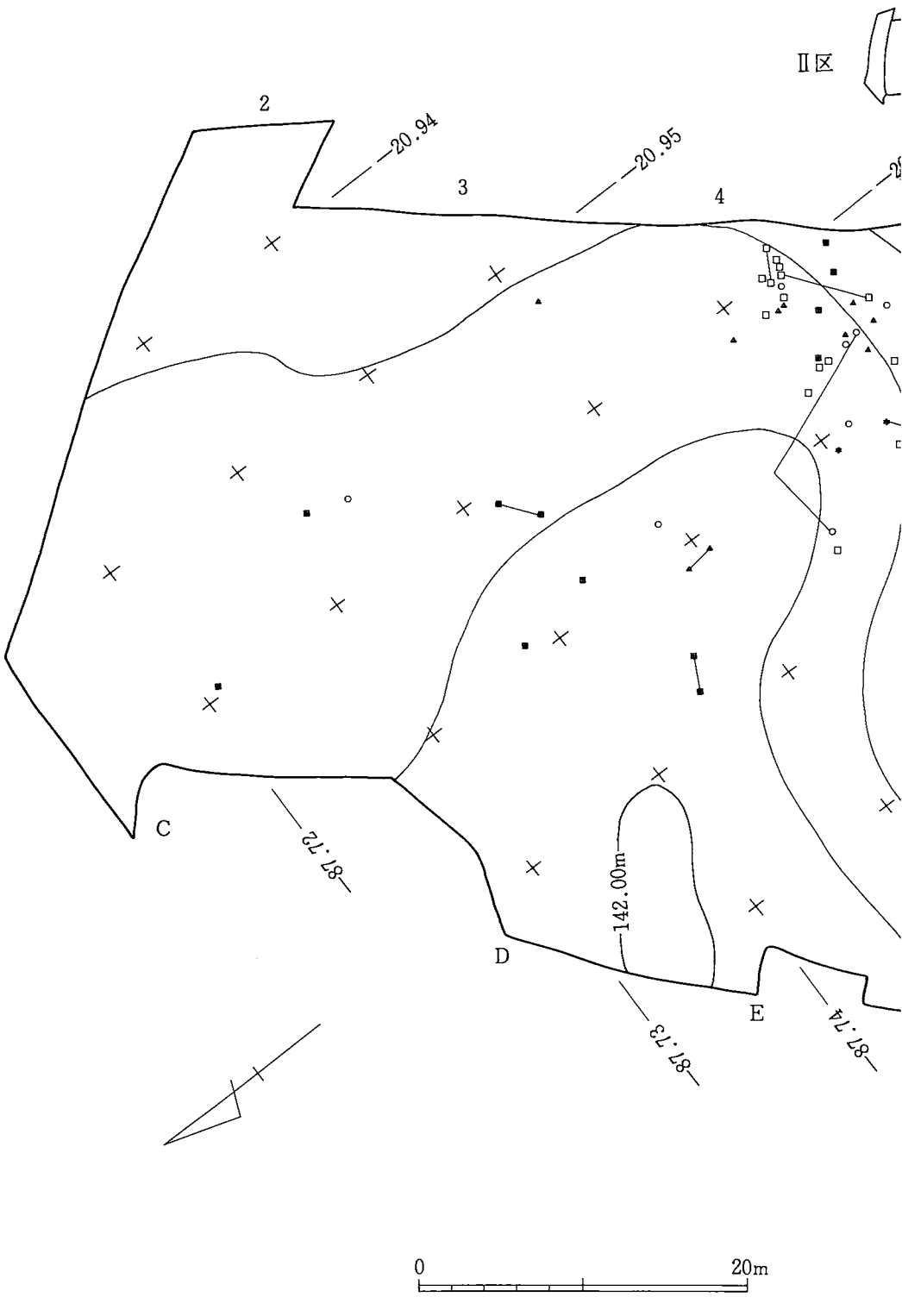
第152図4は縦方向の隆帯を口縁端部より幾分突き出させて貼付けており、第152図7は、縦方向の隆帯はごく低く尾部もなく、横位の貼付凸帯とほとんど変わりがない。横位の凸帯どうしの間隔は広い。第152図15も縦方向の凸帯はこの7のものと類似している。

第152図5は口唇部の内器面側から外器面の最上段の凸帯の下まで、幅1cm弱厚さ2mm弱の幅広のリボン状の粘土紐を、一定の間隔毎に貼付けている。破片中では三カ所認められ、この紐を貼付けた後口唇部に施文している。地文があったかもしれないが、凸帯を貼付けた際ナデられているので、よくわからない。

第153図2は山形の口縁部の頂端部に小さな丸い突起を貼付けており、突起の両端から最上段の刺突が始まっている。

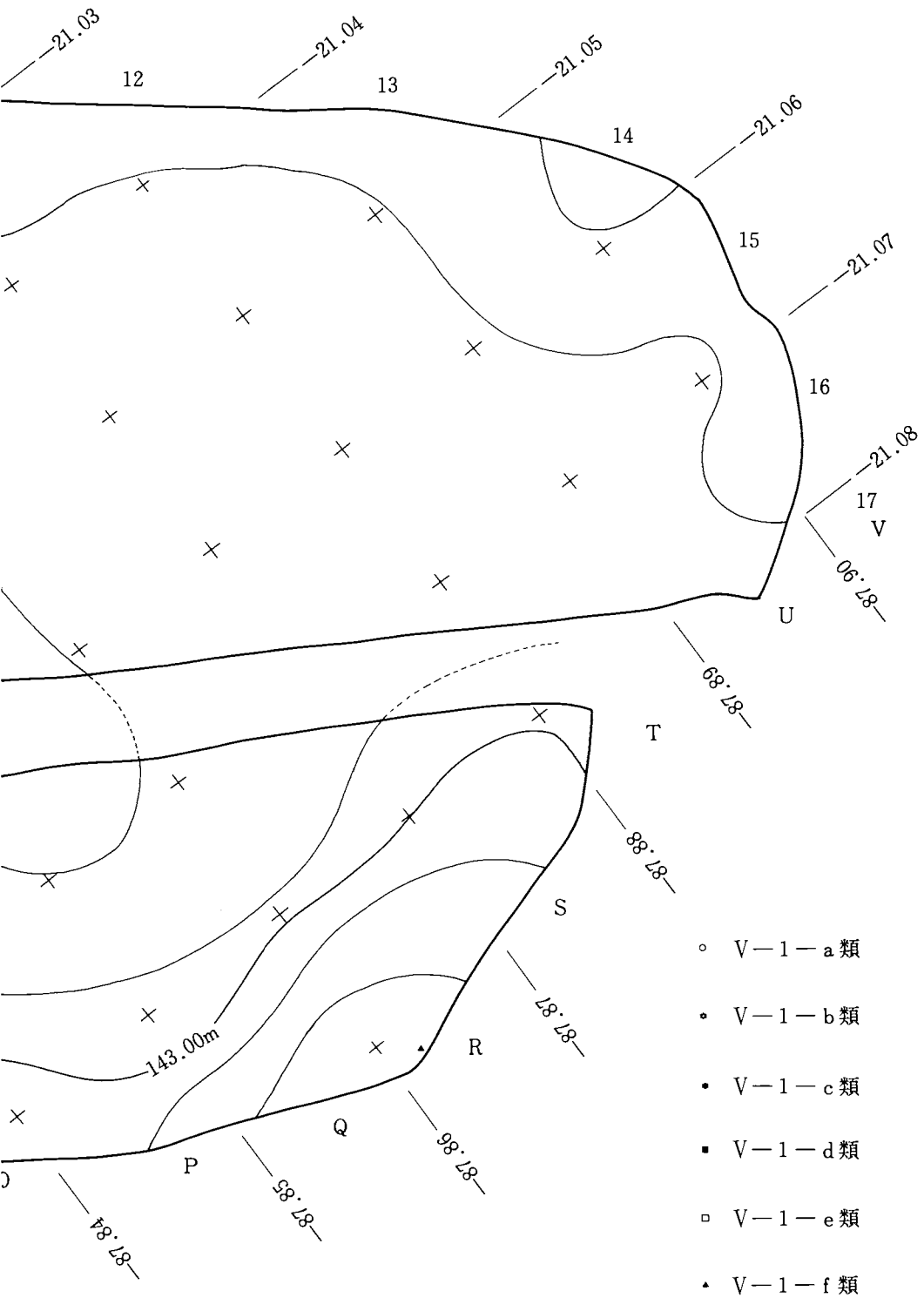
第153図3・4は口唇部に浅い斜位の沈線がある。

第153図5～22・24・26～28・31・32は口唇部には施文がない。21は縦方向の隆帯の一部が残っている。11の凸帯上の刺突文は先割れか二叉の施文具を用いている。19の凸帯の刺突は押引状である。25は凸帯間に縦方向の文様が見られるが、器面が摩耗しており施文法はわからない。27・32の凸帯は刺突ではなく、横方向の短沈線文が施されている。28は口縁端部とすぐその下

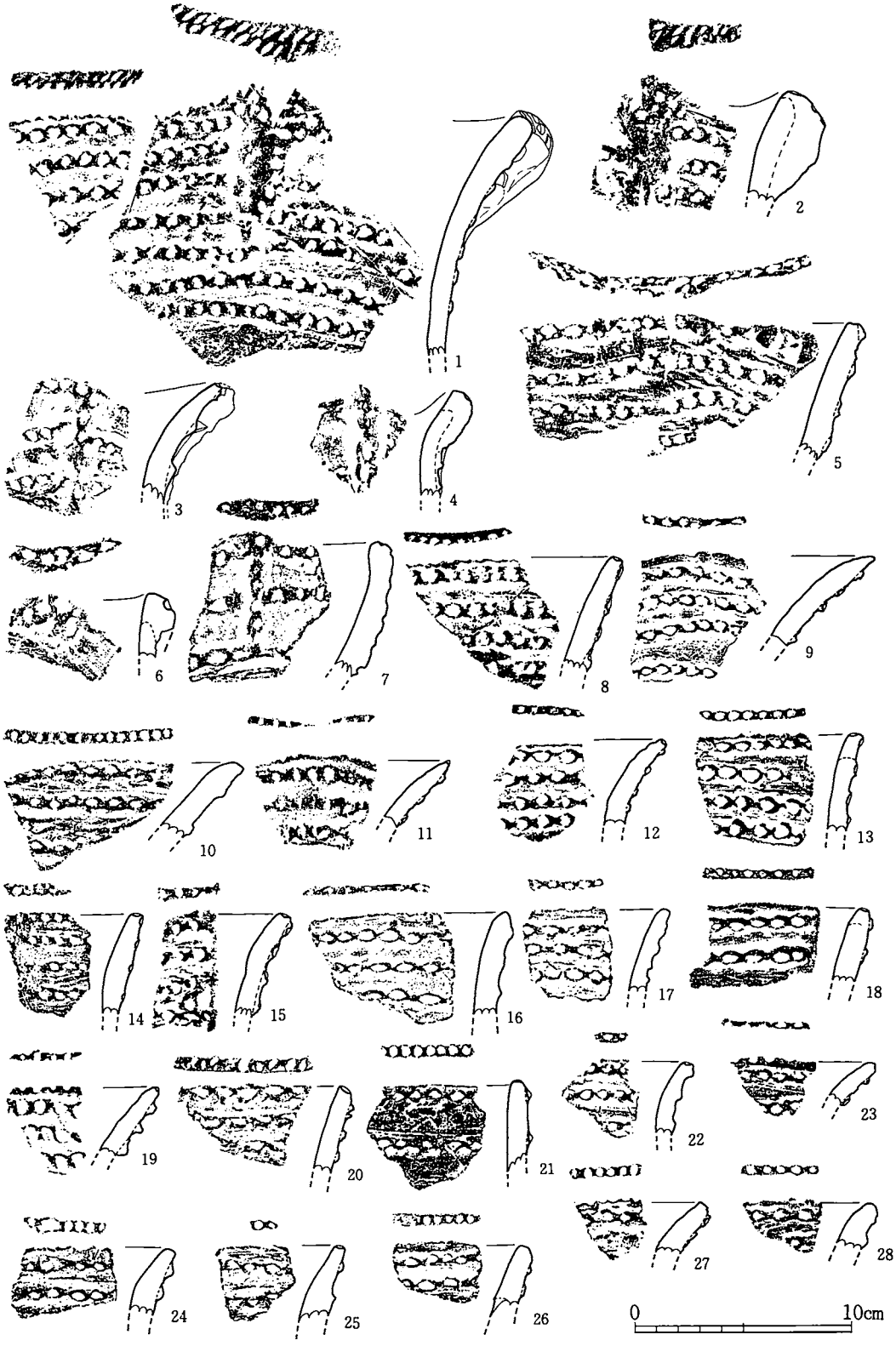

Ⅱ区
2
20.94
3
20.95
4
C
87.72
142.00m
D
87.73
E
87.74
0
20m

Ⅲ区
Ⅰ区
Ⅳ区
20.98
20.97
7
6
5
143.00m
144.00m
145.00m
F
G
H
I
J
87.75
87.76
87.77
87.78

8
9
10
11
21.00
21.01
21.02
144.00m
145.00m
K
L
M
N
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83



第151図　Ⅴ層・Ⅵ層出土土器分布図

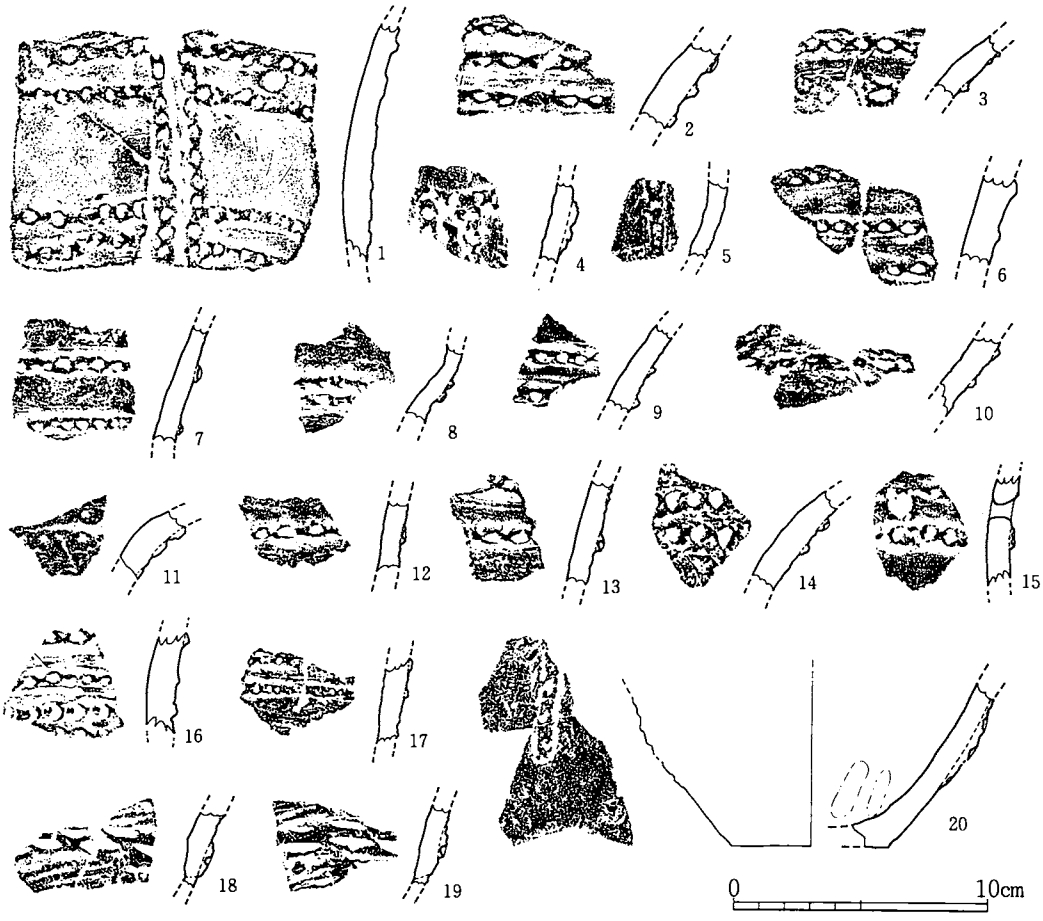

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm

第152図　土器実測図

第153図　土器実測図

に幅1.3cmの断面が半楕円形の凸帯を貼付けており、上の凸帯には半截竹管状の施文具による刺突文が二段に、下の凸帯には先割れか二叉の施文具による刺突文が施されている。地文のある可能性もある。

第153図29・30・33・34は胴部の特殊な部分である。これだけでは、実はV類のどのグループにも分けることは難しいので、仮にここに含めることとした。29・30はごく類似している。横位に刺突ある凸帯を貼付けた後、径2cm高8mm程度の円筒形の突起を貼付けており、突起中央には径8mmの棒状施文具による刺突がある。凸帯より下には浅い沈線が認められる。33は把手状の部分である。上部の方が幅広い粘土帯を橋状に貼付けており、更に把手の中央はY字状に、



第154図　土器実測図

把手の両脇は縁取りするように、低くて細い凸帯を貼付けている。凸帯上には刺突連点文が見られる。凸帯間には、凸帯に沿うように沈線文が施されている。把手下部は摩耗していて詳細はわからない。34は二本の低い横位の幅広凸帯の間に、径1.6cmの半円球状の突起を貼付けている。凸帯上は波状の沈線文が施されている。

第154図1は口縁部近くの、第154図2～19・21～24は部位不明の胴部片である。1・4・5は横位・縦位に刺突凸帯がある。他は横位に刺突のある凸帯を巡らせている。16は凸帯上の刺突文に二種あり、棒状と竹管状の施文具をそれぞれ用いている。17は凸帯は細く、刺突文も小さい。18・19は同一個体であると思われ、幅広い貼付凸帯上に短沈線文が交互二段に並んでいる。

第154図20は底部である。底は小さめで、膨らみを持って外に開きながら立ち上がる。外器面に縦位の刺突凸帯が一本見られる。

Ⅰ区中央部の中央から東寄りの斜面、平坦部には至らない部分から大半が出土しており、Ⅲ・

IV区北端斜面から残りが出土している。

Ⅴ－１－ｂ類（第155図）

刺突のある凸帯を持つグループの中でも、これらは地文を持っている。１～３に顕著であり、地文の原体は山形押型文のようでもあるがよくわからない。１は外反する口縁部片であり、口縁端部よりわずかに下から細目の凸帯を横位に貼付ける。凸帯上には小さな刺突文を施す。口唇部には押捺文がある。２～６は胴部片であり、１と類似の細くて小さい刺突のある凸帯を横位に巡らせている。６の上から三段目の凸帯は直角に下方に折れ曲がっており、縦位の凸帯となるかもしれない。

すべてＨ・Ｉ－６グリッドから出土しており、同一個体である可能性もある。

Ⅴ－１－ｃ類（第156図）

凸帯を貼付ける前に、地文として撚糸文を施しているものである。１はやや外反する口縁部片である。口唇部には、同じ方向に二列に重ねて短沈線文を施している。２は胴部の屈曲部に刺突のある凸帯を貼付けている。屈曲部より下の撚糸文は消されているようである。３は横位、４は横位と縦位に刺突のある凸帯を貼付けており、どちらも凸帯上の文様は押引風である。６は直立気味の胴部である。刺突のある凸帯を曲線を描くように貼付けている。凸帯は低く、焼成前に剝落して器面に刺突痕のみ残している部分もある。内器面は削り調整され、上部はその後ナデられている。

個体数が少ないため、分布の特徴はよくわからない。

Ⅴ－１－ｄ類（第157～第159図）

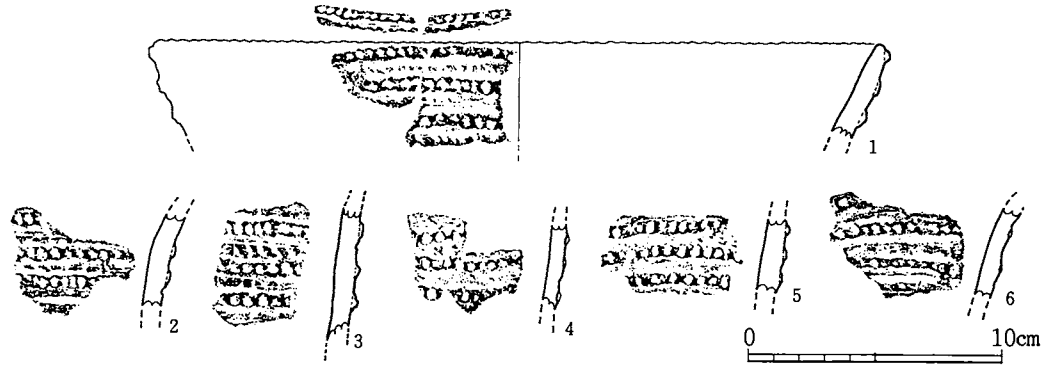
縄文を器面全体に施文し、その上に凸帯を貼付けるものである。全体で109個体出土しており、うち遺構から11個体出土している。

第157図１～10は、横位・縦位の凸帯を持つものである。

１・２・７は波状を呈すと思われる口縁部で、やや外傾する胴部に大きく外反する口縁部が続く器形になると思われる。

１・２は口縁の最も高い部分に楕円形の瘤状突起を貼付ける。突起の上部と下部から口唇に沿って刺突のある凸帯を横位に巡らしている。１は突起の下方からも二本の刺突凸帯が縦位に延びている。１の突起の下部と縦位の凸帯、２の凸帯に施されている刺突文には、先端が二叉の施文具が用いられている。１・２とも内器面口縁端部に縄文が施文されており、１は口唇部にも縄文がある。

７は１・２同様に瘤状突起が貼付けられており、突起上部に刺突がある。突起の中央部両脇から刺突のある凸帯が巡らされている。口縁の外反が始まる部分にも同様の凸帯が横位に巡らされており、この凸帯の丁度突起の真下に当たる部分から、縦位に突帯が貼付け始められるのが観察される。別の部分に斜位の凸帯も走っているが、文様構成はわからない。口唇部は尖り



第155図　土器実測図

気味で、押捺文が施されている。3は口縁端部を欠損しているが、1・2・7と類似の文様構成になっている。

4は縦位に、5・6は縦位と横位に刺突のある凸帯を貼付けている。

8・9は胴部片で同一個体である。半球状の瘤状突起があり、突起に接して横位に突帯を巡らせている。突帯に施されている刺突は、二叉の施文具を用いている。10は断面が三角形に近い大きめの突帯を逆「V」の字形に貼付け、その両側から、刺突のある凸帯が等間隔に横位に延びている。

第157図11～23は口縁部片である。口縁端部よりやや下から数条の刺突ある凸帯を横方向に貼付ける。また21は斜位にも刺突凸帯がある。11～17・21・22は口唇部にも文様を持つ。12は口唇部の文様は縄文（ＬＲ）であり、他は押捺文である。

第157図24～27・第158図は胴部片である。直立気味のものが多いが、やや丸く張るもの（第158図11・13～18）、外反するもの（第157図24～27・第158図1～3・17）もある。刺突のある凸帯は横位に巡らすものが多く、他に曲線を描いて貼付けられるもの（第158図3・13）もある。

第159図はこのグループの中でも、凸帯に特色のあるものである。

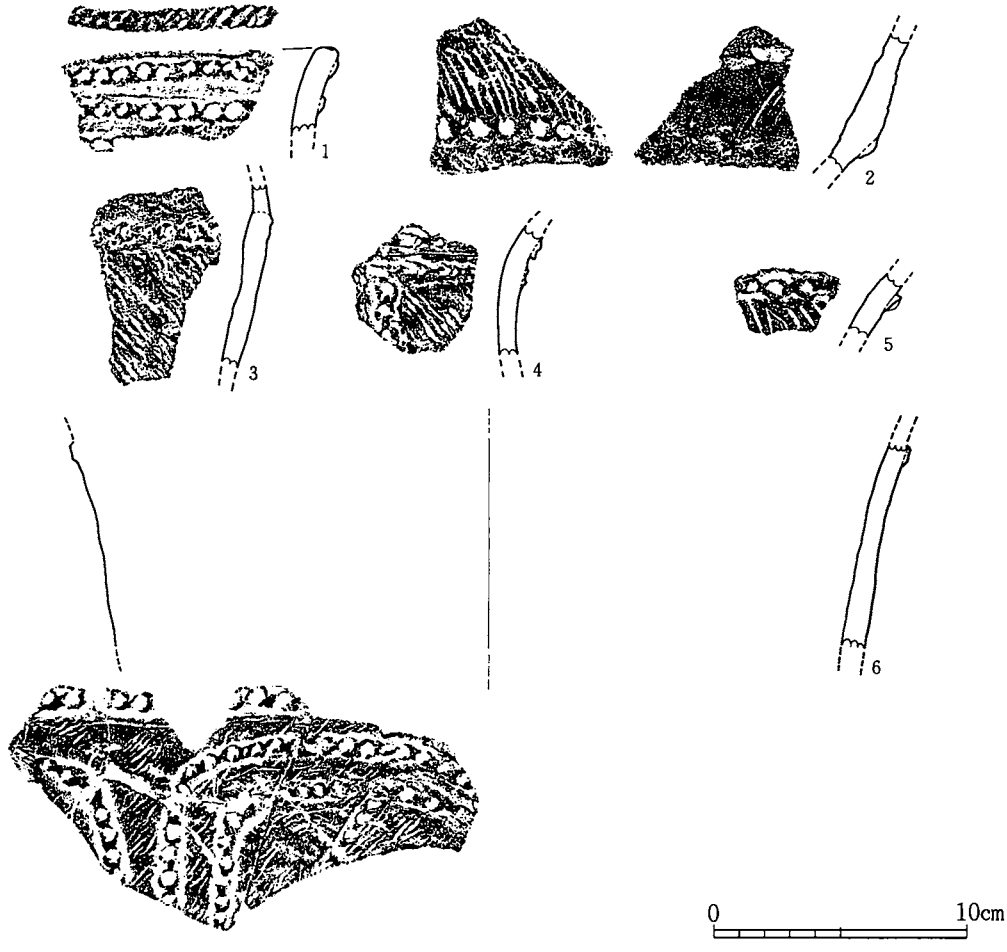
1・2・6は同一個体である可能性が強く、凸帯上には横位に短沈線文を施している。器壁が厚く、端部の尖った口縁部は大きく外反し、凸帯の一段目は口縁端部に貼付けられる。

3～5の横位に貼付けられた凸帯上には文様はない。うち3・4は同一個体であり、凸帯の貼付け方は弱く剝落している部分がある。

7～10はごく低い刺突ある凸帯を曲線状に貼付けている。

11は外反する胴部で、口縁部に近い部分であろう。凸帯が等間隔で全面に横位に貼付けられ、凸帯のみに縄文（ＬＲ）が施文されている。破片の下端には縦方向に凸帯が貼付けられている部分がある。

12・15～17は同一個体である。器壁は薄く、胴部に横位に二条の貼付凸帯がある。その一番



第156図　土器実測図

目の凸帯まで、胴部の上部から縦方向に間隔をおいて、一・二本の単位で凸帯が延びてきている。凸帯には縄文が施されているようである。底部は上げ底になると思われる。

13～14・18も同様に縄文施文の凸帯を持つものである。13はやや器壁が厚い外反気味の胴部片で、凸帯の一部は波状を描く。14は丸みを持つ胴部片で、地文の縄文は施文方向に規則性がなく、凸帯は緩いカーブを描く。

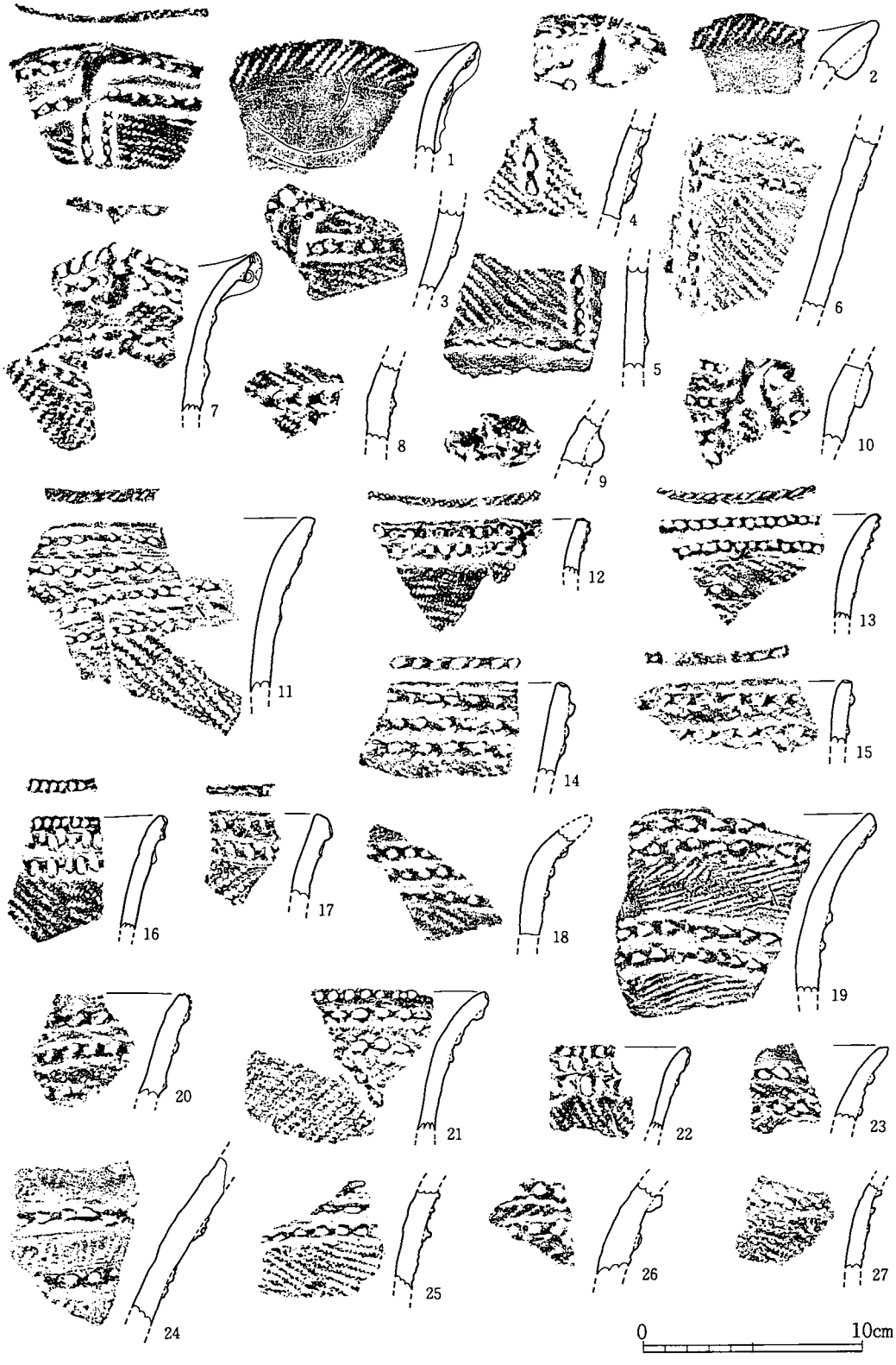
Ⅰ区中央部中央から東寄りにかけての出土が多く、Ⅰ区北側平坦部とIII区北側斜面からも出土している。

Ⅴ－１－ｅ類（第160図～第163図）

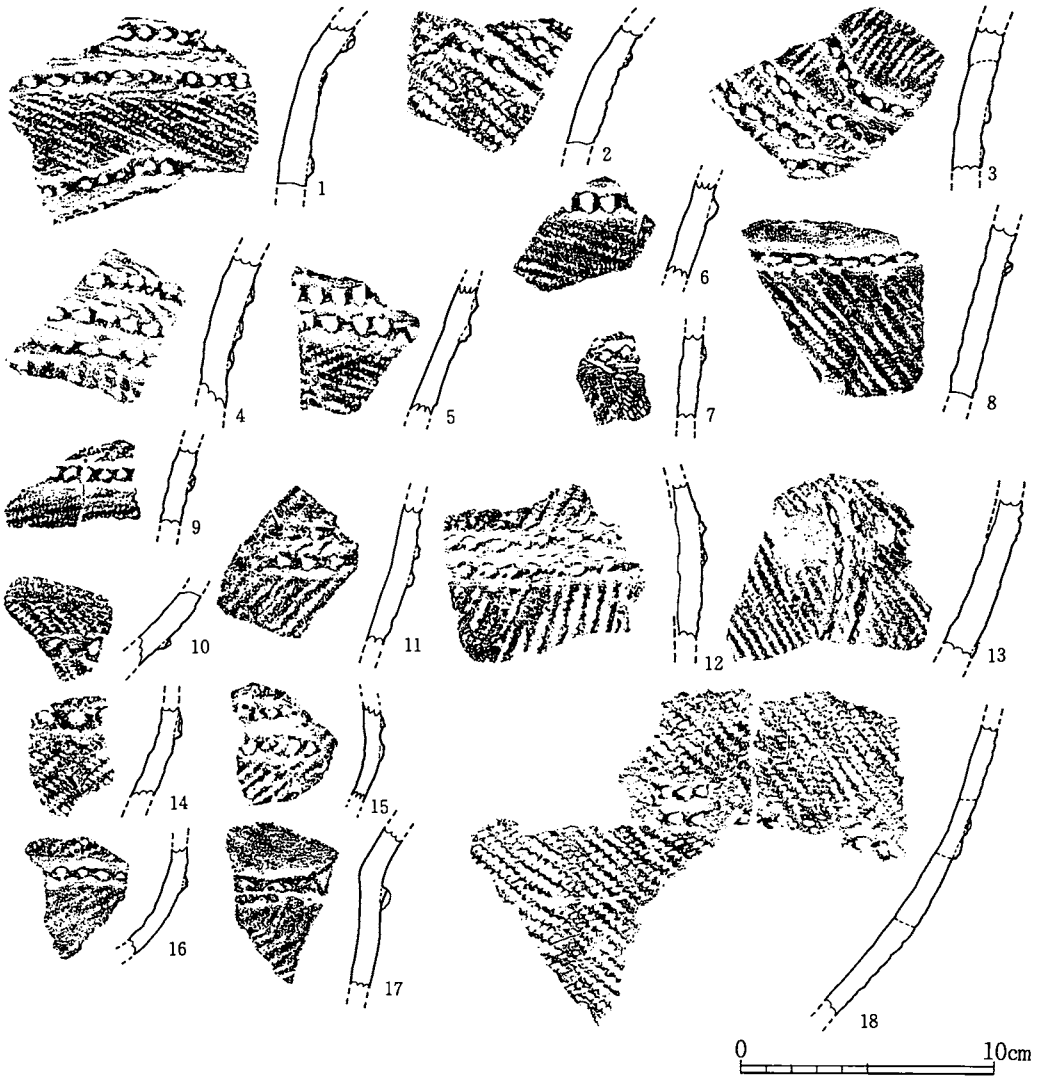
刺突のある凸帯を持つもののうち、沈線文を持つグループである。全体で56点、うち遺構より４点出土している。

第160図・第161図１・２は地文を持つグループである。

第160図１・３・４は同一個体である。１によって口縁部から胴部までの器形がわかる。胴部


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

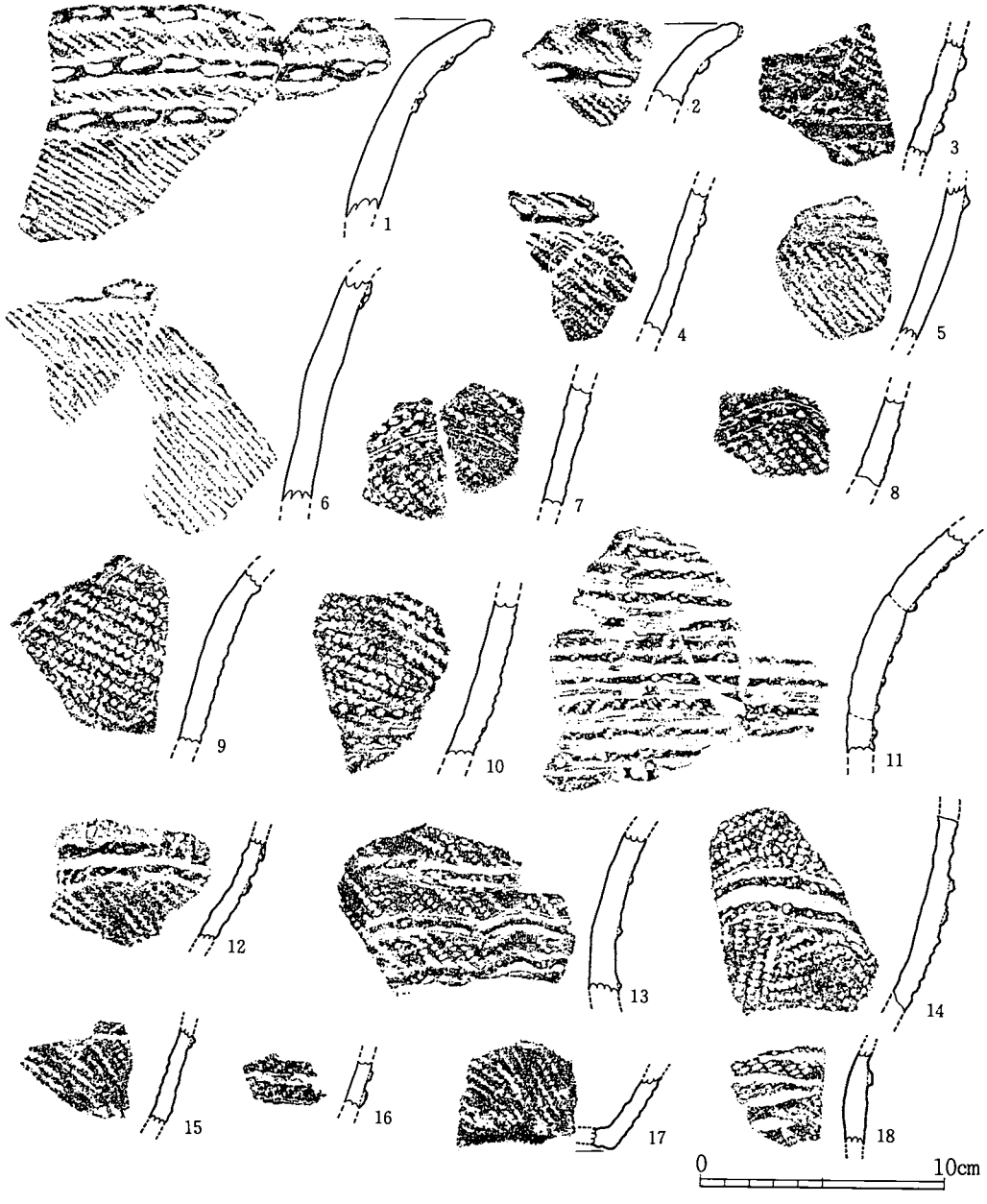
第157図　土器実測図



第158図　土器実測図

は直行気味で、僅かに丸く張り、緩やかに屈曲して外反する口縁部に至る。復元口径は31.4cm、復元した最大胴径は22.6cmを測る。平坦な口唇部には押捺文が施され、口縁端部よりやや下から屈曲部までの間に、五本の貼付凸帯が巡らされている。屈曲部より下の胴部は、斜方向の二本の平行沈線で区画をし、平行沈線間にはヘラによる押引文がある。その後器面全体を縦にいくつかのブロックに分け、ブロック毎に方向を交互に変えながら、斜位の平行沈線を密に施文している。沈線は半截竹管様のヘラを器面に対して斜めに用いたようで、断面の両端が深い。外器面全体に地文として縄文を施したようで、口縁部には明確に認められる。胴部も沈線間に僅かに残っているのがわかる。

第160図2・5も同様に地文として縄文を施した後、沈線を斜位に施文しているが、沈線の断



第159図　土器実測図

面が丸く、5は文様構成がやや異なる。第160図6・7はごく類似している。短沈線文を施した凸帯を横位に貼付け、縦に沈線と短沈線を交互に引いた文様構成である。地文があるのかもしれない。

第161図1はゆるやかに屈曲する胴部である。刺突のある凸帯を横位に貼付け、屈曲部より上部は別に縦位に凸帯を貼付けて、文様帯を区画している。区画された文様帯内には、横方向等間隔に沈線を引いている。地文は山形の押型文である可能性が高い。

第161図２は直行気味の胴部で、上端に刺突のある凸帯がある。横位に三本単位の凸帯を二ケ所巡らせて器面を区分した後、縦位にほぼ等間隔で沈線を引いている。地文は縄文（ＬＲ）である。

第161図３～15・第162図は地文を持たない沈線文施文のものである。

第161図３は直立気味の胴部から緩やかに屈曲して外反する口縁部に続いている。口径はかなり大きくなると思われる。口縁部には、端部から屈曲部まで等間隔に七条の刺突のある凸帯を横位に巡らせている。口縁端部はやや薄くなり、口唇部は平坦で押捺文が施される。凸帯より下は、棒状工具によりやや乱れた平行直線文を器面全体に施文している。

第161図４～８は第161図３に比すと直行気味の口縁部片である。４・７・８の口縁端部は尖り気味で、口唇部に押捺文を施す。口縁端部よりやや下から二条の凸帯を横位に巡らせている。７は凸帯より下に斜位に平行沈線が施され、８は凸帯上に押引文があり、凸帯間は斜位に平行沈線が引かれている。４は穿孔がある。第161図５・６は口縁端部とその下に二条、刺突のある凸帯を巡らせており、凸帯より下には５は横位に、６は斜位に平行沈線を引いている。

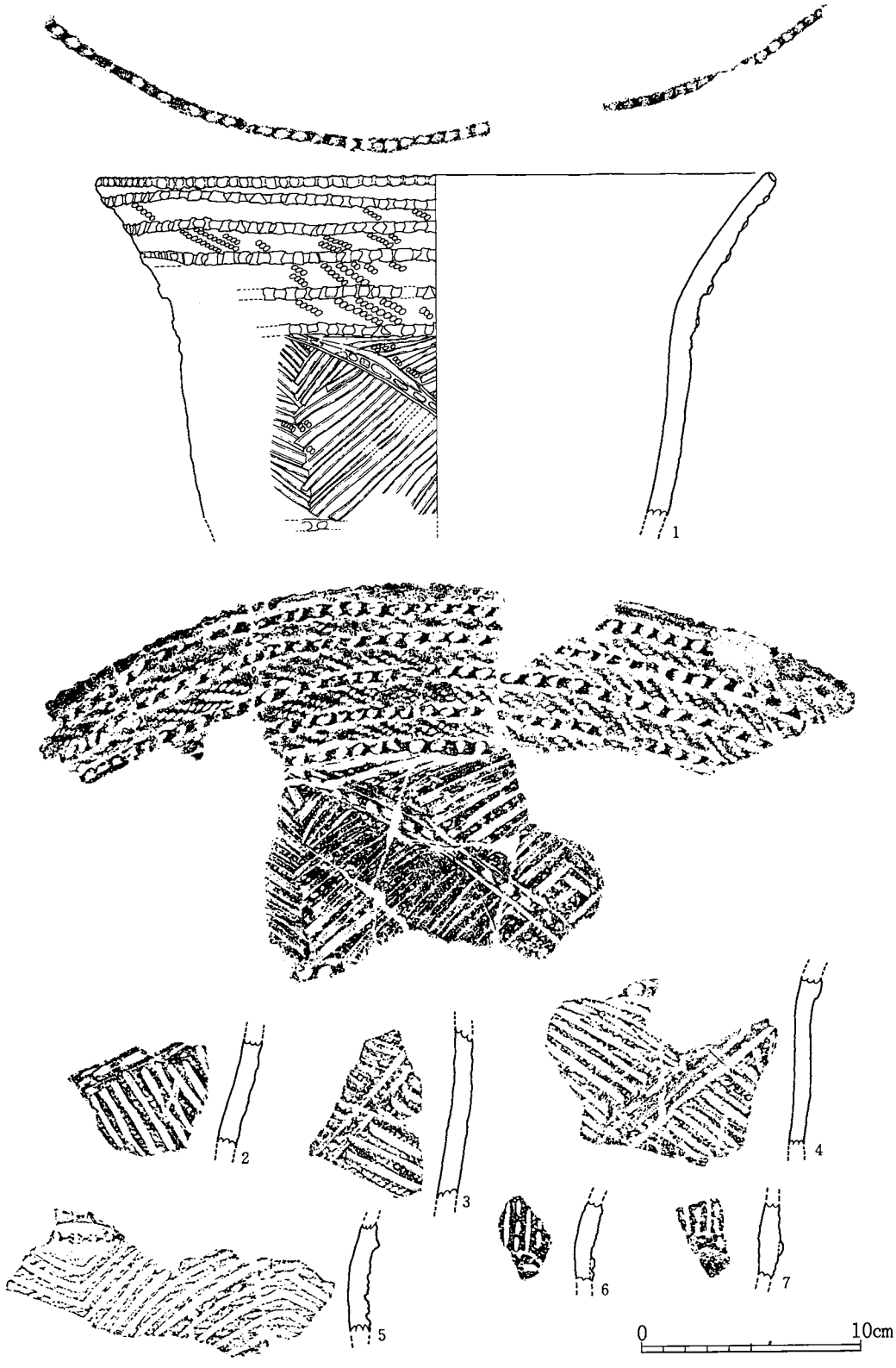
第161図９・10も外反する胴部片であり、第161図１と同様に横位と縦位の凸帯で区画した文様帯を、９は縦と横の、10は斜めの平行沈線で充填している。ただし９は二本の縦位の刺突凸帯の間に、半楕円球状の刺突のある突起を貼付けており、10は凸帯間に押引文がある。

第161図11・12は半楕円球状の瘤状突起とその周辺である。部位はわからない。沈線文を施文した後に突起を貼付けており、突起の長さは９が4.0cm、10が3.7cm、高さは共に1.2cm、突起上には刺突が並んでいる。類似の突起を持つものはＶ－１－ａ類にもある。

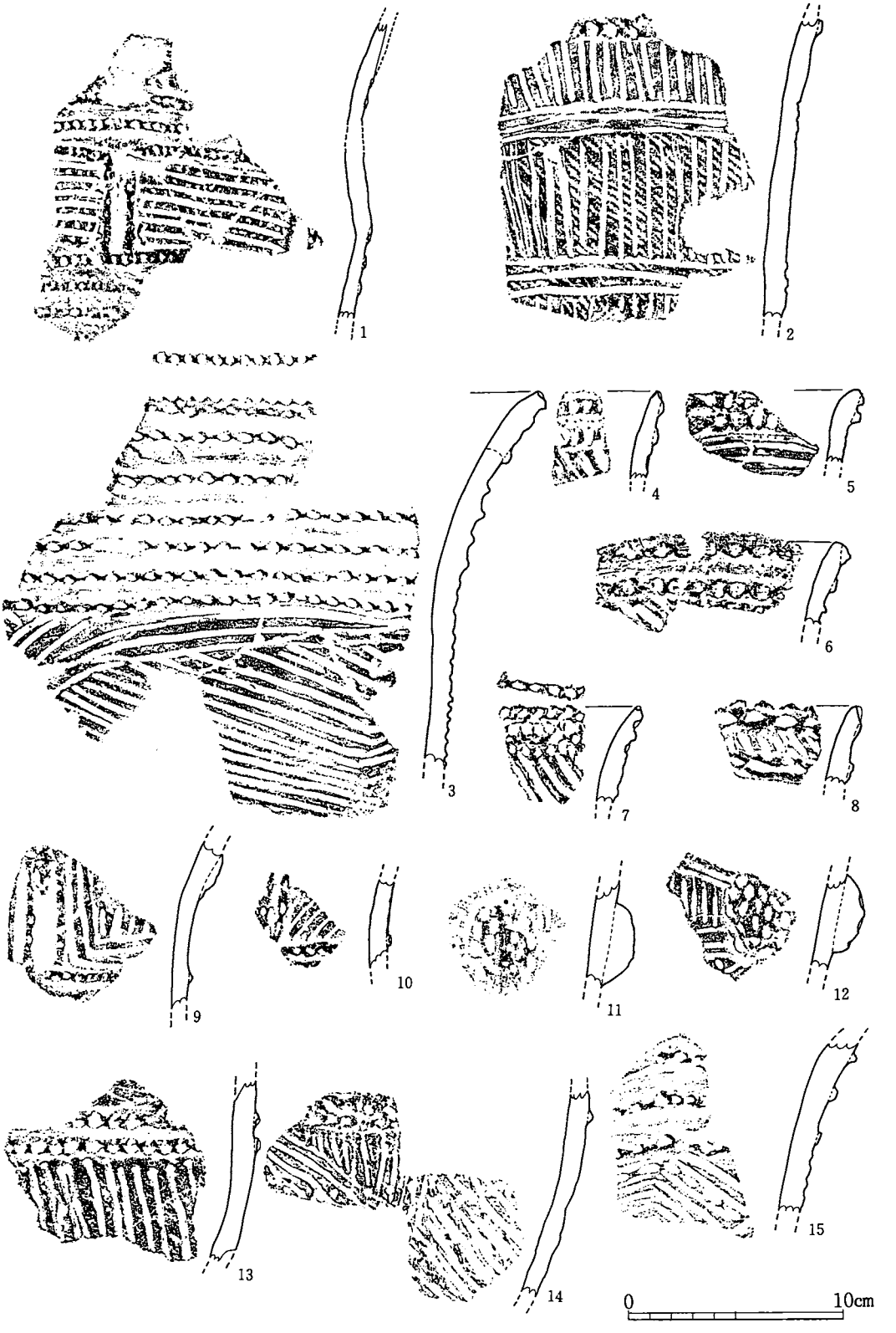
第161図13～15、第162図は胴部片である。胴部の文様構成には沈線と凸帯との組合せ方にいくつかのパターンがある。斜位の直線文と凸帯文（第162図１・３～８・10）、斜位の直線文と直線間の押引文と凸帯文（第161図15・第162図２）、斜位と横位の直線文と凸帯文（第162図13）等である。また、第161図13・第162図14・16の沈線は縦位でありやや幅広で浅く、第161図14・第162図15の沈線は力強くて荒く、途切れがちに引かれている。第162図９・12は凸帯を境に施文部と無文部に分かれ、凸帯には文様がない。第162図17・18の凸帯には縄文（ＬＲ）が施されている。

Ｉ区中央部東寄りに分布の中心があり、III区北端斜面からも出土している。

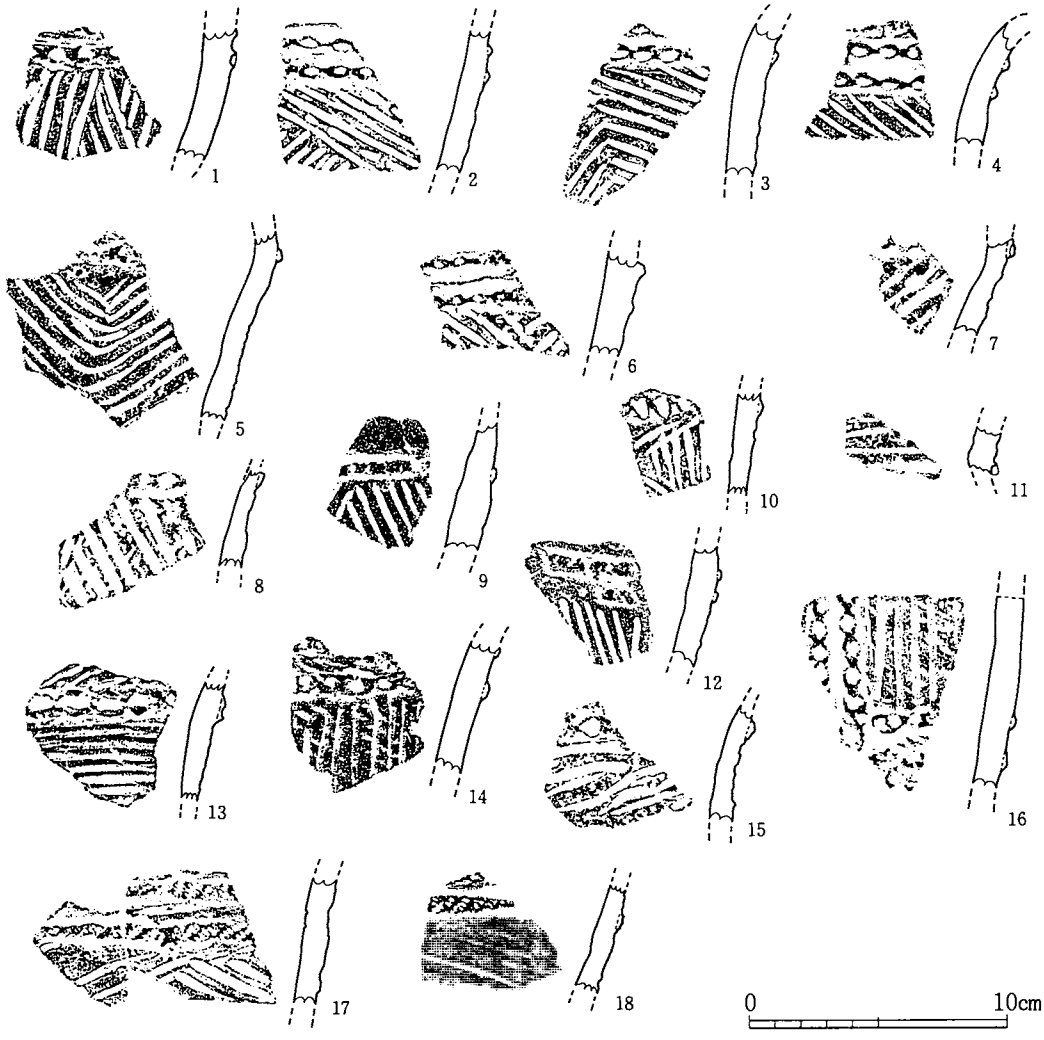
第163図はやや異質のものであるが、沈線と刺突凸帯を持つというこのグループの定義に当てはまるので、仮にここに分類をした。復元口径34.6cm、外傾する胴部から、端部で大きく外反する口縁部に続く。口唇部は尖り気味で、口唇端部には刺突文がある。口縁端部よりやや下から横位に三条、刺突のある凸帯を巡らせている。口唇端部と口縁部の一段目の凸帯に施されている刺突文は、先端が二叉の施文具を用いている。凸帯より下は、鋭利なヘラ状工具で、外器面全体に深く曲線と直線を描いている。地文が施されているようであるが、断定はできない。



第160図　土器実測図



第161図　土器実測図

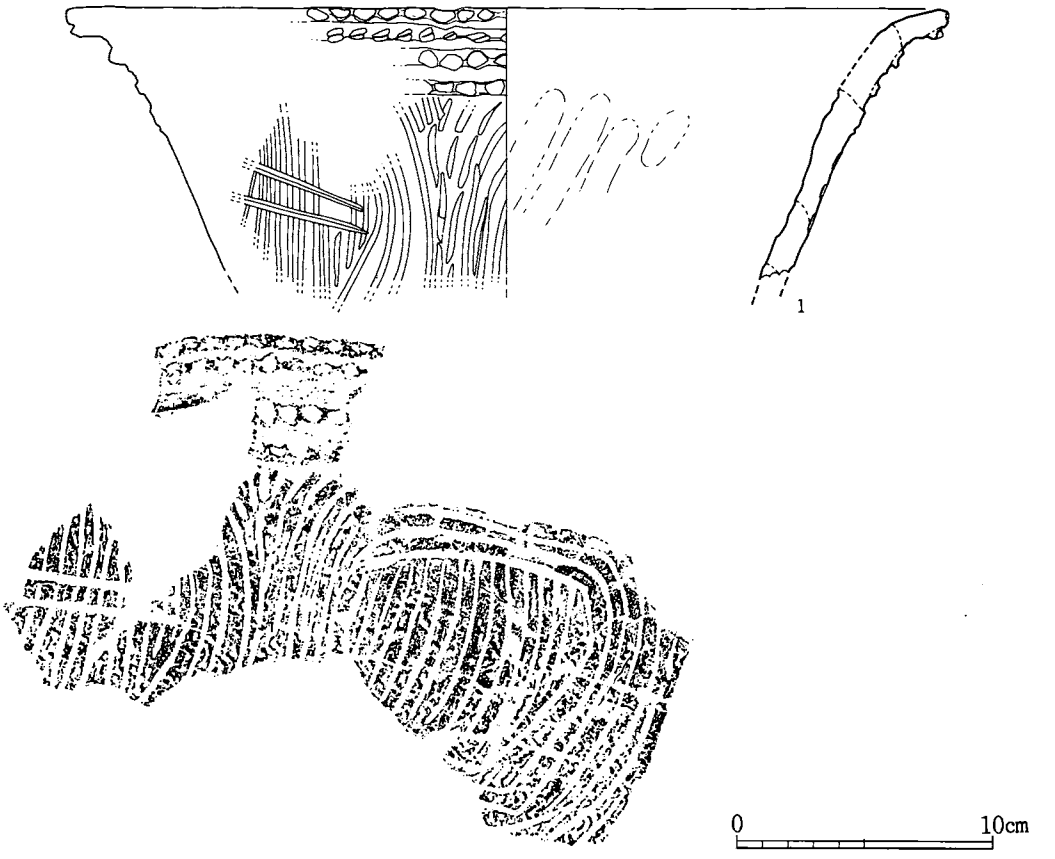


第162図　土器実測図

Ⅴ－1－f類（第164図）

太めの沈線を施すもので、すべて直行気味の胴部片である。口縁部の形態はわからないが、沈線と凸帯を持つⅤ－1－e類の凸帯のない胴部の部分ではないかと思われる。

器壁の厚さは1cm前後である。施文具は先端の丸い棒状工具で、外器面にやや幅広の沈線文を描いている。文様には平行直線を組み合わせるもの（1～11・20～22）、平行曲線を描くもの（12～18）、刺突文を持つもの（16・18）、短沈線文を持つもの（17）等、いくつものパターンがある。16はほとんど剝落しているが、小さなつまみだし凸帯があったかもしれない。また、20は縄文の、21は撚糸文の地文を持っておりそれぞれⅤ－1－c類、Ⅴ－1－d類に対応する可能性があり、22も原体はわからないが地文がある。19は他と異なり、器壁がやや薄く胎土が砂質で、器面の摩耗が著しい。二本の平行直線の間に連点を刺突する文様が、外器面に斜めに



第163図　土器実測図

走っている。分布状況はV－1－e類と似ているが、範囲はやや広がる。

VI－1類（第165図）

47個体出土しており、遺構からの出土はない。

口縁部は大きく外へ開き、胴部はバケツ型となろう。7はやや外反気味で波状を呈する可能性もある。やや器壁の厚いものが多く、黒っぽい色調を呈している。

口唇部は貝殻腹縁による刺突を持つものが多く、口縁から頸部にかけては、貝殻腹縁による平行押引文を横位に数条施している。胴部には外器面に貝殻によると思われる条痕が残っており、その上に、6は四本単位の細い沈線を横位と斜位に、7・10・17は二本単位あるいは先割れの施文具による斜位の沈線を施している。内器面は粗く削り様に調整されており、口縁部のみその後ナデられている。

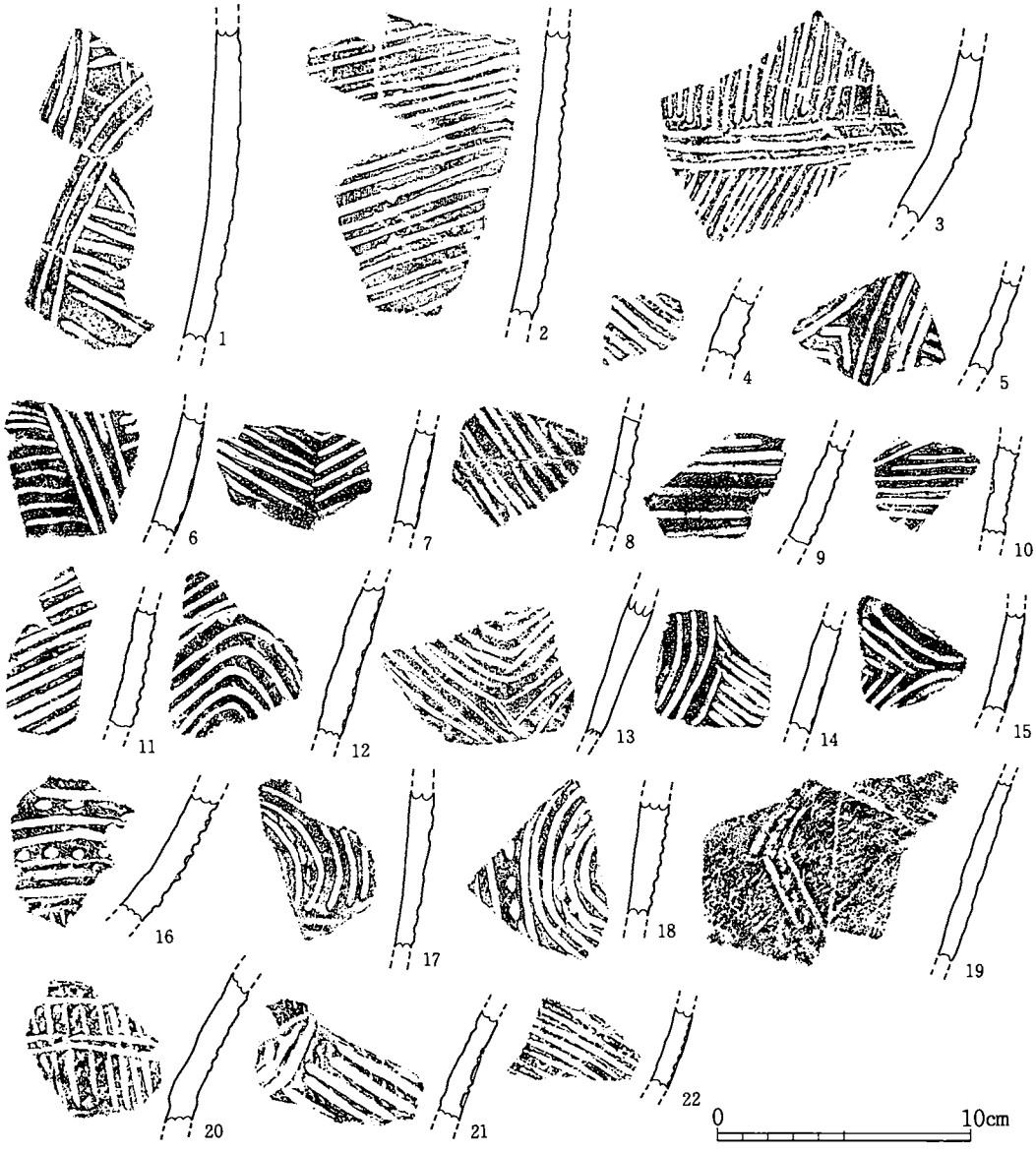
III区北東端から集中して出土している。

VII－1類（第166図・第167図）

177個体出土しており、うち、遺構から8個体出土している。

すべて破片である。口縁部は、ラッパ状に開き、頸部で屈曲し、バケツ状の胴部に続く器形を呈すと推察される。17のように口縁が二段に屈曲して開くものもあるようである。底部は平底か、やや上げ底気味になるようである。丁寧にナデ調整され、器壁は薄めで、焼成も良い。

第166図1～11・17は、口縁部から頸部にかけての破片である。うち1～7は口唇部には羽状、あるいは斜めに刻目を施し、口縁部外器面には、棒状の施文具で2～3本を単位とした沈線を横位に巡らしている。8・9は単位沈線の代わりに網目撚糸文を帯状に8は横位に、9は縦位に施している。この網目撚糸文は、Ⅳ類のものとは異なり、原体幅は1～2cm程度で、網の目



第164図　土器実測図

も詰まっている。10・11は、口縁部から頸部にかけて細い刻目凸帯を2～3本単位で横位に貼付け、単位凸帯間に3～4本単位の沈線を斜位に施している。

第166図12～25、第167図1～7は頸部片、第167図8～10は胴部片、11～18は底部片である。頸部屈曲部には、細い刻目凸帯を巡らすものが多く、第166図17は、屈曲部直下に、口縁部と同様に数本単位の刻目凸帯を巡らせている。胴部はこの類に特徴的な網目撚糸文を縦方向に帯状に施文した後、数本単位の沈線を横方向に巡らせている。第167図9・13は同一個体であるが、沈線は胴部上方では5本、底部近くでは8本の単位となっている。単位沈線は第167図5のように線の端部同士がつながり、半弧を描くものもある。網目撚糸文は底部まで施文されている。

III・IV区北側斜面とIV区西側斜面からの出土が多い。

その他の土器（第169図）

1～6は口唇部に刻目を持つ口縁部片である。

1は口縁部は内湾し、口唇端部は内傾して平坦である。口唇部の外器面側端部には斜方向に刻目が施され、口唇平坦部から内器面側端部にかけて、短沈線と刻目が施されている。外器面には調整痕とも思われる横方向の浅くて粗い沈線が走っている。

2は外傾する口縁部で口唇部に羽状の刻目が施されている。外器面は浅い沈線が横位に数本見られるが、調整痕の可能性もある。

3・4は同一個体と思われる。外傾してやや内湾気味の口縁部片で口縁端部は尖っており、細い棒状工具により斜め方向に刻目が施されている。外器面の口縁端部より1.8cm程度下に浅い刺突文を横方向に並べている。胎土はやや砂質である。

5・6は口縁部は外反し、「く」の字形に屈曲して胴部に続いている。口唇部は平坦で斜位に刻み目が施されている。

7はやや外反する口縁部から胴部にかけてのかなり大きな破片である。胎土に砂粒が多く、器面の調整は粗く、器面は凸凹している。外器面は粗く斜方向に沈線を施している。施文に規則性は見られない。沈線の下端部に横位に押引文を四条施文して、口縁部と胴部を区分している。塞ノ神系統の土器であろうが、他に類例は出土していない。

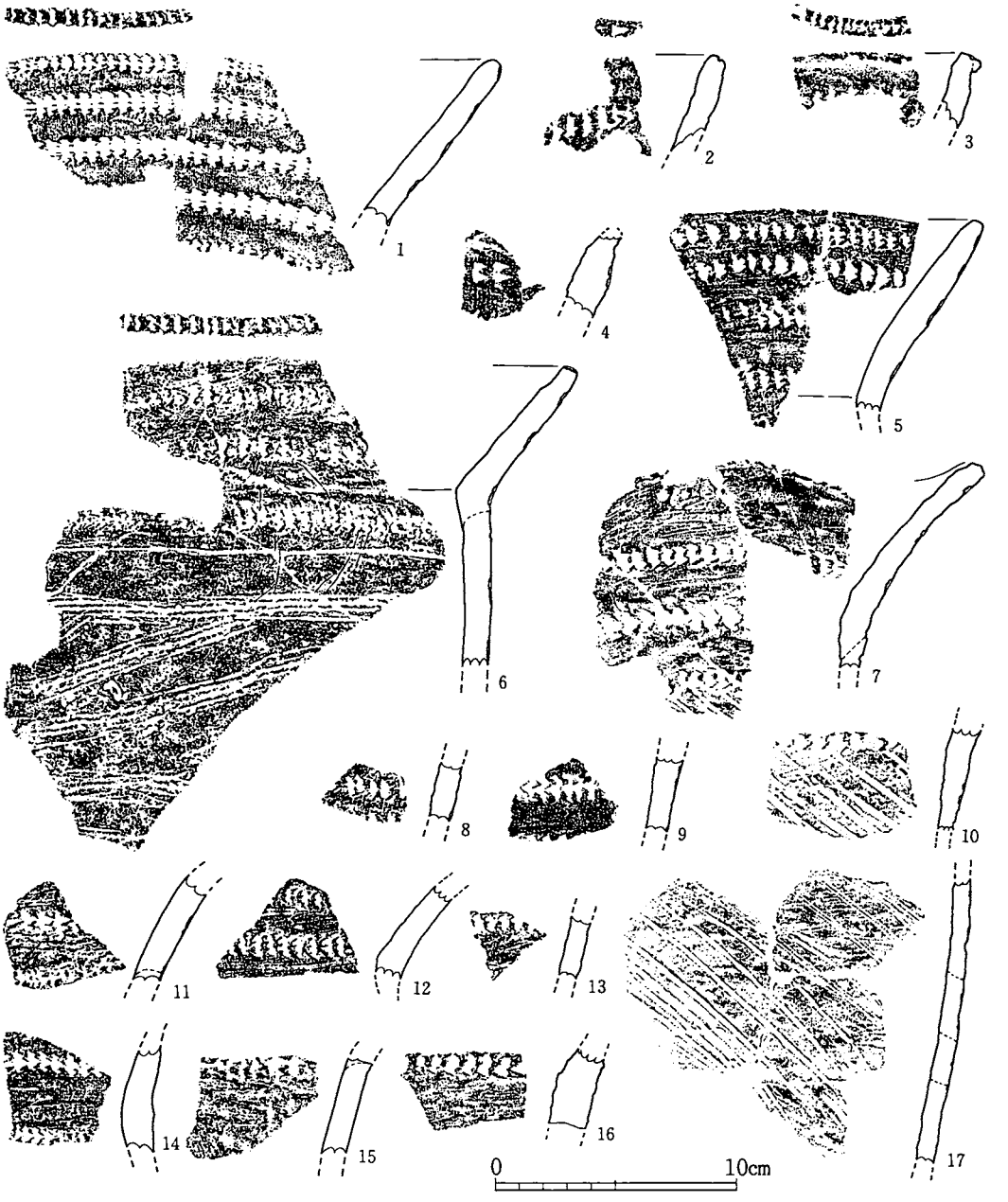
8は胴部片である。外器面には粗い沈線と縄文らしき施文がみられ、内器面は粗いヘラ調整であるが小破片であるため詳細は不明。

底部（第170図）

無文の底部であり、分類ができなかったものである。

1は厚手で尖り気味の底部である。大粒の白色粒を胎土に含んでいる。

2～15は上げ底で、大きく外へ開く胴部に続く底部である。復元底径は2は8.2cm、6は4.9cmでばらつきがあるが、他は5.5～6.5cm程度のものが多い。底部の粘土円盤外面に粘土輪を貼付けて、上げ底の底部を作っている。器壁は1cm未満で薄い。15・16もやや上げ底になると思



第165図　土器実測図

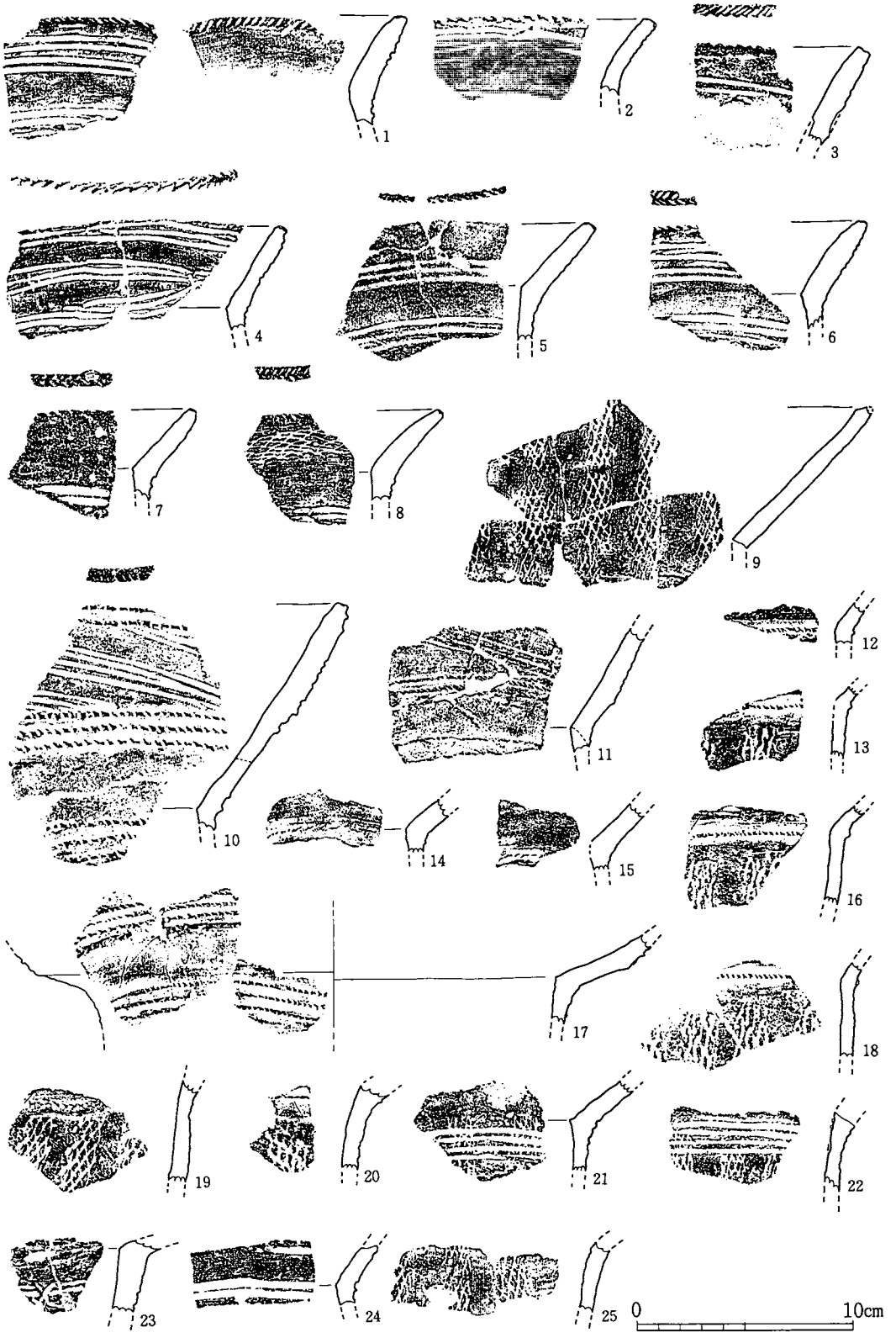
われるが、胴部は直行気味でやや丸く膨らむと思われる。

18・19は平底で、19は底径が小さく、器壁は厚い。20は若干上げ底になり、底部は厚い。胴部はやや外反して立ち上がっている。

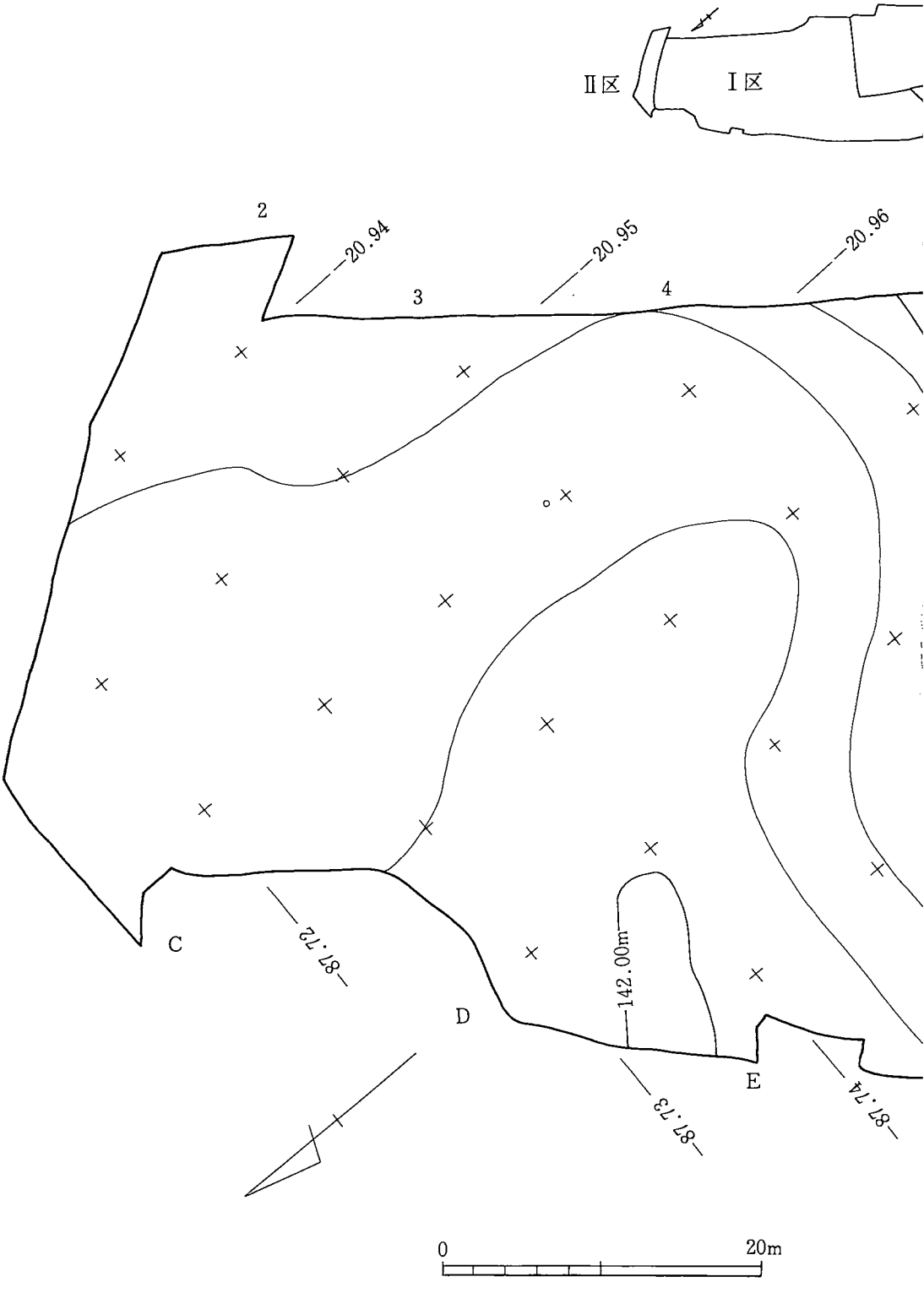
2～17は第IV類の底部であると思われる。

⑵石器について

V層・VI層より出土した石器は次の通りである。石鏃（55点）・石匙（14点）・スクレイパー

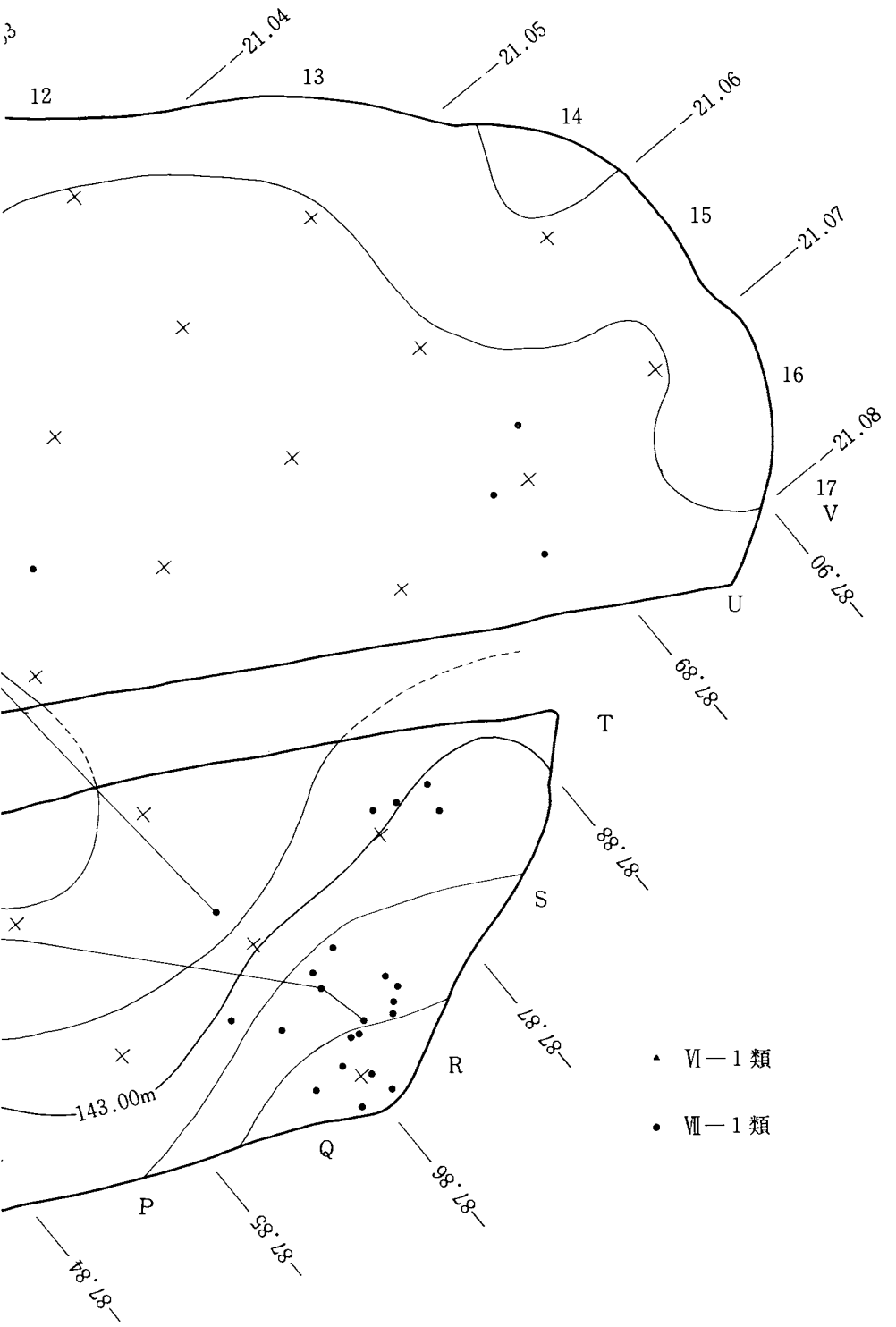


第166図　土器実測図

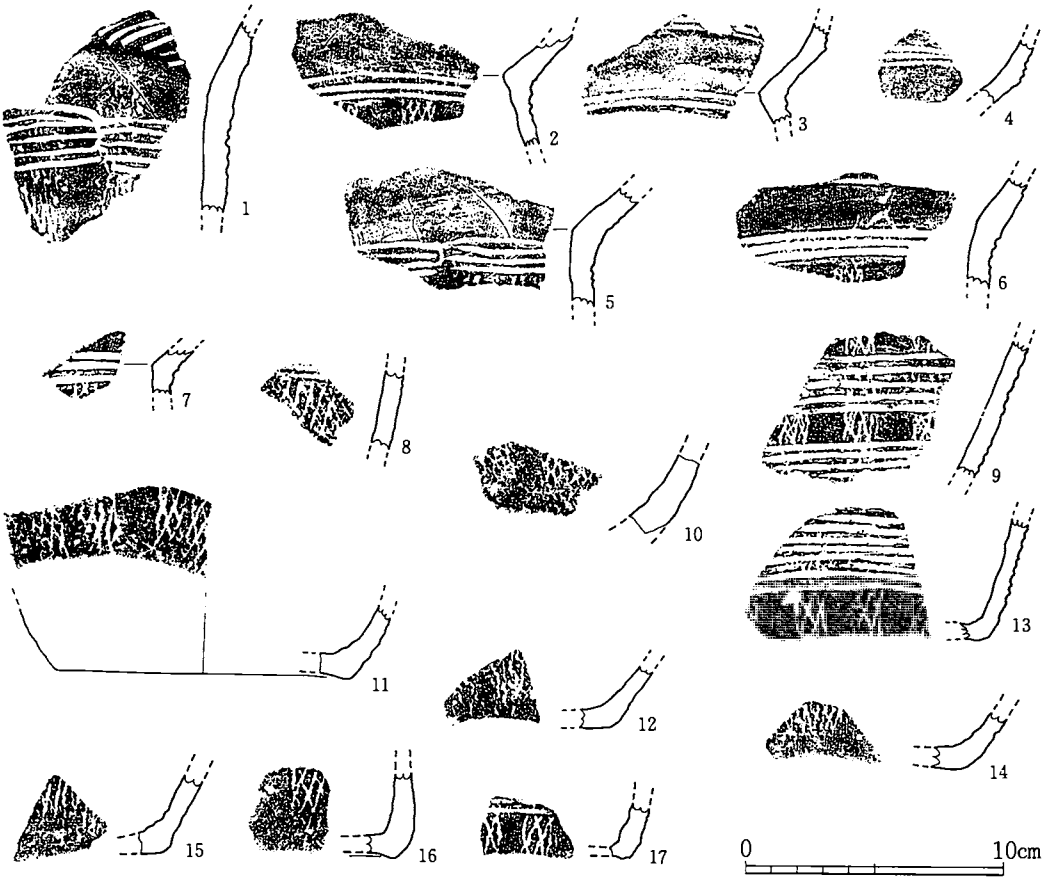

Ⅱ区
Ⅰ区
2
20.94
20.95
20.96
3
4
C
87.72
D
142.00m
87.73
E
87.74
0
20m

Ⅲ区
Ⅳ区
20.98
20.99
8
7
20.97
6
5
143.00m
144.00m
145.00m
F
87.75
G
87.76
H
87.77
I
87.78
J

21.00
21.01
21.02
9
10
11
144.00m
145.00m
K
L
M
N
O
87.79
87.80
87.81
87.82
87.83



第167図　Ⅴ層・Ⅵ層出土土器分布図



第168図　土器実測図

（22点）・磨製石斧（５点）・磨石類（126点）・敲石（37点）・石皿（47点）・礫器（16点）・ペッティングストーン（２点）・異形石器（３点）・石錘（１点）・石錐（２点）・円盤状石器（１点）・石核（19点）・二次加工剥片（53点）・使用痕のある剥片（72点）・剥片及び破片（3029点）・自然石（391点）が出土した。

石鏃

分布状況（第173図）　石鏃はⅠ区～Ⅳ区の各区に分布しており、散在状態を呈する。

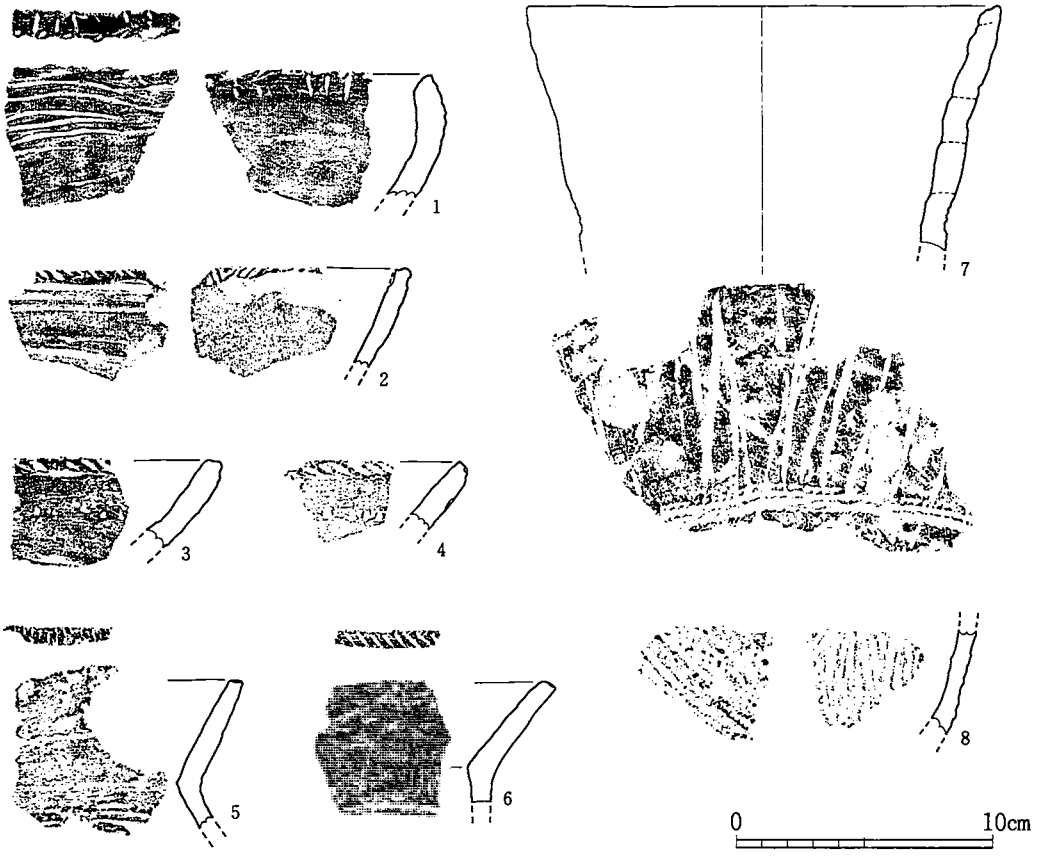
出土した石鏃はⅠ類－平基無茎鏃、Ⅱ類－凹基無茎鏃に分類した。Ⅱ類は平面形でＡ・Ｂに細分した。

Ⅰ類（第171図）

Ⅰ類の石鏃は４点出土した。１・２の平面形は二等辺三角形を呈する。２は調整剥離が縁辺部におこなわれ、主要剥離面が広く残っている。

Ⅱ－Ａ類（第171図）

Ⅱ－Ａ類は平面形が正三角形を呈するもので、９点が出土した。３～７がⅡ類の石鏃である。



第169図　土器実測図

3・4・6は小型品で、抉り込みが深い。3・4は基部の開きが大きい。5のえぐりこみは深いが、7のえぐりこみはやや浅い。

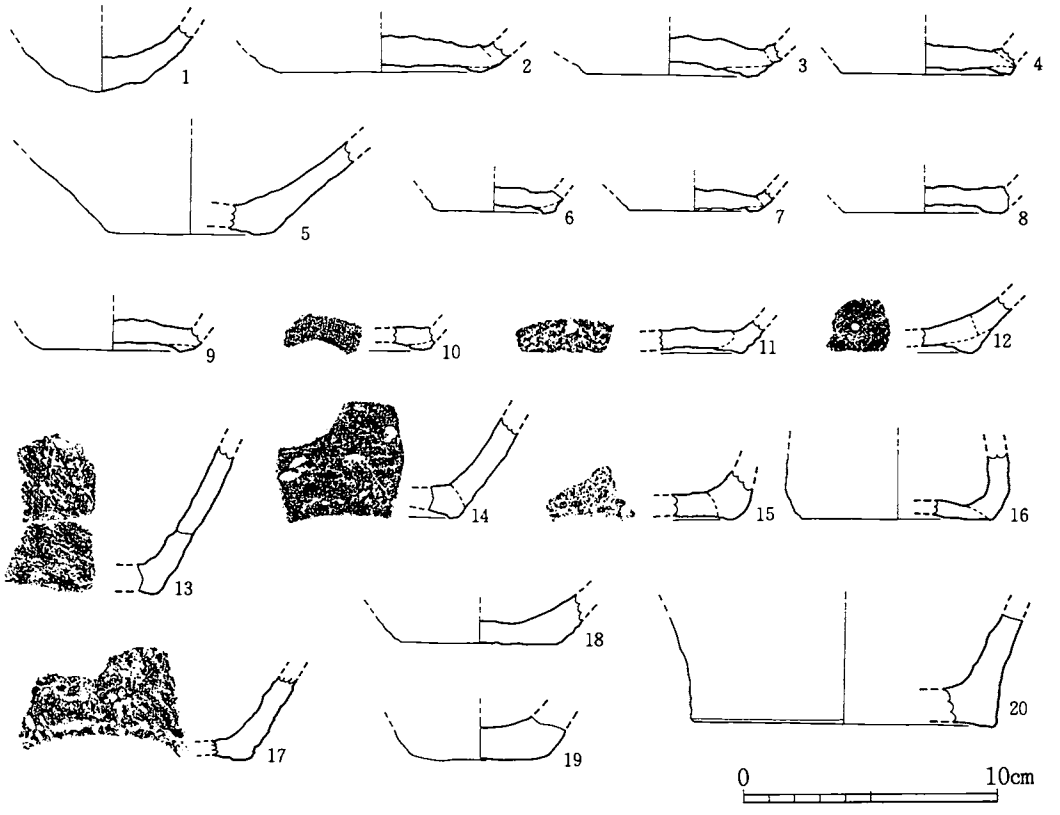
II－B類－1（第171図）

II－B類－1は平面形が幅広い二等辺三角形を呈するもので、15点が出土している。8～13がII－B類－1の石鏃である。8・9・11の抉り込みは浅く、外に開いた「V」字状をしている。10は深い抉り込みをもつ、いわゆる鍬形鏃である。12・13は抉り込みが深く、12が「V」字状、13が「U」字状を呈している。

II－B類－2（第171図・第172図）

II－B類－2は平面形が細身の二等辺三角形を呈するもので、19点が出土している。第171図14・第172図1～8がII－B類－2の石鏃である。14・1・2は抉り込みが深く、基部が外方に開く。3は抉り込みがやや浅く、基部が内側に丸くなる。4～8は長身の石鏃である。いずれも抉り込みが深く、4・7は「U」字形、5・6・8は「V」字形を呈する。

以上述べた他に、分類不可能なものが8点出土している。



第170図　土器実測図

石鏃の欠損状況をａ～ｇに分けて見たのが第６表である。ａは完形のもの(25点)、ｂは先端部が欠損したもの（２点)、ｃは先端部から体部にかけての部分が欠損したもの（２点)、ｄは基部が欠損したもの（15点)、ｅは先端部と基部が欠損したもの（４点)、ｆは基部と先端部から体部にかけての部分が欠損したもの（３点)、ｇはその他の部分が欠損したもの（６点）である。完形のものが約半数を占める。欠損したものの中では、基部欠損（ｄ）のものが最も多く、半数以上になる。

石匙

分布状況（第173図）　石匙の多くはＩ区の北東部からII区にかけて分布している。その他はＩ区南端部からIII区の北端部にかけての箇所とIV区に散在状態を呈して分布している。

石匙はつまみ部と体部の位置関係で、Ｉ類～III類に分類した。

Ｉ類（第174図・第175図）

Ｉ類の石匙はつまみ部と体部の主軸が平行するもので、７点が出土した。Ｉ類に属するものは第174図３～６、第175図１である。３は欠損しており刃部が不明である。４は右側面を両面より調整加工して刃部を作り出しており、体部の下半分が欠損している。つまみ部の表裏面に

は自然面が残る。5は右側面が欠損しているが、両側面が刃部になると思われる。側面には表裏面からの調整加工がある。6は左右側面を両面より調整剝離して刃部としている。つまみ部の抉り込みは浅い。1は体部の平面形が二等辺三角形を呈し、縁辺部の両面より調整加工を施して刃部を作り出している。

II類（第174図・第175図）

II類はつまみ部と体部の主軸が直交するもので、3点が出土した。第174図1・2、第175図2がII類の石匙である。1の体部の平面形は凸レンズ状になり、左端部が欠損している。調整剝離は縁辺部より行っている。第174図2は体部が欠損しているが、1と同様な平面形になると思われる。第175図2は体部の平面形が正三角形を呈する。縁辺部の両面より調整加工を加えて刃部を形成している。

III類（第175図）

III類はつまみ部と体部の主軸が斜交するもので、4点が出土した。3・4がIII類の石匙である。両方ともつまみ部を作り出すために、左右より抉り込んでおり、体部の右端部が欠損している。3は縁辺部の両面より調整加工を行い刃部を作っている。4は縁辺部の片面からの調整加工によって刃部を形成している。

スクレイパー（第176図・第177図）

分布状況（第173図）　I区の北側寄りの中央部にスクレイパーの多くが分布している。その他はII区～III区に少数が点在する。

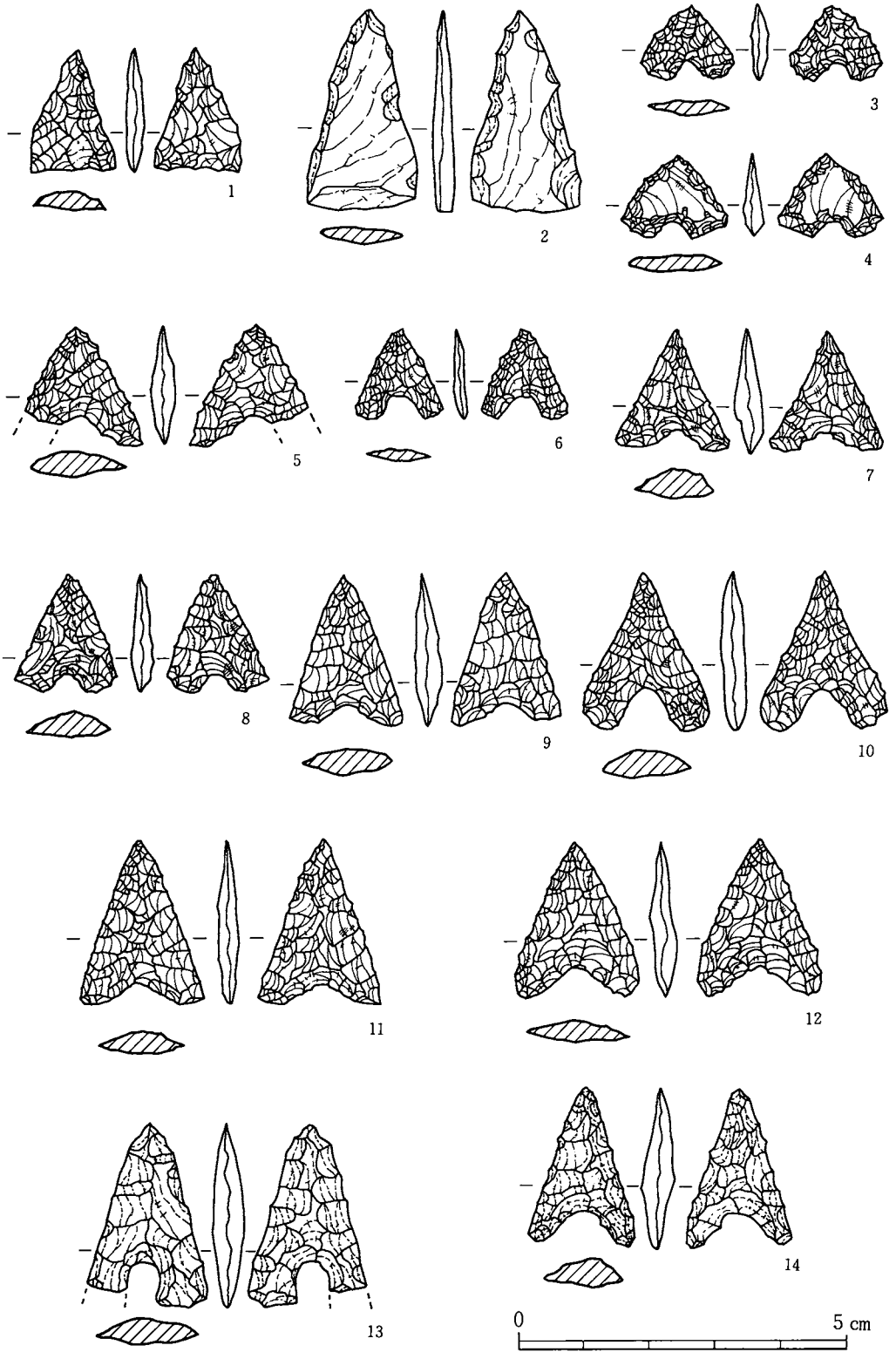
第176図1～7は縦長剝片を素材にしたもので、側面の片方か両方を刃部とする。欠損品は残存部で判断すると、両側面に刃部をもつものが2・6・7、側面片側に刃部をもつものが1・3～5である。2の右側面と6の左側面は表裏両面より調整加工を施している。2の左側面、6の右側面、7の両側面は片面からの調整加工を行っている。1・4の調整加工は片面から、3・5の調整加工は両面から行っている。3～5・7には自然面が残っている。

第177図1～5は横長剝片を素材にしたものである。1・4・5は下端部に刃部をもつ。1の調整加工は主に表面から行い、補助的に裏面からも行っている。4は表裏両面より調整加工を施している。5の調整加工は片面から行っている。2・3は下端部が尖っており、そこから両側面が斜め上方にのびている。刃部はその下端部から側面にかけての箇所にある。2の調整加工は片面から行っている。3は右側面が両面より、左側面が片面より調整加工を施している。1・5には自然面が残っている。

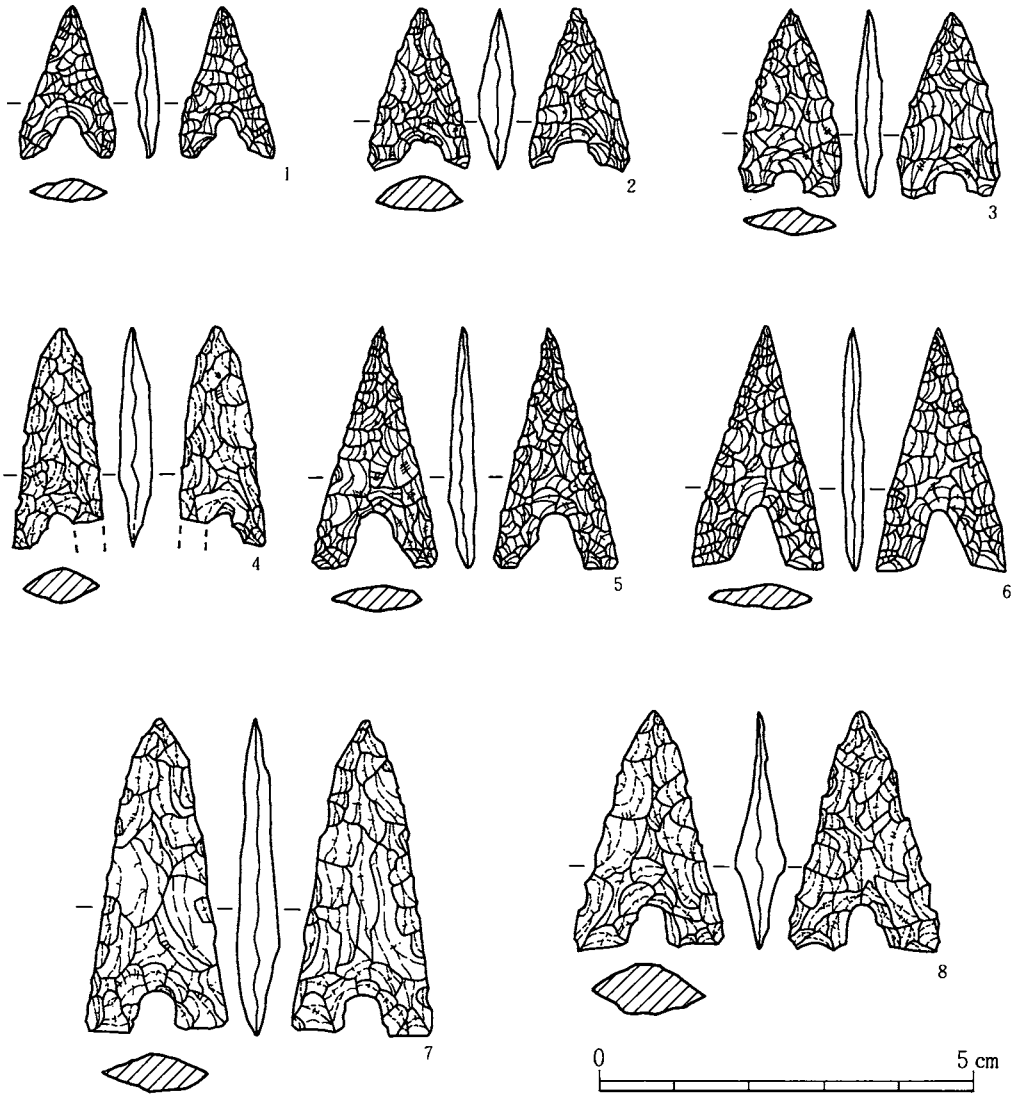
石錐（第178図）

分布状況（第173図）　石錐はIV区のS－17、U－15グリッドより出土した。

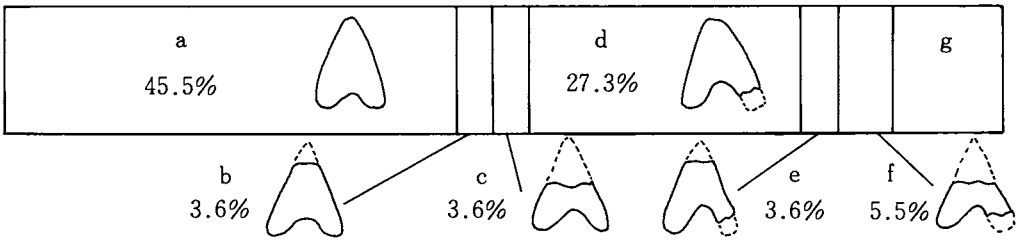
1・2が石錐である。1は縦長剝片を素材にしたもので、上端部が左右に僅かに突出している。縁辺部には両面からの調整加工がある。錐部は断面形が三角形を呈し、先端が欠損してい



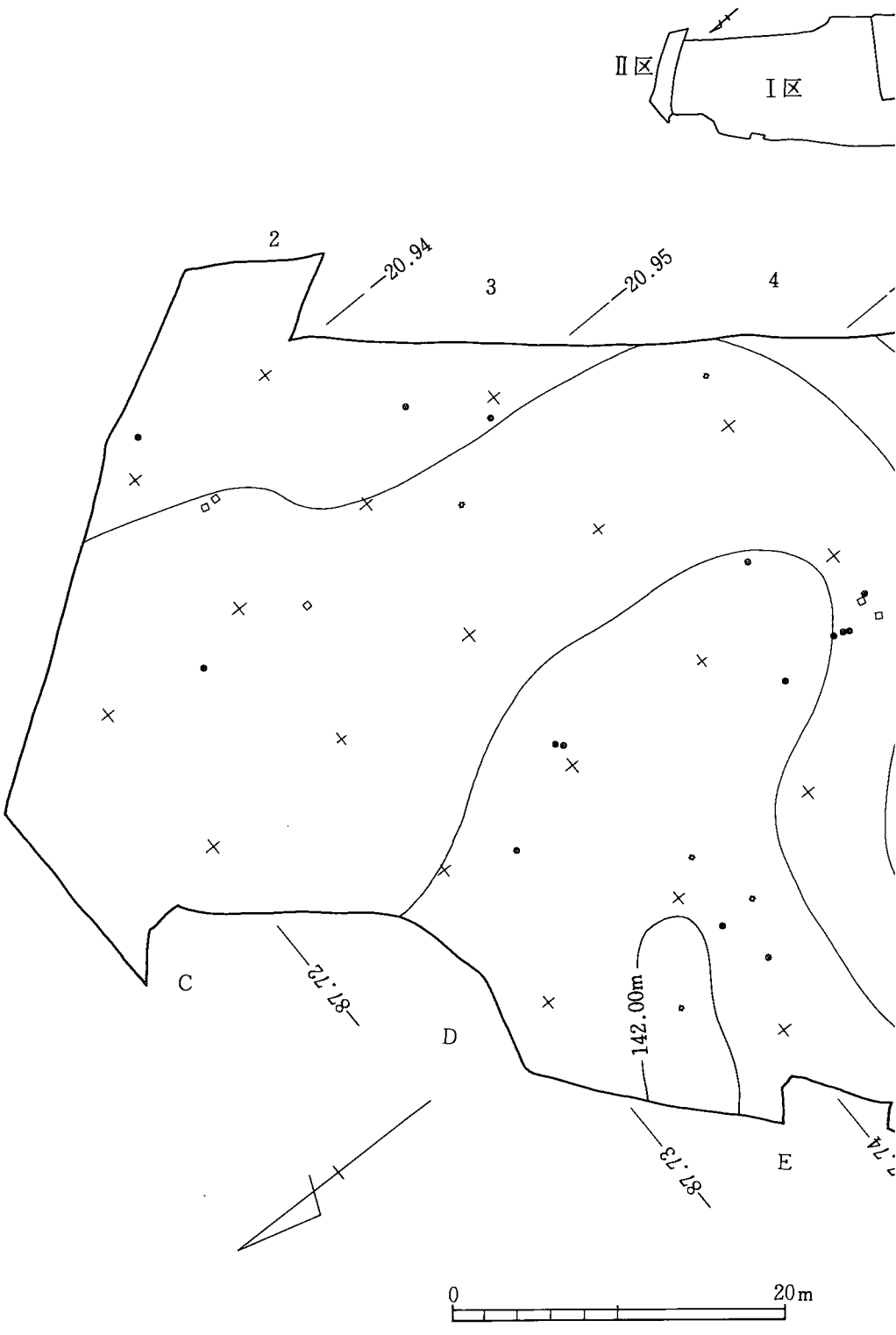
第171図　石器実測図

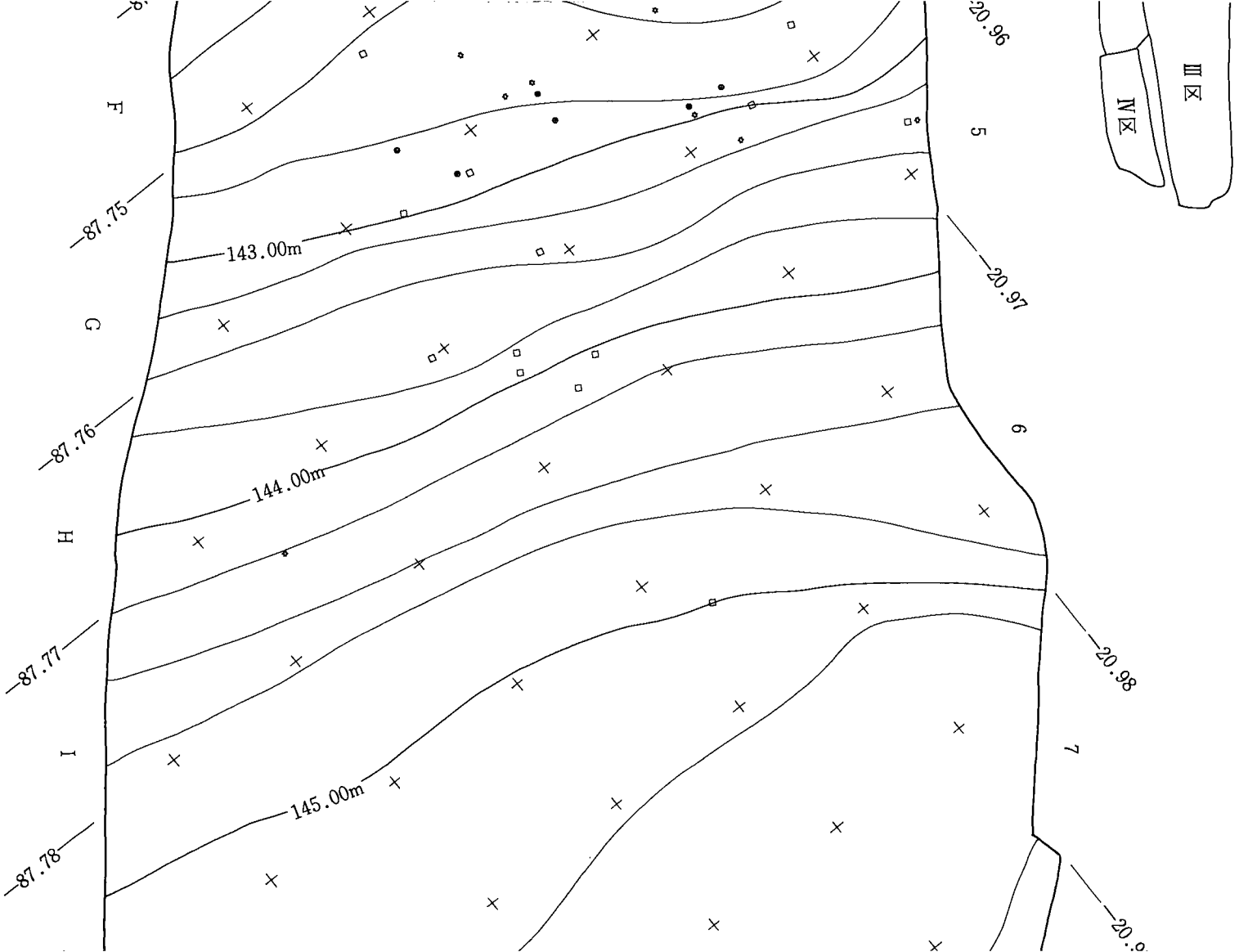


第172図　石器実測図

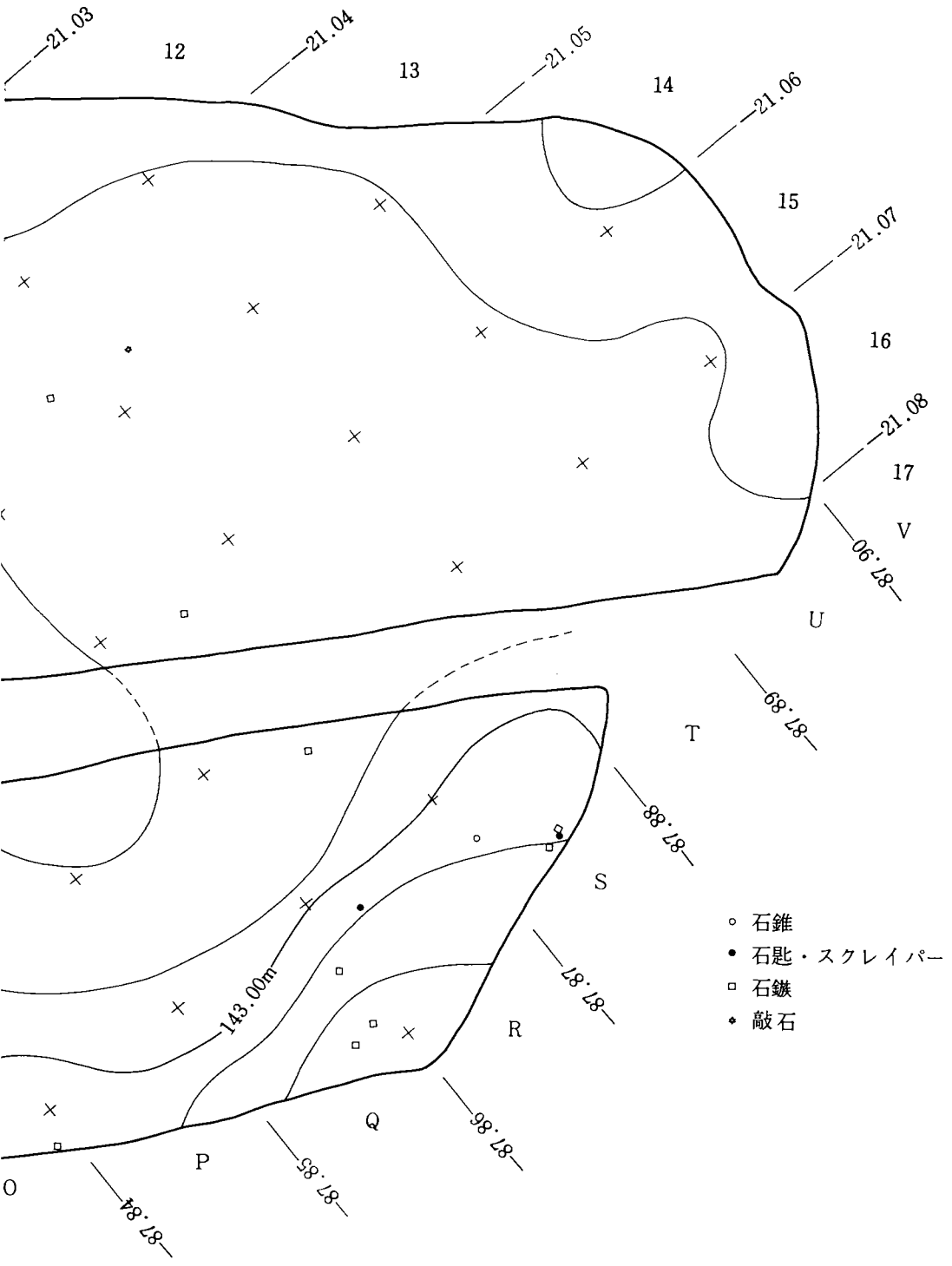


第 6 表　石鏃欠損状況

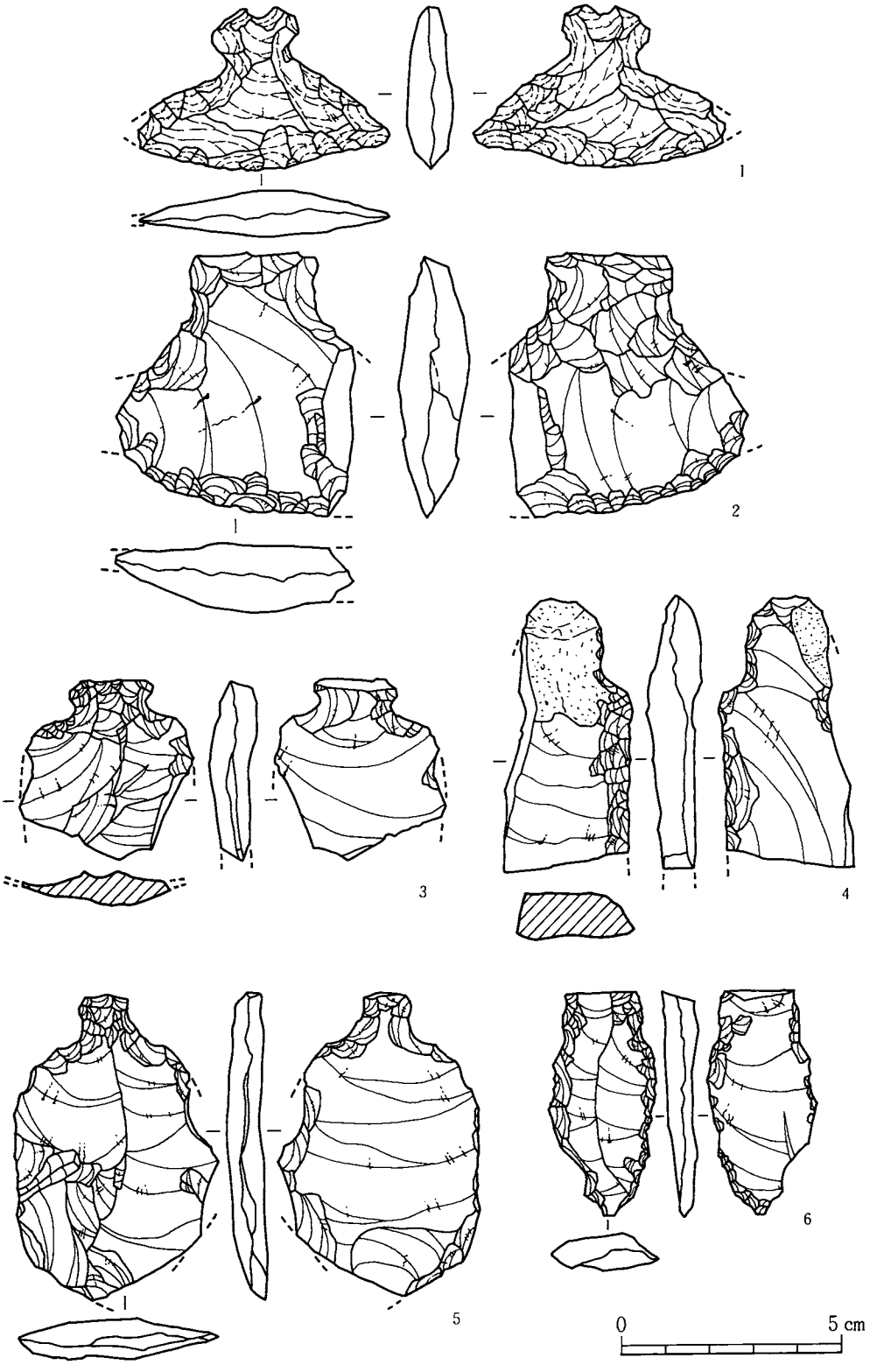

Ⅱ区
Ⅰ区
2
3
4
20.94
20.95
C
D
E
87.72
87.73
142.00m
0
20m


F
G
H
I
5
6
7
87.75
87.76
87.77
87.78
143.00m
144.00m
145.00m
20.96
20.97
20.98
Ⅲ区
Ⅳ区

8
21.00
9
21.01
10
21.02
11
144.00m
145.00m
87.79
K
87.80
L
87.81
M
87.82
N
87.83



第173図Ⅴ層・Ⅵ層出土石器分布図



第174図　石器実測図

る。2は欠損しており、体部が略四角形を呈すると思われる。四角形の一角が細長くのびて錐部になり、三角形の断面形をもつ。縦長剝片を素材にし、四角形の二辺を主に表面より、補助的に裏面より調整加工を施している。

ペッティングストーン（第178図）

分布状況（第184図）　ペッティングストーンはＩ区のＨ－５・７グリッドより出土した。

3は隅丸方形、5は楕円形を呈する。両者とも表裏面・縁辺部が磨滅している。

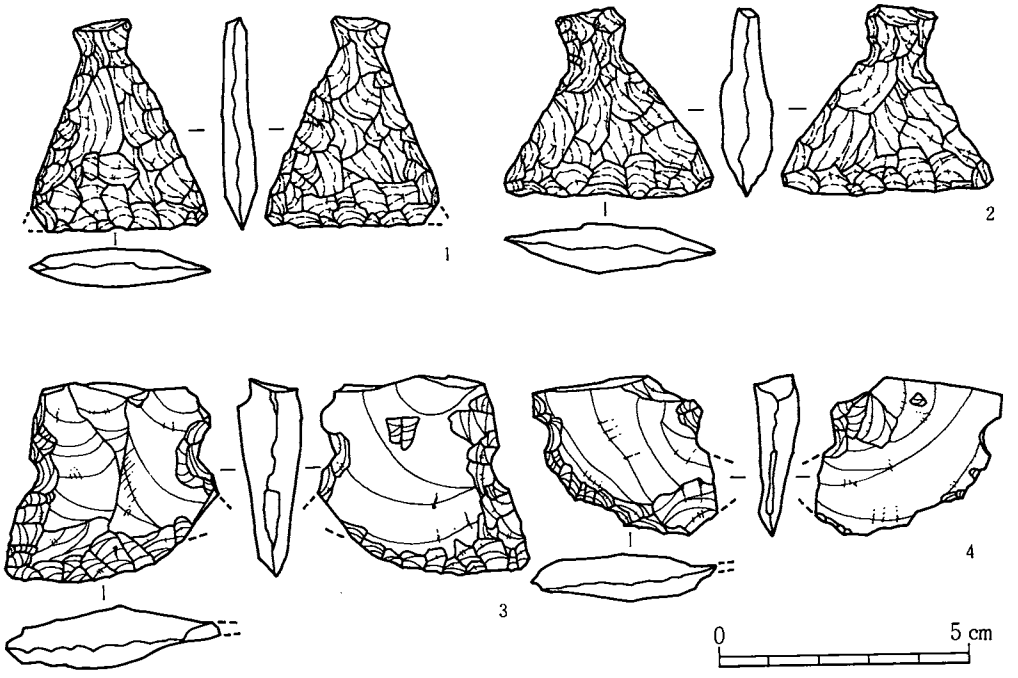
異形石器（第178図）

分布状況（第184図）　異形石器はＩ区のＨ－７、Ｉ－７とIII区のＱ－10グリッドより出土した。

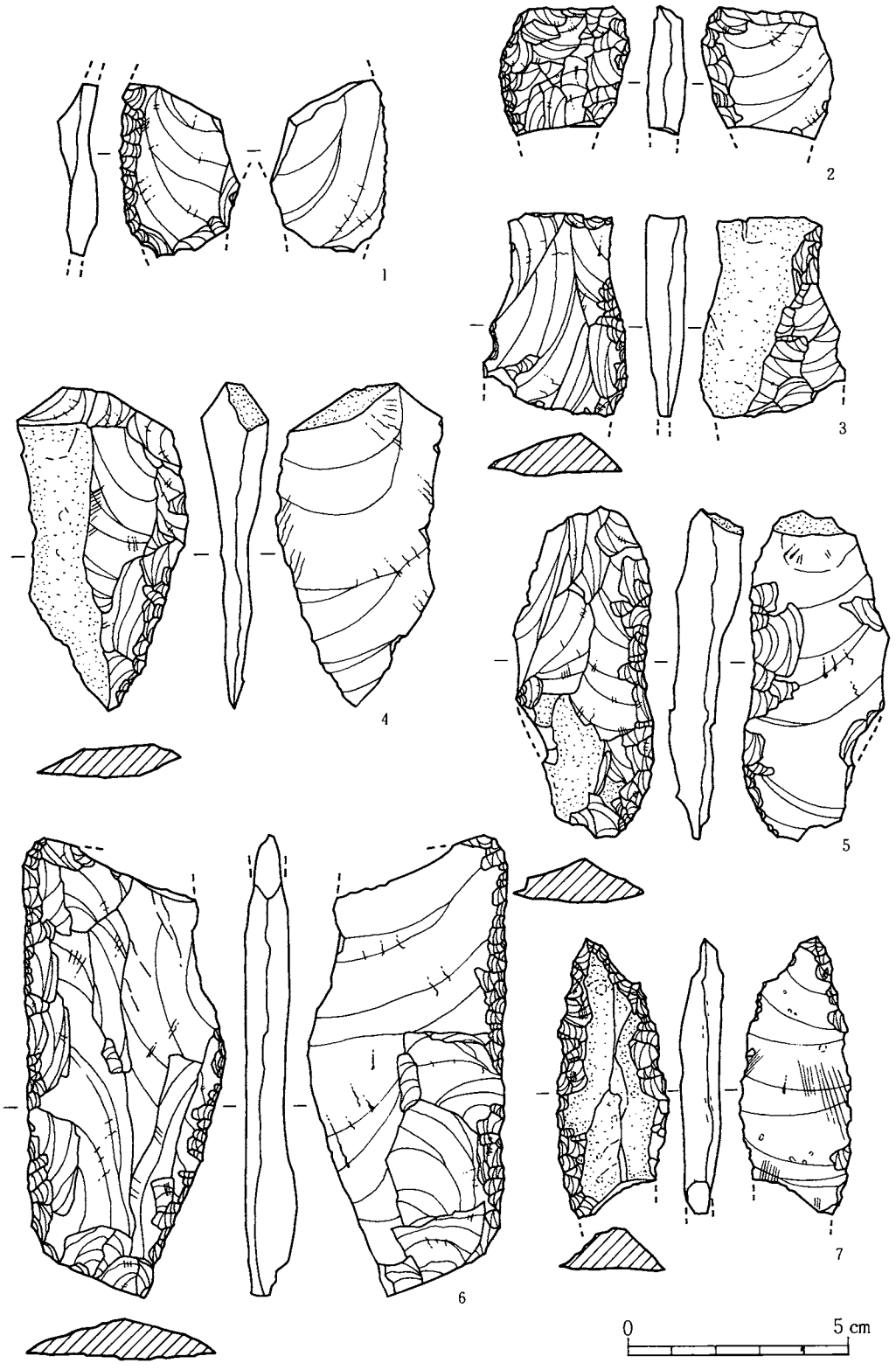
4は上端付近が左右より抉り込まれており、下端には斜め外方に開く二脚がある。6は上端に斜め上方にひらいた短い突起が二つあり、全体形は「Ｙ」字形に近い。体部の左右側面は弓状に丸くなる。7の体部中央には左右側面からの抉り込みがある。その抉り込みより上位は三角形の平面形を呈し、下端部はほぼ平らになる。

磨製石斧（第179図）

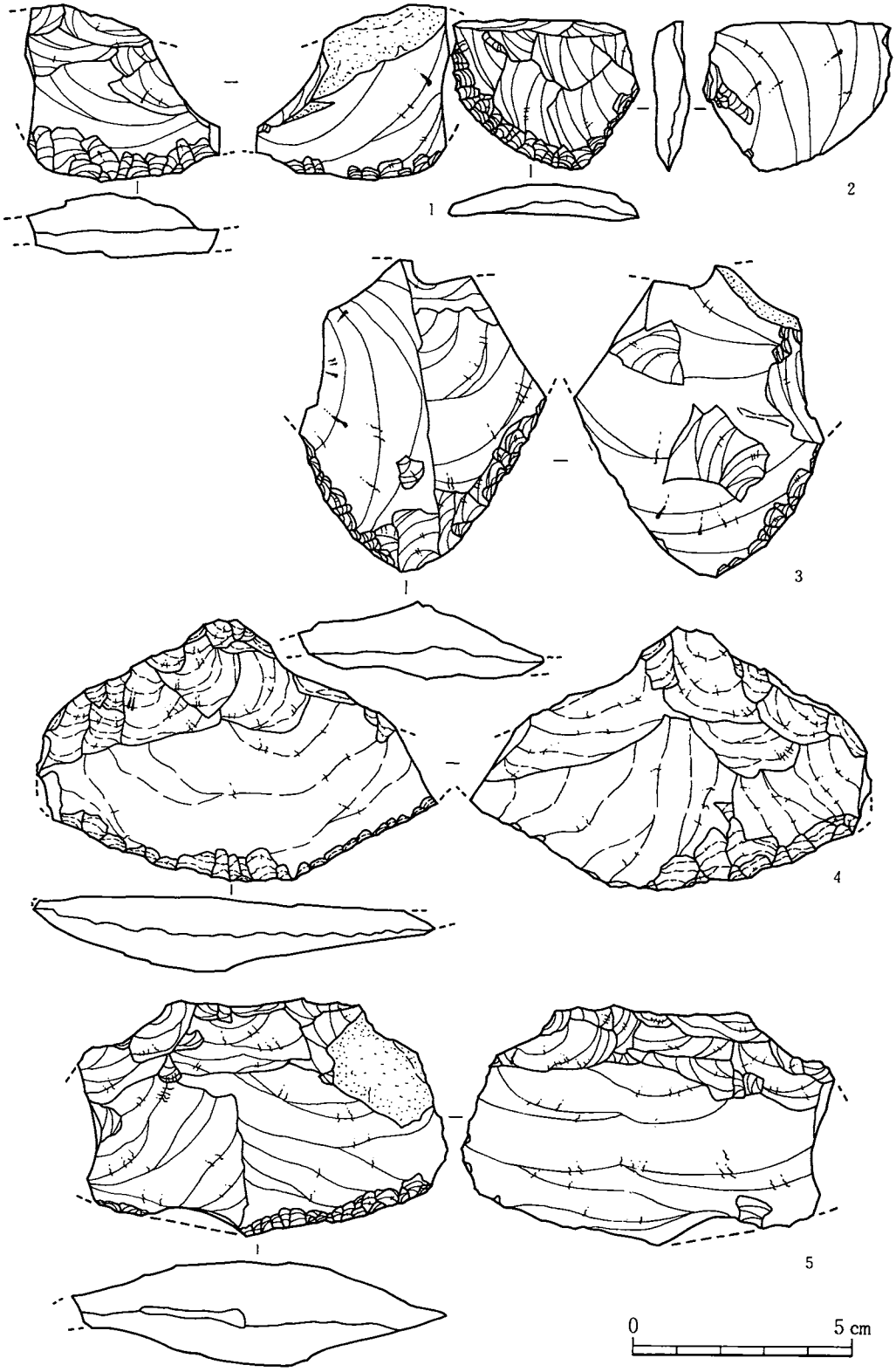
分布状況（第184図）　磨製石斧はＩ区のＦ－３、Ｇ－５グリッドとIII区のＮ－11グリッドより出土した。



第175図　石器実測図



第176図　石器実測図



第177図　石器実測図

1・5は小型で細身の製品である。5は短冊形に近い平面形を呈する。1の平面形は体部中央部の幅が最も広く、刃部・基端部の幅が狭くなる。両者は調整剝離面をのこして、刃部を中心に磨研した局部磨製の石斧である。刃部は直刃・両刃（平面形・断面形）である。2・3は欠損品であるため、磨研が全面に及ぶか局部的なものかは不明である。刃部は2が直刃・両刃で、3が円刃・両刃である。

円盤状石器（第179図）

分布状況（第184図）　円盤状石器はIII区のM－12グリッドより出土した。

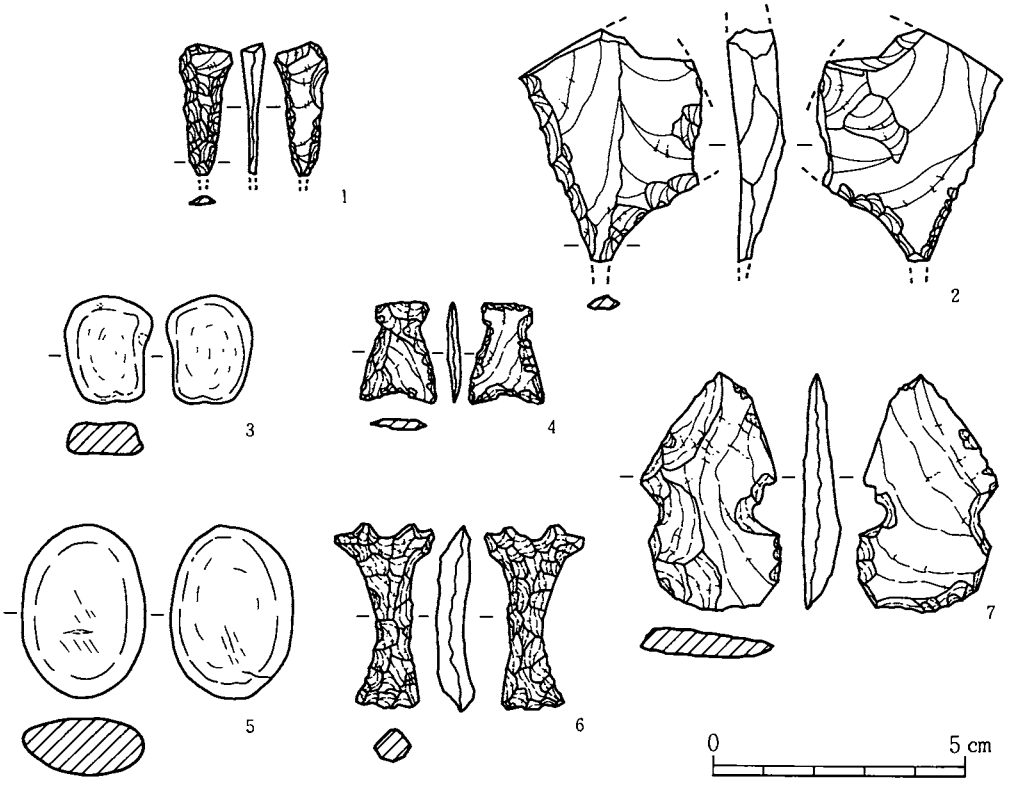
4は小型の円盤状石器である。縁辺部より剝離を行い調整を行っている。裏面には自然面が残っている。

これに類似するものが層序横転部分より1点出土した。

石錘（第179図）

分布状況（第184図）　石錘はI区のG－5グリッドより出土した。

6は楕円形の平面形を呈し、長軸・短軸のそれぞれの両端を打ち欠いた礫石錘である。主に表面より加工を行っている。上端の縁辺部には敲打痕がある。



第178図　石器実測図

二次加工剥片（第180図）

分布状況（第184図）　二次加工剥片はＩ区～IV区に散在状態を呈して分布している。

１～４は縦長剥片を素材にした二次加工剥片である。側縁部に二次加工が施されている。加工は表裏両面から行うものが多いが、片面からのものもある。断面形を見ると、２・３が三角形、１が台形、４・５が略長方形を呈する。６～10は幅広い剥片を素材にしたもので、側縁部や下端部に二次加工をもつ。二次加工には両面からのものと片面からのものがある。断面形は６～９が三角形、10が台形を呈する。６・９には部分的に自然面が残る。

使用痕のある剥片（第181図）

分布状況（第184図）　使用痕のある剥片はIV区のＲ－16・17グリッドに集中する。それ以外は二次加工剥片と同様にＩ区～IV区に散在状態を呈して分布している。

１・２・５は縦長剥片を素材にした使用痕のある剥片である。側縁部や下端部に使用痕がある。２には自然面が残る。断面形は２・５が三角形、１が台形である。３・４・６～10は幅広い剥片を素材にするものである。６は上端と側縁部の僅かに抉れている箇所に使用痕があり、それ以外は側縁部に使用痕をもつ。断面形を見ると、７が三角形、９が不整四角形、３・６・８・10が凸レンズ状を呈する。９の裏面には自然面が約半分残っている。

石核（第182図）

分布状況（第184図）　石核はＩ区・III区・IV区で出土し、散在状態を呈している。

１・２は縁辺部からの加撃で、幅広い剥片を剥ぎ取ったものである。１が表裏両面、２が片面より剥離を行っている。３は三つの剥離面をもつ。それぞれ主に上方からの加撃で、縦長剥片や幅広い縦長剥片を剥ぎ取っている。４は三角形の断面形をもち、その内の二面を使用して横長剥片を剥ぎ取ったものである。二つの剥離面は両設打面である。

磨石類

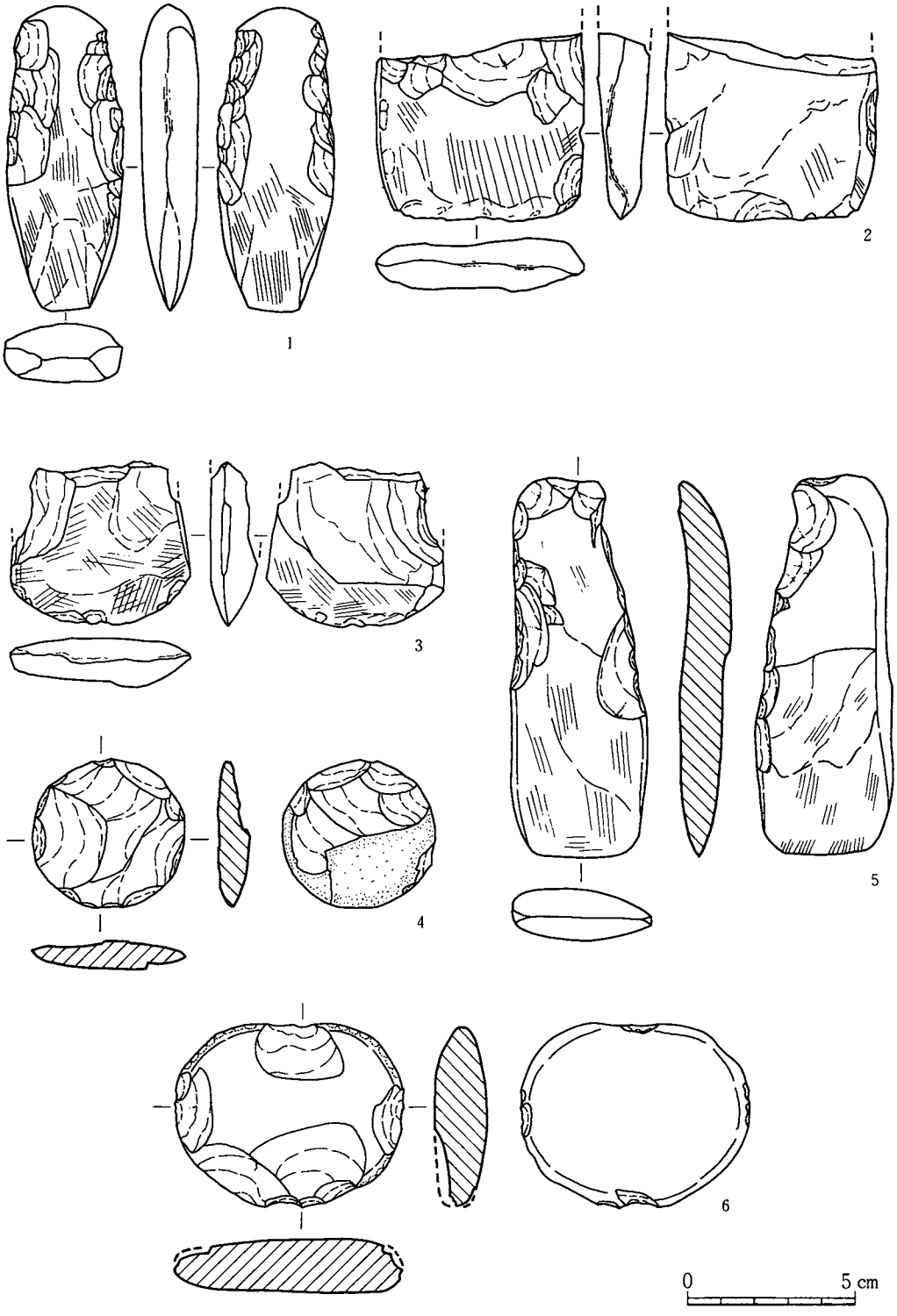
分布状況（第184図）　磨石類は大きく五箇所に分かれて分布している。特に集中しているのはＩ区北端部のＥ－３グリッドである。他の四箇所はIII区・IV区の北端部、III区の南端部、IV区の南端部、Ｉ区の東寄りの中央部である。

磨石類は大きくＩ類・II類の二つに分類できる。Ｉ類は磨痕をもつもの、II類は磨痕と敲打痕をもつものである。分類できるものの中で、Ｉ類は25点、II類は50点を数える。

Ｉ類（第183図・第185図）

Ｉ類の磨石類は第183図１～７、第185図１・２・５・６である。これらは円形や楕円形の平面形をしている。断面形を見ると、第183図５が偏平な楕円形である以外はふくらみをもつ楕円形を呈する。第183図７は片面に磨痕がある。第183図５・６は片面と縁辺部に磨痕をもつ。これら以外は表裏両面に磨痕があり、第185図５・６は側面にも磨痕がある。

II類（第185図～第190図）



第179図　石器実測図

第185図３・４、第186図～第190図がII類の磨石類である。第185図３・４、第186図～第188図、第189図１・３～５は縁辺部に敲打痕をもつ。磨痕については、第186図４、第188図３が片面、それら以外は表裏両面にある。第186図２、第187図２、第188図４・６、第189図１・３～５には、縁辺部にも磨痕がある。第187図２、第188図４、第189図１は隅丸方形の平面形で、断面形は楕円形を呈する。第188図６は隅丸長方形の平面形で、不整形な断面形をもつ。これら以外のものは楕円形の平面形・断面形をもつ。ただ、第188図６は側面と上下面との間に稜がある。第189図２は円形の平面形、楕円形の断面形で、体部の上下面に敲打痕、下端部に磨痕をもつ。第190図１・２・４・５は縁辺部と体部に敲打痕がある。磨痕は１が表裏両面、２が縁辺部と片面、４・５が表裏両面と側面にある。欠損品もあるが、２・４が楕円形、１・５が隅丸長方形の平面形になると思われる。断面形は２・４が楕円形、１が偏平な長方形、５が隅丸長方形を呈する。第190図３は欠損品で、残存している片面には磨痕と敲打痕がある。

敲石（第191図～第194図）

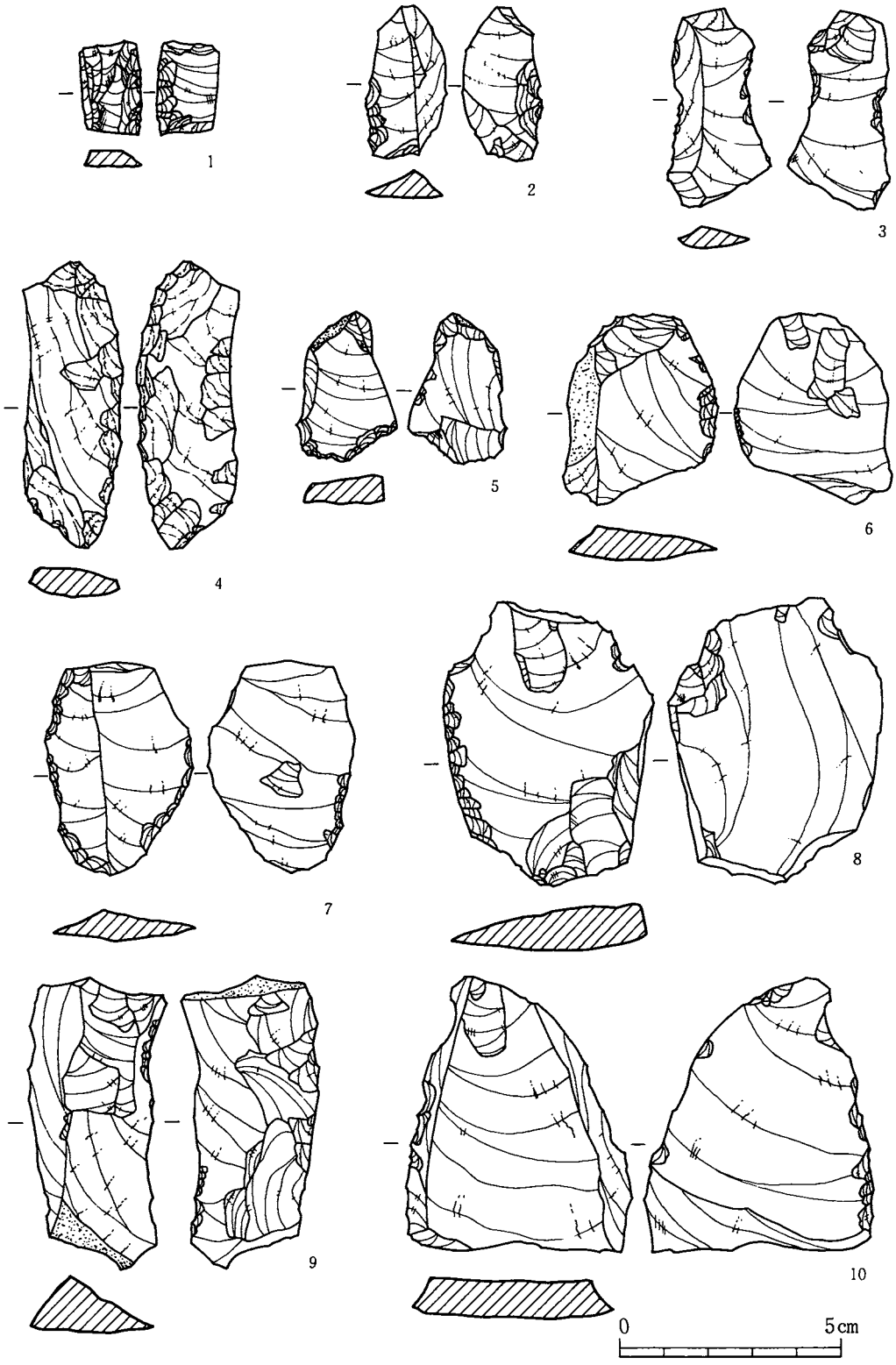
分布状況（第173図）　敲石はＩ区のほぼ中央部に多く分布している。その他はIII区・IV区に少数が点在する。

敲石は平面形が細長く、断面形が円形または楕円形になる乳棒状のものと隅丸長方形・楕円形の平面形を呈し、断面形が偏平な楕円形・方形になるものとが殆どである。前者に属するものが第191図１～８・10、第192図１・３・４・６、第193図１・３である。後者に属するものが第191図９、第193図２・４・５・７・８、第194図１～６である。両者とも上下両端の片方か両方に敲打痕をもつものが大半を占める。中には第192図１・６、第193図８、第194図６のように、側面部にも敲打痕をもつものがある。第193図１は側面に磨痕をもつが、全体の形状より敲石に含めた。上記の二者以外で、第192図２は略楕円形の平面形で、縁辺部に敲打痕がある。断面形は楕円形を呈する。第192図５、第193図６は大型の敲石で、５が上下端部・側面部、６が上下端部に敲打痕をもつ。５は不定形の平面形で断面形が楕円形を呈する。６の平面形は細長い楕円形の上方が屈曲しており、断面形は楕円形である。

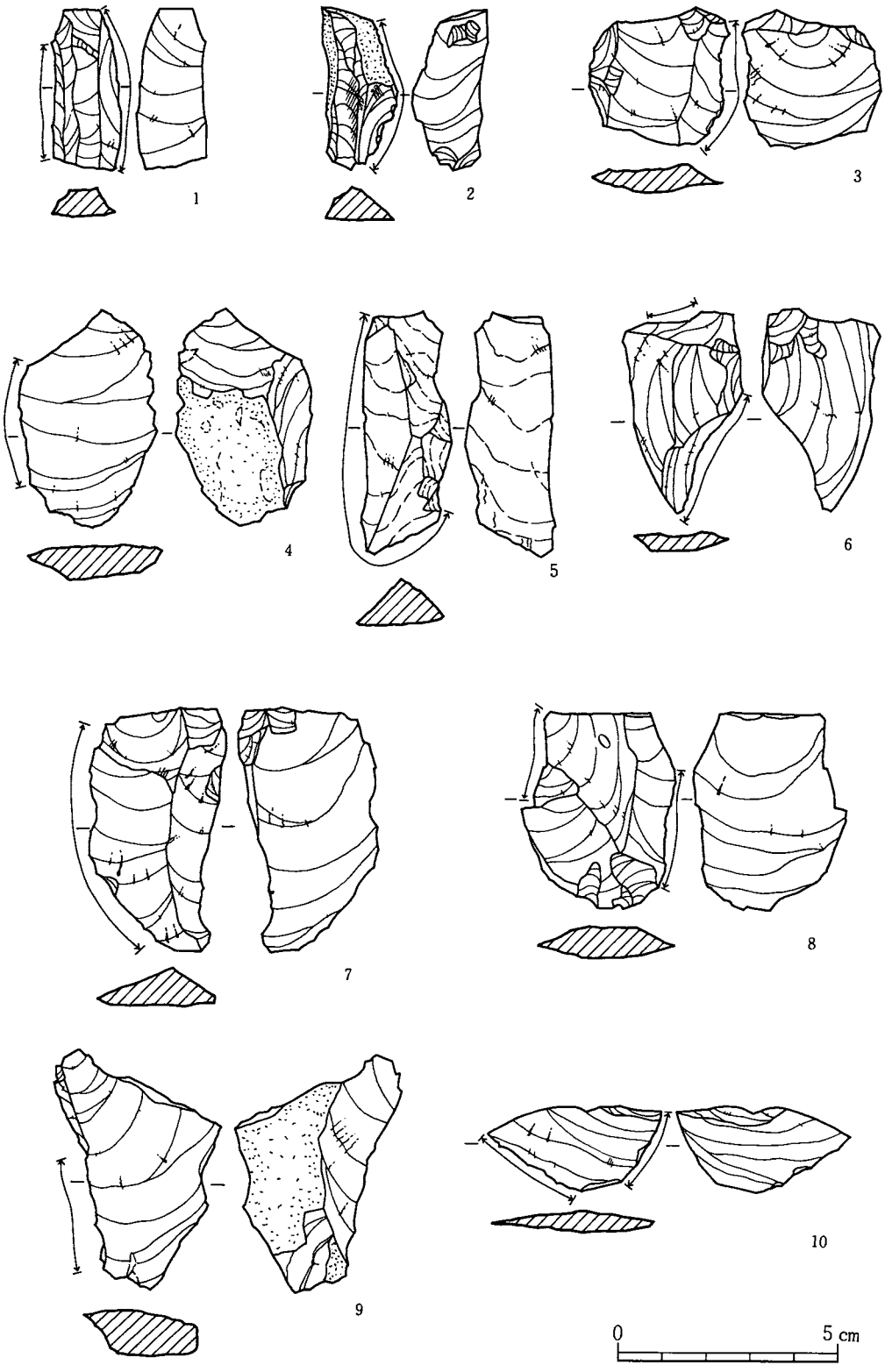
石皿（第195図～第198図）

分布状況（第184図）　石皿は磨石類に近接して出土しており、上記の磨石類と同じような分布傾向を示す。

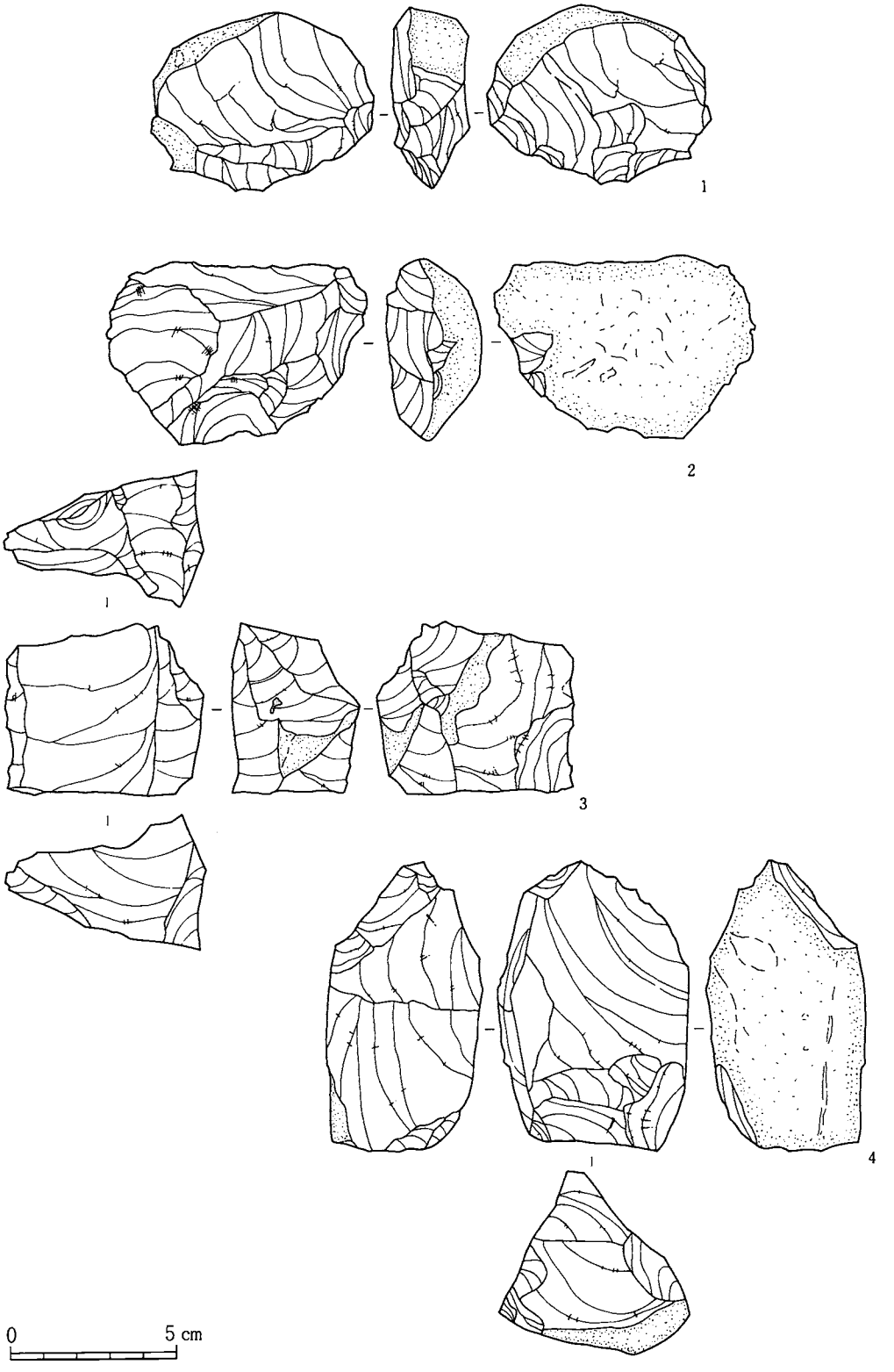
第195図１・３、第196図５、第198図２は不定形の平面形を呈し、断面形が長方形になる。第196図１、第197図３は隅丸長方形の平面形で、断面形は楕円形・隅丸長方形を呈する。これら以外の石皿は、欠損しており全体の形状が不明である。第195図１・２、第196図１・２・５には、敲打痕と磨痕がある。第195図３は敲打痕をもつ。第196図３・４・６、第197図１～４、第198図１～３には磨痕がある。断面形を見ると、磨痕や敲打痕のある箇所が窪んでいるものもある。表裏両面を使用しているのが第195図２、第196図１・４、第197図２であり、これら以外は



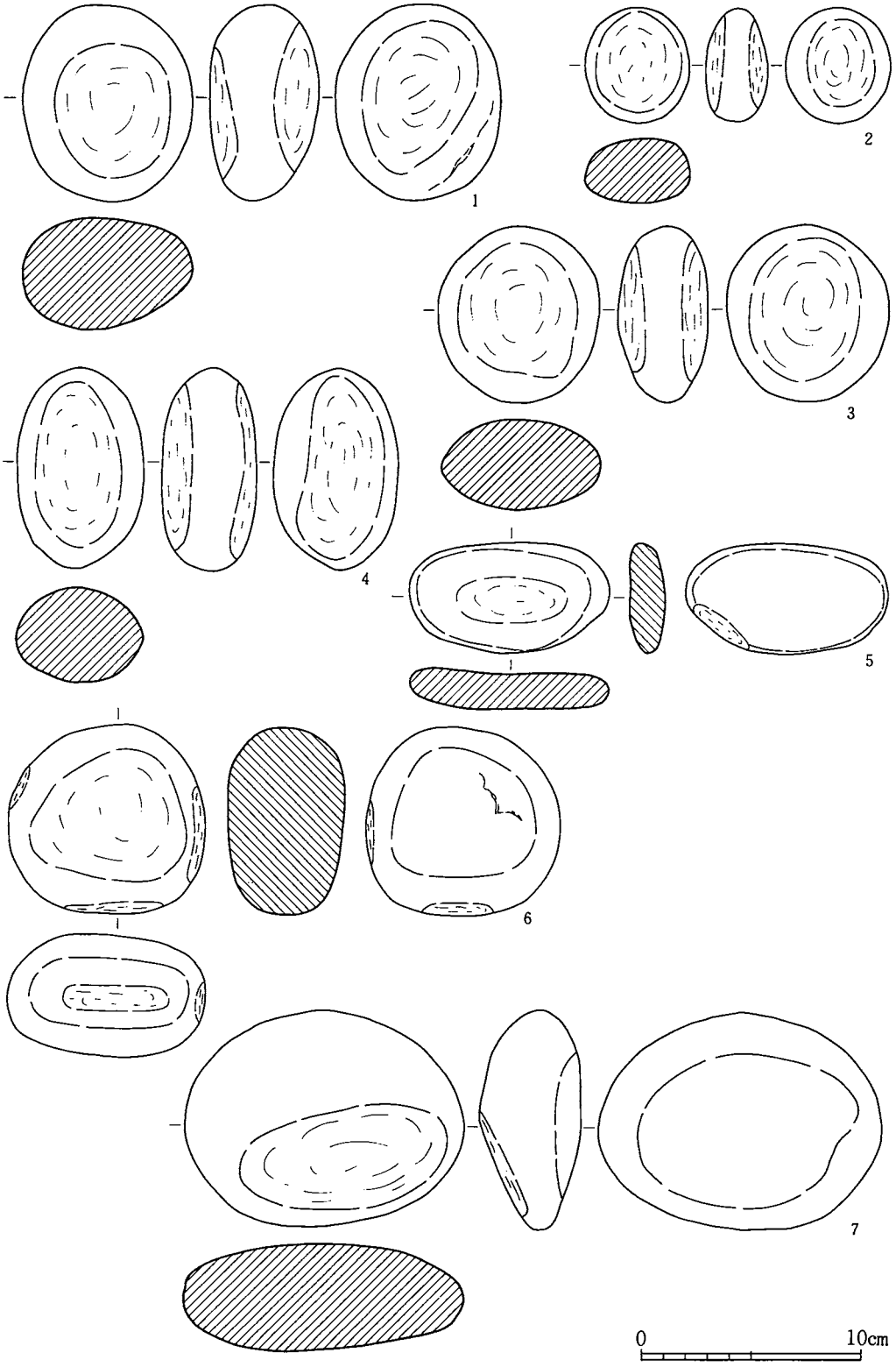
第180図　石器実測図



第181図　石器実測図

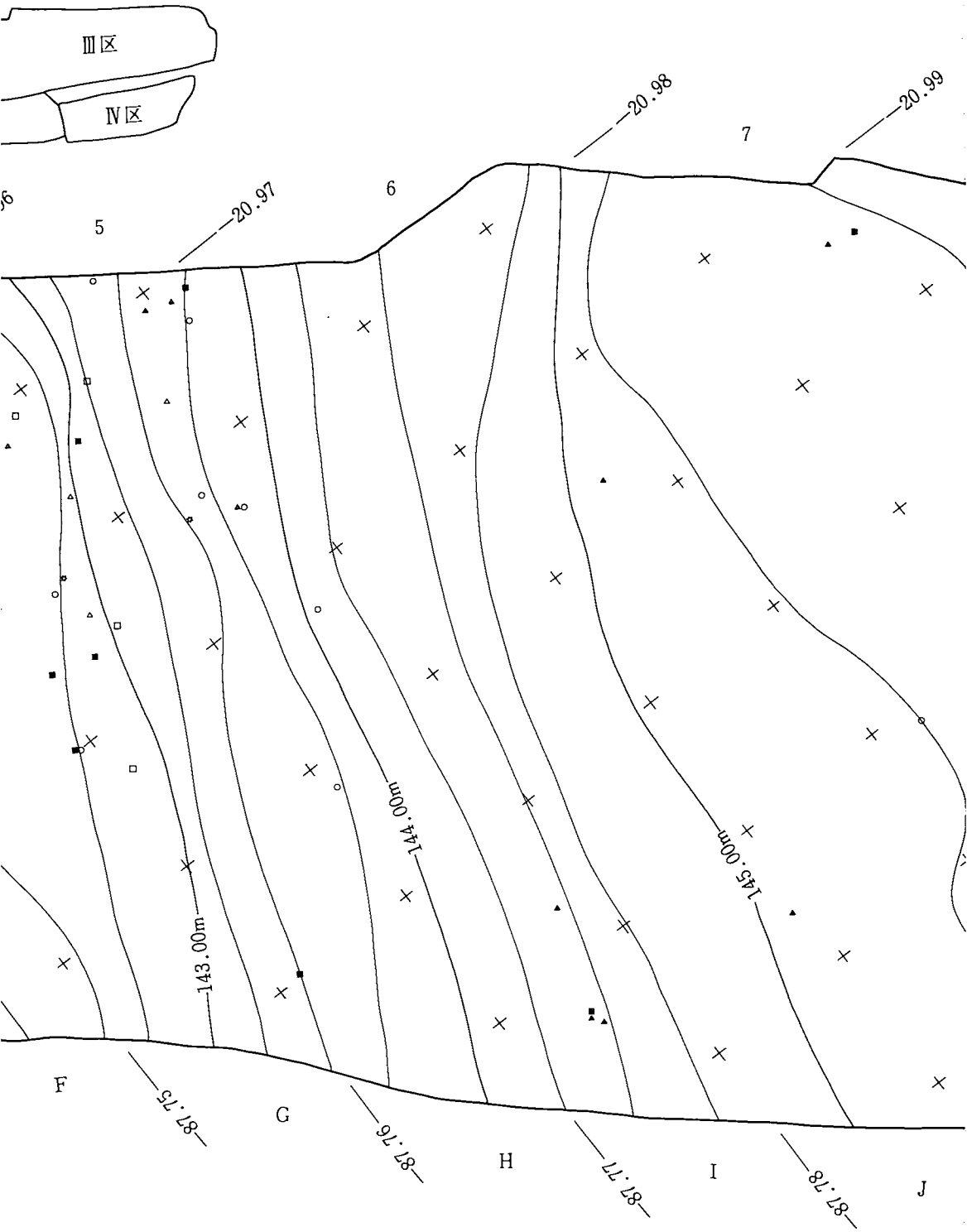


第182図　石器実測図

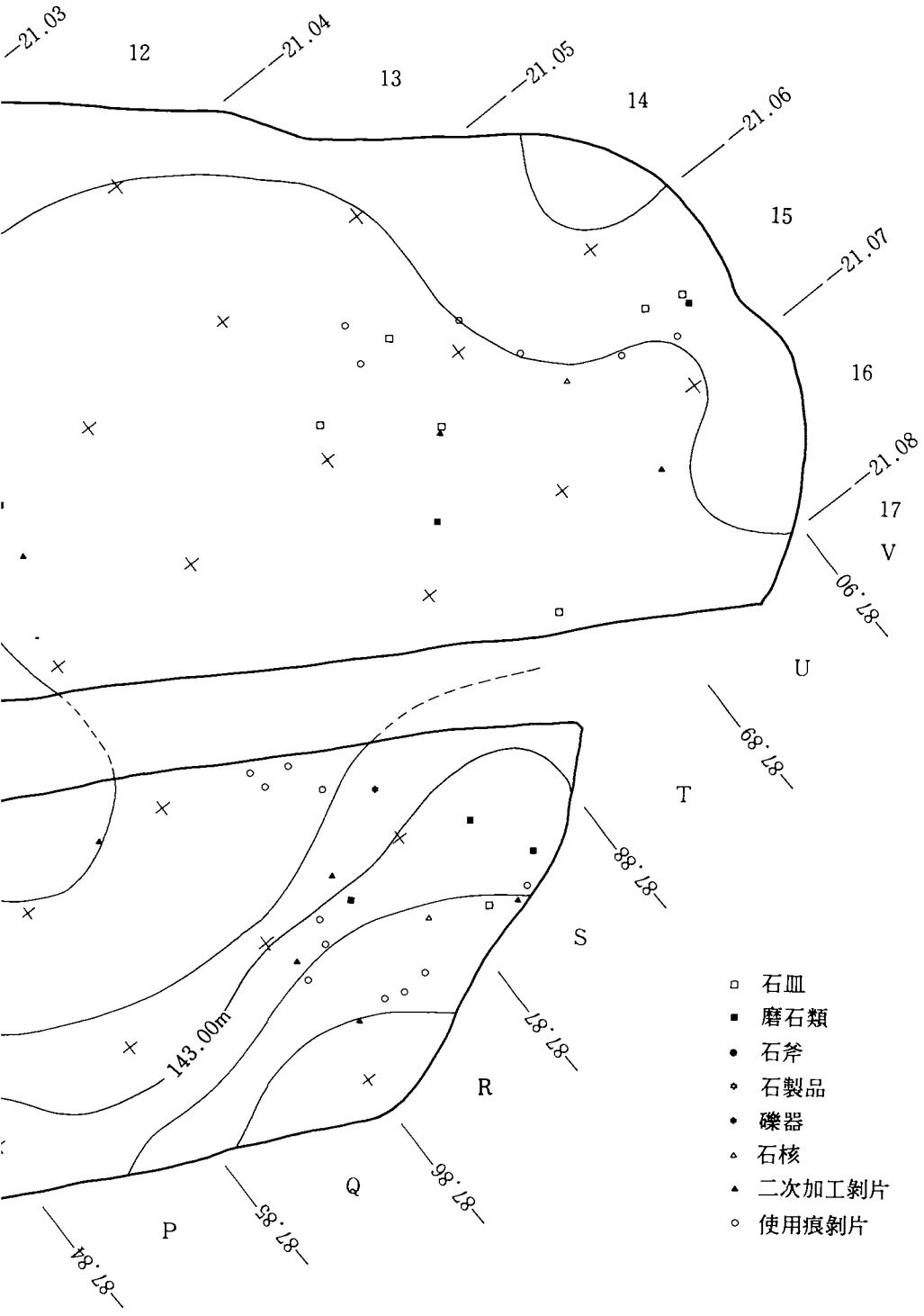


第183図　石器実測図

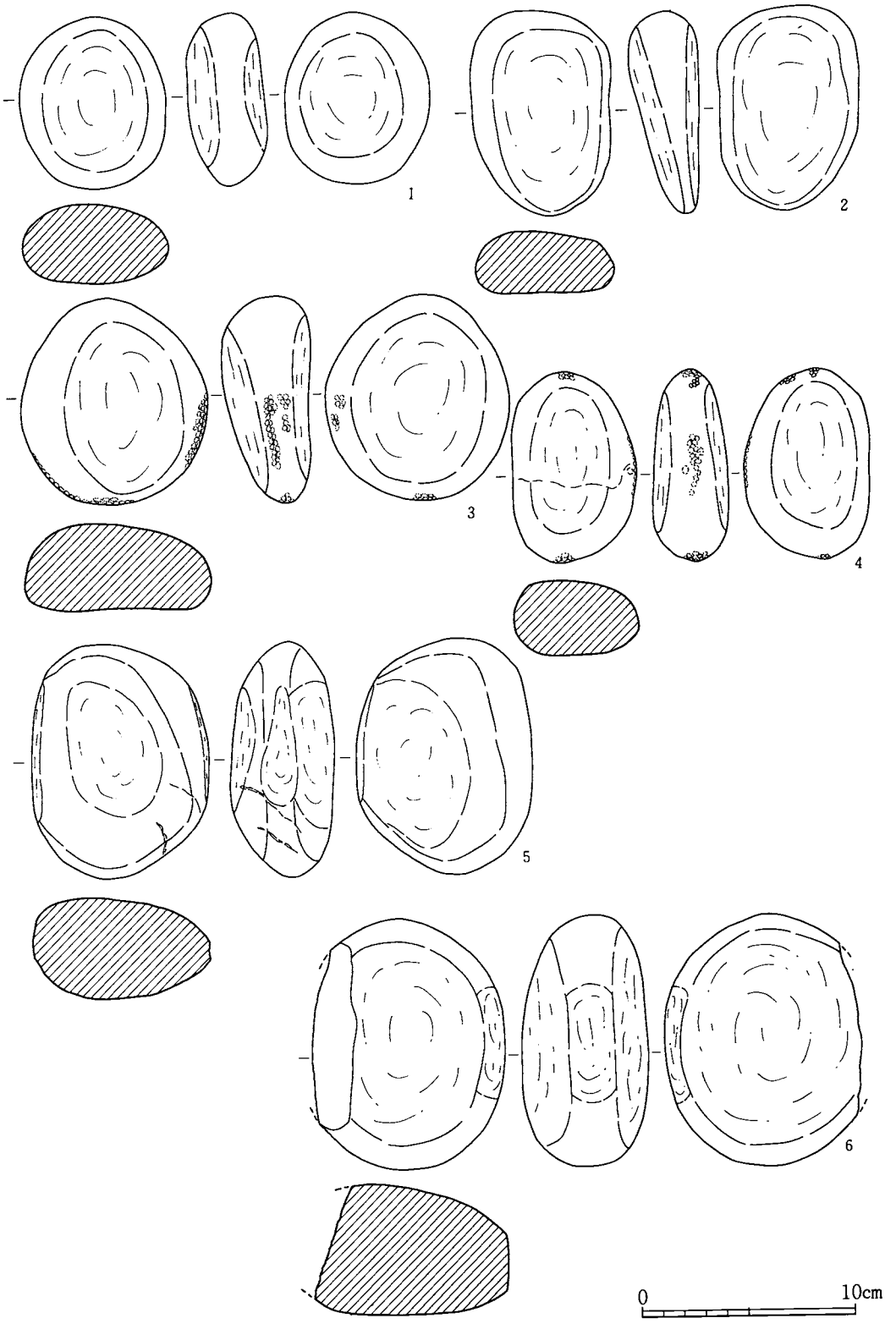
Ⅱ区
Ⅰ区
2
3
4
20.94
20.95
C
D
E
87.72
87.73
87.74
142.00m
0
20m


Ⅲ区
Ⅳ区
20.98
20.99
20.97
7
6
5
144.00m
145.00m
143.00m
F
87.75
G
87.76
H
87.77
I
87.78
J

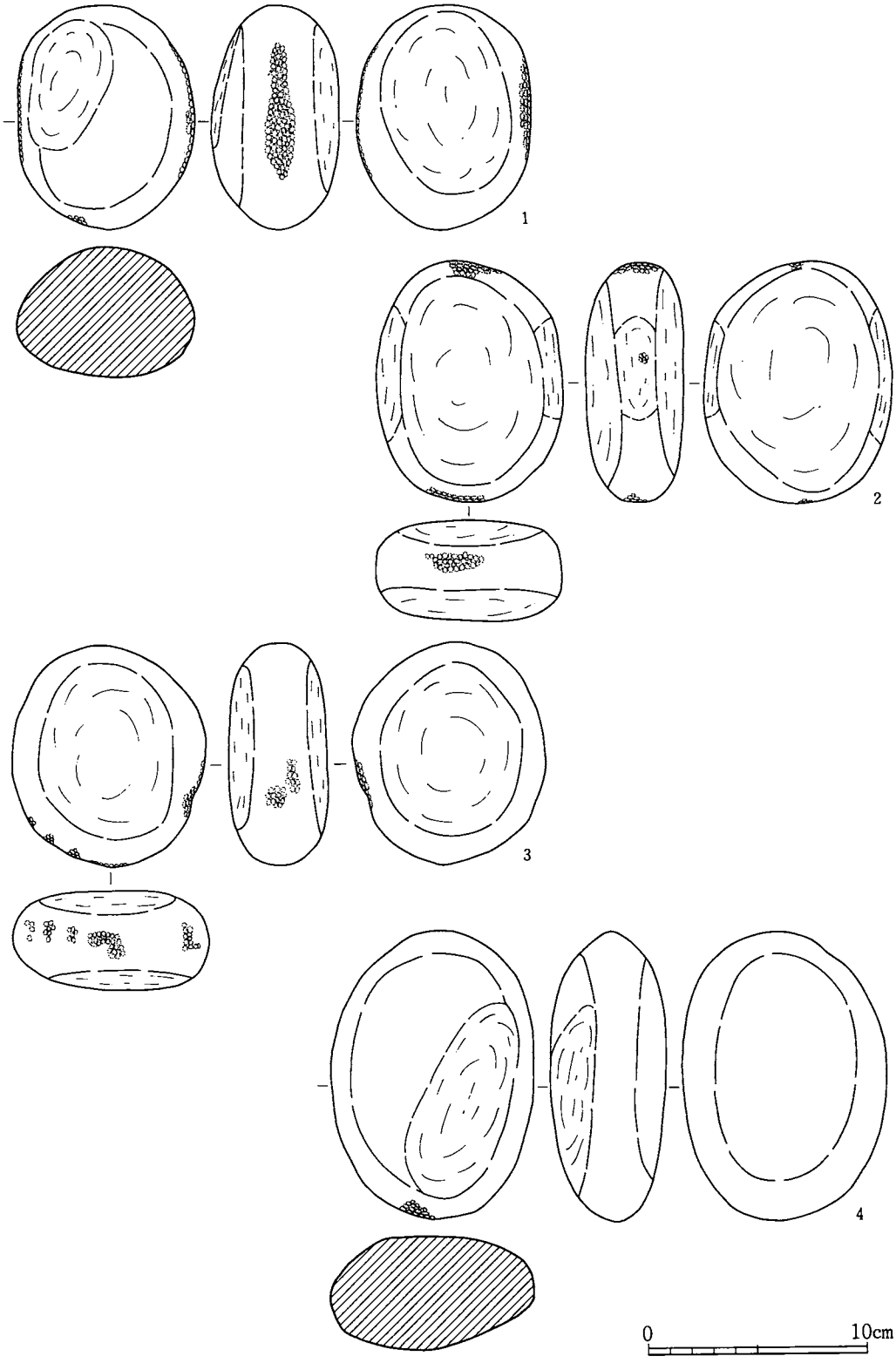
8
9
10
11
-21.00
-21.01
-21.02
144.00m
145.00m
-87.79
K
-87.80
L
-87.81
M
-87.82
N
-87.83
O



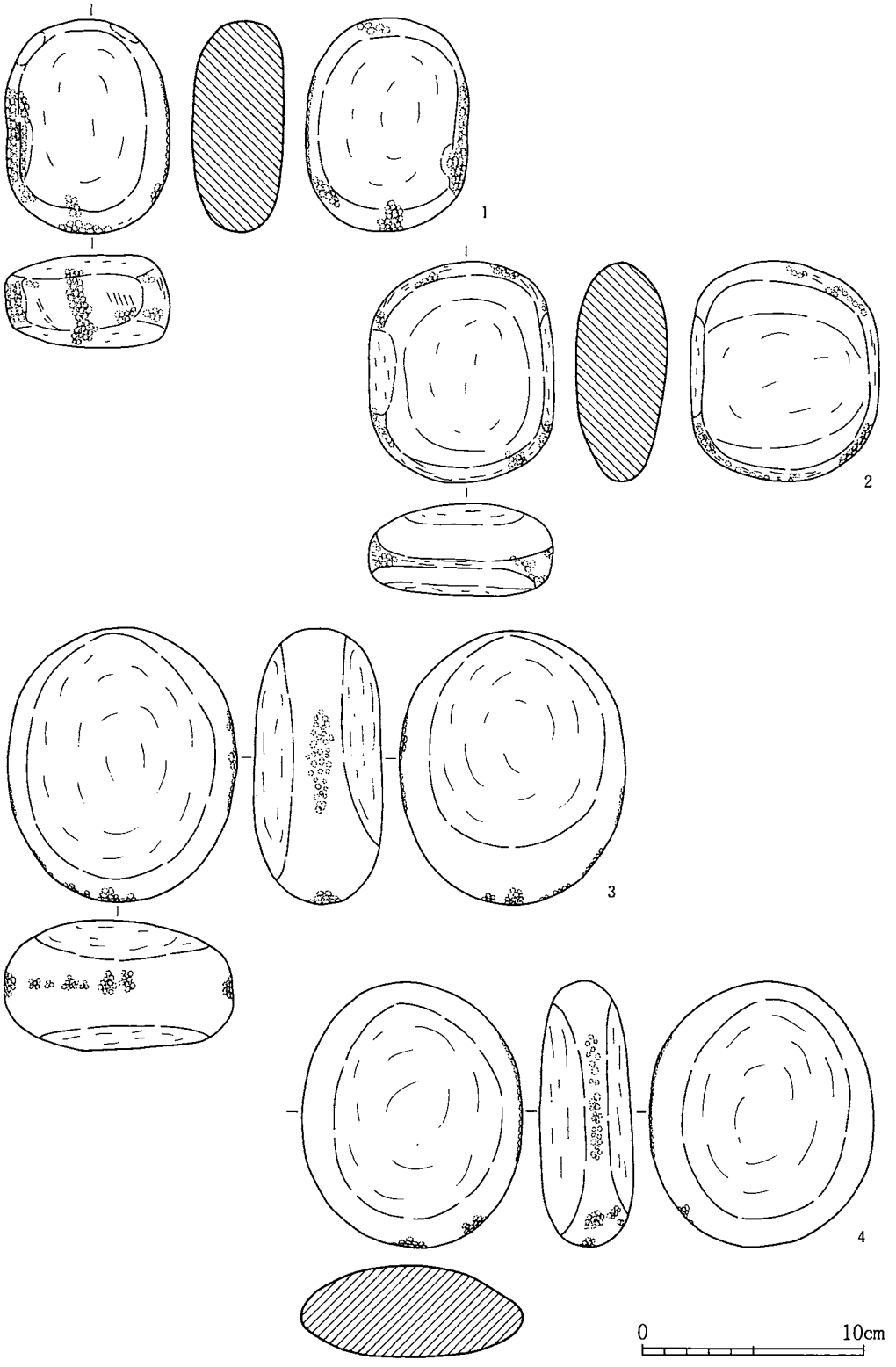
第184図Ⅴ層・Ⅵ層出土石器分布図



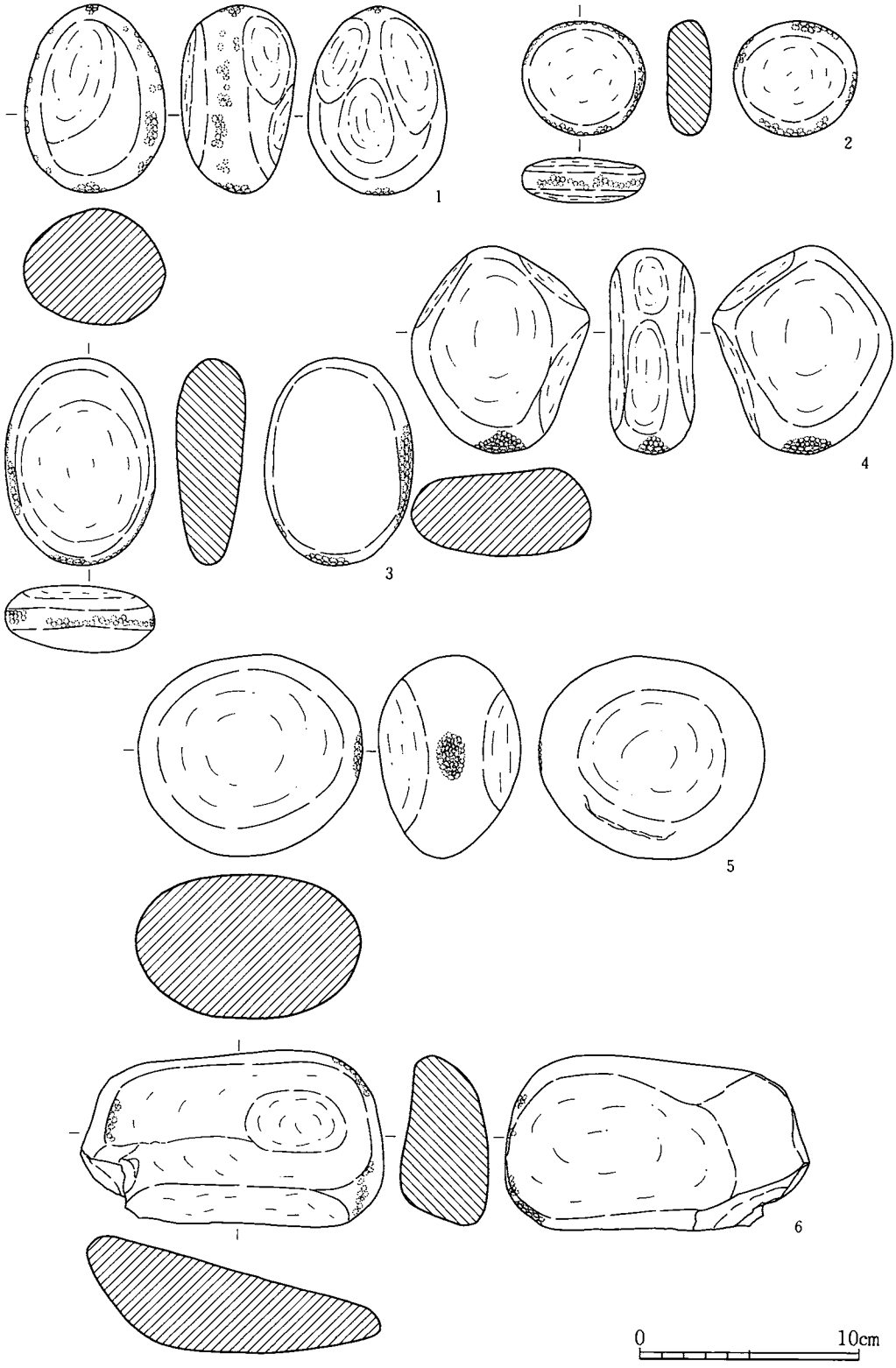
第185図　石器実測図



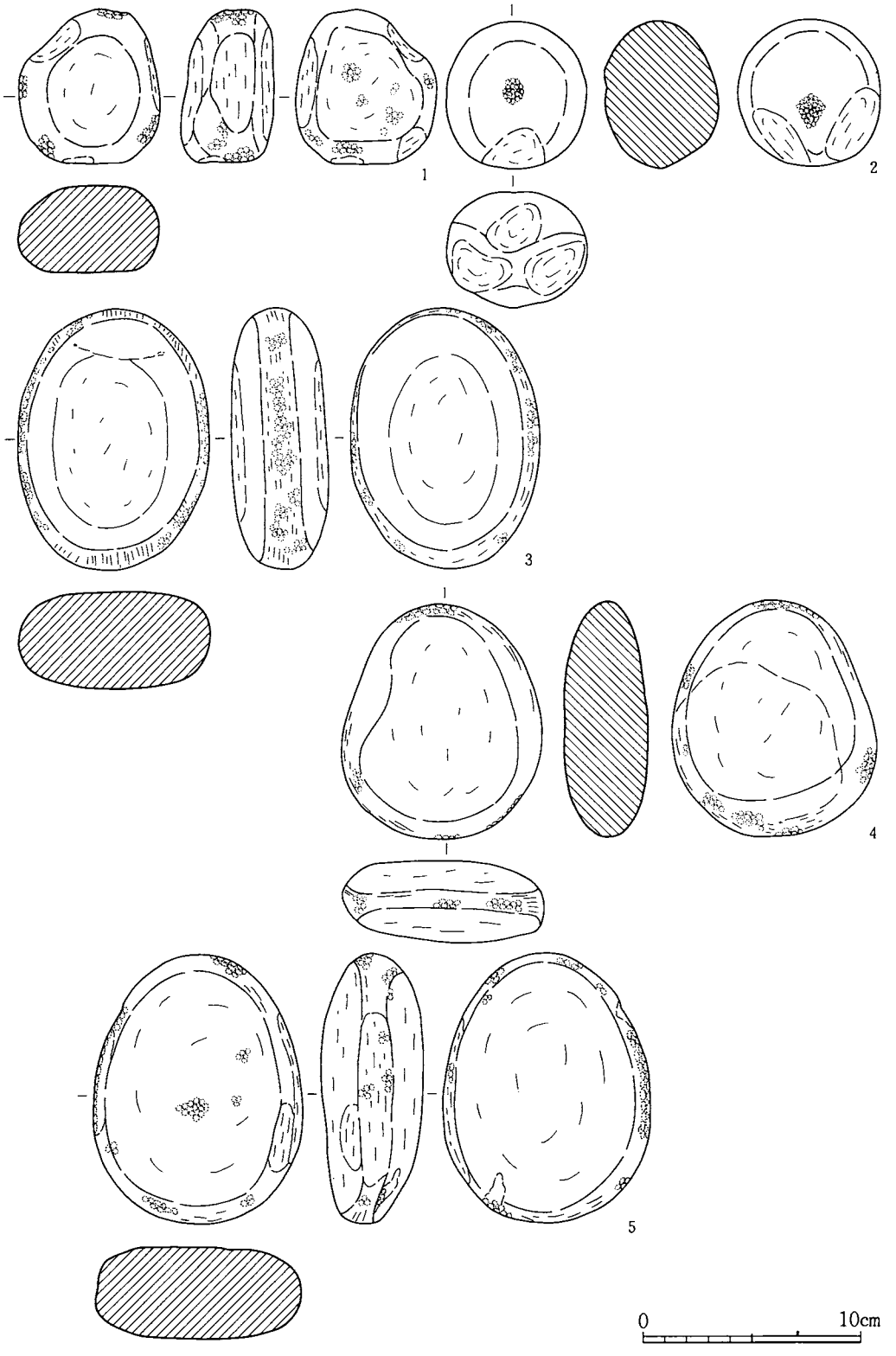
第186図　石器実測図



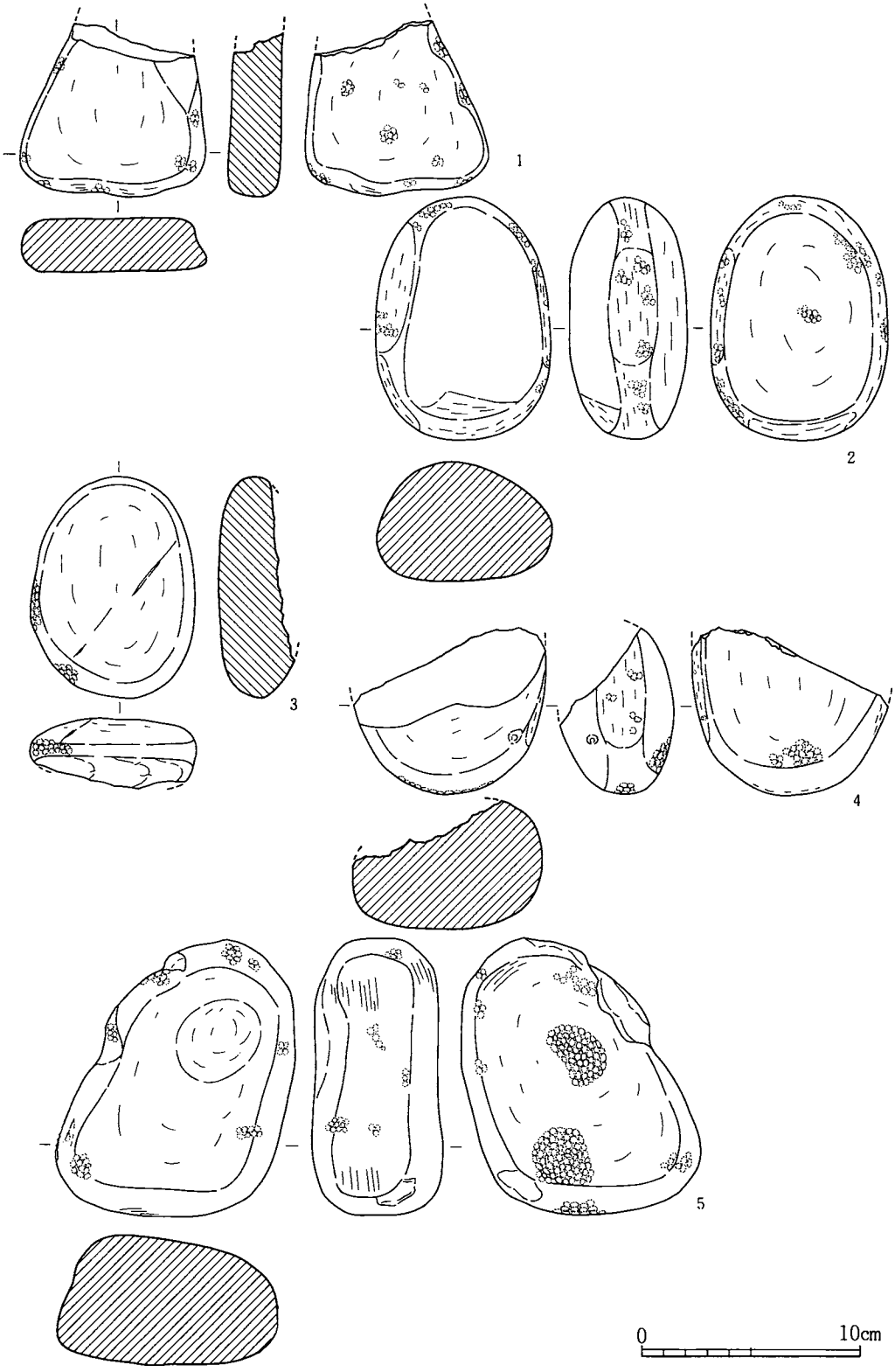
第187図　石器実測図



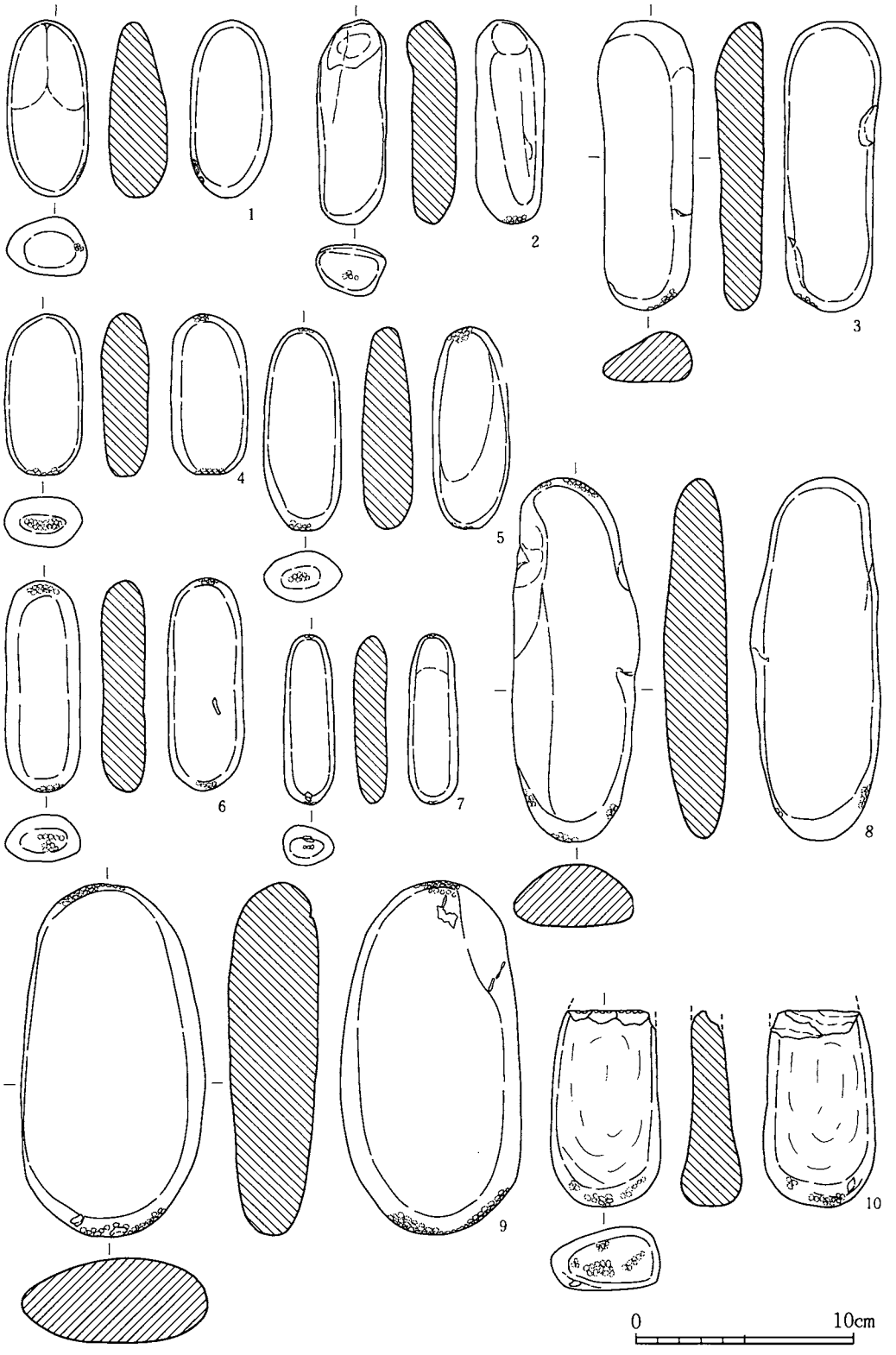
第188図　石器実測図



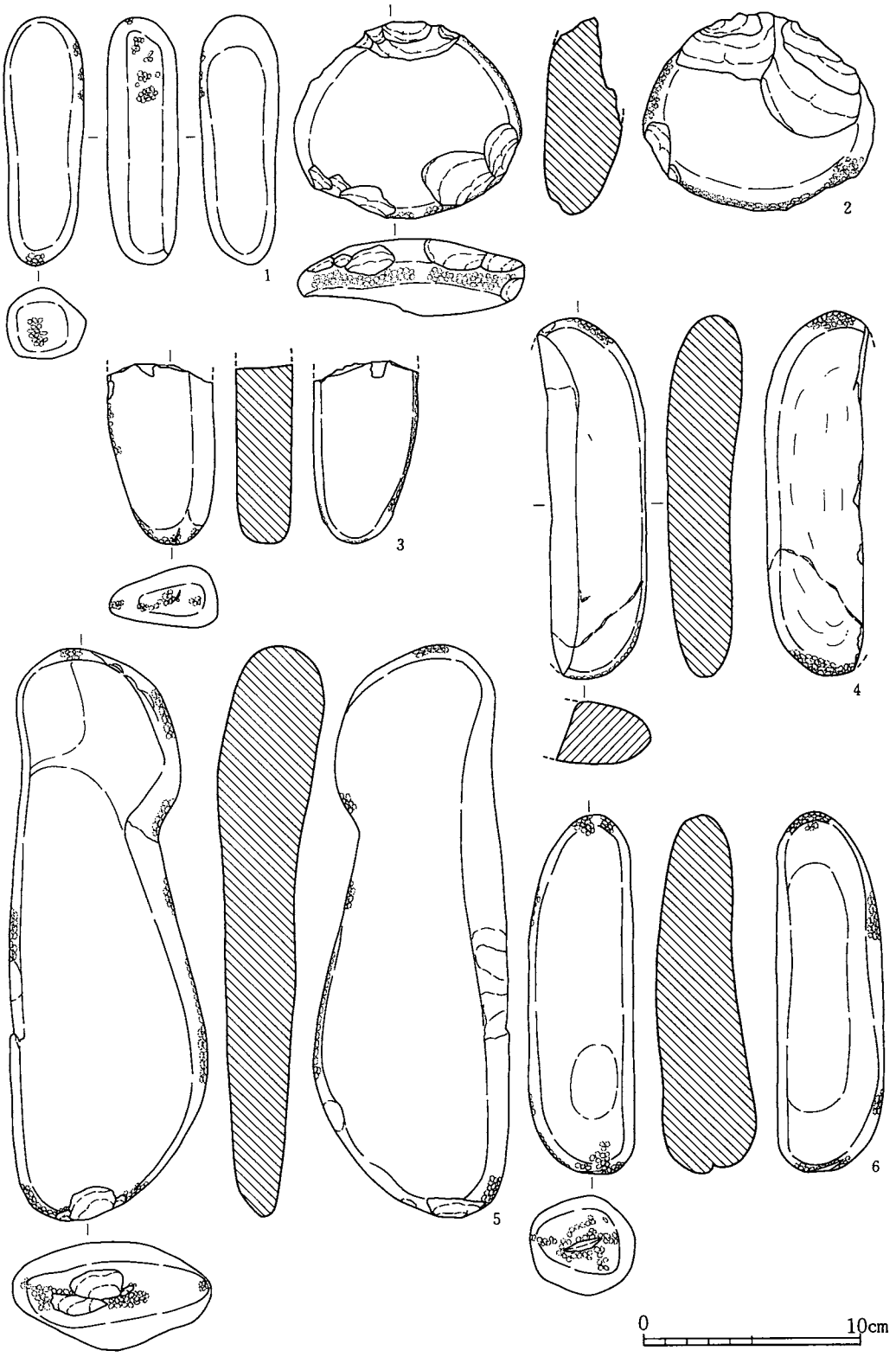
第189図　石器実測図



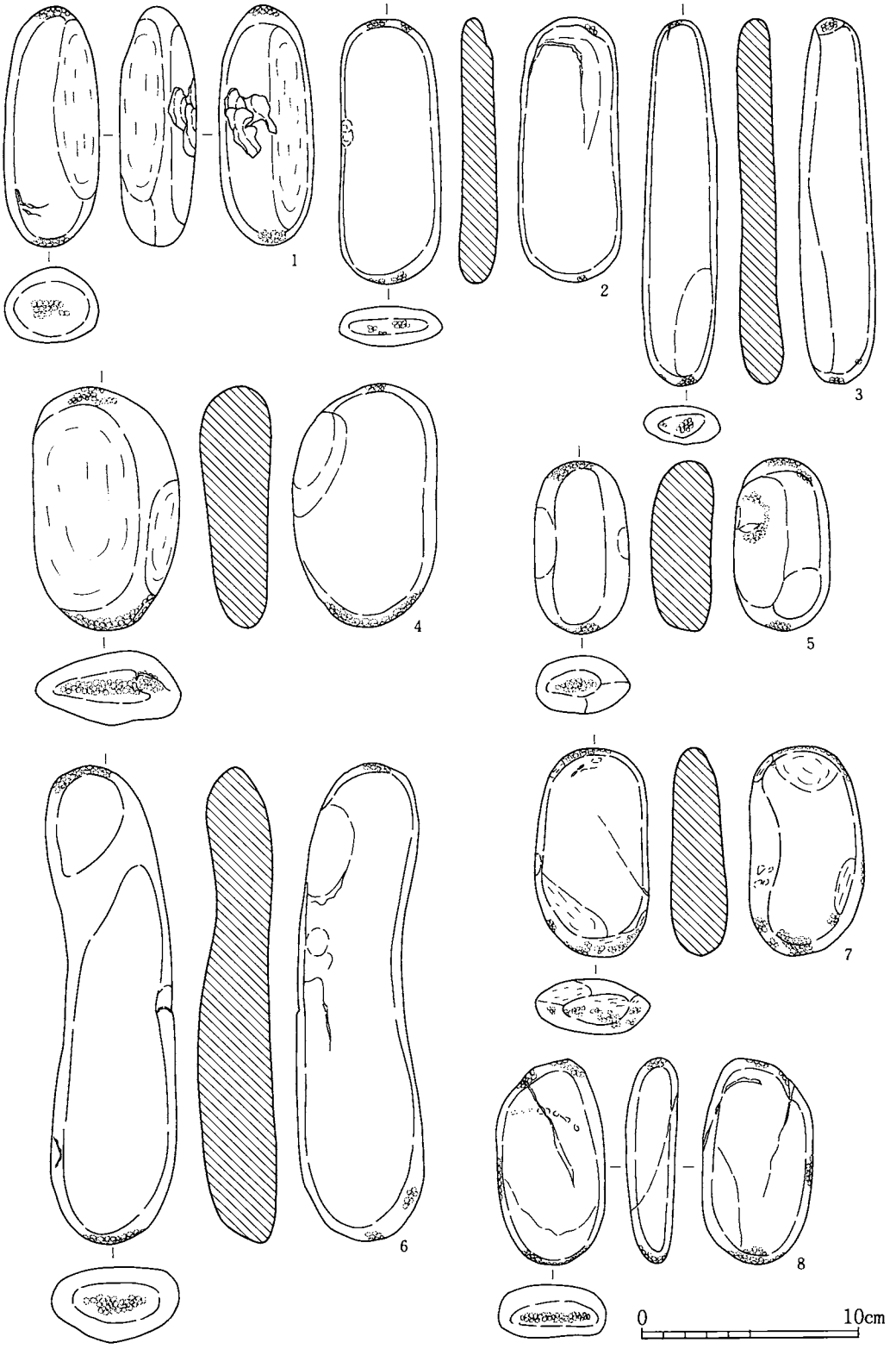
第190図　石器実測図



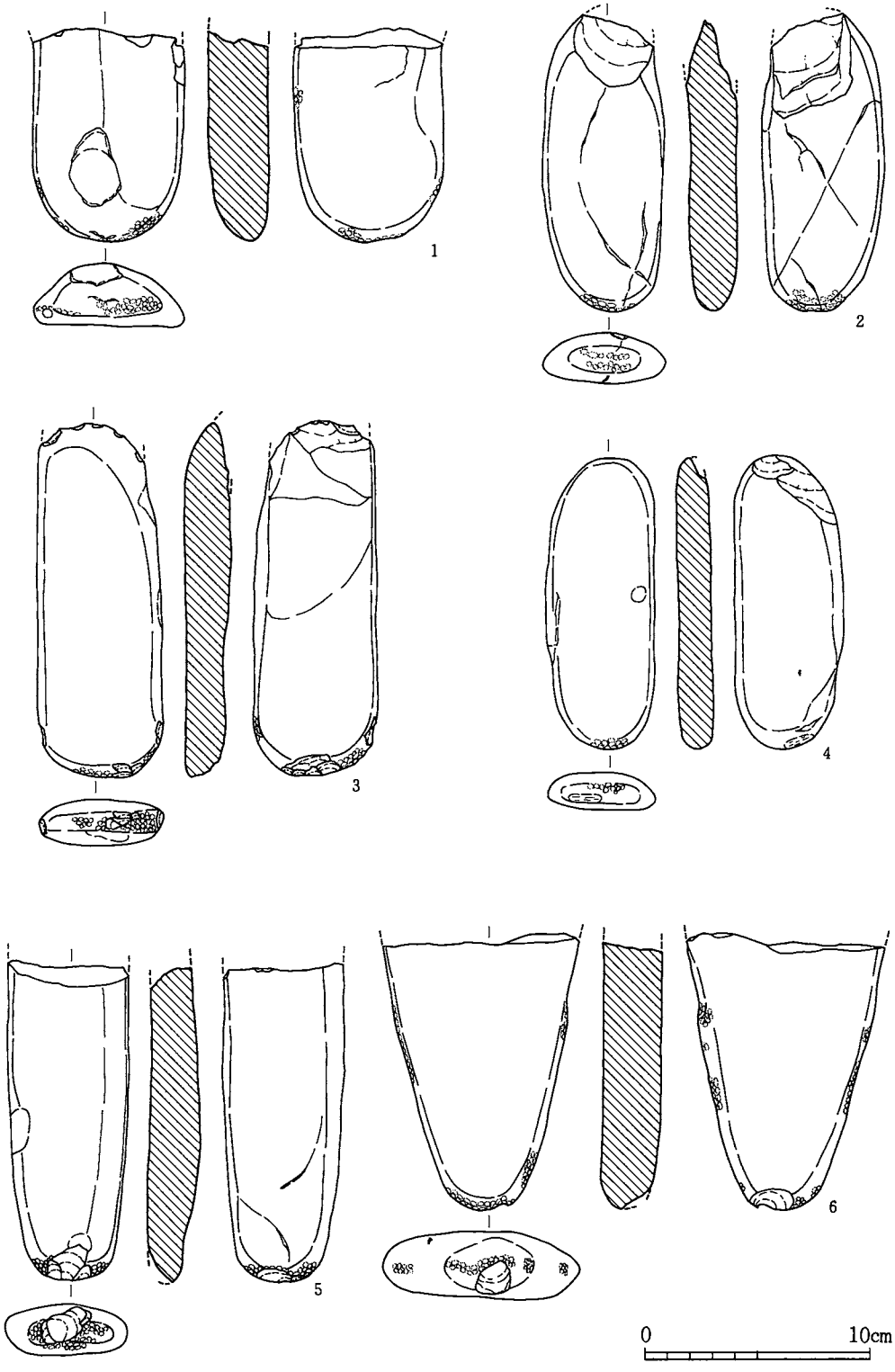
第191図　石器実測図



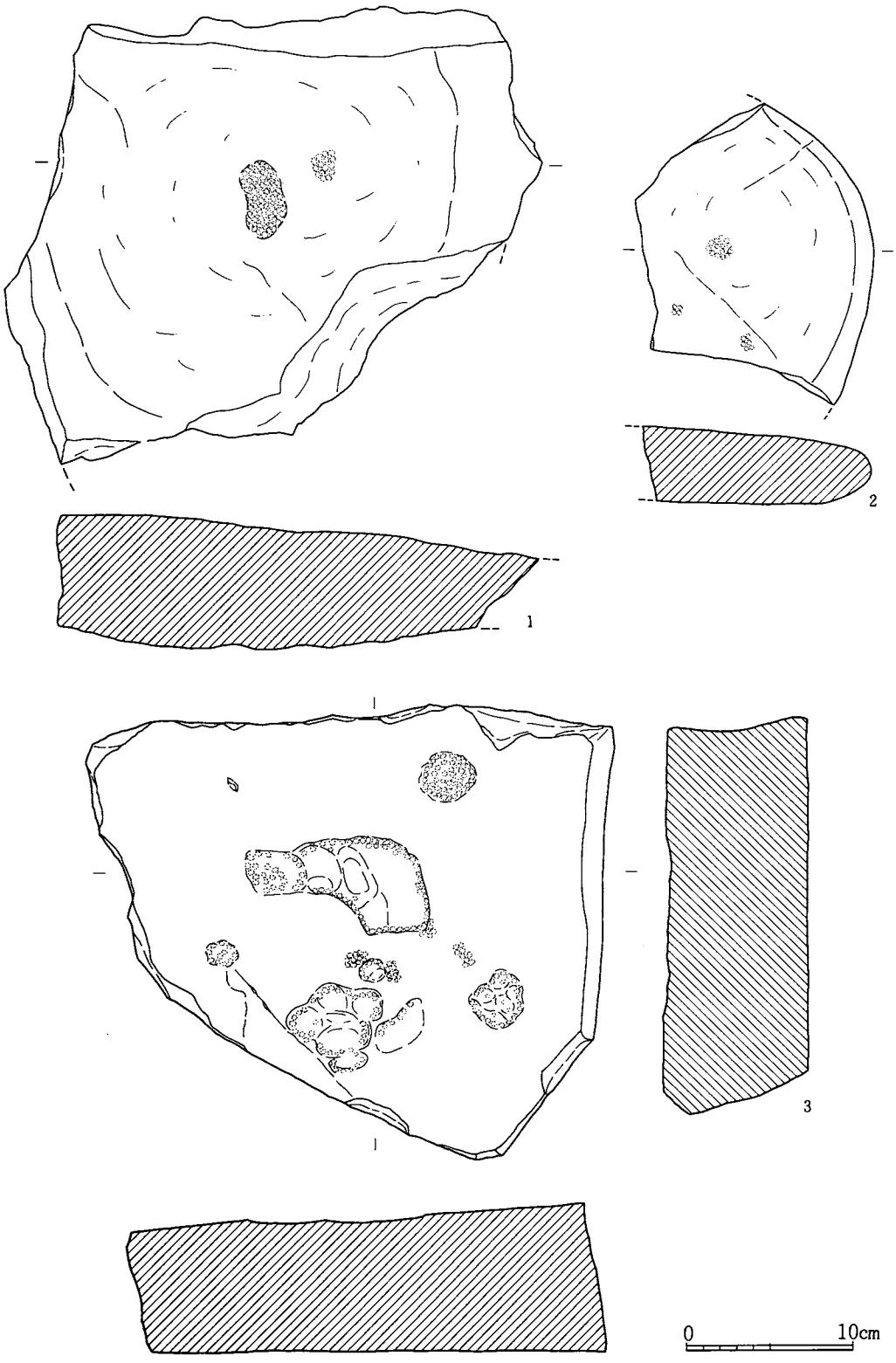
第192図　石器実測図



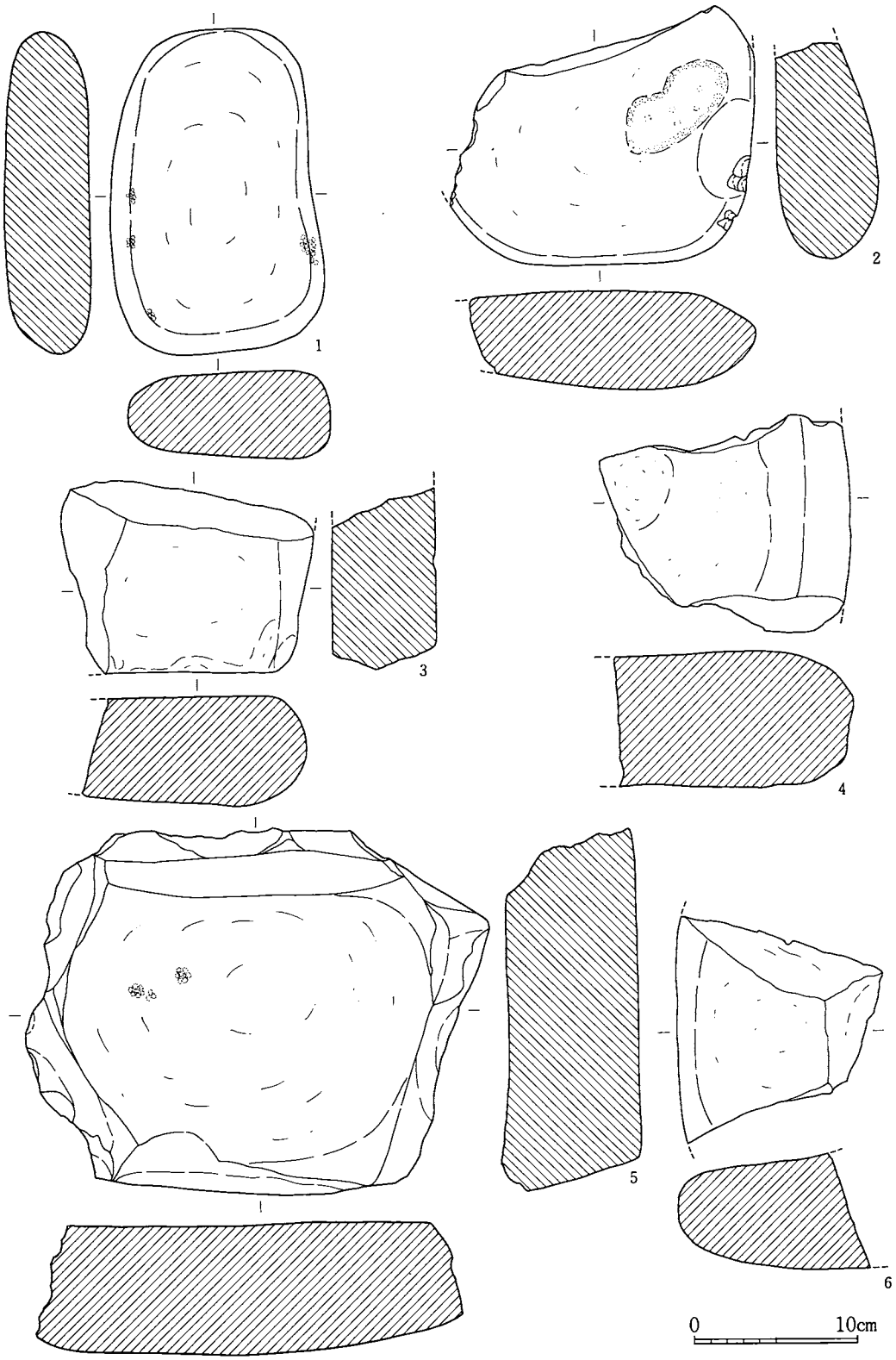
第193図　石器実測図



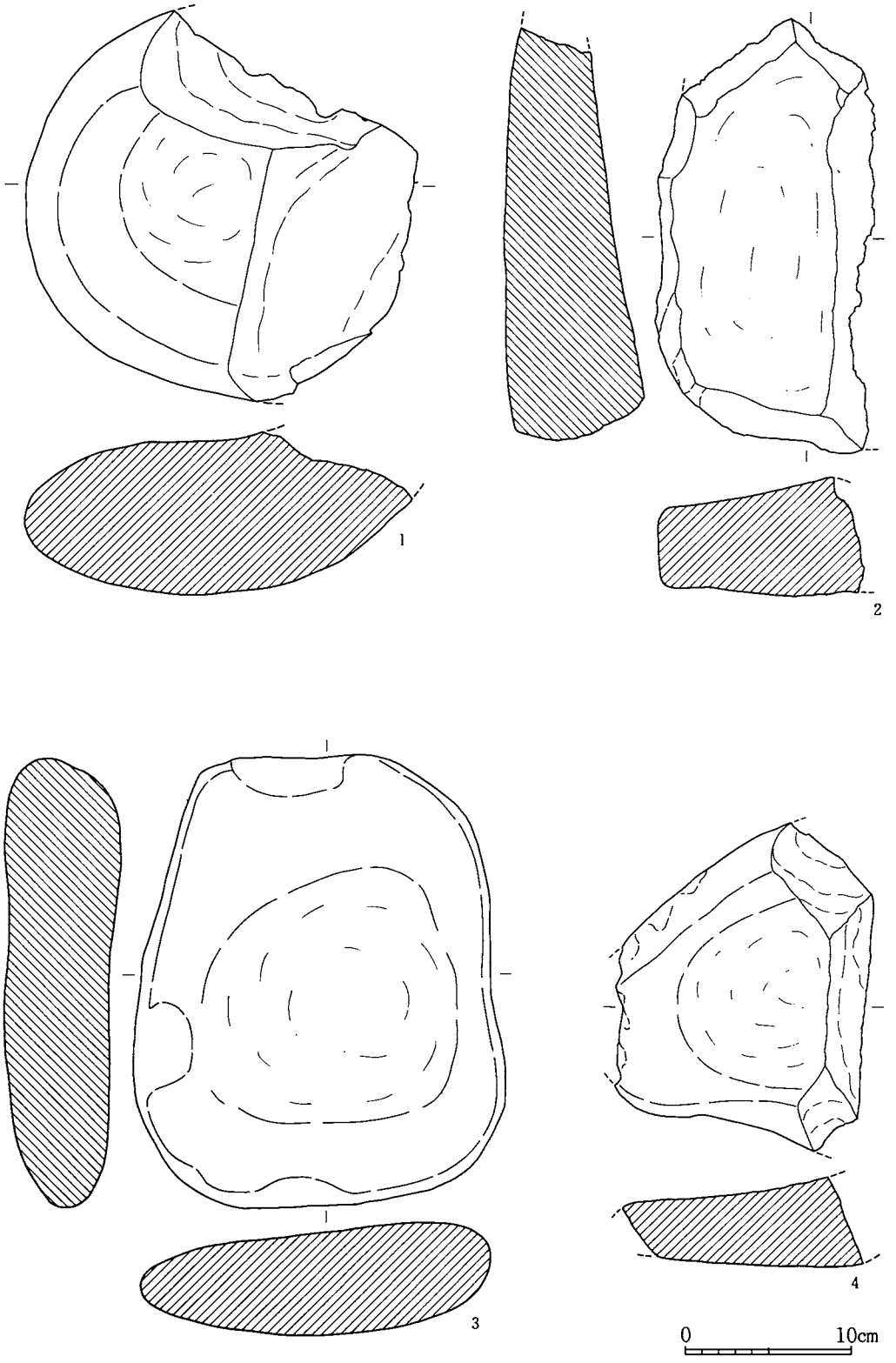
第194図　石器実測図



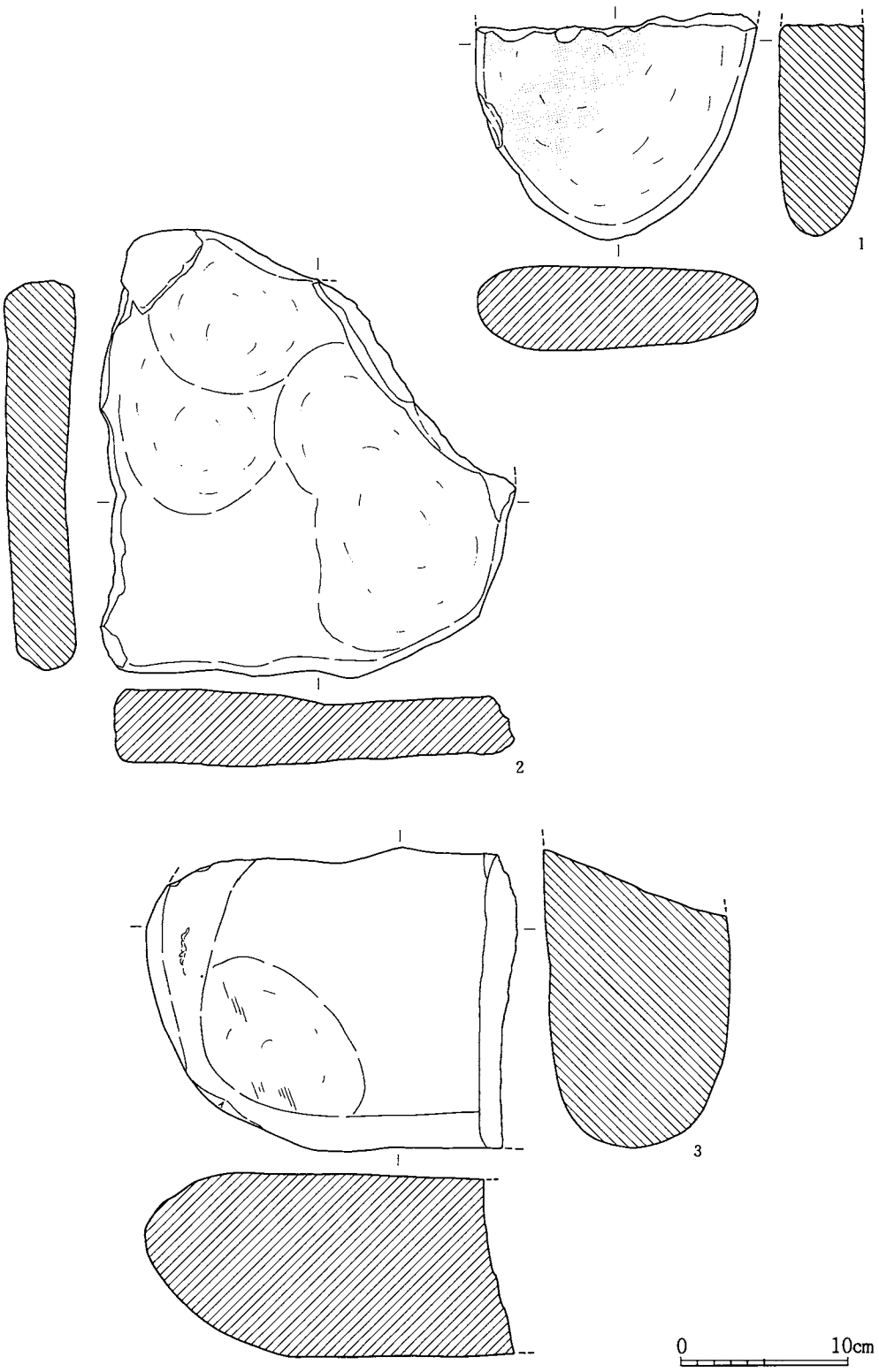
第195図　石器実測図



第196図　石器実測図



第197図　石器実測図



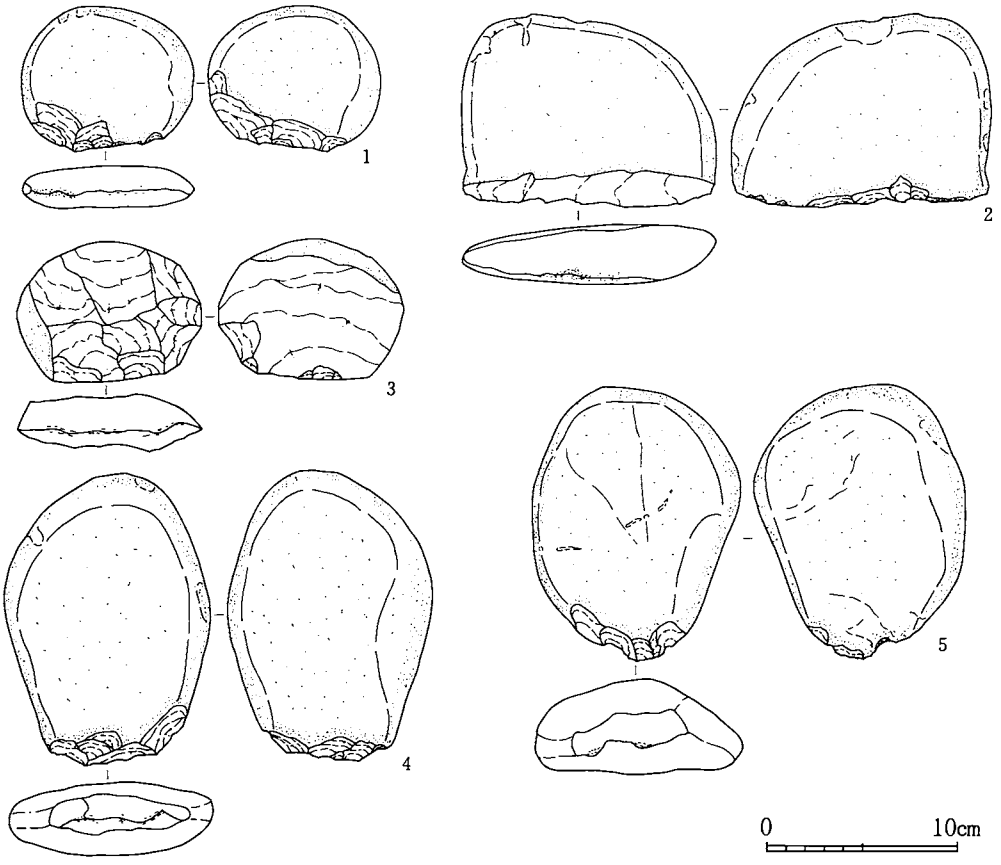
第198図　石器実測図

片面だけを使用している。第196図4の側面部は火により黒色に変色しており、表面が剝がれている。第198図1の片面にはススが付着している（図の網部分）。

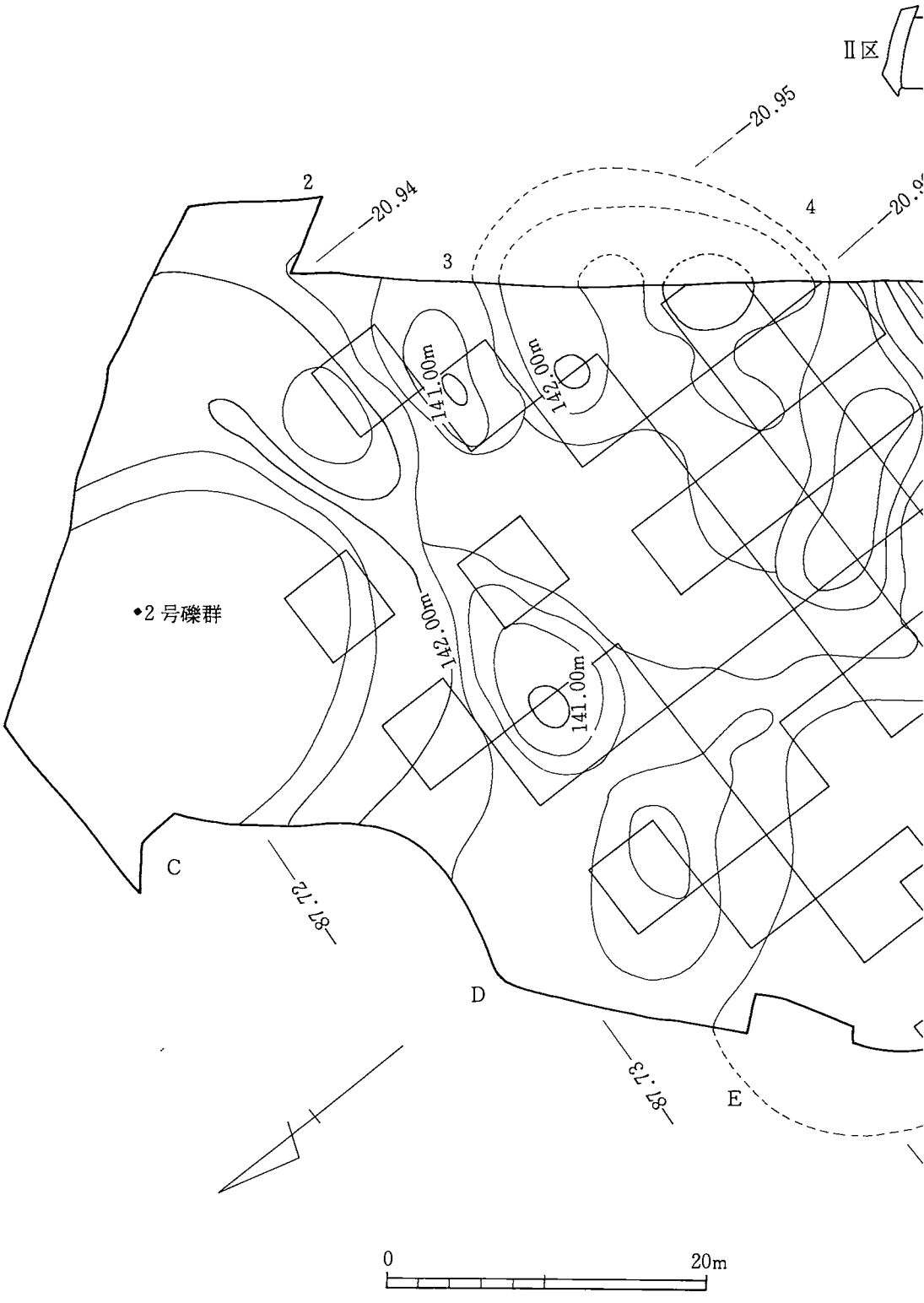
礫器（第199図）

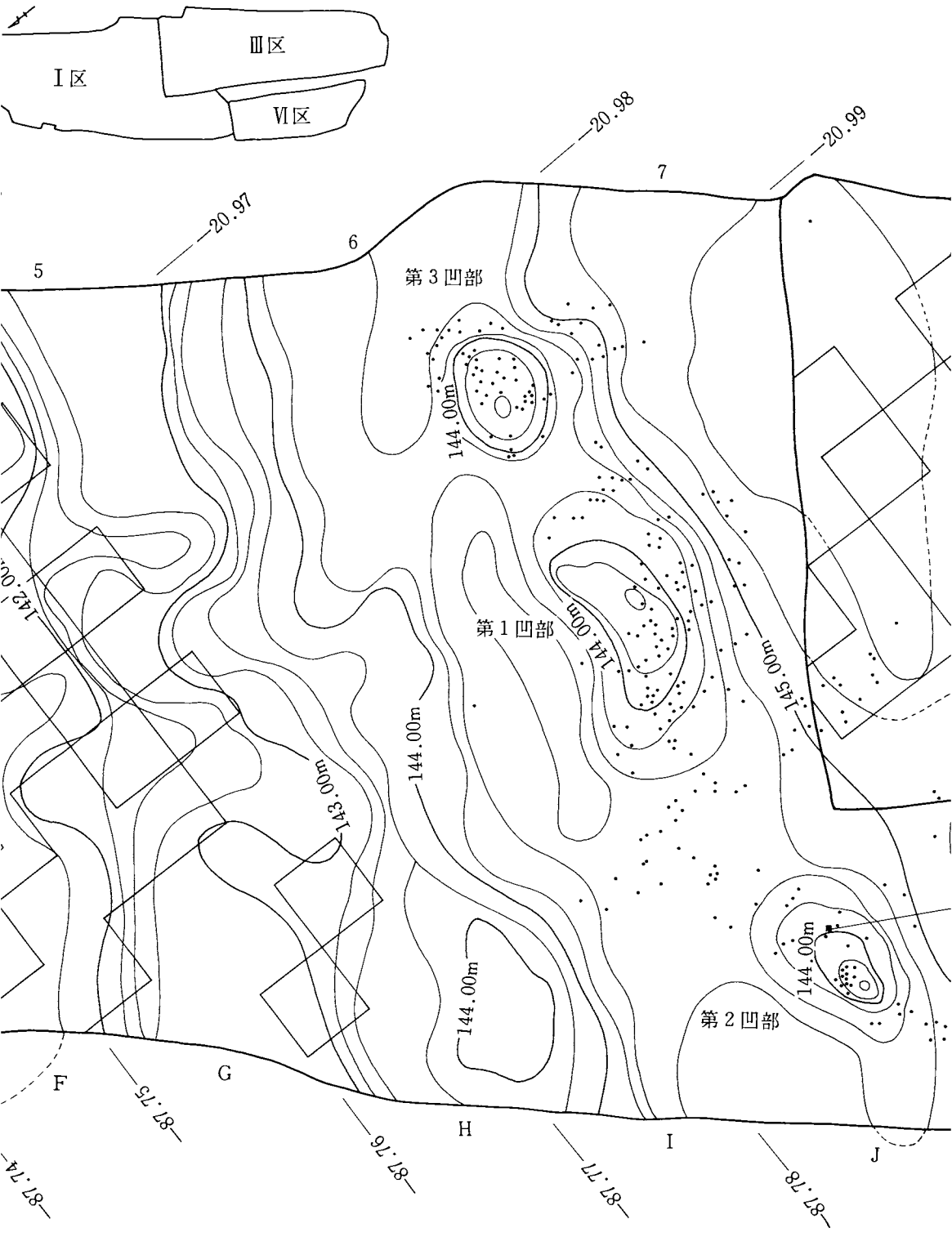
分布状況（第184図）　礫器はⅠ区・Ⅲ区に散在状態を呈して分布している。

3は楕円形の平面形を呈し、表裏に剝離面がある。主に表面の縁辺部より加工を行い、刃部を作っている。1・4・5は楕円形を呈する礫の下端部を調整加工して、刃部を作り出している。1・4が両面から、5が主に片方より加工を行っている。2は切断面を部分的に加工して刃部にしており、半円状の平面形になる。

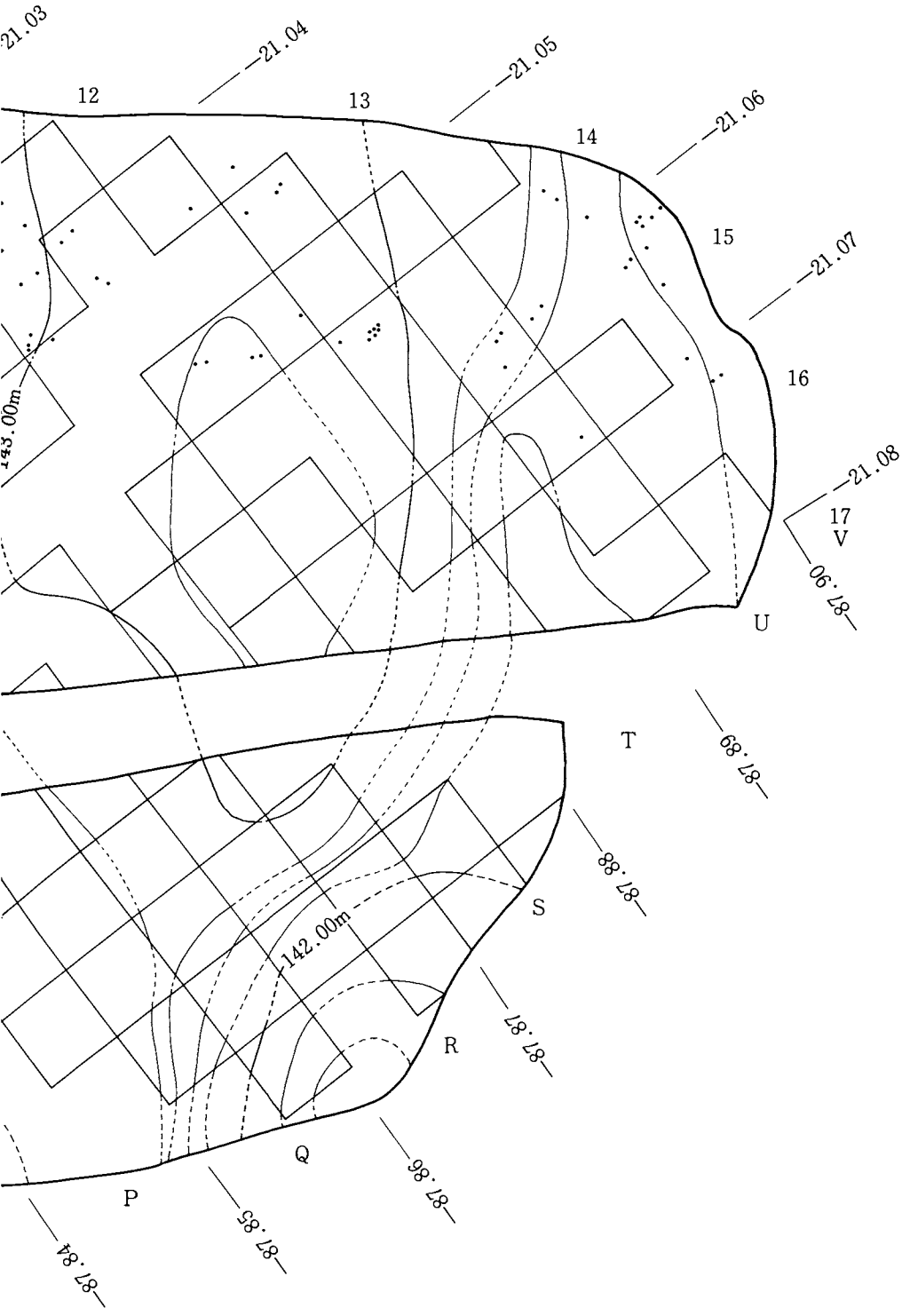


第199図　石器実測図


Ⅱ区
20.95
2
20.94
4
3
142.00m
141.00m
2号礫群
142.00m
141.00m
C
87.72
D
87.73
E
0
20m


Ⅲ区
Ⅰ区
Ⅵ区
20.98
20.99
20.97
7
6
5
第3凹部
144.00m
第1凹部
144.00m
145.00m
144.00m
143.00m
144.00m
144.00m
第2凹部
F
G
H
I
J
87.75
87.76
87.77
87.78

-21.00
-21.01
-21.02
8
9
10
11
143.00m
144.00m
第4ブロック
1号礫群
K
L
M
N
O
-87.79
-87.80
-87.81
-87.82
-87.83



第200図　Ⅷ層出土遺物分布図

第5節　先土器時代の調査

1．遺構・遺物分布について

⑴IX層上面での地形（第200図）

先土器時代の調査では、10m×10mの大グリッドを四分割して小グリッドを設定した。その小グリッドによる調査を大グリッドに最低一箇所行うようにした。遺物・遺構を検出した際には、その小グリッドを拡張して調査区を広げた。Ⅷ層が先土器時代の遺物包含層であるため、掘り下げはIX層（シラス）上面まで行った。そのIX層上面での地形は次のようになる。Ⅰ区とⅡ区の境付近に標高が最も高い箇所が東西方向に帯状にのびる。その部分に調査区内で、最も窪んだ地形を呈する所が東西方向に三箇所並ぶ。標高が最も高い部分より北側の地形は、全体としては北方向に低くなり、東西方向に並んだ三箇所の窪み程ではないが、窪みが多くあり、凹凸が著しい。標高が最も高い部分より南側は、南方にいくにつれて低くなる地形を呈し、凹凸が見られる。その凹凸はⅠ区ほどではない。Ⅲ区の東寄りの中央部に傾斜が緩やかになる箇所がある。

⑵凹部・礫群と遺物分布について（第200図）

ここで言う凹部とは、自然の窪みのことをさす。IX層上面での地形は他の層に比べて凹凸が著しい。IX層上面の地形の中でも、最も窪んだ箇所が標高が最も高い部分に三箇所並ぶ。中央の窪みが第1凹部、西側端部の窪みが第2凹部、東側端部の窪みが第3凹部である。これらのIX層上面で形成された凹部にⅧ層が堆積しており、そのⅧ層より遺物が出土した。これらの窪みのそれぞれには、遺物が集中しており三つのブロックを形成している。Ⅲ区の東寄りの中央部に緩傾斜地があり、この部分にⅧ層出土の遺物が集中する。この箇所が第4ブロックである。これら以外に、第1凹部と第2凹部との中間地点において、どちらの凹部に属するかを決め難い状態でⅧ層出土の遺物が分布している箇所がある。それに、Ⅲ区の南端部付近にⅧ層出土遺物が散在状態で分布している。

先土器時代の調査で検出した遺構は、礫群2基である。1号礫群は第2凹部内にあり、2号礫群が調査区の北端部に位置している。

⑶凹部について（第202図）

通常の実測図では凹部の状態がうまく表現できなかったので、第202図は25cm間隔の等高線で凹部を表現したものである。その図面に遺物の出土地点を重ね、併せて接合関係も示した。

第1凹部

第1凹部は不整形を呈する窪みである。標高144.25mの等高線で表現された部分の大きさは、最大長約12m、最大幅約6mを測る。遺物は凹部の西側半分に集まる傾向がある。接合関係を見ると、凹部内出土遺物間や凹部内と凹部周辺で出土したものに接合関係がある。

第2凹部

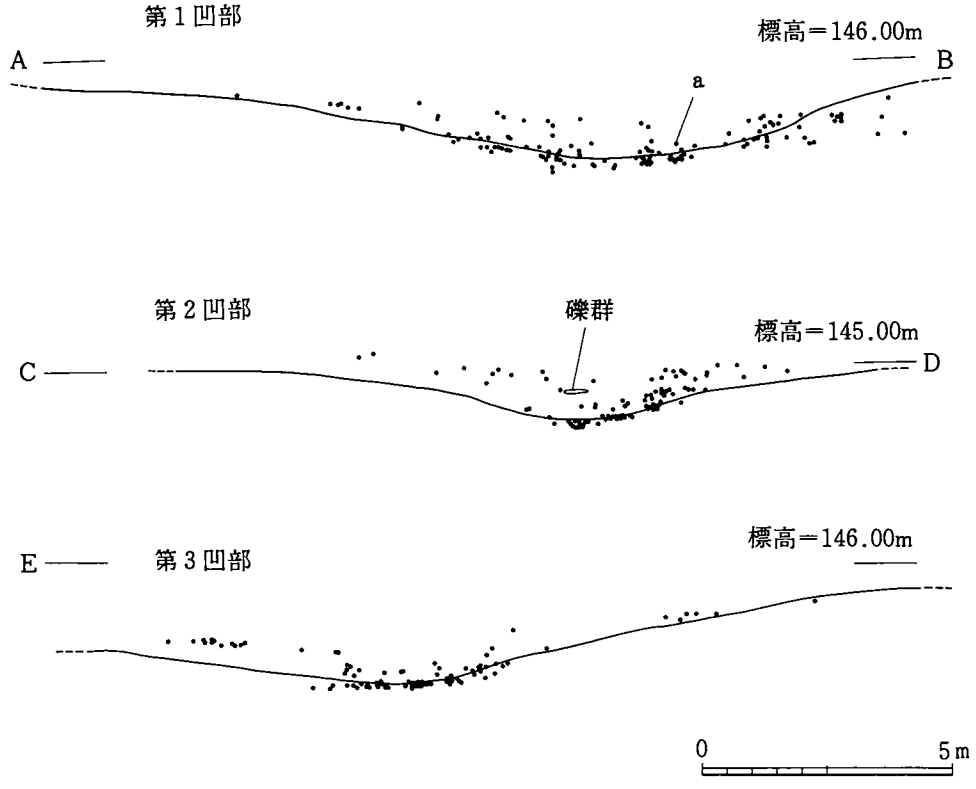
標高144.50mの等高線で表現された部分を見ると、不整な楕円形を呈する(長軸約8.5m、短軸約5.5m)。この楕円形を呈する部分の東端部と標高144.50mの等高線で表現された第1凹部の西端部との直線距離は約13mを測る。標高144.25mの等高線で表現された楕円形を呈する部分の東端部に1号礫群がある。遺物はこの礫群より西側部分に集まる傾向が強い。標高144.50mの等高線で表現された楕円形に近接した東側に、遺物の接合関係が見られる。

第3凹部

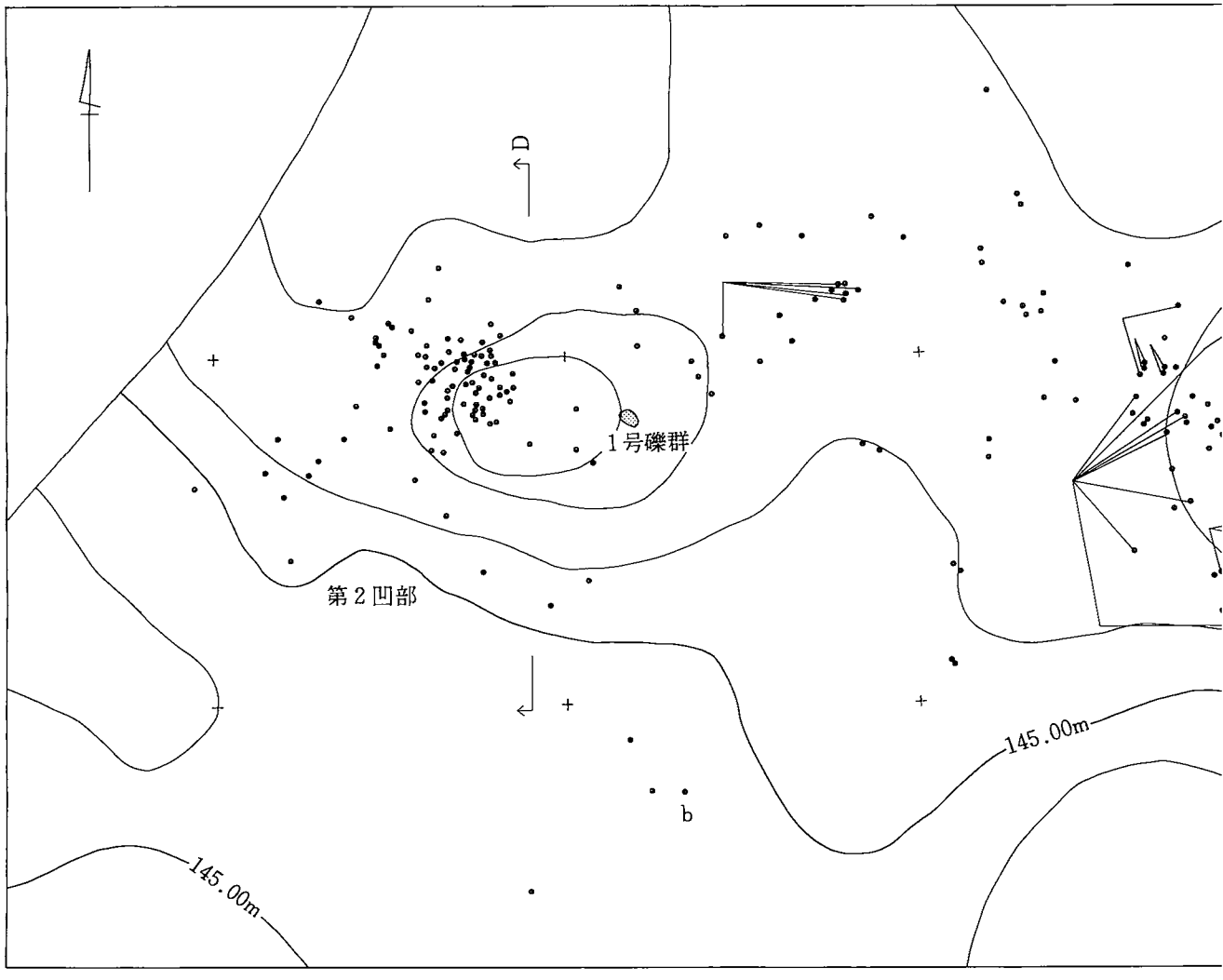
第3凹部の標高144.25mの等高線で表現された部分は、楕円形を呈する（長軸約11m、短軸約8m)。この楕円形の西端部と標高144.25mの等高線で表現された第1凹部の東端部との直線距離は約3.5mを測る。遺物は凹部内の南側に多く分布しており、接合関係は凹部内だけに認められる。

第1凹部～第3凹部出土遺物の垂直分布（第201図）

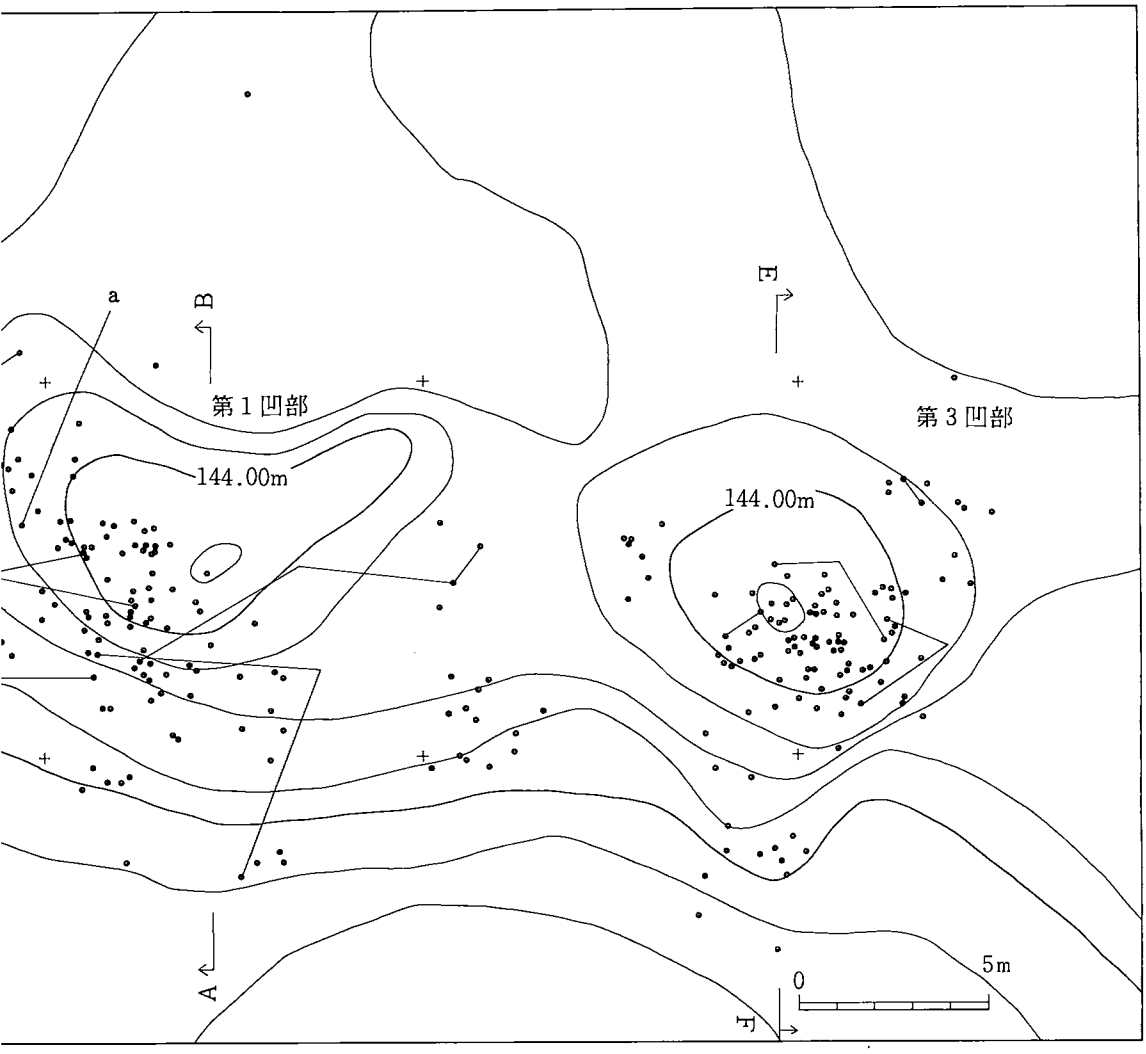
第201図は各凹部の断面図に遺物の垂直分布状態を示したものである。各凹部とも傾斜に沿っ



第201図　第1・第2・第3凹部断面図



第202図　第1・第2・



第3凹部出土遺物分布図

た状態で遺物が分布している。出土した遺物の殆どが小さな石器・剥片・破片である中で、大型の自然礫が出土していることに注目したい。第201図・第202図に示した第１凹部内のａ地点より出土した礫は約２ kg の重量がある。また、第202図ｂ地点より出土した礫の重量は約1.5kgである。ａ地点は第１凹部の底部に近い箇所であり、その出土位置も重要になる。

⑷礫群について

１号礫群（第203図）

１号礫群は第２凹部の斜面に沿った状態で検出された。礫はIX層の上面に一部分が埋まった状態であった。礫群は24個の礫で構成され、ほぼ円形を呈する範囲に分布している（径約50cm）。これらの礫間で、５例の接合関係が見られる。石材は頁岩（１）、砂岩（23）である。赤化現象（肉眼観察による）が認められる礫は５個である（約21％）。礫の総重量は約6.1kg を量る。

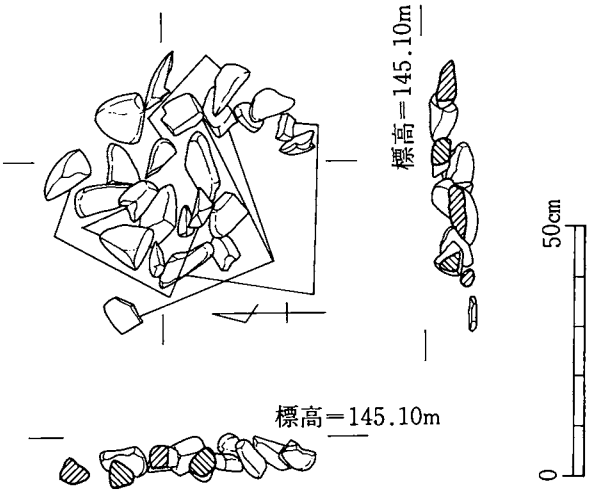
２号礫群（第204図）

２号礫群はIX層上面で検出した。この礫群は14個の礫で構成され、楕円形を呈する範囲に分布している（長軸約60cm、短軸約40cm）。礫はすべて完形の砂岩であり、総重量約2.5kg を量る。礫の赤化現象（肉眼観察による）は認められない。

２．石器について

⑴出土した石器

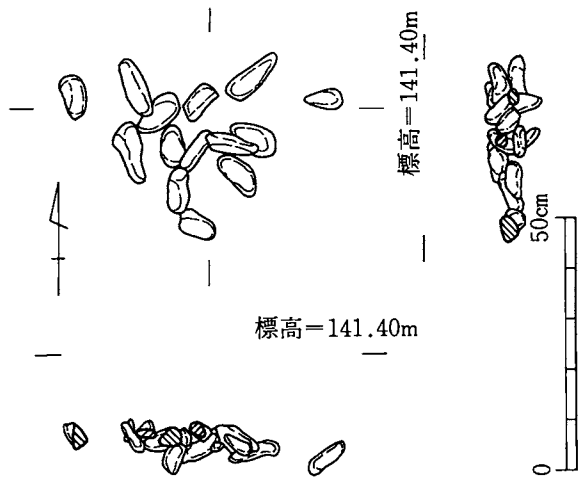
Ⅷ層より出土した石器は次の通りである。三稜尖頭器（21点）、台形（様）石器（９点）、剥片尖頭器（10点）、ナイフ形石器（５点）、石核（７点）、スクレイパー（２点）、磨石類・敲石（10点）、石皿・台石（５点）、二次加工剥片（18点）、使用痕のある剥片（30点）、剥片・破片（554点）、自然石（３点）。Ⅷ層以外の層より出土した先土器時代の石器もある。それらは三稜尖頭器（３点）、台形（様）石器（２点）、剥片尖頭器（１点）、ナイフ形石器（３点）である。



第203図　１号礫群実測図

⑵各凹部と第４ブロックの石器組成（第205図・第７表）

第１～第３凹部と第４ブロック、第１凹部と第２凹部との中間地点より出土した石器組成は第７



第204図　2号礫群実測図

表に示した通りである。すべてに共通することは、ナイフ形石器の出土数が少なく主要な石器にならないことである。第1凹部で特徴的なことは、台形（台形様）石器、剝片尖頭器、磨石・敲石が他の凹部・ブロックの出土数に比べて多いことである。特に、台形（台形様）石器は他の凹部・ブロックでは出土していない。第2凹部は総出土数からすると石器の出土が少なく、剝片・破片の出土数が多い。第3凹部では三稜尖頭器・剝片尖頭器・ナイフ形石器の組み合わせである。第4ブロックで特徴的なことは三稜尖頭器の占める割合が高く、主要な石器になる。

⑶第1凹部出土の石器

剝片尖頭器（第206図）

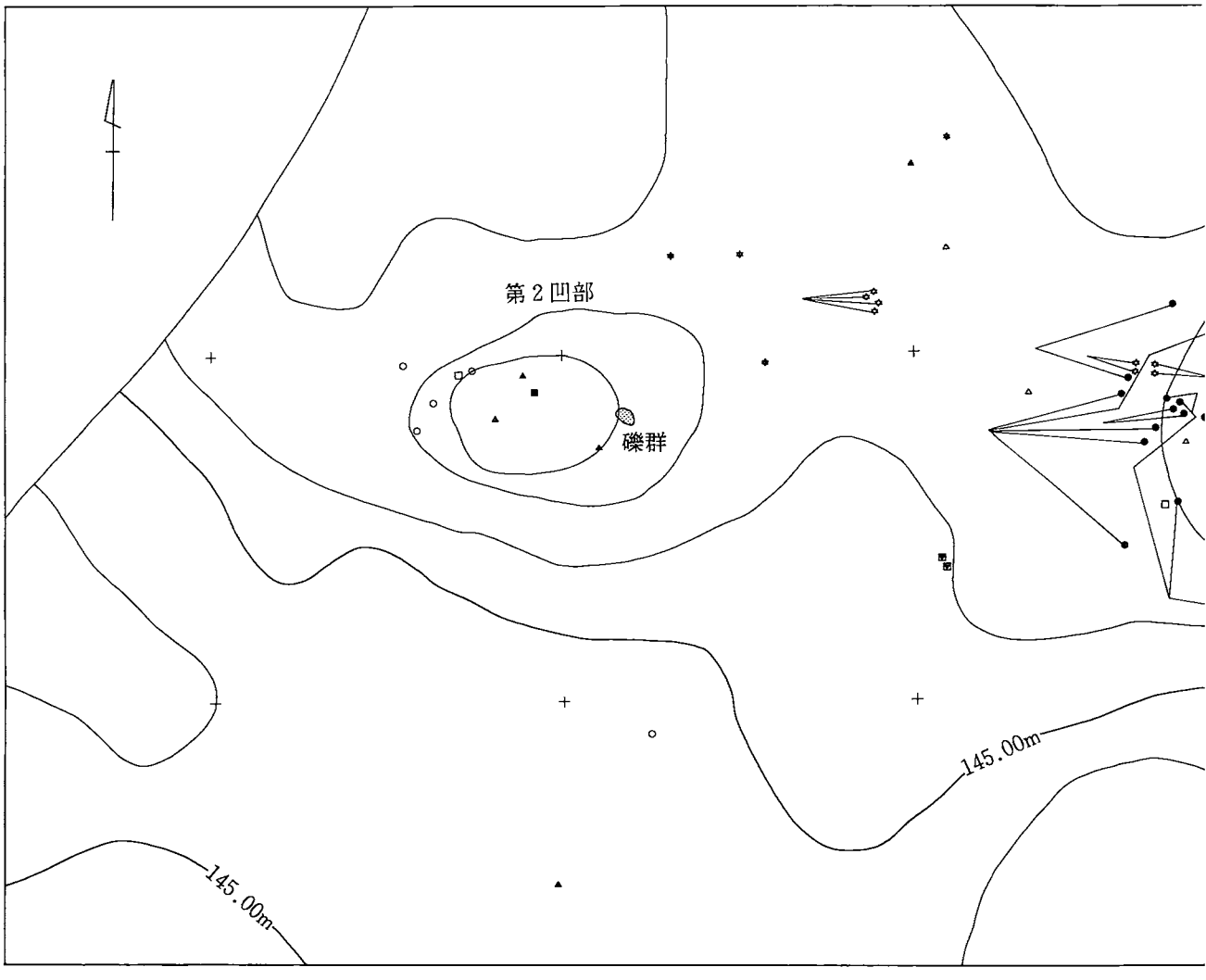
1～3・6は打面が残る縦長剝片を素材にし、基部に抉り込みをもつ。すべて先端部を欠損している。基部の抉り込みは裏面からの調整剝離で作り出されている。2の抉り込みは深く、左右側面から行われている。1・3の抉り込みは右側面が深く、左側面が浅い。6の抉り込みは左右側面とも浅く、基部表面に自然面が残る。1・2・6（1剝離面を除く）の左側面には、調整剝離が裏面より行われる。3左右側面には裏面より調整剝離が行われている。

三稜尖頭器（第206図）

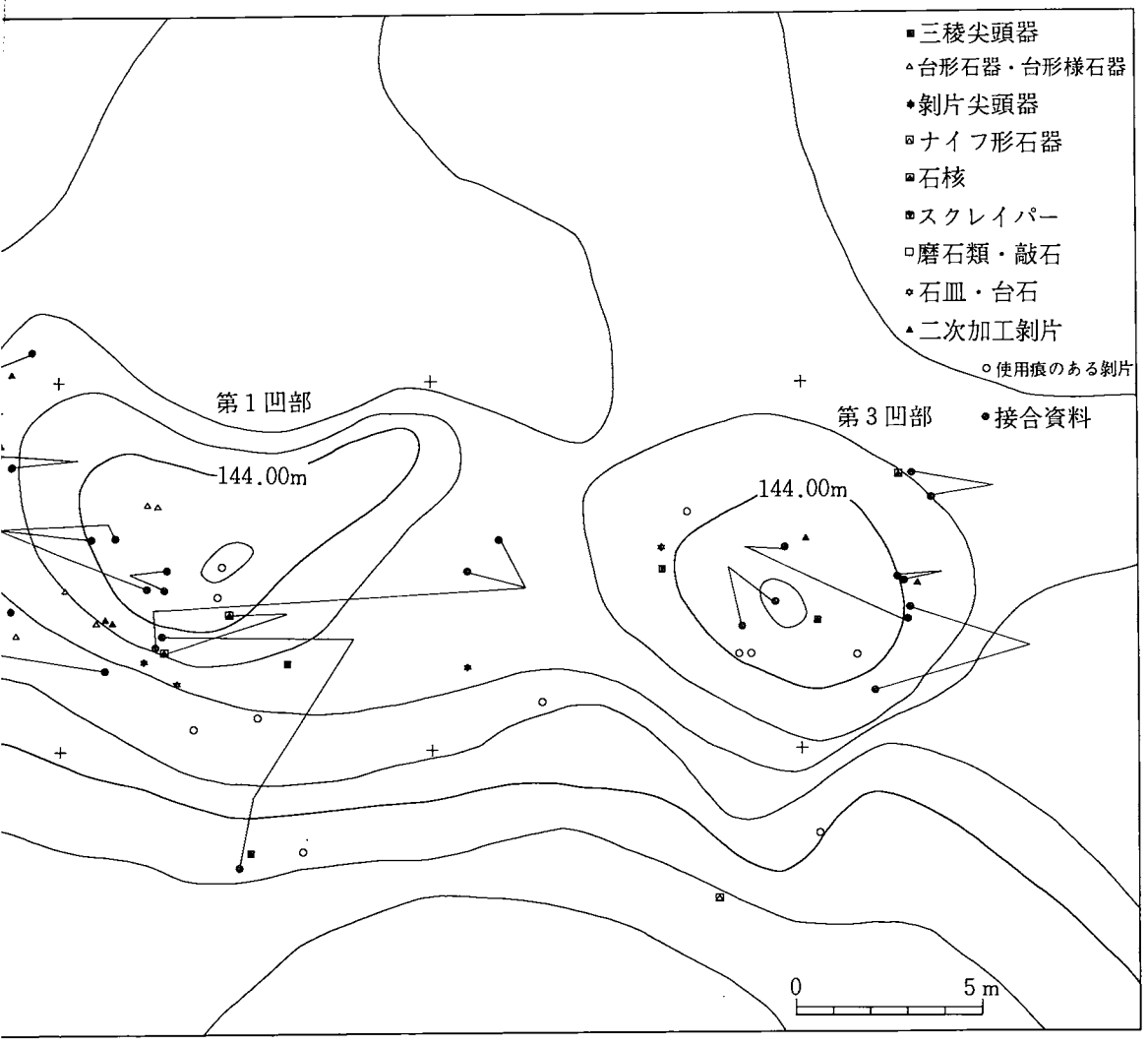
4・5は三面加工の三稜尖頭器である。4は先端部と体部下半分、5は体部下半分が欠損している。4は幅広な縦長剝片を素材にしたもので、左右側面の調整加工は表面からも行われているが、主要な加工は裏面からのものである。主要剝離面には左右側面より調整加工が行われている。5の左側面は表裏両面より調整加工が行われている。右側面の調整加工は一剝離面を除いて表面からのものである。主要剝離面の調整加工は左右側面からのものである。

台形石器・台形様石器（第207図）

1～8が第1凹部より出土したものである。9はブロックを形成していないO－12グリッドより出土した。1は他のものと比べると小型の台形石器であり、左右側縁部には調整剝離があまり施されず、切断面を多く残す。刃部は直刃である。2～7は台形石器で、左右側縁部には丁寧な調整剝離が行われている。調整剝離は裏面からのものが殆どであるが、補助的に表面から施しているものもある。3の表面には自然面が残り、7の表面には平坦にするための調整加



第205図


■三稜尖頭器
▲台形石器・台形様石器
✱剝片尖頭器
▨ナイフ形石器
▣石核
▩スクレイパー
□磨石類・敲石
✲石皿・台石
▲二次加工剝片
○使用痕のある剝片
第1凹部
144.00m
第3凹部
●接合資料
144.00m
0
5m

石器分布図

凹部／ブロック ／石器	第1凹部	第2凹部	第3凹部	第4ブロック	第1凹部、第2凹部の中間地点	器種別計
三稜尖頭器	2	1	2	15		20
台形(様)石器	8					8
剥片尖頭器	4		1		4	9
ナイフ形石器			1	1	1	3
スクレイパー					1	1
磨石・敲石	5	1		3	1	10
石皿・台石	2		2		1	5
二次加工剥片	6	4	2	3	2	17
使用痕のある剥片	5	5	7	6		23
石核	3		1	2		6
剥片・破片	97	114	129	214		554
計	132	125	145	244	10	

第7表　凹部・ブロック別石器組成表

工を施す。刃部は3～6が直刃や直刃に近く、2・7が偏刃である。8・9は台形様石器であり、左右側縁部には裏面からの調整剥離がある。9の表面には平坦にするための加工を施す。刃部は8が偏刃、9が直刃である。8の基部には部分的に自然面が残る。

二次加工剥片（第208図）

1～4は横長剥片を素材にしており、1が下端部・右側縁部、2～4が側縁部に二次加工を施す。3は表裏面、2・4は裏面に自然面を残す。5・10は縦長剥片を素材にして、側縁部に二次加工を施す。

使用痕のある剥片（第208図）

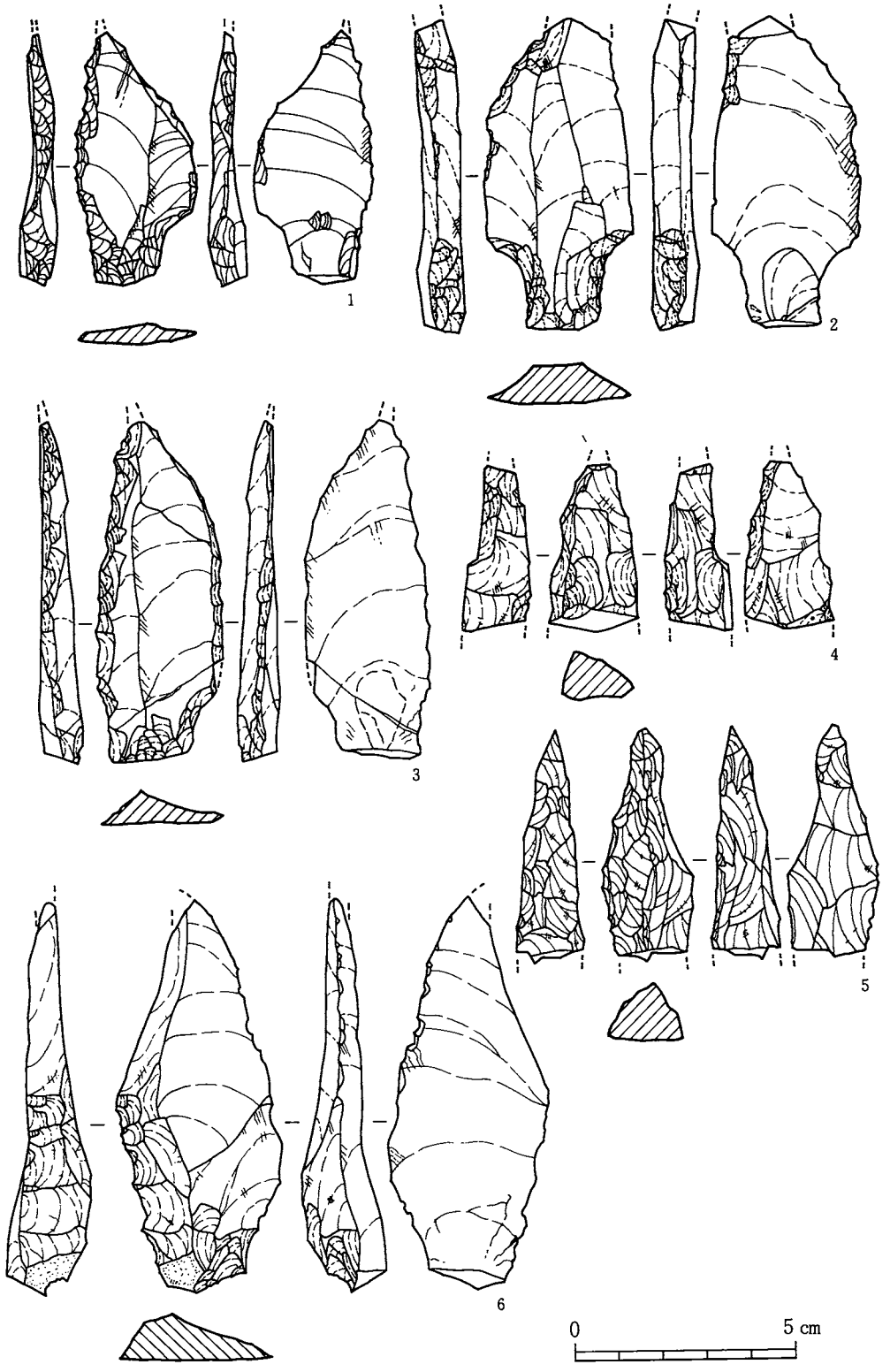
6～9・11は縦長剥片を素材にしたものである。どの剥片にも側縁部に使用痕が認められる。8には先端の尖った部分にも使用痕がある。

接合資料（第209図・第210図）

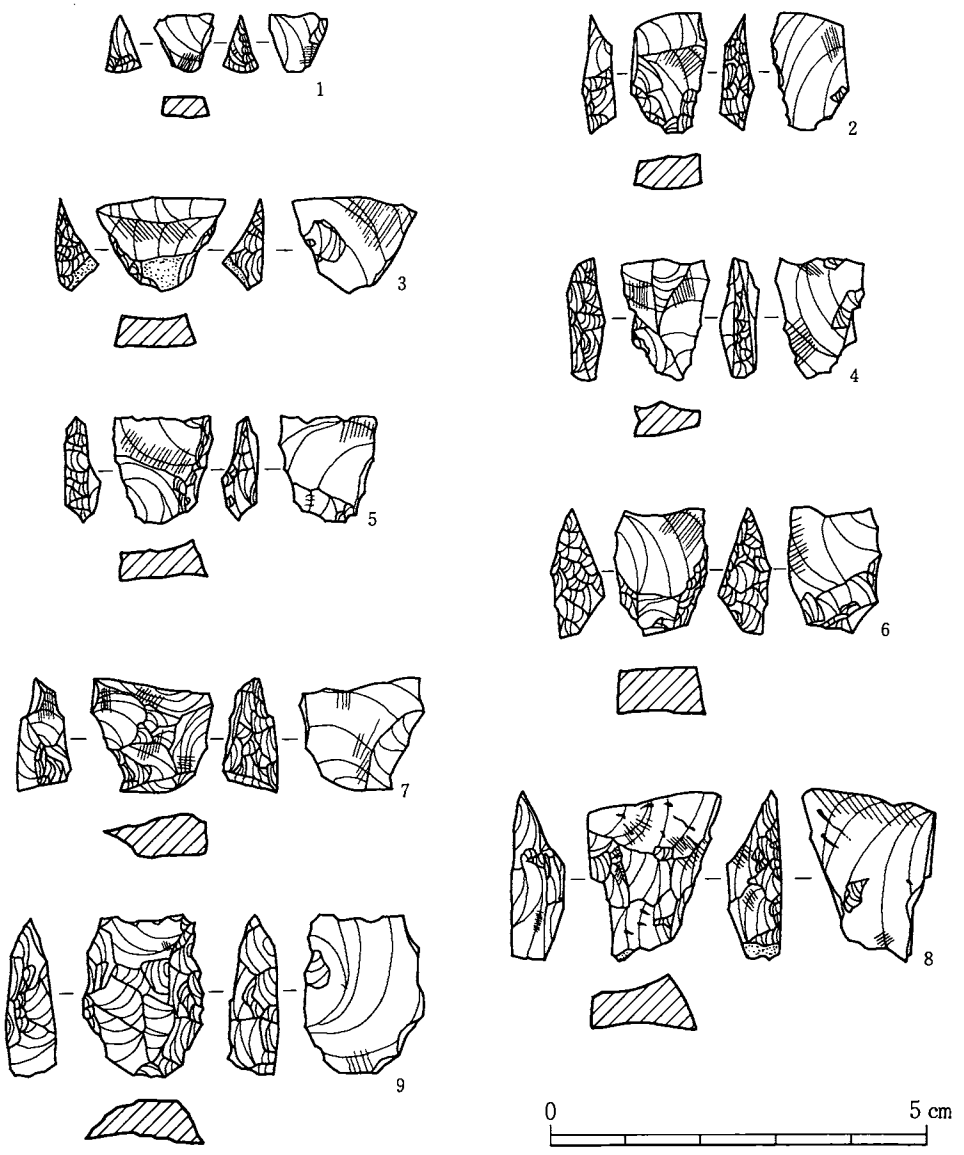
第209図はK－9グリッド出土剥片1点、K－10グリッド出土剥片7点、J－10グリッド出土剥片1点の計9点の剥片が接合している。これは縁辺部より加撃して横長剥片を作り出した石核である。第210図2はK－9グリッドより出土した2点が接合した石核である。2では縁辺部からの剥離で横長剥片を作り出している。1はK－9グリッド、3はK－10グリッドより出土した各々2点が接合している。接合したものは両者とも縦長剥片である。4・5はK－9グリッドより出土した各々3点が接合している。4・5とも接合したものは横長剥片になる。

(4)第2凹部出土の石器

三稜尖頭器（第211図）



第206図　石器実測図（第1凹部）



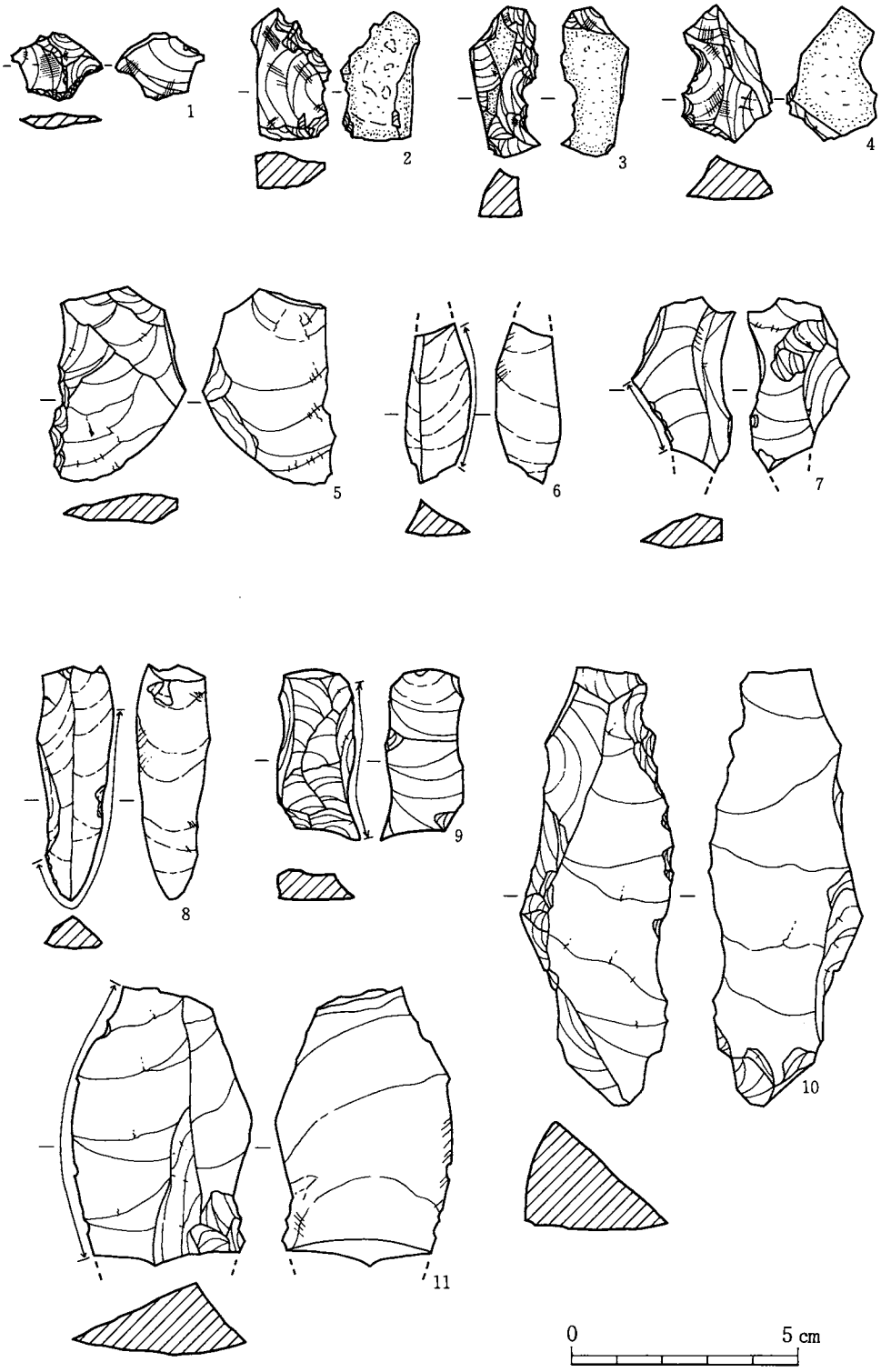
第207図　石器実測図（1～8 第1 凹部）

1は三面加工の三稜尖頭器である。左右側面は主要な調整剝離を裏面より行い、補助的な調整剝離を表面側から施している。主要剝離面は左右側面より調整剝離を行っている。先端部と基部が欠損している。

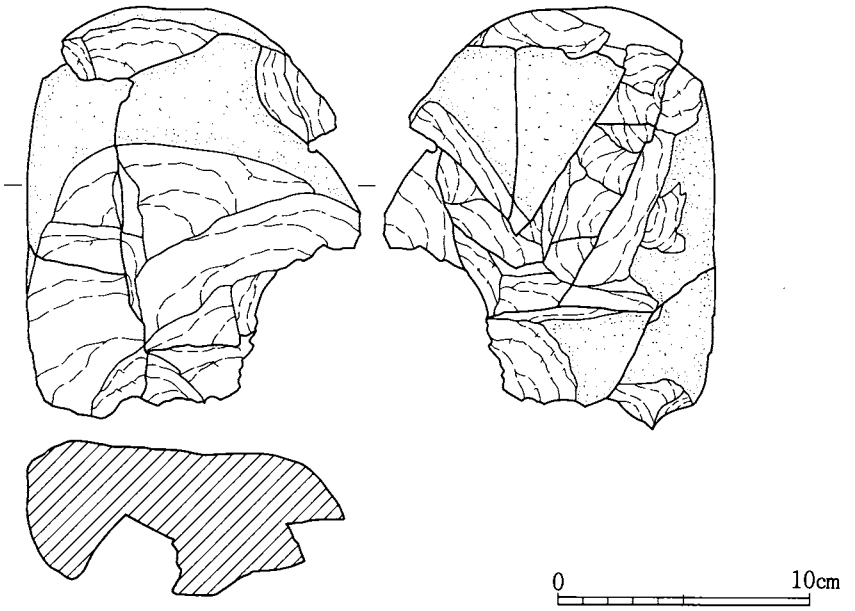
二次加工剝片（第211図）

2・3は縦長剝片を素材にしたものである。2には下端部、3には下端部と側縁部に二次加工を施す。4・5は横長剝片を素材にしている。二次加工は4が側縁部、5が下端部にある。

使用痕のある剝片（第211図）



第208図　石器実測図（第1凹部）



第209図　石器実測図（接合資料）

6・8・9は幅広い縦長剥片を素材にしている。それぞれ側縁部に使用痕が認められる。7は横長剥片を素材にしたもので、下端部に使用痕がある。

⑸第3凹部出土の石器

三稜尖頭器（第212図）

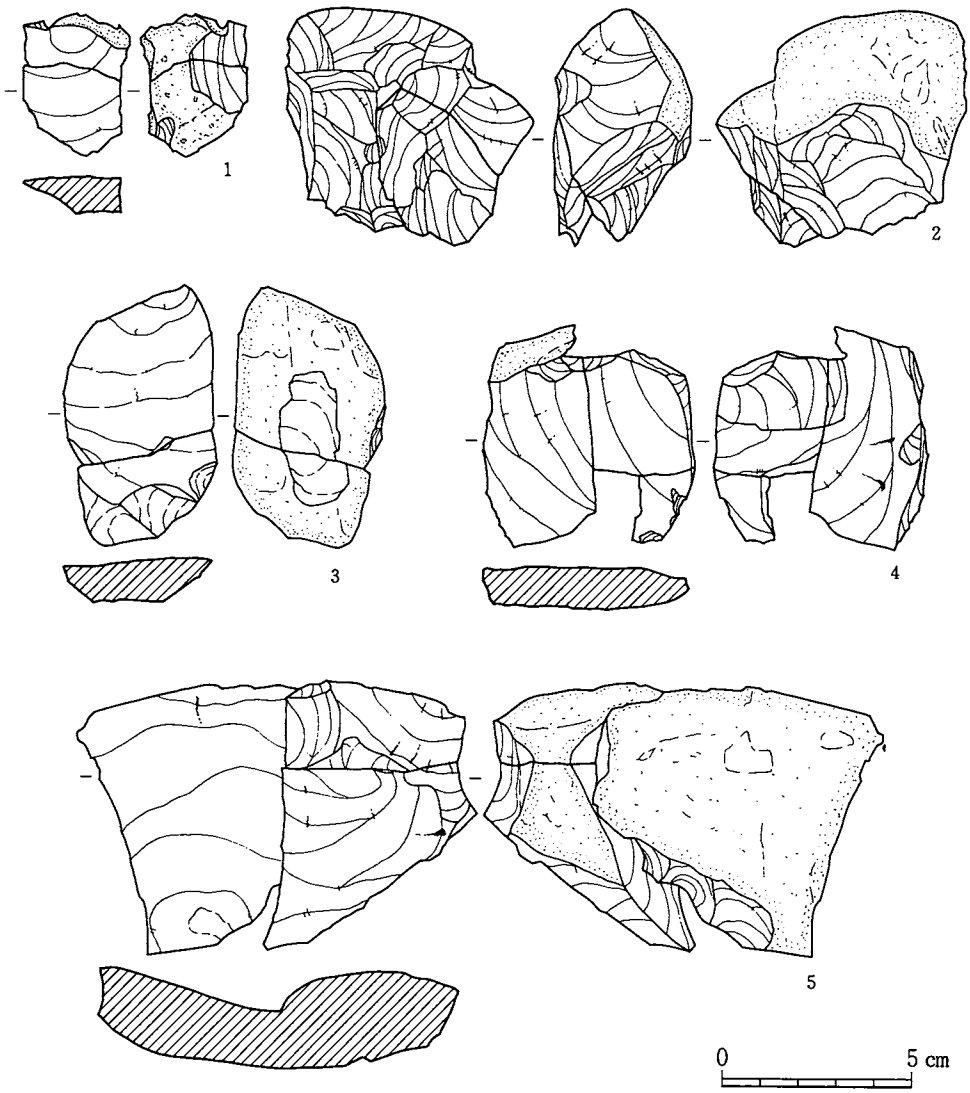
1は縦長剥片を素材にした二面加工の三稜尖頭器である。主要剥離面は調整剥離を行わず、素材のままである。左右側面には表裏面より調整剥離を施す。先端部と体部から基部にかけての部分が欠損している。4は縦長剥片を素材にした三面加工の大型な三稜尖頭器である。主要剥離面の調整加工は綿密なものでなく、二箇所に平坦にするための剥離を側縁部より行う。左右側面の調整剥離は殆ど裏面より施しているが、右側面の一箇所が表面より行っている。先端部が欠損している。

剝片尖頭器（第212図）

2は裏面に打面を残した縦長剥片を素材にしている。下端部の左右側面に調整剥離を行って抉り込みを作っているが、深いものではない。左側面から先端部にかけての部分には、裏面からの調整剥離がある。

ナイフ形石器（第212図）

3は裏面に打面を残した縦長剥片を素材にし、二側縁部に刃潰し加工をもつナイフ形石器である。右側縁部の調整加工は下端部付近に裏面より施したもので、左側縁部の調整加工は全体に及び、裏面から行われている。刃部の一部分が欠損する。



第210図　石器実測図（接合資料）

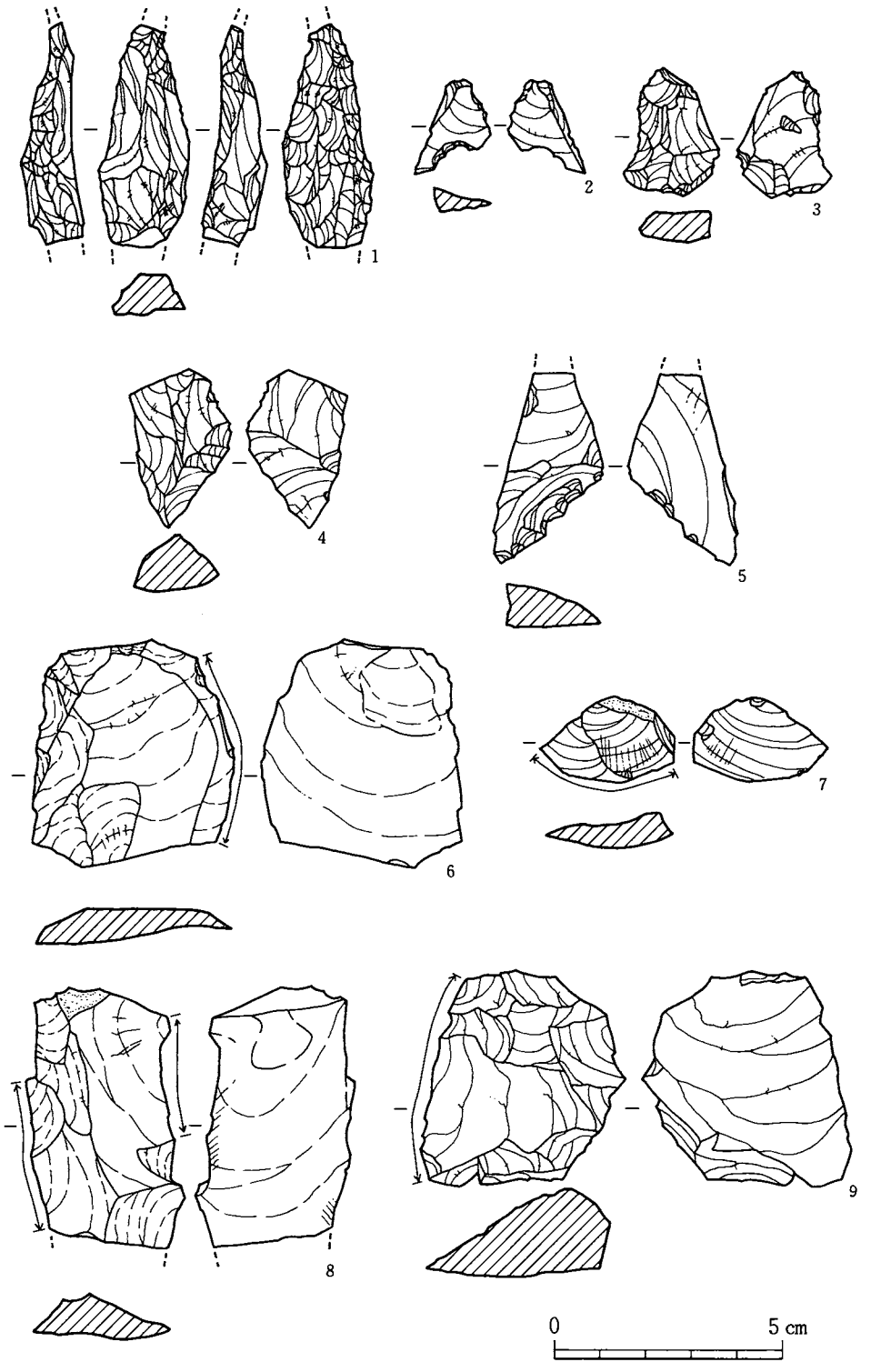
二次加工剝片（第213図）

1は横長剝片を素材にし、側縁部に二次加工を施す。2は縦長剝片を素材にしたもので、右側縁部に二次加工を行っている。下半分が部分的に欠損している。

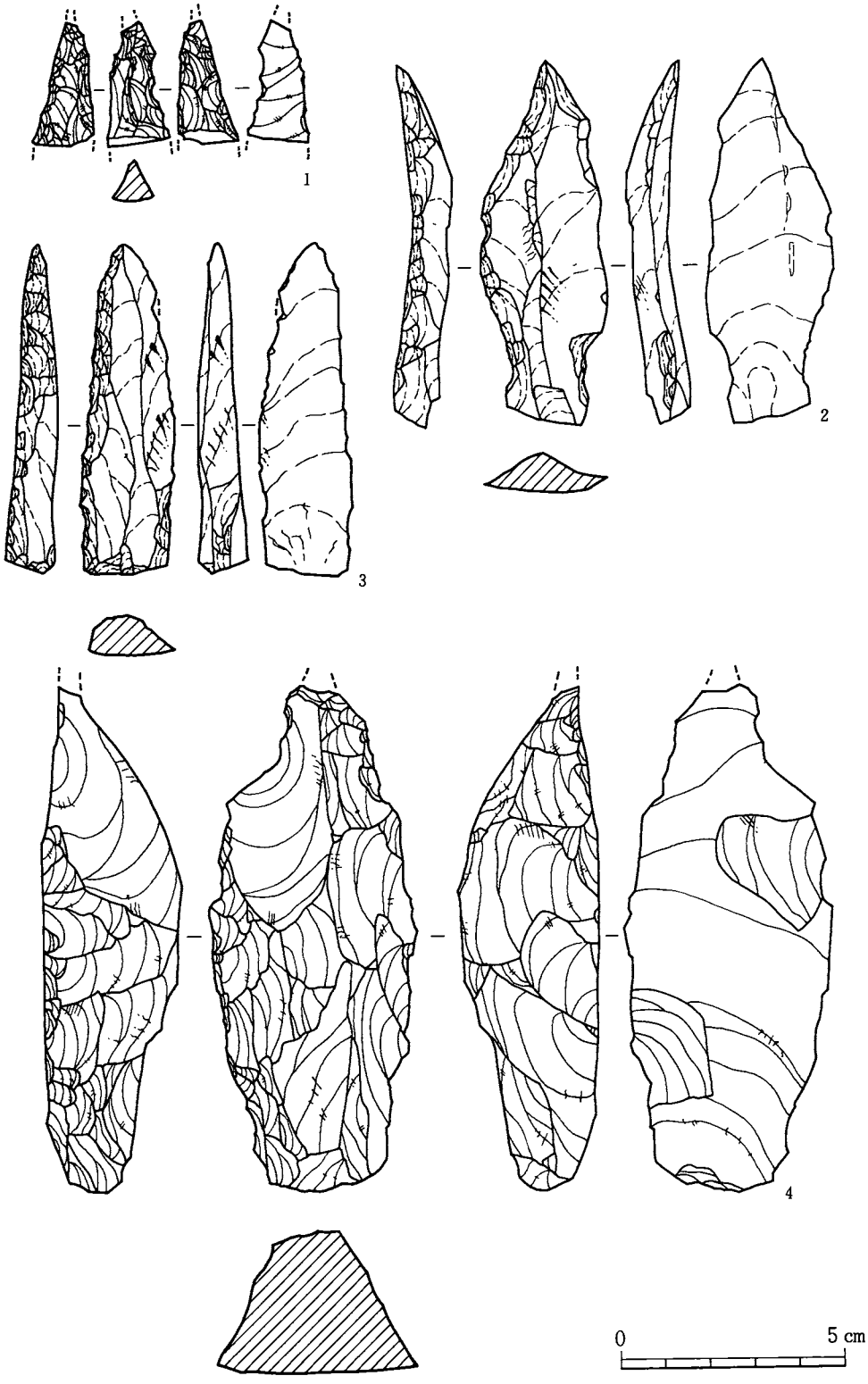
使用痕のある剝片（第213図）

3は縦長剝片の左右側縁部に使用痕がある。体部の下半分が欠損している。4・5は横長剝片を素材にしたものである。4は左側縁部、5は下端部・左側縁部に使用痕が認められる。4は上下両端、5は右端部が欠損している。

石核（第214図）



第211図　石器実測図（第２凹部）



第212図　石器実測図（第3凹部）

四面を使用した石核である。四面とも縁辺部より加撃して、横長剝片を作り出している。

接合資料（第215図）

1はK－8グリッドより出土した二剝片、2～5はK－7グリッドより出土した各々二剝片が接合している。1～5において、接合した資料は横長剝片を加撃して得られた剝片である。

⑹第1凹部と第2凹部の中間地点出土の石器

剝片尖頭器（第216図）

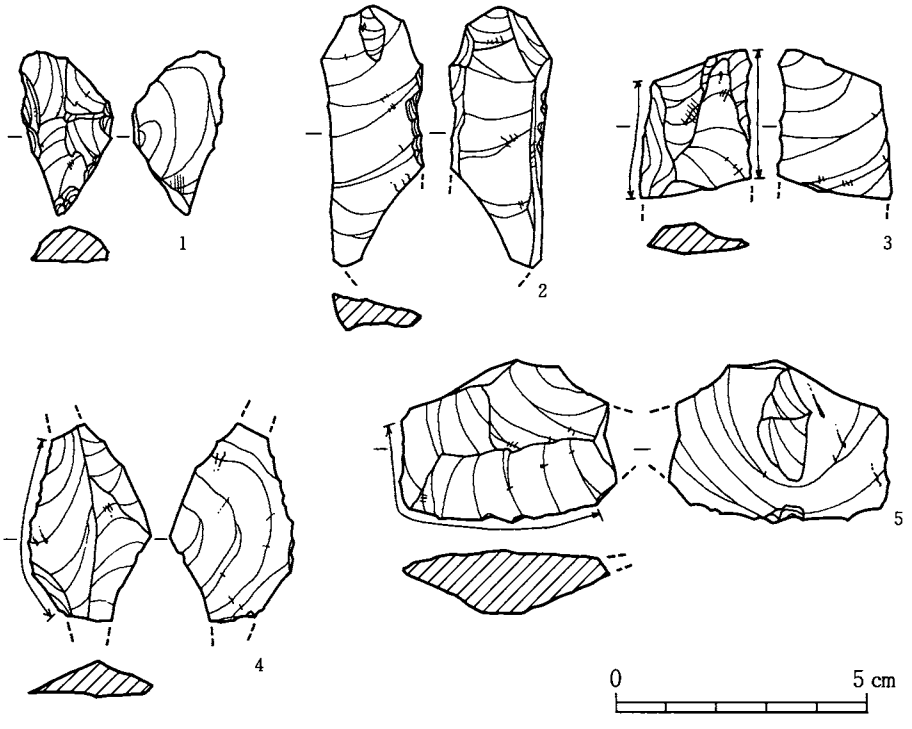
1・2・4・6は裏面に打面を残した縦長剝片を素材にしており、基部の形状が二種類ある。2・6の基部は左右両側面よりほぼ同じ深さで抉り込んでいる。1・4は基部を左右両側面より抉り込んでいるが、抉り込みは右側面の方が左側面より深い。1・6は先端部と体部を欠損しており、残存している側面部には調整剝離は行われていない。2・4の左側面部には裏面より調整剝離を施している。2は完形、4は先端部が欠損している。

ナイフ形石器（第216図）

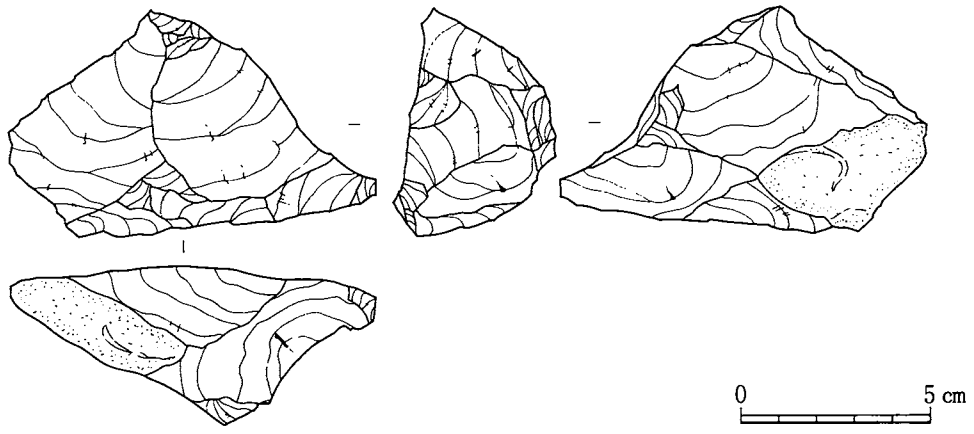
3は裏面に打面を残した縦長剝片を素材にしている。左側縁部の基部から体部中位にかけての部分に、裏面から施された調整加工がある。先端部が欠損している。

スクレイパー（第216図）

5は縦長剝片を素材にしたものである。右側面の表裏面には調整剝離が行われている。左側



第213図　石器実測図（第3凹部）



第214図　石器実測図（第3凹部）

面には自然面が残り、下端部が欠損している。

二次加工剝片（第217図）

1・2とも幅広い縦長剝片を素材にしたものである。1は左側縁部、2は右側縁部に二次加工が施される。2は体部が欠損している。

(7)第4ブロック出土の石器

三稜尖頭器（第218図・第219図）

第4ブロック出土の三稜尖頭器は欠損しているものが多い。完形で出土したものは第219図1・3だけである。三面加工の三稜尖頭器は第218図1～10、第219図3・6である。2・10の主要剝離面の加工は全面に及ぶものでなく、部分的に施している。調整加工は表裏両面より行うものが殆どであるが、5の左右側面だけは裏面から行っている。9は左右側面が突出した形状を呈する。第219図6は大型の製品である。第219図1・2・5は二面加工の三稜尖頭器である。左右側面の調整剝離は表裏両面より行っている。5は大型の三稜尖頭器である。

ナイフ形石器（第219図）

4は縦長剝片を素材にした二側縁加工のナイフ形石器である。側縁部の加工は裏面より施している。先端部が欠損している。

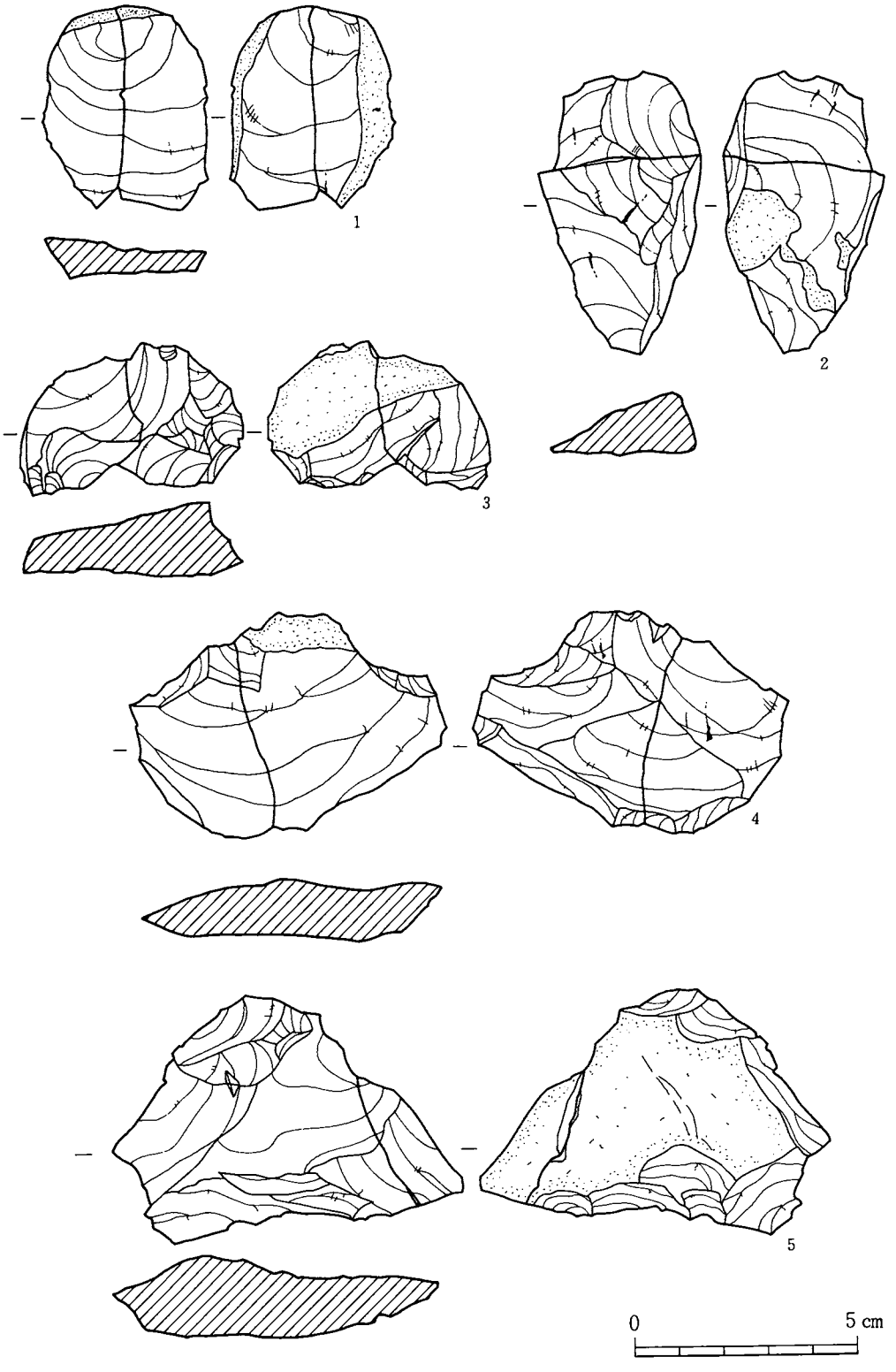
二次加工剝片（第220図）

2・3が第4ブロックより出土した。2・3とも縦長剝片を素材にしている。2は下端部と側縁部に二次加工がある。3は上端部・側縁部に二次加工を施す。下端部が欠損している。

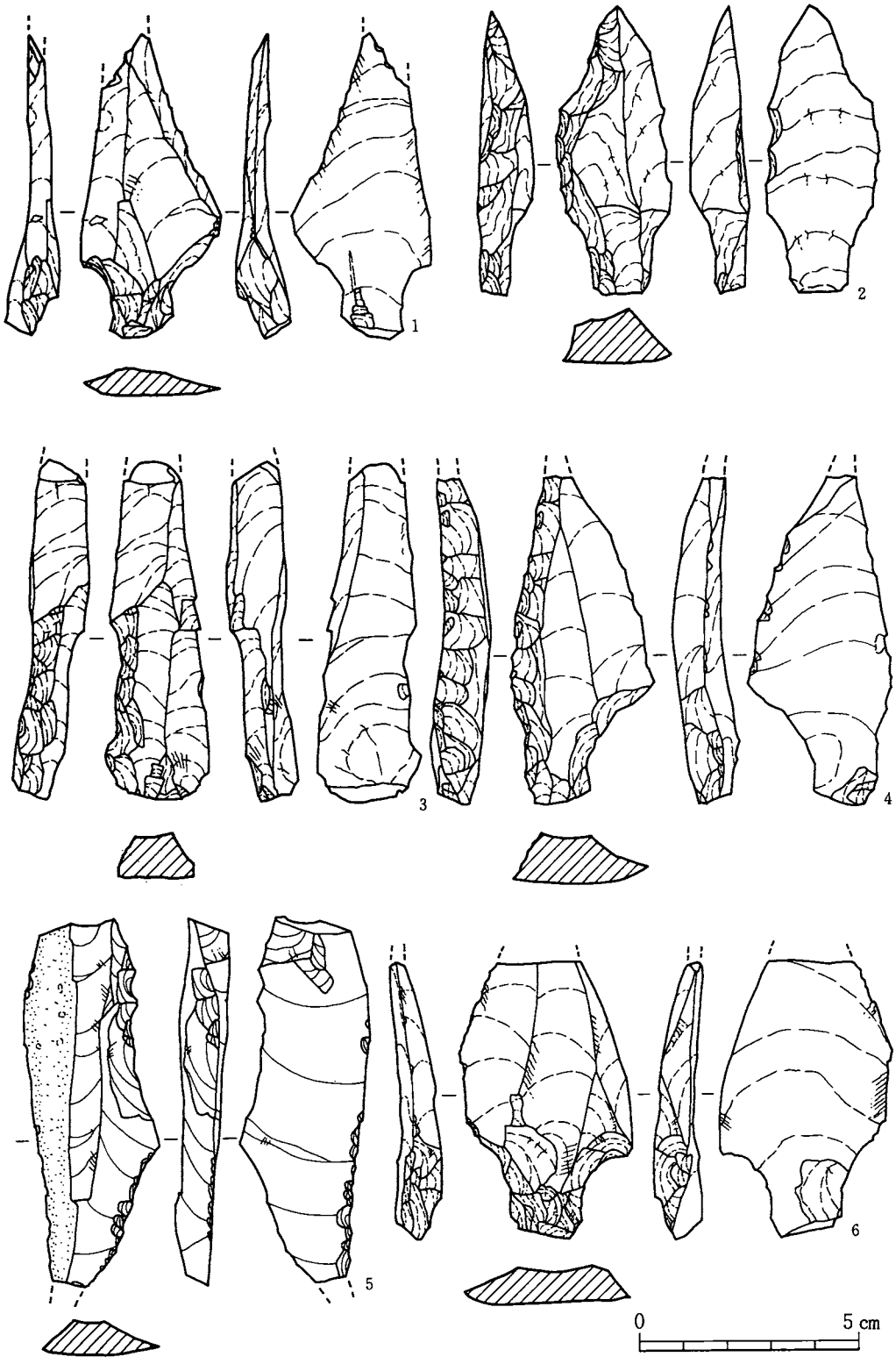
使用痕のある剝片（第220図）

5・9が第4ブロックより出土したもので、縦長剝片を素材にする。5・9は側縁部に使用痕が認められる。5には自然面が残る。

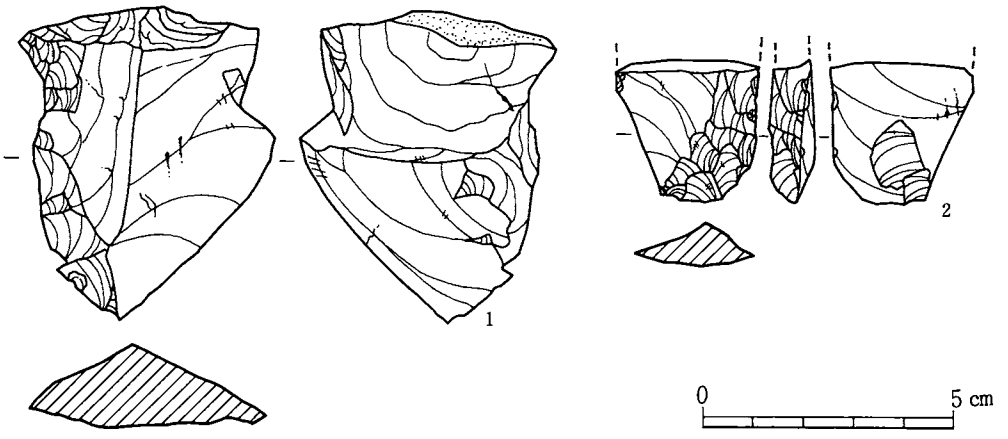
接合資料（第221図）



第215図　石器実測図（接合資料）



第216図　石器実測図（第1凹部と第2凹部の中間）



第217図　石器実測図（第1凹部と第2凹部の中間）

1が第4ブロック内の接合資料である。S－12グリッドより出土した二剝片が接合した。二剝片とも自然面が残り、接合したものは横長剝片になる。

⑻その他の箇所より出土した石器

ナイフ形石器（第222図）

1はM－12グリッドのVI層、5はE－2グリッドの近世以降と考えられる水路部分より出土し、2は表採資料である。3点とも二側縁加工のナイフ形石器である。1・2は切出形のナイフ形石器で、側縁部の調整加工は殆ど裏面から行っているが、補助的に表面からも施している。5は右側縁部と左側縁部の基部付近に調整加工を施す。主な調整加工は裏面から行い、部分的に表面から剝離している。先端部が欠損している。

三稜尖頭器（第222図）

3はH－5グリッド、4はN－10グリッドのVIII層より出土した。3は二面加工、4は三面加工の三稜尖頭器である。3の左右側面の調整剝離は裏面より施している。先端部が欠損している。4の左右側面の調整剝離は表裏両面より行っている。左側面の加工がより丁寧である。主要剝離面の調整剝離は左右側縁部より施している。

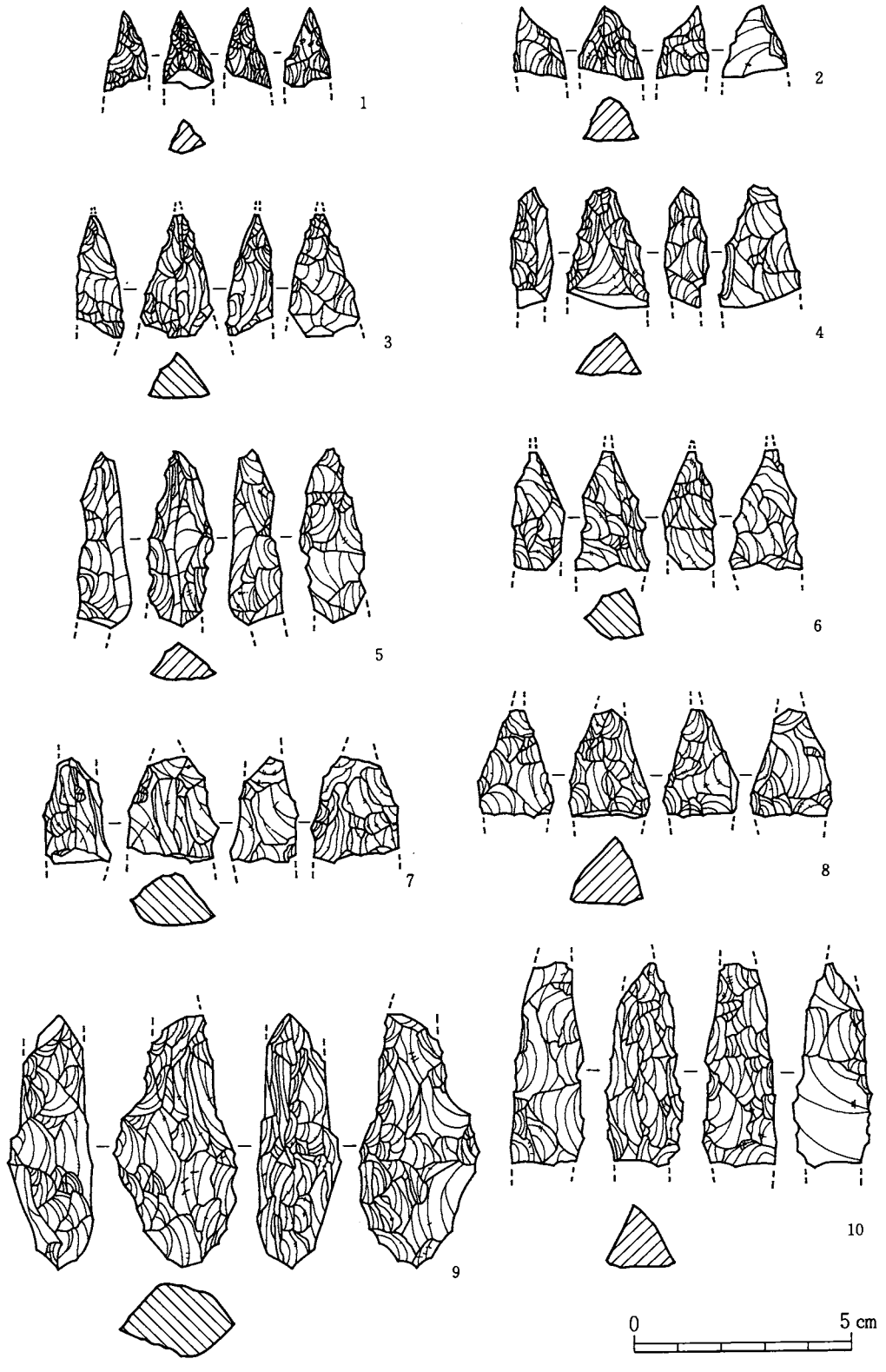
剝片尖頭器（第222図）

6はE－6グリッドのVIII層より出土した。6は裏面に打面を残した縦長剝片を素材にする。体部の上半分が欠損している。基部には左右側面より加工を施した抉り込みがある。右側の抉り込みが左側より深い。残存している左側縁部には裏面からの調整剝離がある。

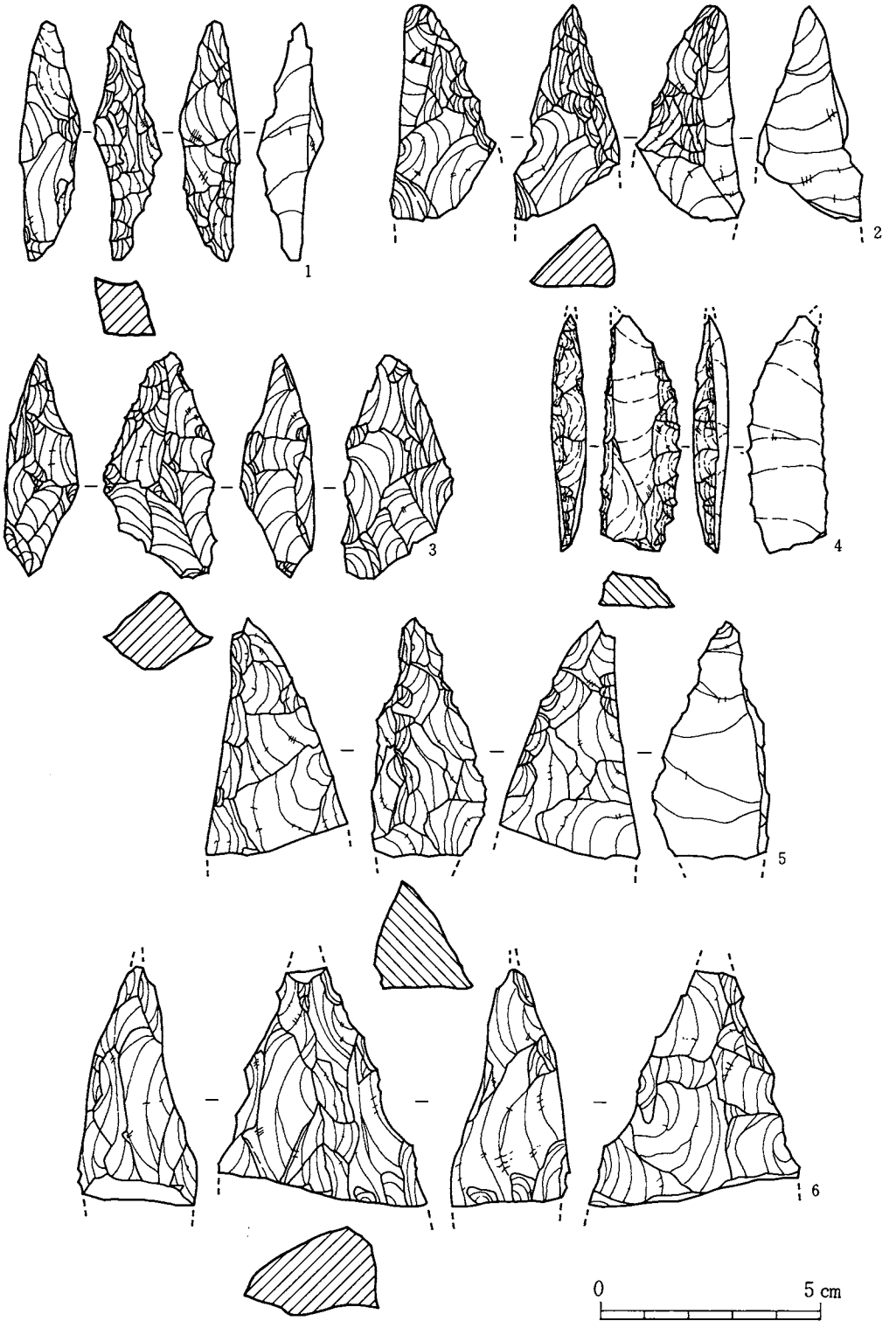
二次加工剝片（第220図）

1はV－15グリッド、6はF－3グリッドのVIII層より出土した。1・6とも横長剝片を素材にしており、側縁部に二次加工がある。両者には自然面が残る。

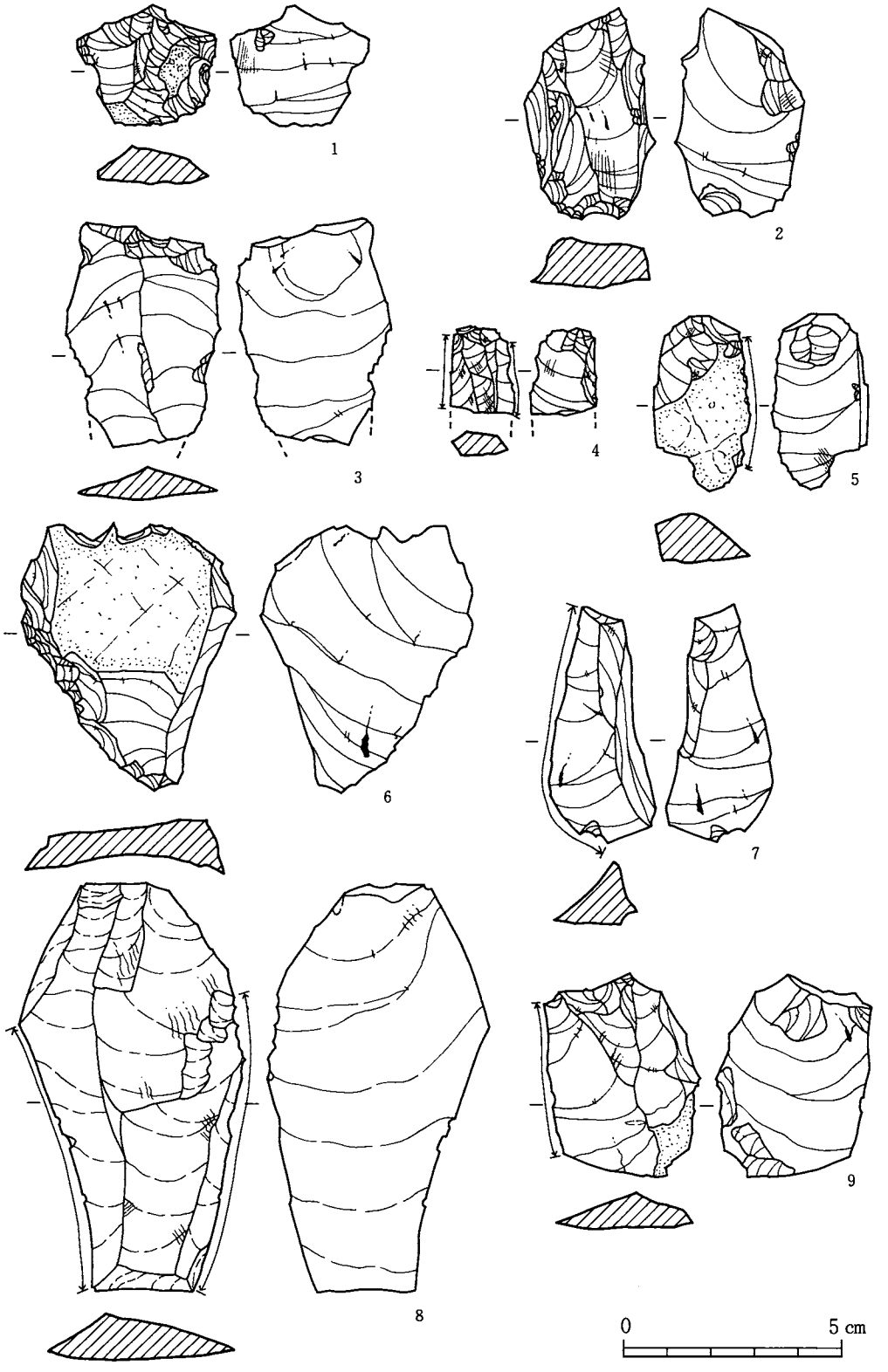
使用痕のある剝片（第220図）



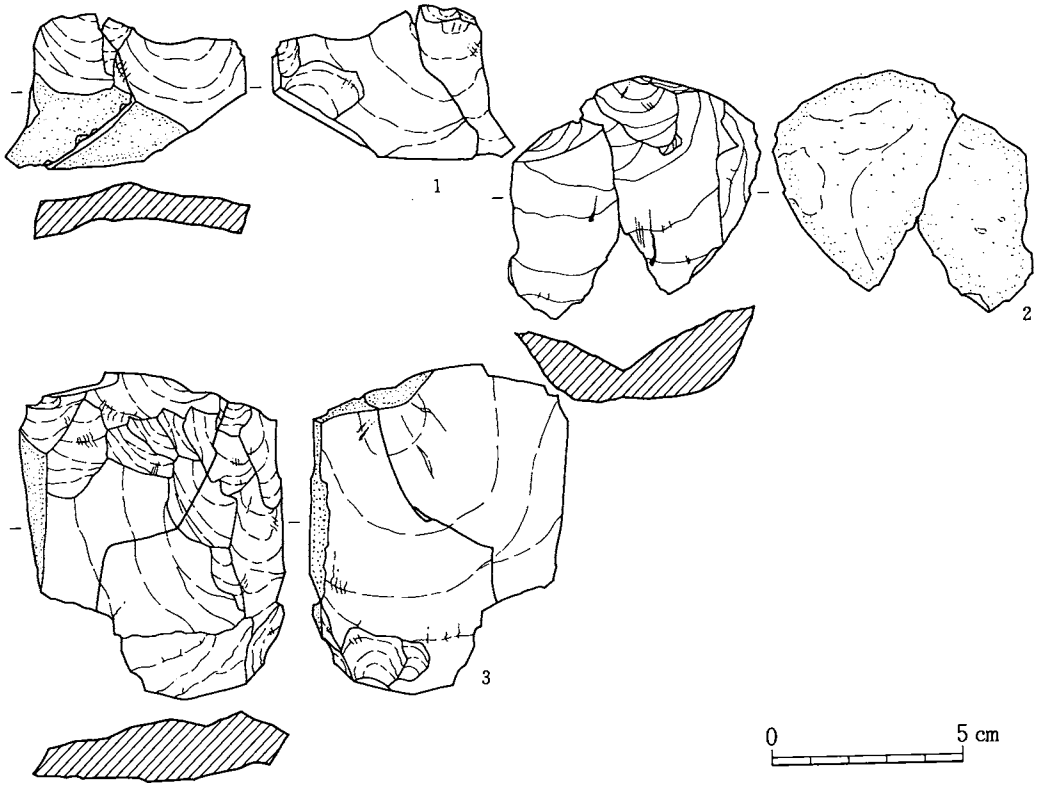
第218図　石器実測図（第4ブロック）



第219図　石器実測図（第4ブロック）



第220 図　石器実測図



第221図　石器実測図（接合資料）

4はU－15グリッド、7はV－16グリッド、8はG－6グリッドのⅧ層より出土した。3点とも縦長剥片を素材にしている。4・8は左右側縁部に使用痕がある。7は左側縁部に使用痕が認められる。

接合資料（第221図）

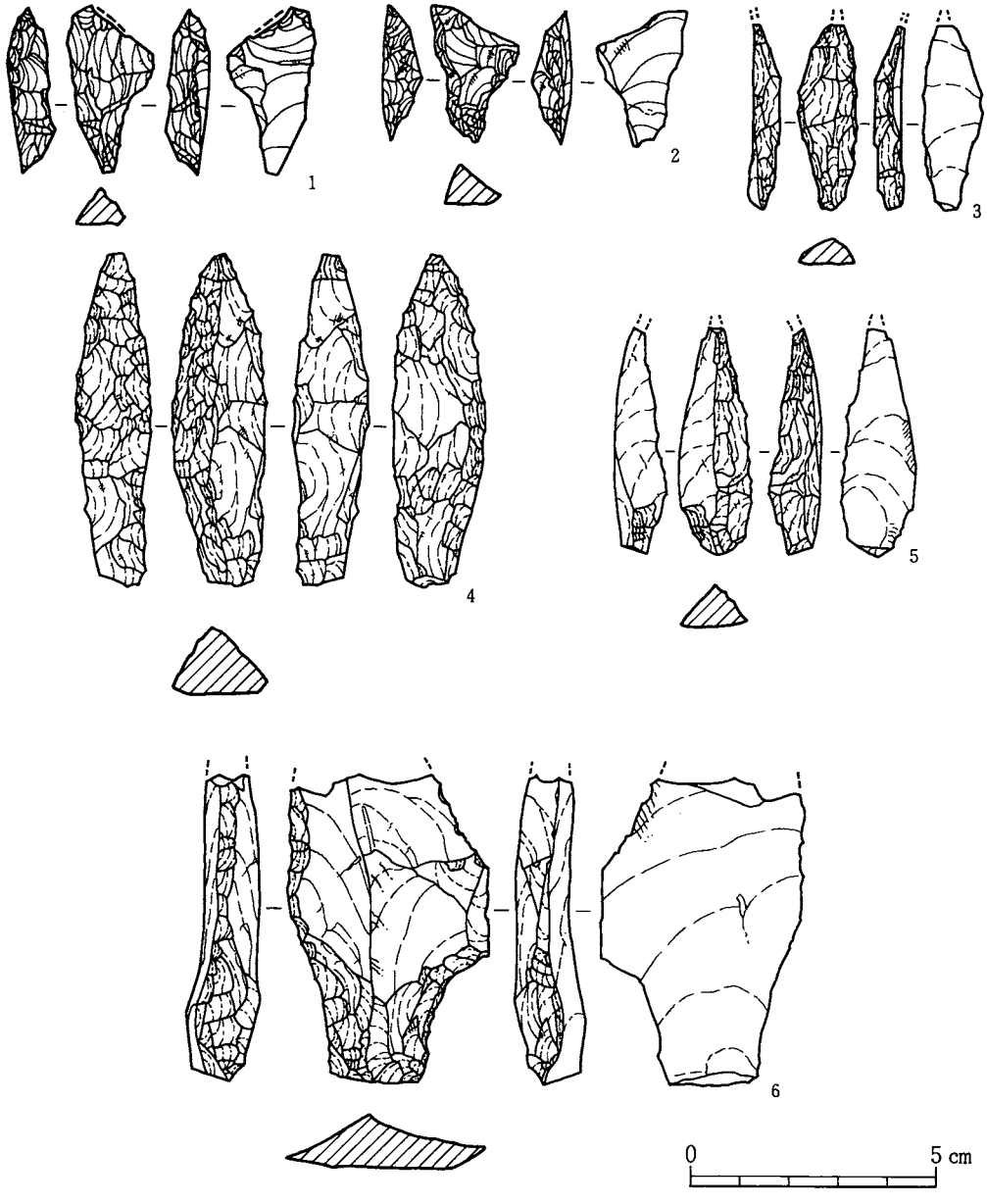
2はT－13グリッド、3はU－15グリッドのⅧ層より出土した二剥片がそれぞれ接合している。二資料は近接した距離間で接合している。接合したものは両者とも横長剥片になる。

⑼Ⅷ層出土の磨石類・敲石、石皿・台石

これまで凹部・ブロックごとに石器を見てきたが、磨石類・敲石と石皿・台石に限ってはここにまとめた。

磨石類・敲石（第223図）

1・7は第1凹部、4は第2凹部、6は第1凹部と第2凹部の中間地点、2・3・5は第4ブロックより出土した。2～4は縦長い楕円形の平面形を呈する敲石である。上下両端に敲打痕が認められる。5は体部の上半分を欠損しており、残存部している下端部に敲打痕がある。1・6・7は磨痕と敲打痕をもつ磨石類である。3点とも平面形は楕円形を呈する。6は大型な磨石類で、J－11グリッドより出土した6点が接合している。その6点の中で、5点は密集



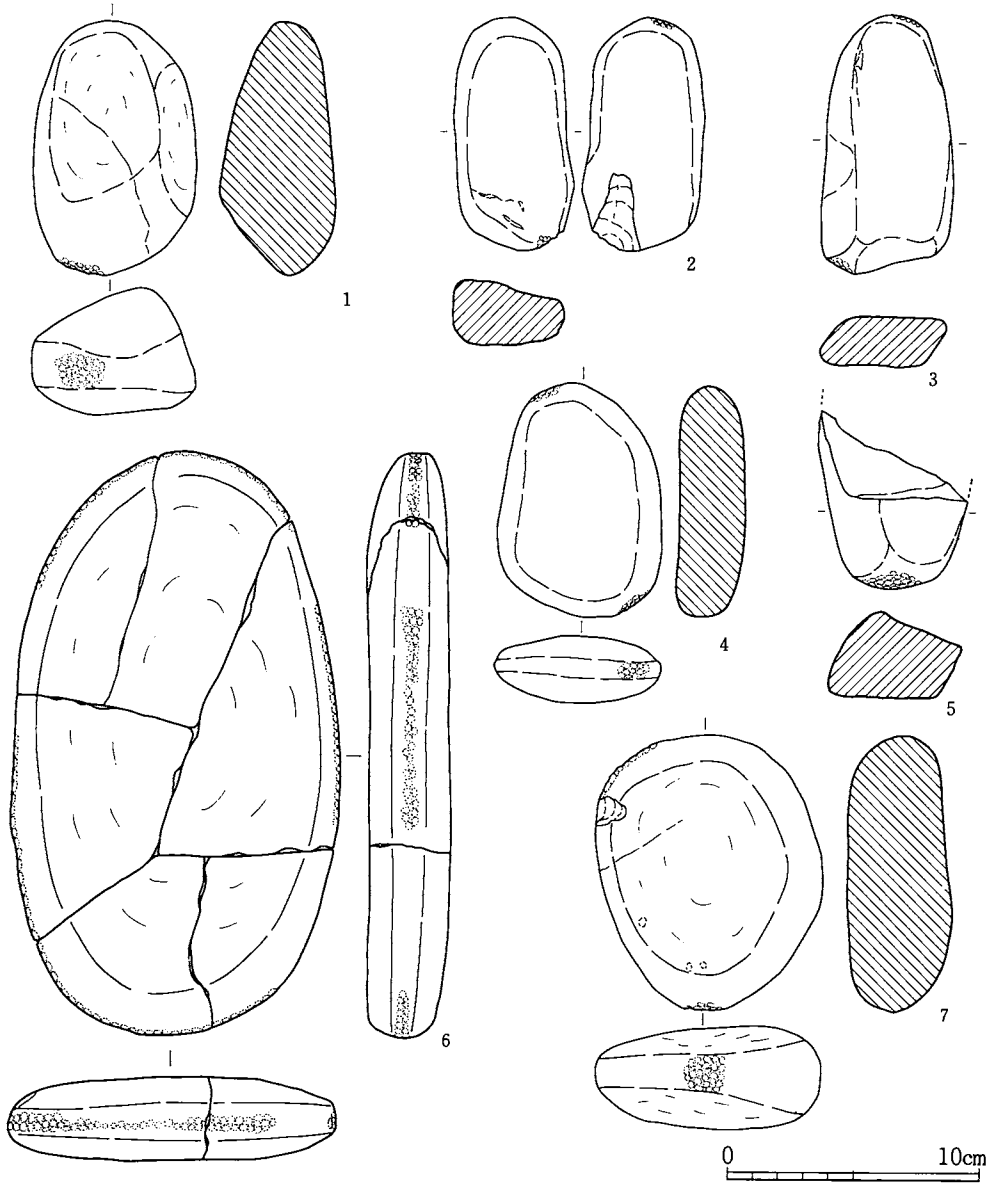
第222図　石器実測図

した状態で、残り1点がその密集地点より約4m離れた箇所より出土した。1は表裏両面に磨痕、下端部に敲打痕をもつ。6・7は表裏両面に磨痕、縁辺部に敲打痕が認められる。

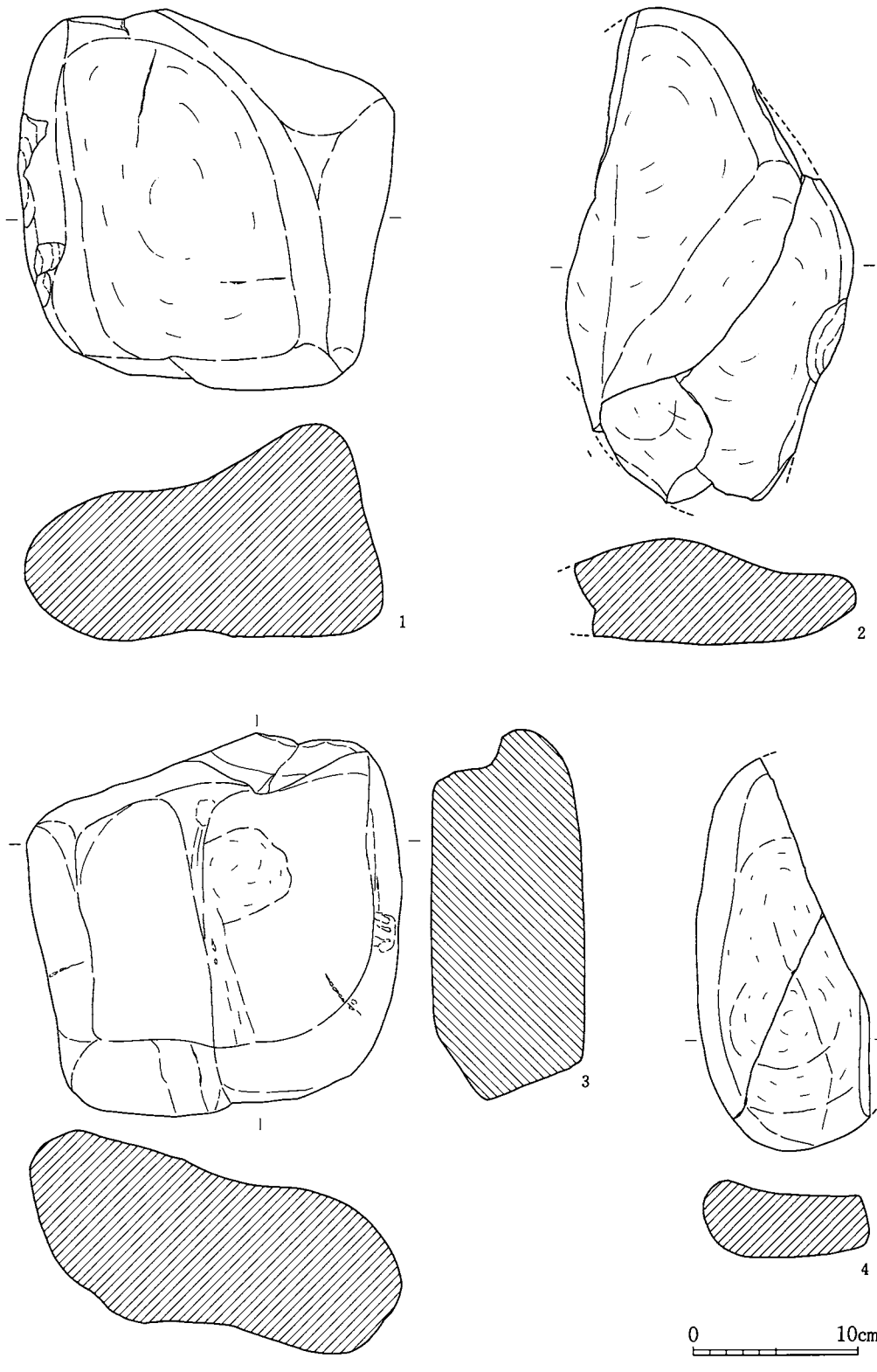
石皿・台石（第224図）

2・4は第1凹部、1・3は第3凹部より出土した。1は四角形の平面形を呈しており、表面のほぼ中央部に磨痕が認められる。断面形を見ると、磨痕のある箇所が窪んでいる。2は欠損しているが、不整な楕円形の平面形を呈すると思われる。近接して出土した三破片が接合し

ている。表面のほぼ全面に磨痕があり、断面形で見ると、その部分が窪む。3は四角形の平面形を呈しており、表面のほぼ中央部には部分的に磨痕が認められる。使用面は元々窪んでおり、その箇所を利用している。4は欠損しており、楕円形の平面形を呈すると思われる。近接して出土した二片が接合した。使用面は表面であり、磨痕が中央部から縁辺部にかけて見られる。断面形を見ると、使用箇所が僅かに窪む。



第223図　石器実測図



第224図　石器実測図

遺物観察表　凡例

土器

〈胎土記号〉

英…石英、角…角閃石、長…長石、雲…雲母、白…白色粒
赤…赤色粒、石…石粒、砂…砂粒、細…細砂粒

〈調整・文様記号〉

楕…楕円押型文（長さ×幅、長…原体長、単位cm）
山…山形押型文（山高・山間、長…原体長、単位cm）
菱…菱形押型文、同…同心円押型文、格…格子押型文
撚ａ…平行・太目の撚糸文、撚ｂ…特殊な網目撚糸
撚ｃ…連続半弧状撚糸文、撚ｄ…平行・細目撚糸文、撚…撚糸文
撚ｅ…網目撚糸文、刻…刻目、凸…凸帯、刺…刺突文
縄…縄文、沈…沈線文、貝…貝殻押引、みみず…みみずばれ状
菱凸…菱形凸帯文、地…地文、羽…羽状文
外…外器面、内…内器面、口…口縁端部、口縁近く

石器

〈石材記号〉

黒…黒曜石（Ⅰ…気泡多し、Ⅱ…アメ色、Ⅲ…黒色）
ch…チャート、安…安山岩、砂…砂岩、粘…粘版岩
頁…頁岩、竜…竜紋岩、玢…玢岩

〈欠損記号〉

石鏃
ａ…完形、ｂ～ｇ（本文参照）
石斧
Ａ…完形、Ｂ～Ｈ（本文参照）

出土層位

〈層記号〉

Ｐ…ピット覆土
地横…地層横転
撹…撹乱

〈No.〉挿図ごとのNo.と一致する。ただし、早期の第1凹部、第2凹部、第3凹部については挿図に掲載していない遺物のデータもあるため、表記法が若干異なっている。

第10図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	Ⅰ－6 Ｈ－6･7･8 Ｇ－5	Ⅱ・Ⅲ	口縁～底近	口径 37.6 胴径 38.6	淡茶褐	雲・石・砂・微	ハケ			良	
2	Ｇ－6	Ⅲ	口縁～胴	口径 22.0 頸径 18.4	淡白褐／灰褐	角・英・白・砂中	ハケ	ハケ ヘラ		良	
3	Ｑ－12	Ⅲ	頸～胴	頸径 10.3 胴径 17.5	茶褐	英・白・砂・少	ハケ			良	
4	Ｐ－12・13	Ⅲ	口縁～頸	口径 19.4 頸径 16.3	灰褐	英・角・雲・砂中				普	
5	Ｆ－8	Ⅲ	口縁～胴	口径 21.5 頸径 18.6	淡茶褐	砂・微		ヘラ		良	
6	Ⅰ－6	Ⅲ	口縁	口径 13.5	淡茶褐	砂・微				良	
7	Ｑ－12・13 Ｐ－12	Ⅱ・Ⅲ	口縁～胴	口径 21.6 頸径 19.7	淡茶褐	角・雲・砂・中				良好	
8	Ⅰ－6	Ⅲ	口縁	口径 12.7	淡茶褐	砂・微				良	

第11図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	G－7．8	III・V	底	底径 7.9 脚高 1.0	淡赤褐 ／赤褐	英・角・白・砂中	ヘラ ヘラ削り	ヘラ削り		普	
2	K－10	P.	底	底径 6.4 脚高 1.2	赤茶褐 ／淡黄褐	英・角・赤・砂少	ヘラ			良	
3	O－12	P.	底	底径 7.0 脚高 1.2	淡茶褐	角・白・石・砂中	ハケ			良	
4	F－8	III	底	底径 8.7 脚高 4.0	淡赤黄褐 ／淡黄褐	雲・赤・細砂・少	ヘラ削り			良	
5	G－6 H－6	III	底	底径 6.4	淡茶褐 ／淡灰褐	英・角・砂・中	ヘラ削り	ヘラ	ヘラ	良	
6	Q－12	III・IV	底	底径 5.8	茶褐 ／淡黒褐	角・雲・細砂・少	ヘラ削り	ヘラ		良	
7	H・I－6	III	底近	厚 1.2	淡赤黄褐	角・雲・白・石砂・中	ヘラ削り			良	
8	H－6	III	底近	厚 0.9	淡灰褐 ／淡茶褐	雲・砂・少	ハケ	ヘラ		普	
9	O－16	IV	底	径 18.0	茶褐	英・角・雲・長白・砂・中				普	
10	G・I－7	I・III	脚		淡黄褐	英・角・雲・石砂・少	ヘラ削り	ヘラ削り		普	
11	P－10	P.	脚		淡茶褐	角・雲・細砂・少	ヘラみがき			良好	

第13図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	O－16	IV	口縁～胴	口径 28.6	茶褐 ／明茶褐	角・雲・砂・少	タタキ			良	
2	O－16	IV	口縁～胴	口径 28.8	黒褐 ／茶褐	角・雲・砂・少	タタキ			良	2と同一個体？
3	H－6	III・V	胴	胴径 17.6	淡褐 ／淡黒褐	角・雲・白・砂少	タタキ ナデ	タタキ ナデ		良好	
4	P－15	P.	胴（屈）	厚 0.8	濃褐 ／淡茶褐	英・細砂・微	刻目			良	

第14図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	調整	欠損	備考
1	O－15	IVa	磨製石鏃	頁	3.3	2.3	0.2	1.75			

第18図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	K－9		口縁	厚 0.6	明茶褐	白・少	ヘラ磨き 縄・沈・刺	ヘラ磨き		良好	
2	H－6	III	口縁	厚 0.6	灰褐／淡茶褐	角・雲・細砂・極微	ヘラ磨き 縄・沈	ヘラ磨き		良好	
3	H－5	III	口縁	厚 0.7	淡茶褐	角・細砂・微	ヘラ磨き 沈・刺	ヘラ磨き		良好	
4	G－5	III	口縁	厚 0.6	淡灰褐	英・雲・砂・少	ヘラ磨き 縄・沈	ヘラ磨き		良好	
5	F－8	III	口縁	厚 0.6	灰褐	雲・細砂・極微	ヘラ磨き 縄・沈	ヘラ磨き		良好	
6	G－6	III	口縁	厚 0.7	淡灰褐	角・雲・細砂・少	ヘラ磨き 縄・沈	ヘラ磨き		良好	
7	L－9	I	口縁	厚 0.7	灰褐	角・雲・細砂・微	ヘラ磨き 沈	ヘラ磨き		良好	
8	G－7	III	口縁	厚 0.7	淡黒褐／淡灰褐	角・雲・細砂・少	ヘラ磨き 縄・沈	ヘラ磨き		良好	
9	G－5	II b	口縁	厚 0.6	淡灰褐	角・砂・少	ヘラ磨き 縄・沈	ヘラ磨き		良好	
10	H－5	P.	口縁	厚 0.8	灰褐	角・雲・細砂・少	ヘラ磨き 縄・沈	ヘラ磨き		良好	
11	G－6	II b	口縁	厚 0.5	淡茶褐／淡灰褐	角・砂・雲	ヘラ磨き 縄・沈・刺	ヘラ磨き		良好	
12	G－6	III	口縁	厚 0.7	淡茶褐	角・雲・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
13	H－7	III	口縁	厚 0.9	淡灰褐／黒灰褐	雲・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
14	S－14	IV	口縁	厚 0.7	灰褐／淡灰褐	細砂・極微	ナデ？ 沈	ナデ？	刻目	良好	
15	E－8	III	口縁	厚 0.6	淡茶褐	細砂・極微	ヘラ磨き 沈・押捺	ヘラ磨き		良好	
16	K－9		口縁	厚 0.6	灰赤褐	白・砂・少	ヘラ磨き 縄・沈	ヘラ磨き		良好	
17	O－16	IV	脚台	底径 3.4	淡茶褐／淡褐	英・白・細砂・少	ヘラ磨き	ナデ		良好	
18	K－9		頸	厚 0.5	茶褐	白・少	ヘラ磨き 縄・沈・刺	ヘラ磨き		良好	

第19図

No.	遺構名	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	2号土坑群	IV	口縁～胴	口径 30.1	暗黒褐／暗黄褐	雲・白・赤・砂中	ヘラ磨き	ナデ		良	外炭化物 2,3と同一
2	〃	IV	口縁～胴	厚 0.7	黒褐／淡灰褐	角・白・砂・中	ヘラ磨き	ヘラナデ		良	1、3と同一個体
3	〃		口縁	厚 0.7	黒褐／淡灰褐	角・白・砂・中	ヘラ磨き	ヘラナデ		良	1,2と同一個体？
4	〃	IV	口縁	厚 0.7	黒褐	角・砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	
5	〃	IV	胴	厚 0.6	灰黒褐／暗灰褐	角・白・砂・少	ヘラ磨き	？		良	外炭化物
6	〃	IV	胴	厚 0.6	黒褐	白・赤・砂・少	ナデ	ナデ		良	
7	〃	III	口縁	厚 0.6	淡茶褐／淡灰褐	砂・少	ヘラナデ	ヘラナデ		良好	
8	〃		胴	厚 0.6	黒褐	雲・砂・少	ヘラ磨き	ナデ？		良	
9	〃		胴	胴径 29.5	黒褐／灰褐	白・砂・中	ヘラ磨き	ナデ		普	外炭化物

第20図

No.	遺構名	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	調整	欠損	備考
	1号土坑群	石皿	砂	18.8	18.7	7.3	3320			赤変スス付着

第23図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	M－10		口縁～頸	厚 0.5	黒	雲・白・砂・少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
2	R－12	III	口縁	厚 0.7	灰褐	角・英・白・微	ナデ	ナデ		良	
3	O－14	IV	口縁～胴（屈）	口径 15.7 胴径 17.2	暗黒褐	細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
4	K－10	地横	口縁～頸	厚 0.8	灰褐／淡灰褐	角・雲・細砂・微	ヘラ磨き 沈	ヘラ磨き		良好	
5	U－16	地横	口縁	厚 0.5	暗黒褐／茶褐	角・白・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
6	F－7		口縁	厚 0.7	黒褐	角・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
7	R－12	IV	口縁	厚 0.6	暗黒褐／黒褐	細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
8	F－7	V	口縁	厚 0.5	暗黒褐／黒褐	角・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
9	O－14	IV	口縁	厚 0.6	黒褐／明灰褐	細砂・微	ヘラ磨き 沈	ヘラ磨き 沈		良好	
10	P－13	III	口縁	厚 0.8	淡茶褐	角・雲・砂・中	？	？		普	
11	P－13	III・V	口縁	厚 0.8	灰褐／淡白褐	角・英・雲・砂少	ヘラ磨き？	ナデ？		良好	
12	P－13	III・V	胴	厚 0.4	淡黒褐	雲・赤・砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
13	S－13 R－12		胴	厚 0.5	淡灰褐／淡茶褐	細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
14	P－14・15	IV	口縁～底近	厚 0.5	黒／灰褐	角・雲・砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
15	O－15	IV	胴（屈）	厚 0.5	淡黒褐／茶褐	角・雲・白・赤砂・少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	19と同一個体
16	K－9		胴（屈）	厚 0.5	淡灰褐／淡茶褐	角・砂・少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
17	G－7	III	胴（屈）	厚 0.7	灰	角・白・雲・砂中	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
18	P－13	IV	胴（屈）	厚 0.6	茶褐／淡黒褐	角・雲・白・砂中	ヘラ磨き	ヘラ磨き 沈		良好	
19	O－15	IV	胴（屈）	厚 0.6	淡黒褐／茶褐	角・雲・白・赤砂・少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	15と同一個体
20	E－5	III	口縁～底近	口径 32.7	淡黒褐／黒	角・雲・白・砂中	ヘラ磨き 沈	ヘラ磨き		良好	

第24図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	R－12	III	口縁	厚 0.7	淡黒褐	雲・白・砂・微	ヘラ磨き 沈	ヘラ磨き		良好	
2	R－12	III	口縁	厚 0.4	淡黒／茶褐	雲・砂・微	ヘラ磨き 沈	ヘラ磨き		良好	3と同一個体
3	S－12	III	口縁	厚 0.6	淡黒／茶褐	雲・砂・微	ヘラ磨き 沈	ヘラ磨き		良好	2と同一個体
4	R－11	地横	口縁	厚 0.6	淡茶褐	白・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
5	O－15	IV	口縁～底近	口径 31.4	淡褐／赤褐	角・雲・白・赤砂・少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	内炭化物
6	R－12	V・VI	胴（屈）	厚 0.8	淡茶褐	雲・白・砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
7	Q－11	III	口縁～底	口径 23.4 器高 10.6	黒褐	雲・砂・中	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
8	R－12	IV	口縁～底近	口径 36.6	淡黒褐／淡茶褐	角・雲・赤・砂少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
9	P・S－13 R－12	III・IV	胴（屈）	厚 1.1	黒褐／淡茶褐	角・雲・砂・中	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	

第25図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	Q－11	III	口縁～胴	厚 1.2	黒褐／赤褐	雲・白・砂・中	ヘラナデ	ヘラナデ		普	
2	S－12	III	口縁	厚 0.9	淡灰褐	雲・砂・微	ナデ	ヘラナデ		良	穿孔有
3	U－16	I	口縁	厚 0.7	灰褐／黒褐	英・雲・砂・中	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	
4	G－5	III	口縁	厚 0.9	淡茶褐	雲・砂・微	ナデ	ヘラナデ		良	
5	S－12	III	口縁～胴	口径 21.9	淡褐／灰黒褐	英・雲・砂・中	ナデ	ナデ		良	外炭化物
6	S－12	III	口縁～胴	口径 38.0	灰黒褐／灰褐	角・雲・白・砂中	ヘラナデ	ヘラ磨き		普	
7	U－16	III	口縁～底近	厚 0.8	黒褐／淡茶褐	角・英・雲・砂少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	

第26図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	R・S－12	III	口縁～底	口径 12.5	黒／黒褐	白・砂・少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
2	Q－11	III	口縁	厚 0.6	黒褐／茶褐	雲・白・砂・微	ヘラナデ	ヘラナデ		良	
3	P－13	III	口縁	厚 0.9	灰褐／明茶褐	角・雲・砂・少	ナデ	ヘラ磨き		良	
4	O－16	IV	口縁	厚 0.8	黒褐／黒	角・砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
5	G－8	III	口縁	厚 0.6	黒／茶褐	白・砂・少	ヘラナデ	ヘラナデ		良好	
6	E－5	IV	口縁	厚 0.8	黒／暗赤褐	砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
7	R－12	III	口縁	厚 0.9	淡褐	角・白・砂・微	ナデ	ナデ		良	
8	R－17	IV	口縁	厚 0.6	明黄褐	雲・赤・砂・少	ヘラナデ	ヘラナデ		良	
9	R－12	III	口縁	厚 0.8	茶褐／明茶褐	角・雲・砂・微	ナデ	ナデ		良	
10	O－14	IV	口縁	厚 0.7	茶褐	雲・白・砂・中	ヘラナデ	ヘラナデ		良	
11	O－15	IV	口縁	厚 0.5	黒褐／灰褐	白・砂・中	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	
12	O－16	IV	口縁	厚 0.8	灰褐／淡褐	角・雲・赤・砂少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
13	O－14	IV	口縁	厚 0.6	茶褐	雲・赤・砂・中	ヘラナデ	ヘラナデ		良	
14	O－15	V	口縁	厚 0.8	灰褐／茶褐	白・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
15	O－15	IV	口縁	厚 0.5	灰褐／茶褐	英・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
16	O－16	IV	口縁	厚 0.6	褐	英・角・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
17	O－14	IV	口縁	厚 0.7	黒褐／褐	雲・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
18	P－12	IV	口縁	厚 1.1	淡灰褐／淡茶褐	角・雲・砂・微	ナデ	ナデ		良	
19	O－14	I IV・VI	口縁	厚 0.6	茶褐	雲・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	
20	O－14	撹	口縁	厚 0.7	濁褐／褐	英・雲・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
21	F－5	III	口縁	厚 0.9	茶褐／黒褐	角・細砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	
22	N－16	V	口縁	厚 0.8	黒褐	角・雲・細砂・少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
23	I－6	III	口縁	厚 0.9	淡灰褐	角・白・砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	外炭化物
24	H－7	III	口縁	厚 0.6	淡灰褐	角・雲・白・砂少	ヘラナデ	ヘラナデ		良	
25	N－15	IV	口縁	厚 0.7	茶褐	雲・砂・少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
26	R－12	III	口縁	厚 1.0	淡茶褐／黒	雲・白・赤・砂少	ヘラナデ	ヘラナデ		良	
27	T－15	IV	口縁～頸	厚 0.5	黒褐／灰褐	雲・白・砂・少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
28	P－12	III	口縁	厚 0.6	淡茶褐／淡灰褐	英・角・少	ヘラナデ	ヘラナデ		良好	
29	O－14	IV	口縁～胴	厚 0.6	灰黒褐／灰茶褐	角・雲・砂・少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	

第27図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	R－12	III	口縁	厚 0.7	灰黒褐／淡茶褐	角・英・砂・少	ナデ	ナデ		普	
2	R－12	III	口縁	厚 1.0	灰黒褐／淡茶褐	雲・白・砂・中	ナデ	ナデ		良	
3	R－12	III	口縁	厚 1.0	灰黒褐／淡茶褐	英・雲・白・砂中	ナデ	ヘラナデ		良	
4	R－12	III	口縁	厚 0.9	淡茶褐	角・英・雲・砂少	ナデ	ナデ		良	
5	R－12	III・IV	口縁～胴	口径 34.7	灰褐／茶褐	角・白・砂・中	ヘラナデ	ヘラ磨き		良	外炭化物
6	表採		口縁	厚 1.1	黒褐／茶褐	英・白・砂・中	ナデ	ヘラ磨き		良好	
7	R－12	III	口縁	厚 0.8	明灰褐	角・雲・砂・少	ナデ	ヘラ磨き		普	
8	Q－12	II	口縁	厚 0.8	淡灰褐／淡黄褐	角・雲・細砂・少	ナデ	ナデ		良	
9	S－12	III	口縁	厚 1.1	明茶褐／黄褐	砂・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	
10	O－14	IV	口縁	厚 0.8	灰褐／淡茶褐	角・砂・少	ナデ	ヘラナデ		良	
11	R－12	III	口縁	厚 0.7	淡茶褐／淡灰褐	角・英・雲・砂中	ナデ	ナデ		普	
12	O－13	III	口縁	厚 0.8	淡茶褐／灰褐	角・雲・白・砂少	ナデ	ナデ		良	
13	R－13	III	口縁	厚 0.9	明褐	角・英・白・少	ナデ	ナデ		普	
14	R－12	IV	口縁	厚 1.1	明褐	角・白・砂・少	条痕	条痕		良	
15	R－12	III	口縁	厚 1.1	灰黒褐／茶褐	砂・少	ナデ	ナデ		良	
16	R－12	III	口縁	厚 0.7	灰褐／淡茶褐	白・砂・少	ナデ	ナデ		普	
17	R－12	III	口縁	厚 0.9	灰褐／淡茶褐	英・雲・砂・微	ナデ	ヘラ磨き		良	外炭化物
18	R－12	III	口縁	厚 0.8	茶褐	角・雲・白・砂少	条痕	ナデ		良	
19	S－12	IV	口縁	厚 1.0	灰黒褐／淡茶褐	角・雲・砂・少	条痕	ナデ		普	
20	H－6	III	口縁	厚 0.8	褐／灰褐	角・雲・砂・微	条痕	ナデ		良	
21	R－12	IV	口縁	厚 0.7	淡灰褐／淡茶褐	砂・少	ナデ	ヘラナデ		普	
22	R－12	III	口縁	厚 1.1	淡茶褐	角・雲・砂・少	ナデ	ナデ		良	
23	R－11・12	III	口縁	厚 0.9	灰黒褐／淡茶褐	砂・微	ナデ	ヘラナデ		良	

第28図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	S－12	III	口縁	厚 1.0	淡灰褐／明淡褐	角・雲・白・少	ナデ	ヘラ磨き		良	
2	R－12	III	口縁	厚 0.8	灰褐／淡茶褐	雲・白・砂・微	条痕	ヘラナデ		良	
3	Q－12	III	口縁	厚 1.0	黒褐／赤灰褐	英・雲・中	条痕	条痕		良	穿孔有
4	R－12	III	口縁	厚 0.8	淡茶褐／黒褐	砂・微	ナデ	ヘラ磨き		良好	
5	Q－14	III	口縁	厚 1.1	淡黄茶褐	角・砂・少	ナデ	ナデ		良	
6	R－11	III	口縁	厚 0.8	黒褐／灰褐	雲・白・砂・中	ナデ	ヘラナデ		良	
7	S－12	III	口縁	厚 1.1	褐／淡茶褐	角・英・砂・少	ナデ	ナデ		良	
8	Q－17	IV	口縁	厚 0.9	灰褐／褐	英・白・砂・多	条痕	ナデ		普	
9	R－12	III	口縁	厚 1.2	黒褐／灰褐	英・砂・微	ヘラ磨き	条痕？		良	
10	S－12	III	口縁	厚 0.6	灰褐／淡茶褐	英・砂・中	ナデ	ナデ		良	
11	S－15		口縁	厚 0.9	灰黒褐／灰褐	角・英・砂・少	ナデ	ナデ		良	
12	R－16・17	IV	口縁	厚 0.6	黒褐／茶褐	雲・白・砂・少	ヘラナデ	ヘラナデ		普	
13	R－17	IV	口縁	厚 0.7	黒褐／淡茶褐	雲・白・細砂・少	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	
14	R－12	III	口縁	厚 1.1	淡茶褐	角・雲・砂・少	ナデ	ナデ		良	
15	P－11		口縁	厚 0.7	褐／淡灰褐	角・雲・白・微	ヘラ磨き	ヘラ磨き		良	
16	R－12	III	口縁	厚 0.7	淡茶褐	英・砂・少	ナデ	ナデ		普	
17	O－14	IV	口縁	厚 0.8	黒褐／淡茶褐	角・砂・少	ヘラナデ	ナデ		良	
18	R－12	III	口縁	厚 0.9	淡灰褐	砂・微	ナデ	ナデ		普	
19	R－12	III・IV	口縁～胴	口径 51.7	黒褐／淡茶褐	雲・長・白・砂中	ヘラナデ	条痕？		やや不良	

第29図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	P－12		口縁	厚 1.0	淡黄褐	角・雲・白・砂少	ナデ	ナデ		やや不良	
2	R－12	III	口縁	厚 0.8	淡茶褐／灰褐	砂・少	ナデ	ナデ		良	
3	S－12	III	口縁	厚 0.7	灰黒褐／黒褐	雲・細砂・微	条痕	ヘラ磨き		良好	
4	P－13	II・III	口縁	厚 1.1	黒褐／茶褐	白・砂・中	条痕	ヘラ磨き		良	
5	R－12	IV	口縁	厚 0.8	黒褐／灰褐	角・砂・微	ヘラナデ	ヘラ磨き		良	
6	H－6	III	口縁	厚 0.7	灰褐	角・英・砂・少	ナデ	条痕		良	
7	S－12	III	口縁	厚 0.9	黒褐／明茶褐	砂・微	条痕	条痕		良	
8	P－14	IV	口縁	厚 0.8	淡黒褐／淡褐	角・雲・白・赤砂・中	ヘラナデ	ヘラナデ		普	
9	表採		口縁	厚 1.0	赤褐／黒褐	英・雲・砂・中	条痕	ヘラナデ		良	
10	R－12	III・IV	口縁	厚 1.0	灰黒褐／淡灰黒褐	角・雲・砂・少	ヘラナデ	ヘラ磨き		良	
11	R－12	III	口縁	厚 1.0	淡灰褐／黒褐	砂・微	ナデ	ヘラ磨き		良好	
12	R－12	III	口縁	厚 0.8	淡茶褐／黒褐	角・英・砂・微	ナデ	ヘラ磨き		良好	
13	S－12	III	口縁	厚 0.7	灰褐	砂・中	ナデ	ナデ 沈？		普	
14	P－12		口縁	厚 1.0	灰褐／淡褐	角・英・砂・少	ナデ	ナデ		良	
15	R－12	IV	口縁	厚 0.8	灰黒褐／茶褐	砂・微	条痕	ヘラ磨き		良	
16	H－6	III	口縁	厚 0.6	淡黒褐／灰褐	角・雲・砂・微	ナデ	条痕	押捺	良	

第30図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	E－7	III	胴	厚 0.9	黒褐/茶褐	英・角・白・砂中	三凸			普	外炭化物
2	E－7	III	胴	厚 1.0	黒褐/茶褐	英・角・白・砂中	三凸			普	1と同一個体？
3	E－7	III	胴	厚 1.0	黒褐	英・雲・砂・多	三凸			良	
4	N－11	59号土坑	口縁	厚 1.4	暗褐/淡白褐	英・角・砂・少	沈		押捺	良	
5	N－11	59号土坑	口縁	厚 1.1	淡茶褐	英・角・赤・砂少	沈		羽・刻	良	
6	N－14	IV	口縁	厚 0.6	淡白褐	角・雲・砂・中	沈		刻	良	
7	P－15	地横	口縁	厚 0.6	淡褐	英・角・砂・少	沈		沈	良	
8	N－15	VI	口縁	厚 0.8	淡茶褐	英・角・砂・白少	沈		押捺	良	
9	P－13	II	口縁	厚 0.8	茶褐	砂・少	貝・押引			良	
10	G－5	V	口縁近？	厚 0.8	淡褐	角・白・砂・少	沈			良	
11	K－9		？	厚 0.8	茶褐	英・角・砂・微	ヘラ磨き 沈・刺	ヘラ磨き？		良好	
12	H－6	III	口縁	厚 0.7	黒褐/灰褐	角・砂・微	条痕		押捺	良	
13	H－6	III	口縁	厚 0.7	淡黒褐/灰褐	角・雲・石・砂微		条痕	棒圧	良	
14	I－9	III	？	厚 0.8	茶褐	英・雲・白・砂少	刻凸、沈			良	
15	P－13	III	口縁	厚 1.0	淡明茶褐	英・角・砂・中	貝・条痕			良	
16	P－13	V	頸？	厚 0.7	淡褐	白・細砂・微	沈			良	
17	G－7	III	？	厚 1.1	淡茶褐	角・雲・砂・少	刻凸			良	
18	N－11	59号土坑	？	厚 0.9	黒褐/灰褐	英・白・砂・中	凸刺			良	
19	I－6	III	頸	厚 0.9	淡緑灰褐	細砂・微	刺、沈 ヘラ磨き	ヘラ磨き		良好	
20	P－12・13	III	頸～胴	頸径 5.0 胴径 16.1	赤茶褐/淡褐	角・白・砂・微	ヘラ磨き 赤彩	ヘラ・ナデ 頸赤彩		良	
21	P－13	III	胴	厚 0.6	赤茶褐/淡褐	角・白・砂・微	ヘラ磨き 赤彩	ヘラ・ナデ		良	同一個体他にも有
22	P－13	III	胴	厚 1.0	赤茶径/淡褐	角・白・砂・微	ヘラ磨き 赤彩	ヘラ・ナデ		良	
23	M－11		胴	厚 1.1	淡茶褐 一部明赤褐	雲・砂・微	ヘラ磨き 赤彩	ヘラ磨き 赤彩		良	
24	S－13	III	口縁	厚 1.1	黒褐/灰褐	英・角・砂・少	凹線？ 凸帯？			良	

第31図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	F－9	III	口縁	厚 1.3	褐/黒褐	英・白・砂・少	ナデ	ヘラ磨き			外炭化物
2	S－12	III	胴	厚 1.0	淡赤褐/黒褐	白・砂・少	条痕	条痕、沈		普	
3	P・S－13 R－12	III・IV	胴	胴径 37.2	黒褐/淡茶褐	角・雲・砂・中	ナデ	ナデ		普	
4	H－6	III・V	胴	胴径 24.9	灰褐	角・砂・微	条痕	条痕		良好	
5	R－12	III	胴	厚 1.0	褐/明褐	角・白・砂・微	ナデ	ナデ		良	

第32図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	O－15	IV	底	底径 6.2	明褐／灰黒褐	白・砂・微	ヘラ磨き		ヘラ磨き	良	
2	O－15	II・IV	底	底径 6.3	淡茶褐／灰褐	角・砂・微	ヘラ磨き			良	
3	O－14・15	IV	底	底径 5.3	明茶褐／黒褐	白・細砂・微	ヘラ磨き？		ヘラ磨き	良	
4	S－12	III	底	厚 0.7	黒褐／黒	砂・極微	ヘラ磨き	ヘラ磨き	沈	良好	
5	S－12	VI	底	厚 0.6	淡茶褐／黒	砂・極微	ヘラ磨き	ヘラ磨き	沈	良好	
6	R－11	III	底	底径 6.0	淡茶褐／淡灰	雲・砂・微	沈			良	
7	S－12	III	底	底径 8.6	淡灰褐／明黄褐	雲・赤・砂・微	沈			良	
8	G－7	II	底	厚 0.9	淡赤褐／暗灰褐	角・雲・白・砂少				良	
9	N－10		底	底径 9.0	淡茶褐	雲・石・砂・中				良	
10	H－6	II	底	底径 9.7	明灰褐	角・雲・砂・中				良	
11	P－14	IV	底	厚 1.2	淡茶褐／淡灰	雲・白・砂・中				良	
12	S－12	III	底	厚 1.2	茶褐／明褐	角・雲・白・砂少				普	
13	R－12	III	底	厚 1.5	淡赤褐／黒褐	角・雲・白・赤砂・少				良	
14	R－11		底	底径 11.2	淡茶褐／淡黒	角・雲・砂・少				普	
15	P－14	IV	底	底径 11.8	淡茶褐／淡灰褐	雲・白・砂・中				良	
16	U－16	IV	底	底径 7.5	淡茶褐／明茶褐	白・細砂・微				良	
17	O－13	III	底	底径 10.4	淡茶褐	角・白・砂・中				良	
18	R－12		底	底径 10.3	淡茶褐	角・雲・石・砂少				良	
19	F－7	III	底	底径 7.2	淡赤褐／淡灰褐	角・雲・白・赤砂・中			網代痕有	普	
20	N－4	III	底	底径 7.2	黄褐／茶褐	角・雲・白・石砂・中				普	
21	D－3		底	底径 6.0	淡茶褐／灰褐	細砂・微			網代痕有	良	

第33図

No.	グリッド	層	器種	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 表面	調整・文様 裏面	調整・文様 その他	焼成	備考
	O－14	IV	土製品	(3.2×3.9)	淡茶褐	角・砂・少	爪形文	爪形文		良	(9.5g)

第34図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	Q－12	III	石鏃	黒	2.2	1.5	0.5	1.10		a	
2	S－12	III	〃	黒	2.3	1.4	0.5	1.07		a	
3	R－12	IV	〃	安	1.9	1.3	0.5	0.79		a	
4	Q－11	III	〃	ch	4.6	1.7	0.8	3.58		a	
5	E－2	IV	〃	黒	2.2	2.1	0.7	1.36		a	
6	P－10	IV	〃	黒	1.6	1.2	0.4	0.49		a	
7	P－12	IV	〃	ch	1.7	1.7	0.35	0.40		a	
8	G－5	III	〃	ch	2.0	1.5	0.35	(0.55)		d	
9	O－15	IV	〃	ch	(2.9)	(1.7)	0.45	(1.45)		d	
10	P－3	III	〃	ch	(2.8)	(1.5)	0.55	(1.41)		d	
11	Q－13	III	〃	安	2.2	1.8	0.3	0.89		a	
12	O－13	III	〃	安	3.4	1.8	0.6	2.47		a	
13	T－15	III	〃	ch	(3.0)	(2.1)	0.5	(2.73)		d	
14	Q－12	III	〃	ch	(1.7)	(1.1)	0.25	0.68		a	

第35図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	R－13	III	石鏃	ch	2.2	1.6	0.3	0.80		a	
2	H－5	III	〃	安	(2.2)	1.6	0.4	(1.23)		b	
3	D－6	III	〃	ch	(2.0)	1.7	0.4	(0.86)		b	
4	G－6	III	〃	ch	2.7	2.1	0.45	1.60		a	
5	G－5	III	〃	ch	2.0	1.5	0.35	(0.55)		d	
6	S－16	III	〃	ch	(2.7)	2.1	0.6	(2.86)		c	
7	O－13	III	〃	ch	(3.2)	1.3	0.3	(1.36)		c	
8	H－5	III	〃	ch	(2.4)	1.3	0.4	(1.14)		c	
9	E－7	IV	〃	ch	2.3	1.1	0.35	0.56		a	
10	O－14	IV	〃	ch	1.7	1.1	0.4	0.85		a	

第36図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	P－13	IV	石匙	安	2.5	1.7	0.5	1.63		完	
2	P－13	III	〃	ch	(4.5)	(3.4)	(0.9)	(15.22)		体部½	
3	H－9	III	〃	安	2.6	3.2	0.6	2.79		完	
4	H－6	III	〃	安	5.2	4.2	0.6	10.90		完	
5	D－5	IV	〃	ch	4.9	4.8	0.8	11.95		完	
6	T－16	IV	〃	ch	2.7	(4.6)	0.8	(7.78)		体部¼	
7	I－6	III	〃	ch	3.5	(5.1)	0.6	(10.02)		体部½	
8	T－14	III	〃	ch	4.2	(5.4)	0.9	(19.70)		体部¼	
9	P－14	IV	〃	ch	3.6	2.1	0.7	2.12		完	

第38図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	H－6	III	スクレイパー	ch	(3.7)	(3.4)	(1.8)	(27.83)		欠	
2	G－6	III	〃	ch	(1.5)	(3.4)	(0.6)	(2.74)		欠	
3	F－5	III	〃	ch	(3.3)	(2.6)	(1.2)	(10.35)		欠	
4	F－2	IV	〃	安	3.4	5.5	0.9	15.11		完	
5	O－15	IV	〃	ch	7.6	3.1	0.9	20.74		完	
6	O－15	IV	〃	ch	6.4	3.6	1.5	34.63		完	

第39図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	O－16	IV	石錐	黒	2.2	1.2	0.3	2.18		完	
2	P－12	IV	〃	安	2.1	1.8	0.5	0.99		完	
3	P－12	IV	〃	ch	3.2	1.2	0.6	0.55		完	
4	R－12	III	ペッティングストーン	頁	1.9	1.6	0.7	3.14	全面磨耗	完	
5	O－15	IV	異形石器	ch	2.2	1.5	0.5	1.39		完	
6	G－6	III	〃	安	1.9	3.6	0.7	1.46		完	

第40図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	G－8	III	二次加工ある剝片	黒	3.1	1.2	0.6	1.62			
2	O－15	IV	〃	ch	4.5	1.2	0.8	8.79			
3	O－15	IV	〃	黒	2.1	2.0	0.9	1.96			
4	D－6	III	〃	安	(2.7)	(3.3)	(0.6)	(5.92)		欠	
5	P－12	III	〃	ch	2.5	2.8	0.9	5.67			
6	R－12	III	使用痕ある剝片	黒	2.2	2.5	0.6	3.38			
7	M－8	III	〃	ch	4.5	3.5	0.7	15.23			
8	R－17	IV	〃	ch	3.6	2.3	0.7	4.62			
9	O－15	IV	〃	ch	3.9	4.9	1.1	16.48			
10	Q－11	III	〃	ch	4.2	5.3	1.3	18.16			
11	Q－11	III	〃	ch	6.9	3.1	1.0	22.86			

第41図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	H－8	III	石核	ch	7.1	7.6	2.3	120.79			
2	O－14	IV	〃	ch	7.7	8.2	6.3	337.52			

第42図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	G－4	III	打製石斧	粘	(11.1)	(5.4)	(1.9)	(151.9)		B	
2	H－6	III	〃	砂	11.5	5.3	1.9	128.4		A	
3	H－6	III	〃	砂	(11.4)	(5.1)	(1.6)	(118.6)		B	
4	S－12	III	〃	砂	12.8	4.9	1.5	101.4		A	
5	G－7	III	〃	砂	15.2	5.0	1.8	177.6		A	
6	F－8	III	〃	砂	16.9	6.5	2.3	293.8		A	
7	R－17	III	〃	粘	13.6	8.1	2.1	232.9		A	

第44図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	I－6	III	打製石斧	砂	12.9	4.9	1.7	116.9		A	
2	S－15	III	〃	砂	18.9	8.9	2.3	458.4		A	
3	R－17	IV	〃	砂	17.5	5.9	2.1	203.4		A	
4	G－8	IV	〃	砂	(12.9)	(7.0)	1.7	(183.3)		B	
5	E－3	IV	〃	砂	19.2	6.4	1.8	239.5		A	
6	F－6	IV	〃	砂	11.7	4.5	1.1	61.1		A	

第45図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	R－12	IV	円盤状石器	砂	6.4		1.1	64.1		完	
2	R－12	IV	〃	竜	6.2		1.7	(63.3)		縁辺部	
3	R－17	IV	〃	砂	9.1		2.1	216.9		完	
4	R－17	IV	〃	砂	9.3		1.5	160.1		完	
5	R－17	IV	〃	砂	9.5		1.2	152.9		完	
6	F－7	III	石錘	砂	4.8	7.0	1.6			完	
7	G－7	III	磨製石斧	竜	13.0	5.4	3.4	256.2		基部	

第46図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	R－12	III	磨石類	安	11.8	9.0	3.3	515.5		完	
2	R－12	III	〃	砂	9.8	7.6	4.0	467.0		完	
3	Q－3	III	〃	砂	7.7	7.8	3.6	269.3		完	
4	V－16	III	〃	砂	10.2	6.4	3.7	341.0		完	
5	H－7	III	〃	砂	11.3	7.8	3.7	650.0		完	
6	P－12	IV	〃	砂	6.3	5.9	3.2	167.1		完	

第47図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	F－2	IV	磨石類	砂	11.9	11.1	5.1	1,110		完	
2	R－17	IV	〃	安	11.6	8.9	7.2	1,410		完	
3	E－3	IV	〃	砂	8.9	7.0	3.8	320.7		完	
4	G－7	III	〃	砂	11.3	10.0	5.1	930		完	

第48図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備考
1	S－17	IV	磨石類	安	12.8	9.4	5.1	750.0		完	
2	I－7	III	〃	砂	9.9	7.6	4.1	557.4		完	
3	P－15	IV	〃	安	14.5	10.9	5.6	1,410		欠	

第49図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備考
1	E・F－2	IV	敲石	貢	10.8	4.4	3.2	185.1		完	
2	O－15	IV	〃	砂	5.3	4.6	1.3	53.3		完	
3	S－15	III	〃	砂	7.4	3.6	1.8	69.8	磨痕有	完	
4	I－7	III	〃	砂	13.4	9.0	4.0	620		完	
5	P－13	III	〃	砂	8.5	3.8	2.7	136.6		完	
6	Q－13	III	〃	砂	9.3	2.5	1.8	66.7		完	
7	G－5	III	〃	砂	9.8	3.2	2.0	98.5		完	
8	H－5	III	〃	砂	14.5	6.0	2.5	447.2		完	
9	E－3	IV	〃	砂	10.5	4.1	(4.0)	262.8		欠	

第50図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備考
1	Q－12	III	敲石	貢	(11.3)	(3.5)	(3.0)	(156.5)		欠	
2	E－3	IV	〃	砂	9.7	4.6	2.1	138.8	磨痕有	完	
3	G－13	III	〃	砂	(5.5)	(5.6)	(2.2)	(107.3)		欠	
4	R－12	IV	〃	砂	(6.1)	(4.5)	(3.4)	(124.2)		欠	
5	R－16	IV	〃	砂	(6.3)	(4.6)	(1.8)	(61.1)		欠	
6	Q－12	III	〃	砂	19.6	9.4	7.2	2,030		完	
7	E・R－3	IV	〃	砂	(13.5)	(6.0)	(4.5)	(625)		欠	

第51図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備考
1	R－12	III	敲石	砂	(3.5)	(4.9)	(2.8)	(64.3)		欠	
2	R－14	III	〃	砂	(2.7)	(5.1)	(2.4)	(50.0)		欠	
3	H－6	III	〃	砂	(9.0)	(3.7)	(1.8)	(91.3)		欠	
4	S－15	III	〃	砂	(7.4)	(4.9)	(2.2)	(112.2)		欠	
5	Q－11	III	〃	砂	(8.0)	(3.4)	(2.2)	(81.9)		欠	
6	U－16	IV	〃	砂	(3.7)	(3.0)	(2.0)	(27.0)		欠	
7	Q－12	III	〃	粘	(4.6)	(5.9)	(3.3)	(118.7)		欠	
8	R－17	IV	〃	砂	(11.5)	(5.5)	(4.0)	(354.0)		欠	

第52図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備考
1	E－4	III	石皿	砂	(13.9)	(19.8)	(5.9)	(2,500)		欠	
2	O－16	IV	〃	砂	(11.9)	(13.5)	(7.1)	(1,310)		欠	
3	O－15	IV	〃	砂	(12.3)	(10.1)	(3.3)	(650)		欠	
4	G－6	III	〃	砂	(26.3)	(34.0)	(10.9)	(14,000)		欠	

第53図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	E－6	III	礫器	凝	10.2	12.5	2.4	320			
2	Q－11	III	〃	砂	10.4	10.8	3.9	440			
3	O－15	IV	〃	砂	7.8	9.9	3.6	345			
4	G－8	III	〃	砂	13.5	12.4	3.4	710			
5	F－4	III	〃	砂	10.6	11.8	2.6	410			
6	F－6	III	〃	砂	13.9	14.3	4.2	810			
7	G－11	III	〃	砂	12.5	14.2	3.8	760			
8	F－4	III	〃	砂	8.0	7.2	2.3	141			

第54図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	H－7	III	礫器	砂	12.1	18.1	4.2	1,060			
2	G－5	III	〃	砂	14.3	10.6	3.7	760			
3	E－7	IV	〃	砂	7.9	10.2	3.1	250			
4	G－6	III	〃	砂	7.1	11.5	2.3	190			
5	F－4	III	〃	砂	7.3	10.7	2.8	270			
6	E－7	III	〃	砂	(9.2)	(11.3)	(7.9)	512			
7	G－5	III	〃	砂	6.7	11.7	1.5	110			
8	E－6	III	〃	砂	10.6	14.1	3.3	530			

第55図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整等	欠損	備　考
1	F－8	III	礫器	砂	11.6	14.4	3.2	620			
2	E－7	III	〃	砂	11.4	14.1	4.7	840			
3	Q－13	III	〃	砂	11.4	11.7	3.5	730			
4	E－3	IV	〃	砂	10.6	9.4	2.4	310			
5	G－5	III	〃	砂	17.4	11.8	4.7	1,360			

第100図

No.	土坑 No.	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	2号	床直	胴	厚 0.9	淡茶褐／淡褐	英・角・砂・少	山(0.4、1.7)			良	IV-1-b
2	12号	床直	胴	厚 1.3	褐／明茶褐	英・角・白・砂少	楕			良	I－1
3	12号	床直	胴	厚 1.0	淡茶褐／淡褐	英・角・砂・少	撚d			良	
4	40号	床直	胴	厚 0.8	淡褐	角・砂・少	撚d			良	IV-1-j
5	40号	壁	胴	厚 0.7	茶褐／黒褐	角・雲・白・砂中	縄（LR）			良	
6	17号	床直	口縁	厚 0.7	淡褐	英・角・砂・中	楕(0.45×0.3)			普	I－1
7	62号	床直	胴	厚 1.1	淡黄褐／褐	英・角・砂・中	楕(0.5×0.25)			普	I－1

第101図

No.	集石 No.	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	1		胴	厚 1.4	淡茶褐／淡褐	英・白・砂・微	楕(0.6×0.4)			良	I－1
2	〃		口縁	厚 0.9	灰褐／淡褐	英・角・砂・中	山(2.6・0.65)	口・山(2.5・0.7)		良	外炭化物 IV-1-b
3	〃		口縁	口径 12.6	明茶褐	英・角・砂・少	山			良	IV-1-b
4	〃		口縁	厚 1.2	明茶褐	角・砂・少	山	山	山	普	IV-1-b
5	〃		胴	厚 0.8	淡褐／褐	英・角・細砂・微	山			良	IV-1-b
6	〃		胴	厚 0.8	紫灰褐／暗紫褐	細砂・微	山			良好	9と同一？ 外炭化物 IV-1-b
7	〃		胴	厚 1.1	明茶褐／褐	英・角・白・砂少	山(1.2・1.5)			良	IV-1-b
8	〃		胴	厚 1.0	茶褐／褐	英・角・砂・少	山(1.1・0.6)			良	IV-1-b
9	〃		胴	厚 0.8	黒褐／暗灰褐	英・角・細砂・微	山(1.8・0.7)			良好	6と同一？ 外炭化物
10	〃		胴	厚 0.9	黒褐／明茶褐	英・角・砂・微	菱			良好	IV-1-b IV-1-C
11	〃		胴	厚 1.0	淡茶褐／明茶褐	白・雲・少	菱			良	IV-1-C
12	〃		胴	厚 0.7	明茶褐	英・角・白・少	菱			良	IV-1-C
13	〃		胴	厚 0.8	淡茶褐／褐	角・雲・細砂・微	菱			良	IV-1-C
14	〃		胴	厚 0.6	茶褐／黒褐	英・角・砂・少	菱			良	外炭化物 IV-1-C
15	〃		胴	厚 0.8	茶褐	英・雲・白・砂少	菱			良	IV-1-C
16	〃		胴	厚 0.8	淡茶褐／黒褐	英・細砂・微	撚d 撚e？			良	IV-1-j
17	〃		胴	厚 0.6	淡茶褐	角・砂・少	山？			良	IV-1-b
18	〃		？	厚 0.7	淡褐／黒褐	英・砂・中				良	外炭化物
19	〃		頸	厚 0.8	淡褐	角・英・砂・中	帯状撚e 沈			良	VII
20	〃		胴	厚 0.6	暗褐／淡褐	英・角・白・砂中	沈 帯状撚e			良	VII
21	〃		胴	厚 1.2	灰褐	英・白・石・中	ヘラ	条痕		良	
22	〃		胴	厚 0.7	淡茶褐	角・砂・少	撚e			良	VII
23	〃		底	厚 0.8	茶褐／黒褐	英・角・砂・微		ヘラなで		良	

第102図

No.	集石 No.	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	4・5		胴	厚 0.9	淡茶褐	角・砂・少	山			良	IV-1-b
2	7		胴	厚 0.8	淡茶褐／褐	細砂・微	？			良	
3	7		胴	厚 0.7	灰褐	英・砂・少	条？			良	
4	7		胴	厚 0.5	淡褐／明茶褐	英・砂・少	条？（貝？）			良	
5	7		底	底径 6.5	淡茶褐	角・砂・少				良	IV
6	7		頸近	厚 0.8	淡茶褐	角・砂・少	刺凸			良	VII
7	9		胴	厚 0.9	淡茶褐	角・砂・少		ヘラなで		良	外炭化物
8	10		胴	厚 0.6	淡茶褐／淡褐	英・角・砂・少	沈帯条撚e			良	VII
9	12		胴	厚 0.8	淡褐／黒褐	角・細砂・極微		撚c		良	IV-1-e
10	12		胴	厚 1.0	淡茶褐／淡黄褐	英・角・小石・微	撚c 縄（LR）			良	IV-1-e
11	12		胴	厚 1.0	淡茶褐	角・細砂・少	撚c			良	IV-1-e
12	13		胴	厚 0.7	淡茶褐	英・角・砂・少	撚d			良	IV-1-j
13	13		胴	厚 0.8	淡茶褐／灰褐	英・小石・微	縄			良	IV-1-a
14	14		胴	厚 1.0	淡褐／褐	英・角・砂・中	撚c 撚d？縄？			良	IV-1-e
15	14		胴	厚 0.8	淡茶褐／淡褐	角・砂・少	撚c			良	IV-1-e
16	14		胴	厚 0.8	淡茶褐／黒褐	細砂・微	撚d？			良	IV-1-j
17	15		胴	厚 0.6	淡茶褐／暗褐	英・角・砂・中	撚d			良	IV-1-j
18	15		底	厚 0.4	淡茶褐／褐	角・砂・少	？			良	
19	17		胴	厚 1.2	淡褐／淡茶褐	英・角・細砂・微	楕(0.6×0.3)			良	I－1
20	17		胴	厚 0.6	淡茶褐／暗褐	英・白・砂・少	縄（LR）凸			良	V-1-d
21	19		胴	厚 1.0	淡灰褐／淡茶褐	角・砂・微	間延びした山			良	IV-1-b
22	19		胴	厚 1.0	淡茶褐／黒褐	英・角・砂・微	山			良	IV-1-b
23	20		胴	厚 1.3	淡茶褐／褐	英・角・砂・微				良	外炭化物
24	21		胴	厚 1.0	淡茶褐	砂・微	間延びした山			良	IV-1-b

第103図

No.	集石 No.	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	11		口縁	厚 1.3	茶褐	英・角・長・砂少	楕(0.6×0.4 長4.0)	口楕 (0.6×0.3)	?	良	I－1
2	〃		口縁	厚 1.4	淡茶褐／灰褐	角・雲・白・砂少	楕 (0.6×0.45)	口楕 (0.6×0.4)	楕(0.9×0.3)	良	I－1
3	〃		口縁	厚 1.5	淡茶褐	角・雲・砂・少	楕(0.7×0.4)	口楕 (0.65×0.45)	楕	良	I－1
4	〃		口縁	厚 1.2	明褐／淡茶褐	英・角・砂・中	楕(0.6×0.3 長3.1)	口楕 (0.7×0.3)	?	良	I－1
5	〃		胴	厚 1.2	淡茶褐	角・赤・砂・少	楕(0.6×0.4)			良	I－1
6	〃		胴	厚 1.5	淡茶褐	角・雲・砂・少	楕 (0.65×0.4)			良	I－1
7	〃		胴	厚 1.2	赤褐／灰黒褐	角・白・砂・少	楕(0.6×0.4)			良	I－1
8	〃		胴	厚 1.3	淡茶褐／灰褐	雲・砂・中	楕			良	I－1
9	〃		胴	厚 1.3	明茶褐	英・角・赤・砂少	楕 (0.6×0.35)			良	I－1
10	〃		胴	厚 1.2	淡茶褐	角・砂・微	楕 (0.65×0.4)			良	I－1
11	〃		胴	厚 1.3	淡茶褐	角・雲・砂・少	楕			良	I－1
12	〃		胴	厚 1.3	明灰褐	英・角・白・砂中	楕 (0.6×0.45)			良	I－1
13	〃		胴	厚 1.2	灰褐／淡茶褐	雲・角・小石・砂・少	楕			良	I－1
14	〃		口縁～胴	口径 26.9	茶褐	白・赤・砂・少	縄（RL）	口縄（RL）	縄文	良	
15	〃		胴	厚 1.0	淡褐／褐	角・雲・砂・少	山(1.7・0.4)			良	外炭化物 IV-1-b
16	〃		胴	厚 1.0	褐／暗褐	英・雲・砂・微	山(1.4・0.5)			良	外炭化物 IV-1-b
17	〃		口縁	厚 0.8	灰褐／淡褐	角・白・砂・少	撚c	口撚d 山形撚		良	IV-1-e
18	〃		胴（屈）	厚 0.7	灰褐	角・細砂・微	不規則沈			良	IV-1-P
19	〃		胴	厚 1.1	褐／茶褐	雲・白・砂・中	沈 刺凸			良	V-1-e
20	〃		底	底径 6.8	淡茶褐／灰褐	英・角・雲・砂少				良	

第104図

No.	集石 No.	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	11		口～胴	厚 1.1	淡赤茶褐	英・角・砂・少	楕(5.5×3.5) 山(0.6×0.9)	口楕 (0.6×0.4)	楕?	普	I－1
2	〃		胴	厚 1.4	明茶褐	角・雲・砂・少	楕 山(0.6×0.35)			良	I－1
3	〃		胴	厚 1.4	淡赤黄褐／淡灰赤褐	角・砂・少	楕 山			良	M372と同一 I－1
4	〃		胴	厚 1.2	淡茶褐	角・砂・少	楕 山			良	M371と同一 I－1

第105図

No.	集石 No.		器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	調整	欠損	備考
1	1		石鏃	ch	2.4	1.6	0.4	1.1		完	
2	〃		〃	〃	2.6	1.7	0.6	1.2		d	
3	〃		〃	〃	3.7	1.9	0.6	3.4		d	

第106図

No.	集石 No.		器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	11		スクレイパー	ch	4.3	4.5	1.5	25.1			
2	〃		〃	〃	4.8	5.7	1.4	34.3			
3	〃		〃	〃	3.2	5.1	1.2	19.3			
4	〃		石匙	〃	5.7	7.9	1.6	50.2			
5	14		スクレイパー	〃	9.2	6.5	1.7	138.7			

第107図

No.	集石 No.		器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	7		磨石類	砂	5.9	7.3	3.8	237.0			
2	11		〃	〃	6.1	4.5	4.2	113.6			
3	7		〃	〃	10.2	5.9	2.6	243.2			
4	〃		〃	〃	6.5	7.3	3.1	240.6			
5	12		〃	〃	5.9	8.2	3.0	219.7			
6	7		〃	〃	12.2	7.7	6.8	920.0			
7	11		敲石	〃	8.5	4.5	1.9	111.1			

第108図

No.	集石 No.		器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	11		石皿	砂	21.9	29.7	6.9	8,500.0			
2	〃		〃	〃	28.9	37.9	11.3	15,100.0			

第109図

No.	遺構名	層	部　位	法　量（cm）	色　調（外／内）	胎　土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備　考
1	第1凹部	VI	口縁	厚　0.9	淡褐	英・角・砂・少	山(1.1・0.5)	口山(0.9・0.4)		良	IV-1-b
2	〃		口縁	厚　1.3	褐／淡茶褐	角・礫・砂・少	山	口山		良	IV-1-b
3	〃		口縁	厚　0.8	淡茶褐	英・角・砂・微	山(1.2・0.5)	口山(1.0・0.5)		良	IV-1-b
4	〃		口縁	厚　0.7	淡茶褐	角・砂・少	山	山(1.2・0.6)	?	良	IV-1-b
5	〃		胴（屈）	厚　0.7	淡茶褐	英・砂・少	山(1.0・0.5)			良	IV-1-b
6	〃	VI	胴	厚　0.8	黒褐	礫・細砂・少	山(1.3・0.65)			良好	IV-1-b
7	〃	VI	胴	厚　0.8	淡褐／淡茶褐	英・角・砂・少	山(1.0・0.7)			良	IV-1-b
8	〃		口縁	厚　0.8	褐	英・角・礫・砂・微	菱	口菱	菱?	良	外炭化物 IV-1-c
9	〃	VI	胴（屈）	厚　0.7	茶褐／淡褐	角・礫・細砂・微	菱			良好	IV-1-c
10	〃		口縁	厚　0.8	茶褐	角・礫・砂・微	同	口同		良	IV-1-d
11	〃		口縁	厚　0.8	淡茶褐	角・砂・少	縄（RL）			良	IV-1-a
12	〃	VI	胴	厚　0.9	褐／淡茶褐	角・細砂・少	縄（LR）			良	IV-1-a
13	〃	VI	胴	厚　1.2	淡茶褐	英・白・砂・中	連点、沈山？菱？			良	IV
14	〃	VI	胴	厚　0.8	淡褐／灰褐	英・角・砂・中	山刺凸			良	IV-1-h
15	〃	VI	胴	厚　0.6	淡茶褐	英・礫・細砂・少	縄（RL）刺凸			良	IV-1-d

No.	遺構名	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
16	〃		胴	厚 0.8	淡茶褐	英・角・砂・少	みみず凸			良	IV-1-ℓ
17	〃	VI	胴	厚 0.9	暗赤褐/赤褐	雲・白・砂・中	沈			良	V-1-f
18	〃	V・VI	胴	厚 1.0	暗赤褐/褐	雲・白・砂・少	沈			良	V-1-f
19	〃	VI	胴	厚 0.9	淡茶褐	砂・微	撚d 刺凸			良	V-1-c
20	〃		口縁	厚 0.9	淡赤褐	雲・白・砂・微	沈 刺凸		刺	良	V-1-e
21	〃	VI	胴	厚 0.9	明茶褐/淡赤褐	雲・長・砂・中	沈 刺凸			良	V-1-e
22	〃		口縁	厚 0.8	淡茶褐	英・角・砂・微	縄凸		刺?	良	V-1-d
23	〃		口縁	厚 1.0	明茶褐	角・砂・微	刺凸		刻	良	V-1-a
24	〃	VI	胴	厚 0.9	淡茶褐	細砂・微	刺凸			良	V-1-a
25	〃	VI	口縁	厚 0.8	暗茶褐/暗褐	白・砂・中	刺凸		刺	良	V-1-a
26	〃		胴	厚 0.7	淡褐	白・細砂・少	刺凸			良	V-1-a
27	〃		胴	厚 1.4	淡褐	角・白・砂・中	縄?			良	
28	〃		胴	厚 1.3	淡茶褐/茶褐	角・白・砂・中	縄?			良	外炭化物?
29	〃		底	底径 5.9	暗褐/淡茶褐	英・角・長・砂中				良	

第110図

No.	遺構名	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	第1凹部	V	口縁	厚 0.8	褐/明茶褐	英・角・白・砂中	格	格	格?	良	IV-1-i
2	〃	VI	口縁	厚 0.9	暗褐/明褐	英・角・白・砂少	格	口格		良	外炭化物 IV-1-i
3	〃	VI	胴	厚 0.8	灰黒褐/明茶褐	英・角・砂・少	格			良	IV-1-i
4	〃	VI	胴	厚 1.0	黒褐	英・角・砂・少	格			良	IV-1-i
5	〃	V	口縁	厚 1.2	淡灰褐/明茶褐	英・角・少	格	口格		良	外炭化物 IV-1-i
6	〃	VI	胴	厚 0.7	黒褐/茶褐	角・白・砂・少	格			良	外炭化物 IV-1-i
7	〃	VI	胴	厚 0.8	灰黒褐/淡茶褐	角・白・砂・少	格	ヘラなで		良	IV-1-i
8	〃	VI	胴	厚 0.7	灰黒褐/淡茶褐	角・砂・少	格			良	IV-1-i
9	〃		口縁	厚 0.6	淡灰褐	角・雲・砂・中	撚e		撚e	良	IV-1-f
10	〃		口縁	厚 0.6	茶褐/褐	英・角・雲・砂中	撚e		撚e	良	IV-1-f
11	〃		口縁	厚 0.7	淡茶褐	英・角・赤・少	撚d?			良	IV-1-j
12	〃		口縁	厚 1.0	淡茶褐	角・砂・少	不明	沈?		良	IV-1-j
13	〃		胴(屈)	厚 0.7	淡茶褐	角・砂・少	撚d			良	IV-1-j
14	〃		胴	厚 0.8	淡褐/褐	英・角・白・褐少	撚?			良	IV-1-j
15	〃	VI	胴	厚 1.1	淡灰褐/淡褐	角・白・砂・少	撚d			良	IV-1-j
16	〃		口縁近	厚 1.0	黒褐/淡茶褐	角・砂・少	撚d	口撚d		良	IV-1-j
17	〃	VI	胴	厚 0.7	淡赤褐/褐	英・角・雲・砂少	撚d			良	IV-1-j
18	〃	VI	胴	厚 0.9	褐/淡茶褐	英・角・長・黄砂・中	帯撚e			良	外炭化物
19	〃		胴	厚 0.6	淡茶褐	英・角・砂・少	沈			良	V-1-f

No.	遺構名	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
20	〃	V	胴	厚 0.9	黒褐/褐	英・角・砂・中	(荒)	ヘラ削り？		良	
21	〃		胴(底近)	厚 0.9	紫褐/褐	英・角・長・砂少	沈			良	IV-1-p
22	〃		胴	厚 1.0	茶褐	英・角・雲・白砂・少	沈			良	V-1-f
23	〃		胴	厚 1.1	淡赤褐/赤褐	雲・長・砂・少	沈			良	V-1-f
24	〃		胴	厚 1.0	淡灰褐	英・角・雲・少	沈			良	V-1-f
25	〃	VI	胴	厚 0.8	暗褐/赤褐	雲・白・砂・中	沈			良	V-1-f
26	〃	VI	胴	厚 1.0	赤褐/淡赤褐	雲・白・砂・中	沈			良	V-1-f
27	〃		胴	厚 1.0	紫灰褐/淡褐	英・角・砂・微	地文不明沈			良	V-1-f
28	〃		口縁	厚 1.0	淡褐	砂・少	刺凸			良	V-1-a
29	〃	VI	口縁	厚 0.9	茶褐/褐	英・角・砂・少	刺凸		刺	良	V-1-a
30	〃		口縁	厚 0.9	淡茶褐	英・細砂・少	刺凸		押捺	良	V-1-a
31	〃	VI	胴(屈)	厚 0.8	茶褐/灰褐	英・角・砂・少	刺凸			良	V-1-a
32	〃		胴	厚 0.8	黄褐/黄茶褐	英・角・雲・砂少	刺凸			良	V-1-a
33	〃		口縁	厚 0.9	灰黒褐/褐	英・角・砂・少	沈刺凸			良	V-1-a
34	〃	VI	口縁近	厚 0.8	淡灰褐/淡茶褐	英・白・砂・中	刺凸			良	V-1-a

第111図

No.	遺構名	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	第2凹部	VI	口縁	厚 1.3	黒褐/淡灰褐	雲・砂・少	撚a	口撚a	撚a	良	II－1
2	〃	V	胴	厚 1.4	淡茶褐	英・砂・少	楕(0.6×0.4)			良	I－1
3	〃	VI	口縁	厚 1.2	淡褐/淡黄褐	英・角・砂・少	楕(0.6×0.4 長4.4)	口楕(0.55×0.4)	楕	良	I－1
4	〃	VI	胴	厚 0.9	淡茶褐	英・角・砂・少	楕(0.6×0.5)			良	I－1
5	〃		口縁	厚 0.9	褐/淡褐	角・砂・少	山(2.1・0.8)	山(2.1・0.8)	山	良	IV-1-b
6	〃	VI	口縁	厚 0.8	淡茶褐	角・砂・少	山(1.5・0.8)	口山(1.0・0.7)		良	IV-1-b
7	〃		口縁	厚 0.8	淡褐/淡茶褐	角・砂・少	山(1.1・0.4)	口山(1.2・0.5)		良	IV-1-b
8	〃		口縁	厚 0.6	淡褐	英・角・砂・少	山	口山		良	IV-1-b
9	〃		口縁	厚 0.9	淡褐	角・雲・砂・少	山？	口山		良	IV-1-b
10	〃		口縁	厚 0.8	淡茶褐	英・角・少	山	撚c？		良	IV-1-b
11	〃	VI	胴(屈)	厚 1.0	茶褐/明茶褐	英・角・白・砂少	山？			良	IV-1-b
12	〃	VI	胴	厚 0.5	茶褐/灰褐	角・雲・白・砂少	山			良	内炭化物 IV-1-b
13	〃	VI	胴	厚 0.8	淡褐/褐	英・角・白・少	山・凸			良	IV-1-h
14	〃	VI	口縁	厚 0.6	淡茶褐	雲・白・砂・中	菱		菱	良	IV-1-c
15	〃		胴	厚 1.1	茶褐/淡茶褐	雲・細砂・少	菱			良	IV-1-c
16	〃		胴	厚 0.9	茶褐	英・角・砂・少	菱	一部ヘラなで		良	IV-1-c
17	〃		胴(屈)	厚 0.7	褐	英・角・砂・中	菱			良	IV-1-c
18	〃	VI	胴	厚 0.8	淡茶褐/褐	英・赤・小石・少	菱？			良	IV-1-c
19	〃		口縁	厚 1.0	灰褐/黒褐	英・角・砂・中	同	口同		良	IV-1-d

No.	遺構名	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
20	〃		口縁	厚 0.8	淡茶褐	砂・微	同	同		良	IV-1-d
21	〃		胴	厚 0.8	淡茶褐	角・砂・微	同？			良	

第112図

No.	遺構名	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	第2凹部		口縁	厚 0.7	黄褐／褐	白・砂・中	縄（RL） 刺凸	口縄（LR）		良	V-1-d
2	〃		胴	厚 1.2	茶褐 ／淡茶褐	英・礫・砂・中	縄（LR） 刺凸			良	外炭化物 V-1-d
3	〃	VI	胴	厚 0.8	暗褐 ／暗赤褐	角・白・砂・中	縄（RL） 刺凸			良	V-1-d
4	〃	VI	胴	厚 0.9	褐／淡茶褐	角・白・砂・少	縄（LR） 刺凸			良	V-1-d
5	〃	VI	胴	厚 0.7	淡褐	砂・微	縄（RL） 押引凸			良	V-1-d
6	〃	V	胴	厚 0.8	灰褐 ／明茶褐	英・角・砂・少	縄（LR） 刺凸			良	V-1-d
7	〃	VI	胴	厚 0.7	淡茶褐	角・赤・微	縄？ 刻凸			良	V-1-d
8	〃		口縁近？	厚 0.8	淡褐	角・石・砂・少	沈			良	VII
9	〃	VI	胴	厚 0.8	灰黒褐 ／淡褐	角・礫・石・中	沈 帯撚e			良	VII
10	〃		胴	厚 0.7	淡褐	砂・微	沈			良	VII
11	〃		胴～底	厚 0.6	淡茶褐	砂・中	沈 撚d？			良	VII
12	〃		口縁	厚 1.0	黒褐／淡褐	英・角・白・少	貝押引	ヘラなで		良	外炭化物 吉田式
13	〃		口縁	厚 0.8	灰褐／褐	英・角・白・少	貝押引	ヘラなで		良	吉田式
14	〃		口縁近	厚 0.9	淡茶褐	角・礫・砂・少	貝押引			良	吉田式
15	〃	VI	口縁	厚 1.0	灰褐／褐	英・角・白・砂少			羽状刻目	良	
16	〃		口縁	厚 1.1	淡茶褐 ／淡褐	角・小石・砂・中			羽状刻	良	
17	〃	VI	口縁	厚 0.8	褐	英・角・砂・中			羽状刻目	良	外炭化物
18	〃		口縁	厚 0.7	淡褐 ／明茶褐	英・角・砂・中	凹？条痕？		押捺	良	内赤彩？
19	〃		口縁	厚 0.8	淡赤褐	白・砂・中	沈 沈		押捺	良	
20	〃		口縁	厚 1.1	淡茶褐	英・角・白・少				良	
21	〃		頸	厚 1.1	淡白褐 ／淡褐	英・角・砂・少	なで	なで		良	時期不明
22	〃		？	厚 0.7	褐／淡褐	英・角・白・中	刺凸			良	
23	〃	VI	胴	厚 0.7	淡茶褐／褐	英・細砂・微	不明			普	
24	〃		胴	厚 0.7	褐／淡褐	角・砂・少	沈 ヘラなで			良	
25	〃	VI	底	底径 4.0	淡茶褐	英・角・砂・少				良	
26	〃		底	底径 7.5	淡茶褐 ／灰褐	砂・少				良	外炭化物
27	〃		胴～底	厚 0.8	淡茶褐 ／黒褐	英・砂・少	撚e？			良	
28	〃		底	厚 0.6	淡褐	角・砂・少				良	
29	〃	VI	胴～底	厚 0.6	淡褐	角・白・石・少	ヘラ削り	ヘラ削り		良	

第113図

No.	遺構名	層	器種	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 表面	調整・文様 裏面	調整・文様 側面	焼成	備考
1	第2凹部		土製品	径 4.6 厚 3.0	淡茶褐／灰黒褐	角・石・砂	ナデ	沈線		良	58.5g
2	〃		土製品	長 (6.0) 径 (2.3)	灰褐	角・石・白・砂中	面取り 爪痕(?)	面取り	面取り 爪痕(?)	良	(29g)

第114図

No.	遺構名	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	第3凹部	VI	胴	厚 1.0	茶褐／褐	英・角・砂・少	楕(0.8×0.3)			良	I－1
2	〃	VI	口縁	厚 0.8	黒褐／淡茶褐	角・砂・白・少	山(1.7・0.6)	口山 (1.6・0.5)		良	IV-1-b
3	〃	VI	胴（屈）	厚 0.9	暗褐／淡褐	英・角・砂・少	山			良	IV-1-b
4	〃	VI	胴（屈）	厚 0.9	褐／淡褐	英・角・白・砂少	山?			良	IV-1-b
5	〃	VI	口縁	口径 19.6	灰黒褐	雲・白・砂・少	菱		菱	良	IV-1-c
6	〃	VI	口縁	厚 0.8	淡褐	英・角・細砂・微	菱	口菱		良	IV-1-c
7	〃	VI	口縁近	厚 0.9	褐	英・角・砂・微	菱	口菱		良	IV-1-c
8	〃	VI	胴	厚 0.8	淡茶褐／褐	角・白・少	山			良	IV-1-b
9	〃	VI	胴（屈）	厚 0.8	灰褐／淡茶褐	英・角・砂・中	菱			良	IV-1-c
10	〃	V	胴	厚 0.8	淡茶褐／黒褐	砂・微	菱			良	IV-1-c
11	〃	VI	胴	厚 1.1	淡茶褐／淡褐	英・雲・砂・微	菱			良	IV-1-c
12	〃		胴	厚 0.8	淡茶褐	細砂・極微	撚c			良	IV-1-e
13	〃	VI	口縁	厚 0.8	淡褐	雲・細砂・微	撚c			良	IV-1-e
14	〃	V	胴（屈）	厚 0.7	淡褐	英・角・砂・微	櫛沈			良	IV-1-e
15	〃	VI	口縁	厚 0.8	灰褐／淡茶褐	角・砂・少	みみず凸刻?			良	VII
16	〃	VI	底	底径 5.2	灰黒褐／褐	英・角・砂・少				良	IV
17	〃		底	底径 5.8	淡茶褐	英・角・赤・少				良	
18	〃	VI	口縁	厚 0.8	明褐／明茶褐	角・雲・細砂・少	隆帯			良	IV-1-m

第1凹部

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
第115図1			石鏃	黒III	1.6	1.5	0.6	0.9			
〃2			〃	頁岩	2.1	1.4	0.5	1.15			
〃3			〃	ch	2.5	1.25	0.5	1.0			
〃4			〃	ch	3.1	1.8	0.6	2.0			
〃5			〃	安	3.0	1.5	0.7	1.85			
〃6			〃	ch	3.35	2.2	0.6	3.8			
〃7			〃	ch	2.6	1.9	0.5	2.0			
第118図1			二次加工	ch	3.5	2.9	1.0	9.4			
第118図5			使用痕	ch	3.0	2.3	0.7	4.6			
第120図4			磨石	砂	10.0	10.4	3.9	603.3			

第2凹部

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
第116図1			石鏃	ch	2.35	1.2	0.4	0.8			
〃2			〃	安	2.3	1.2	0.5	1.3			
〃3			〃	ch	2.7	2.2	0.5	2.2			
第118図1			スクレイパー	ch	3.2	2.7	0.6	5.5			
〃7			〃	ch	4.0	6.9	1.0	33.4			
〃8			〃	ch	5.1	6.0	1.3	40.8			
〃2			二次加工	ch	3.6	1.8	0.9	4.9			
〃4			〃	黒I	2.6	3.2	1.0	9.4			
〃3			使用痕	黒III	2.8	2.5	0.95	6.6			
第118図2			〃	ch	5.5	3.2	1.4	9.0			
〃3			〃	ch	4.3	3.6	1.7	30.2			
第117図			石核	ch	11.7	10.0	3.5	485.6			
第120図1			磨石	砂	7.3	7.2	4.7	350.1			
〃2			〃	〃	9.2	7.5	4.9	401.5			
〃5			〃	〃	8.2	7.7	5.8	700.0			
第121図1			〃	〃	9.8	7.9	3.8	451.4			
〃3			〃	〃	11.5	10.0	5.6	850			
〃2			敲石	〃	10.1	4.9	2.3	158.1			
〃4			〃	〃	9.6	4.3	2.2	134			
第116図4			異形石器	安	3.0	2.1	0.7	2.55			

第3凹部

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
第118図4			スクレイパー	ch	3.9	5.3	1.2	25.8			
〃5			使用痕	ch	4.1	5.2	1.3	27.4			
第118図6			〃	ch	3.1	2.1	0.8	4.2			
第120図3			磨石	砂	6.9	8.2	4.4	389			

第123図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1			口縁	厚 0.9	淡灰褐／灰褐	英・雲・細砂・少	楕(0.75×0.35)	口楕(0.7×0.35)	楕	良	内炭化物
2	I－b	III	口縁	厚 1.1	淡茶褐／淡灰褐	英・角・白・砂中	楕(0.55×0.35)	口楕(0.65×0.3)	楕	良	
3	M－5	V	口縁	厚 1.1	茶褐／淡茶褐	角・白・砂・少	楕(0.6×0.4)	口楕	楕(0.6×0.35)	良	
4	H－5	V	口縁	厚 1.0	茶褐	白・赤・石・中	楕(0.8×0.45)	口楕(0.75×0.5)	楕	良	
5	N－15		口縁	厚 1.1	淡茶褐	雲・白・砂・少	楕(0.75×0.35)	口楕(0.7×0.3)	楕(0.55×0.3)	普	
6	O－13	VI	口縁	厚 1.2	淡赤褐／淡茶褐	細砂・少	楕(0.7×0.35)	口楕(0.7×0.35)	楕	普	
7	R－12	V	口縁	厚 1.1	淡茶褐	英・角・砂・少	楕(0.75×0.35)	口楕(0.65×0.35)	楕(0.7×0.4)	良	
8	D－3	VI	口～胴	口径 21.0	淡茶褐／褐	英・角・細砂・中	楕(0.55×0.3)(0.5×0.25)	口楕(0.6×0.25)	楕	良	
9	N－14	VI	口縁	厚 1.0	白褐	雲・砂・少	楕(0.5×0.3)	口楕(0.5×0.3)		普	
10	I－5	V	口縁	厚 1.2	淡茶褐	角・雲・砂・微	楕(0.65×0.3)	口楕(0.6×0.3)		良	穿孔途中
11	F－4	III	口縁	厚 1.3	淡茶褐／淡褐	細砂・微	楕	口楕		良	
12	E－2	V	口縁	厚 0.8	褐	角・白・砂・少	楕(0.4×0.2)	楕(0.5×0.2)		良	
13	M－12	VI	口縁	厚 1.2	茶褐／淡褐	角・雲・砂・中	楕(0.6×0.3)	口楕(0.5×0.3)		普	
14	E－2・3	VI	口縁	口径 24.1	淡茶褐／褐	角・雲・砂・少	楕(0.6×0.2)	口楕(0.6×0.25)		普	
15	S－12	V	口縁	厚 1.4	淡灰褐／淡褐	角・雲・白・砂中	楕(0.7×0.5)	口楕(0.8×0.3)		やや不良	穿孔有
16	O－12	VI	口縁近	厚 1.1	淡赤褐／明褐	角・雲・白・赤砂・少	楕(0.6×0.35)	口楕(0.6×0.35)		良	

第124図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	Q－9		胴	厚 1.0	茶褐	英・角・白・砂	楕(0.55×0.5)			良好	
2	M－8		口～胴	厚 0.9	淡茶褐	英・細砂・少	帯楕(0.6×0.3 長2.1)	口楕	楕	普	外炭化物
3	I－7	V	胴	厚 1.2	淡褐	角・雲・砂・少	楕(0.7×0.35)			良	
4	S－12	IV・VI	胴	厚 0.9	淡茶褐	角・雲・砂・少	楕(0.85×0.55)	凹線有(キズ？)		良	
5	J－11	V	胴	厚 1.1	褐／淡茶褐	白・砂・微	楕(0.75×0.4)			良好	
6	G－6	VI	胴	厚 0.8	茶褐／灰黒褐	白・微	楕(0.7×0.35)			良	
7	62号土坑	覆土	胴	厚 1.1	淡黄褐	英・角・少	楕(0.45×0.2 長2.8)			普	
8	G－8	P	胴	厚 1.2	淡茶褐／黒褐	英・角・砂・中	楕(0.5×0.4)			良	
9	N－11	V	胴	厚 1.2	灰褐／茶褐	角・雲・砂・微	楕(0.7×0.6)			良好	
10	Q－11	VI	胴	厚 0.9	灰褐／茶褐	角・雲・白・微	楕(0.85×0.7)			良好	
11	H－5	P	胴	厚 1.3	淡褐	英・角・砂・少	楕(0.5×0.3)			普	
12	62号土坑	覆土	胴	厚 1.2	淡黄茶褐	雲・細砂・微	楕			良	
13	62号土坑	覆土	胴	厚 1.2	淡黄褐／褐	英・角・細砂・中	楕(0.4×0.3)			良	
14	I－6	P	胴	厚 1.0	淡白褐／淡褐	英・角・砂・少	楕			良	
15	H－5	P	胴	厚 0.8	淡黄褐／褐	角・雲・砂・少	楕			やや不良	
16	I－5	V	胴	厚 1.0	淡灰褐	白・砂・極微	楕(0.5×0.3 長3.1)			良	
17	I－8	V	胴	厚 0.9	灰褐／淡茶褐	角・白・砂・少	楕(0.8×0.3 長3.5)			良	

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
18	H－4	V	胴	厚 0.7	灰褐	英・雲・砂・中	楕(0.5×0.2)			良好	
19	H－5	P	胴	厚 0.9	淡褐	白・細砂・少	楕(0.4×0.2)			良	
20	D－3	V	底近？	厚 1.4	淡茶褐	角・雲・砂・少	楕(0.7×0.4)			普	
21	F－4	V	底近	厚 1.3	淡茶褐	角・雲・白・赤石・少	楕			普	
22	N－15	VI	胴	厚 1.0	淡赤茶褐／淡褐	角・砂・微	山 楕			良	
23	I－5	P	胴	厚 1.1	赤茶褐／黒褐	英・角・砂・中	山(0.5・1.0) 楕(0.3×0.5)			やや不良	
24	I－11	VI	底	厚 1.2	淡茶褐	角・雲・砂・微	楕			普	
25	I－9	VI	胴		淡褐	角・砂・少	山 楕			良	
26	I－7	V	胴	厚 1.3	淡褐	角・砂・微	山(0.4・1.0) 楕			良	
27	N－15	V	胴	厚 1.0	淡茶褐	角・砂・微	山 楕			良	
28	I－11	VI	胴	厚 1.1	淡茶褐／褐	角・砂・微	山(0.4・0.8) 楕			良	

第126図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	F－4・6	V・VI	口～胴	厚 1.3	灰褐／淡褐	角・雲・砂・中	撚a	口撚a	撚a	普	
2	O－7 P－6	III・VI	口縁	厚 1.1	黒褐／褐	雲・細砂・少	撚a	口撚a	撚a	良	
3	F－5	III	口～胴	厚 1.3	淡灰褐	雲・砂・少	撚a	口撚a	撚a	良	
4	G－5	VI	口縁	厚 1.1	淡茶褐／淡褐	白・砂・微	撚a	口撚a	撚a？	良	
5	G－6	VI	口縁	厚 1.0	淡赤褐／淡灰褐	角・雲・砂・中	撚a	口撚a	撚a？	良	
6	I－6	VI	口縁	厚 1.2	淡褐／淡茶褐	角・雲・白・赤砂・少	撚a	口撚a	撚a	良	
7	K－8	V	口縁	厚 1.3	灰黒褐／淡茶褐	角・雲・白・砂少	撚a	口撚a（網）		普	
8	G－6 F－6	V・VI	胴	厚 1.2	淡茶褐／淡褐	雲・白・砂・少	撚a			良	
9	F－5・6	III・V	胴	厚 1.2	淡茶褐／淡黒褐	雲・白・砂・微	撚a			良	
10	F－6	V	胴	厚 1.3	淡茶褐／灰黒褐	雲・白・砂・少	撚a			良	
11		V	胴	厚 1.3	淡茶褐／黒褐	雲・白・砂・微	撚a			良	
12	E－7	地横	胴	厚 1.5	淡茶褐	白・細砂・中	撚a			良	
13	F－5	III	胴	厚 1.2	淡茶褐／淡褐	角・雲・白・砂微	撚a			普	
14	H－9	VI	胴	厚 1.0	暗灰褐／茶褐	角・白・砂・少	撚a			良	
15	E－6	V	胴	厚 1.2	淡褐／明茶褐	雲・白・微	撚a			普	

第128図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	G－5	V	口縁	厚 1.2	明茶褐	雲・白・褐・中	撚b	口撚		良	
2	E－5	Vト	口縁	厚 1.2	明茶褐	雲・白・褐・中	撚b	口撚		良	
3	H－7	III	胴	厚 1.1	明茶褐	雲・白・褐・中	撚b			良	
4	G－4 H－7	V	胴	厚 1.0	明茶褐	雲・白・褐・中	撚b			良	
5	F－7 I－6	V	胴	厚 1.2	明茶褐	雲・白・褐・中	撚b			良	
6	G－6	VI	胴	厚 1.1	明茶褐	雲・白・褐・中	撚b			良	
7	H－8	V	胴	厚 1.0	茶褐	雲・白・褐・中	撚b			良	
8	G－5	V	胴	厚 1.0	明茶褐/褐	雲・白・褐・中	撚b			良	
9	G－5	V	胴	厚 1.1	明茶褐	雲・白・褐・中	撚b	撚b		良	

第129図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	F－3・4	地横	口～胴	口径 31.4	褐	角・白・砂・少	縄（RL）	口縄（RL）		良	外炭化物2と同一個体
2	F－3	地横 V	胴	胴径 25.0	茶褐/明褐	角・白・砂・少	縄（RL）			良	外炭化物1と同一個体
3	J－11	V	口～胴	口径 26.9	淡茶褐/灰褐	英・細砂・微	縄（LR）	口縄（LR）	縄（LR）	良	穿孔途中

第130図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	J－6	VI	口縁	厚 0.9	灰褐/淡褐	英・角・長・白砂・中	縄（LR）	口縄（LR）	縄	良	
2	E－5	V	口縁	厚 1.4	淡茶褐	角・雲・砂・少	縄（LR）	口縄（LR）	縄？	良	
3	F－4	III・V	口縁	厚 0.8	茶褐/褐	英・砂・少	縄（RL）	口縄（RL）		良	
4	R－17	IV	口縁	厚 1.1	暗灰/淡褐	雲・白・砂・微	縄縄？	口 原体条痕		良	
5	E－4	V	口縁	厚 1.5	淡茶褐	英・角・砂・少	縄（LR）	口縄(LR？)	縄	良	
6	P－11	IV	口縁	厚 0.8	茶褐	英・角・白・砂少	縄（RL）	口縄（RL）		良	
7	H－5	V	口縁	厚 1.1	明褐/暗褐	英・角・白・砂中	縄（LR）			普	
8	H－4	V	口縁	厚 0.5	淡褐/灰黒褐	英・角・砂・中	縄（RL）		縄（RL）	良好	11・17と同一個体
9	I－6	VI	口縁	厚 1.3	褐	英・角・白・砂中	縄（LR）			普	
10	H－5	P.	胴	厚 0.8	淡茶褐/褐	英・角・砂・中	縄（LR）			良	
11	H－4	V	胴	厚 0.6	灰黄褐/淡灰褐	英・角・砂・中	縄（RL）			良好	8・17と同一個体
12	K－12		胴	厚 1.0	茶褐	英・角・砂・少	縄（LR）			良	
13	62号土坑	覆土	胴	厚 1.1	淡茶褐/淡褐	石・砂・中	縄			普	
14	62号土坑	覆土	胴	厚 0.7	褐	砂・微	縄？			良	
15	E－4	V	胴	厚 0.7	赤褐/褐	角・雲・砂・微	縄（LR）			良	
16	59号土坑	覆土	胴	厚 0.8	淡茶褐	角・砂・少	縄（RL）			良	
17	H－4 8・10	III・V	胴	厚 0.6	灰黄褐/淡黄褐	英・角・砂・中	縄（RL）			良好	8・11と同一個体

第131図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	G－7 I－6	III・V	底	底径 7.9	褐	雲・砂・少	縄（LR）			良好	
2	I－6	VI	底近	厚 0.7	暗茶褐／茶褐	英・砂・少	縄（LR）			良	
3	I－6	VI	胴～底	厚 0.9	淡黄茶褐	英・白・砂・中	縄（LR）			良	
4	I－7	V・VI	底	厚 0.6	灰褐	砂・少	縄（LR）			良好	
5	I－6	V	胴～底	厚 0.7	茶褐	白・長・砂・少	縄（LR）			良	
6	I－6	V	底	厚 0.7	茶褐／濁茶褐	雲・白・砂・中	縄（LR）			良	
7	I－8	V	底	厚 0.6	淡茶褐／灰褐	砂・微	縄（LR）			普	
8	H－9	表	底	厚 0.7	褐／淡茶褐	白・砂・少	縄（LR）			良好	
9	I－6	III	底	厚 0.8	褐	白・雲・砂・少	縄（LR）			良	

第132図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	T－14	V	口～胴	口径 27.8	淡茶褐	英・角・雲・白砂・中	山(0.6・2.4)	口山(0.6・2.4)	山	普	
2	V－16	VI	口～胴	口径 37.5	褐／淡茶褐	英・角・赤・石砂・中	山(0.5・2.5)	口山	山	良	

第133図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	O－9	V	口縁	口径 32.3	淡灰褐	角・砂・中	山(0.5・1.1 長4.0)	口山(0.4・1.4)	山	良	
2	G－5	V	口～胴	口径 29.9	灰褐	角・雲・白・砂中	山(0.6・1.2 長6.3)	口山(0.7・1.4)	山	良	
3	I－9	III	口～胴	口径 27.4	褐／淡茶褐	英・角・白・砂中	山(0.4・1.1 長6.8)	口山(0.4・1.0)	山？	普	

第134図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	H－5 I－6	VI	口縁	口径 37.0	灰褐／淡茶褐	英・角・砂・少	山(0.4・2.4)	口山(0.6・2.0)	山	良	
2	I－9	VI	口縁	厚 1.2	淡茶褐	角・雲・砂・中	山(0.35・1.2)	口山	？	良	
3			口縁	厚 0.9	淡褐	雲・白・多	山(0.6・1.1)	口山(0.4・1.1)	山(0.4・1.1)	良	
4	G－5	III	口縁	厚 0.9	茶褐／淡茶褐	雲・白・砂・中	山(0.7・1.0)	口山(0.7・1.2)	山	良	
5	I－5	P	口縁	厚 1.1	茶褐	雲・白・砂・多	山(0.8・1.2 長3.9)	口山(0.5・1.4)	山	良	
6	G－5	VI	口縁	厚 1.0	灰黒褐	英・角・白・赤砂・中	山(0.6・1.2)	口山(0.5・1.3)	山	良	8と類似
7	R－17	V	口縁	厚 0.9	茶褐	雲・白・石・砂少	山(0.9・1.1)	口山(0.8・1.3)	山	良	
8	F－6	VI	口縁	厚 1.0	灰黒褐	角・白・赤・砂中	山(0.5・1.2 長3.8)	口山(0.5・1.1)	山	良	6と類似
9	G－6	VI	口縁	厚 1.0	暗褐／淡茶褐	英・角・白・少	山(0.3・2.2)	口山(0.4・1.6)	山	良	外炭化物
10	P－16	V	口縁	厚 1.1	淡茶褐	英・角・砂・少	山(0.5・1.2)	口山(0.5・1.1)	山	良	
11	II区		口縁	厚 1.0	灰褐	角・白・砂・少	山(0.6・1.1)	口山？	山	良	
12	K－11	P	口縁	厚 1.1	淡褐	角・砂・微	山	口山(0.5・1.1)		良	
13	N－13	VI	口縁	厚 1.2	淡白褐	英・角・白・中	山(1.3・1.8)	口山	山	良	
14	S－14	IV	口縁	厚 0.9	茶褐	英・角・砂・少	山(大型)			良	
15	I－5	P	口縁	厚 1.2	淡黄褐	英・角・雲・中	山(0.5・1.4)			やや不良	

第135図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	I－9	VI	胴	厚 1.3	灰褐/淡褐	角・雲・砂・中	山 (0.35・1.1)			良	
2	H－5	P	胴	厚 1.5	淡黄褐	英・角・細砂・微	山 (0.45・0.85)			普	
3	H－5	V	胴	厚 1.3	淡褐/淡灰褐	角・砂・中	山(0.3・1.1)			良	
4	59号土坑	覆土	胴	厚 0.7	黒褐/赤褐	英・角・白・砂少	山(0.5・1.3)			良	
5	59号土坑	覆土	胴	厚 0.7	茶褐	白・細砂・少	山			良	
6	H－5	P	胴	厚 1.0	褐	角・砂・少	山(0.6・1.0)			良	
7	M－11	VI	胴	厚 0.9	淡茶褐	英・角・細砂・微	山			良	
8	S－17	VI	胴	厚 0.7	明褐	角・白・砂・中	山(0.5・1.6)			普	
9	S－17	VI	胴(屈)	厚 0.8	淡赤褐/淡灰褐	角・雲・白・赤砂・中	山(1.0・2.0)			普	
10	I－11	VI	胴(屈)	厚 1.0	淡茶褐	角・雲・赤・砂少	山？			普	
11	H－5	VI	胴(屈)	厚 0.9	淡赤褐/淡灰褐	角・雲・白・赤中	山(0.6・1.6)			普	
12	V－16	VI	胴	厚 0.9	茶褐/淡茶褐	英・角・砂・中	山(0.5・2.4)			良	第132図2と類似
13	H－9	III	胴	厚 1.3	淡黄褐	角・雲・白・砂中	山(1.1・1.3)			良	
14	59号土坑	覆土	胴	厚 0.5	黒褐/明茶褐	角・白・赤・中	山(0.6・1.2)			良	
15	59号土坑	覆土	胴	厚 0.8	明茶褐	角・白・赤・少	山			良	
16	H－8	P	胴	厚 1.5	淡茶褐	英・角・砂・少	山			普	
17	62号土坑	覆土	底近	厚 1.0	淡茶褐/灰褐	角・雲・砂・少	山			良	
18	G－6	VI	底	厚 1.1	淡茶褐	角・雲・砂・少	山(0.5・0.7)			やや不良	

第136図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	T－15	VI	口縁	厚 0.7	淡褐	角・白・砂・少	山(0.6・1.6)	山(0.5・2.0)	山	良	
2	S－17	VI	口縁	厚 0.5	淡褐	英・角・細砂・少	山	山	山	良	
3	H－5	II	口縁	厚 0.7	淡茶褐	角・雲・砂・中	山(0.6・1.0)	口山 (0.6・1.2)	山	良	
4	H－8	V	口縁	厚 0.8	灰褐	英・角・細砂・少	山	山	山？	良	
5	R－17	V	口縁	厚 0.8	淡褐	英・角・砂・少	山	山	山	良	
6	R－17	V	口縁	厚 0.6	淡茶褐	角・砂・少	山	山	山	良	
7	Q－10	III	口縁	厚 0.8	淡茶褐	英・角・砂・少	山	口山		良	
8	F－2	V	口縁	厚 0.7	灰褐/褐	角・雲・細砂・中	山？			良	
9	K－8	V	口縁	厚 0.8	淡茶褐	雲・白・砂・中	山		山	良	10と類似
10	K－8		口縁	厚 0.7	淡茶	雲・白・砂・中	山		山	良	9と類似
11	K－8	V	口縁	厚 0.7	褐	英・角・細砂・少	山(1.3・2.4)	口山 (1.3・2.4)		良	
12	E－2	VI	口縁	厚 0.9	褐/黒褐	長・雲・砂・微	山			良	穿孔
13	I－10	P	胴	厚 0.8	淡灰褐/淡褐	英・角・砂・少	山			良	
14	I－11	P	胴(屈)	厚 0.7	淡黄褐/淡茶褐	英・角・砂・中	山			良	
15	O－11		胴(屈)	厚 0.5	褐/淡茶褐	砂・微	山(0.4・2.4)			良	
16	H－6	V	胴(屈)	厚 0.5	淡茶褐/淡褐	角・雲・砂・微	山(0.2・1.2)			良	

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
17	I－7	III	胴（屈）	厚 0.7	淡茶褐	英・角・砂・少	山			良	
18	I－6	VI	胴（屈）	厚 0.5	褐	雲・砂・白・中	山(0.5・1.4)			良	
19	59号土坑	覆土	胴（屈）	厚 0.5	黒褐／淡赤褐	角・砂・少	山			良	
20	H－5	V・VI	胴（屈）	厚 0.7	褐／黒褐	雲・砂・微	山(0.7・1.8)			良	外炭化物
21	I－5	VI	胴（屈）	厚 0.6	灰褐／淡茶褐	英・角・砂・少	山(0.5・1.9)			良	外炭化物
22	N－9	VI	胴（屈）	厚 0.7	褐／灰黒褐	英・角・砂・少	山(0.5・1.4)			良	
23	T－16	III	胴（屈）	厚 0.7	淡茶褐／褐	砂・少	山			良	
24	H－5	VI	胴（屈）	厚 0.8	茶褐／濃赤褐	角・雲・白・赤中	山			普	
25	R－17	VI	胴（屈）	厚 0.8	淡灰褐	角・砂・微	山？			良	
26	J－6	V	胴	厚 0.6	黄赤褐／黒褐	雲・砂・微	山			良	
27	V－14	VI	胴（屈）	厚 0.8	淡茶褐／灰褐	砂・少	山？			良好	外炭化物
28	H－5	VI	胴	厚 0.8	褐／暗灰	角・白・砂・中	山			良	
29	I－7	III	底	厚 0.8	淡茶褐／黒褐	英・角・砂・中	山？			良	

第137図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	I－10	V	口縁	厚 0.7	淡茶褐	角・雲・砂・少	菱	口菱	菱？	良	
2	G－5	V	口縁	厚 0.7	茶褐	英・角・雲・白砂・少	菱	口菱	菱？	良好	
3	E－4	V	口縁	厚 0.8	茶褐	英・角・雲・微	菱	口菱	菱？	良	
4	F－2	V	口縁	厚 0.7	明茶褐	角・雲・砂・少	菱	口菱	菱？	良好	
5	E－4	III	口縁	厚 0.8	茶褐	角・雲・砂・微	菱	口菱	菱？	良	
6	H－5	VI	口縁	厚 1.0	淡茶褐	角・雲・少	菱	口菱	菱？	良好	
7	P－13	V	口縁	厚 0.8	淡茶褐	角・砂・少	菱	口菱	菱？	良	
8	F－5	III	口縁	厚 0.8	明茶褐／淡茶褐	角・雲・白・砂少	菱	口菱	菱？	良	
9	I－5	III	口縁	厚 0.8	灰褐／淡茶褐	英・角・少	菱	口菱	菱？	良	
10	I－8	VI	口縁	厚 0.9	褐／淡茶褐	英・角・砂・中	菱	口菱	菱？	良	
11	P－13	VI	口縁	厚 0.8	灰黒褐／褐	英・白・砂・少	菱	口菱	菱？	良	
12	U－15	V	口縁	厚 0.7	褐／淡茶褐	英・角・砂・微	菱	口菱	菱？	良	外炭化物
13	R－17	VI	口縁	厚 1.0	淡褐	英・角・砂・少	菱	口菱	菱？	良	
14	E－4	VI	口縁	厚 0.9	淡褐	英・角・白・赤砂・中	菱	口菱	菱？	良	
15	R－17	VI	口縁	厚 0.7	灰褐／黒褐	英・角・砂・中	菱	口菱	菱？	良	
16	P－11	V	口縁	厚 0.7	淡茶褐	英・角・雲・砂中	菱	菱	菱？	良	
17	T－14	VI	口縁	厚 0.8	黒褐／褐	英・角・白・少	菱	菱	菱？	良	
18	L－10	I	口縁	厚 0.7	灰褐／淡茶褐	英・角・砂・少	菱	菱	菱？	良	
19	N－10		口縁	厚 0.7	淡灰褐	雲・白・砂・中	菱		菱？	良好	
20	V－14	VI	口縁	厚 0.9	淡褐／淡白褐	英・角・雲・砂中	菱	菱	菱？	良	
21	P－12	V	口縁	厚 0.9	淡茶褐	角・雲・砂・少	菱	菱	菱？	良	

第138図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	H－6	III	口縁	厚 0.7	淡茶褐	砂・微	菱	口菱	菱？	良	
2	Q－11	VI	口縁	厚 0.7	淡茶褐	角・砂・少	菱	口菱	？	良	
3	I－7	P	口縁	厚 0.8	茶褐／褐	英・雲・砂・微	菱	口菱		良	外炭化物
4	R－11	VI	口縁	厚 0.8	淡茶褐／茶褐	角・砂・微	菱	口菱		良	
5	N－11		口縁	厚 0.7	淡白茶褐	細砂・微	菱	菱		良	
6	45号土坑	覆土	胴	厚 0.8	褐	英・砂・少	菱			良	外炭化物
7	62号土坑	覆土	胴	厚 0.8	淡茶褐／黒褐	英・砂・中	菱			良	
8	44号土坑	覆土	胴	厚 0.9	明茶褐	雲・白・砂・少	菱？			良	
9	E－2	VI	胴	厚 0.8	明茶褐／褐	砂・微	菱			良	
10	K－7	I	胴	厚 0.8	淡茶褐／灰褐	雲・細砂・微	菱			良	
11	S－17	IV	胴	厚 0.7	淡灰褐	角・砂・微	菱			良好	
12	Q－12	VI	胴	厚 1.0	淡茶褐	英・角・長・砂少	菱			良	
13	H－6	V	胴	厚 1.0	茶褐／褐	砂・極微	菱			良好	
14	62号土坑	覆土	胴	厚 0.8	黒褐／淡茶褐	英・角・雲・少	菱			良	
15	N－10		胴	厚 0.9	茶褐	英・角・砂・微	菱			良好	
16	O－10	VI	胴	厚 0.9	明茶褐	砂・微	菱			良	
17	K－10		胴（屈）	厚 0.8	灰黒褐／淡茶褐	英・角・雲・白少	菱			良	
18	O－10	V	胴（屈）	厚 0.6	黒褐／淡褐	英・角・砂・少	菱			良	
19	Q－11	VI	胴（屈）	厚 0.8	茶褐／褐	英・角・細砂・少	菱			良	
20	P－11	VI	胴（屈）	厚 0.8		雲・白・砂・微	菱			良	
21	R－17	VI	胴（屈）	厚 0.5	淡褐	英・角・砂・中	菱			良	
22	G－10	VI	胴（屈）	厚 0.9	淡茶褐	角・砂・微	菱			良	
23	N－14	V	胴（屈）	厚 1.1	茶褐	角・雲・砂・少	菱			良	
24	60号土坑	覆土	胴（屈）	厚 0.6	淡褐／淡褐	角・白・赤・砂少	菱			良	外炭化物
25	R－17	VI	胴（屈）	厚 0.8	淡茶褐	英・白・砂・微	菱			良	
26	1－6	VI	胴（屈）	厚 0.8	淡茶褐	角・赤・砂・微	菱			良	
27	H－5	VI	胴	厚 0.6	淡茶褐	雲・白・砂・中	菱			良	
28	E－2	IV	胴	厚 1.0	淡褐／灰黒褐	角・砂・微	菱			良好	
29	H－9	III	胴	厚 0.6	淡茶褐	雲・細砂・微	菱			良好	
30	P－15	VI	胴	厚 0.9	茶褐	砂・少	菱			良	
31		VI	胴	厚 0.7	淡茶褐	英・角・白・中	菱			良	
32	U－14	V	胴	厚 0.8	暗褐／灰褐	角・白・砂・少	菱			良好	外炭化物
33	K－12		胴	厚 0.8	淡褐	角・雲・砂・少	菱			良	
34	E－3	IV	胴	厚 0.9	茶褐／灰黒褐	角・雲・砂・火	菱			良好	
35	O－14	VI	胴	厚 0.8	淡茶褐	雲・石・砂・中	菱			良	
36	N－15	V	胴	厚 0.8	淡茶褐	角・雲・細砂・中	菱			良	
37	P－4	VI	胴	厚 0.7	茶褐／灰褐	角・雲・砂・中	菱			良好	

第139図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	I－5	V	胴	厚 0.8	淡赤褐／暗褐	砂・中	菱			良	
2	I－5	V	胴	厚 0.9	灰褐／暗褐	雲・白・砂・微	菱			良	
3	I－6	V	胴	厚 0.7	淡赤褐／灰褐	砂・中	菱			良	
4	I－9	III	胴	厚 1.0	明茶褐／灰褐	角・砂・白・石砂・少	菱			良好	
5	N－14		胴	厚 0.8	明茶褐	角・雲・砂・少	菱			良好	
6	N－14 O－14	VI	胴	厚 0.9	褐／淡茶褐	雲・砂・多	菱			良	
7	I－6	P	胴	厚 0.5	淡黄茶褐／淡褐	角・雲・細砂・微	菱			良好	
8	O－13	VI	胴	厚 0.7	淡茶褐	英・角・砂・微	菱			良	
9	G－4	V	胴	厚 0.8	明茶褐	角・雲・砂・微	菱			良	
10	I－8	VI	胴	厚 0.7	黒褐／淡茶褐	角・雲・細砂・少	菱			良好	
11	60号土坑	覆土	底	厚 0.7	茶褐	英・角・白・少	菱？			良	

第140図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	I－8	V	口縁	厚 0.8	淡褐	角・砂・微	同	口同	同	良	
2	Q－10	VI	口縁	厚 0.7	淡茶褐	砂・微	同	口同？	同	良	
3	K－13 O－11 12・13	表 V・VI	口～胴	厚 0.7	明茶褐	角・雲・白・砂少	同	口同		良	3～8は同一個体
4	N－15	V	口縁	厚 0.8	茶褐	角・雲・砂・少	同	口同		良	〃
5	O－12	VI	口縁	厚 0.8	明茶褐	角・雲・白・砂少	同	口同		良	〃
6	M－14	地横	胴	厚 1.1	茶褐	角・雲・砂・少	同			良	〃
7	O－12	V	胴（屈）	厚 0.7	茶褐	角・雲・砂・少	同			良	〃
8	M－12 P－11・12 Q－11	VI	胴（屈）	厚 0.5	明茶褐	角・雲・白・砂少	同			良	〃
9	I－5・6	V・VI	胴（屈）	厚 0.8	淡茶褐／灰褐	英・砂・少	同			良	
10	I－6	VI	胴（屈）	厚 0.8	黒褐	英・白・砂・中	同			良好	
11	I－6	VI	胴（屈）	厚 0.6	灰褐	雲・砂・微	同			良	
12	O－15	VI	胴（屈）	厚 0.7	茶褐	角・白・微	同			良	
13	I－8	I	胴	厚 0.9	灰褐／淡茶褐	角・砂・少	同			良	
14	N－10	V	胴	厚 0.8	灰黒褐／淡褐	砂・白・極微	同			良	
15	O－14	IV	胴	厚 0.9	茶褐／淡茶褐	砂・微	同			良	
16	Q－10	V	胴	厚 0.8	淡茶褐／淡赤褐	雲・赤・赤・中	同			良	同一個体6点有
17	I－11	I	胴	厚 0.8	淡茶褐	角・砂・中	同			良	

第141図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	Q－11	VI	口縁	厚 0.7	灰黒褐／灰褐	角・雲・砂・微	撫c	口撫c	撫c	良	
2	D－3	II	口縁	厚 0.8	淡茶褐	角・白・砂・少	撫c	撫c		良	
3	L－11		口縁	厚 0.8	淡茶褐	雲・砂・微	撫c	口撫c		良	
4	Q－11	VI	口縁	厚 0.6	灰褐	雲・砂・極微	撫c	口撫c	撫c？	良	
5	G－4	VI	口縁	厚 0.8	灰黒褐／褐	英・角・白・砂中	撫c	口 撫d 撫c		良	
6	U－16		口縁	厚 0.8	灰褐／淡褐	雲・細砂・少	撫c			良	
7	P－5	V	口縁近	厚 0.9	茶褐／淡灰黒褐	英・雲・細砂・微	撫c			良好	
8	U－16		口縁	厚 0.8	灰褐／淡茶褐	雲・白・砂・微	撫c			良	
9	J－6	VI	口縁	厚 1.0	淡灰褐／淡茶褐	雲・白・砂・少	撫c			良	
10	V－16	VI	口縁	厚 0.9	灰褐／淡茶褐	雲・細砂・少	撫c			良	
11	I－6	P	口縁	厚 0.8	褐	角・雲・細砂・微	撫c			良好	外炭化物
12	F－4	VI	口縁	厚 0.9	淡褐／淡茶褐	雲・砂・微	撫c			良	
13	H－4	III	胴	厚 0.8	淡茶褐	白・砂・微	撫c			良	
14	R－17	VI	胴	厚 1.0	淡茶褐	白・細砂・微	撫c			良	
15	U－16	VI	胴	厚 1.0	淡茶褐／淡褐	英・白・砂・少	撫c			普	
16	F－4	V	胴	厚 0.8	灰黒褐／淡茶褐	英・角・砂・少	撫c			良	
17	G－8	V	胴	厚 0.8	淡灰褐／淡茶褐	英・白・砂・少	撫c			良	
18	E－5	V	胴	厚 0.9	灰褐／褐	角・雲・白・砂微	撫c			良	
19	E－2	VI	胴	厚 0.9	暗褐	白・砂・少	撫c			良	
20	E－4	V	胴	厚 0.9	淡茶褐／淡褐	白・石・砂・少	撫c			良	
21	H－4	V	胴	厚 0.8	褐／淡褐	雲・砂・微	撫c			良	
22	H－5	P	胴	厚 0.8	淡黄褐	英・角・砂・少	撫c			良	
23	O－12	V	胴	厚 0.9	淡茶褐／淡灰褐	雲・細砂・少	撫c			良	
24	G－4	V	胴	厚 0.7	灰褐／淡白茶褐	白・砂・少	撫c			普	
25	H－5	V	胴	厚 0.7	淡茶褐	砂・中	撫c			良	
26	I－6	V	胴	厚 0.6	淡白茶褐	白・砂・微	撫c			良	
27	E－5	V	胴	厚 1.0	茶褐／淡茶褐	雲・角・砂・中	撫c			良	
28	G－3	V	胴	厚 0.7	灰黒褐／淡茶褐	白・細砂・微	撫c			良	
29	G－4	V	胴	厚 0.6	灰褐／淡茶褐	雲・細砂・微	撫c			良	

第142図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	G－5	VI	胴	厚 1.2	淡茶褐	角・雲・砂・微	撚c			良	
2	E－4	V・VI	胴	厚 1.0	茶褐	細砂・微	撚c			良	
3	Q－11	III・VI	胴（屈）	厚 0.7	灰褐	雲・白・石・砂少	撚c			良	
4	G－6	V	胴	厚 0.8	灰黒褐／茶褐	角・雲・白・砂	撚c			良	
5	E－4	V	胴（屈）	厚 0.8	淡茶褐／暗褐	英・雲・白・石砂・中				普	
6	K－8 H－7 I－5	V	胴（屈）	厚 0.7	褐／淡茶褐	雲・細砂・微	撚c			良	外炭化物
7	R－12	V	胴（屈）	厚 0.6	茶褐／褐	角・砂・中	上沈 下撚c？			良	
8	T－16	VI	胴	厚 0.7	淡褐	英・白・砂・少	撚c			良	
9	K－12	地横	胴（屈）	厚 0.8	灰褐／暗褐	英・角・砂・中	撚c			良	
10	I－5	V・VI	胴	厚 0.7	淡茶褐／淡褐	細砂・微	撚c			良	
11	D－4	V	胴（屈）	厚 0.7	灰黒褐・褐	英・角・白・砂中	上撚c 下撚d			良	
12	R－7	V	胴	厚 0.7	淡茶褐	白・細砂・少	撚c			やや不良	
13	N－15	V	胴	厚 0.6	淡茶褐／褐	英・角・雲・砂微	撚c			良	

第143図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	M－14	地横	口縁	厚 0.7	淡褐	角・雲・砂・少	撚e	口撚e？	撚？	良好	
2	E－3	V	口縁	厚 0.8	褐	雲・砂・少	撚e	口撚e		良	
3	F－5・3 R－3	III・VI	口縁～胴	厚 0.8	灰黒褐／灰褐	英・雲・砂・微	撚e			良	5・8と同一個体？
4	J－10	I	口縁	厚 0.7	淡褐	角・雲・砂・少	撚e		撚？	良好	
5	F－3	V	口縁近	厚 0.7	灰褐／淡褐	英・雲・砂・微	撚e			良	3・8と同一個体？
6	H－6	III	口縁	厚 0.6	淡褐／灰褐	角・砂・微	撚e	口撚e		良	
7	J－10	V	胴（屈）	厚 0.7	褐	英・角・雲・砂少	撚e			良	
8	G－4 F－3・6	V・VI	胴	厚 0.7	淡茶褐	英・雲・細砂・微	撚e			良	3・5と同一個体？
9	F－5 H－6	VI	胴	厚 0.8	灰黒褐／褐	角・雲・白・砂微	撚e			良	
10	59号土坑	覆土	胴	厚 1.4	淡茶褐／褐	英・角・砂・多	撚e			良	
11	59号土坑	覆土	胴	厚 0.7	灰褐／淡褐	英・角・砂・少	撚e			良	
12	G－6	IV	胴	厚 0.7	灰黒褐／淡茶褐	細砂・微	撚e			良	
13	E・F－3	V・VI	底	厚 0.7	淡茶褐	白・砂・少	撚e			良	
14	I－6	VI	底	底径 9.8	淡褐／淡茶褐	英・角・白・砂少	撚e			良	

第144図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	R－13		口縁	口径 33.2	茶褐	角・細砂・微	条		押捺	良	4・8・9・12と同一個体？
2	E－2		口縁	厚 0.8	黒褐／灰黒褐	英・砂・少	条	条	押捺	良	
3	Q－12	Ⅵ	口縁	厚 0.6	暗褐／黒褐	白・砂・中	条	条	押捺	良	
4	R－13		口縁	厚 0.8	褐／茶褐	角・細砂・微	条		押捺	良	1・8・9・12と同一個体？
5	Q－12	Ⅵ	口縁	厚 0.6	茶褐	角・細砂・微	条		押捺	良	
6	Q－11	Ⅲ・Ⅴ	胴	厚 0.9	茶褐／褐	英・細砂・微	条			良	外炭化物
7	H－6	Ⅴ	胴	厚 0.8	淡赤褐	長・雲・砂・中	条？	条？		良	
8	R－13		胴	厚 0.7	茶褐	角・細砂・微	条			良	1・4・9・12と同一個体？
9	R－13		胴（屈）	厚 0.7	茶褐	角・砂・少	条			良	外炭化物同一個体有
10	Q－12・13	Ⅵ	胴	厚 0.7	浪茶褐／橙褐	角・雲・細砂・少	条			良	
11	R－13	Ⅴ	胴	厚 0.8	淡褐／淡茶褐	英・角・砂・少	条			良	
12	R－13		胴	厚 0.8	茶褐	角・砂・少	条			良	1・4・8・9と同一個体？
13	Q－12	Ⅴ	胴（屈）	厚 0.6	茶褐	英・角・雲・長少	条			良	
14	R－13		胴	厚 0.7	茶褐／褐	英・角・砂・微	条			良	
15	Q－13		胴	厚 0.6	赤茶褐	英・角・赤・砂少	条			良	

第145図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	P－9	地横	口縁	厚 1.0	淡赤褐	角・雲・砂・微	山（地）刺凸		？	良	
2	H－6	Ⅴ	口縁	厚 0.7	暗褐	角・白・砂・少	山（地）刺凸			良	
3	I－8	Ⅴ	胴	厚 0.8	暗褐／褐	角・白・砂・微	山（地）凸			良	
4	H－8	地横	胴	厚 0.6	褐／明褐	角・雲・砂・中	山（地）凸			良	
5	H－6	Ⅴ	胴	厚 0.9	茶褐	英・角・雲・砂中	山（地）刺凸			良	
6	H－6	Ⅴ	胴	厚 0.7	暗褐	白・砂・微	山（地）刺凸			良	
7	I－6	Ⅴ	胴	厚 0.6	暗褐／灰褐	白・砂・微	山（地）刺凸			良	
8	P－10	Ⅴ	胴	厚 0.8	暗赤褐／淡赤褐	角・砂・多	山（地）刺突起			良	
9	O－9	Ⅴ	胴	厚 1.0	茶褐／灰褐	英・角・砂・中	山（地）凹、凸			良	
10	H・O－9	Ⅴ・Ⅵ	胴	厚 1.0	淡褐	白・砂・少	山(0.6・1.5)凸			良	11・12と同一個体
11	P－12	Ⅵ	胴	厚 0.9	淡褐	白・砂・少	山(0.6・1.5)凸			良	10・12と同一個体
12	Q－11	Ⅵ	胴	厚 0.9	淡褐	白・砂・少	山(0.6・1.5)凸			良	10・11と同一個体

第146図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	I－8	IV	口縁	厚 0.8	淡茶褐	角・砂・少	格	口格	格	良	
2	H－7	V	胴	厚 0.9	赤褐／暗黒褐	角・白・砂・微	格			良	
3	F－3	VI	胴（屈）	厚 0.9	灰茶褐／灰褐	英・砂・少	格			良	
4	O－9	V	胴	厚 0.7	淡茶褐／暗褐	角・砂・少	格			普	内炭化物
5	44号土坑	覆土	口縁	厚 0.8	淡茶褐	英・角・砂・微	擦d	口擦d		良	
6	T－15	III	口近	厚 0.7	淡褐	角・雲・白・砂少	擦d	擦d		良	
7	P－10	V	口縁	厚 0.5	茶褐	角・雲・細砂・微	擦d			良	
8	P－10	VI	胴	厚 0.7	明茶褐	英・角・砂・中	擦d			良	
9	N－10		胴	厚 0.6	明茶褐／茶褐	英・角・砂・中	擦d			良	
10	N－11	V	胴	厚 0.9	灰褐／灰黒褐	雲・角・白・微	擦d			良	
11	P－10	VI	胴	厚 0.8	淡灰褐／明茶褐	英・白・砂・中	擦d			良	
12	N－11		胴（屈）	厚 0.7	明褐／暗褐	角・白・砂・微	擦d			良	
13	P－10	VI	胴	厚 0.7	明茶褐	英・白・砂・少	擦d			良	
14	I－10	VI	胴	厚 0.7	淡茶褐／淡褐	英・角・白・砂少	擦d			良	
15	D－5	V	口縁	厚 0.8	褐	角・砂・微	凸刺連点		刺連点	良	
16	C－4	IV	胴	厚 0.7	茶褐	砂・微	刺連点			良	
17	D－3	V	口縁	厚 1.0	茶褐／褐	角・砂・少	みみず凸	みみず凸		良	
18	D－3	VI	胴	厚 1.1	褐／灰褐	砂・微	みみず凸			良	外炭化物
19	O－3	VI	胴（屈）	厚 0.9	茶褐／淡褐	角・白・砂・少	みみず凸			良	外炭化物
20	I－9	V	胴	厚 1.1	明褐	角・雲・白・砂少	菱凸			良	
21	I－7	VI	胴（屈）	厚 0.7	褐／明茶褐	角・雲・白・砂少	上菱凸下押			良	
22	N－10		胴	厚 1.0	茶褐	角・雲・白・砂少	菱凸			良	
23	E－2	V	口縁	厚 0.7	茶褐	角・雲・白・砂多	連点		刺？	良	
24	N－15	V	口縁	厚 0.6	淡灰褐	角・雲・細砂・微	ヘラ描沈？	擦？	擦？	良	

第147図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	F－8	III	口縁	厚 1.0	淡茶褐	英・角・砂・少	沈	沈		良	
2	I－6	V	口縁	厚 0.6	淡茶褐	英・角・砂・少	沈？	沈		良	
3	62号土坑	覆土	胴	厚 0.7	淡茶褐／褐	英・砂・微	沈？			良	
4	H－7	V	胴	厚 1.0	黒褐／淡茶褐	英・砂・少	沈			良	外炭化物
5	T－16	III	胴	厚 0.5	淡茶褐	英・細砂・少	沈？			良好	
6		II	胴（屈）	厚 0.6	褐／茶褐	英・砂・少	沈			良	同一個体有
7	D－12		胴（屈）	厚 0.5	淡茶褐／褐	角・白・細砂・少	上櫛描沈下山？			良	
8	S－16	VI	胴（屈）	厚 0.6	淡茶褐	雲・砂・微	櫛描沈			普	
9	I－6	V	底近	厚 0.8	黒褐／茶褐	白・砂・微	沈			良	

第149図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	F－3	VI	口～頸	口径 18.7	灰褐／淡灰褐	英・雲・砂・少	山(0.5・1.2 長5.3)	口山 (0.5・1.0)		良好	
2	I－6	P	口～頸	口径 7.2 頸径 5.0	淡茶褐	雲・白・砂・少	菱			良	
3	I－8	V	口～頸	厚 0.6	淡褐	角・白・砂・少	撚e	撚e	撚	良	
4	P－13	VI	口縁	厚 0.7	淡灰褐／淡黒褐	白・砂・少	沈		短沈	良	
5	O－15	VI	口～頸	口径 12.7 頸径 9.3	淡茶褐	英・角・砂・少	条？沈？ 頸 撚？			良	
6	I－7	V・VI	口～頸	口径 5.3	茶褐／暗灰褐	白・砂・少	沈		短沈	良	
7	F－8	V	口～頸	厚 0.8	灰黒褐／淡褐	細砂・微	糸、沈 刺		短沈	良	
8	P－10・11	V・VI	頸	頸径 8.8	淡褐	角・雲・白・砂少	凹			良	同一個体有
9		VI	頸	頸径 5.0	淡黄褐	砂・少	櫛描			普	14と同一個体？
10	R－17	V	口縁	厚 0.7	淡褐	角・細砂・微	沈			良	
11	H－6	III	口縁	厚 0.7	淡茶褐	角・砂・微	短沈		短沈	良	
12	D－10	VI	口縁	厚 0.8	淡茶褐	英・角・砂・微	地文？ 刻凸			良	
13	I－6	VI	口縁	厚 0.9	淡褐	角・砂・微	押捺凸			良	
14	N－5	V	頸	厚 1.0	淡黄褐	角・砂・微	櫛描			普	9と同一個体？
15	P－10	地横	口縁	厚 1.2	淡茶褐	砂・少	刺 沈			良	
16	R－17	VI	口～頸	厚 0.8	淡茶褐	砂・極微	凸？			良	
17	H－9・10	III	口～頸	口径 16.7	淡褐	砂微	口刺凸 山（地）			良	20・21と同一個体？
18	H－8 I－8	V	口～頸	口径 7.9 頸径 6.6	淡茶褐	角・白・砂・少	刺凸 縄（RL）			良	
19	M－11		口～頸	厚 1.0	淡茶褐	英・白・砂・微	刺凸	縄（LR）	縄？	良	
20	P－11	VI	口縁	厚 1.0	淡茶褐／淡褐	角・砂・少	口刺凸 山（地）			良	17・21と同一個体？
21	N－15	IV	口縁近	厚 0.8	淡茶褐	角・砂・少	山（地） 刺凸			良	17・20と同一個体
22	K－12		口縁	厚 0.7	明淡茶褐	角・細砂・微	短凹凸、沈 地文？		刺	良	25・26類似
23	I－5	VI	口縁	厚 0.9	淡茶褐	角・砂・極微	押捺凸 縄（LR）			良	
24	Q－10	V	口縁近	厚 0.8	淡茶褐	角・細砂・少	山（地） 刺凸			良	17・20・21と類似
25	K－12	地横	頸	厚 0.7	淡茶褐	角・細砂・微	短凹凸、沈 地文？		刺	良	22・26と類似
26	I－10	V	口縁	厚 0.8	淡褐	角・細砂・微	短凹凸 沈		刺		22・25と類似

第150図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	I－8	V	口～頸	口径 12.7 頸径 10.1	淡褐	角・白・砂・中	撚（地）、凹 刺凸、突起		刺	良	2・3・5と同一個体
2	I－8	V	頸？	厚 0.8	淡褐	角・白・砂・中	撚（地）、凹 刺凸、刺突起			良	11・3・5と同一個体
3	I－8	V	胴	厚 0.9	淡褐／淡茶褐	角・白・砂・中	撚（地）、凹 刺凸			良	
4	H－6	V	口縁	厚 0.7	淡灰褐	細砂・微	押捺凸 凹		押捺	普	
5	I－8	V	口縁	厚 0.8	淡茶褐	角・白・砂・中	撚（地）、凹 刺凸		刺	良	1・2・3同一個体
6	I－7	III	頸	厚 0.6	淡褐	角・砂・微	刺凸 凹			良	
7	E－4	地横	口～頸	口径 20.4	黒褐／暗褐	角・雲・砂・微	刺凸		刺	良	
8	O－6	V	口縁	厚 0.5	淡褐	英・角・細砂・微				良	
9	S－17	VI	口～頸	厚 0.7	淡茶褐	英・角・砂・微				良	

第152図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1		I	口縁	厚 0.8	淡褐／淡茶褐	角・白・砂・中	刺凸		短沈	良	
2	N－11	V	口縁	厚 0.9	褐	角・白・砂・中	刺凸		短沈	良	
3	P－12	V	口縁	厚 1.0	明褐／褐	角・白・砂・微	刺凸		刺	良	
4	I－6	V	口縁	厚 0.9	暗褐／明褐	白・砂・微	刺凸		刺	良	
5	H－7	II・V	口縁	厚 1.0	褐／灰赤褐	白・砂・少	刺凸		刺	良	
6	N－11		口縁	厚 0.8	淡褐	雲・微	刺凸		刺	良	
7	I－7	V	口縁	厚 0.8	暗褐／褐	白・砂・微	刺凸 沈		刺	良	
8	G－6 H－5	V	口縁	厚 1.0	褐／灰赤褐	白・砂・少	刺凸		刺	良	
9		I	口縁	厚 0.9	茶褐／褐	角・砂・少	刺凸		刺	良	外炭化物
10	P－10	III	口縁	厚 1.1	淡赤褐／黄褐	雲・白・砂・中	刺凸		刺	良	
11	H－7	V	口縁	厚 0.8	淡茶褐	砂・雲・赤・砂少	刺凸		刺	良	
12	O－13	VI	口縁	厚 0.9	淡灰褐／淡褐	英・角・雲・砂少	刺凸		刺	良	
13	I－9	V	口縁	厚 0.8	褐	長・雲・角・砂中	刺凸		刺	良	
14	O－10	VI	口縁	厚 0.7	赤褐	長・砂・中	刺凸		刺	良	
15	I－6	VI	口縁	厚 0.8	茶褐／赤褐	角・白・砂・微	刺凸		刺	良	
16	L－9	I	口縁	厚 1.0	淡赤褐	砂・極微	刺凸		刺	良	
17	R－10		口縁	厚 0.7	赤褐	長・雲・砂・少	刺凸		刺	良	
18	P－12	VI	口縁	厚 1.0	淡赤褐／赤褐	雲・砂・微	刺凸		刺	良	
19	I－6	III	口縁	厚 0.7	淡灰褐	角・砂・少	刺凸		刺	良好	
20	M－12	V	口縁	厚 0.8	褐／明褐	角・白・砂・中	刺凸		刺	良	
21	I－7	VI	口縁	厚 0.8	淡黒褐／淡赤褐	雲・白・砂・中	刺凸		刺	良	
22	C－4	VI	口縁	厚 0.6	茶褐	砂・微	刺凸		刺	良	
23	R－11	VI	口縁	厚 0.6	淡茶褐	英・角・砂・少	刺凸		刺	良	
24	H－4	VI	口縁	厚 1.2	暗褐／赤褐	雲・砂・微	刺凸		刺	良	
25	H－5	V	口縁	厚 1.2	暗赤褐／赤褐	英・長・砂・中	刺凸		刺	良	
26	M－12	VI	口縁	厚 1.1	暗茶褐／明褐	雲・白・砂・微	刺凸		刺	良	
27	I－8	V	口縁	厚 1.1	褐	雲・白・砂・少	刺凸		刺	良	
28	O－12	VI	口縁	厚 1.1	赤褐	長・雲・砂・微	刺凸		刺	良	

第153図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	40号土坑	覆土	口縁	厚 0.8	淡褐／暗褐	英・砂・少	刺凸		押捺	良	
2	N－12	VI	口縁	厚 0.8	淡茶褐	角・雲・白・少	円刺突起 刺凸		押捺	良	
3	Q－10	VI	口縁	厚 1.2	茶褐	英・雲・砂・中	刺凸		短沈	良	
4	K－12		口縁	厚 1.1	淡赤褐／赤褐	白・砂・微	刺凸		短沈	良	
5	C－4	V	口縁	厚 0.8	褐／明褐	角・白・砂・微	刺凸			良	
6	59号土坑	覆土	口縁	厚 0.7	淡赤褐／褐	長・砂・少	刺凸			良	
7	I－8	V	口縁	厚 1.0	黒褐／茶褐	砂・極微	刺凸			良	
8	M－12	VI	口縁	厚 0.7	淡赤褐／明茶褐	長・砂・少	刺凸			良	
9	I－8	V	口縁	厚 0.9	暗褐／淡褐	長・白・砂・微	刺凸			良	
10	O－12		口縁	厚 0.7	明褐	砂・少	刺凸			良	
11	I－5	V	口縁	厚 0.9	淡褐／暗褐	白・砂・微	刺凸			良	
12	U－14	II	口縁	厚 0.8	褐	角・白・砂・微	刺凸			良	
13	I－6	III	口縁	厚 1.0	淡赤褐／褐	砂・極微	刺凸			良	
14	N－9		口縁	厚 0.7	淡茶褐	角・赤・砂・少	刺凸			良	
15		V	口縁	厚 0.7	黒／暗茶褐	角・雲・砂・微	刺凸			良	
16	H－6	III	口縁	厚 0.8	淡赤褐	白・砂・微	刺凸			良	
17	P－11	IV	口縁	厚 0.8	淡茶褐／灰褐	英・角・細砂・微	刺凸			良	
18		V	口縁	厚 1.3	淡灰褐	英・角・雲・砂中	刺凸		刺？	良	
19	E－8	VI	口縁	厚 0.7	暗赤褐／明褐	砂・微	押引凸			良	
20	H－5	V	口縁	厚 0.9	淡赤褐	砂・極微	刺凸			良	
21	H－5	V	口縁	厚 0.6	褐／黄褐	角・白・砂・少	刺凸			良	
22	I－6	V	口縁	厚 0.6	赤褐	長・砂・微	刺凸			良	
23	O－9	VI	口縁	厚 0.8	灰褐	英・砂・微	刺凸		押捺	良	
24	I－6	V	口縁	厚 0.9	茶褐	砂・微	刺凸			良	
25	3号土坑	覆土	口縁	厚 1.1	淡茶褐	角・砂・少	刺凸 貝刺？		押捺	良好	
26	I－8	V	口縁近	厚 1.1	黒褐／淡茶褐	英・角・雲・砂少	刺凸				外炭化物
27	H－9	VI	口縁	厚 0.5	淡茶褐	角・白・砂・微	刺凸 押引			良	
28	I－6	V	口縁	厚 1.0		白・砂・少	刺凸（広）			良	
29	J－12		胴	厚 1.0	淡赤褐	雲・砂・微	円刺突起 凹、刺凸			良	
30	J－10		胴	厚 1.0	淡赤褐	雲・砂・微	円刺突起 凹、刺凸			良	
31	H－5	V	口縁	厚 0.7	淡赤褐／茶褐	長・雲・白・砂少	刺凸			良	
32	Q－10	V	口縁	厚 0.8	褐	角・砂・微	短沈凸			良	
33		I	把手	厚 1.0	淡褐／淡黄褐	雲・長・白・砂微	沈・刺			良	
34	H－7	V	胴	厚 1.0	暗褐／黄褐	砂・微	円形突起 沈凸			良	

第154図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	62号土坑 I－8	V	胴	厚 0.8	黒褐/赤褐	長・白・砂・少	刺凸			良	穿孔
2	I－6	V	胴	厚 1.1	淡茶褐/淡褐	角・砂・少	刺凸			良好	外炭化物
3	Q－12 R－11	V・VI	胴	厚 0.9	茶褐/淡褐	角・細砂・微	刺凸			良	
4	E－4	地横	胴	厚 0.7	黒褐	英・角・砂・微	刺凸			良	
5	62号土坑	覆土	胴	厚 0.6	灰褐/褐	英・細砂・少	刺凸			良	
6	M－12	VI	胴	厚 1.1	暗赤褐	雲・砂・少	刺凸			良	
7	Q－10	VI	胴	厚 0.8	茶褐	角・砂・少	刺凸			良	
8	K－9		胴	厚 0.8	黒褐	砂・少	刺凸			良	
9	Q－10	VI	胴	厚 0.9	茶褐	英・角・細砂・微	刺凸			良	
10	M－11		胴	厚 0.9	淡茶褐	英・角・白・少	刺凸			良	
11	62号土坑	覆土	胴	厚 0.9	淡茶褐/褐	英・砂・少	刺凸			良	
12	H－5	V	胴	厚 0.8	淡褐	白・砂・微	刺凸			良	
13	H－6	III	胴	厚 0.8	淡褐	白・砂・中	刺凸			良	
14	62号土坑	覆土	胴	厚 1.0	淡褐/淡茶褐	英・角・白・少	刺凸			良	
15	H－9	V	胴	厚 0.9	暗茶褐/淡赤褐	角・白・砂・中	刺凸			良	穿孔有
16	Q－11	VI	胴	厚 1.1	暗褐	角・白・砂・中	刺凸			良	
17	N－11	VI	胴	厚 0.8	淡茶褐/灰褐	白・砂・少	刺凸			良	
18	H－9	VI	胴	厚 0.5	灰褐/褐	砂・微	短沈凸			普	24と同一個体
19	H－9	VI	胴	厚 0.5	淡茶褐/淡褐	砂・微	短沈凸			普	24と同一個体
20	D－5	V	底	底径 6.2	明褐	英・角・砂・少	刺凸			良	

第155図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	I－6	III	口縁	口径 28.8	褐	砂・微	地 刺凸		刺	良	
2	I－6	V	胴	厚 0.7	褐/黒褐	角・白・砂・中	地 刺凸			良	
3	H－6	V	胴	厚 0.7	褐/暗褐	角・白・砂・微	地 刺凸			良	
4	H・I－6	V	胴	厚 0.5	黄褐/黒褐	角・砂・微	地？ 刺凸			良	
5	I－6	V	胴	厚 0.7	淡黄褐/暗褐	角・白・砂・微	地？ 刺凸			良	
6	H－6	V	胴	厚 0.6	淡褐/暗褐	角・白・少	地？ 刺凸			良	

第156図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	N－11	V	口縁	厚 0.9	茶褐／褐	角・白・砂・微	地（？）刺凸		短沈	良	
2	44号土坑	覆土	胴	厚 0.7	黒褐／淡茶褐	英・角・砂・少	擦（地）刺凸			良	
3	E－4	V	胴	厚 0.6	黒褐	角・白・砂・中	擦（地）刺凸			良	
4	E－4	地構	胴	厚 0.7	明褐／褐	長・雲・白・砂中	擦（地）刺凸			良	
5	P－11	IV	胴	厚 0.8	淡褐	白・砂・中	擦（地）刺凸			良	
6	O・P－12	VI	胴	胴径 33.2	明褐／暗褐	白・砂・中	擦（地）刺凸			良	

第157図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	I－6	V	口縁	厚 0.8	褐	角・白・砂・中	縄（LR）刺凸、突起	口縄（LR）	縄	良	
2	Q－11	III	口縁	厚 0.9	明褐	白・砂・中	刺凸 隆起帯	縄（LR）	？	良	
3	I－7	V	胴	厚 1.1	暗褐／明褐	砂・中	縄（LR）刺凸			良	
4	M－12	V	胴	厚 0.8	淡茶褐／淡灰褐	英・砂・中	縄（LR）刺凸			良好	
6	M－12	撹	胴	厚 1.0	淡褐／淡茶褐	角・砂・中	縄（LR）刺凸			良	
7	O－4	V	口縁	厚 0.8	暗褐／褐	白・砂・中	縄（LR）刺凸、突起		押捺	良	
8	I－10	I	胴	厚 1.0	淡茶褐	白・砂・少	縄（LR）刺凸			良	9と同一個体
9	H－7	V	胴	厚 0.9	茶褐	角・砂・少	縄（LR）刺凸、突起			良	8と同一個体
5	I－6	V	胴	厚 0.9	暗褐／明褐	雲・白・砂・微	縄（LR）刺凸			良	
10	H－5	V	胴	厚 1.0	淡赤褐	白・砂・微	縄（LR）刺凸			良	
11	K－12		口縁	厚 0.9	赤褐	雲・長・中	縄（LR）刺凸			良	
12		V	口縁	厚 0.7	暗褐	砂・中	縄（LR）刺凸		縄（LR）	良	
13	H－5	VI	口縁	厚 0.7	明褐	砂・少	縄（LR）刺凸、刺、沈？		押捺	良	
14	M－11		口縁	厚 0.9	淡黄褐	長・砂・中	縄（LR）刺凸			良	
15	I－6	V	口縁	厚 0.7	暗茶褐	白・砂・微	縄（LR）刺凸		押捺	良	
16	L－8	VI	口縁	厚 0.7	暗茶褐／淡赤褐	砂・微	縄（LR）刺凸		押捺	良	
17	N－11		口縁	厚 0.8	明褐／褐	砂・微	縄（LR）刺凸		？	良	
18	I－6	V	口縁近	厚 0.9	褐／淡茶褐	英・砂・中	縄（LR）刺凸			良	
19	N－11		口縁	厚 1.0	暗褐／赤褐	長・白・砂・中	縄（LR）刺凸			良	
20	H－5	V	口縁	厚 0.9	暗褐	砂・中	縄（LR）刺凸		押捺？	良	
21	F－5	VI	口縁	厚 0.8	暗褐／淡赤褐	角・白・砂・中	縄（LR）刺凸		押捺	良	
22	H－4	VI	口縁	厚 0.6	茶褐／暗赤褐	砂・微	縄（LR）刺凸		押捺	良	
23	H－6	VI	口縁	厚 0.9	淡茶褐	角・白・微	縄（LR）刺凸			良	
24	H－9	V	胴	厚 1.1	淡茶褐	英・角・砂・少	縄（LR）刺凸			良	
25	K－12		胴	厚 0.9	茶褐	雲・砂・微	縄（LR）刺凸			普	
26	I－6	V	胴	厚 1.3	淡明褐／淡褐	英・角・細砂微	縄（LR）刺凸			良	
27	J－11	V	胴	厚 0.7	淡茶褐	砂・少	縄（LR）刺凸			良	

第158図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	P－10	III	胴	厚 1.1	茶褐／淡茶褐	角・雲・白・少	縄（LR）刺凸			良	穿孔？
2	M－12		胴	厚 1.1	茶褐	英・角・雲・砂中	縄（LR）刺凸			普	
3	I－8	VI	胴	厚 1.0	淡茶褐／淡赤茶褐	英・白・砂・中	縄（LR）刺凸			良	外炭化物
4	I－9	V	胴	厚 1.1	黒褐／淡茶褐	英・白・砂・中	縄（LR）刺凸			良	
5	I－6	V	胴	厚 0.8	暗茶褐／褐	白・砂・微	縄（LR）刺凸			良	6と同一個体
6	I－6	V	胴	厚 0.9	暗茶褐／明褐	白・砂・微	縄（LR）刺凸			良	5と同一個体
7	K－11	V	胴	厚 0.8	淡茶褐	角・砂・微	縄（LR）刺凸			良	
8	K－11		胴	厚 0.9	灰褐／茶褐	英・角・砂・少	縄（LR）刺凸			良	外炭化物
9	I－11	地横	胴	厚 0.8	灰褐／淡茶褐	砂・中	縄（LR）刺凸			良	
10	62号土坑	覆土	胴	厚 0.9	暗灰褐／淡茶褐	英・雲・細砂・微	縄（LR）刺凸			良	
11	N－14	V	胴	厚 0.7	褐	砂・微	縄（LR）刺凸			良	
12	I－6	V	胴	厚 ？	灰褐／？	英・角・白・砂中	縄（LR）刺凸			良	
13	L－9		胴	厚 1.2	淡茶褐	英・角・白・砂中	縄（LR）刺凸			良	
14	Q－13	II	胴	厚 0.8	淡茶褐	英・砂・少	縄（LR）刺凸			良	
15	G－9	III	胴	厚 0.6	暗褐／赤褐	砂・微	縄（LR）刺凸			良	
16	62号土坑	覆土	胴	厚 0.6	黒褐／明茶褐	細砂・微	縄（LR）刺凸			良	
17	I－6	VI	胴	厚 0.8	黒褐／淡黒灰	雲・白・砂・少	縄（LR）刺凸			良	
18	O－13 P－11・12	V	胴	厚 0.8	淡茶褐／褐	英・角・砂・中	縄（LR）刺凸			良	

第159 図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	I－6	V	口縁	厚 1.3	茶褐／灰	角・白・砂・少	縄（LR）短沈凸			良	2・6と同一個体
2	D－4	III	口縁	厚 1.3	灰黒褐／淡茶褐	角・白・砂・少	縄（LR）短沈凸			良	1・6と同一個体
3	H－6	V	胴	厚 0.8	茶褐	白・砂・中	縄（LR）凸			良	4と同一個体
4	H－6・7	III V・VI	胴	厚 0.8	明茶褐	白・砂・中	縄（LR）凸			良	3と同一個体
5	F－5	V	胴	厚 0.8	黒褐	角・白・砂・中	縄（LR）凸			良	
6	D－4	III・V	胴	厚 1.1	褐／灰	角・白・砂・少	縄（LR）短沈凸			良	1・2と同一個体
7	K－12 L－9	VI	胴	厚 0.8	茶褐	英・角・砂・少	縄（LR）刺凸			良	
8	I－8	V	胴	厚 1.0	褐／灰褐	英・雲・細砂・少	縄（LR）刺凸			良	外炭化物
9	I－8	V	胴	厚 0.9	茶褐	英・角・雲・砂中	縄（LR）刺凸			良	
10	Q－13	地横	胴	厚 1.0	茶褐	英・角・雲・多	縄（LR）刺凸			普	
11	G・V－6 R－12	V	胴	厚 1.0	灰褐／明茶褐	英・角・砂・少	縄凸（LR）			良	外炭化物
12	62号土坑	覆土	胴	厚 0.7	淡茶褐／茶褐	英・白・砂・少	縄（LR）縄凸			良	外炭化物 15~17と同一
13	H－5	VI	胴	厚 1.1	褐／明褐	白・砂・中	縄（LR）縄凸			良	
14	I－6	VI	胴	厚 0.9	淡褐／淡茶褐	角・白・砂・中	縄（LR）縄凸			良	
15	62号土坑	覆土	胴	厚 0.7	淡茶褐／茶褐	英・白・砂・少	縄（LR）縄凸			良	12・16・17・と同一個体
16	62号土坑	覆土	胴	厚 0.6	淡茶褐／茶褐	英・白・砂・少	縄（LR）縄凸			良	12・15・17・と同一個体
17	62号土坑	覆土	底	厚 0.7	淡茶褐／茶褐	英・白・砂・少	縄凸（LR）			良	12・15・16・と同一個体
18		V	胴	厚 0.8	褐	砂・微	縄凸（LR）			良	

第160図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	H－4・5	V	口～胴	口径 31.4 胴径 22.6	赤茶褐	角・白・砂・少	縄(地・LR) 沈、刺凸		押捺	良	3・4と同一個体
2	H－6	III	胴	厚 1.0	褐	角・白・砂・少	縄(地) 沈			良	
3	H－5	V	胴	厚 1.0	褐/暗褐	角・白・砂・少	縄(地) 沈			良	1・4と同一個体
4	H－4・5	III・V	胴	厚 0.7	褐/赤褐	角・白・砂・少	縄(地)、 沈、刺凸			良	
5	H・G－5	III	胴	厚 0.9	暗褐/明褐	角・白・砂・中	縄(地)、凹 刺、刺凸			良	
6	Q－10	VI	胴	厚 0.8	灰褐	角・砂・微	沈 短沈凸			良	7と類似
7	N－11		胴	厚 0.7	淡茶褐	角・白・砂・微	沈 凸			良	6と類似

第161図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外/内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	I－6	VI	胴(屈)	厚 0.9	淡黄褐 /黒褐	角・白・砂・少	地 沈、刺凸			良	
2	H－5	V	胴	厚 0.8	褐	角・白・砂・中	縄(地・LR) 沈、刺凸			良	
3	H－5 I－6	III V・VI	口～胴	厚 1.0	暗赤褐 /赤褐	雲・砂・微	沈 刺凸		押捺	良	
4	I－6	V	口縁	厚 0.7	暗褐/茶白	角・白・砂・微	沈 刺凸		押捺	良	穿孔
5	H－5・6	III	口縁	厚 0.7	赤褐/褐	角・白・砂・少	沈 押引凸			良	
6	H－6	VI	口縁	厚 0.8	赤褐/褐	長・雲・砂・少	沈 刺凸			良	
7	I－7	V	口縁	厚 0.7	暗赤褐	角・白・砂・中	沈 刺凸		押捺	良	
8	N－11	VI	口縁	厚 0.9	褐/明褐	雲・長・砂・少 微	押引凸 沈		押捺	良	
9	H－5	V	胴	厚 0.7	暗赤褐/褐	雲・砂・少	沈 刺凸、刺突起			良	
10	H－8	II	胴	厚 0.9	淡褐 /淡茶褐	角・砂・少	沈 刺凸、刺			良	外炭化物
11	M－8	VI	胴	厚 1.0	茶褐/赤褐	雲・砂・少	沈 刺突起			良	
12	I－8	I	胴	厚 0.8	赤褐 /明赤褐	雲・砂・微	沈 刺突起			良	
13	I－6	V	胴	厚 1.0	褐/淡赤褐	角・白・砂・中	沈 刺凸			良	
14	1－4・7	V	胴	厚 0.8	暗赤褐 /赤褐	角・白・砂・中	沈、刺 刺凸			良	
15	I－7	V・VI	胴	厚 1.0	淡赤褐 /赤褐	角・雲・砂・微	沈、刺 刺凸			良	

第162図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	I－7	VI	胴	厚 1.2	暗褐／淡褐	砂・中	沈 刺凸			良	
2	J－10	I	胴	厚 0.9	明茶褐 ／淡赤褐	雲・白・砂・微	沈 刺凸			良	
3	I－9 P－11	III・V	胴	厚 1.1	淡赤褐 ／明褐	雲・白・砂・微	沈 刺凸			良	
4	L－9	I	胴	厚 1.0	淡赤褐	白・砂・中	沈 刺凸			良	
5	H－6	V	胴	厚 0.8	暗褐／赤褐	角・白・砂・微	沈 刺凸			良	
6	H－4	III	胴	厚 1.1	暗赤褐	雲・白・砂・中	沈 刺凸			良	
7	H－6	V	胴	厚 0.9	暗褐／褐	角・白・中	沈 刺凸			良	
8	I－6	V	胴	厚 0.8	淡赤褐／褐	白・砂・微	沈 刺凸			良	
9	C－12		胴	厚 1.3	淡褐	雲・白・砂・中	沈 刺凸			良	
10	I－6	V	胴	厚 0.7	暗褐／明褐	角・白・砂・微	沈 刺凸			良	
11	44号土坑	覆土	胴	厚 1.0	淡茶褐	砂・微	沈 刺凸			良	
12	I－6	VI	胴	厚 0.9	茶褐／褐	英・雲・長・白中	沈 刺凸			良	
13	G－6	V	胴	厚 0.7	暗褐／明褐	角・白・砂・微	沈 刺凸			良	
14	H－9	V	胴	厚 1.0	暗褐／赤褐	白・砂・中	沈 刺凸			良	
15	I－6	V	胴	厚 0.9	暗褐／赤褐	角・白・砂・微	沈 刺凸			良	
16	I－9	III	胴	厚 0.9	淡褐 ／明茶褐	白・砂・微	沈 刺凸			良	
17	I－6	III・V	胴	厚 0.9	淡赤褐	雲・砂・微	沈 縄凸(LR)			良	
18	I－6	V	胴	厚 0.9	褐	雲・白・砂・微	縄凸(LR) 沈			良	

第163図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	O－9	V	口～胴	口径 34.6	灰褐／明褐	英・角・白・砂中	沈、刺凸 (地文有？)		刺	良	

第164図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	F－6 G－6 H－6	V・VI	胴	厚 0.9	赤褐／暗褐	雲・白・砂・微	凹			良	
2	I－6	III・V	胴	厚 0.9	淡赤褐／赤褐	雲・白・砂・角・少	凹			良	
3	H－6	V・VI	胴	厚 1.1	暗褐／褐	角・白・砂・少	凹			良	
4	G－7	III	胴	厚 1.1	淡茶褐／褐	英・角・砂・少	凹			良	
5	G－5	V	胴	厚 0.8	茶褐	角・白・砂・少	凹			良	
6		表	胴	厚 1.0	茶褐	英・角・雲・白・砂・少	凹			良	
7	I－8	V	胴	厚 0.9	茶褐	英・角・雲・白・砂・少	凹			良	
8	M－12	VI	胴	厚 0.8	茶褐	英・雲・白・少	凹			良	
9	I－6	V	胴	厚 0.9	茶褐	角・雲・白・砂・少	凹			良	
10	I－8	P	胴	厚 0.9	黒褐／淡茶褐	英・角・白・砂・少	凹			良	
11	I－6	VI	胴	厚 0.9	淡褐／茶褐	雲・白・砂・少	凹			良	
12	H－5	V・VI	胴	厚 1.0	黒褐／暗褐	英・角・白 中	凹			良	
13	I－6	III	胴	厚 0.8	淡黒褐／淡赤褐	角・白・砂・微	凹			良	
14	K－9		胴	厚 0.9	茶褐	英・角・雲・白・砂・少	凹			良	
15	N－12	VI	胴	厚 0.8	茶褐	英・角・雲・白・砂・少	凹			良	
16	M－11	VI	胴	厚 1.0	褐／淡茶褐	角・砂・少	凹、刺 凸？			良	
17	I－7	V	胴	厚 0.7	淡褐／淡赤褐	角・白・砂・中	凹、短沈			良	
18		表	胴	厚 0.9	暗灰／黄褐	長・雲・砂・中	凹、刺			良	
19	59号土坑	覆土	胴	厚 0.7	褐	英・角・白・砂・中	凹、列点			普	外炭化物
20	G－8	V	胴	厚 0.9	淡茶褐	角・雲・砂・少	縄（地） 凹			良	
21	I－6	V	胴	厚 0.9	紫黒褐／淡茶褐	角・砂・少	擦（地） 凹			良	外炭化物
22	R－12	III	胴	厚 0.7	茶褐／褐	英・角・砂・微	凹・地？			良	

第165図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	N－10 M－8		口～頸	厚 1.2	褐／暗褐	雲・長・白・砂 中	貝押			良	
2	O－9		口縁	厚 1.0	灰褐	白・砂・中	貝押		貝刺	良	
3	O－9	V	口縁	厚 1.0	褐／淡褐	英・白・砂・多	貝押		貝刺	良	
4	Q－8		口縁近	厚 1.3	褐／淡茶褐	英・白・砂・中	貝押			良	
5	42号土坑 Q－11	VI	口縁～頸	厚 0.9	褐／淡赤褐	角・雲・砂・中	貝押		貝刺	良	
6	I－8		口～胴	厚 1.0	暗褐／茶褐	英・雲・石・砂 中	口、貝押 胴、貝沈		貝押	良	
7	P－11 Q－11 R－11	V・VI	口～頸	厚 0.8	淡茶褐	英・角・雲・長 白・石・中	口、貝押 沈		貝刺	良	
8	P－10	VI	胴	厚 0.9	淡茶褐	雲・角・白・砂 中	貝押			良	
9			胴	厚 0.9	灰褐	角・白・砂・少	貝押			良	
10	Q－13	地横	頸	厚 1.0	黒褐／褐	雲・白・砂・少	貝押 沈			良好	
11	O－9		胴	厚 1.1	淡褐／明褐	雲・白・砂・微	貝押			良	
12	N－9	VI	頸	厚 0.9	茶褐／暗褐	雲・白・砂・中	貝押			良	

No.	遺構名	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
13	R－11	V	胴	厚 0.9	灰褐	英・角・白・砂少	貝押			良	
14	O－9	V	頸	厚 1.1	褐／淡赤褐	雲・長・砂・中	貝押（2）			良	
15	3号溝跡		胴	厚 1.0	暗褐／褐	白・長・砂・微	貝押			良	
16	Q－10	VI	頸	厚 1.5	灰褐	雲・白・砂・中	貝押			良	
17	Q－11・13 R－11	III V・VI	胴	厚 0.7	淡茶褐／褐	英・白・砂・中	沈			良	

第166図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	P－12	VI	口～頸	厚 0.7	明茶褐	角・雲・細砂・微	凹		羽状刻目	良好	
2	P－13	VI	口～頸	厚 0.8	淡茶褐	英・角・雲・白砂・中	凹		刻目	良	
3	M－15	V	口縁	厚 1.0	淡茶褐	角・白・砂・中	凹		羽状刻目	良	
4	O－12 P－11	V	口～頸	厚 0.6	淡茶褐	角・雲・砂・少	凹		羽状刻目	良	
5	R－15	地横	口～頸	厚 0.6	淡茶褐	角・雲・白・砂中	凹		羽状刻目	良	
6	O－12	VI	口～頸	厚 0.7	淡茶褐	角・雲・白・砂少	凹		羽状刻目	良	
7	Q－11	VI	口縁	厚 0.7	淡白茶褐	英・角・砂・少	凹		羽状刻目	良	
8	S－16	V	口縁	厚 0.8	淡褐	英・角・雲・砂少	帯状撚e 凹		羽状刻目	良	
9	P－15 R－17	IV・V VI	口縁	厚 0.8	明茶褐／明褐	角・雲・砂・少	帯状撚e			良	
10	R－17	V	口～頸	厚 0.7	淡茶褐	英・角・雲・砂中	凹 刻凸		刻目	良	
11	58号土坑	覆土	頸	厚 0.7	淡茶褐	角・白・砂・中	凹 刻凸			良	
12	N－15	IV	頸	厚 0.7	淡茶褐	砂・少	刻目凸			良	
13	P－13	V	頸	厚 0.6	淡茶褐	雲・砂・微	細刻凸 帯状撚e			良	
14	R－17	V	頸	厚 0.7	淡茶褐／淡褐	英・雲・白・砂少	細刻凸			良	
15	R－17	VI	頸	厚 0.6	淡褐	英・雲・白・砂少	細刻凸			良	
16	N－15	VI	頸	厚 0.6	淡褐	英・砂・少	細刻凸 帯状撚e			良	
17	N－14	VI	頸径20.8	厚 0.6	淡茶褐／褐	英・角・砂・少	細刻凸			良	
18	O－14	VI	頸	厚 0.6	淡茶褐	英・白・砂・中	細刻凸 帯状撚e			良	
19	Q－17	V	頸？	厚 0.8	褐	英・角・白・砂少	細刻凸？ 帯状撚e			良	外炭化物
20	R－17	VI	頸	厚 0.8	淡茶褐	英・白・砂・微	細刻凸 帯状撚e			良	
21	N－9	VI	頸	厚 0.6	淡褐	英・角・雲・砂中	帯状撚e 凹			良	
22		地横	頸？	厚 0.7	淡茶褐	白・砂・少	帯状撚e 凹			普	
23	N－10		頸	厚 1.0	淡黄褐	角・砂・微	凹			良	
24	O－15	V	頸	厚 0.7	淡茶褐	角・砂・少	凹			良	
25	N－14 P－11	V・VI	頸？	厚 0.6	明茶褐	砂・微	帯状撚e			良	

第168図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	T－16	V	頸？	厚 0.9	茶褐	英・角・雲・白少	帯状擦e 凹			良	外炭化物
2		I	頸	厚 0.5	淡茶褐／淡褐	角・雲・砂・少	帯状擦e 凹			良	
3	N－15	V	頸	厚 0.6	淡褐	角・白・砂・少	凹			良	
4	N－14	地横	頸	厚 0.7	淡茶褐	英・砂・少	凹			良	
5	P－15	V	頸	厚 0.9	淡灰褐／淡茶褐	角・雲・白・微	凹			良	
6	N－15	VI	頸	厚 0.9	淡茶褐	英・角・砂・少	帯状擦e 凹			良	
7	S－12	VI	頸	厚 0.7	淡茶褐	雲・砂・少	帯状擦e 凹			良	
8	59号土坑	覆土	胴	厚 0.7	淡褐／淡茶褐	英・角・砂・少	凹 帯状擦e			良	
9	T－13	V	胴	厚 0.6	茶褐	英・角・雲・砂少	帯状擦e 凹			良	14と同一個体？
10	O－10	V	底近	厚 0.9	淡黄褐	角・白・赤・極微	帯状擦e			普	
11	S－16 R－17	IV・V	底	底径 11.4	明茶褐／暗茶褐	雲・細砂・少	帯状擦e			良	
12	O－12	V	底	厚 0.6	淡茶褐	角・白・砂・少	帯状擦e			良	
13	Q－13	V	底	厚 0.7	茶褐	英・角・雲・砂少	帯状擦e 凹			良	10と同一個体？
14	P－11	VI	底	厚 0.6	淡茶褐／淡灰褐	角・砂・少	帯状擦e			良	
15	R－17	VI	底	厚 0.8	淡茶褐	雲・細砂・微	帯状擦e			良	
16	R－12	III	底	厚 0.6	淡黄褐	角・砂・微	帯状擦e			普	
17	O－15	V	底	厚 0.7	茶褐／黒褐	英・角・砂・微	帯状擦e 凹			良	

第169図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	O－9	V	口縁	厚 1.0	淡茶褐	砂・微	沈？		刻？	良	
2	P－10	VI	口縁	厚 0.5	淡茶褐	砂・白・中	沈？		羽状刻	良好	
3	U－16	VI	口縁	厚 1.0	灰黒褐／茶褐	角・白・砂・少	刺		刻	良	外炭化物4と同一？
4	U－16	VI	口縁	厚 0.9	褐／淡褐	角・白・砂・少	刺		刻	良	外炭化物3と同一？
5	R－17	VI	口縁	厚 0.6	淡黄褐／灰褐	英・角・雲・砂中			刻	普	
6	P－15	V	口縁	厚 0.7	明灰褐／淡茶褐	角・雲・白・砂中			刻	良	
7	Q－11	VI	口縁	口径 18.5	灰茶褐／茶褐	英・白・赤・石砂・中	凹 押引			良	
8	I－6	VI	胴	厚 0.7	黒／淡褐	英・白・中	凹 縄（LR）？	ヘラ		良	

第170図

No.	グリッド	層	部位	法量 (cm)	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	調整・文様 内器面	調整・文様 口唇・底部	焼成	備考
1	M－8		底	厚 1.3	淡茶褐	角・雲・石・砂少				良	
2	I－6	V	底	底径 8.2	灰褐／黒褐	英・砂・微				良	
3	O－9	V	底	底径 6.2	茶褐／灰褐	雲・角・砂・中				良	
4	I－11	VI	底	底径 6.6	灰褐	英・角・白・砂中				良	
5	S－17	IV	底	底径 6.5	灰褐／暗灰褐	雲・砂・少				普	
6	I－8	V	底	底径 4.9	茶褐／灰褐	雲・白・砂・少				良	
7	Q－10	VI	底	底径 5.2	淡茶褐	砂・微				良	
8	J－11	II	底	底径 6.2	茶褐／灰褐	英・砂・少				良	
9	O－9	V	底	底径 5.4	淡茶褐／黒褐	角・砂・微				良	
10	62号土坑	覆土	底	厚 0.6	褐／淡茶褐	角・細砂・微				良	
11		II	底	厚 0.7	淡茶褐	英・角・砂・少				良	
12	N－15	V	底	厚 0.7	明茶褐／淡褐	英・角・雲・砂微				良	
13	QR－11	VI	底	厚 1.0	淡茶褐／淡褐	白・砂・中				良	
14	P－15	V	底	厚 0.9	淡茶褐／淡褐	砂・中				良	
15	60号土坑	覆土	底	厚 0.8	淡茶褐	英・角・砂・少				良	
16	T－16	VI	底	底径 7.5	茶褐	角・白・砂・少				良	
17	N－11		底	厚 0.6	茶褐／灰褐	角・砂・微				良好	
18		V	底	底径 6.1	淡黄褐	英・角・雲・砂少				良	
19	I－6	V	底	底径 5.6	淡茶褐／淡灰褐	角・雲・白細砂・少				良	
20	N－11		底	底径 12.1	茶褐	角・雲・白・砂中				良	

第171図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	調整	欠損	備考
1	I－8	V	石鏃	ch	1.9	1.3	0.3	0.81		完	
2	I－7	V	〃	安	3.1	1.7	0.3	1.81		完	
3	P－13	V	〃	黒II	1.2	1.3	0.3	0.39		完	
4	I－5	VI	〃	黒II	1.4	1.6	0.3	0.43		完	
5	N－14	VI	〃	黒III	1.8	(1.6)	0.4	(0.76)		茎部	
6	I－8	V	〃	黒III	1.4	1.4	0.2	0.32		完	
7	Q－13	V	〃	黒III	1.9	1.8	0.4	0.73		完	
8	R－13	V	〃	黒I	1.8	1.5	0.3	0.80		完	
9	Q－12	VI	〃	ch	2.4	1.8	0.4	1.13		完	
10	O－13	V	〃	黒III	2.5	2.0	0.4	1.20		完	
11	Q－17	V	〃	ch	2.5	1.9	0.3	1.21		完	
12	H－8	V	〃	ch	2.4	1.9	0.3	1.06		完	
13	Q－10	VI	〃	安	2.9	(1.8)	0.5	(1.63)		茎部	
14	S－17	V	〃	安	2.5	1.7	0.5	0.98		完	

第172図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	G－8	VI	石鏃	ch	2.0	1.3	0.3	0.52		完	
2	L－11	V	〃	ch	2.2	1.4	0.5	1.10		完	
3	R－16	V	〃	ch	2.5	1.3	0.3	1.16		完	
4	I－6	V	〃	安	2.9	(1.2)	0.5	(1.43)		茎部	
5	F－3	V	〃	ch	3.2	1.7	0.4	1.19		完	
6	J－6	VI	〃	ch	3.4	1.8	0.3	1.23		完	
7	I－9	V	〃	安	4.2	1.9	0.6	3.07		完	
8	I－8	V	〃	安	3.2	2.1	0.7	2.06		完	

第174図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	G－6	V	石匙	安	3.6	(5.7)	1.1	(8.8)		体部左端	
2	P－10	VI	〃	ch	6.0	(5.4)	1.6	(43.4)		体部左右端	
3	Q－10	VI	〃	ch	(4.1)	(3.7)	0.9	(7.2)		体部下半	
4	E－2	VI	〃	ch	(6.1)	(2.8)	1.2	(17.7)		体部左端下端	
5	F－4	V	〃	ch	(6.9)	(4.6)	0.8	(17.75)		体部右端下端	
6	N－9	VI	〃	ch	5.1	2.2	0.7	9.6		完	

第175図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	H－6	V	石匙	安	4.2	(3.4)	0.6	(6.75)		体部左下端	
2	D－3	V	〃	安	3.7	4.2	0.9	7.85		完	
3	R－17	V	〃	ch	3.9	(4.8)	1.2	(14.7)		体部右端	
4	H－7	V	〃	ch	3.2	(3.7)	0.7	(5.4)		体部右端	

第176図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	F－7	V	スクレイパー	ch	(4.0)	(2.6)	0.6	(2.4)		体部上下	
2	F－5	V	〃	ch	(3.0)	(2.9)	0.8	(6.0)		体部上半	
3	H－10	VI	〃	ch	(4.6)	(3.3)	0.9	(13.2)		体部上半	
4	H－7	VI	〃	ch	7.4	3.5	0.6	24.2		完	
5	F－3	VI	〃	ch	7.5	3.1	1.0	(24.5)		体部	
6	H－6	VI	〃	ch	(10.5)	4.5	0.9	(53.9)		体部上端	
7	N－14	VI	〃	黒1	(6.3)	2.4	0.9	(14.1)		体部下端	

第177図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	F－5	V	スクレイパー	ch	3.9	(4.4)	1.5	(14.7)		体部左右	
2	D－4	V	〃	ch	3.4	4.4	0.7	3.3		完	
3	H－6	V	〃	ch	(7.1)	(5.3)	1.7	(47.0)		体部左右上端	
4	G－6	VI	〃	安	6.0	(8.9)	1.6	(65.8)		体部左右	
5	G－6	VI	〃	ch	5.3	(8.1)	2.4	(85.2)		体部左端	

第178図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1*	O－15	VI	石錐	ch	(2.6)	1.0	0.4	(0.95)		刀部先端	
2	S－17	VI	〃	ch	(4.6)	(3.5)	(0.9)	(14.7)		刀部先端上端	
3	H－5	V	ペッティングストーン	頁	2.1	1.7	0.6	3.6		完	
4	I－7	VI	異形石器	安	2.0	1.5	0.3	0.7		完	
5	H－7	V	ペッティングストーン	頁	3.1	2.5	1.2	13.9		完	
6	H－5	V	異形石器	安	3.7	2.0	0.7	2.9		完	
7	Q－10	V	〃	安	4.7	2.7	0.8	7.8		完	

第179図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	N－11	V	磨製石斧	砂	9.1	3.5	1.7	69.8		完	
2	F－3	V	〃	頁	(5.1)	(6.3)	(1.5)	(61.1)		欠	
3	S－17	V	〃	頁	5.4	(4.8)	(1.4)	(50.2)		欠	
4	M－12	VI	円盤状石器	砂	4.4	4.7	0.8	15.9		完	
5	N－4	VI	磨製石斧	頁	11.3	4.2	1.4	95.5		完	
6	G－5	VI	石錘	頁	5.4	6.8	1.6	(88.9)		欠	

第180図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	J－6	VI	二次加工ある剝片	ch	3.6	1.5	0.6	4.6			
2	I－7	V	〃	黒II	3.7	1.6	0.7	3.9			
3	H－6	V	〃	ch	3.1	3.1	0.6	6.8			
4	E－4	V	〃	黒I	4.9	3.0	0.7	11.3			
5	E－6	VI	〃	安	5.4	2.0	1.1	8.4			
6	O－12	VI	〃	ch	4.8	2.5	0.4	6.4			
7	T－14	VI	〃	ch	5.5	3.0	0.8	15.6			
8	U－15	V	〃	ch	4.4	3.3	0.7	12.1			
9	B－11	VI	〃	ch	5.4	3.4	1.0	17.4			
10	P－13	V	〃	ch	1.9	3.9	0.5	3.3			

第181図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	S－12	VI	使用痕ある剥片	黒II	2.0	1.4	0.4	1.7			
2	K－10	VI	〃	ch	3.5	1.7	0.6	4.9			
3	H－6	V	〃	ch	4.4	2.2	0.5	4.1			
4	R－14	VI	〃	安	6.5	2.1	0.6	12.9			
5	O－15	V	〃	黒I	3.4	2.2	0.6	4.6			
6	I－11	VI	〃	ch	4.4	3.4	0.4	12.6			
7	R－17	VI	〃	ch	4.8	3.2	0.7	12.4			
8	N－11	V	〃	ch	6.4	4.5	0.9	34.7			
9	G－8	VI	〃	ch	6.3	2.7	1.2	26.1			
10	H－4	V	〃	ch	6.2	5.1	0.8	35.4			

第182図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	I－7	V	石核	ch	5.4	6.5	2.2	83.9			
2	H－6	V	〃	黒I	5.4	7.8	2.9	116.5			
3	E－2	VI	〃	ch	5.1	6.1	3.8	112.4			
4	Q－13	V	〃	ch	8.6	5.8	5.2	242.7			

第183図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	I－6	V	磨石	砂	8.9	7.0	5.0	487.6		完	
2	F－6	V	〃	砂	5.2	4.7	2.8	95.5		完	
3	O－9	V	〃	砂	8.0	7.5	3.6	353.4		完	
4	G－5	V	〃	砂	9.2	5.7	4.3	342.9		完	
5	T－14	V	〃	砂	5.0	9.1	1.6	294.5		完	
6	F－5	VI	〃	砂	12.4	9.6	4.7	815.0		完	
7	J－8	V	〃	砂	10.0	12.9	4.7	800.0		完	

第185図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	I－5	V	磨石	砂	8.0	6.8	3.6	297.2		完	
2	O－14	V	〃	砂	9.6	6.6	3.3	328.7		完	
3	E－3	V	〃	砂	9.6	8.8	4.1	490.6		完	
4	P－13	V	〃	砂	8.9	5.9	3.5	275.9		完	
5	T－14	V	〃	砂	11.0	8.4	4.9	852.1		完	
6	J－8	V	〃	砂	11.8	(9.2)	6.2	(980)		欠	

第186図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	J－11	V	磨石	砂	10.2	8.0	5.9	700.0		完	
2	D－3	V	〃	砂	10.9	8.6	4.6	620.0		完	
3	D－4	V	〃	砂	10.1	8.8	4.5	586.7		完	
4	F－5	V	〃	砂	13.2	9.4	5.2	1030		完	

第187図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	G－4	VI	磨石	安	9.6	7.4	4.2	446.0		完	
2	F－4	VI	〃	砂	9.9	8.5	4.2	567.4		完	
3	J－8	V	〃	砂	12.3	10.3	5.9	1160		完	
4	J－8	V	〃	砂	10.7	10.0	4.2	800.0		完	

第188図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	J－8	V	磨石	砂	8.5	6.4	5.3	409.9		完	
2	E－3	VI	〃	砂	5.2	5.6	2.0	85.3		完	
3	F－4	VI	〃	砂	9.2	6.9	3.05	284.0		完	
4	J－8	V	〃	砂	9.3	8.0	3.9	430.4		完	
5	J－8	V	〃	砂	10.3	9.2	6.5	850.0		完	
6	R－17	V	〃	砂	8.0	13.8	4.3	1190		完	

第189図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	N－9	VI	磨石	砂	7.0	6.5	4.0	276.9		完	
2	J－8	V	〃	砂	6.8	6.5	5.2	314.1		完	
3	H－7	VI	〃	砂	11.9	8.9	4.4	750.0		完	
4	H－6	VI	〃	砂	10.7	9.3	3.8	546.1		完	
5	L－7	VI	〃	砂	12.4	9.6	4.7	815.0		完	

第190図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	Q－12	VI	磨石	流	（7.3）	（8.5）	（2.4）	（262.8）		欠	
2	G－4	VI	〃	砂	11.0	8.1	5.4	680		完	
3	M－12	VI	〃	砂	10.0	（7.4）	（3.3）	（325.6）		欠	
4	H－5	VI	〃	砂	（7.5）	（8.7）	（5.4）	（349.7）		欠	
5	G－4	VI	〃	安	12.3	10.0	6.1	1160		完	

第191図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	Q－12	V	敲石	砂	8.0	3.7	2.7	119.8	敲打痕	完	
2	Q－12	VI	〃	砂	9.3	3.2	2.2	108.5	下面敲打痕 磨痕	完	
3	F－2	V	〃	砂	13.3	4.4	2.2	200.6	敲打痕	完	
4	C－3	V	〃	砂	7.3	3.6	2.2	90.3	敲打痕	完	
5	H－4	V	〃	砂	9.2	3.6	2.3	115.9	敲打痕	完	
6	P－10	VI	〃	粘	9.7	3.5	2.2	118.7	敲打痕	完	
7	H－7	V	〃	砂	7.8	2.3	1.4	48.8	敲打痕	完	
8	G－7	V	〃	砂	16.7	5.9	2.9	424.8	敲打痕 磨痕	完	
9	G－7	V	〃	砂	16.1	8.4	4.2	920.0	上下敲打痕	完	
10	S－13	V	〃	砂	（9.0）	（4.2）	(2.8)	(178.7)	下端敲打痕	欠	

第192図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	I－5	VI	敲石	砂	11.4	3.6	3.3	219.2	敲打痕 磨痕	完	
2	L－11	V	〃	砂	（9.0）	(10.6)	(3.5)	(420.1)	敲打痕	欠	
3	N－14	VI	〃	砂	(8.2)	(4.9)	(2.8)	(163.1)	敲打痕	欠	
4	F－6	V	〃	砂	(16.6)	（4.4）	(3.3)	(381.2)	上下敲打痕	欠	
5	N－11	VI	〃	砂	26.2	9.15	4.4	1350	下端損傷	完	
6	E－7	VI	〃	砂	16.5	4.9	4.3	539.7	敲打痕	完	

第193図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	N－12	V	敲石	砂	11.0	4.4	3.6	264.9		完	
2	Q－10	VI	〃	砂	12.2	4.8	1.8	165.7		完	
3	I－6	VI	〃	砂	16.8	3.4	1.9	166.7		完	
4	P－11	V	〃	砂	11.0	6.7	3.3	329.3		完	
5	D・E－3	VI	〃	砂	7.9	4.4	2.7	144.7		完	
6	S－12	VI	〃	砂	22.0	5.8	3.3	620.0		完	
7	O－12	VI	〃	砂	9.6	5.3	2.6	191.1		完	
8	O－12	V	〃	砂	9.5	5.0	2.3	162.6		完	

第194図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	F－7	V	敲石	砂	（9.3）	(7.7)	(3.7)	(268.7)	下端敲打痕	欠	
2	O－9	V	〃	砂	(12.7)	(5.4)	(2.2)	(229.1)		欠	
3	F－4	VI	〃	頁	15.6	5.5	2.0	292.8		欠	
4	P－11	V	〃	砂	12.8	4.8	1.5	163.2		完	
5	H－6	VI	〃	砂	(14.0)	(6.4)	(2.2)	(291.4)		欠	
6	H－6	V	〃	砂	(9.5)	(5.0)	(2.3)	(162.6)	敲打痕	欠	

第195図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	I－6	V	石皿	砂	(25.9)	(29.4)	(7.8)	(8,700)		欠	
2	H－7	V	〃	砂	(15.7)	(13.9)	(4.5)	(1,700)		欠	
3	P－11	V	〃	砂	27.2	31.6	9.1	10.790		完	火を受けた痕跡

第196図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	Q－13	VI	石皿	砂	12.85	19.8	5.3	2,800		完	
2	O－16	VI	〃	砂	(14.3)	(18.0)	(6.0)	(2,570)		欠	
3	N－14	VI	〃	砂	(11.7)	(15.4)	(6.9)	(1,910)		欠	
4	M－12	V	〃	砂	(13.1)	(14.5)	(8.2)	(2,000)		欠	
5	O－15	VI	〃	砂	22.4	26.9	8.0	8,000		完	
6	F－6	V	〃	砂	(13.8)	(11.4)	(7.2)	(1,350)		欠	

第197図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	O－10	V	石皿	砂	(22.3)	(23.5)	(9.5)	(5,650)		欠	
2	P－11	VI	〃	砂	(12.8)	(25.2)	(8.2)	(3,000)		欠	
3	T－14	VI	〃	砂	26.8	22.4	7.0	6,520		完	
4	N－14	V	〃	砂	(19.0)	(14.6)	(5.4)	(2,007)		欠	

第198図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	V－15	VI	石皿	砂	(12.4)	(16.7)	5.0	(1,580)		欠	
2	H－6	VI	〃	砂	(24.1)	(26.1)	4.4	(4,040)		欠	
3	H－6	VI	〃	砂	(17.8)	(22.2)	11.0	(4,500)		欠	

第199図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	P－13	V	礫器	砂	7.5	8.9	2.2	190		完	
2	S－16	V	〃	砂	9.5	13.3	3.1	580		完	
3	Q－12	V	〃	砂	7.3	9.7	2.9	230		完	
4	E－3	V	〃	砂	15.1	10.6	3.8	730		完	
5	E－6	VI	〃	砂	13.9	11.0	4.9	900		完	

第206図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	K－9	Ⅷ	剝片尖頭器	ch	(5.5)	2.7	0.4	(10.6)		欠	
2	K－9	Ⅷ	〃	頁	(7.0)	3.3	0.9	(25.4)		欠	
3	K－8	Ⅷ	〃	頁	(7.5)	2.8	0.7	(17.4)		欠	
4	K－9	Ⅷ	三稜尖頭器	頁	(3.6)	(1.9)	(1.1)	(11.0)		欠	
5	L－9	Ⅷ	〃	ch	(5.1)	2.0	(1.2)	(13.1)		欠	
6	L－10	Ⅷ	剝片尖頭器	頁	(8.9)	3.4	1.1	(37.7)		欠	

第207図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	K－9	Ⅷ	台形石器	黒II	0.8	0.7	0.3	0.2		完	
2	K－10	Ⅷ	〃	黒II	1.6	1.0	0.4	0.7		完	
3	K－9	Ⅷ	〃	黒III	1.2	1.7	0.4	0.9		完	
4	K－10	Ⅷ	〃	黒II	1.5	1.2	0.4	0.9		完	
5	K－9	Ⅷ	〃	黒II	1.3	1.3	0.4	0.7		完	
6	K－9	Ⅷ	〃	黒III	1.4	1.2	0.6	1.4		完	
7	J－10	Ⅷ	〃	黒III	2.5	1.7	0.6	1.4		完	
8	K－10	Ⅷ	〃	黒I	2.1	1.3	0.7	2.0		完	
9	O－12	Ⅷ	〃	ch	2.1	1.6	0.6	2.4		完	

第208図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	K－9	Ⅷ	二次加工ある剝片	黒II	1.4	2.0	0.3	0.7			
2	J－10	Ⅷ	〃		2.9	1.5	0.8	3.8			
3	K－9	Ⅷ	〃	黒III	3.3	1.5	1.0	5.1			
4	K－9	Ⅷ	〃	黒III	3.0	1.9	0.9	4.1			
5	K－10	Ⅷ	〃	ch	4.1	2.7	0.6	8.9			
6	K－9	Ⅷ	使用痕ある剝片	安	(3.3)	1.4	0.7	(2.7)		欠	
7	K－9	Ⅷ	〃	ch	(3.7)	2.0	0.6	(4.7)		欠	
8	K－9	Ⅷ	〃	頁	5.1	1.6	0.7	5.3			
9	K－8	Ⅷ	〃	ch	3.4	1.7	0.6	7.5			
10	K－9	Ⅷ	二次加工ある剝片	ch	9.5	3.2	2.3	60.8			
11	K－9	Ⅷ	使用痕ある剝片	ch	(5.9)	3.9	1.5	(38.4)		欠	

第209図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
	K－9・10 J－10	Ⅷ	接合資料	頁	16.1	13.3	5.7	1,045			9点

第210図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	K－9	Ⅷ	接合資料	黒Ⅲ	3.6	2.5	0.9	11.9			2点
2	K－9	Ⅷ	石核	ch	5.6	6.4	3.6	126.8			2点
3	K－10	Ⅷ	接合資料	安	6.1	3.9	1.1	33.2			2点
4	K－9	Ⅷ	〃	ch	5.4	5.4	1.1	59.9			3点
5	K－9 I－7	Ⅷ	〃	ch	6.6	10.2	2.3	167.5			3点

第211図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	K－12	Ⅷ	三稜尖頭器	ch	(4.8)	1.9	(0.9)	(11.2)		欠	
2	L－12	Ⅷ	二次加工ある剝片	ch	2.1	1.4	0.5	1.2			
3	L－12	Ⅷ	〃	ch	1.5	1.3	0.5	1.2			
4	K－12	Ⅷ	〃	ch	3.2	1.9	1.1	8.9			
5	K－11	Ⅷ	〃	ch	(3.7)	2.1	0.9	(6.9)		欠	
6	L－11	Ⅷ	使用痕ある剝片	頁	4.5	4.4	0.8	21.1			
7	K－12	Ⅷ	〃	黒Ⅱ	1.3	2.9	0.6	3.5			
8	K－12	Ⅷ	〃	頁	(5.5)	(3.0)	(0.8)	(22.1)		欠	
9	K－12	Ⅷ	〃	ch	4.5	4.2	1.8	9.5			

第212図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	K－7	Ⅷ	三稜尖頭器	頁	(2.7)	(1.2)	(0.9)	(3.3)		欠	
2	K－8	Ⅷ	剝片尖頭器	凝	7.9	2.7	0.9	23.8		完	
3	L－8	Ⅷ	ナイフ	凝	7.2	2.0	0.9	15.8		完	
4	K－8	Ⅷ	三稜尖頭器	頁	(11.3)	4.6	3.1	(151.6)		欠	

第213図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	K－7	Ⅷ	二次加工ある剝片	ch	3.2	1.3	0.7	3.2			
2	K－7	Ⅷ	〃	ch	(5.0)	(1.8)	(0.6)	(6.6)		欠	
3	K－7	Ⅷ	使用痕ある剝片	ch	(2.6)	(2.2)	(0.8)	(4.7)		欠	
4	K－8	Ⅷ	〃	ch	(3.8)	2.4	0.7	(5.5)		欠	
5	K－7	Ⅷ	〃	ch	3.1	(4.4)	1.2	(16.5)		欠	

第214図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
	K－7	Ⅷ	石核	ch	5.6	9.2	4.1	158.8			

第215図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	K－8	Ⅷ	接合資料	ch	4.4	3.6	0.8	13.1			2点
2	K－7	Ⅷ	〃	ch	6.2	3.6	1.3	24.1			2点
3	K－7	Ⅷ	〃	ch	3.1	4.9	1.6	29.8			2点
4	K－7	Ⅷ	〃	ch	4.9	6.8	1.2	49.4			2点
5	K－7	Ⅷ	〃	ch	5.1	7.1	1.8	70.5			2点

第216図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	K－11	Ⅷ	剝片尖頭器	凝	(6.9)	3.1	0.6	(14.6)		欠	
2	J－11	Ⅷ	〃	凝	6.4	2.5	1.3	18.1		完	
3	J－10	Ⅷ	ナイフ	凝	(7.6)	2.3	1.1	(19.6)		欠	
4	J－11	Ⅷ	剝片尖頭器	頁	(7.4)	3.2	1.1	(19.8)		欠	
5	K－10	Ⅷ	スクレイパー	ch	(8.1)	2.8	0.8	(21.9)		欠	
6	J－11	Ⅷ	剝片尖頭器	頁	(6.1)	3.6	(0.8)	(23.5)		欠	

第217図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	J－11	Ⅷ	二次加工ある剝片	ch	6.1	4.6	1.6	47.9			
2	K－10	Ⅷ	スクレイパー	ch	(2.8)	(2.8)	(0.9)	(7.0)		欠	

第218図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	R－12	Ⅷ	三稜尖頭器	黒III	(1.7)	(1.1)	(0.7)	(1.1)		欠	
2	Q－12	Ⅷ	〃	ch	(1.6)	(1.4)	(0.9)	(2.1)		欠	
3	S－12	Ⅷ	〃	ch	(2.8)	(1.6)	(1.0)	(3.2)		欠	
4	Q－12	Ⅷ	〃	ch	(2.8)	(1.7)	(0.9)	(4.1)		欠	
5	Q－12	Ⅷ	〃	ch	(4.0)	(1.4)	(0.9)	(5.6)		欠	
6	Q－12	Ⅷ	〃	ch	(2.7)	(1.7)	(1.1)	(4.1)		欠	
7	Q－11	Ⅷ	〃	ch	(2.4)	(1.9)	(1.2)	(5.8)		欠	
8	Q－12	Ⅷ	〃	ch	(2.4)	(1.8)	(1.5)	(5.7)		欠	
9	S－12	Ⅷ	〃	ch	(5.8)	(2.7)	(1.6)	(26.9)		欠	
10	Q－11	Ⅷ	〃	ch	(4.7)	(1.7)	(1.4)	(13.0)		欠	

第219図

No.	グリッド	層	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調　整	欠損	備　考
1	Q－12	Ⅷ	三稜尖頭器	ch	5.4	1.4	1.2	8.2		完	
2	Q－11	Ⅷ	〃	ch	(4.9)	(2.3)	(1.4)	(15.0)		欠	
3	S－13	Ⅷ	〃	ch	5.1	2.4	1.7	15.4		完	
4	S－12	Ⅷ	〃	頁	(5.1)	1.6	0.7	(7.7)		欠	
5	Q－11	Ⅷ	〃	ch	(5.4)	(2.6)	(2.3)	(29.6)		欠	
6	R－11	Ⅷ	〃	ch	(5.4)	(4.5)	(1.8)	(40.6)		欠	

第220図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	V－15	Ⅷ	二次加工ある剝片	黒Ⅰ	2.7	3.1	0.8	0.6			
2	R－12	Ⅷ	〃	黒Ⅱ	4.9	2.7	1.0	14.9			
3	R－12	Ⅷ	〃	ch	(5.1)	3.4	(0.8)	(15.4)		欠	
4	U－15	Ⅷ	使用痕ある剝片	黒Ⅰ	(2.0)	(1.6)	(0.5)	(1.6)		欠	
5	S－12	Ⅷ	〃	黒Ⅱ	4.0	2.1	1.2	8.1			
6	F－3	Ⅷ	二次加工ある剝片	ch	6.1	4.8	1.1	27.6			
7	V－16	Ⅷ	使用痕ある剝片	ch	5.1	2.3	1.4	12.4			
8	G－6	Ⅷ	〃	頁	9.3	5.0	1.0	56.6			
9	R－12	Ⅷ	〃	ch	4.5	3.2	0.8	14.9			

第221図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	S－12	Ⅷ	接合資料	頁	4.0	5.7	1.0	23.7			2点
2	T－13	Ⅷ	〃	ch	5.6	6.5	1.8	69.1			2点
3	U－15	Ⅷ	〃	頁	8.4	6.7	1.6	118.7			2点

第222図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	M－12	Ⅵ	ナイフ	安	3.4	1.7	0.7	4.0		完	
2		Ⅰ	〃	ch	2.6	1.7	0.8	2.5		完	
3	H－5	Ⅷ	〃	頁	(3.7)	1.2	0.5	(2.4)		欠	
4	N－10	Ⅷ	〃	頁	6.7	1.9	1.4	15.9		完	
5	E－2	撹	〃	安	(4.5)	1.4	0.8	(5.8)		欠	
6	E－6	Ⅷ	剝片尖頭器	頁	(6.2)	4.1	(1.1)	(32.5)		欠	

第223図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	K－10	Ⅷ	磨石	砂	10.0	6.4	4.9	425.9		完	
2	R－11	Ⅷ	敲石	砂	9.2	4.6	2.6	162.2		完	
3	R－11	Ⅷ	〃	砂	10.4	5.2	2.0	161.2		完	
4	K－12	Ⅷ	〃	砂	9.3	6.5	2.7	204.6		完	
5	R－12	Ⅷ	〃	砂	(7.1)	(5.5)	(3.5)	(133.8)		欠	
6	J－11	Ⅷ	磨石	砂	23.2	13.1	3.3	1,490			5点接合
7	K－10	Ⅷ	〃	砂	10.9	8.9	4.1	568.5			

第224図

No.	グリッド	層	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	調整	欠損	備考
1	L－8	Ⅷ	石皿、台石	砂	22.0	22.3	12.7	9,560		完	
2	K－10	Ⅷ	〃	砂	(29.6)	(17.1)	(6.3)	(3,725)		欠	2点接合
3	L－8	Ⅷ	〃	砂	22.1	22.4	11.7	9,500		完	
4	K－10	Ⅷ	〃	砂	(23.2)	(10.2)	(4.5)	(1,510)		欠	2点接合

第Ⅲ章　まとめと考察

第１節　古墳時代の調査について

１．遺構について

１号地下式横穴墓・２号地下式横穴墓・１号不明遺構は、調査区内で最も標高が高い箇所にほぼ東西方向に並んでいる。削平されている部分を考慮すると、遺構が立地している本来の地形は丘状になっていたことが考えられる。

地下式横穴墓　１号・２号地下式横穴墓は同様な構造で、両者の主軸はほぼ直交する。玄室の平面形は、横長な不整形プランを呈し、片袖である。羨道・竪坑の床面は、玄室に向かって低くなりながら傾斜する。天井部は残存している壁より、ドーム状になると推察される。１号地下式横穴墓は羨門部閉塞である。２号地下式横穴墓は羨門部閉塞と考えられる。１号地下式横穴墓の閉塞状況は、主要な箇所に板石を用いており、補足的に板石の間隙に礫を使用している。２号地下式横穴墓で検出した閉塞石は円礫・角礫である。

出土遺物　遺物は１号地下式横穴墓の玄室左側壁付近より鉄鏃13本（圭頭斧箭式２本・長頸鏃11本）が鏃身部を左側壁側に向けて束ねた状態で出土した。出土した長頸鏃の中で、篦被部が確認できるものについては、Ｘ線非破壊検査装置で検査を行った（熊本県工業技術センターによる）。その結果、篦被は棘篦被でなく、関篦被であることが判った（図版５）。

畿内における後期古墳時代の鉄鏃変遷を見ると、６世紀後半には篦被に棘篦被が採用されており、それ以前の６世紀前半の長頸鏃の主流は柳葉式と片刃箭式である(1)。地域が異なるが、１号地下式横穴墓より出土した関篦被の長頸鏃は６世紀前半頃のものと考えることができる。また、圭頭斧箭式の鉄鏃は大型化しており、５世紀後半～６世紀前半頃の時期に比定できる(2)。以上のことより、１号地下式横穴墓の時期を鉄鏃より考えると、５世紀後半～６世紀前半頃になる。２号地下式横穴墓は１号地下式横穴墓と同様な構造であることより、ほぼ同じ時期と思われる。

１号不明遺構　土坑１基を検出し、その周辺の二箇所より鉄器が出土した。鉄器は撹乱を受けており遺存状態は良くなく、剣（１本）・圭頭斧箭式の鏃（２本）が確認できる。この他に個体数が不明な長頸鏃があり、篦被を確認できるもの１本は関篦被である。１号不明遺構より出土した鉄鏃は１号地下式横穴墓のものと同様であり、ほぼ同じ年代を与えることができる。

２．出土遺物について

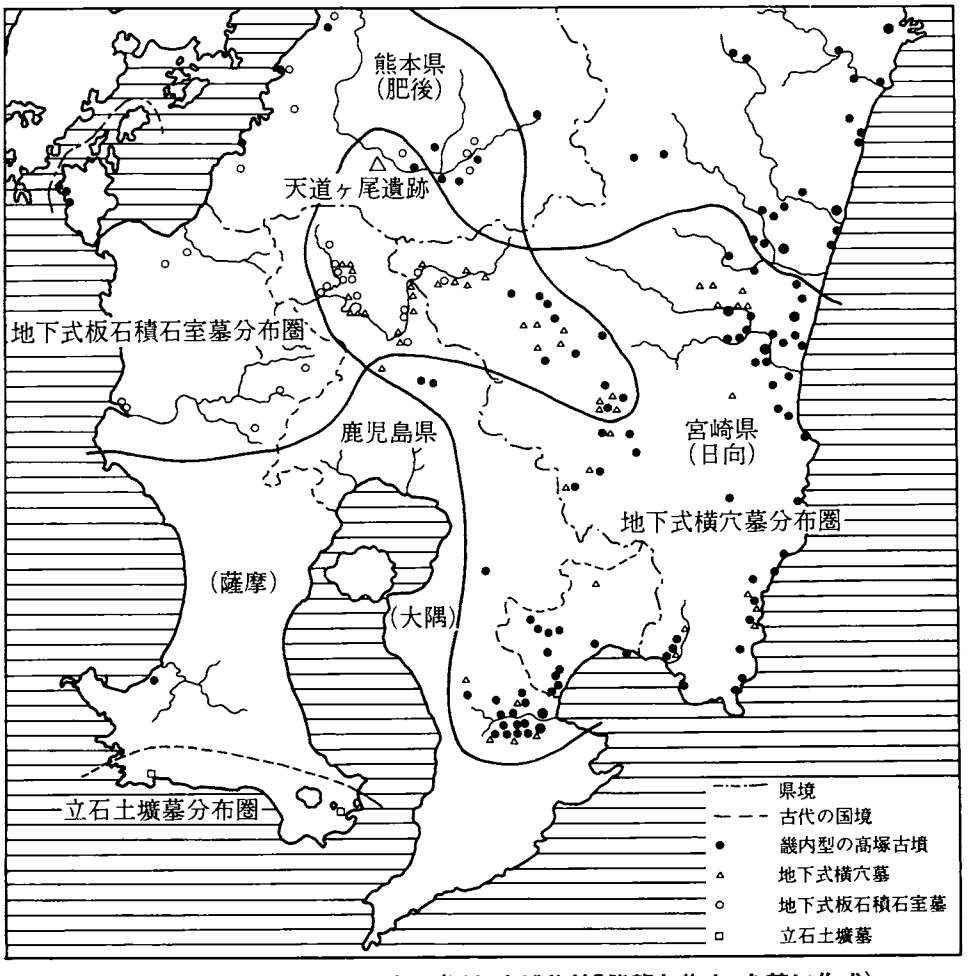
地下式横穴墓とは離れた箇所より土師器（甕形・壷形・鉢形・高坏形土器）が出土した。この中には成川式土器（Ⅲ式・笹貫式）と思われる５世紀～６世紀の土器を含んでいる(3)。調査区

の状況からすると、土師器は地下式横穴墓と関連させて考えた方が理解し易い。

3．地下式横穴墓の分布について（第225図）

これまでの地下式横穴墓の分布域は、宮崎県・鹿児島県に限られていた。この遺跡における地下式横穴墓の検出は、従来の分布域を北西方向に拡大し、新たな分布域を加えることになった。また、天道ケ尾遺跡が位置する人吉盆地は、地下式板石積石室墓が分布する地域であり、これに地下式横穴墓が加わり、両者の墓制が混在する地域の一つになった。

人吉盆地に隣接する宮崎県えびの市周辺や鹿児島県大口盆地では、天道ケ尾遺跡の地下式横穴墓と類似する構造（長方形または横長プラン、羨道部閉塞）の地下式横穴墓が分布している(4)。天道ケ尾遺跡の地下式横穴墓の系譜はえびの市周辺や大口盆地に分布するものに求められる。人吉盆地・えびの市周辺地域・大口盆地の三地域は、類似構造の地下式横穴墓が分布する地域



第225図　南九州の墓制分布図（浜松市博物館「熊襲と隼人」を基に作成）

として位置づけることができる。群として把握された地下式横穴墓は十数基～数十基が群として分布しているが、この遺跡では二基の地下式横穴墓が存在している。この遺跡での群のあり方は分布域端部での特色であろうか。

地下式横穴墓の検出は、人吉盆地での古墳文化に新たな墓制を加えることになり、初期横穴式石室（吉の尾古墳群）[5]や横穴墓との関連が注目できる。今後の課題としたい。

第2節　弥生時代の調査について

1．遺物について

弥生時代の調査では遺物のみが少数出土した。甕形土器はタタキ痕をもち、長胴になると思われ、野辺田式土器に比定できる。また、「く」の字形に屈曲した胴部片の外器面には、重弧文のバリエーションと思われる沈線の刻み目がある。この土器は重弧文長頸壷[6]の一種と考えられる。出土石器は凹基無茎鏃の磨製石鏃である。

第3節　縄文時代後期・晩期の調査について

1．遺構分布について

1号～4号土坑と1号・2号土坑群は、大きく二箇所に分かれて分布している。1号～4号土坑は、調査区北東端部のほぼ平坦な部分に集まり、1号・2号土坑群は調査区南西端部の平坦に近い地形の箇所に分布している。

2．出土遺物について

(1)遺物分布

Ⅲ層下部～Ⅳa層より出土した遺物は、土器(881点)、土製品(1点)、石器(355点)、剥片・破片(3246点)、自然石(342点)である。これらの遺物はⅢ区・Ⅳ区に集まる傾向があり、帯状の分布をしている。Ⅰ区では散在状態を呈して遺物が分布している。調査区外の部分も含めて考慮すると、Ⅲ区・Ⅳ区の遺物分布は環状になる可能性がある。

(2)出土土器

出土した土器はⅠ類・Ⅱ類に分類した。Ⅰ類土器は磨消縄文系の土器（縄文時代後期後半）[7]で、Ⅱ類土器は黒色磨研系の土器とそれに伴う土器(縄文時代晩期後半)[8]である。両者には時間的な空白があり、連続して遺跡が営まれていない。Ⅱ類土器の方が出土量が多く、中心になる。土器の分布状態を見ると、Ⅰ類土器の殆どはⅠ区に散在状態を呈して分布している。Ⅱ類土器は少数がⅠ区に、大半がⅢ区・Ⅳ区に分布している。Ⅲ区・Ⅳ区では、三箇所に大きなま

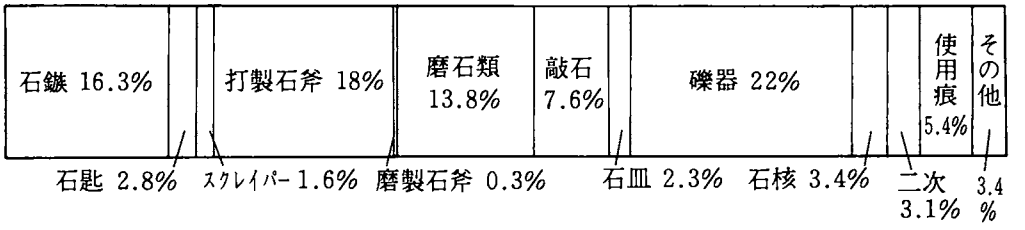
とまりがあり、そのまとまりごとに遺物の接合関係が見られる。

⑶出土土製品

土製品は欠損しており、円形か楕円形の平面形を呈すると思われる。残存部の表裏面には爪形状の文様がある。

⑷出土石器（第8表）

出土した石器ごとの占める割合を第8表に示した。石鏃・打製石斧・磨石類・敲石・礫器が出土石器の約77%を占める。その中でも打製石斧・礫器の占める割合が高いことが特徴的なことである。石器全体の分布状態を見ると、土器と同様にIII区・IV区に分布の中心がある。個別的に見ると、礫器はI区に分布の中心があり、3～5個の単位でまとまって出土した箇所もある。また、少数であるがI区に分布しているものは、石匙・スクレイパー・異形石器・二次加工剝片・打製石斧・石錘である。III区・IV区での石器は散在状態を呈して分布しているのが殆どであるが、これと異なる状態で出土しているのが石鏃・円盤状石器・磨石類である。石鏃はIV区の2グリッドに集中して出土した。円盤状石器は小型品（2個）がIII区の1グリッド、大型品（3個）がIV区の1グリッドより、まとまって出土した。磨石類は2～6個がまとまって出土している。



第8表　縄文時代後・晩期の石器組成表

3．関連する遺跡

天道ケ尾遺跡の北側下方の隣接した箇所に七地水田遺跡がある[9]。この遺跡では狭い調査面積であるが多量の打製石斧（球磨川の砂岩製）や晩期後半の土器が出土した。これらは天道ケ尾遺跡のものと密接な関係が想定でき、両遺跡は一連の遺跡としての位置づけが可能である。

第4節　縄文時代早期の調査について

1．遺構について

遺構検出はV層上面～VI層上面で行い、土坑（64基）・小ピットをもつ土坑（2基）・集石（23基）・凹部（3箇所）を検出した。V層上面の調査区の地形は、ほぼ中央に帯状を呈した最高部が東西方向にのびている。その箇所より北側・南側はそれぞれ緩傾斜地である。

(1)土坑

検出した土坑は覆土により次の(a)～(c)の三つに分けた。(a)の土坑－Ⅳ層（アカホヤ）が基本的な覆土になる（１号～31号）。(b)の土坑－Ⅴ層が基本的な覆土になる（32号～45号）。(c)の土坑－Ⅵ層が基本的な覆土になる(46号～64号)。土坑の分布域は次のように大きく二つに分かれる。(a)の土坑は調査区の北側端部周辺の緩傾斜地に集まっている。(b)・(c)の土坑は、(a)の土坑分布域に少なく、その地域より南側に多く分布している。

２号・12号・40号・62号土坑からは、楕円押型文土器・手向山式土器や山形押型文を施文した土器が出土した。

(2)小ピットをもつ土坑

小ピットをもつ土坑は上記の(a)の土坑の分布範囲にあり、調査区の北・西端部に位置する。床面にある小ピットは、１号土坑に７基、２号土坑に２基がある。床面の小ピットの存在や緩傾斜地の端部に分布することを考えると、土坑の性格として陥し穴的なものが想定できる。

(3)集石（第９表）

集石は大きく次の(1)～(3)の三地域に分かれて分布している。(1)(a)の土坑が分布している範囲の最北部地域。(2)標高の最も高い部分とその箇所より北側の緩傾斜地。(3)標高の最も高い箇所より南側の緩傾斜地。(1)の地域は集石数基が集まる傾向にあり、(2)の地域の集石は散在状態を呈して分布している。(3)の分布域に最大規模の１号集石が存在している。１号集石が存在している周辺は他の遺構があまり分布していない。

１号集石　１号集石は礫の数が極端に多く、規模も大きい。礫分布範囲の平面形は、ほぼ円形を呈する（径約10m）。断面図を見ると、円の中心（礫分布の中心）部分の礫が最も厚く（厚さ約50cm)、周辺部ほど薄くなる(厚さ約10～20cm)。礫除去後、礫分布の中央部にあたる箇所から、土壙１基を検出した。この状況より判断すると、土壙の上が最も高く、周辺部に行くにつれて次第に低くなるような礫の積み上げ方をしたものと考えられる。土壙内の北・南・東・西側の床面直上の部分と土壙外の一箇所より土壌サンプリングを行い、リン・カルシウム分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した（付論)。その要旨は次の通りである。土壙内覆土西側に僅かなリンの集積が認められる。しかし、これが人または動物の生産物・残骸・排泄物の影響によるものかは、その含量が特異的に多くないこと、カルシウム含量が土壙外に比較して低いことなどからその判断が難しい。土壌そのもののばらつきとも考えられる。

十文字原遺跡では、アカホヤ下層より検出した集石下部に石鏃を副葬した土壙墓が確認されており[10]、押型文期の墓として位置づけられている[11]。土壌分析では墓としての確定が困難であるが、十文字原遺跡の例より、この１号集石も墓としての可能性が高いと考える。

分類	集石	縄文	押型文	塞ノ神	手向山	石鏃	スクレイパー石匙	敲石磨石類	石皿	カーボン	礫総数	礫の赤化度	礫分布の範囲	備考
I－A類	6										37	—	径60cm	
	8										33	—	径70cm	
	18										30	6.6	100×50cm 径30cm	
	19				●		●				33	80	径60cm	
	20										37	30	長軸 60cm 短軸 40cm	小土器片 第1凹部
	23										43	75	長軸120cm 短軸80cm	小土器片
I－B類	4・5										85	—	300×200cm	小土器片 黒曜石剝片
	9										47	—	150×100cm	小土器片
	11	●	●		●		●	●	●		314	30	10×7m	
	15				●						39	28	径130cm	
	22										39	3	180×110cm	小土器片
II－C類	7			●	●			●		●	116	—	径250cm	
	10			●						●	151	—	径80cm	
	12				●			●			102	—	600×500cm	
	13				●						143	—	300×300cm	
	16										44	27	長軸 70cm 短軸 50cm	
II－D類	2										75	0	長軸 95cm 短軸 55cm	
	3										68	0	径90cm	
	21									●	211	90	径130cm	第1凹部 小土器片
II－E類	14				●		●	●	●	●	151	35	径100cm	
	17		●		●						142	70	250×150cm	
	1		●	●	●	●								

第9表　集石一覧表

2号～23号集石　これらの集石は掘り込みの有無でI類（掘り込みをもたないもの）・II類（掘り込みをもつもの）に分類し、さらに礫の分布状態でA～Eに細分した。Aは礫がまとまって分布するもの。Bは礫分布が散在状態であるもの。Cは掘り込み外にも礫が分布するもの。Dは礫の殆どが掘り込み内に分布するもの。Eは掘り込みの下部に石を配置するもの。2号～23号集石についてまとめたものが第9表で、それに1号集石を付け加えた。2号～23号集石の礫はV層～VI層にかけて分布しており、遺物が出土した集石が9基ある。11号集石は最も多くの

出土遺物があり、石器の器種も揃っており、縄文施文の土器が出土した。11号・17号集石より押型文土器が出土した以外は、手向山式土器・塞ノ神式土器の出土が多い。礫の赤化度については、Ⅱ－D類の3基の集石で極端な違いが認められる。2・3号集石の礫は赤化度が殆ど認められないのに対し、21号集石では、約90％の礫が赤化している。この違いは使用頻度によるものであろうか、それとも使用目的が異なるのであろうか。集石の形態による赤化度の違いは認められず、どの形態の集石も赤化度にばらつきがある。また、掘り込みをもつ4基の集石より、微量のカーボンを検出した。

⑷凹部

凹部とはIX層（シラス）に形成された自然の窪みのことである。その窪みにV層～Ⅷ層が堆積しており、V層・Ⅵ層より縄文時代早期の遺物が凹部の傾斜に沿った状態で出土した。上記のような凹部が標高の最も高い部分に三箇所ある（第1凹部～第3凹部）。

第1凹部は楕円形の平面形を呈する（長軸約10m、短軸約7m、高低差約15cm）。306点（土器115、石器・剝片191）の遺物が出土した。凹部内には20号集石（Ⅰ－A類）と21号集石（Ⅱ－D類）がある。

第2凹部も楕円形の平面形を呈する（長軸約14m、短軸約9m、高低差約40cm）。三箇所の凹部の中で最も大きい。凹部内の出土遺物は614点（土器464、土製品2、石器・剝片148）である。

第3凹部は谷状に入り込んだ部分（約6m×約5m）とそれに続く楕円形の窪み（長軸約6m、短軸約5m、高低差約35cm）からなる。遺物はこの二箇所より出土し、合わせて67点（土器56、石器・剝片11）を数える。

凹部出土遺物

土器　第1凹部・第2凹部・第3凹部より出土した土器には、手向山式土器・塞ノ神式土器・押型文土器・縄文土器などがある。土器の詳細については、包含層（V層・Ⅵ層）出土の土器といっしょにまとめる。

土製品　土製品は平面形が円形を呈するものと棒状土製品の2個が出土した。

石器　凹部の石器組成には違いがある。第1凹部では石鏃の占める割合が高い。第2凹部は出土石器が多く、磨石類、剝片・破片の占める割合が高い。第3凹部は出土石器が少ない。

凹部の遺物について　土器の接合関係を見ると、凹部内の土器には凹部外からの流れ込みもあるようである。しかし、第1凹部内に2基の集石があることより、出土した遺物は全てが流れ込みではなく、凹部を何らかの生活に利用した結果と考えることができる。

2．出土遺物について

⑴出土土器の各類と分布（第10・11表・第226図）

縄文早期の土器は、包含層より出土したものを中心として大きくⅠ～Ⅶ類に分類した。

まずⅠ類、楕円押型文を主文とする土器であるが、これらには、やや砂質の胎土であること、器壁が厚いこと等に共通の特徴がある。器形は口縁部が外反し、胴部は直立気味であり、底部はよくわからない。類似のものとして、山形と楕円の押型文を併用したものもあり、この類に含めている。押型文土器は底部が不明であるが、東九州のヤトコロ式併行期と思われる。

Ⅱ類は撚糸文の施された厚手の土器である。類例は中尾田遺跡[12]に見られ、円筒形深鉢の器形が想定されている。

Ⅲ類は個体数が少なく、胎土・施文法等に特徴がある。器壁は厚く、器形はよくわからない。一つの型式として認められるかどうかはわからないが、他に類例もなかったため、別に分類した。

Ⅳ類はいわゆる手向山式と呼ばれる一群の土器型式にあてはまると思われる。器壁は薄く、外反する口縁部から「く」の字形に屈曲する胴部に続き、底部はやや上げ底を呈するものがその典型的な器形である。手向山式土器が大量に出土した例としては前掲した中尾田遺跡の他、最近では城馬場遺跡[13]がある。この型式の土器には様々なバリエーションがあること、又、近来壺形の器形が存在すること[14]が知られてきている。そのため、本報告ではⅣ類を1（深鉢形）、2（壺形）に分け、更に主文によりａ～ｐ類に分類を試みた。ただしⅣ－2類土器については個体数が少なく、いくつかの文様要素を組みあわせた文様構成のものも多く、主文による分類はあえてしなかった。

中尾田遺跡の主文による分類と、本遺跡の分類を対比させたのが、第10表である。

本遺跡では、細分の方法にもよろうが中尾田遺跡に比して、文様の種類が多い。中尾田遺跡の文様タイプのうち本遺跡で分類不可能だったものは貝殻文（ｍ類）、同心楕円押型文（ｈ類）、沈線文＋凸帯文（ｉ類）である。このうちの貝殻文は、本遺跡には全くなかった。しかし、同心楕円押型文については、可能性のある小片が包含層より2点出土しており、第2凹部から出土した破片（第111図21）もその可能性がある。沈線文＋凸帯文をもつものについては、この沈線文は、やや太い沈線文を主体とし、胴部屈曲部に刺突のある凸帯を巡らせるものである。本遺跡では、この種の沈線文も凸帯文も文様パターンとしては存在している。ただ、胴部屈曲部に凸帯をもつ例が皆無であるため、この土器はⅤ類として分類している。しかしながら手向山式土器の沈線文＋凸帯文をもつものが混在している可能性も否定はできない。また、本文中で述べているように、本遺跡のｐ類は更に細分できると思われる。以上のような理由で、本遺跡のⅣ類の文様パターンはａ～ｐ16種類の現時点での分類以上に増加すると思われる。先述した城馬場遺跡ではａ～ｖの22種類に細分されており、他の既出、新出の資料ともうまく対応させていくことができれば、手向山式の土器の文様バリエーションは、更に明確になっていくと思われる。

主　　文	天道ヶ尾遺跡 分類記号	中田尾遺跡 分類記号
縄　　文	Ⅳ—a類	9－d類
山形押型文	—b	－e
菱形押型文	—c	－f
同心円押型文	—d	－g
撚糸c（変形撚糸文）	—e	－c
撚糸e（網目撚糸文）	—f	－b
櫛状条痕文	—g	
山形押型文＋凸帯文	—h	
格子押型文	—i	
撚糸d（平行撚糸文）	—j	－a
連　点　文	—k	－l
みみずばれ凸帯文	—l	－i
隆　帯　文	—m	
押捺連点文	—n	－kに見られる
波　状　文	—o	
沈　線　文	—p	－kの一部
同心楕円押型文	△	－h
沈線文＋凸帯文	△	－j
貝　殻　文		－m

第10表　Ⅳ類土器対比表

また本遺跡のⅣ類土器の中には、手向山式土器以外の土器が混在してしまっている可能性がある。

Ⅳ－1－a類は縄文を主文とするものであるが、Ⅴ類にも縄文を施すグループ（Ⅴ－1－d類）がある。胴部のみではうまく分類できないものもあり、Ⅴ－1－d類の凸帯のない胴部がⅣ類に含まれているかもしれない。また、縄文施文の土器としては11号集石から特異なものが1点（第103図14）出土している。これはⅣ－1－a類にもⅤ－1－d類にも分類できない。胎土はやや砂質で器壁が厚い。外反する口縁から直立する胴部につながるものと推定され、Ⅰ・Ⅱ類と類似するタイプである。このタイプの類似資料がⅣ－1－a類に含まれていることも考えられるのである。

山形押型文施文のものはⅣ－1－b類に分類している。しかしⅠ－1類には山形押型文が楕円押型文と併用されている例があり、Ⅳ－1－b類のうちいくつかのものは、手向山式以前の押型文式土器であることも考えられる。この可能性を基に、本文ではⅣ－1－b類を仮に2つに細分して記述している。このうち後述した第136図のものは典型的な手向山式土器である。しかし前述したものは、どちらであるとも確定することができなかったため、そのままⅣ

類に含めている。更に検討が必要であると思われる。

さて、IV－2類、手向山式土器の中でも壺形を呈するものは破片も含めて36点であった。これ以外にも可能性のあるものがある(15)。ただ、多くは小片であり、城馬場遺跡出土資料のように口縁部から胴部までの器形のわかるものはなく、せいぜい口縁部から頸部までである。口縁部の形態は、外反するもの、直立するもの、外傾するもの、内傾するものと様々で、頸部の屈曲もだらしのないもの、鋭いものがあり、文様と同様器形にも多くのバリエーションがあるらしいことを示している。文様は、単一のものもあるが、凸帯文を組みあわせた文様構成のものが多いようである。類例が増加してくれば深鉢形のものと同様に細分化できようが、この複合の文様構成のものが多い傾向は、IV－2類の出現時期とも関連するかもしれない。

凸帯文を持つ土器の一群は、V類としてまとめている。胎土には混入物が少なく、色調は褐色系を呈している。器形全体がわかる例は少ないが、外反する口縁部に直立かやや外傾する胴部が続いている。底部の形態はわからない。口縁部は横方向に数条の刺突のある凸帯を貼り付け、瘤状突起や把手状の貼付を持つものもある。胴部はいくつかの施文法があり、凸帯を持つものもある。

V－1－a類は口縁部片が多く、この口縁部にb（撚糸）・c（不明地文）・d（縄文）・e（太目の沈線）の各々の文様の施文された胴部が続くと思われる。またf類は沈線の施された胴部で、これはe類の凸帯のない部分であろう。このf類は先述したようにIV類との関連も考えられるものである。

V類土器の中で、V－1－e類の1点（第163図1）は手向山式土器に近いもの、V－1－b類の1点（第160図1）は平栫式土器に近いものである。

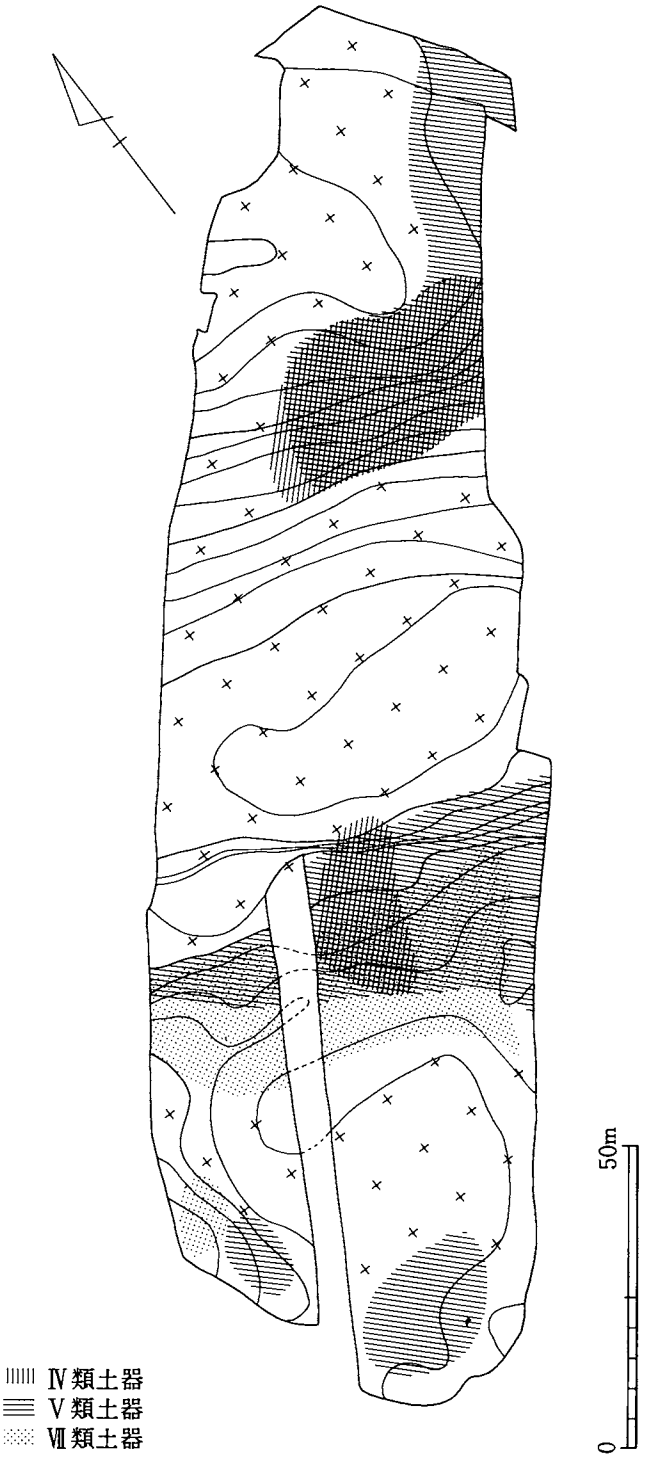
VI類は貝殻施文の塞ノ神式土器である(16)。他にも図化できなかったが、凹線の中を撚糸文で充填した、いわゆる塞ノ神式土器の胴部らしい破片が27点出土しており、分布もVI類と重なる。また、その他の土器として分類したものの中にも円筒形の塞ノ神式土器系のもの（第169図7）がある。

VII類はいわゆる栫ノ原タイプ(17)に属するものである。塞ノ神系の土器として把えるか、平栫系の土器として把えるかについては諸説あるようである。本報告ではVI類・VII類は器形はよく似ているが、出土地点が微妙に異なっているため、別に分類をした。

ある程度まとまった出土量があり、分布の特徴を大まかに把えることのできるIV類～VII類の土器の分布状況を重ねあわせてみたのが第226図である。

全体を見て、傾斜地からの出土量は多いが、I区北側平坦部、I区南側の遺跡中央鞍部、III・IV区南西側平坦部では土器はほとんど出土せず、平坦面を囲んでいるようである。理由についてはよくわからない。

IV類～VII類の中ではIV類の分布範囲が最も広い。遺跡中央鞍部両側の傾斜部の西寄りに広が



第226図　Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅶ類土器分布図

っているが、その中に一部Ⅴ類が重なっているのがわかる。

Ⅵ類・Ⅶ類は鞍部南側傾斜地から出土しており、東端部からⅥ類・西部の広い部分からⅦ類が境を接して分布している。Ⅲ・Ⅳ区北側傾斜部からは各類が出土しているが、各類の分布範囲は比高によって若干異なっているようである。

Ⅳ類～Ⅶ類の時間的関係については、層位的には把えられない。また相互の関係もよくわからない。

その他の土器として、数点取り上げているが、多くはⅥ類・Ⅶ類に属する可能性が高い。

今まで主に包含層出土の土器を中心に述べてきたが、遺構出土の土器のうち分類可能なものを見てみると、出土数は第11表のとおりである。

1号集石ではⅣ－1－b・c類が、11号集石ではⅠ類が出土土器の中心である。また11号集石では楕円押型文・山形押型文併用の土器が出土しており、やや時期が古い様相を示してい

遺構番号＼分類記号	I－1	II－1	III－1	IV－1 a	IV－1 b	IV－1 c	IV－1 d	IV－1 e	IV－1 f	IV－1 g	IV－1 h	IV－1 i	IV－1 j	IV－1 k	IV－1 l	IV－1 m	IV－1 n	IV－1 o	IV－1 p	IV－2 a	IV－2 b	IV－2 c	IV－2 d	IV－2 e	IV－2 f	V－1	VI－1	VII－1	吉田式
集石1	1				9	6							1														3	
集石4.5					1																							
集石7																											1	
集石10																											1	
集石11	17				2			1											1					1				
集石12								3																				
集石13				1									1															
集石14								2					1															
集石15													1															
集石17	1						1																					
集石19					2																							
集石20					1																							
2号土坑					1																							
12号土坑	1																											
17号土坑	1																											
40号土坑													1															
62号土坑	1																											
第1凹部					7	2	2				1									4	1	1	2	2				
第2凹部	3	1			8	5	2		2		1	8	7							7		7		7		4	3	
第3凹部	1				4	6		3								1										1		

第11表　遺構出土土器一覧表

る。他の集石、土坑は土器の出土数が少なくはっきりしたことはいえないが、集石からはIV類土器が、土坑からはⅠ類土器が多く出土している傾向があるようである。

また、凹部からは主にIV類・Ⅴ類土器が出土しているが、第1凹部からはIV類（中でもｂ類）とⅤ類が、第2凹部からはIV類（中でもｂ・ｉ・ｊ類が多く、種類も多い）が、第3凹部からはIV類（特にｃ類）が多く出土している。特記すべきこととして、第2凹部からのみ吉田式土器の口縁部片が3点（第112図12～14）出土している。包含層からは出土していないので、分類記号を附していないが、本来はⅧ類とすべきかもしれない。

⑵Ⅳ類土器とⅤ類土器の関係について

⑴で述べたようにⅣ類土器（手向山式土器）とⅤ類土器の関係は密接である。

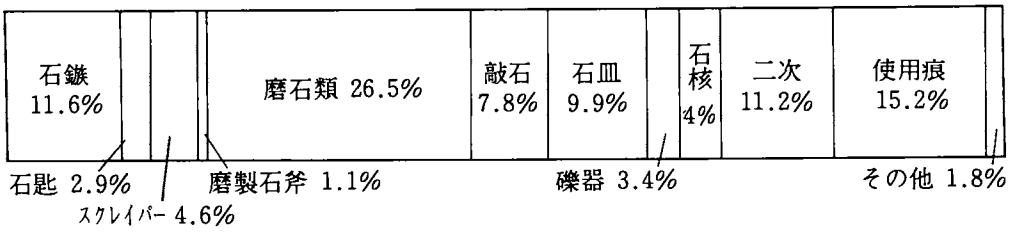
Ⅴ類土器には外器面に刺突文を施した凸帯があり、ａ類以外は地文をもつ。その地文はｂ類（不明地文）を除くと、ｃ類（撚糸文）・ｄ類（縄文）・ｅ類（沈線文）がある。これらの地文はⅣ類土器（手向山式土器）の文様要素として認めることができ、特にｅ類（沈線文）＋凸帯は手向山式土器の一類になっている[18]。しかし、この沈線文＋凸帯をもつ土器は胴部屈曲部に凸帯や刻み目をもつ例がないためⅤ類として分類した。

手向山式土器以外にｃ類（撚糸文）・ｄ類（縄文）・ｅ類（沈線文）を文様要素としてもつ土器には平栫式土器[19]がある。しかし、Ⅴ類土器には平栫式土器に見られる口縁部の肥厚帯がない。

つまり、Ⅴ類土器は平栫式土器と手向山式土器の中間的な要素をもつ土器であり、現在のところ、類例が見当たらない。このⅤ類土器を天道ケ尾式土器とし、地文によりａ・ｃ・ｄ・ｅ式に細分して位置づけてみたい。その際、ａ類土器は地文をもつグループのバリエーションとして理解したい。手向山式土器には、押型文のみを施文するものと地文をもつものの二系統があり、前者が古く後者が新しいと考えられている[20]。また、後者のグループの系譜を平栫式土器に求めているものがある[21]。ここでは、手向山式土器の中で後者のグループの関係を一応次のように考えておきたい。それは平栫式土器→（天道ケ尾式土器）→手向山式土器である。

⑶出土石器（第12表）

出土石器の割合を第12表に示した。石器組成で特徴的なことは磨石類の占める割合が高いことである。磨石類・敲石・石皿を合わせると、出土石器の約半数を占めることになる。石器分布については、特異な分布状態を呈するものを取り上げてみる。出土した石匙の多くはⅠ区の北東部からⅡ区にかけて分布している。使用痕のある剝片の一部は、Ⅳ区のＲ－16・17グリッドに集中している。磨石類は五箇所に分かれて分布している。特に集中するのはⅠ区の北端部である。他の四箇所は、Ⅲ区・Ⅳ区の北端部、Ⅲ区の南端部、Ⅳ区の南端部、Ⅰ区の東寄りの中央部である。磨石類に近接して出土するのが石皿で、磨石類と同様な分布状況を呈する。敲石の一部がⅠ区の中央部に集まる傾向にある。上記の石器以外の多くはⅠ区～Ⅳ区において散



第12表　縄文時代早期の石器組成表

在状態を呈して分布する。

ここで、縄文時代早期と後・晩期の石器組成（第3節(4)）と比較すると、中心になる石器に違いがある。早期が磨石類・敲石・石皿で、後・晩期が打製石斧・礫器である。この石器組成の違いには生業活動の違いが反映されている。

第5節　先土器時代の調査について

1．IX層上面での地形と遺構・遺物分布

掘り下げはIX層（シラス）上面まで行った。IX層上面の地形が他の時期の基盤面と考えられる地形と最も異なることは、全体的に凸凹の著しい地形を呈することである。調査区のほぼ中央部に、東西方向にのびた帯状を呈する標高の最も高い箇所がある。この部分の三箇所に凹部があり、東西方向に並んでいる。中央のものが第1凹部、西側のものが第2凹部、東側のものが第3凹部である。これらの箇所より北側・南側は、凹凸しながらそれぞれの端部に向かって低くなっている。III区の東寄りの中央部分は凹凸が少なく、傾斜が緩やかになっている。

1号礫群は第2凹部内に、2号礫群は調査区の北端部に分布している。

第1凹部・第2凹部・第3凹部のそれぞれに、遺物が集中しており三つのブロックを形成している。III区の東寄り中央部分の緩傾斜地に第4ブロックがある。以上の四ブロックの他に、第1凹部と第2凹部の中間地点には、どちらのブロックに属するのかの判断が困難な状態で遺物が分布している。

2．凹部と礫群について

(1)凹部

第1凹部　第1凹部は不整形を呈し、144.25mの等高線で表現された部分は最大長約12m、最大幅約6mを測る。遺物は凹部の西側半分に集まり、凹部内や凹部内外で遺物の接合関係が見られる。

第2凹部　144.50mの等高線で表現された部分は不整楕円形を呈する（長軸約8.5m、短軸5.5m）。楕円形部分の東端部に1号礫群がある。遺物は礫群より西側部分に集まっている。

第3凹部　144.25mの等高線で表現された部分は楕円形を呈する（長軸約11m、短軸8m）。遺物は凹部内の南側に多く分布しており、遺物の接合関係は凹部内で見られる。

各凹部の遺物垂直分布　各凹部とも傾斜に沿った状態で、遺物が分布している。遺物の殆どが軽量のものであるが、約1.5kg・2kgの礫が出土している。特に、2kgの礫は第1凹部の底面に近い箇所より出土した。

3基の凹部出土遺物の接合関係を見ると、凹部外からの流れ込みと考えられるものがある。

しかし、凹部内に礫群が存在し、凹部底面近くより出土した大型礫は流れ込みとは考えられない。これらのことは、凹部を利用した生活を行った痕跡であり、出土遺物の全てが流れ込みとは考えられない。

⑵礫群

1号礫群　24個の礫が円形の範囲に分布しており(径約50cm)、第2凹部の斜面に沿った状態である。礫の一部分はIX層に埋まった状態である。

2号礫群　IX層上面で検出された14個の礫が楕円形を呈する範囲に分布している。(長軸約60cm、短軸約40cm)。

3．石器について

⑴第1凹部出土の石器

三稜尖頭器（2)、台形（様）石器（8)、剝片尖頭器（4)、磨石・敲石（5)、石皿・台石（2)、二次加工剝片（6)、使用痕のある剝片（5)、石核（3)、剝片・破片（97）が出土した。計132点を数える。

⑵第2凹部出土の石器

三稜尖頭器（1)、磨石・敲石（1)、二次加工剝片（4)、使用痕のある剝片（5)、剝片・破片（114）計125点が出土した。

⑶第3凹部出土の石器

三稜尖頭器（2)、剝片尖頭器（1)、ナイフ形石器（1)、石皿・台石（2)、二次加工剝片（2)、使用痕のある剝片（7)、石核（1)、剝片・破片（129）が出土し、計145点を数える。

⑷第4ブロック出土の石器

三稜尖頭器（15)、ナイフ形石器（1)、磨石・敲石（3)、二次加工剝片（3)、使用痕のある剝片（6)、石核（2)、剝片・破片（214）の計244点が出土した。

⑸第1凹部と第2凹部の中間地点出土の石器

剝片尖頭器（4)、ナイフ形石器（1)、スクレイパー（1)、磨石・敲石（1)、石皿・台石（1)、二次加工剝片（2）が出土した。計10点を数える。

⑹石器組成について（第7表）

各凹部、ブロックの石器組成で共通することは、ナイフ形石器が少なく、主要な石器にならないことである。第1凹部で特徴的なことは、台形（様）石器、剝片尖頭器、磨石・敲石が他の凹部、ブロックに比べて多いことである。特に、台形（様）石器は第1凹部だけに出土している。第2凹部は出土数からすると、石器が少なく、剝片・破片が多い。第3凹部では三稜尖頭器・剝片尖頭器・ナイフ形石器の組み合わせである。第4ブロックの石器の中では三稜尖頭器の占める割合が高い。

上記のように、凹部・ブロックの石器組成には違いがある。凹部自体については、自然現象により同時に形成されたと考えられ、時期差は考えにくい。その凹部を利用した生活もほぼ同時に始まったと思われる。このように仮定すれば、凹部間の石器組成の違いは、集団の違いによるものと考えられる。また、第4ブロックと3基の凹部を比較すると、明確な違いが第4ブロックの三稜尖頭器の卓越である。このことも含めて、出土石器全体の様相はＡＴ降灰以後の剝片尖頭器を伴う石器群の石器組成の問題を含んでいる(22)。

注 (1)　飯塚武司　「後期古墳出土の鉄鏃について」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅴ　1987年

(2)　髙木恭二　「圭頭斧箭式鉄鏃再考」『肥後考古』第2号　1982年

(3)　池畑耕一　「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』第14号　1980年

(4)　戸崎勝洋他　『瀬ノ上遺跡・平田遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)　1986年
永友良典他　『小木原遺跡群・蕨地区』えびの市埋蔵文化財調査報告書　第3集　1988年

(5)　山田良三・石部正志　「人吉盆地の古墳文化－熊本県吉の尾古墳群調査報告」『古代学研究』20　1959年

(6)　西健一郎　「重弧文長頸壺」『弥生文化の研究』4弥生土器Ⅱ　1987年

(7)　富田紘一　「Ⅱ.西山南麓の未紹介遺跡」『戸坂遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会　1986年

(8)　山崎純男・島津義昭　「九州の土器」『縄文文化の研究』第4巻　縄文土器Ⅱ　1981年

(9)　大田幸博他　『七地水田遺跡』熊本県文化財調査報告　第101集　1989年

(10)　牧尾義則　「十文字原第1遺跡」『考古学ジャーナル』NO.222　1983年

(11)　山崎純男　「九州地方における押型文文化の諸問題」『縄文早期を考える』帝塚山考古学研究所　1988年

(12)　新東晃一他　『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（15）1981年

(13)　大田幸博他　『城馬場遺跡・高城跡Ⅶ郭』熊本県文化財調査報告　第110集　1990年

(14)　新東晃一氏は註(12)掲書で壺形土器の存在の可能性を指摘されたが、註(13)掲書にはほぼ器形の推察できる壺型土器の他、数点の壺型土器の資料が出土、報告されている。他に城馬場遺跡出土の資料については、松舟博満「手向山式土器の壺について」『肥後考古　』第7号1990年もある。

(15)　まず、胴部片としてⅣ－1類にまぎれこんでしまった例、また、破片が小さくて、断定できなかったものもある。

(16)　新東晃一　「塞ノ神・平拵式土器様式」『縄文土器大観』　平凡社　1981年の分類のいわゆる三代寺式である。

(17)　新東氏は註(16)掲書では平拵式土器を平拵式、石坂上式、拵ノ原式と細分している。また同氏は「塞ノ神式土器」『縄文文化の研究』第3巻1982年では塞ノ神式土器を三代寺タイプ、

櫛島・木佐貫原・鍋谷タイプ、拵原タイプに細分している。

(18)　註(12)に同じ。

(19)　註(16)掲書に同じ。

(20)　山崎純男・平川祐介　「九州の押型文土器」『考古学ジャーナル』No.267　1986年

(21)　栗田勝弘　『平草遺跡』天瀬町教育委員会　1982年

(22)　松藤和人　「朝鮮半島から日本へ－剝片尖頭器の系譜－」『季刊考古学』第29号　1989年

付論　天道ケ尾遺跡土坑内外覆土
リン・カルシウム分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．目　的

本遺跡では、K－Ah下位より検出された集石（径約10m）の中央下部に土坑（長軸約150＋α、短軸約120cm、深さ15cm）が認められる。

今回の分析では、この土坑内に人または動物の遺体や残骸・排泄物などの痕跡を確認するために土坑内埋積土壌（覆土）に含有されるリン・カルシウム量から探り、土坑の機能について検討する。

なお、遺構の時代については、それがK－Ah下位の層準から検出されていることから縄文時代早期とみられている。

2．試　料

土坑内の床面（底面）に近い場所の埋積土壌を東・西・南・北側に分けてそれぞれ採取し、分析に供した。また、これら土坑内試料の対比試料として土坑外より土壌を1点採取し、これについても分析を行った。

したがって、分析に供された試料は、5点である。

3．分析方法

粉砕、篩別した試料について、過塩素酸分解を行った後、リンについてはバナドモリブデン酸法により全リン酸（T－P_2O_5）を、またカルシウムについは原子吸光光度法により全カルシウム（T－CaO）をそれぞれ測定した。

分析の工程は以下の通りである。

（1）試料は風乾、粉砕した後、0.5mmの篩を全通させて供試した。

（2）水分は、加熱減量法により測定した。

（3）試料の一定量を秤りとり、はじめに硝酸（HNO_3）により次に過塩素酸（$HClO_4$）により加熱分解をおこなった。

（4）本文解液の一定量を採取し、発色液を加えて、比色法によりリン酸を測定した。

（5）別に分解液の一定量を採取し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度法によりカルシウ

ムを測定した。

4．結果・考察

結果は、表1に示すとおりである。

まず、土坑内では覆土西側がリン・カルシウムともに僅かに高い値を示している。

つぎに、土坑内と土坑外の比較では、覆土南側を除く土坑内試料でリンが土坑外より僅かに高い値を示すが、カルシウムは土坑内いずれも土坑外より低い値を示している。

以上の結果から、土坑内覆土西側の土壌には僅かなリンの集積が認められる。しかし、これが今回の分析目的である人または動物の生産物や残骸・排泄物の影響によるものかは、その含量が特異的に多くないこと、カルシウム含量が土坑外に比較して低いことなどからその判断が難しく、土壌そのもののばらつきとも考えられる。

しがって、ここでのリン含量の差が土壌本来のそれより有意に多いと判断するには、土坑外（土坑下の地層も対象とする）を含め、もう少し埋積土壌（覆土）を細分して採取し、その分布状況を調査してみる必要があろう。

〈文献〉

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p.，博友社．

ジョン・G・エバンス（1982）：環境考古学入門，加藤晋平訳．p.96-97.，雄山閣．

京都大学農学部農芸化学教室編(1957)農芸化学実験書（第1巻）．411p.，産業図書．

表1　天道ケ尾遺跡土坑内埋積土壌リン・カルシウム分析結果

遺構名	試料採取場所	リン P_2O_5mg/g	カルシウム CaOmg/g
1号集石内土坑	覆土東側	1.71	0.49
	覆土西側	1.88	0.65
	覆土南側	1.61	0.51
	覆土北側	1.69	0.42
土坑外土壌		1.62	0.76

注．リン・カルシウム含量の単位は、乾土1gあたりのmgで示す。

図　　版

1号地下式横穴墓
（南西から）

1号地下式横穴墓
（北西から）

2号地下式横穴墓
（南西から）

図版2

0-14・15グリッドⅣa層遺物出土状況（西から）

小ピットをもつ1号土坑（東から）

小ピットをもつ2号土坑（北から）

1号集石・土壙
（西から）

6号集石（Ⅰ類-A）
（東から）

第1凹部内20号集石（Ⅰ類-A）
（南から）

11号集石（Ⅰ類-B）(北から)

15号集石（Ⅰ類-B）(西から)

12号集石・上部（Ⅱ類-C）(西から)

12号集石掘り込み（北から）

16号集石・上部（Ⅱ類-C）(南から)

第1凹部内21号集石・上部（Ⅱ類-D）(北から)

2号集石・上部（Ⅱ類-D）(北西から)

14号集石（Ⅱ類-E）(西から)

図版4

14号集石掘り込み内配石状況（東から）

17号集石・上部（Ⅱ類-E）(南から)

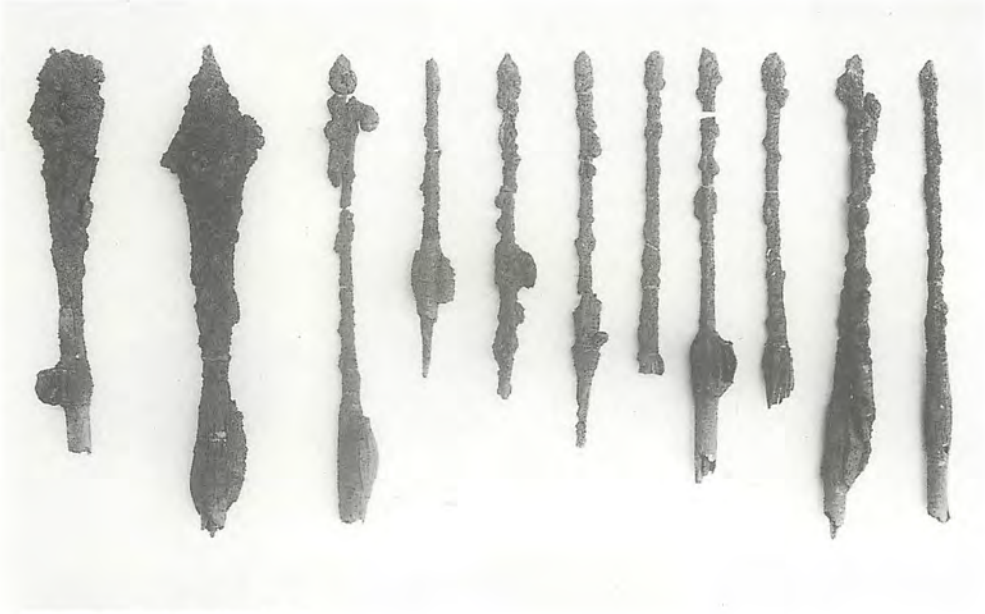
上・第2凹部
下・第1凹部
Ⅷ層遺物出土状況
（東から）

上・第1凹部
下・第3凹部
Ⅷ層遺物出土状況
（東から）

1号礫群
（西から）

Q-11グリッドⅧ層遺物出土状況（北から）

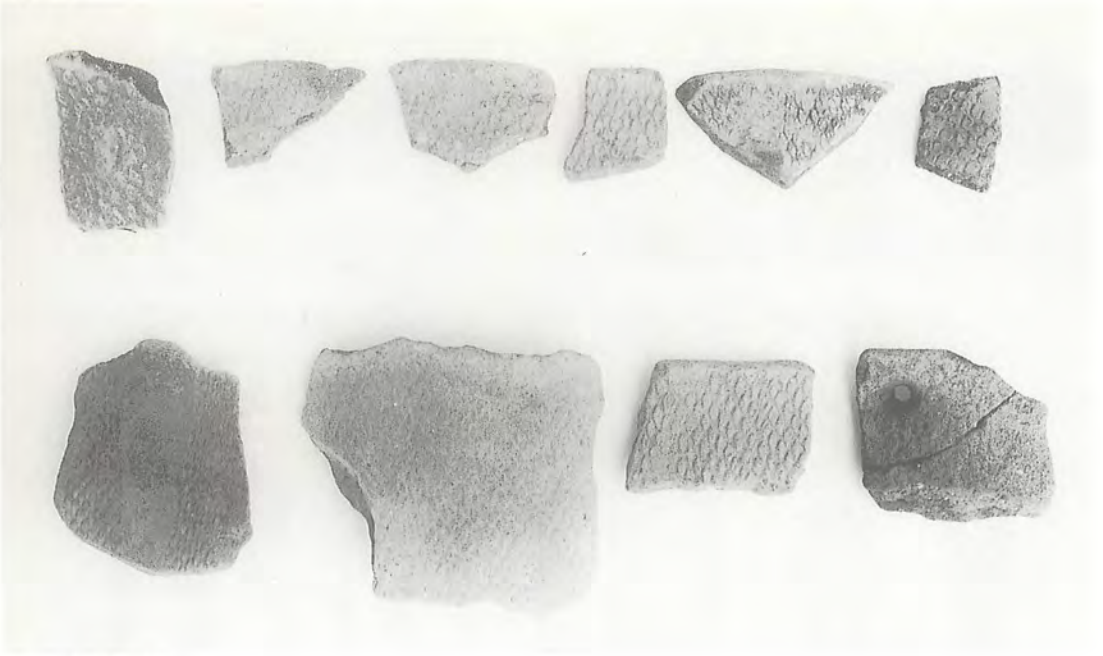
R-12グリッドⅧ層遺物出土状況（西から）



1号地下式横穴墓出土鉄鏃

1号地下式横穴墓出土鉄鏃
X線写真
（熊本県工業技術センター
X線非破壊検査装置
による）

図版6



Ⅰ－1類土器

Ⅱ－1類土器

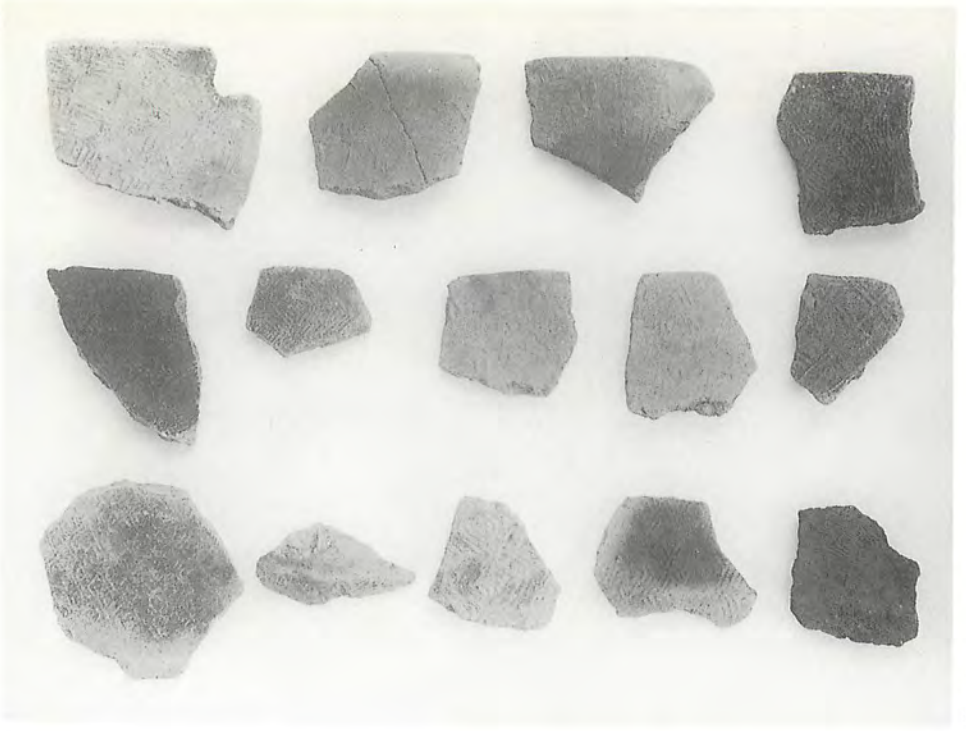
Ⅲ－1類土器

Ⅳ—1—a
類土器

Ⅳ—1—b
類土器

Ⅳ－１－h類土器

図版8



Ⅳ－1－c
類土器

Ⅳ－1－d
類土器

Ⅳ－1－g
類土器

Ⅳ－1－e
類土器

Ⅳ－1－f
類土器

Ⅳ－1－j 類土器

図版10

Ⅳ－１－ｉ類土器

Ⅳ－１－ｋ類土器

Ⅳ－１－ｌ類土器

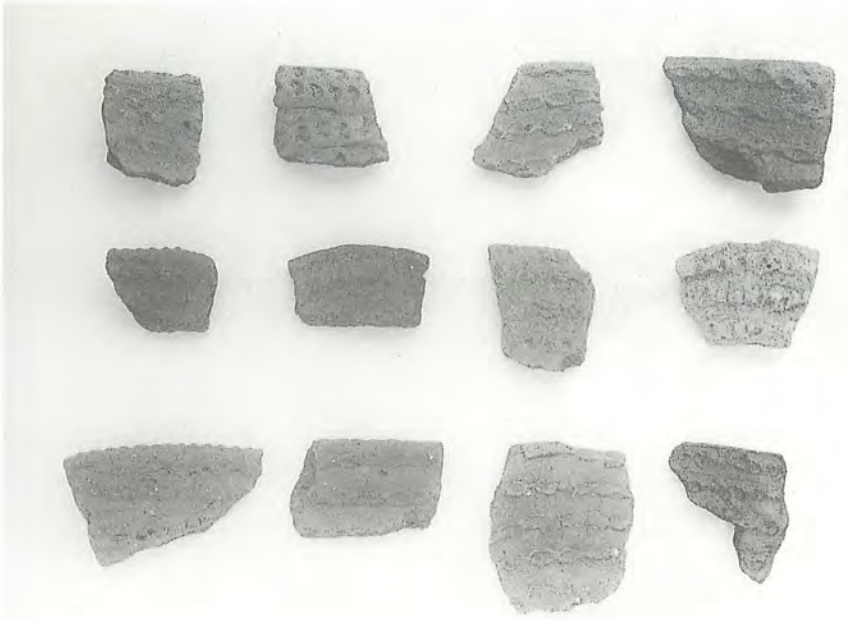
Ⅳ－１－ｍ類土器

左，Ⅳ－１－ｎ類土器
右，Ⅳ－１－ｏ類土器

Ⅳ－１－ｐ類土器

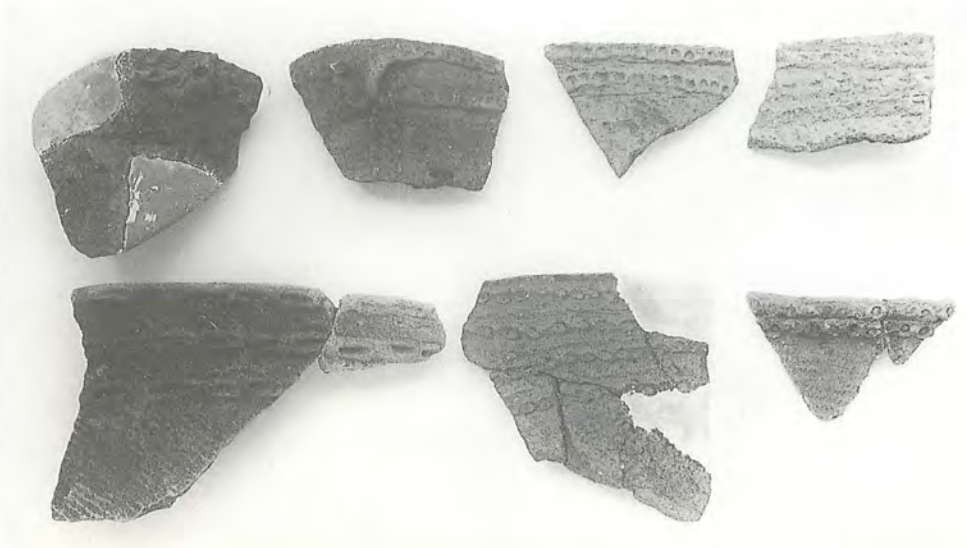
Ⅳ－２類土器

Ⅴ－１－ａ類土器



V－1－a類土器

V－1－c類土器



V－1－d類土器

図版12

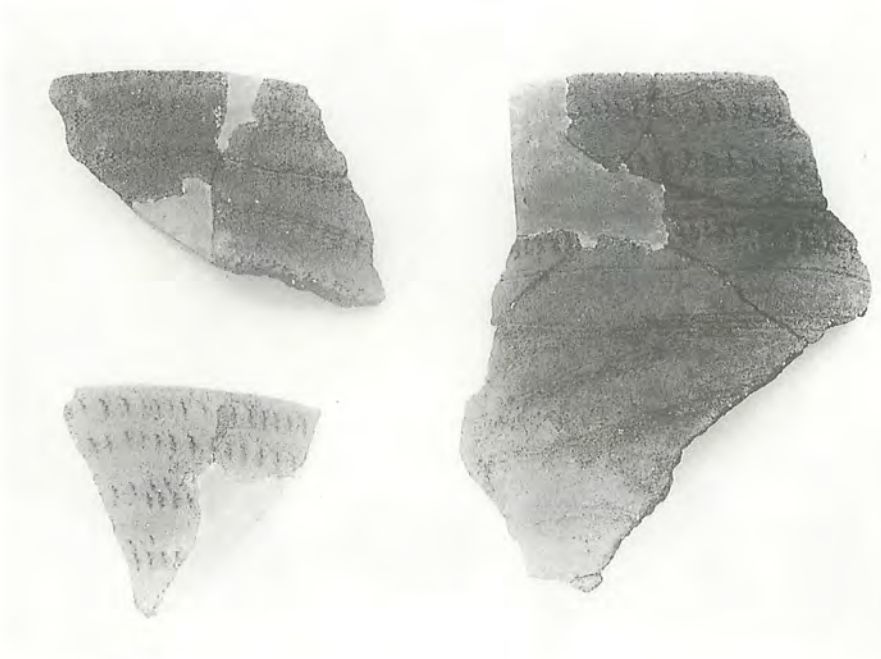
Ⅴ－１－b類土器

Ⅴ－１－e類土器

Ⅴ－１－e類土器

Ⅴ－１－e類土器

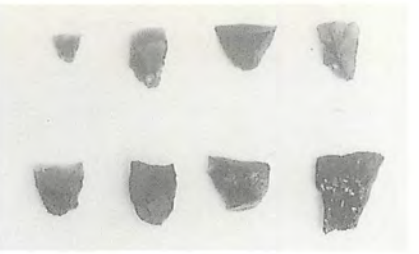
Ⅴ－1－f 類
土器



Ⅵ－1 類土器

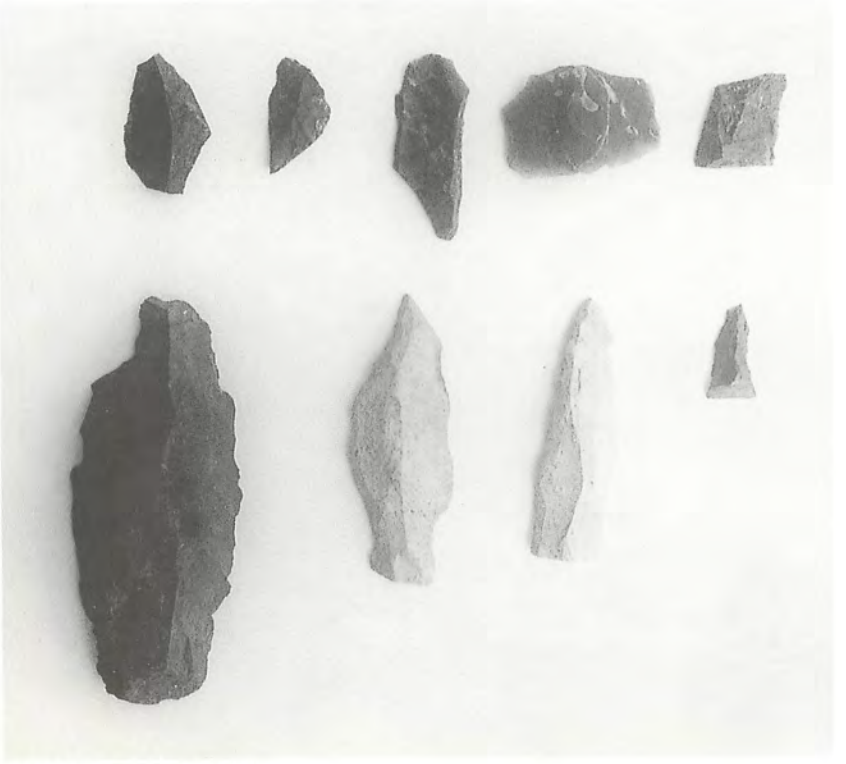
Ⅶ－1 類土器

図版14



第１凹部Ⅷ層出土石器

第１凹部Ⅷ層出土石器



第３凹部Ⅷ層出土石器

第２凹部Ⅷ層出土石器

第４ブロックⅧ層出土石器

第４ブロックⅧ層出土石器

あ と が き

天道ケ尾遺跡の報告書（II）を作成するには、発掘現場のつらい仕事や根気のいる整理作業を経てきました。発掘調査から報告書作成までのさまざまな過程で、お世話になった方々の御芳名を記して感謝の意を表します。

発掘調査　大槻正義・石工　強・福島敬証・松村　弘・村山時成・丸尾義介・青木タケ子・松村ハツ子・犬童輝子・山口ひとみ・緒方逸子・渡辺テル子・東　キリ増田キヨ子・高田ユリ子・東けさ子・久本さつ子・山口カメ子・福口山マサ子・平原アサ子・中村キヌヨ・丸尾富美子・澤見すま子・澤見袈義・西村キクエ・一岡英子・荒毛ヒロ子・上原チズ子・中村正好・井川静香・石工タット・尾園スソエ・勝原カノエ・勝山タツ・勝山ミサ子・勝山良子・加村キミ子・迫田チフ・迫田初子・深水トシ子・松舟妙子・豊永京子・稲留チズ・新町いつ子・中島鶴義

遺物整理　吉長都美子・笠間いつ子・渕上慶子・永広絹代・水本寿美子・上村孝子・江島園子・木下俊恵・重永照代・塩田喜美子

熊本県文化財調査報告　第111集

天道ヶ尾遺跡（II）

1990年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　印刷協業組合　サン・カラー
〒862 熊本市御領町730

01　教委・教文
②　００５

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 111 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：天道ヶ尾遺跡 2
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/